

対魔忍世界でハーレムハードセックスをしたかった

タックス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

対魔忍ゲームでこういうの見たいな。書くか。書こうの心意気で書いてます。

久しぶりに筆を執ったため、かなり読みにくいのは勘弁願います。

内容も結構ワンパターンです。

とりあえずこの小説のルール。

君は、ふうま小太郎で、最序盤に覚醒して自身の能力として二つあるよ！黒い魔力っぽいので強化するよ！エッチした方がもつと強化するよ！感覚も強化されるから、エッチの時感じやすいし気分が高揚するよ！左目の能力で対象の能力を封印するよ！右目は開かないよ！基本対魔忍RPGだけどアクション対魔忍や決戦アリーナのキャラや話がクロスするよ！LILITHのほかの作品のキャラクターも出てくるよ！ok？

上のルールは増えることがあります。

PIXIVとマルチ投稿しています。( <https://www.pixiv.net/novel/series/1410460> )  
誤字報告してくれる人、いつもありがとうございます。

Twitter始めました( <https://twitter.com/takoisall> )。リクエスト等がある人はこちらのマシユマロにお願いします。

AIイラストで押絵を始めました！★マークがある場所が押絵のある話です。

patreonやFantasfic

patreon.com/user?u=93257098

https://fantasfic.fun/circle/  
1886#posts

にて押絵を多くしたPDFバージョンの小説を追加しております  
!今後支援プラン限定で投稿していくのでよろしければご利用くだ  
さい!

よろしくお願いいたします。

## 目次

氷室花蓮★	1
仲森奈々華★	14
星乃 深月★	28
氷室花蓮&仲森奈々華★	45
結城炎美★	59
千賀崎リリコ★	81
結城炎美と星乃深月	104
ふうま天音及び合同依頼前編	123
合同依頼後編及びアルカ&リーナ&イングリッド	139
七瀬舞	165
クローンアサギ	183
ふうま亜希 ※はげしいSM・特殊プレイ注意※	197
篠原まり	211
テイル ※特殊プレイ注意※	226
篠原まりと七瀬舞	239
ヴィクトリア後、ミレイユとミーティア	256
ナドラとソフィア★	285
ゆきかぜとリリコ★	302
外伝 近未来な世界で裏の仕事しているけど、仲間や知り合いに貢がれる件	
マヤ・コーデリア★	314
1話 (ふうま天音)	333
2話 (井河アサギと井河さくら)	345

3話（神村舞華と上月佐那）

柳六穂と星乃深月★

新作

清水神流と七瀬舞★

高坂静流★

篠原まり★

水城不知火★

アスタロト

4話（秋山凜子シリーズ 彼女は貢ぎマゾ雌まで落ちたのか？）

451

神村舞華★

ゆきかぜ貢ぎマゾシリーズ4話

鬼崎きらら

マヤ・コーデリアと共にキラ・クリシユナ調教

・

361

379

395

407

419

429

440

451

462

474

484

498

## 氷室花蓮★

暗闇の中、君は人目を気にしながら背に少女を背負い、目的地に向かって走り続ける。

「はっあっ……んっ、ん……う」

君の背中では、青い髪のスレンダーな少女である氷室花蓮が、苦しみ悶えていた。腰までかかる後髪に胸まで届く横髪を、四つの宝石タイルの髪留めで止めている。引きちぎられた小さな胸の装いは、君の背中に隠され見えていない。ムチムチした太ももを、君が何とか抱えている。背負っているせいで見えないが、紅潮した顔では、普段のきれいな青い瞳も隠されていることだろう。

先程まで、性欲猿と呼ばれるオークに襲われていた。一線は超えなかつたとはいえ、彼女の苦しみは相当なものだろう。

君は後少しで隠れ家に着く事を伝えて、速く静かに進んでいく。

「そ……お！　うう……、後……っ少し……っお♡」

花蓮も少しは気が楽になったのか、一言呟くと君を抱きとめる手の力を少し強めた。熱を持った息が、君の耳に当たる。

ぞくりと腰の中心に来る甘く熱い痺れを無視して、隠れ家に進む。背中に擦り付けられる小さな柔らかくも硬い感触は、思考外に押し除ける。それでもしないと、今この場で行為をしまいそうだった。

数分もしないうちに、君が用意していた隠れ家まで到着する。

扉を開けて入れればベッドと小さな机に簡易キッチン、奥に風呂トイレ付きの簡素な部屋だ。しかしこの部屋は、君の関係者だけが知る秘密の空間だった。

狭い部屋を占拠するそれなりのベッドに、花蓮を背中から移動させる。

「っふ、あつくううっ♡……っあう♡」

少し触れただけで、青い長髪を振り乱し甘い声を漏らす。

破かれた忍び装束は、彼女のスレンダーな胸を隠すには至ってな

い。荒い呼吸と共に上下する小さな乳房にキュンキュンと切なそうにその存在を主張する乳首がツンと天を仰いでいる。

柔らかなふくらみと対照的に硬くしこったその突起が痛々しく見えた。

余りにも艶めいた様子に、君の喉がなる。

普段の彼女なら君の熱い眼差しへの仕返しは、素早いビンタだろう。それほどお硬い女なのだ。

彼女のはだけた忍び装束の真下。下腹部にあるピンク色に光る淫らな紋章。これが彼女を乱す元凶だった。

先に襲われたオークがつけた紋章。みだらに改変した子宮のような形といい、どう考えても体にいいものではない。

既に履かせていた簡素なパンツが、粘りのある透明な液体でビショビショだ。淡く光る子宮型の紋が、時折瞬く。

「んぐ、おゝ……だ、めえっ♥　っあ♥　ふ、ううゝ♥　んおゝ　ッおおお……♥　……いぎッ♥　ひい♥」

押し殺すような喘ぎ声とともに、がくがくと全身を跳ね上げ、パンツからブシュツと透明な汁を噴出させた。

彼女のしなやかな腹部に光る淫紋をどうかしないと、彼女のこの症状は治まらないだろう。

どうすればいいのか。君はそれを知っている。だが、それなりに躊躇う行為でもあった。

そんな君を花蓮は薄い目を開けて、観察していた。

「っあ、んっつ♥　……ふうまくん♥」

彼女の嬌声が、耳に触れる。濡れた青い瞳が、君を捉えていた。どうすればいいのか。彼女はそれを知っているようだった。事実

淫紋を刻んだオークが、助ける前に色々下品な言葉を吐いていた。

いいのかと、問いをぶつける。彼女が判断するべきことだ。

「いつ……う……うう……っ♥」

数度躊躇うように唸る。花蓮はコクリと頷いた。

我慢する理由は無くなった。君は着ているものを全て脱ぎ捨てる。

既に君の凶暴な肉キノコは硬く膨張している。

興奮のまま、花蓮に覆いかぶさった。

少女の青い瞳と君の目が合う。

学園でも世話になってる堅物お姉さんとも言うべき彼女が、君の口づけを待つかのように目をつぶる。

花蓮の薄いピンクの花弁のような唇を貪る。暖かくて柔らかい唇が触れ合い、君たちはお互いを求めていく。

「ん、ちちゅ、ちゅぶ ♥ ……ん！ んんっ！ ♥」

興奮のまま花蓮の口内に、舌を攻め入れた。グチュグチュと口の間から、粘膜を擦れ合う音が漏れ出す。

キスだけで快楽を得ている花蓮の瞳は、蕩けそうなほどに潤み切なげな表情を浮かべていた。

「んふあ ♥ ちゅぶ、ちゅく ♥ つは……ジュルウ ♥ ちゅううつ ……んふッ ♥」

息継ぎのために唇が離れる度に、二人の間からきらきら光る唾液が零れ落ちる。花蓮の口周りはすでにべとべとになっていた。

「んふう、ぬちゅっ ♥ ……んくっ ♥ ……んんっ！ ♥」

濃厚で粘着質な口づけをしている間に、君はパンツのシツパーを下げて開いた。オークから逃げてきたため、下着をはかせる暇はなかった。

「~~~~ッあん ♥ ……は、あ ♥」

唇を離すと彼女の秘密の園が、すぐに君の目に映る。

薄い青色の淡いアンダーヘア。綺麗な乳首と同じピンク色のオマンコからもトロリとした汁が溢れ出し、そのいやらしい光景を目前で見ているだけで君の剛直は更にビキビキと昂ぶり始めた。

君の太い指が淫乱な液体を零す膣口に接触。デリケートな部分を優しく揉みほぐすようにゆっくりと指を這わせていく。

柔らかな肉の壁に包まれたピンク色の渓谷に何度も君の中指を往復させるとピクピクとふるえる膣口がキュツと吸い付いてきた。

「っひゅ ♥ ——ッ ♥」

かすかに全身を震わせた花蓮。そんな甘イキでは、全然物足りないだろう。



事実彼女は、さらなる刺激を求めるように、君を淡く濡れた青い瞳で見つめた。

それを肯定するように、腰で猛る肉棒を花蓮の膣口に触れさせた。

「っ、まっつてえー！ ゴムー！ ゴムつけてー！」

彼女のほんのわずかな理性の声に、君ははっと気が付く。このまま進むと後が怖い。

ベットから手を伸ばせば直ぐに触れられるほど近くの机を開けて、箱を取り出す。

ゴムの袋を箱から出した。その様子を見ていた花蓮が、

「貸して、つけてあげる」

と言いながら袋を取り破った。取り出したゴムをおぼつかない手で、君の鉄のように固くなった肉槍に取り付けた。

やり方もおぼつかない少女。よく学園で服装を整えてもらったり、（ほら。ちゃんと襟は正すー！）（遅刻は厳禁よ。もう少し早めに学校に来なさい）

世話をしてもらった近所のお姉さん。

それを今、君だけが貪り喰らう権利を持っている。そのことに気づいた君の胸に、燃えるような暗い喜びが広がった。

そんな欲望をおくびにも出さない……その原動力はこの後必要なのだ。

ゴムを身に纏った肉棒を膣口に押し付けながら、君は良いか聞くように、花蓮に視線を向ける。

「うゝうッ、い、いいから……いれてえ♥」

彼女の肯定を受けて、君は欲望を燃やして勢いそのまま挿入した。ジユプと啜える膣口。結合部から大量の愛液が溢れる。

「っあ、い♥」

そのまま奥に進むと微かな抵抗を感じる。勢いそのままに抵抗を打ち破り、最奥まで腰を打ちつけた。チュプリと子宮口が君の欲望の先とキスをする。

その瞬間、花蓮の腹の下のほうにある淫紋が淡く光った。

「い……ッ、ひ♥ う、そお♥ あ、はあ、う、うう♥ う♥ や、お  
ぐ、ぎてう♥ う♥ ——……ッッ♥ おッおおお♥ お♥ あっ  
♥ い、い……ッぐ♥」

花蓮はシーツを握りしめながら、背中を弓なりに大きく反らせた。君の目に彼女の真つ白で細い喉が映った。膣から透明な液体が迸り、君の股に降りかかった。膣内がきゆうきゆうと入っている熱い塊を痛いほどに締め付けてきた。

どうやら淫紋のせいで初めてなのにも関わらず、すでに絶頂しているようだ。

なら、手加減は必要ない。そう判断した君は、燃え盛る欲望そのままに腰の動きを速めた。

「お、う、うッ ま♥ は、あ、あ、あ♥ あひ、い、う、あ、  
♥ ぐりゆ、て、だ、めえ♥ ひ、あ、あ♥ ……くくッ♥」

ごちゆりと粘膜音が部屋に響く。たった一往復しただけでも耐えられないのだろう。仰け反ったまま、花蓮の体勢が戻ってきていない。あまりの激しさに膣内から、君の肉棒が抜けそうになった。

抜けないように、腰を動かすがそれだけでは物足りない。君の目に破れてはだけた胸が飛び込んできた。

体を抑えつげるために、手のひらに収まるぐらいの花蓮の胸を押しした。指と彼女の硬く小さな乳首が擦り合わさる。

「ッひ♥ あっ♥ ち、くび、があ♥ ——ッあ、くる、くるっ♥  
あっ♥ あっ♥ あっ♥ はあっ、んん……♥ ん、う、  
う、ううう……♥」

胸を抑えると、花蓮のトロトロに溶けた表情が見えた。涙を流し、赤く紅潮した表情。唇からよだれが流れ、白い歯が砕けそうなほど噛み締められている。

彼女の弱点を大体把握した君は、ラストスパートに向けて、行動し始めた。

胸部を抑えながら、手のひらと乳首を擦り続ける。

「あう、う♥ おッうう!!?♥ が、ひゅッ♥ ひ、い、い♥ と

れちや、とれぢやううう♡ あっ、っ、おっ、っ、おうっ♡」

君の腕を花蓮の小さな手がまとわりつく。離れようとしたのか、腕をかきむしるかのように握る。だが体に走る快樂の電流が、彼女の体から力を取り除いていた。カリカリと腕を愛撫するかのようになにか、指が立たないでいる。

ぎゆうぎゆう締め付けてくる膣内を掘削。膣肉を余さずこそぎ抉り、君の物を記憶させていく。

「なが、でえ♡ ふといのお♡ ……があ、んふうんっ♡ おっ♡ ほお!?♡ おぼえぢやうう♡ おっ…♡ おっ♡ あっ♡ ああっ♡」

恥骨がち○ぽに強く押し付けられる。

速く、深く…何度もその動きを繰り返す。

彼女の一番の弱点である子宮口に、持ち上げるように君の暴れ棒を叩きつけた。

「ご、おっ!?…おっ、うっ♡ まっ、あっ♡ がっ!!? おっぐ、ぎてうっ!!? ひ、ひいっ♡ うっ♡ そ、れっだめ、よ、おっ♡ ひ、おねがい、やめて…こわれっ、や…!! やめっ…!! ヒいっ♡ ツ!?あっ♡ あ、うっ♡ うううううアあっ♡ あっ♡」

子宮口が君の先端を焦がれるように、チュチュと吸い付いてきた。

既に限界なのだろう。膣内も君の精液が欲しい欲しいと懇願するかのようだ。膣ひだまで君の熱い肉に絡みついて離さない。

花蓮の膣口で扱ったびに、きつく狭まり搾り上げてくる。

「おっ♡ ツ♡ ん♡ ツ♡ ああ♡ ん♡ やああ♡ あっ♡ ……もっ、あ、だ、だめ…♡ ツ♡ う、っく、ふうっ♡ う…♡ だしてっ♡ きてっ♡ ……♡」

花蓮の痛烈な懇願。それに対して、君はこくと頷く。

肯定を受けて彼女は、全身をぶるぶる震わせ、息を荒くしていった。強烈なまでの射精待ちに、君は最奥で牡欲を爆発させた。

同時に花蓮の唇から舌が覗き、全身が波打つ。

「? ひっ、あ、ああ♡ あっ♡ あああっ♡ ひやうづううっ♡ な、かにつ、ドクドクツきてっ♡ あっ♡ くる♡ きちや…♡ ツ♡ いっ、いぎゆ、うっ♡ うっ♡」

精液をゴムごと子宮にたたきつける。花蓮の中でゴムが、どんどん膨れていく。

「んツぐっ♥ んお、おツ!?♥ なが、でえふくれっ!?♥ ……っ、あつ、お、っ、おう、ッ♥」

彼女はひかない絶頂の波に耐えるかのように、君の腕をきつく握りしめていた。腕が握りしめられて赤くなる程だ。

最後の最後まで出し尽くす。花蓮の腰がひくひくと波打ちながらそれに答えた。

「あ、はあ、う、うう、う♥ ん……ツふ、ぐう……♥ ひう、うう、う……ッ♥」

ようやく波が終わり、君の射精も終わる。深く息を吐きながら、花蓮の中からゴムと一緒に肉棒を取り出す。

「は——っ♥ は——っ♥ あ、っ、あ、お、ひっ♥」

ちゅぽんとパンパンに膨れたゴムが先端に乗っかっている。あと少しで破けてしまいそうなほどだった。

そのゴムを取り外し、花蓮の淫紋の上に置く。先端から君の精液がこぼれた。

すると淫猥に光る淫紋の一部が欠けていった。君の知識にある通りだ。

だがそれが危機感を示したかのように、残った淫紋が鮮やかに光りだした。

「……ツぐー!♥ つあ、うつそお、まっだあ♥ ん、いいッ♥ あッ♥ んんッ♥」

花蓮の体が再度疼きだしたようだ。カクカクと震えだし、彼女の下にあるシャツが乱れていく。

まだ終わっていない。その事に気づいた君は再度ゴムをつける。一度や二度程度の射精で止まるほど、君の体はやわなつくりをして

いない。

「んぐッ、!?♥ っか、はア……ッ♥ また、はいつて♥ ん、う、う、う、くくくッ♥」

再び征服するため、花蓮の体に突入していく君であった。

「んおっ♡ おっ♡ ツおおお♡ お♡ まっだ、いっ……ツぐ♡ イあ  
あッ、ンおっ♡ おッ、おお♡ おあッ♡」

狭い部屋の中で何度も君と花蓮は絡み合う。すでに部屋中に淫臭が充満していた。

ベットのスプリング音と共に重い水音が、部屋にこだまする。

止まらない絶頂の中で君は何度目か分らない熱い飛沫で子宮と一緒にゴムを大きく膨らませた。

「あゝはッ……♡ ……ゴム越しにい、感じてな、んどおもッ……♡  
んおっ♡ ツおおお……♡ ツおっ♡ んんッ♡ ふぐっ……♡ い  
っ、ぎ……♡ ツ♡ イぐ……♡」

花蓮と同時の絶頂を終え、ゴムを取り出し外す。

「あ——♡ ひぎいい♡ いっ♡ ……あっ♡ ひ、ひ、ん、ん、あ  
っ、ッ♡」

淫紋の上にまた置く。それでほとんど消えた。最後の最後ピンク色に染まったハートマークだけが、残っていた。これだけは何度やつても消えないようだった。

箱からまたゴムを取り出そうとするが、すでにすべて使い切っている。

どうしようと花蓮に視線を向ける。数十個ものゴムが彼女にまわりつくように散らばっている。ゴムと一緒に白濁した物が、青い口ングにまわりついていていた。

少し移動し、亀頭に残った精液を、花蓮の下腹部にある淫紋に擦りつけてみた。だが、残りの淫猥マークだけは消えない。

それどころか、

「あ、あゝ……♡ ……♡ あゝ、♡ や、なんでっあ、も、やらっ、♡  
お、!?!♡」

最後の抵抗といわんばかりに、淫紋がピンク色に輝く。花蓮は咽び泣きながら、下腹部を波打たせた。

何とかしようにもゴムはすでにない。ほかの用意もない。

そのことを花蓮に伝える。快樂の涙にぬれた青い瞳が君の視線が交わる。その目線はだんだん下に向かって動くのが分かった。すぐに君の腰で臍まで直立する肉棒を捉えていく。

ごくりと彼女の喉が動いた。

何度も君の顔と赤黒い肉鉾に視線が向かう。

彼女の葛藤は、光る淫紋が押し流していったようだ

「……ツ~~~~~~~~、い、いいからっ♥ ゴムつけなくていいからっ!♥ いれてっ!♥」

普段怜悯な印象を受ける雰囲気を、身に纏った風紀委員長の姿はどこにもなかった。ただ君の赤黒い凶器を求め懇願する牝がそこに居た。

再び君の胸中に暗い欲望が燃え盛る。その欲望のまま、花蓮の足を持ち上げ体を横倒しにして、膣口に暴れ棒を突き入れた。

「んお、ッおおお……♥ あっついのがあ♥ ひ……ッ、おぐ♥ いっ♥ あっっ♥ こんなっ♥ あっ♥ あ♥ んっんん♥ ……♥ ああっ、あ、あああ♥」

やはりゴムとは違う。直接しゃぶってくる子宮口や、花蓮の膣ひだが君の熱い塊を締め上げてくる。

彼女の身体をユサユサと振って、いちばん奥へ当てる。

遅しい肉槍の侵入で、膣口から汁が溢れ出す。

「あ、あああっ、あ、あああ♥ ……ッお、!?!♥ おぐ、だえ、~~~~ッ♥ ごりゅ、つて、や、~~~~~~~~ッ♥」

何度も腰を動かし、花蓮の膣内を征服していく。答えるように膣が、ぎゅうぎゅう締め付けて君の精液を懇願する。大量の愛液が、膣口から吹き出してきた。

「はっ♥ はひ♥ あっ♥ 生だと……おっはああ♥ 全然違、ううう!♥ 気っ持、ち……いいいい!♥ い……いいいいっお!♥」

熱く暴れる異物の直接の感触に酔うかのように、花蓮は顔が紅潮し舌が口内からのびていた。

生のペ〇スを歓迎するように膣粘膜が、ギチギチに締め上げ、肉杭の根っこまで絡みついてきていた。

それを引つ張るように腰を動かし、彼女の膣内を蹂躪していく。君は何時もしているように、普段味方を強化するのに使う黒い霧のような力を肉棒に流すイメージをした。

「~~~~ツひゅ、う、あ、く……… あ、う……… か、ああ、な、なに、？ ♥ 中がもえ………る！ ♥ みたいにつ！ ♥ あ、あ、ッお、?! ♥」

黒い霧を纏った君の熱く暴れる獣が、花蓮の蠢動する牝肉の奥を犯す。君の他者を強化する黒い霧の力をこういう時に使うと、女の性感の上昇に加え生でも孕まないようにすることができた。

激しい伸縮を繰り返す花蓮の膣内。

君は腰を回転させ、速度を変えながら女を攻め立てる。

「あ、あ、ッお、?! ♥ ま、またあ……… ♥ だめよっこれ、ツわ……… ♥ ♥ あ、あ、ッあ、ああ……… ♥」

膣内がうねりながら全てを飲み込むように蠕動運動を始めたことを感じ、君はお互いに終わりが近いことを悟った。

「~~~~い、い、い、あ、が ♥ もっとう………う！ ♥ 出しい………てえ

！ ♥ 精液！ ♥ 中………にいつ！ ♥ 出しいてええっ！ ♥」

花蓮の種乞い懇願に君は答える。子宮口に思いつき突き入れ、足と腰を逃がさないように抑えつける。そのまま牝の欲求を爆発する。限界を超えた快感によって君の牡欲は一気に解き放たれ、花蓮の奥深くへとドクドクと言う激しい脈動とともに注がれていった。

「いぎッ ♥ ひいひい ♥ 中につ ♥ 出さ………れて ♥ イ、グッ、んお、お~~~~~~~~ッッ！ ♥」

背骨が折れないか心配になるほどに、花蓮の体が反り返った。喉の

向こうで、彼女の舌がピンと突き出ているのが見えた。

「んおおおお♡ うう♡ うう…♡ う、ぞお♡ まだで、て、びゆく  
びゆくでてっ♡ くう♡ くううん♡ ひっ♡ 出てっ♡ あゝ  
…♡ あゝ…♡」

最後まで勢いよく出た精液が止まると、花蓮もボタンとベットに倒れこんだ。顔はすでに白目をむき、舌が口からはしたなく出ていた。

「おゝっ♡ あゝっ♡ おゝっ♡」

意識のない声が、口から出ながら全身を力なく震わせている。すでに意識は飛んでいるようだった。

ひどいが牡欲を満たす光景を十分に観察した後、君は花蓮のお腹に視線を向けた。

そこにピンク色のハートマークはすでに消えていた。淫紋はすでに無くなったようだ。

ふうつと安堵のため息をついた君は、体に降りかかってきた倦怠感に身を任せていく。

花蓮の隣に倒れて、君も意識を手放していった。

カチャカチャと何かの作業音で君は目を覚ましていった。鼻にパ  
ンが焼けたようないい香りがしている。

でもまだ眠い。そう思いながら、意識を落としていく。

しかし、君を揺さぶり起こそうとする者がいた。

「そろそろ起きなさい。いい時間よ」

ぱちりと目を開けると、青い瞳の少女が目映る。

花蓮の顔を見て、君は瞬時に意識が覚醒。眠る前までやっていた事を思い出していく。

君は思わずおはようございますと、至極間拔けな挨拶をしてしまった。

「おはよう。着替えはそこに置いておいたわよ」

ベットの横にある机を指さしながら、花蓮は簡易キッチンに向かっ  
ていく。彼女の指先には、机にしまっておいた服がたたみこまれてい



た。後姿の花蓮を観察する。彼女も部屋に置いておいた簡易の忍び装束に着替えてあつた。

君は折りたたまれていた服に着替え、花蓮の後を追う。簡易キッチンには二人ぐらいいは座れる小さな机といすがあつた。

奥のほうに彼女が座っている。君は当然真向かいに腰を下ろす。

目の前には、簡易キッチンでも作れるトーストが乗っている。あとはバターだけだ。

「さあ、朝ご飯をたべましょつ。ほら、ちゃんと手を合わせて」

彼女の言われた通りに、手を合わせていただきますと君は言った。相変わらぬ世話焼きぶりだつた。昨日の事の面影は一切ない。

もそもそと彼女が焼いてくれただろうトーストを食べだす。前に買つておいてそのまま置いていたやつだ。君の舌に微妙な味が広がる。とはいえ、君もそのことを顔に出すほど愚かではない。花蓮の腕は関係なかった。元々非常用の隠れ家。その程度しか置いていない。何とか食べ終わり、花蓮が皿をすぐに洗い終わる。

後は五車学園に帰り、救出成功の報告をするだけだ。花蓮と共に外に出ようとする。

君の前に遮るかのように、花蓮が移動。彼女に視線を向けると、何やら紅潮した顔だつた。

「そのね、ふうまくん。ちよつとお願ひがあるの」

恥ずかしそうに、忍び装束の上部分をたくし上げていく。花蓮の下腹部には、昨日行為をして消したはずの淫紋が浮かび上がっていた。

思わず君は驚く。顔を近づけて観察した。

よく見れば形が違うようだ。ハートマークが目形になり、その中に微かにだが黒い霧のような文様が刻み込まれていた。

驚愕しながらも、君は自身の黒い霧を手集中しながら、淫紋にふれる。

「~~~~ツひゅ、うぁ♥」

花蓮の甘い声と共に、淫紋が消えていった。これは一時的な措置に

過ぎないことが君にはわかる。

彼女もそれはわかっているようだった。君の耳に顔を近づけて一言つぶやく。

「また、治療をよろしくお願いするわ」

微かに聞こえた言葉を置き去りにし、花蓮は隠れ家から素早く出ていく。

君もそのあとを追いかける。

色々お世話になっていた彼女を君はたくさん世話することになりそうだった。

## 仲森奈々華★

ガシヨンガシヨンと君は、負荷をかけた両手を動かしていく。今現在君は、五車のトレーニングルームにいた。並のジムよりもふんだんに筋トレマシンが取り揃えてある。

バーベルベンチプレス。ラットプルダウンに、君が使っているバタフライマシン。中でも今アブドミナルクランチでトレーニングをしている少女が、目に映る。

燃え立つような赤さのロングストレートに、黄みを帯びている瞳。アブドミナルクランチで鍛えていくたびに揺れている大きく柔らかそうな胸。その下には鍛え上げられ六つに割れた腹筋が脈動していた。独特の忍び装束は相変わらず隙が多い。

筋トレ機械のほうに目を向けると、明らかに限界まで負荷がかけられていた。

全体的に柔らかかそうでありながらも、筋肉はしっかりと鍛え上げられている所が彼女の魅力なのである。

対魔忍の仲森奈々華は君の目線に気づいたようだ。

「どうしましたふうま君。まだトレーニングの最中ですよ？」

彼女の疑問に対して、君は苦笑いと共に負荷が凄いと思ったことを伝えた。

「ええ、前に教えました。私の能力。鉄壁覚醒のおかげで、どれだけ鍛えてもすぐに回復しますから」

奈々華の言う通り、前にかんりのオーバーワークでも少し休んだだけで回復したのを君は見たことがあった。

「紫先生と比べれば、まだまだです」

君と話しながらも、鍛錬の手は休まることはない。その強さに対するストイックさも、彼女の魅力なのだろう。

奈々華を見習うように、君も筋トレマシンを動かし始めるのだった。

「お疲れ様でした」

トレーニングを終えてベンチで休憩する君に、奈々華がスポーツドリンクを渡してきた。それを受け取ると彼女は、君が座っている二人して横になれるくらい大きなベンチの隣に座った。妙に近いが気の所為だろうと思つた君は、渡されたスポーツドリンクを飲んでいく。

奈々華は君の隣に座りながらも、持ってきたダンベルで腕を鍛えていた。

心配になるぐらいのストイックさ。会話の最中もその腕は止まることはない。

「前の任務では、ありがとうございました。おかげで助かりました」

前回の任務のお礼を言われた。あの時はあと少しで敵に捕まるところだったと、君はからかうように話した。

「うう、すみません。ほかの人にも言われるんですけど、なかなか」

猪突猛進の気がかなりある彼女。前の時も一人で突つ走り、オーク達を全滅させたはいいが、あとからやってきた魔族達の毒ガスで捕えられるところだった。とはいえ、奈々華も人の言うことを聞かないほどのイノシシではない。君の一度退避の指示を受けて、彼女も素直に引いてくれた。

そのため毒ガスを避けて、後続の者たちも倒すことができたのだ。

一応は、すぐに突つ込む癖を治したいのだろう。君のからかいを受けた奈々華は、しゅんとしぼんでいる。

フォローも自身の仕事のうちだからと、君は慰めた。

気づかいを聞いた彼女は何か思うことがあるのか、君をじつと見つめる。

その視線に君は気づくが、何か言うことがあるのだろうかと思ひ、少し待つてみることにした。

幾度か躊躇するかのように口を開け閉めしている。ダンベルも横に置いて休んでいた。

奈々華は、ぐつと手を握りしめて君に言葉を紡いだ。

「ふうま君の精液を取り入れると、強くなれるって本当ですか？」  
ぶぼっ！

突然の爆弾発言に、君は飲んでいたスポーツドリンクで咽た。

ゴホゴホつと妙なところに入ったのが、君は口元に手を当てながら咳をしつつづける。

当の本人は、君の様子にアワアワと慌て、

「だ、大丈夫ですか？」

と、言いながら背中を手で擦る。

数度か擦ってもらえれば、咳も落ち着いてきた。君は誰からそんなことを聞いたのか問いただした。

「保険の男の先生です」

あのマッドめ。眼鏡の男の顔を思い出しながら、君は怨念と共に吐き出した。

君の能力を受けた女性が増えるほうが、彼は好奇心を大いに満たすことができる。

そんな内容の事を言われたのを思い出しながら、君は奈々華の質問に答える。

彼女も君の黒い霧による短時間のパワーアップをしっている。そのことに触れながら、君の精液の力。すなわち取り入れる程、対魔粒子が活性化し長期の戦力の増強につながることを懇切丁寧に説明した。

説明を聞いていた奈々華は、ふんふんとうなずきながら聞きながらも、だんだん顔を赤くして押し黙っていく。

君と彼女の間には、妙な沈黙が漂う。

微妙な空気をなんとかする為、君はトレーニングルームから出ようと声をかけるつもりで口を開けた。

その前に何かを決めたかのように、奈々華が君の顔をきつと見つめる。

「嘘だったら後でひどいですよ」

一言聞こえる声で眩くと、君を押し倒した。

そんなことになるとは思っていなかった君は完全に倒れる前にべ

ンチに手をつく。

その間に奈々華が君の足の間に移動している。しかもズボンとパンツに手をかけていた。

君は思わず前もこんなことあったなと思いつながら、何をするのかと聞いてみる。無論ある程度察しはついているけれども……。

「これも紫先生に近づいたためです」

相変わらずの発言。だが、この場にはふさわしくないだろう。君はそう思いながらも止めるようなことはしなかった。こういう幸運を取り逃がすほど君は無欲ではない。

ジ……ジジ……とジツパーが下ろされ中から君の肉棒が優しく取り出される。

「まだちゃんと立ってませんね」

不満そうに奈々華は、君の半勃起状態の肉塊を見つめる。

勘弁してほしいと君は口にした。さすがに突然すぎる。

むうとほつぺたを一度膨らました彼女は、目の前のペ〇スに触れていく。

スベスベと蠢く柔らかい指にしごかれ、君の肉槍はあつという間にガチガチに怒張っていた。

奈々華の目の前で熱い塊がガチガチにそそり立つ。

「っはあ、ふうま君のオチンポ、すごく大きいですね」

彼女の熱い吐息が、君の赤黒い肉鋒の先に降りかかる。小さなうめき声が君の口から洩れた。

緩い快樂に負けぬよう、君は意識して黒い霧の力を肉棒に込めていく。

黒い霧を纏う肉キノコから、ぬらぬら光る先走り液が漏れ出し、奈々華の指にそれが付着していく。

「っふっつう♥」

彼女の甘い溜息のような声が君の耳に触れる。早速黒い霧の力。女性の感覚の増強が働いていた。

奈々華の顔に視線を向けると、口元からチロチロと赤い舌先が踊っていた。明らかな発情のサインだ。

そのサインを受け取った君は、彼女の頭に手を置いて少しだけ力を込めた。ワインレッドの髪が少し崩れ、口元が肉槍の先に近づく。

「っあ、もう♥」

奈々華は目にかかる赤い髪を、君の肉杭から離れた白い指先で払う。彼女の目の前にあと少しで口元に触れそうなほど近くに、鉄のように固くなったペ○スが勃起していた。こくりと喉が鳴る音が君の耳に届いた。

そして、

「……っん♥」

ちゅつと肉剣の先に唇が触れる。そのまま、

「ん〜っ♥」

口元に飲み込まれていく。

肉棒に舌を絡めながらと奈々華は奥へ奥へとチンポを咥え込んでいく。

「んぐ、んん♥ ん、あつ♥ くちゅちゅ♥ あ……チンポすごく硬くて熱いですね♥ あむん♥」

彼女の口と君の咥えられた熱い塊の隙間から、艶声が漏れ聞こえる。

「ちゅぱちゅ♥ くちゅ、れろ♥ じゆるじゆる♥ んぐぐっ♥」

段々と激しさを増す奈々華のフェラチオ。それに呼応するように彼女のどこまでも柔らかかそうな白く大きな胸が、ブルンブルンと揺れていた。

君は思わずその激しく動くナマ乳に視線を注いでしまう。それに気づいたのか、奈々華は一度口内の肉槍を取り出した。

「んんんっ♥ んぐっんっぐ♥ つぶはあ♥ そんなに気になりますか？ これ？」

ぐにやりと持ち上がる彼女の大きな乳房。白い肌の大きなメロンサイズに、君の熱い塊がぱちゅんと落ちる。

その何処までも淫らな光景に思わず君は唾を飲み込んだ。

君のその様子をしっかりと観察していたのだろう。奈々華は胸にかかる下着のようなインナーをずらす。そして二つの大きな肉乳を

持ち上げた。そのまま君のペ〇スを飲み込んだ。

「っふっあ♥ あっつっい♥ やけどしちゃいます♥」

口からたくさんの涎を零しながらするフェラチオに興奮しきった奈々華のおっぱいは熱く上気しほんのりと紅潮していた。

むにむにと挟まれた熱を持った淫棒とそれを包み込む柔らかな肉。あつという間に涎でぬるぬると滑りさらになめらかな動きで擦り上げられていく。

ぬめぬめした肉棒を離すことなく、彼女は左右の爆乳でこすり合わせていく。

それなりに奈々華も経験があるようだ。君はその事をそれとなく指摘する。

「っん。まあ私もそれなりに任務をこなしてきましたから」

少しだけ寂しそうな表情だった。対魔忍の宿命というべきなのだろうか。

色々大変な目にあっても、命があるだけましみたいな風潮が結構ある。彼女もきれいな体ではいられなかっただけの話。

そんなこと一切気にしない君は、隙ありと動きが止まった大きな二つの乳房に手を伸ばす。

そのままナマ乳に生える赤い突起を君の太い指で弄り出す。

「~~~~っひゅ、うゝあ♥」

びくと奈々華の体が硬直。君は動かなくなった彼女の体に目掛けて顔を前に出した。

「っふ!?♥ ぬちゅ、ちゅむう♥ んふう……んうつ♥」

彼女の顔が一気に赤く染まっていくのが目に映る。そのまま君は舌を口内へ侵入。奈々華の舌と絡める。無論、乳首を弄るのを忘れてはいなかった。

彼女の黄色い瞳としっかり目線を混じり合わせる。そういうことは一切気にしないつもりだという事を伝えるために。

「くちゅ、おあ♥ つあああ♥ チュウウ……んっちゅっ、んんっ♥

……んふうんっ♥ ……っはっあ♥」

唇を離し乳首をひねる力を強めつつ、胸を動かす手が止まっている



ことを指摘する。

「くっくっあ、はっあ、いい♥ おっぱいうごかしますねえ♥」

快樂に酔いだしたのかそれとも君の意思が伝わったのかはわからない。

奈々華は目が蕩けながら再び手を動かした。それだけではなかった。双乳の隙間からでる亀頭に口を持って行く。

「んツ、ちゅ♥ ちゅぱツ、あむ♥ ……んぐつつあ♥」

小さくすぼめた口に飲み込まれた亀頭は、中で蠢く舌によってこぼれぬ快感で刺激。棒の部分は淫猥に歪められた大きな乳メロンによって、激しく扱きあげられる。

バルンバルン動く柔らかく豊満な乳を逃がすことなく、君は両手で激しく揉んだりしはじめた。

「んツぐっ♥ ……っあ。っはあ、だ、めえ、ですっ♥ おっぱいは、っあ弱いんですからっああ!♥」

彼女の懇願を君は無視。君からしてみれば、幾度か触れれば奈々華の感じるもみ方が簡単にわかる。

どこまでも手が沈みそうな爆乳を乳首ごと押しつぶす。

「あゝッ!♥ はッ、あゝ、お…♥ やっ、乳首つぶさないでえ、くださいよお♥ っああーっ、も、う意地悪なんですからっ♥ くツ、んツんぐ♥ ぴちや、ちゅ、んっ♥」

負けじと彼女も乳房から直立する亀頭に口をつける。先ほどよりも激しいフェラチオに、君の排出欲求も高まり出す。

「くツ、んツ、♥ ぴちや、ちゅ、んひっ♥ じゅっぷ、じゅぽ、んおっ♥ おっぱいふあ、あっひゅい♥ ……ちゅぱれる。くちゅ、あゝ、ひぐツ!♥ もう、無理れ、えゝす♥」

奈々華の体がプルプル震え始めた。限界が近いようだ。君もそうだった。

口に出すことを宣言し、胸を握りしめ腰を突き出す。

「いゝ、いゝ、だしてっ♥ 精液っ、だしてっ、くだ、っさい♥ ん、

んあゝゝつあゝ」

君の宣言を受け取った奈々華は、亀頭の先で口を大きく開いた。射精待ちの淫らな表情を見ながら、君は腰の白い濁流の関を外す。

「んんぐゝゝツんぐんぐ♥ んお、おお♥ ……つぐ♥ つむ、ぐつままだつ出てっ♥ おゝごッ?!♥ 飲みきれまひえ♥ ん、ううっ♥」

白濁液の間欠泉が奈々華の顔と口に直撃。飲みきれなかった白い液体が、彼女の顔や胸を汚す。

「おお♥ つやあ、あつあつ♥ あつついのかかけられてっ、えああああっ!♥ いぎまずっうっあ♥ んぶうああ、ああっ♥」

体全体がピクピクと引きつるのを、君はナマ乳をつかんだ手のひらで感じていた。ビュツと君の足に熱い潮がかかる。

その痙攣は君の精液の間欠泉が止まるまで続いた。

「ん、ツツ…‥♥ はっあゝゝ…‥っ♥」

大きく息をつきながら、奈々華は体の痙攣を流し終える。その彼女の視線には、自身の胸の間から出来た白濁液の泉が映った。

「っん、じゅるっ、じゅるるるっ♥」

その泉に唇をつけて、音を立てて飲みだした。その中には君の肉の潜望鏡が鎮座している。

白濁した泉がなくなると、

「っふう、っちゅ♥ ちゅううちゅう♥」

亀頭に口をつけて最後に残った液体まで飲み込んでいく。そのたびに彼女の足元に透明な液体が広がっていく。

色々仕込まれている。だからこそ、征服しがいがある。

君の暗い欲望に、股の肉剣は答えた。

「んゝゝじゅ、も、う♥ なんてまたオチンポ立っているんですか♥」

言葉とは裏腹に奈々華は淫猥な笑みを浮かべた。このまま続きをやる雰囲気だ。

だか、君には一応聞いておかなければいけないことがあった。

黒い霧を受けた精液によるパワーアップの事を忘れてはいけない。

その感覚があるかどうかを君は奈々華に問う。

「っあ、そうですね」

名残惜しそうに君の肉棒を胸から離し、彼女は力を確かめるように手を握りしめてみている。

「ん、結構実感がありませんね」

手を開け閉めして、感触を確かめている。だが、奈々華の視線はまだ起立している肉棒に何度も動いていた。

感覚の増強もあって彼女はまだ発情している状況下にある。

君は体内に入れるなら丹田に近いほうがいい。つまるところ子宮に飲ませろということ。

こういう時用に対処の薬も持っていることをそれとなく伝えた。

「っふう、っふうっふ♥」

奈々華は一応は迷っている様子だが、すでに視線が股の肉棒にくぎ付けだった。

そしてよく使う魔法の言葉を唱えた。

これ以上強くなれるし、仕方ないことだと……。

君は知っている。対魔忍の特性ともいうべき、強くなれることへの憧憬や執着心の事。仕方ないのなら仕方ないのだという事を……。

「っそうですよ♥ 紫先生に近づいたためです♥ 仕方ない事なんです♥」

目にハートマークが浮かびそうなほどの欲情に、彼女の瞳が潤み君を熱い視線で見つめていた。

奈々華は立ち上がると、君の前でがに股の体勢になった。君が視線を向けてみれば、股の留め具で固定された黒い布がビシヨビシヨにぬれているのがわかる。

「っはあ♥ っはああ♥」

熱い吐息を吐き出しながら、彼女は自身の股にある忍び装束の留め金を外す。ぱちりという音と共に、奈々華の股間を隠していた黒い布が外れる。

彼女の赤い髪と同じ色合いのアンダーヘア。黒い布地とピンク色の淫口との間にぬちやつときらきら光る糸の橋が立っている。それがぷつりと切れ、肉の花弁が何かを待つようにパクパクと開いてい

る。

彼女が黒い布を投げ捨てると、びしゃつと重い水音がこだました。そんなことを気にしている余裕は、奈々華にはすでに無い様子だった。そのまま、君に座るように腰を下ろしていく。

「つぶ、つぶうう、んっんはあつ、は——ッ ♥ ……んぐ、う、うう ……っ ♥ んあっ!?!」

快樂から逃げるためか、ゆつくりと腰を下ろしてきた。君の肉棒が緩やかに彼女の膣内を侵略していく。

そのままゆつくりした速度で一番奥底に君の肉棒が食らいついた。

「っあく、これっ ♥ オマンコの奥まで来てっ、ますっ ♥ は、あ、っあう ♥ つく、う、う ♥ お、っあおきい ♥ んんん、ッ ♥」

君に体重をかけるように奈々華が倒れてくる。両手を君の肩において、足はがに股の体勢。ぐにやりと君の胸板に彼女の大きく柔らかな双乳が押しつぶされた。完全に対面座位の体勢になっている。君も彼女を支えるために両手をお尻のほうへ回した。ふにやりと君の指が沈み込んでいく。

「うう、うう… ♥ つあは ♥ つんちゆうう、ンあ ♥ ちゆう、ああっ ♥ ちゆううっ ♥」

奈々華の柔らかな唇が君の唇が重なる。彼女のほうから舌先が伸びてきた。口内で責め合うように重なり合う君と奈々華の舌。

征する為にも君は前から気になっていた彼女のバキバキに割れた腹筋へと右手を動かす。さらりと触れると大した硬さの感触が君の手のひらに感じられた。お尻や胸のどこまでも沈んでいきそうな柔らかさとは正反対だった。

君の手が腹筋を擦ると、奈々華が唇を突然離し、

「んんんっ……んうっッ……? —……ッッ ♥ つだ、駄目です ♥ お腹弱いんです ♥」

首を横に振りながら、自身の秘密を吐露する。それはいい事を聞いたと、君はにっこりと笑みを浮かべた。

それを見た彼女の蕩けていた表情が引きつる。反して期待するかのように、膣内がきゆうつと君の肉棒を締め付けてきた。

体のほうの期待に応えることにしよう。君はお尻を持ち上げるように掴み、奈々華の体を動かす。

「ふぐつ……♡ ツおお♡ オチンポ、奥にゴンゴン、きてえつ、当たってます♡ あえ♡ ツ、あ♡ ツ！♡ ツお♡ んん♡ あつ、あ、あ♡ ひい♡ イツ♡」

腰を片手で持ち上げ、合わせるように君自身の腰も跳ね上げる。亀頭で彼女の膣奥をゴリゴリ削る。

同時に奈々華の腹筋を奥底の子宮ごと掴もうとするように、つぐつと握りしめる。

「ツふ、ぐ、くくく♡ ん♡ ひツ、!?♡ ツは、あ、ら、めえでっ、すっお♡ おなか、だめです♡ 掴まない、つい、で……っくださいあい……ん♡ ツぐっ♡ 子宮、つぶれちゃあ、っつあ、います♡ だめれす、だめですってばあ♡」

彼女の静止の声とは裏更に黄色い瞳が蕩けて濡れている。口元からだらだらと涎があふれていた。

普通なら腹筋を握るように掴めば痛いはずである。しかし奈々華はその方が好みのようだった。

そのことに気づけば話は早い。君はさっそく彼女の好みに沿うように動く。お尻を赤くなる程握りしめた。

「お、お♡ ツ、——♡ ツお♡ いだっくて、ひい♡ イツ♡ きもちいい♡ い♡ う……♡」

力いっぱい握りしめればするほど、ジュツ……という温かさが肉棒の周りに纏わりつく。

奈々華の両手が君を離すまいと背中後ろに回る。君の足にもムチムチした太ももが絡み始めた。彼女の大きな二つメロンがさらに押しつぶされる。

「あぐ、う♡ う、！♡ ——♡ ツお……♡ おっぱいもっ、つぶれてっ、ひ、ん♡ あ♡ つ♡ あ♡ つ♡ あ♡ つ♡」

充分な愛液で濡れ必死で精液を搾り取ろうと蠢くそれは、貪欲にチ

ンポに絡み付いてきた。

「っんああ♥も、む、いッ、くくくくくッ♥イグッ、  
イギますうッうう!♥お、ねがつあ、いしまつうす♥だし  
てっあ、ください♥中に、もう、だして♥えあ♥あ、♥」

君の手のひらに腹部の痙攣が感じ始めた。膣内も精液を懇願する  
かのように、ギウギウと痙攣しながらさらに締め付けを強化してき  
た。

君も肉棒の奥からくる射精の欲求に耐えれなくなってきた。  
その欲望を爆発させるため、ベンチの反動を使つて奈々華のもつとも  
奥底をがっんと押し当てた。

「んお、!?おッ……♥ごえ、え、くくくッ♥」

子宮を持ち上げた肉剣の攻めに、彼女は白い喉を君に差し出す様に  
反らせた。目の前に真っ白な喉と鍛え上げられた肩が映る。そこに  
君は歯を思いつきり立てた。同時に黒い霧の力と共に丹田で耐えて  
いた真っ白い欲望を爆発させる。

「ンギッ!?♥いッだ、か、はア……ッ♥いつイグッ♥おいつぐ  
くくくッ♥ん、や、あ♥ああ♥アあ!!?♥」

奈々華の肉棒で閉ざされた子宮内で精液の濁流がまき散らされる。  
牝潮が君の腰に向かって吹き出し、生暖かい感触が広がる。

「ごえ、らひや、ああッ、!?♥がまれつでっえ、イぐっのお♥らっ  
め、れす♥お、ぼえちや、いまッ♥あ、あ、!?♥くくくッ、  
!?!♥」

彼女は快樂にまみれたうなり声と共に、君の背中に回された両手の  
指が立てられる。かすかな痛みが背筋から来た。

お返しに最後の最後の白濁液も子宮へ排出。

「ん、ぎい……っ♥まったでっ、でえ♥あは、はへ、え♥ま  
だ、いつぎまッつあ♥あ、う、う、くくくッ♥」

精液の放出も終われば、奈々華の体中の痙攣も徐々に収まってい  
く。

「あ……♥あ……♥あ……♥あ……ッ♥」

ブリッジのように反らせていた彼女の体も元に戻り、君の目の間に

顔が戻ってくる。涎と涙に顔じゅうが濡れ、髪は汗でビショビショになつて張り付いていた。

瞳も上がって白目になっていた。

吐息のような艶声といい、当分意識は戻つてこない事は明白なのだつた。

「っふううう」

先ほどの行為の後、奈々華はすぐに効果を確かめたいといい。大きなバーベルのほうへ移動した。

特殊な器具でオーガでも持てない。パワー系忍術用の器具に触れ、息を吐いている。大きな白い胸がプルプル揺れていた。

「っん、えい」

それも軽い声と共に持ち上げられていた。前はさすがにこんなに軽く持ち上げられてはいない。

「すごいですね！ 明らかにパワーアップしています！」

それどころかぴよんぴよん軽く飛び跳ねていた。バルンバルンと柔らかな双胸が動き回っている。

君の黒い霧の能力。性行為をした者の増強はかなりの物だった。

所で彼女の猪突猛進さはどうにかしたほうがいいだろう。

いくら何でも性行為した後のまま、ここに来ることはないだろうに。

と思いつながら、君は奈々華の動き回る二つの白いマスクメロンを堪能している。

視線に気づいたのか、彼女はゆっくりとバーベルを下ろす。

「っあ、ん♥ ふうま君の能力の話本当だったんですね」

君に視線を動かす。その瞳はまだ濡れていた。股の間からたらりと白い液体が足に沿うように垂れていく。

「もっと取り込めば、更に強くなれますか？」

体を抱きしめながら、ふりふり揺れ君に近づいてくる。

どうやらまだ足りないようだ。

きみはまた黒い霧を肉棒へと注ぎ込む。

「つつふう♥つつあ♥」

チロチロと口の間から舌を出し始めた奈々華に君も近づいていくのだった。



## 星乃 深月★

がやがやとうるさい駅前。君は、ある程度ラフな私服に着替え、人を待っていた。

時計を見ればもうすぐ予定時刻だ。

「ふうま君。ごめんなさい。待ちましたか？」

声のほうに振り向けば、一人の美少女がそこに居た。豊満な胸に乗る宝石のついたピンク色のリボン。同じ色のカーディガンを着て、膝丈のスカートに白いソックス。長い黒髪を白い髪留めでポニーテールにしていた。

待つてないですよと定番の台詞を言い、君は彼女に近づいた。事実、集合時間よりも五分早い。

生真面目な星乃深月らしい行動だった。

「そうですか」

微笑む彼女の手を取り、先導するように君は歩き出す。

「っあ、ちよつと持つてください」

いきなり手を取られたことに驚いたのか、深月が静止の声を上げる。君の少しチャライ行動に思うところがあるようだった。

しかしそれも了承してもらわなくてはならない。

何せ、今ある任務中だ。

デートのふりをするんですよ。と小声でつぶやく。風遁使いの彼女にはそれだけで聞こえる。

「うう、わかりました。頑張りますね！」

一瞬顔を赤らめると、気合を入れるように君の腕に絡みついてきた。彼女の胸の間に君の腕が侵入する。そのままこてんと君の肩に頭をのせた。そこまでしろとは言っていない。言わないが。

君と深月は今任務でデートの振りをしなくてはならない。

君は腕を挟んでくる双乳の感触を楽しみながら、ひとまず目的地に向かって歩き始める。

少し歩くと、それなりに人の数が増え始める。それなりに繁盛した繁華街といった場所だった。

カップルも増え君たちのように手をつないだりしている者達が増え始める。

とはいえそれも手をつないだり、腕を絡める程度だ。君たちのように、胸の間に腕を入れるようなカップルはかなりラブラブといえる。

そのことに気づいてないのか、素の行動なのか。君は深月の顔に視線を向ける。

「? ふうま君どうしました?」

素だ。自身の行動に何の疑問も持っていない。

何でもないといい、君は目的地に向かう。

少し歩けば、目的の場所にすぐ着いた。

ホテルのラウンジのような喫茶店。ここが任務の目標地点だ。時間を見てみれば、予定時刻ぴったり。閉店まであと少しといった時間帯だった。

深月の明るい色の瞳に視線を合わせる。準備はいいかという合図だ。

「……はい、大丈夫です」

誰にも気づかれないように、彼女はスカートに手を伸ばした。そこにいつもの大扇ではなく小さな扇子があるようだ。ちらりと君に見せてくれた。

よし、行くぞ。警戒を解かないように気合を入れて、喫茶店に入っていく。

「いらっしやいませー」

男性の掛け声と共に店に入った。中は結構本格的な喫茶店といった。ほんのり薄暗く、あちこちに本物の木で出来た机。あちらこちらに座るカップル。店は満員に見えた。

「申し訳ありません。現在カップルシートは満席になっております、個室にご案内しますがよろしいでしょうか?」

現れた店員の案内に頷き、君たちは個室へと案内される。

個室はそれなりにいい感じの雰囲気だ。グループが入れそうな空

間の真ん中に、大きな机と椅子が鎮座していた。ほのかに薄暗い程度でしつかりと注文用のタッチパネルも見れる。

二人で向かい側に座りあった。

「ごゆっくりお過ごしください」

案内した店員が個室から去る。

先にIpadを操作している深月の口元から小声が通る。

「ここが例の場所ですね」

風遁で君たち二人しか聞こえない内緒話を開始。

ここ最近、カップルたち何名かが行方不明になることが起きていく。対魔忍の独自調査の結果、此処の喫茶店が原因のようだと分かった。とはいえ決定的な証拠はまだ無い。

そのために君たちが潜入しそれを見つけ出さなければならなかった。そんな内容を話しつつ、君たちはカップルの振りを続けていく。

「色々ありますね。迷っちゃうな」

紅茶好きの深月がタッチパネルを操作しながら、あちこちに視線を向けている。

とはいえ実際に飲み食いするわけにもいかない。君はそのことを伝えつつ、自分の分も頼むよう伝える。

「わ、わかってますよ」

しょんぼりと頭を落としながら、注文用のタッチパネルを操作していく。

数分もすれば、注文した物を持ってきた店員が現れる。品物を置いてすぐに去っていった。

目の前に置かれた紅茶を持ち上げると、かなり香り高い。君でもわかるくらいいいものを使っているようだった。

「うう、こんな素晴らしい紅茶を飲めないなんて」

任務のためとはいえ、彼女の好みの物を飲んだ振りをして捨てるのは拷問に等しい行為だろう。

飲んだ振りをしながら、袖に隠した袋に流す。

躊躇いながらも深月は君と同じように行動した。かなり罪悪感を感じているのか、首を前に倒ししおれている。

また今度前に行った場所に行きましよう、君は慰めた。

「本当ですか。是非行きましようね」

君の言葉に嬉しそうに顔を上げて頷いている。深月の気分が持ち直して、任務は進んでいく。

この後、少し談笑した後君たちは倒れたふりをする予定だ。

倒れて心配そうに店員が起こせば、君たちは普通に起き上がり眠ったことを謝罪して店内から去っていく。

しかしそうでなければ、対魔忍本来の行動をしなくてはならない。

深月が獲物を確かめるようにスカートに手を置いた。

そのまま君たちはカップルらしく歓談していく。カップルらしきとは？

「えっと、そうそう。最近また美味しいすき焼きの店を見つけまして」  
ひとまず君と深月は最近の気に入った店などを話しつつ時間を過ぎしていく。

「いいお肉を使うだけでなく、そこのお店は関西風に焼いてくれるんです。それが絶品で」

数刻もしないうちに予定の時間になった。そろそろ倒れたふりでしょう。合図をしようとしたその時、突然机から奇妙な筒上の物体が現れた。

しまった、こう来るとは思わなかった。君はよける為顔を逃がそうとする。だが、筒から煙が噴出されるほうが速い。

ぶしゅつと煙が排出される。逃げ場もなく君は少し吸い込んでしまった。

がくりつと体から力が抜け、倦怠感に包まれる。睡眠欲求が激しい。

深月のほうに目を向ければ、顔が赤く紅潮している。息が君の耳に聞こえるくらい荒い。

「っあふ、ふうま君」

おそらくは媚薬型の毒ガスを喰らってしまったのだろう。そう思いながら君は、懐に手を伸ばす。とある物を口に放り込んでんでから、机に向かって倒れる。なんとか最低限の行為はできた。

彼女も君の隣に倒れていくのが聞こえる。

「っへっへっへ、楽勝、楽勝」

「やっぱりかなり効くのな。魔界製の薬は」

雑談しながら何名か部屋に入ってきた。声の感じからして先の店員たちだろう。

「有名店の店長を操って、カップルをハメ込むのは楽でいいな」

「あとは調教して売れば一石二鳥ってもんよ」

ぺらぺらとよく喋る。尋問までは必要なさそうだった。口内に入れた、覚醒用の実を噛む。くそ苦くてすっぱい。倦怠感はあるが、睡眠欲は遠ざかった。

深月に手を当てながら、君は起き上がる。無論黒い霧を手に纏っていた。

「つな、こいつ」

「どうして起き上がれるんだ！」

近くまで来ていた人型の魔族達。おそらく淫魔系統だろう。その二人を思いつきり殴る。それでも後ろに少しよろめいて離れた程度だった。

「っへ、なんだ。その弱いパンチは」

「こいつ、薬は効いているようだぜ」

彼らの言うとおりだ。まだ体の倦怠感は強く、意識を保つようにしないとすぐに睡眠欲が襲ってくる。

だが、君の仕事はすでに終わっている。

深月つと君は声をかけた。

「っはっい」

弱弱しい声でありながらも彼女は立ち上がり、スカートから扇子を取り出す。すでに黒い霧で強化済みだ。

「あなた達に弄ばれた人たちの痛みを知らなさい」

扇子を開き大きく仰いだ。それだけで勝負はつく。二人の魔族の体がすさまじい勢いで壁にたたきつけられた。

「――」

そのまま無言で倒れていく。すべて無音での行動だった。

「っはっは」

黒い霧の補助があれば、深月も風で切り捨てるだけではない。こういうアサシンめいたこともできるようになるのだった。

「っあう」

とはいえ、媚薬性のガスを吸った後の行動だ。力が抜けたかのように座り込んだ。

無理をさせてしまった。次は君が無理をする番だ。

体の倦怠感を無視し、二人の魔族を隠し持った物で拘束。すぐさま、バックアップの部隊に連絡。

彼らに連絡すれば、この二人をすぐに運び出すことだろう。その後はあちらに任せればいい。この二人は二度と悪さできないようになるだけの事だった。

連絡を終えて、ひとまず部屋を出ようと、深月へ視線を移す。

「っふうー、ん、っふうー♥」

紅潮した顔に体を抑え込むように抱きしめて座り込んでいた。黒い霧の強化は媚薬の回復などは行えない。君の左目のほうの力もそういう事には使えない。

君も体が倦怠感と睡眠欲に襲われている。どこかに避難したほうがいいだろう。

そう思った君は、深月に手を貸す。

「っうん、ふうま君。すみません」

甘い声と共に彼女は君に寄り掛かる。体の力が抜けてそのまま倒れそうになるが、君はぐっと耐えた。

そのまま個室から出ていく。先までいっばいだった喫茶店の客は誰もいなかった。唯一、一人の男が店内を掃除していた。

「おつかれー」

ぼんやりと箒を動かして、どこか虚空を見上げている。おそらく操られた店長だろう。

そんな彼を横目に店から君たちは出ていく。

すると、君たちと入れ違うように何名かの人間が無言で入っていく。

最後の一人が君たちに微かに会釈していった。バックアップの人物たちだ。あとは彼らがどうにかしてくれる。

君たちはあとは帰還するだけだが。

「つうつあ、はあー♥」

苦しそうに深月が息継ぎをしている。体を擦るかのように君の腕に絡まっていた。

君の体もすでに倦怠感と睡眠欲で限界だ。

近くに簡易の宿がある事思い出した君はなんとかそこまで移動していく。

「つあふうま君、あ♥」

甘い声に名前を呼ばれるのと、限界に近づいてくる体の睡眠欲求にどうにかなりそうだった。だがそれでも君達はどうにかこうにか目的の場所まで移動した。

「つう、ふうま君。ここって」

どう見てもラブホだが、四の五の言ってはられない。自分もすでに限界で休みたいことを伝え入っていく。深月は抵抗しなかった。

それどころか、だんだん意識が薄くなっていく君を補助するかのようになタッチパネルを操作しカギを取り出してくれた。

そのまま無言で部屋に向かう君たち。君に意識があったのはそこまでだった。

部屋に入りそこで安心してしまった君は、そのまま倒れてしまう。

「つあ、ふうま君♥」

ただ蕩けるような甘い声が君を呼んだのが、薄れゆく意識の中間こえたのだった。

「は、あ……っつ♥ これっすごっつい♥ おっぐつまできてっ♥ ひいっ、あ、う、う♥」

薄れていた意識を叩き起こす様に、君の股間から快樂が走ってきて

た。耳には肉がぶつかり合う音と重い水音が聞こえる。

重い脛をあければ、君の腰で揺れるお尻が飛び込んできた。それにかかるように長い黒髪に振り乱れている。その長いポニーテールに君は見覚えがあった。先ほど部屋に運んでくれた深月だ。

何をしているのかを問うため、君は腰を思いつきり跳ね上げた。

「~~~~ツ♥ ひい、イツツ♥ はあっ♥ ふ、ふうま君、起きちゃいました?♥」

ビクンと背中が跳ねた彼女は、顔を君のほうに向ける。片側だけ見えるその顔は、快楽に溶け始めていた。

明らかに始めたばかりではない。やり始めてからそれなりの時間がすぎていることは明白だった。

もう一度君は何をしているのかと問い、目の前の大きな白桃を握りしめる。つきたての餅のように柔らかかった。黒い霧を肉棒に込めるのを当然のように行う。

「んぐツ、!?!♥ ごめっ、ごめんささいいいいっ♥ 私、がまんっ、できなくっつう、てえ♥ ひやうう、ううツツ♥」

先の時に聞いた媚薬ガスと君の黒い霧の相乗効果だろう。深月は全身の疼きに耐えられなかったらしい。

とはいえ、だからと言って君を襲っていいわけでは無い。

君はそんなことを彼女に言いつつ、起きるまで我慢できなかったのかを聞いた。お尻もぎゅむぎゅむ揉み解し、がつがつ腰を下から突くのも忘れてはいない。

「はひ、ひいッ♥ そ、そうなんです♥ 私っ、気っ持……ちいいい!のがま……あっんえきない……んっです♥」

深月の淫乱な告白を受けて、君は笑みを浮かべる。なら、遠慮はいらない。周りを把握すれば、手を伸ばせば届く距離に、いろいろなおもちや箱があった。

片方の手をその箱に手を伸ばし、アナルパールを持ちだす。そのまま目の前のお尻を開いた。

「っふっえ? ふうま君何を」

戸惑う深月を尻目に、君は開かれたお尻の間にある慎まし気な穴を



見つけた。それに向かつて持っている道具を突き刺す。

「お、おッ、——ッ♥ そ、つこは、そおこ……つは違う……穴です♥ いれちゃあ、だめ……ですから♥ んひっ♥」

深月の静止の懇願を、君は聞く気はなかった。グプグプ飲み込んでいく窄まりを持っていた道具でさらに激しく攻めていく。

「あ、っ、あ、お、ひっ♥ 駄目なのおっ……にい!♥ イグツ、イキまつ……んギツツ♥ イイイツツ!!♥」

黒いポニーテールを振り乱し、体を弓なりに波打たせて、深月は絶叫した。亀頭の先に熱い液体が降り注ぎ、膣内が艶めかしく収縮し君の肉棒を刺激してきた。

「イイイ……ッ♥ ……ッは、………ッ、!?♥」

絶叫が終わり力が抜けたように、後方で横になっている君に向かつて彼女は倒れてくる。深月は忘れていることがある。

君はまだ腰元にたまるオスの欲求を爆発させていない。それに向かつて、猛然と君は行動を開始。

「お、ひッ!!?♥ おッおッほお、お〜!♥ も、お、お、いったあ♥ イギましたっ、からあ、!!!♥ お、おッ、——ッ♥」

彼女の呻くような声での懇願も、君は無視し続ける。深月は快楽から逃げようと手や足をばたつかせているが、力が入らないためにシートをかき乱すだけだった。

女性のよがり声は君の大好物だ。しかし、さすがに耳元で叫ばれてはたまらない。

少々うるさく思い、君はお尻から離れた左手指を彼女の口の中へ突っ込む。

「つぐっえ♥ んぶっつ♥」

君の突発的な行動に深月が呻く。

さすがに苦しかったかもしれないと、君は指を口から抜こうとする。

だが、

「んぶううっ♥ れろっ♥ じゆるじゆる♥ ゆっび、ほいつひい

い、つれひゆ♥ ちゅぱ、じゅるるるっ♥」

彼女は入れた指をまるでフェラチオするかのように貪り始めた。ぞくりと君の暗い欲望が燃えさかる。

欲望のままに君は、指を性器に見立てて口内を蹂躪する。

「ふぐっ♥ あおおおおっっ♥ のっど、おかひやれ♥ おかひやれ  
てまひゆ♥ ひもひいよお♥ ああッ、ンおっ♥」

本来なら吐き気を催すほど激しい君の指使いも、深月にとっては快楽を感じるようだった。

肉棒全体まで彼女の膣壁が激しく絡みつくのを感じ、ぞわつく快感が一気に君の背筋を駆け上った。

「もっお、ほわれ、ちやつ…ひまひゆ♥ ひっで♥ あ…ツ  
はひ、ひいッ♥ つへえふふあはっあいッ♥」

深月の絶叫と共に、膣内が入っている肉棒を食い締めてきた。

ドクンツと熱い濁流が尿道口を押し開いて、彼女の子宮内を染め上げる。

「んお、お〜〜〜ツツツ!!♥ ははふえっつあ〜っふいの  
のっがっあ♥ あおッおッおおっ!♥」

君に背中を押し付けながら、深月はピクピクと痙攣のように引きつらせていた。最後の一滴まで飲み干したいといわんばかりに、君の肉棒が激しく締め上げられていた。

その欲求に答えるため、最奥に龟头を押し付けながら残りの白濁液を放出。指もお尻のパールも最後まで攻め立てるように動かしている。

「んお、おッ♥ まふあっひっぐ♥ ふあーへんっへっひっぐ〜  
〜〜〜っ!!?」

最後は意識を飛ばしたのか、声にならない悲鳴と共にぐったりと君に体を預けてきた。

精液の放出も時機に終わり、深月のお尻に入れたパールや口元の指を取り出す。

「つかっつあゝ♥ つはっあゝ♥ つあゝつおゝ♥」

意識のない声が彼女の口元から洩れていた。さすがにきついので君は深月の体を横にどかす。

君はもう一度周りを見渡すと、先に倒れて見れなかった部屋の内装がうかがえた。結構いい所に入っていたようだ。

ちようどいい所に、メニュー表替わりのI P a dが置いてあった。君はそれを退屈しのぎに操作しだす。

ちよつと動かせば君の目に面白いものが飛び込んできた。勿論それを注文する。

すぐにガコンという音が、君のすぐ近くで鳴った。音のほうへ目を向ければ、白いポストのようなものが鎮座している。手を伸ばせば届く。

それを開いてみれば、君の目的の物がちゃんとあった。

「ふうま君♥ 何してるんですか?♥」

いつの間にか意識を取り戻した深月が、君の背中に縋りついた。背中に柔らかい感触ととがった硬いものが擦りつけられている。彼女の両手が放出したばかりで幼くなった君の息子に添えられていた。

「ねっ、まだ体が疼くんです♥ 解消するの手伝ってください♥」

卑猥な欲情のありさまに、君の肉棒がビキビキと反応する。手の中で猛々しく勃起した物を、深月はいやらしく握る。

「はっあゝ♥ やっぱりすっごく大きいです♥」

にぎにぎと指が動き出すのを腕を持って止めた君は、持っていたI p a dを見せる。

一瞬間をおいて君の願いを悟った彼女が口を開いた。

「ふふふ、いいですよ♥ 今回のお礼ですね♥」

君には見えなかったが、深月の顔は欲情して蕩けた笑みを浮かべていたであろうことは明白だった。

「これこの前任務できたやつじゃないですか」

君は今ベットの前に起立している。その目の前に、淫靡な黒兔が立っていた。

胸だけを布みたいな服で止めて、両肩の黒いベルトが下着のような短パンを止めている。頭には黒い兎耳が鎮座。

以前のカジノの任務できていたバニーガールの衣装である。

任務の時は見るだけだったそれを、今君が貪り喰らうことができ。そのことに君の肉棒が血管が浮かび上がる程ガチガチに勃起することで答えた。

「っあっもう ♡ 前もそんな目で見てたんですか？ ♡ いけませんよ ♡」

めつと言いたげに指を向けるが、深月の体はそれとは反している。胸の白い布服から乳首のような形が浮かび上がり、黒い短パンがビショビショに濡れだしていた。

息もかなり荒く、君の肉棒に淫靡な欲望の視線を向けている。発情した兎にどうしてほしいのかと、君は問う。

「っあふう ♡ 万年発情期の私に、パコパコハメハメお願いします ♡」娼婦でも言わないような猥褻な言葉を上げた深月。彼女はそのまま短パンを横にずらし、その細い指で自らのピンク色の肉壁を広げ見せつけてくる。

下品なまでの淫らさを見て君は、自身の肉棒に血液が集中するのがわかった。その欲望のまま深月に近づいて押し倒した。

「っあん ♡ 狼さんに襲われてしまいました ♡」

彼女は淫靡な表情を浮かべたまま、君の体の下に倒されていた。深月の真っ白な胸が、君の胸板で押しつぶされている。

蠱惑的な視線を受けた君は、腰を黒い霧を纏わせた肉棒ごと彼女の性愛機関にたたきつけた。一気に奥底まで突き進み、子宮口を亀頭でごちゅつと叩く。

「ひいっ、あ、う、う ♡ ふっ、太いチンポの、っがあ……ッ！ ♡  
奥までツ……！ ♡ 奥まできまつし、たあ！ ♡ あ、あ ♡ あ、っ ♡  
いあ、っ ♡」

きつく密着しながらピストンを繰り返し柔らかな膣内の肉を蹂躪していく。体のぶつかり合う音と、厭らしい水音が辺りを満たす。

それだけで終わらせる気はない君は、片手を深月のお尻へと差し込

む。そこには君の予想通り、アナルパールで出来た兎のしつぽがある。君はそこまでしろとは言っていない。本当に根が淫乱なのだと悟る。

尻尾を掴み、腰と同様にピストン運動を始めた。

「んゝへええ!?♥ りようほつ、おしりとまんこっ……両方はっしゅごしゅぎますう!♥ おツ、おお、おあツ♥へえおツ♥」

彼女はシーツが破れそうなほどきつく握りしめていた。それだけではなく何かを期待するかのように口を大きく開けてチロチロと舌を出していた。

直ぐに察した君は、口を大きく開けと命じた。

命令をうけた深月は、シーツを握りしめていた手を顔に持つてくる。そのまま口を両手で引つ掛けて大きく開いた。

「口も思いっきり犯してください♥んえええええ♥」

舌まで挑発するように限界まで差し出されている。

がつんと来るような淫猥な様子に、君はすぐに反応した。体を支える腕をうまく動かし、彼女の口へ指を思いっきり入れ、

「んぐえっ、ぐぶうっ♥ごえ、ごえ、ひよごいいい、おっっ♥のほまでえっおおっ……おはされへえっ♥おがじぐなりまひゅうう♥♥」

君の指先がガツガツ喉に当たる感触がする。それすらも、彼女にとってはずさまじいまでの快樂なのだろう。指先に舌を絡め、ひよつとこのようにちゅうちゅう吸い始めた。

「じゅる、じゅぶじゅぶ♥ん、じゅるるるっ♥っんえああ♥ぶぼっ、ぶじゅるるるっ♥」

君からの輪姦されているような激しい三転攻めに、深月は小さな絶頂を感じているようだった。何度も君の肉棒をぎゅうぎゅうときつく締めあげてきた。

つくつと君が思わず呻く。

「んぶ、じゅる、つぶはあ♥ふうま君も、感じてくれてるんですね♥うれしいい♥っんぶっじゅ♥」

君の声を聞いた彼女は、一度指から口を離した。本当にうれしそうに涙と涎に塗れた笑みを浮かべて、君の指に吸い付く。

その笑みを見た君に燃え盛るような暗い欲望が生まれた。この根っこまで淫乱で出来たような女を墮とさなくてはならない。

胸を焦がすかのような欲望のまま、君は普段はそこまでしない黒い霧の力を使う。自身の肉棒に纏う黒い霧をさらに集中。お尻に回していた手を、彼女を逃がさない為顔の横に置く。

完全に勃起していたはずの肉棒が、さらに太く硬く大きくなる。太くなった血管が彼女の膣壁を削り、龟头が子宮を持ち上げた。

すると、

「お、おお!! ♥ お、ッお、ッほお、お、〜! ♥ 〜〜〜〜〜  
ぎっ! ♥ つ! ♥ つ! ♥」

指から深月の口が離れて、頭を反らした。長い黒のポニーテールを振り乱して悶えていた。

数秒もしないうちに収まり、君の目の前に顔が戻ってきた。白目をむいている。

ただでさえ女性の感覚をも強化する黒い霧。さらに黒い霧で君の肉棒を操作すれば、こうなることは目に見えていた。

普段はしない。だが、偶にはそういう欲求も開放しないと君の健康に良くない。

肉棒からくる解放感のまま、君はもう一度を動かし子宮口を思いっきり叩く。そのままぐぷりっという感触と共に龟头が啜えこまれた。瞬間がつんとたたき起こされたかのように、深月の体が跳ねた。

「〜ツツ ♥ あぎッ ♥ う、うそおっ ♥ しぎゅっ、まで ♥ こんなの、はじめって ♥ んつぶ、ぶじゅ ♥ へひゅっ ♥」

驚愕の表情で君を見つめた彼女に対して、君は口に指を突っ込むことで答えた。それにも黒い霧を纏わせ、口粘膜の感度を底上げさせた。

「もごっ、あつぐ、んふうううっ ♥ ちゆうううう ♥」

感度が上がった口内で指を動かせば、深月は積極的に吸い付いてきた。それだけで、君の肉棒に熱い潮が振りかけられていた。すでにイ

キつばなしなのか、膣壁が激しい収縮を繰り返されている。肉棒を根本まで深く締め付けられ、君も限界に近づいていた。

だが、この女は堕とさなくてはならない。未だに火炎のような牡の支配欲が君を突き動かす。

堕ちろ、俺に堕ちろ、牝畜が、俺の物になれ、と罵倒するかのよう  
に言葉で畳みかける。

それを受け取った深月が、一度君をじつと見つめた。それはほんの  
数瞬の事だった。

唇から指を吐き出し体液で濡れた顔を淫猥な笑みに変えて答えた。

「つぶっえ♥ ……っは、はい!♥ なります!♥ ふうま君の!♥

おっっ!♥ 私はふうま君のっ…めっ、牝畜に堕ち…っます!♥  
堕ちました!♥」

宣言と共に君の体に手と足を巻き付けるように抱き着いた。絶対に  
離さないという意味を感じる程力強い。

君も彼女の牝畜宣言を受けて、最後の攻撃を開始。亀頭を啜え込む  
子宮口のさらに奥まで押し込む。

「ンギツ!♥」

ぎりつと背中から引つかかれたような鈍痛。同時に亀頭が完全に  
子宮内に叩き込まれた快感。君は二つを感じて、出るぞつと宣告。そ  
のまま肉棒から流れ出るような射精感に包まれた。

「あっ、あっ、あっくく♥ ん、ひいいッ!♥ な、か、あ!♥  
ザーメンツ…ふうま君のザーメン、直接中にでますっくく♥  
子宮に…っうい、ひ!?♥ 直接はいつてきますうううう♥」

深月の足と腰で骨が折れそうなほど君は強く抱きしめられていた。  
彼女の両手も君の背中を激しく掻き絞められている。

「ンぐううううああ、あ、あ、あ、ッ!!♥ イ、ッた、のにいい!♥  
♥ まだ、ま、だい、つつぐ♥ ううッお♥ おおお♥ おおおお  
お♥」

亀頭も肉棒も子宮口と膣壁で絞るようにしごかれていた。君も最  
後の一滴までごちそうするために、腰を一番奥に押し続ける。

「あ、はあ、う、うう、う♥ ん、はっ…、はっっ…♥」

亀頭から出た最後の一滴と共に、切れぎれの声を上げた。そのままがつくりと首を折り動かなくなってしまった。

何度も失神させて悪いが、君の欲望は燃え盛っている。無論治めるつもりはない。

君は、片方の手をもう一度お尻の方に動かす。そのまま兎のしつぽ型アナルパールを引きずり出し、叩きつけた。

「……あ、ひつう、くくくくくつや、あ、ああ？♥」

快楽ではね起きた深月に君は宣告する。まだ自分が満足していないという事を……。

宣告を受けた彼女は媚びるような笑みを浮かべた。そのまま首を横に振る。

「もっ、むっ」

聞く気はない。君は猛然と腰を動かし始めた。

「おッおッおッおッ！♥ ゆるひれふひやさい！♥ もっ♥ おお♥ ゆう、ひつ……ぎツイ♥ イッでるツイッでますがらあ！♥ ——っ、いぐううッ♥ おっ♥ んおおおくくくく!!!♥ もっうイッげなッ……んぐうううあああ♥ ああッ!!♥ おぐうう♥ 子宮つがあ、こわれひやいまひゅ！♥ うっああああくッ！♥ れんぞくでっ、また、まひや、イツぐあ、あああああっ、?!♥」

深月の悲鳴に近い喘ぎ声が部屋の中を木霊し続けるのだった。

また君は駅前で人を待っていた。時計を見れば、予定より五分早い。い。

「ふうま君」

予想通りちようど五分早いご到着だ。振り返れば、君の目にこの間と同じ服装の深月が立っていた。

「つや、行きましょよう」



彼女はすらりと君の腕を取り、胸の間に挟んだ。ぐつと腕を絡めている。

君もそれを当然のように受け取り、歩き出した。

「今日はこの間の任務の最終確認なんでしたっけ？」

疑問に対して君はこくりとうなずいた。あの時の店は店長の催眠も解けて、通常の繁盛店に戻ったはずであった。

最後に君たちがそのことを確認すれば一連の任務が終わる。

そのことを話しながら歩いていると、ちょうど君たちの目にある建物が入り込んだ。

「っあ♥」

ぎゅつと君の腕を締め付けて、深月が甘い声が零れた。

それをしつかりと捉えた君は、誰にも見えないよう片手で彼女の胸を掴んだ。

「んぐッ♥」

とつさに歯を噛み締めて体を硬直させる深月。君は耳元で、後でな、とささやいた。

「ッはあい♥」

顔を紅潮させ濡れた瞳で深月は君を見上げのだった。

## 氷室花蓮&仲森奈々華★

平日の昼間。五車学園のある空き部屋。基本的に誰も来ない場所で君は一人でたたずんでいた。君の個人的に使用している箇所の一つだ。

君の手には古そうな紙でできた本がある。にまりと笑みを君は浮かべた。

ようやく見つけ出した忍術書。待ちに待っていたコレクションに君は辛抱ができなかった。端的に言えば、さぼりである。

これも今後の任務の為、仕方ない仕方ない。誰も聞かれないであろう言い訳をしながら、本を開けようとする。

だが、そのひとり言を聞いている者がいたようだ。

「何が仕方ないのかしら？」

凍土のような声が君の背筋を襲った。しまった鍵を閉め忘れていた。油が切れた機械のように、ゆっくりと後ろを振り向く。

冷たい空気を身に纏った青い髪に制服を着た少女。氷室花蓮がそこには立っていた。

「もう、授業の時間よ。早く立ちなさい」

君は彼女の言う通りに、素早く立ち上がる。逆らう度胸などなかった。

花蓮はちらりと置いてある時計を見ると、言いたいことを吐き出すように大きくため息を吐く。

「今から行けば、まだ間に合うわね。ほら行くわよ」

一先ず説教は回避できたようだ。手に持った本を近くにあるロッカーに入れて、花蓮の後を追おうと足を出した。

その時、

「っあつくうううう」

彼女は体を抱きしめるように座り込んだ。大丈夫かと問いながらに近づく。顔が紅潮し息も荒い。

「こ、こんな時にい、っうっあ」

ぶるぶると小刻みに震えるその現象に、君は心当たりがあった。花蓮の下腹部にある淫紋はまだ治療が完了していない。

保険の男であり、マッド。桐生佐馬斗が治療薬を作っている最中だった。それまでは君が淫紋の応急処置を行わなくてはならない。

君は片手に黒い霧を纏わせ、制服をめくる。淫靡な形をした紋章がそこで光っていた。そこに黒い霧ごと手を触れる。

「イっっ♥」

ガクンと跳ね上がるように花蓮の体が反応。同時、淫紋は消えた。「っあはっあ〜っっ♥」

消えると同時に君の肩に両手を置いた花蓮の体が震えた。耳の横で艶めいた声で唸る。

震えが止まると君の目に彼女の紅潮した顔が映った。濡れた青い瞳が君を捉える。

「……おねがい。疼きが収まらないの」

数瞬の沈黙後、君に懇願するように囁いた。無論断る気はない。だが少しだけ先のお返しをする為、君は授業はいいのと聞いた。

「……意地悪」

一言呟くと、花蓮は君の耳へ口元を持ってくる。

「授業なんていいから、私とセックスして頂戴」

サボりを見つけたらすぐ怒るお堅い女だった氷室花蓮。そんな彼女が今、授業よりも君との性行為を優先した。そのことに満足した君は、少し待っているようにいい、部屋の片側に近づく。するとそこに小さな突起物がついている。それを捻るように引っ張った。

「……ちよつと、ふうまくん。あなたなんてもの隠してるの」

呆然とした声が君の後ろから聞こえた。それもそうだ。壁かと思われていたところが、あつというまにベッドに変化したのだから。

君は振り返りながら、いざという時のために隠してあったと言いつをする。実際に今がいざという時だった。つまるところそういう為の部屋なのだ。

彼女も自覚しているのだろう。それ以上何も言わなかった。

話は終わりと、君はベッドに腰を下ろす。そのまま足を大きく開いて、太ももをパンパン叩いた。

君の合図を得て、花蓮が君の開いた足の間座る。制服のズボンに手をかけたその時、

「ふうま君。ここにですか？ サボりはいけません……」

赤い髪に大きな胸が特徴の少女。制服姿の仲森奈々華が部屋の中に入って来た。花蓮も鍵を閉めていなかったようだ。卒業したばかりでスーツ代わりに着ていると言っていたなど関係のない思考が君の脳内を走った。

奈々華が扉を開けたままで固まっていた。ベッドに腰を変えた男に、その足の間挟まる少女。どう考えても、まずい。

「仲森先輩。あの、これは」

花蓮が何か言い訳を言おうとし始めていた。知り合いなのかと考えながら、対魔忍独立部隊隊長の君の脳みそが激しく動く。ひらめいた！

花蓮の言い訳を遮るように、君が答える。

これは君自身の能力の特別供給鍛錬であると。花蓮が君を見開いた目で見つめる。

実際嘘はついていない。君の黒い霧は能力の向上を促すが、時々補給しないとその効果が切れる。

段々と足元にいる彼女が君を馬鹿を見るような目で見始めている。

だが、扉にいる赤い髪の少女は、ゆっくりと頷くと、

「なるほど。鍛錬なら仕方ありませんね」

納得してくれたようだ。花蓮が君の足で顔を隠すようにうつむいた。自身の表情を隠しているのだろうか。

ちよと頭がア……ぎんね……純粋なところも奈々華の魅力だ。

ほっとした君の目に、胸の大きな彼女が扉と鍵を閉めたのが映った。

「なら、私も参加させてください」

「え、ちよつと仲森先輩？」

戸惑ったような花蓮の声が聞こえた。奈々華も君の足の間に入ってきている。

「私もこの所、強化が弱まってきていまして、ふうま君の力を頂こうと思っていたんです」

彼女らしい欲求だった。戸惑う青い髪の少女に、奈々華は目線を合わせて、

「氷室さんも一緒にしましょう。一緒に強化してもらった方が手取り早いでしょうから」

と誘う。

戸惑うように君と隣の少女を見合わせるが、自身の体の疼きに耐えられなかっただろう。花蓮もこくりと頷く。君にとっては望外の幸運だった。腰の肉根に血液が集中するのがわかる。君は黒い霧の力も集中させた。

「ふうま君もいいですよ。さあ、始めますよ」

今から一緒にトレーニングでもするような軽い口調で、奈々華は君の制服のズボンに手をかけ下ろす。

「氷室さんも」

彼女に押されて、花蓮がズボンの下にあったパンツに手を伸ばす。ポロンと、血管が脈打つ黒い霧を纏った肉棒が飛び出す。その時、ちよつと近くにあった奈々華のほっぺをぱしりと叩いた。

「あ、ん。もうやんちゃなんですから」

「仲森先輩すみません」

パンツを下ろした花蓮が謝る。自身の手際の性だと思ったのだろう。

「氷室さんの性じゃありませんよ。ふうま君のオチンポがやんちゃなのが悪いんです」

そういうながら、奈々華が勃起している君の肉杭に向かって舌をだす。

「んべえっ……れろれろ……ちゅっ。じゅる。んうっ……ちゅむう」

君の肉キノコの茎部分に舌を這わせ、唇を押し付けていく。その淫

らな光景に、顔を紅潮させた花蓮がとろんと濡れた瞳で見ている。

「仲森先輩、すごい」

息が荒く口から舌をチロチロと覗かせている。我慢の限界だったのか、花蓮はそのまま君の亀頭部分に唇を這わせた。

「んぶ、つくぶくぶ……ちゆうちゆう……ちゅぱ、くちゅじゅる」

亀頭部分を軽く啜えて、舌先でペロペロと嘗め回してきた。こそばゆい快感に君の口から、っはあというため息が漏れ出た。

二人の少女の攻勢が激しくなる。

「ちゅつちゅ。ふふふ♥ こつちもどうですか?♥」

奈々華の方がさらに肉剣の根の元へと顔を向ける。そのまま、玉袋を食べる。

「はむ、んちゅ、ちゆううう♥ んむんむ♥」

「んっ、んっ……んむっ。ふうまくん、きもちいいのね♥ んぶっ、んぶぶっ♥」

花蓮は空いた熱い塊をさらに深く啜え込んでいった。

「んんんっぐ、じゅ、じゅる♥ ん、っふう、ちゅぱれる♥」

青い髪の風紀委員長の前後する頭。鍛錬を手伝ってくれる赤い髪のスपोर्ट少女がする陰囊刺激。君の欲望が股間に集まっていく。

思わず君の喉から漏れ出る快感の呻ぎ声。その声を聴いた花蓮と奈々華が、一度肉竿と陰囊から口を離れた。

「いいんですよ。ふうま君。がまんしなくて」

「そうよ。ふうまくん。我慢せずに出しちゃいなさい」

すると二人は肉棒を挟んでキスするかのように口づけしだした。

「くちゅ……んふう、れるろ♥ じゅるくちゅ、んうっ、んくっ♥」

「ちゅ……じゅ、じゅるう♥ ちゅぱくちゅ、ちゅるる……チュ……んお♥」

花蓮も奈々華も自身の舌が相手に当たるのを躊躇わずに、君の肉筒に舌を這わせている。

「んふあ……ぬちゅ♥ あ、氷室さんの舌、あついですね♥ ん……

ちゆうちゅっ、あん♥」

「んんんっ、ちゅぶ……ちゆううう 仲森先輩もすごい♥ ンあはっ

……ちゅぷれる、んあ♥」

まるで肉柱を挟んで行う濃厚なキスをしているような二人に君の欲求は限界を迎えた。肉砲から来る射精欲求そのままに、でるぞつと宣言。

「ちゅっつぱっ ♥ 出して、出してください。私にかけてください ♥  
んちゅうう ♥」

「れろ、んっ ♥ ふうまくん ♥ 私にもかけて ♥ 顔にかけて ♥  
あつむ ♥」

肉キノコの竿を同時に刺激されて、君はビュルルつと吐き出した。亀頭から排出させる白濁液が、雨のように少女達に降りかかる。

「んああああ ♥ ザーメン熱くてやけどしちやいそうです ♥  
はあ、ああああ ♥」

「ふっうああ ♥ 精液こんなにかけられて ♥ うそ ♥ それだけで、いああああ ♥」

白く染まっていく花蓮と奈々華がふるふる震えている。君の濁流が赤い髪と青い髪を白に染め上げている。その暗い欲望のまま、牡液をさらに噴出させる

「つあ~~~~つ ♥ も、う、まだ出るですか? ♥ すごい量です ♥  
ふっあ ♥」

「ふっ、んう、い ♥ どれだけ出るのよお? ♥ 匂いがすごい ♥  
はっあ、っお ♥」

二人の美少女にザーメンパックをした君は心地よい脱力感に三われていた。

精液の間欠泉もおさまると、髪や顔を精液で染め上げた二人はじつと見つめあっていた。

「花蓮さん、とってあげますね ♥ ちゅ、ちゅう…れろ ♥ んんっ…んくっ ♥」

「仲森先輩も真っ白ですよ ♥ ぬちゅっ、ちゅぷ ♥ じゆる、ちゆるる…はあ ♥」

顔にかかった精液を少女達はなめあっていた。普通では見れないその淫靡な光景に、君の肉杭は素直に反応する。

ビキビキと昂る肉剣に二人の目線が突き刺さる。

「もうこんなになっっているなんて♥」

「本当に、底なしなんです♥」

君を濡れた瞳で見上げる少女達。次は君の番だ。

まずは花蓮だ。そろそろ淫紋の疼きも限界だろう。君は淫紋の事は話さず、奈々華に彼女が先に約束していたので、と伝えた。

「わかりました」

素直に彼女は引き下がり、君の横手に移動する。

君は花蓮に声をかけて促す。彼女は奈々華に軽く頭を下げる。その後、足で挟むように座って君の熱い塊を咥え込んでいった。

「くうっ♥ くううん♥ やっぱり……おッ♥ おお……きい

♥んおお♥」

奥底まで入りみつちりと隙間なく、君の肉竿が掘削した。龟头がゾリゾリ削っていくたびに、花蓮の体が震える。

君の肩に手をつけて腰が止まっている。休ませる気はない。腰をスプリングを使って跳ね上げる。

「おッ、ツツ……♥ ひっ♥ まって、あぐ……ツ♥ はっ、イッっ

……♥ は、はげしいン♥ひい?!♥」

静止の声を聞く気はない。君は彼女が好きな腰使いで動いていく。ベッドを利用して子宮を持ち上げるような激しい腰遣いを花蓮は好んでいる。

「ひぐッ、おぎッ♥ 駄目えッ、おッ!♥ それ駄目なおッ、お

ッおッ♥ 変になっちゃう♥んぐっ♥」

「わあ♥」

花蓮が汗と髪を振り乱す光景を、奈々華はじっと見ていた。あまりの淫靡な光景に太ももをもじもじとこすり合わせている。放っておいては可哀想だ。

きみは奈々華にいくつか命令する。彼女は少々躊躇ったが、すぐに動き出した。

君に蹂躪されている花蓮の後ろに移動する。そのまま彼女を抱き込むように、手を前に回す。



「花蓮さん、すごく綺麗です」

「ひうつ、ああ…仲森先輩ッ、あ♥何をっおあ”お”ッ!?”

制服のボタンを外して、ブラジャーをずらす。そのまま、花蓮の小さな胸を押しつぶすようにもみ出した。

「…っひ、んぐ♥ 仲森先輩…:駄目♥ んん…っ:あああつ!♥

胸は…:駄目なのっ、おほっ♥ 駄目なんですってばああ”あ”♥」

君と奈々華から与えられる快楽に、先輩に対する敬語すら覚束ない様子だ。花蓮は手を振り回し、奈々華から離れようとする。だがその程度では、彼女の力に敵わない。許しを請うようにフルフルと弱く首を横に振っていた。

「氷室さん♥ すごく可愛いですね♥ んっい”♥」

調子に乗り出した奈々華のスカートに手をつ込み、パンツの隙間に指を挿入。ビクンと赤い髪の彼女の体が跳ねた。そのままバラバラに動かす。

「う”ぐつ♥ …:ふうま君の指っいあ”お”ッ!?” 気持ちいいっいん”ひい”!?”♥」

奈々華の君から与えられる快楽に耐えるためか、花蓮の胸をいじる指の力が強まったようだった。花蓮が目を見開いて、胸にある腕を掴む。離そうとしているようだが、君が生み出す快感により全く力が入っていないのが見て取れる。

「やつ、い”、く”く”ッ♥ 仲森先輩、だ、ええ”!♥ お”ッお”ッ

お”おっ!♥ だめっだめっだめえっ!♥ 胸が…:とれちやつ、

や、んん”ッ♥」

「あ”っあうあ”ああッ♥ クリトリス、つや”はっ…:♥ 指で…:っ搔かないでくださいいつ、ひぎいッ!?”♥」

身をくねらせながら嬌声を漏らし続ける彼女の剥き出しのクリトリスをカリカリと引っ搔く。花蓮の懇願を奈々華は聞いている余裕はないようだ。君の指から与えられる快楽に夢中になっている。

花蓮は自身の胸を弄る、奈々華の腕を掻き毟っている。

君と奈々華から与えられる快楽に限界がきている様子だった。中に入っている君の剛直をきゆうつと包んでくる花蓮の膣内が段々と

激しく収縮し始めてきた。

段々と段々と肉筒から精液が上がってくるのを感じていた。

ギシギシとベッドを鳴かせながら、パンパンと君の腰と花蓮の恥骨を当て合う。君の長い指が完全に入り、ザリザリとした感触の膣内を擦る。

「もっお、お！　♥　もう、むりいいいい」っ……♥　脳味噌溶けひや、

ん、ほっ♥　もういつでっええ！　♥　中に出し、へええ！　♥」

「あ、っ、ああ……っおお♥　私もっ……イキそうですっ、っうお、

っっ♥　いつしよっ……一緒にいい、あッ！　♥」

君は二人の懇願に肯く。腰を一番奥に押し付けて、指をよりいっそう激しく動かした。指と肉棒が同時にバキュームのように締め付けられた。

肉剣から溶けそうなほど感じる快樂に身を任せ、雄欲を爆発させる。

「お、お　ッあお！　♥　イグッ、ついぐうう　う　う　！　♥　なかにだざれでっ、えっあお　おッ！　♥」

「っい、お　ッ、くくッ！　♥　指でっ……なかが、はあ　ッ　♥　いじめられてっっええ　…ッ！　♥」

3人のシンクロのような同時絶頂。花蓮と奈々華はくつつきそうなほどに体を押し付け合っている。二人の声が防音処理を施した部屋に響く。

「んっぐっうっお　♥　まだっぐっるっううう　♥　あついせいえきでっあ、ぎもちっ、い　♥　お　お　く　ッ！　♥」

「お、く　ッ…お　♥　ら、らめれひゅうう　う　く　ッ　♥　クリトリスを……おつぶされたらあ　アぐああッ、　♥　またいつちやいますう　う　ッ！　♥」

ぎゅうぎゅうしめつけてくる花蓮の膣肉に答えて、最後まで奥にすり込む。奈々華のクリトリスを押しつぶし、指で膣内を擦り続けてい

る。膣口から噴出される透明な液体が君のズボンを汚す。

「お、おッ、あ〜ッ」

「っい〜っ♡ ひいつ♡ すごいいい、〜ッ♡」

虚ろな視線を空に遊ばせて意識が飛んでいる花蓮。息を絶え絶えにあえぎながら、放心状態の奈々華。二人の体をうまく動かし、君が座っているベッドに倒していく。

ばたりと無造作にうつぶせに倒れる青い髪の少女。赤い髪の少女はうつぶせになり君の体に押し倒されている。

まだ、臨戦態勢の君の肉キノコを目の前の腹筋が割れている少女の膣口へ向けた。溢れた愛液で淫らな肉壁がパクパクとねだるように口を開けている。

「ふ〜っ♡ つお〜♡」

「あ、ま、まっってください。ふうま君。私、まだいったばかりで」

大丈夫。奈々華の能力ならすぐに回復できると君は宣言した。くちゆりと膣口と君の熱い塊が触れ合う。

それを聞いた奈々華がフルフルと横に首を振る。期待と恐怖交じりの笑顔で君を見ていた。

「いえ、そっちの回復はすぐにできなっついいい♡ いいッ♡」

言い訳を聞く気はない。君は奈々華のマンコに、自身の肉筒を叩き込んだ。奈々華の背中がくの字に跳ね上がる。

そのままガツガツと激しく動かす。激しいストロークに膣口から愛液が激しくしぶきをあげて零れる。

「ん、お…っ♡ 奥につ…っいきなりっいあア〜ッ♡ あ

っいい、気持ちいいっおおっ♡」

それだけではない。制服のボタンを引きちぎるように外す。バキバキに割れた腹筋の上に、大きな胸が揺れている。それを包むブラジャーをずらせば、柔らかく大きな胸がぶるんと跳ねた。

目の前で暴れる豊かな双乳を手のひらでがつつりと掴む。

「あ、あッ、〜っ♡ や、ふうまくっんぐ♡ はげしっ  
ぎいッ♡」

言葉の内容と裏腹に、まるで甘えるような声色だった。彼女は体の

丈夫さに比例して激しいのが好みと言う事を君は知っている。

だからこそ、腰を激しく動かし胸を搾り取るかのように握りしめた。肉に激しくぶつかり合う音が、防音のヤリ部屋に広がる。

「ひぐッ、くぐッ！ ♡ むね、えあつあつ ♡ いたいのにっ……気持ちいついっく！ ♡ んんんッ！ ♡」

シートがシワになる程、奈々華は握りしめている。大きな喘ぎ声が防音の部屋の響く。その声を君たち二人以外にも聞いているものがあった。先ほどまで意識を虚ろにしていた花蓮だ。

青い髪彼女はむくりと幽鬼のように起き上がる。君に攻められている赤い髪の少女の顔をゆつくりと覗き込んだ。

「仲森先輩。さつきはよくもやってくれましたね」

「ひいつい！ ♡ ひ、氷室さん？ さつきのは……っふうま君の指示なんですう！」

胸が取れそうなほど握るとはいつてないと、腰を動かしながら言った。話ができるようにぐりぐりと腰を押し付ける動きに変えている。

「と、言う事ですが？」

「そ、そんなあ」

につこりと笑う花蓮を、奈々華が涙に濡れた瞳で見つめる。快樂だけではなく恐怖も混じってたかもしれない。

そんな花蓮に君はこっそり囁く。奈々華の弱い箇所を……。

それを聞いた彼女は早速行動を開始した。

六つに割れた腹筋に向けて手のひらを向ける。

「こっ好きなんですしよう」

グイッと割れた腹筋を押した。奈々華のお腹が、花蓮の小さな手でへこむ。

「そこ、おさな、あ、あッ！ ♡ おっ、お腹は……駄目なんですっううッぎッ！ ♡」

更に花蓮は君がぎゅうぎゅう絞る胸に視線を向けた。君の手のひらで形を変える餅のように柔らかく白い爆乳。それに向かって青い髪の少女は口をぱくりと開けた。

「こんなに絞られて気持ちいいんですね。お手伝いします。あつむ」

「やああッ~~~~っ!♥ たっ、食べないで!♥ おっぱいを……  
食べないでくださいッ、あッ や~~~~ッ!♥」

胸の横にかぶりど噛み付いた。真っ白だった胸に赤い噛みあとが付いた。痛いはずだが、奈々華は明らかに快楽を感じている。

証拠に君の肉棒を啜える膣壁が何度もきゆうきゆうと食いしぼつてきていた。

「さつきはこの胸が背中に当たって! この胸が!」

「いった、いですつて~~~~っ!♥ なのに……っなんでえっ!♥  
うう~~~~~~~~あッ♥」

ガブガブと何度も噛んでいた。怨恨を感じる。まずい。彼女の気をそらさないと、あとがまずい。

ちようど君の手も届くあたりに来た花蓮のスカート内に手を入れる。  
る。

「もつうう、やっあ~~~~っ!♥ 食べられちゃ……っでるのにッ

!♥ 気持ちいいいい!♥」

「っん~~~~う!♥ あっ、あ、ふうまくん……っ♥ や、だっ……指激  
しついう、つくう~~~~う~~~~♥」

指を激しく動かす。君の指示の結果で怨恨を残すわけにはいかな  
い。快楽で忘れてもらわなければならない。

先と同じ3人での同時絶頂を目指し、指と腰を激しく動かす。今度  
は花蓮の膣内で指を動かして、奈々華の子宮を亀頭で持ち上げる。

花蓮は君の指に翻弄されながらも、奈々華のお腹や胸を責めるのを  
やめていなかった。

君と花蓮に同時に責められた奈々華は、重い悲鳴を漏らしながら  
シートを掴んで身悶えている。

「ああ~~~~っおん~~~~んッ!♥ お腹もおっぱいもお~~~~ッ♥ お、  
お~~~~ッ、~~~~っおおまんこもすごいっ!♥ ひっ♥い~~~~いいッん!♥」  
「かつふう♥ ふっう、ッ♥ ふうまくんの指……っで書き混ぜられ  
てっ♥ あ~~~~ッ♥ だめ♥ はっ、ひ♥、中の精液まで……かき乱  
さないで!♥」

君も二人の美少女によるキャットファイトのような光景に、欲望が

激しく刺激されていた。

ぎゆうぎゆう絞り取る奈々華の刺激も、腰からくる爆発的な欲求を後押ししている。

「んっぐっ♥ あっ♥おっ♥ ツっぐで、っふっぐれでっえっあ、あッ！♥ ぎでまずっううっ♥ うう♥」

「あむあむ♥ つあむ♥ んん♥ んぶっ！♥ だめ、また、あ、っひ、いっくッ♥」

彼女たちの絶頂懇願に合わせて、君も中に出すことを宣言する。すでに君の腰の辺りが甘く痺れ始め、タガが外れそうになっていた。

「あ、おっ♥ ツ！♥ はっ、はっ♥ 私にもっおっ♥ おっ♥ ツ！♥ 中に出してくださいい、くッ♥！」

「う、っく、うっ♥ うっ♥ おお♥ いっぐう♥ ふうまくん……っと仲森先輩と一緒にいい、くッ♥」

花蓮のクリトリスを指で押しつぶし、奈々華の子宮口を開かせるほど激しく奥に押し付けた。二人の膣口で激しい収縮が繰り返され挿入された君の肉剣と指を締め上げてくる。

限界を超えた快感によって君の牡欲の堰は一気に解き放たれる。亀頭から白濁液が噴出するのを感じた。

「ひっぎいい、っ♥ ながにでっえ♥ う、ぎい♥ 中に……熱いぎーめんがう、んお、！♥ 出されて……いっちやいまっっあ！

♥ んおお、おっくっくっ！♥」

「っやっあ、！♥ クリトリス……っ潰されてっえうっ♥ ツ！♥

いっひやううっ♥ ううッ♥」

二人は随喜し身悶えながら、両手で相手の体を抱きしめている。体の震えが相手の胸に伝わっている。花蓮の小さな胸は乳首が擦られていて、奈々華のメロンのような生乳は押し付けられた腕によって変形し震えていた。

なかなか見れない光景に君は歓喜に震えていた。二人へのお礼に更に子宮に白濁液をぐ馳走し、指を激しく動かし続ける。

「お、ひいいいっん！♥ まだで、えあおっ♥ つ、おッ！♥ だされへええええ！♥ いぐのとまりまっせんっおお、おおっ！♥」

「いゝいゝッッ！♥ 二人も絶頂が、あゝあゝっおくくッ！♥ わたしにもぐる！♥ んッおゝ！♥ まだいつぐうゝううっ！♥」  
最後まで膣奥に亀頭を押し込み、牡欲を流し込む。花蓮も奈々華も何度もくる絶頂に、部屋に響き渡るなまめかしい絶叫を上げて首を仰け反らせていた。

「っお♥っおくくくっ♥ はあっっ♥」  
「っふ♥ うっくく♥ つはっは♥」

最後まで排出した後、膣からちゅポンと抜く。だらだらと大量に出した精液が逆流してきた。花蓮も二つの穴が見える尻をこちらに向けて、奈々華の胸に倒れ込んでいる。

花蓮も奈々華も息を整えるように激しく息継ぎをしていた。青い髪の少女の体が、赤い髪の少女の呼吸と共に浮かんで沈む。

「っふくくっ♥ ふうまくんっ♥ あっええ♥」  
「くくくっ♥ ふうま君♥ んっええ」

息を整えた二人が身を起こし、君に向かって唇から舌を突き出す。二人の舌先は重なっている。どうして欲しいのかなど一目瞭然だった。

君はふたりの重なった舌先に絡める。

「えろえろ♥ んふう♥」

「あっ、れる♥ えんっ♥」

二人の舌と君の舌が絡み合う。複数の女性に愛されなければできない行為に、君の欲望が再燃焼する。

「んえっ♥ あ、まだできそうですね」

「れええっ、っあ♥ し、仕方ないわね。それを放り出すなんて風紀委員長として看過できないわ」

期待にこもった目で見つめてくる二人の美少女。君はそのまま押し倒すことで期待に答えたのだった。

## 結城炎美★

君の目の前には、いくつものディスプレイ。それに映った画面上の駒が瞬く間に移動していくのがわかった。対魔忍が保有する前線指揮通信車、その中で君は現在行われている任務の進行具合を把握している。

ディスプレイの下にある大きな無線機は、幾人から報告が聞こえだす。

「ふうま。矢崎は捕えたわよ」

無線機から君の聞きなれた声が聞こえた。褐色ツインテールの彼女に一応聞かなければならないことがある。

殺してないかという事だった。

「大丈夫よ。ふうま君。私がちゃんと見てるから」

「うゝつ。一発ぐらい誤射じゃない？」

駄目です。彼女の願いもわかるが、この後の予定もあり承諾するわけにもいかない。

「おのれ！ 私に対してこんなことしていいと思ってるのか」

「元議員でしょ。も・と。しかも今は国家機密漏洩罪の罪人」

「お前、あれだけかわいがってやったことを忘れたのか！」

「ええ、ちゃんと覚えているわ。だから後でちゃんとお礼をしてあげる」

「っひいー！」

凍るような笑みを見た矢崎の心中を思い、君は心の中で合掌。実際彼には色々と聞かなければならないことがある。尋問も許可されている。

目的の確保が終わり、撤収の命令を無線で流していく。

「蛍美。了解。簡単な任務だったね。ふうまの棟梁」

「炎美。了解だ。もっと強い敵はいないものか」



他の隊員の了解を受けて、あとは何もなければ君のいる車に集まり撤収するだけだ。

「やーっと終わったね☆ ふうま」

君の腕にふにやりと柔らかい衝撃。目線を動かせば、ブロンドに染まった髪。君を見つめるヒスイ色の瞳。真つ白な肌の首にピンク色のチョーカー。胸の空いた制服のような対魔忍スーツを着た千賀崎リリコが、君の腕を大きな胸で挟んでいた。

帰るまでが任務中だ。リリコに離れてほしいと伝える為に口を開いた。

「あー！ リリコちゃん、ずるーい。私もふう君にくつつく」

君の背中にまた柔らかいものが押し付けられた。しかも、耳に息がかかるぐらい近い。恐らく後ろからくつついた彼女の姿を思い浮かべる。黒い髪に褐色の肌。リリコと同じくらい大きな胸に着崩した対魔忍スーツ。横を見ればチャシャ猫のような笑みを浮かべている鉄華院小春が君を見つめていた。

「小春先輩、だいたーん」

「私はいいの」

「ちよつとふうま！ 何遊んでいるのよ！」

双方から聞こえる姦しい声。無線機からは君を問い詰めるような叱責。どうしようかと思ひ始めたその時。ディスプレイに突然、高熱源体反応が出現。高速で移動している。その方向には隊員がいた。

すぐさま無線機に報告。炎美に向かっていることを伝え、すぐはこちらに避難するように伝えた。

速度と熱量から行って、オーク等ではない。あきらかな高位魔族。指揮車には、リリコや小春がいる。最悪でもゆきかぜなどほかの隊員が集まるまでの時間稼ぎができるという判断だった。

だが、

「いや、大丈夫だ。こんな敵を待っていたんだ！」

残念ながら君の判断通りに行くことばかりではないのだ。炎美は君の命令を却下。ディスプレイ上では、現れた敵と向かい合っている

ようだった。倒せばいいが、そう楽観的になれる状況ではない。「どうする、ふうまの棟梁。私が行こうか？」

蛍美の意見が無線から聞こえるが却下。彼女では遠い。

「私が行くわよ。私ならすぐに彼女のもとへ移動できるわ」

ゆきかぜの意見も却下。彼女には矢崎の護衛をしてもらわなければならぬ。

「そうね。私だけだと不測の事態があり得るわ」

「でも、お母さん！」

彼女の悲鳴のような言葉。炎美を見捨てるのかという事だろう。

そういうことではない。口で言う前に行動を開始。全員に指令を出しながら君は立ち上がる。すでにリリコ達は離れていた。

ゆきかぜ達はそのまま矢崎を連れてきてほしい。春姉はここでディスプレイを観測。指揮車に近い蛍美は到着次第共に行動する事。リリコは星遁と一緒に炎美のもとへ援護。すべて一瞬で伝える。

「了解」

全員の了承を受けて、リリコと共に指揮車の外へ出る。外では月が昇っている。君の腕をリリコが掴む。

「じゃあ行くよ、ふうま」

リリコの合図に君は頷いた。

「いつてらっしやーい。ふうま君」

どこか軽い感じの小春の声。この後も大丈夫だと、君を信頼してるからこそだろう。

小春に手を振りながら、君はリリコの忍法に身を委ねた。

「スーパードヴァー」

彼女の声が聞こえたかと思うと、君の目に映る風景が変わった。一瞬で指揮車が止まっていた狭い通路から、ビルの屋上へと移動したのだ。

名門千賀崎家の天才。世にも珍しい星遁の能力は重力の干渉。空間や時間をゆがめて、空間跳躍の如きスピードで移動できた。

リリコのお陰で、目標のもとに移動した君達。君はすぐに周りを見渡す。すぐに炎美の姿が目に入った。彼女は灰色の四腕巨人に捕

まっている。両手両足を上下逆さまに掴まれ、巨人の顔が股間に近づいていた。しかも巨人の顔が割れて、何本もの触手がうじゅうじゅと動いている。

「何あれ、きつしよ」

言ってる場合ではない。君は特性クナイを巨人の顔目掛けて投げた。クナイは君の狙い通り、敵の触手の中へと突き刺さる。その瞬間ボンっという音と共に爆発。

「ギャアアアッ！」

悲鳴と共に炎美が投げ出された。地面に落ちる前に、君が抱き込んだ。大丈夫かと口にする。

「……っ。す、すまない。不覚を取った」

ホワイトプラチナヘアーに眼鏡の奥の鋭い瞳。相変わらずの男勝りな口調。体に張り付く青い対魔忍スーツも無事。結城炎美の貞操は何とか守れたようだ。なぜか顔を赤く染めている。

彼女を立たせながら、まだやれるかと君は問う。

「無論だ。私はまだ戦える」

炎美は顔を薄く紅潮させたまま、君の問いにしつかりと頷いた。その隣に、

「委員長。相変わらずまっじめ」

両手に短刀を持ったリリコが隣に現れる。彼女の視線はしつかりと悶える灰色巨人に注がれている。

「リリコか」

ダブルシミターの短刀を二本握りしめ直し、炎美も巨人に向き直る。

二人で巨人を倒すつもりだろう。だが、相手は上位魔人だ。少し厳しいだろう。なら、君にはやれることがある。

両手に黒い霧を集中し、君は二人の背中に触れる。

「っふあ！ こ、これは」

「っん！ 来た来た。ふうまのパワーアップ、相変わらずいい感じ」

二人とも自身の力の向上を感じ取ったようだ。炎美が少し戸惑っ

ている為、すぐに君は黒い霧の能力を話す。

君の説明を聞いた、炎美は納得したようにうなずく。ちょうどその時、

「がああああっ！」

巨人が激怒の雄たけびを上げた。すぐさま君たちを巨大な四腕でひき肉にするつもりだろう。その前に君は二人を指揮する。

炎美は近づいてかく乱。リリコは力を溜めて一撃で仕留めてほしい。君の指示を受けて二人は、

「了解」

「おっけ〜」

了承した。

こちらに突撃の姿勢をとる巨人。寸前に君がもう一度クナイを投擲。

巨人は投げたクナイを片手で弾いた。一瞬巨人の顔が太い腕で隠れる。

その隙に巨人の懐に潜った炎美。片手に持ったダブルブレード型短刀が回転。

「っはああああ！」

一息で巨人の片腕を切断。

「ぎいいいいっ！」

巨人も然る者。怒りの声と共に残った片腕を炎美に叩きつけた。だが、すでに彼女はそこにはいない。

「どこを攻撃している？ こっちだ！」

バク転して回避した炎美が、挑発するように声を上げた。

挑発を受けた巨人はそのまま彼女に向かって残った三本の腕を振り回す。怒りの表現なのか、顔が更に割れて、触手の動きが激しい。まるで欲情でもしているようだ。

「やだ。マジできしよいんだけど」

両手に持った短刀に力を溜めているリリコが吐き捨てるように言った。チャージしているリリコにも、折援護でクナイを投げる君も歯牙にもかけていない。執着したように炎美に攻撃し続けていた。

それは愚かな選択だ。

「チャージ完了。いつでもいいよ、ふうま」

リリコの報告を受けて、君は炎美に下がるよう伝える。

「……ああ、わかった」

幾分躊躇したようだが、君の指示を今度は聞いた。後方に大きくジャンプし、君達のもとに着地。

「さあ、いくよ」

リリコの片手の短刀が桃色に光り出す。そのまま片手剣ぐらいに大きくなった。もう片方も青色に光り、星形の盾へと変化する。

巨人はリリコの変化に気づいていないのか。無言で君たちの近くに移動した炎美に向かって突撃。その行動をリリコが阻む。

前方に現れたリリコを叩き潰そうと、三本の腕を束ねて叩きつけた。リリコは片手に浮かぶ青い盾を向ける。

巨人の三本の拳とリリコの盾が接触。

「ふふ、無駄無駄。ふ〜」

まるで羽虫でも吸い付いたように、無音かつ衝撃も無かった。驚愕したのか固まる巨人。その隙を逃すほど、リリコは無能ではない。

「くらえっ！ ニュートロンスターー！」

ピンク色に光るの片手剣を巨人に振る。まるでバターでも着るように、抵抗なく切り捨てた。

「――」

無言で巨人は股間から頭まで切り裂かれ、二つに分かれていった。空間断然を可視化した盾と剣は何物にも壊れず、すべてを断ち切る。

任務完了だ。アクシデントも無事解決。あとは帰るだけだった。

後日、カチカチと個室でパソコンを打つ音がなっている。狭い部屋には君のデスクと大きなプリンター。後は来客用のソファのみ。

所謂デスクワークを君は行っていた。

こっちは独立遊撃隊。これは特務中隊。このデータは山本信繁からの極秘文書。この表はアサギ校長のスケジュールデータ。

完全に閉じたパソコンを使い、君はデータを入力していく。おかしい所があるかもしれないが気のせいだ。気のせい。

理解すると嫌になってしまふ為、君は思考を停止する。仕事である。

パソコンの作業を順次進めている。そんな時に、コンコンと扉がノックされる音が聞こえた。

即座にパソコンをロックし閉じる。USBを抜き穴をロック。持っているUSBも机に入れて鍵を閉める。パソコン下の板をくると回し隠す。デスク上にはダミーの書類のみ。指さし確認よしつ。

そこまで行つて、ようやく君は椅子から立ち上がって扉に向かう。鍵を外し扉を開けた。君の目にホワイトプラチナの髪に眼鏡をかけた美少女が飛び込んできた。胸はそこそこあり着ている服を押し上げている。君をじつとメガネ越しにキラリと鋭い目つきで見つけたのは、同学年の結城炎美だった。先日になんか一人だ。今回は対魔忍スーツではなく普通の制服だった。

どうしたのかと言う前に、彼女は開いた扉の中にするりと入ってきた。止める間も無い。

仕方なく振り返りながら、オートロックの扉を閉める。中で立っている炎美は、キョロキョロと部屋全体を見渡す。

「殺風景な部屋だ」

彼女の素直な感想に君は、基本仕事部屋だからな、と答えた。

何か用事があるのだろうか。君はソファアに座るよう促す。しかし、「いや、いい」

首を横に振り断られる。君もそうかと言いながら自身のデスクの方へ移動する。そのまま椅子に座る。

炎美は君が椅子に座つたのを見て、机の上に乗身を乗り出した。急に君の目の前に炎美の眼鏡をかけた顔が急接近する。思わず君は離れようと体を後ろに倒そうとした。だが、彼女の両手が君の肩を固定。逃げられない。

「以前の任務。おまえに忍法をかけてもらった事覚えているか？」

無論、君は覚えていた。あの時、敵の上位魔人の奇妙な行動を思い出していく。炎美に執着したように攻撃し続けていた事やまるで発情したような行動などをだ。

君は頷くことで答えた。

「あの時、奇妙な感覚が体を走ったんだ。もしかしたら……」

忍法の覚醒が起こったかもしれないと君は押し黙る彼女の発言を察する。対魔忍にとつての忍法はアイデンティティの根幹に値する。目覚めたのなら確かめたいと思うのは当たり前のことだった。

詰まる所、もう一度君の能力を受けてみたいとの事だった。君は一先ず自身の能力詳細を知っているか訊いてみた。

「ああ、紫先生から詳細は伺っている」

個人情報……。色々と目を背けつつ、顔を紅潮させる炎美に提案する。順番にやっつけていこう、と。

紅潮した表情のまま、君の提案に彼女はうなずいた。机から退いて君の目の前に移動してほしいと伝えた。

炎美は言うとおりに机から降り、君とデスクの間に動いた。椅子に座ったままの君の顔の位置に、彼女の美乳が揺れていた。そこから視線を動かさず、炎美の眼鏡の奥にある瞳に視線を合わせる。両手に黒い霧を集めた。

「ああ、やってくれ」

君の手に纏う黒い霧を確認したのだろう。炎美が急かす様に言い表す。希望通りに触りやすい腹部に向かって手を向けた。

「っふう、っん」

彼女の口から漏れ出す甘い声。君はそれを楽しみつつ、調子はどうかと質問する。

「……っあ、ああ。特には何も」

君に触れられながら、手を握ったり開いたりして体の感覚を確かめていた。

高揚した意識のまま、炎美は君の目を見つめてくる。君は彼女の期待に応えることにした。

強化が足りないのかもしれないので、次の段階に移行したほうが良いと思うと君は口に出す。

紅潮した顔のまま、君に戸惑うような視線に変わった炎美。さすがに性的な事はまだしていない新米対魔忍だった。少々迷っているようだ。

そんな時に君がいつも口出す魔法の言葉がある。

これも強くなるために仕方のない事なのだ、と……。

彼女も忍法の発現が行われずに迷っているのだ。アイデンティティの根幹に等しいそれが見つかる可能性があるのなら、多少なりの躊躇もたやすく消えるものだった。

君の予想通りに炎美は少々の沈黙の後、

「そうだな。これも忍法を確認するためだ」

と一言呟いた。黒い霧がもたらす高揚感のまま、座っている君の股の間に腰を落とした。

「それで？ 私は何をすればいい？」

まだ性的な事に対する知識が薄いようだ。

真っ白なキャンパスに絵の具をぶちまけるような暗い願望。君は久方ぶりにそれを解消することができそうだった。

君は黒い霧を自身の肉棒に集める。そのまま股の間に腰掛ける炎美に見せつけるように取り出す。

ボロンと彼女の目の前に姿を現した君の肉竿。それを眼鏡の奥の目を見開いて見つめていた。

「こ、これを私がするのか」

知識のない少女に対して行う事を思い、すでに君の肉砲は臨戦態勢に入っている。それに対して炎美は恐れるような視線を向けていた。

最初は手であることを、君は指示する。

「う、うむ」

頷いた後、一拍遅れて彼女の白魚のような指が君の肉キノコに絡まってきた。やわやわと握るだけだった。



そのまま上下に擦るよう依頼すれば、目の前の少女は言う通り手を動かしていく。

「ごうか？ 痛かったら言っしてほしい」

すりすりとしたただの上下運動。動き出した指は慣れない手つきでたどたどしかった。それでも肉刀全体を擦り上げてきた。

そのぎこちない動きがむしろある種の快感になる。黒い霧を纏う亀頭の前から、ぬるぬるとした液体があふれ出していく。

「っ、これは」

指に付着した君の我慢汁を彼女は確認。透明な欲望で出来た橋が、炎美の指の間にかかる。

生真面目な委員長気質で、毎日のように鍛錬を繰り返している彼女の指。それを君自身の牡欲が汚した。

どこまでも自分勝手なオスの欲望で胸が痺れるのを楽しむ。君は、それにも黒い霧の効果が多少なりともあると伝える。

どうすればいいのか。彼女は君に言われずともわかったようだ。

離れた片手をもう一度、君の肉剣に纏わせる。そのまま、

「っちゅ」

亀頭の先にキスをした。

男を知らない少女の唇を今、君の肉杭が汚した。胸の中で欲望の炎が燃え盛る。それを何とか抑制しつつ、君は股の間にいる少女のホワイトプラチナヘアに手を下ろした。子供をあやすように、頭を撫でる。

「っん……ちゅちゅ。っふう」

そんな君を炎美は、黒い霧の効果で興奮に濡れた瞳で見上げた。いつもは人を突き刺すような鋭い瞳がとろんと溶けていた。

亀頭から溢れる我慢汁を摂取する彼女に対して、君はどうすればいいのかを指示していく。

指を上下に動かして、亀頭を飲み込んでほしい。

君の言葉をしっかりと聞いた彼女は言うとおりに行動しはじめた。

「んんんんん……っちゅぶ。っふう、ちゅっちゅ。っんう……れろろ」

肉筒の茎部分を我慢汁で濡れた指でこすり上げる。黒い霧の効果で気持ちが高揚してきたのだろう。肉塔を擦る両手の勢いが乱雑に速くなったり遅くなったりしていた。

亀頭の部分に舌が絡まる。口腔に溜まった涎によってぐちゅぐちゅといやらしい水音が君の耳から聞こえ興奮をおおる。

「れる……んぶ。つぶ、つじゅ」

肉棒を擦る手が狂ったのか、ほっぺの肉を亀頭が当たった。先に当たる柔らかな肉の感触に、電流のような快感を君は感じる。

「つぶう〜つぶう〜♥ ……ぬちゅつ、ちゅつ♥ じゅるじゅる♥ ……んぐつつぐ、ぐぶ♥」

口内の感覚が強化されたのだろう。炎美の息が荒くなり、口の動きが激しくなる。舌で肉根の先をたどるとどしく絡みつき刺激してきた。

それだけでは無かった。意図的にか、肉竿の先端にほっぺの内粘膜が何度も擦られた。亀頭の中から何度も

柔らかな粘膜を擦り上げる感触にぞくりつとした快感が背筋を走る。

彼女の頭をなでる手の力が強くなる。抑え込みそうになるのを何とかこらえて、君はそろそろ出ることを伝えた。

「つぶつぶ……つぶつぶつぶ♥ ひひぞ♥ ふあひへふれ♥ ふあたひのふちのふあかに、ふあせつ♥ ……じゅつ、じゅるじゅる♥」

炎美の亀頭を啜る顔が左右に激しく揺れ始める。同時に竿の部分を両手で強く握り締めたまま擦り上げられた。亀頭に何度も左右の粘膜が当たる。

肉弾頭全体からの快感にあらがうことなく、腰の奥深くでたまっていたオスの排出欲求のタガを外した。君の腰にある熱い塊の先から熱い白濁液が排出される。

「~~~~つぶ♥ ぶぶつ♥ んぎゅ、んぐんぐ♥」

眼鏡の奥の瞳を大きく見開きながらも、炎美は口内で迸る君の白い濁流を飲み込んでいく。それでも飲みきれなかった白濁が口の端から溢れて、彼女のほほを汚していく。

「んつぶ、んく、んんんっ♥」

炎美がまだ排出する君の牡欲を何とか吐き出さずに胃に収めていた。眼鏡の奥にある瞳から涙が流れていく。だが、苦しそうではなかった。顔の紅潮は増し、背筋が何度もぶるぶると震えている。少女の足をみれば、カーペットが濡れているのがわかった。

「んぎゅ、んぐぐぐ♥ つぶ♥ どれだけ、出すんだ？ 胃が重い。だが」

君に対して非難をあげせる炎美。それでも、

「すごいな。今ならあの時の巨人も一息で倒せそうだ」

手を握りしめて、黒い霧による力の増強を確認していた。

「しかし……」

手を開いて見つめている。彼女は忍法の発動ができないでいるようだ。

君は何も言えなかった。それどころではない。

心の奥底から、君の物ではない燃え盛るような情動がこみあげてきていた。座っている椅子を握りしめて耐える。今すぐでも、目の前にいる牝を犯さないと気が狂いそうだった。

君がそんなことになっているとは知らない炎美が

「おい、どうしたふうま？ 大丈夫か？」

顔を覗き込んできた。今はまずい。

君の瞳に白濁液に汚れた炎美の美麗な顔が映る。しかも鼻に甘い匂いが来た。君はどういう香りなのか知っている。女の発情した匂いだった。

まずいと思う間もなく君の理性が途切れた。

無言で立ち上がり、炎美の肩を掴む。

「いたっ。ふうま、なに」

全てを言い切る前に彼女の体を半回転させて、机に投げ出す。炎美が前にあるデスクに向かって倒れていった。

「あう。ふうま、先ほどから何をす……っひゃ」

君は彼女の言葉など一切聞いていない。体を燃やす欲望の炎は一切鎮静化しない。理性は吹き飛んでいた。

後ろから制服のスカートをめくる。目の前に清楚な白いパンツが

見えた。遮二無二破り捨てる。

「っひ」

どこからか引きつった悲鳴が君の耳に届く。認識はできない。

目の前にある雪のように白い肌とパクリと割れているピンク色の肉口を見つめていた。何も生えていない膣口はぬらぬらと透明な液体で濡れ光っていた。

「こら、見るなー！」

炎美の怒声を君は確かに聞いている。それでも脳は認識していない。

まるで何かに操られているかのように、君は目の前にある膣に向かって顔を近づけた。そのまま舌を伸ばす。

「っひや、っああ。何をっ、して……いるっうっあつい。……んだ、っっあ」

股の間の真っ白な肌事、膣口を食べるように口をつけた。瞬間口の中で広がる雌の匂い。

口内で膣肉を舌で探りつつ舐めあげる。

「やつあ。やつつめ、やめろお……やめて。っつう、ひい！♥」

膣口を味わうように、膣口を擦り上げた。舌尖に突起物が当たる。舌べろにじゅわつと愛液が溢れ広がっていった。甘い悲鳴が部屋に木霊した。

「っやつあ♥だめ、そこはだめ♥あ、っひ♥だめなんだ♥だ、め……っひっい♥いっ♥」

バタバタと目の前にあるデスクを叩く音が聞こえる。

口内にどんとどんと溢れてくる甘い蜜。もつと寄せ。

君を突き動かす情動が燃え盛っていく。口を少し動かす。膣口にむかって舌を突く。君の高い鼻先で膣に生える突起物を押しつぶす。

「っっッあ♥や、お、アッ♥もっつう、だっめだ♥っいっくっつか、は……っッ♥」

膣から愛液がしぶきとなってあふれ出した。膣内に突き入れた舌がぎゅうぎゅうと締め付けられる。

炎美の腰から君から離れるようにびくびくと跳ねていた。

「うう、うう………ツ♥………つ♥はっ♥はっ♥い、まのは  
いったい？ 目の前が真っ白に」

彼女は呆然とした様子でデスクに身を投げ出していた。君は立ってそれを確認している。ブランと起立した肉剣はすでに狙いを定めている。

力が抜けた様子でデスクに身を預ける炎美の上に、君は上半身を乗せた。目の前にホワイトプラチナヘアーが広がる。くちゆりと肉刀の先が彼女の膾口に当たる。

「っひ、やめろ！ こんな風に私はっ！」

彼女の悲鳴のような懇願。体も暴れ出すが、右手を肩に乗せて、左手で頭を抑えつけた。

「いった。ふうま！ せめて、何か言え！ おい！」

抑えつけた顔から洩れる彼女の嘆願を、一切意に介さず君は腰を持ち上げ——だめです。趣味じゃない。墮としたいんであつて強姦したいわけじゃない！

瞬間脳内を走る思考のまま、君は頭をデスクに叩きつけた。がつんという音がした。さすが天音が買ってくれた高級デスクだ、すごい。たい。

君の脳内でバカみみたいな考えが浮かぶ。それも体を燃やす情動にかき消えそうになるが、左目に力を集中。瞬間左目が銀色に光る。すうつと、先ほどまであつた牝を犯せという欲望が薄くなるのが君にはわかった。

「……お、おい。大丈夫かふうま？」

炎美が呆然としつつも君を心配する声をかけてきた。先ほどまで自身を犯そうとした男が、突然頭をデスクに叩き付ければそうもなろう。

ダイジョバナイと机に叩きつけた姿勢のまま、君の口から言葉をひねり出す。何とか彼女を抑えつける両手を離しデスク上で握りしめる。

炎美には申し訳ないが、君はそれ以上動けそうにない。先程ほどで

はないが、意識を全集中させないとまた彼女を襲いかかりそうなほどの情動が残っていた。

他に意識を向けないとやばいのだ。横に横たわる眼鏡の少女の姿を見るわけもいかないほどに……。

一先ず君はこの症状と似た事を引き起こす術を知っていた。よく間違えたとか言いながらかけてくる茶髪の先輩を思い出す。

性に関する忍法である房術。その種類もいくつかあるが、炎美の能力は相手の情動を操り意識を混濁させる能力だろう。緊急の対応の為、一度君の左目に宿る邪眼で封印した。

そのことをデスクの色を見ながら、横たわる彼女に伝えた。

「そうか、それで」

先日の任務の巨人が行った妙な行動もそのせいだろう。普段は恐らく炎美が敵と認識した者にしか効果はないだろう。

しかし、まだ彼女が能力を自覚していなかったこと。それに合わせ君の黒い霧の能力向上効果により暴走。君にまで影響を及ぼすほどの力となってしまったのだ。

君の暴走理由を説明しつつ、最後にすまないと謝った。

「いや、寧ろ私の方が……」

君の耳に炎美が呟く声が聞こえた。正直君は聞いている余裕はなかった。はあはあと息を荒くし、手のひらから血が出る程握りしめていた。そこまですないと理性がぶつつんしそうなのだ。

能力は強力なようで何よりつと、半笑いで君は伝えた。笑っている場合じゃないが。

君の苦しそうな表情を、炎美はじつと見つめていた。

「っん」

ぶるりとお尻を震わせたのが君の肉杭から感じ取れた。おい、馬鹿やめろ、本当にまずいからと君の口から怒声のように口ばしる。

「それを解消するのに、私が必要なのか？」

彼女のお尻に当てていた肉キノコ。それがフリフリと揺れる白い

双丘が擦られるのがわかる。君は菌を食いしぼりながら、首を上下に動かす。実際その通りなのだ。房術で膨らまされた情動は、基本ちゃんとセックスをしないと無くなることはない。

とはいえ、君は強姦は趣味ではない。墮とすのが好きなだけだ。墮とすのが……。

君が頷くのをしつかりと見ていたのだろう。幾度か逡巡するように口をパクパクと開けた後、炎美は決意した。君の耳に口を近づけて、

「いいぞ。おまえなら。今回の事は私の性だし」

脳を溶かすような誘い文句が鼓膜に直撃した。もう我慢は必要ない。それを認識した君は肉棒を彼女の膣口に擦りつける。

「っん♥」

溶けるような甘い吐息が君の耳に聞こえた。最後の理性にデスクにうつぶせで横たわる炎美の体を両手で抱きしめる。

横にある彼女の顔に視線を向ける。いつもは鋭い眼鏡の奥の瞳が、君を愛おしむかのように見つめてきていた。

最初はできるだけ優しくすると君は伝える。

それにたいして炎美は、

「……」

ただ黙ってうなずいた。肯定を受けた君は、肉槍に黒い霧を集中させて腰をゆっくりと進ませる。

誰も侵入したことのないみっちり閉じた膣肉を、君のいきり立つ肉棒が侵入していく。

「っあっう」

漏れ出すような炎美の吐息が君の鼓膜を打つ。

具合を確かめるように君はゆっくりと腰を押し去った。ぎゅうぎゅうと押し出すような肉の抵抗感と愛液に濡れた粘膜が君の肉キノコを押し包んでいる。

押し込んでいくと、亀頭に薄い抵抗感。それをゆっくりと君自身の物で破っていく。

「っうっくっう」

痛みを感じたのだろう。炎美の呻き声が君の耳に聞こえた。

今まで誰にも奪われなかったものを君が今奪うのだ。それを認識しながら、君は最奥まで腰を進めていった。

ゆっくりと進めれば、亀頭に硬い口がぶつかると。一番奥そこに到着したようだ。

「っあ、っはっあ……おっつきい」

炎美の口から漏れ出る男を誘う甘い声。

君はその誘いのまま、ぐりぐりと奥底に亀頭を押し付ける。

「いつ♥あっ♥」

ビクンと君の体の下で炎美の体が跳ね上げた。黒い霧の感覚の増強は、処女の体にもしつかりと聞いているようだ。

君はそれを確認すると、腰を押し付けるだけでなく動かし始めた。

「あ、っひ♥はひゅっ♥ま、まで、えっ♥あっ♥まっつ、ふうま。私初めて……なんだっあっ♥んぐっ♥初めてなのにいい♥んぐう♥」

体を駆け巡る電流のような快樂に、炎美の体が振り回されている。彼女の両手が耐えるかのようにデスクの端を握りしめていた。

腰だけでなく君は制服のボタンを外し、真っ白なスポーツブラを外す。彼女の美しい形の整ったナマ乳がぶるんとまろび出た。粉雪のように真っ白な胸が君の手で形を変える。

きれいだと君は炎美を褒めた。

「っつか、は……っ♥そ、そうか♥おお、っあ♥」

その瞬間きつい膣内が更にきゅっとなりました。彼女の声も高く張りあがった。

どうやら、褒められるのが弱いようだ。君はどんどん褒めていく。

胸の形がきれいだ。任務の時の生真面目な対応が助かる。斥候で周りを把握するのがうまい。

「はひゅっ♥ほ、本当か♥ひうっ！ああ……ふうま♥本当にそうか♥んんっ♥ふぐっ♥」

縫るように君に視線を向ける炎美。背中も君の胸板に擦りつけている。デスクを握っていた手も君の手の甲に重なるように掴む。



本当だとも、と君は頷く。

名門の家である君や、元から五車に住んでいた多くの対魔忍達とは違う。彼女は孤児から素質を発現しこちら側へ来た存在だった。

きっとそのせいだろう。誰かに必要とされたいのだ。それで心のうちにある空虚さを埋めたかったのだろう。

「アあ、あッ♥ 私、ふうまにっ……ッふ、ぐう♥ ひ、ひつようとされてっあ♥ お、っ♥ ご、お♥ されているんだあ♥ ん、あ、あ♥」

君に頷かれた瞬間、肉竿を炎美の中がきつく絞るように締め付けてきた。君の体の下で彼女の体がかくかくと揺れる。

炎美の心を占める空虚さを君自身が与える快楽で埋めていく。それがどういう意味を持つか。君は良く知っている。

君を見続ける炎美の瞳が陶酔に染まっていく。まるで飼い主を見つけた子犬のようだった。

「あ、はッ♥ ふうまのっお、んツぐっ♥ おおっつい、きいのがっ♥ ああ、っんっ♥ ふかい♥ 奥まで来て、っえっあ、ああ、くくくくっ♥」

肉棒を彼女の膣壁がぎゅんぎゅんと締め付け甘く絡みついで来る。暖かく淫らな肉の抱擁に腰が持っていかれそうになるのを君は感じた。

くつつくかと思うほど、炎美は自身の体を君に擦りあてる。君の手の甲をぐいぐい押し、彼女の胸に手のひらが当てられていた。

「ひい……いん♥ ふうま、ッあ♥ ふうつまああ♥ っ、ああ♥ もうだめっんツぎゅっ♥ だめだ!♥ 意識がとぶ!♥ つうっお♥ とんじやうつうううん♥」

段々彼女も余裕がなくなってきたようだ。呻くような喘ぎ声が、君の耳を打つ。

君の熱い塊を吸い上げるように膣肉が激しく波打つ。思わず君は腕の中にいる炎美の体を強く抱きしめた。

「くるっしっい、んい、いっ、けどおああ♥ ふう、つま!♥ もつとだきしめて!♥ ツお♥ んんツ、くるしいっけど!♥ 気持ちい

っ♡ むぐっ♡ んうう♡ぬちゅ、んちゅうつ♡ つふんん♡」

彼女は横にある君の顔に唇を押し付けてきた。口内に舌が入ってくる。君は迎え打つように舌を絡める。

「んあ……んんん！♡ むちゅ、ちゅつ……んお♡ あ♡……ちゅる……ちゅぷううう♡」

舌を絡める炎美の恍惚とした瞳が、君の目を刺し貫く。

肉幹を何度も締め上げる炎美の膣肉の激しい収縮。

啜え込んだチンポを逃がすまいと、竿全体に絡み付いてくる膣肉から生まれる快感。それは君の牡欲を限界に送り込むのに十分な刺激だった。

唇を離し、中に出すことを君は告げた。

「ふはっ♡くっッあ♡ うん、おっ、っはっ♡ 出せっ、だしてえ♡ あッ

！♡ あひ、んぐッ♡ おまえのもので、私を染め上げてくれ！♡

えんい♡いッ♡ はなさないで……くっッ♡」

肉根を食いちぎらんばかりに行われる膣肉の激しい収縮。処女特有の痛み交じりに感じる快感。君は最後にぐつと最奥に押し込んで白濁液を解き放った。

「んお、おッ!?!♡ 熱い♡い♡ 熱いのがあ♡ あッいお♡！♡

暴れてる♡ つう♡ んお♡ おッ!?!♡ イグッ、すごいくるううう

う♡うう！♡」

デスクから跳ね上がり、君の肩に炎美の顔が当たり真っ白な喉をさらしていた。

膣内がうねり君の肉棒から最後の一滴まで飲み干さんと貪欲に食らいついてくる。

期待に答えようと、白濁液をだしながら君は亀頭で子宮を持ち上げるように押し出した。

「んぐうううああ♡ あ♡ あ♡ッ!!♡ あうううう♡ つお……

おッ奥ごりごりするなあッ♡ おぐ、くっッ♡ んおお♡ おくくく

く!!!♡」

びゅるるつと亀頭口から最後の一滴まで子宮に排出。同時に炎美

の重い悲鳴が部屋中に響き渡った。

段々と君に伝わる彼女の体中の激しい痙攣も収まっていく。

「おお、くっつか、はア……ッ♥ はっ、は——ッ♥ しえーえきいっばい、でてっ♥ お、ッ……♥ 熱い、い♥ はひっ♥ う、ぎい♥」

がくんと炎美の体が大きく痙攣したかと思うと、デスクにぐったりと力なく投げ出した。

心地よい排出感が君の体を満たす。その心地よさのまま、炎美の頭に手を置く。

「んっ……お、ッ♥」

彼女の微かな呻き声と共に君の手のひらに擦りつられるプラチナホワイトの髪。

君を見つめる陶酔と快楽の涙でぐちゃぐちゃに濡れた瞳。それを確認した君はもう一度炎美の体を力強く抱きしめるのだった。

「それで、今回の報告のデータはこれでいいのかしら？」

君の目の前に、最強の対魔忍井川アサギがUSBを持って揺らしていた。君はデスクの椅子に座り、パソコンを操作している。マナーが悪いが、正直まだ処理していないデータは山ほどあった。

アサギ校長もそれは知っている。そのため君の姿勢を咎めるようなことはしなかった。

君はそれに頷く。ほかにも今後のスケジュールなどをまとめた物を入れておいてあることを伝えた。

「いつもごめんなさいね」

すまなそうに言う目の前の美女に、君はアサギさんの為ですからと伝える。痛い、噛むな。

腰の間から来る刺激的な痛みには、君は表情を変えることはしなかった。しかしに、足指を動かして擦り上げた。ぎゅっと肉弾頭が吸い上げられる。

「……っ♥っ♥」

「それで今度の会合はいつになりそうかしら」

アサギの質問に君は次の休みですと答えた。

君の答えを聞いたアサギの表情が変化。君を艶めいた表情で見つめた。

「じゃあ、その時に、ね」

アサギは淫靡さを乗せた声と表情で君に視線を向けた。コクリと君は頷く。痛い痛い、足を抓るな。

脹脛からの痛みも無視して君はアサギ校長を見ている。ついで足指をもう一度動かしてお仕置き。

今度は脹脛を握られた。

何が起きても君は笑みを浮かべたままアサギ校長に顔を向けている。

「じゃあね、ふうま君。お先に」

何も気づかずに、アサギ校長は手を振って部屋から出ていった。その瞬間、君はデスクの下にあるホワイトプラチナヘアーを掴みぐつと股間に押し付けた。

「~~~~つぐ♥ つご♥ ぐつぷ♥ ふぷぷ♥」

デスクの下には隠れるように結城炎美が座り、君の肉竿を深く啜え込んでいた。そのまま、君は肉剣の先に当たる喉粘膜の快感に身を任せる。発射される白濁液が彼女の喉奥へと発射されていく。

喉を刺激されて炎美はがくがくと全身を痙攣させて、君をメガネの奥の瞳を白目にして見上げていた。

それでも肉筒を舌や痙攣する喉で刺激し続け、流し込まれる白い性欲を喉を鳴らして飲み込んでいる。

「~~~~つごっあ♥ つは、はっああ~~~~♥」

最後の一滴まで飲み込むと、肉刀を吐き出し大きく息を吸った。アサギ校長と話しながらも、君は隠れていた炎美に肉棒を啜え込ませていた。

彼女もそれに興奮していたことは明白だった。デスクの下にあるカーペットが確実に濡れている。

そのことを指摘すると、炎美は黙って下を向いた。

「……………ひどい男だ♥ おまえは♥」

言葉とは裏腹な愛情こもった眩きは、確かに君の耳に届いていた。  
その答えに君は彼女の頭をゆっくりと撫でることで答えるのだった。

「……………っ♥」

## 千賀崎リリコ★

薄暗い機械的な通路を君は二人の付き添い人と共にこつそりと移動していた。

一人は真っ白な短髪に大きな胸やお尻がわかる程の、ぴっちりとした服を着たアイリーン・ウォルト。

もう一人は、ブロンドのロングヘアーにあちこち露出が激しく口ポツトみみたいな装備をしたアルカ・ステイエル。

君達三人はノマドの研究機関に潜入していた。それも佳境に差し掛かっている。

君たちの前にある分厚い扉、それをハッカーであるアイリーンが今開けようとしている所だった。

彼女は今小型端子をつなげて必死に作業しているように見えた。

今のところ君たちの潜入はばれてはいない様だが、それでも急いだほうがいいのは確かである。

「よっし、開いた」

アイリーンの微かな声が聞こえたかと思うと、目の前の分厚い扉が開いていく。

無言で君たちはその中へと侵入。中にある装置の影に隠れつつ進む。陰惨な光景が目映る。

「つむぐ〜〜」

肉塊のような触手に体の穴という穴を犯し貫かれている、獣耳みたいな金髪で爆乳のセシリア・チェロ。

「やめろー！ こんなこととして一体何の意味がっつああ〜〜」

女性の急所に棒を突っ込まれてそこから電流を流され続けている、小麦色の肌に短髪のラスト。

「や、やだ！ もう注射はやだ！ やめてよー！」

マッドサイエンティストそのままの格好をした痩せぎすの男に注射を向けられている、金色に髪を染めた千賀崎リリコ。陰惨な光景を

六体のオーク達が股間を大きくさせながら、にやにや笑いで見ていた。

どの子も君は知っている。幾度か任務を共にしていた。だからこそ君が米連の二人と共に救助に来たのだ。

機械全としたアルカはともかく、アイリーンの方は嫌なものを見ているといった苦々し気な表情だ。君も似たような顔をしているだろう。

見て放置するつもりで君たちは潜入したのではない。すぐに行動を開始する。

君はこつそりとアイリーンにここで隠れているように言い、アルカと一緒に突撃するように指示、

二人とも無言でうなづく。君は手持ちのバックから一つの小型端末と二つの黒い四角い塊を取り出した。

二つの黒い塊を地面に置き、小型端末を操作。黒い塊から三つほど小さな砲が生まれ六本の足が現れた。

二つの昆虫型ドローンは無音で、三人の陰惨な光景に夢中のオーク達のもとへ移動。

近づくのを確認した君は端末のボタンを押したと同時にアルカに突撃を命令。

「了解。任務開始します、主」

そのあとの事は一瞬で終わった。君から指令を受けた二体のドローンは三つの砲を発射。小さな針を突き刺し、

「ぐあああああつ」

六人のオーク達に電流を流す。その隙を逃さず、彼らに突貫したアルカが手からはやしたビームサーベルで、

「殲滅します」

一息に両断。マッドサイエンティストの護衛であっただろうオーク達は全滅。

「い、いったい何が」

その光景を見たマッドサイエンティストの男が呆然と立ち竦んでいる。君はその男の顎を殴る。そうすれば意識なく倒れていった。

「つえ？ あれ、ふうま？」

あと少してマッドサイエンティストに注射を打たれそうだったりリコが、君を見上げていた。彼女も君を知っている。学校でのサボリ仲間だった。

遅くなつてすまないといいながら、他の少女達も助けていく。

セシリアを犯す触手を殺し、ラスターの棒を抜く。

「つぶはあ。あ、ありがとうふうくん」

「んんん。すまない、助かった」

二人の感謝を受け取り目線を外す。アルカに持ってきた羽織る物を渡して、着せるように言った。

君は手を後ろに回して、リリコにも羽織る物を渡す。

「あ、ありがと、ふうま」

リリコの感謝の言葉に、君は手を振つてこたえる。

さあ、あとはここを脱出「ふうま！ もう、起きなさい！ ふうま」

がぼりと頭を起こせば、君の目の前に褐色肌の黒髪がツインテールなゆきかぜが立っていた。先ほどまでの事は夢だった。実際ずっと前に終わった任務だったことを君は思い出す。

周りを見渡せば、君が前に花蓮達と行為を行っていた部屋だった。

「どうせ此処でサボつてると思ってたわよ」

ゆきかぜが君を覗き込みながら腰に手を当てていた。君は彼女はこの鍵を持っている一人であることを思い出す。

君は寝ぼけながら、放課後ゆきかぜの家に遊びに行く予定だったことを思い浮かべた。

「もう、今日は私の家でサイバーパンク2122やるんでしょ」

悪い悪いと謝りながら、君は立ち上がる。そのまま君とゆきかぜはで廊下に移動した。放課後の廊下に人は殆どいない。

そのまま二人して学校の出口に向かおうとしたその時、

「あく、やっと思つけた☆ ふうま」



むにゆりと君の背中に柔らかい感触が当たり、首に腕が巻きつけられた。急に抱きつかれた君は前に倒れそうになるが、足を前に出して堪えた。

ふさりと君の目線に金色に染められた短い髪の毛が映った。声や背中感触と目に映る髪の毛で、君は誰か直ぐにわかった。

「あー！ ちょっとリリコ！ いきなり何してるのよー！」

振り返ったゆきかぜが、君の背中に抱き着く少女に指を向けて怒声を上げた。君には見えないが、リリコと呼ばれた少女はチャシヤ猫みたいな笑みを浮かべていることだろう。

「放課後デート中にごめんね」

「はあー！ そんなんじゃないんだけどー！」

リリコのからかい交じりの台詞に、ゆきかぜは過剰に反応していた。

「あつれ〜そっか〜」

「そうよ。当たり前でしょう」

リリコはニタニタした笑みを浮かべたまま、ゆきかぜと会話しているだろう。相変わらずの関係だと君は思った。

リリコがからかい、ゆきかぜが反応する。そんな関係でも彼女たちは仲がいい事を君は知っていた。

「違うんだっいたらいいよね。この後私とふうま、アサギ校長に呼ばれちゃってるからさ。貰ってくね」

「えー！ ちよ、ちよっと待ちなさいよ」

ゆきかぜの慌てたような声が君の耳に響く。君も思わずえつと声が出た。君達は今日発売されたサイバーパンク2122を二人でガンガンに進めていく予定だったのだ。

そのことを君が呟いた。ゆきかぜも何度も頷いている。

だが、リリコは顔の前に手を合わせると、

「ごめんね☆ アサギ校長の命令だから、さ」

「そんな」

問答無用で君を星遁で連れていくのだった。ゆきかぜの呆然とした声が君の耳を打ったかと思うと、一瞬で見覚えのある校長室まで連れていかれた。そこにはデスクの前に立つ黒髪を後ろで纏めてスーツを押し上げる巨乳の女性と威厳ある壮年の男性。五車学園校長の井河アサギと、対魔忍達が所属する組織を治める山本局長が君達を待っていた。

「急にごめんなさいね。ふうま君……ちよつとどうしたの？」

思わず君は目の前に現れたアサギ校長をジト目で見つめる。発売日にやるゲームと言う至高の遊びを邪魔されたのだからこうもなるだろう。山本局長が居ても我慢でいかなかったのだ。

何でもありませんと答えながら、軽いため息をつけて君は感情を抑える。あとでゆきかぜにはフォローが必要だろうとも思っていた。

くすくす笑う君の隣に移動した、首につけたピンク色のチョーカーが目映るリリコは無視。アサギに君は何の用か問いかけた。

瞬間、アサギはすつと表情をけた冷たい顔になった。彼女の代わりに答えるように、山本局長が口を開いた。

「君達には、アサギと共にある場所に行ってもらおう。そこで……」

局長の説明に思わず君とリリコは驚愕の叫びを浮かべてしまった。

魔都東京。田舎の五車町から離れ、君達とはある高級ホテルの廊下を歩いていた。

君の服装もいつもとは違う。山本局長から与えられた高そうなスーツを着ている。リリコやアサギもきれいなドレス姿だった。だが、それを見て胸をときめかせる余裕すら今の君にはない。

君たちを先導する一人の女性。銀色の短髪に褐色の肌の肉感的な女。君の頭にある異名が浮かぶ。

吸血女王付きの死神。マリカ・クリシユナ。そんな有名人が、君達を案内している。それ程の事が起きていた。

全身からくる緊張の震えを抑え、君は何とか足を進ませていく。少し歩けば、観音式のドアが君達四人を迎えた。

「こちらへ」

一介の従者のように死神と呼ばれる女性が、扉を開いて君たちを迎え入れた。その中に君たちは入っていく。最後に軽く頭を下げて部屋に入っていく君の後を、彼女は追ってくることなく扉を閉めていった。

何千人と入れそうな巨大なパーティールーム。今そこは大きく距離を開けられた四つのテーブルに占拠されていた。

君達四人は一つのテーブルに赴く。そこに山本局長と井河アサギが座り、後ろで君とリリコが直立。

顔を動かすことなく、君は視線で周りを見渡す。

片方の机には四名の女性。どの子も君は知っている

赤いロングヘアーに褐色の肌、普段つけているマントと剣の姿は無くドレス姿の女性。幾度かだけ任務で協力した魔界騎士イングリッド。

その後ろには、茶色の髪の毛から二本の小さな角を生やした少女。魔界のポンコ……嵐騎リーナが立っている。

イングリッドの隣には、桃色のロングヘアーに普段きている踊り子服をドレスに変えた少女。君と縁深い魔界の支配階級所属の魔人ナディアが座っている。

そんな彼女の隣に陣取るのは、銀色の腰まで伸びた髪から尖った耳を覗かしている女性。これまた君と縁深い女だ。魔界の錬金術師シュバリエが、興味深そうに周りを見渡している。おっと、目が合った。

君と目が合ったシュバリエは、隣に座るナディアをこっそり突ついていた。シュバリエから君の事を言われたのだろう。ナディアは君に視線を向けて薄く微笑んだ。君もこっそりと笑みを浮かべて答えた。

さて、もう一つの方に視線を向けてみよう。これまた君と知己の四人の女性が居た。

紫色のロングに軍帽を乗せ、小さな体を軍服で完全に包んだ少女。胸の階級章は中将。以前の合同演習で世話になったノエル・ルノワールが、不機嫌そうな顔で座っている。

その後ろではお尻まで伸びる薄いブルーの髪に、仮面のような無表情で立っている少女。体にぴったりしたスーツで、何時もの背中に装着している兵器を外したルーナだ。

ノエルの隣ではイングリッドを苦々し気な表情で見つめてる、対魔忍スーツをドレスに変えた茶髪の少女。米連での任務をよく共にする甲河アスカが座っていた。

アスカの後ろでは、緑色を短髪にして薄い体にぴったりとしたドレスを身に纏った少女。アンジェが所在なさげにぼんやりと立っている。

彼女は君の視線に気づいたのだろう。君に目を向けて手を軽く振っている。君も彼女だけに見えるように小さく手を振り返した。

米連は彼女達DSOグループしか来ていないようだ。

「相変わらず、顔が広いね。ふうま」

こっそりと呟くように、隣に立つリリコが君に話しかけた。それに君は小さな頷きで答えた。

君達から見えないが、前に座るイングリッドをアサギは睨むように見ていることだろう。

米連や対魔忍達からの視線を気にすることなく、イングリッドはただ一点。まだ誰も到着していないテーブルをじっと見つめていた。

ばたんと扉が開く音が聞こえた。君達の向かい側にあるドアがゆっくりと開いていく。

「あら、私たちが最後でしょうか？」

「そう、見たいだねえ。やれやれ若者はせっかちで困るよ」

灰色の髪に真っ白肌の女性と、小柄ながらふわふわと物理的に浮いた座布団に座るおばあさん。その後ろに眼鏡を変えた黒髪の女性と同じく黒髪で尖った耳を生やす女。

君とは面識はないが、名前は知っている。全員が有名人だ。

きらきら光る灰色の短髪で黒いマントを着たドレス姿の女性はカーラ・クロムウエル。近年あちこちと国交を広げている吸血鬼と人間の王国の女王だ。

その後ろで立つ黒髪を腰まで伸ばす眼鏡の女性。スーツを着た彼

女は五車学園とは別の術者を育てる学校の理事であり、日本随一の術者である上原北絵。

カーラの隣に物理的に浮いている老婆は、この場で一番敵対してはいけない人間だ。アミダハラを治める魔術師組合の重鎮であり、数百年を生きているというノイ・アズレーンである。

ノイの背後に立つ体にぴっちり張り付くスーツを着た尖った耳の女性。彼女もアミダハラ随一の剣客であり、敵に回してはいけない何でも屋と呼ばれるアンネローゼ・ヴァジュラだ。

彼女達はゆっくりと君達と向かい側のテーブルに座った。彼女達が今回の会合の主催者であると山本局長が話していたことを君は思いつく。

主催者がテーブルに座り会合が始まる。まず吸血鬼の女王であるカーラが立ち上がり開催を宣言する。

「なかなかのメンツが揃ってましたね。集まって下さり感謝いたします。それでは」

「その前に招かざる客人がいるようだが？ カーラ女王陛下」

女王の発現を遮り、米連のノエルが皮肉下に声を上げた。彼女の視線の先には、魔界騎士イングリッドが座っている。

「世界の一大事と呼ばれ着てみれば、まさか犯罪結社の人物がいるとは……」

「なんだと！」

ノエルの軽い挑発にリーナがさっそく乗って大声を上げた。そこに、

「辞めろリーナ」

「は、はい、イングリッド様」

イングリッドが静止する。リーナは彼女の言う通り口を閉ざした。

「私も聞きたいものだ。この日本を蝕む組織の人物がいる理由をな」

山本局長の有無を言わせない重い響きを持つ声が、部屋に響き渡る。イングリッドに米連や対魔忍達から鋭い視線が向けられた。

イングリッドはそれに答えるように口を開く。

「今回、私はノマドでは無く魔界騎士の立場としてここにいる」

「……ふざけているのか？」

イングリッドの発言にノエルが、静かにしかしはつきりと怒気を感じさせる声で返した。それに反応したのは、他の人物たちだった。

「そうではないの。今回本題の者たちは魔界にとっても危険な存在なのよ」

「シユバリエにとってもあまり好ましくない存在よ」

隣に座るナディアとシユバリエが援護するように話した。

「それだけ危険だつてことさね。今回の件は」

ノイが小声ながらも、不思議と部屋に響く声で言う。その流れに乗ったのだろう。カーラが手元の端末を操作した。

テーブルの真ん中に立体映像が浮かびあがる。そこには、うじゆるうじゆると蠢く肉塊にあちこちに触手を生やした生物や異様な姿の者たちが祈りを捧げていた。

「ちよつとここから心臓に悪い光景が続くから気をつけな」

ノイの老婆の言うとおりであった。二本足で立つ一切毛が生えていない獣が、幾人かの人間やエルフを連れてきた。

「やめろー！」

「誰か助けてー！」

悲鳴が上がるが、助けられるものはいない。蠢く肉塊から太い触手が生えた。その触手がまずはエルフや人間の男性に向かう。

「やつめ、ごっつぽ」

叫び声をあげる口に触手が突っ込まれる。数瞬がくがくと震えたかと思うと、体が解けていき巨大なナメクジみたいな姿に変わる。

「淫神様万歳」

ナメクジに変化した者から、賞賛の声が上がる。残った女性たちの引きつった声が聞こえた。

「ここから先は、見なくてもいいよ」

どうせ想像通りの事しか起きないだろう。立体映像が止まり、触手を生やす肉塊がピックアップされた。

「淫神とその従者達。ガイスト。時限侵略者。様々な別名があります  
が、簡単に言えば多次元から渡ってくる侵略性の精神ウイルスと考え

られていますわ」

冗談のようだが、誰も笑っていない。カーラが米連の方に視線を向けて、

「この間起こったワシントンでの一件、私達もちゃんと掴んでおりますのよ」

「……ああ、残念ながら私達もこの気色の悪い奴らに面識がある」

彼女達の会話にピンと来た君は、こっそりとアサギ校長に囁く。この間突然米連がある貧困支援団体に軍隊を投入。一夜にしてその団体は消された。公式では危険な毒ガスを製造していたテロリスト達の拠点だったといわれている。

「魔界でも同等の事件があったわ。そうよね、イングリッド」

「ああ、町一つが奴らに乗っ取られていた」

「おかげでシユバリエも手を貸して、すべて滅ぼさなくてはいけなかったわ」

さらりと、すごいことを言う魔族グループ。

「ここ日本でも、似たような者達がグループ化までいかずとも、発見されていると聞きますわ」

「ああ。確かに、だが魔族の一種だと思われていた」

話を向けられていた山本局長が頷いた。

そのまま次元侵略ウイルスの特性が、カーラやノイの口から離された。

曰く欲望が強いものに取り付き、体を変性させる。

曰く変性しないものも調教を繰り返す仲間に変える。

曰く侵略した世界を征服し、原住民を奴隷にする。

曰く原住民を使い多世界間で奴隷売買などを行っている、等々。

「この脅威に対して各組織間での協力をお願いしたいのです」

「協力するのは結構だ。だがな。カーラ女王」

「ああ、一つ感化できないことがあるのだ」

カーラの演説に、ノエルと山本長官が一度頷くも反論していく。

「世界の一大事の前に、国家を蝕む物を見逃す訳にはいかんのですよ」  
「その通り。米連も犯罪組織による治安の悪化は懸念されている。む

しろ、その悪化のせいでこいつらに潜みこむ隙を与えてしまったとすら言える」

彼らの発言の先にはイングリッドが座っていた。彼女は逡巡するように、一度目を瞑る。だが、直ぐに開き声を上げた。

「言ったはずだ。今の私の立場は魔界騎士としての立場だ。我々にとってもこの危険性は無視できない」

そういうと、ここだけの秘密にしてもらいたいと発言して、驚くべき提案を行った。

彼女の派閥以外の魔界系組織における戦いにおいて、ある程度の助成する用意があるとの事だった。

「そもそも我々ノマドは、魔界から人間の世界に逃げざるを得なかった者達の援助が原則だったはずだ。それを忘れた者達など」

一度発言を切り、

「これはブラック様も了承している」

と発言。ノエルと山本長官の纏う空気が一瞬崩れた。ノマドは裏では犯罪結社としての顔が強いが、表の顔として世界的な複合企業としての顔を持つ。それにイングリッドが率いる派閥がノマドの一番の暴力装置として存在している。その組織からの切り離しが行われたのだ。そしてそれに対しての助力も行われる。助かるどころの話ではない。

アスカやアサギの顔が凄まじく苦々しい表情に変わるが、横から来る上司の視線に黙ったまま座っていた。

「あの快樂主義者が大きく出ましたね」

「それほど奴らは脅威であると言う事だ。カーラ女王」

カーラの言葉にイングリッドが返答する。そのことを受けて、カーラはノエルや山本長官の顔を向けた。

「どうですか？ 彼女達もだいたい譲歩したようですが」

カーラの言葉にノエルや山本長官は一拍間を置いて頷く。カーラは嬉しそうに見やると、

「では、この次元侵略者達に対する協定を結ぶと言う方向性でよろしいですね」



彼女の言う通り。あくまでもガイストと呼ばれる次元侵略ウイルスに対する協力体制のみだったが、ノマド・イングリッド閥と米連D SOに対魔忍組織との協定が結ばれる。

片手で握手し片手でナイフを持つというような協定だが、それでも確かに意味のある物が結ばれたのだった。

先の会議の後、山本長官やアサギと別れて君はリリコと東京の街を歩んでいた。すでにスーツやドレスは脱ぎ、リリコと君は何時もの服に着替えてた。

「な〜んか、すごいことになっちゃったね」

リリコが脳天気にはいた。君をそれに応えるようにうなずく。今後の仕事を思えば、様々なことが君の身に降りかかることは明白だった。

「つま、色々難しかったけど、そこらへんはアサギ校長らが考えるつしよ☆」

君に視線を向けると、彼女はそのまま君の腕に抱き就いてきた。君の腕にリリコの豊かな胸の柔らかな感触が当たる。

「そんなことより〜。せっかく東京に来たんだし、やってかない」

彼女は開いた口の前で筒状にした手を振るといふ卑猥なアクションをこなす。君もせっかくの都心に来たのだからと頷いた。夜も遅いが、そのまま帰るのももったいなかった。

「やった。じゃあ、さっそくギャル友に紹介された所に行ってみよ〜」  
リリコの先導のもと君は歩き出す。特務中隊や独立遊撃部隊などの仕事をこなした君の懐は、結構温かいのだ。

歩く途中で君はコンビニを見つけた君は、買うものがあるとリリコを引っ張る。

「え、何買うの?」

戸惑うリリコを他所に、二人でコンビニに入っていく。君は手に持ったかごにゴムや栄養ドリンク、スポーツドリンクなどを無造作に

入れていく。

「……♥」

それを見ているリリコの顔が紅潮していく。君を見つめる瞳も濡れだしていた。

ある程度目的の物を入れた君は籠をリリコに渡す。

「？」

戸惑う彼女に君は、レジに持っていくよう伝えた。君の願いを感じ取ったリリコの息が荒くなる。

「ふうまのエッチ♥」

囁くように呟くと、彼女は籠を手を持ち君をレジに連れていく。レジの男性が、寝ぼけた頭を覚醒させるようにリリコを見つめていた。めったに見ない巨乳白ギャルを、目に焼き付けているのだろう。

「これ、お会計お願いしま〜す」

レジに君が居れた籠を置く。品物を会計していく事に、リリコの胸に行く視線の数が増えている。時折君に対する殺意に近い視線が向けられる。

この後やりまくりますと宣言しているような品物の数々に、男の妄想がはかどっているのだろう。

そんな誰もがうらやむ女を君がこの後ハメ犯せると言う男の優越感。

それを刺激された君は、お会計が終わるなりリリコの肩を手を持ち歩き出す。

「あ、ん♥ もう、ふうま。ホテルはすぐ近くだからもうちよっと待ってよ」

リリコの媚びるような甘い声が、コンビニに木霊する。そこを出るなり彼女も、君を足早に連れていく。彼女の言う通り、目的の場所はすぐそこだった。

そのまま君はホテル内の部屋に入る。我慢の限界だった君たちは、直ぐに行為を始めだす。持ってきてる服がそれしかないので、二人し

て全裸になった。

ベットに座り君は足を開く。その間にリリコが当たり前のよう  
に座る。

黒い霧を肉棒に纏わせた君はゴムを手に渡し、あれやってほしいと  
頼む。

「いいよ。あれふうま好きだよね」

頷いたリリコは、コンドームを取り出して口にくわえた。そのま  
ま、

「あむ。んく、んぶ。じゅぶぶぶ」

君の黒い霧を纏う逸物に、口でゴムをつけていった。

「つぶはく♥ はい、ふうまのデカチンポにちやんとゴムつけたよ♥

つちゅ♥」

一度逸物から口を離し、君の肉杭に媚びるようにキスをした。相変  
わらず君の欲望をそそののがうまい。

そのまま亀頭に口づけしていたかと思うと、君の腰の後ろに手をま  
わした。

「ただだつきまくす♥じゅぶぶつ♥ つぐ……つぶ♥ ぐつぶえ♥」

口を大きく上げたかと思うと、一気に君の肉剣を飲み込んだ。根元  
まで飲み込み、リリコのピンク色の唇に君の陰毛が当たっている。

本来なら喉を君の熱い塊に突かれ嘔吐いたりするが、彼女にそんな  
様子は一切ない。それどころか、君を紅潮した表情と濡れて垂れた瞳  
で君を見上げていた。

「じゅぼつ♥ んっ……じゅぶつ♥ ほう、ふあたひのろまんは♥  
つんぐ、ぐつぐ♥」

リリコのセリフと共に、亀頭を喉でこするよう左右に振りだす。

コンドームの上からでもわかる、亀頭に当たる喉粘膜の刺激は君に  
十分な快樂をもたらしていた。

「ぐつぶ♥ じゅぼつ、じゅぼつ♥ じゅるるるっ、じゅうう♥ つ  
ん、つぐ♥ ぐつぼ、じゅる♥」

ほっぺをひよつとこのように伸ばし、激しく頭をピストン。君の耳  
を犯す様に、彼女の口から淫靡な水音が聞こえてきた。

相変わらずフェラが上手いなと、君の口から感想が漏れた。それを聞いたのだろう、一度君の肉刀からリリコは口を離す。

「ん、ぐ。じゅっぽ♥ ほら、私前の任務で捕まった時にね」

口から出した君の肉キノコをほっぺたですりすりしながら、リリコはどこか申し訳なさそうに話した。

君が救出した時の事だろう。君が見たのは注射されていたところだけだったが、他の人物を見るにそれだけ、という事はない。

君はそんなこと一切気にしない。それどころか、そういうのを征服することに昂るタイプだ。君はリリコの頭をなでながら言い聞かせる。

「っふふ。なにそれ、ふうまはほんとエッチなんだから♥」

リリコが可笑しなことを聞いたと言う風に笑う。とろんとした目で君を見上げたままだ。

そのままフェラを続行するのかと君は考えた。だが、じつと君の肉槍を見つめるリリコが、

「ねえ、ちよつとやってみたいことあるんだ」

と一つの提案をする。今回君は彼女の言う通りに体を動かした。

一度立ち上がり体を半回転。君は体倒して、ベットに手を付けた。

お尻を向けられたリリコは、目の前にある君のお尻を開いた。

「ふうまのアナル。よく見えるよ。っふふ」

君のお尻の窄まりに息を吹きかけてきた。そのまま、

「っちゅっちゅ♥ れええ♥ れろれつろお♥」

キスと共に舌で舐めてきた。それだけでは無い。

「れえ♥ ふうまのデカチンはこっち」

ゆらゆら放り出された君の肉棒に、リリコが手を伸ばした。握られた肉筒は彼女の美白の巨乳に挟まれる。

「っん♥ ちゅ、ちゅう♥ んれえ♥ べつろ♥ れろれろ♥ ん」

娼婦に頼んでも拒否されるであろう行為。それを君は同級生からしてもらっているという事に、ぞくぞくした悦楽が君の背筋に走った。

「れりゆれりゆ♥ んっちゅ♥ どう、ふうま♥ 気持ちいい?♥」  
リリコの甘い声での質問に、君はちゃんと気持ちいい事を伝えた。  
君には見えないが、その返答に嬉しそうに微笑んでいる。

「本当?♥ だったらもっとなやめてあげる♥ つべっえ♥ じゅりゆ、れっええ♥」

舐められたかと思うと君の背後の穴に生暖かい粘膜が突き刺さる。  
君のお尻の穴をリリコの舌が突き刺さっているのだ。

肉弾頭をナマ乳で愛撫され、お尻の穴からくる刺激的な快感に君は  
喉から快樂の呻き声を漏らした。

肉竿から熱いものがせりあがるのを感じた。

「れりゆ、れる♥ つんべえ♥ いいよ、ふうま♥ だして♥ 私のア  
ナル舐めパイズリで出しちゃえ♥ じゅっりゆりゅう♥」

甘い媚びた声が君の脳内を溶かす。お尻に突き刺さる舌も動きが  
激しい。胸で肉柱を激しく扱かれていた。

お尻の穴を強烈に舐めしやぶれられ、ゴム越しにも感じる暖かな胸  
に扱かれる感触。二つの強烈な刺激に君の我慢は限界に達した。

「れっりゆ、れりゆ♥ つぶっあ、出てる♥ コンドームが私のおっぱ  
いで膨らんでる♥」

つけられたゴムの中に君は吐精していく。ゴムは破れんばかりに  
君は射精し続けた。

「ふうまの射精すっご♥ コンドームが破れちゃいそうじゃん♥ ほ  
らほらもっとなやめて♥」

射精中も最後まで出させようと、彼女は胸で君の肉剣をマッサージ  
し続けた。

やらかい肉桃に扱かれながら最後まで吐き出すと、リリコが肉刀か  
らコンドームを外す。君は彼女の表情を見ようと体を元の形に戻し  
た。

「っはあ♥ すっご♥ こんなに出して、気持ちよかったんだ♥」

振り返った君の目に、精液で膨れたコンドームを見つめるリリコの  
姿が映る。

そのコンドームをじっと見つめたかと思うと、リリコは口を開け

た。

「あつむ、カプっ♥　っず、ずぞぞぞぞ♥」

コンドームに穴を開けて、中の精液を吸い出していた。

「ずずっ♥　……っ♥」

その行為を見てた君に、リリコが濡れた視線で挑発的に見やる。

こいつ。どうやら彼女は今夜は寝かせて欲しくないようだった。

君は期待に応えることにする。君を見上げるリリコを立たせて、ベットに寝かせた。即座に臨戦態勢の肉杭に新しいコンドームをつける。

その行為を見ていた彼女は、足を開いて毛も生えていないピンク色の膣口に指を乗せV字に開いた。既にそこは透明な愛液でぬらぬらと淫靡に光っている。

「ふうまのデカチンを、リリコのビッチマンコをガッツリハメ倒して♥」

リリコのどこまでも君に媚びた発言。君は心の奥底から欲望が燃え盛る。その欲求通りに、肉棒を目の前の雌穴に叩き込んだ。

「んっんんん……きつつ、ったあ♥　ふうまのおっつ、デカチンがっ、お奥までくっ♥」

ガッツリと奥まで君の熱い塊が侵略した。亀頭に柔らかい口が当たっているのを君は感じた。

フルフルと震えているリリコを無視。彼女の細い腰を君は掴んで固定した。

固定した腰に向かって君は腰を激しく前後に動かす。

「んおっ!?!♥　ふうまのす、あ…ッ!?!♥　っごいけど、おっ♥　私も負けないよ♥　んっッ!♥」

彼女の発言と共に、ギュッと彼女の膣内が締め付けてきた。肉筒全体を扱き上げてくる快感に、思わず君は呻くような声を上げた。

「あゝあゝアッ♥　どう、ふうま♥　んゝあゝ♥　気持ちいい?♥」

リリコの疑問に君は腰を動かしつつ頷く。動くたびにミチミチうねうねとチンポに絡みつく肉の襞による肉槍の刺激で、君は一瞬爆発しそうなほどだった。

それを見た彼女は本当に嬉しそうに微笑んだ。

「あゝふっ♥ そマ?♥ ……あゝ、は…ツ♥ やったつあ♥」

そのまま彼女は媚びた笑顔を浮かべて、話し続ける。艶声と共に君の耳でささやかれる声が、君の脳内を甘く溶かそうとしてきた。

「あゝいゝ、いッ!♥ 全部使ってっ、ああゝ…‥‥っげるね♥ え、うあゝ、っ♥ 覚えさせられた性技をおっお!♥ お、お、ッうゝ、う…♥ 全部、ふうまのためにいいゝ♥ いひっ、は、あうゝ、っ♥ 使つてあげるからあ♥」

彼女の牡欲を煽る発言に君の脳内が熱くなる。本当は嫌な思い出しかない技術であろうものを、君が喜ぶからと言って使うのだ。これ程君を滾らせるものはなかった。

君は返答代わりに、腰をさらに力一杯動かす。

「あはアンゝんツ、好きいい♥ ひいゝ!?!♥ ふうまのデカチンがあゝ、あゝっ♥ あゝあゝ、うゝっ♥♥ 一番好きいいゝ♥」

君の腰とリリコの恥骨がぶつかり合う。パンパンと肉のぶつかり合う音が君の耳に聞こえた。

「も、おゝ、っ♥ も、やっぱっ♥ いんおゝ、!?!♥ ひッ、イゝグッ、からっあ♥ ふうまの出してっ…‥‥ッ♥」

呻くような喘ぎ声と共にリリコは両手ですがるように抱き着きながら、膣内をぎゅうぎゅう収縮させてきた。その刺激より限界だった君も彼女の願い通りに、牡欲のタガを外した。

「イグッ、んゝおおゝおゝおゝっ!♥ お、おゝぐ…ッうゝう…♥ 膨らんでえっるゝ♥」

彼女の中で、君の射精を受け止めるコンドームがどんどん膨れいてく。

「おゝッおゝッ、おゝおゝゝゝッ!♥ な、ながでえゝえゝ!♥ 膨らんでっぎだあああゝあゝあゝっ!♥ まだイゝぐううううゝうゝうゝっ!♥」

枕に後頭部を押し付けながらリリコのシミひとつ無い真っ白な体が小刻みに痙攣し続けていた。

射精が終わると、君は肉根とゴムを引っ張り出した。だらりと抱き

着いてきた腕や足の力が抜けて離れていく。

「は〜っ♥ は〜っ♥ つふう♥ ふっ♥」

絶頂後の息を整えるリリコを尻目に、君はちょうど近くにあった大きな紐を掴む。その紐に膨らんだコンドームを、縛りつけた。

「ふうま、何してるの?」

まだベツトに横たわる彼女は、君の行為に疑問の声を上げた。その答えを君は行動で示す。コンドームが括り付けられた紐をリリコの腰に回し結んだ。

一つだけ紐につけられた精液でふくらみコンドーム。

君はまだあるコンドーム束を取り出して宣言する。全部括り付けてやる。

それを聞いた彼女は一度君のまだ勃起している肉塔に視線を向けた。

「……っ♥」

無言で淫靡な笑みを浮かべると、自身の膣口を君に捧げるように開いた。無論君は行為を続けるため、コンドームを取り出すのだ。

「お♥お♥ツ!?♥ まっだ、イグツ♥ っ♥ っ♥ っ♥ っ♥ おお♥ おお♥ ツツ!!♥」

上に乗るリリコ目掛けて。君はコンドームに再度射精する。

彼女に腰につけた紐は膨らんだコンドームに溢れ、まるで腰蓑のようになつていた。腰の紐だけでは足りなかった。彼女の白く細い腕にも、幾つものコンドーム付きの紐が括り付けられている。

「あ〜っ♥ は〜っ♥ は〜っ♥ お♥お♥」

痙攣が遅まるとリリコは腰を上げて、君の肉棒を取り出した。

「すっ♥♥ まだ膨らんでるし〜♥」

膨らんだコンドームを肉竿から取り出し、まだ空きのある腕の紐にくくり付けた。

既に何十個もの膨らんだコンドームが、彼女の体に括り付けられ淫猥なアクセサリーになっていた。



「っは、はあ~~~~っ♡」

一度息をついたリリコはベットに置いてあるスポーツドリンクに手を伸ばす。

彼女はそれを飲みこむ。飲みながら下にいる君を見つめた。

君はそういえば喉が渴いたと思い、リリコが飲んでいるスポーツドリンクに目を向けた。

それに気づいたのか。リリコはスポーツドリンクで頬を膨らませる。そのまま口を離して君に顔を近づけていく。

「ん~~~~っ♡ んっく、んっく」

君に口移しで口内の水分を分け与えて来た。君はそれを受け取り、ゆっくりと飲み干していく。

「んんんっ…ちゅっちゅ♡ んちゅうう…んうっ♡ ちゅむう♡」

勿論、口移しだけで終わらず、君たちは深いキスを交わす。

「んんんっ…くちゅ♡ ちゅぶ…ちゅく♡ ちゅるる……はあんん、またおつきくなった♡」

リリコはまた勃起し出した君の肉剣を嬉しそうに掴んだ。彼女の細く雪のような指が、君の肉刀にまわりつき刺激する。

そのまま、最後のコンドームの箱に手を伸ばす。

「あ、あれ？ なくなっちゃった」

買いまくったコンドームも先程のものが最後の一個だったようだ。

これで終わり、な訳が無い。リリコも君の肉杭に熱い視線を向けている。

「っふっふ…っ♡」

霞かかったヒスイ色の瞳が、君の肉槍に熱視線を向けている。

無言で彼女は腰を上げると、君の肉筒を咥えようとする。

その腰を君は下から持ち上げて止めた。

「な、なんで？ ふうま、止めないでっ♡」

グイグイっ君に押し付けるように、リリコが泣きそうな表情で腰を下ろそうとする。君はそれを止めて口を開く。

リリコができる限り媚びてくれれば入れると宣告した。

それを聞いたリリコは、君を見つめて表情を笑みに変えた。両腕を



「やった、ふうまに初めてあげられたんだ♥」

ほんの少しだけ、リリコの目の端からキラキラ光る液体が溢れた。それは快樂ゆえか喜びゆえかは、彼女にしかわからないだろう。

とはいえ、入れっぱなしなだけでは君も満足できない。君は射精へ向かうため、下から突き上げ始める。

「ん♥ほお♥!?!♥やば♥いい♥いい♥これっ、ぜつたいやつばっ!♥ひう♥うう♥うツ♥は、あう♥っおっ!♥」

リリコの意味を為してない言葉が部屋中に響き渡る。口から唾液が流れ出し、君の胸を汚していた。

「お♥ッお♥ッ、お♥おっ!?!♥もっ、むっ、ごわれる♥あ♥、んお♥♥もう♥、イキっぱなしで戻れないいい♥いい♥いい♥!♥

お♥、ツあ……—ツ♥」

彼女の言う通り、君の肉剣が激しい収縮で膣内で扱かれている。君の肉弾頭を押し上げるように、牡欲がせりあがっているのを感じていた。

突然がくりと君にリリコの体が倒れてくる。ぱしやりと水音と肉のぶつかり合う音が混じった音が君の耳に聞こえた。

「〜ツ♥〜ツツ♥あ♥っお♥っ!♥い、今絶対飛んでたあ!♥ん、お♥っつお♥!?!♥ご、ごえ、まっだとんじやう♥お♥ひッ!?!♥ぜつたいっつとっつぶ!♥っいは、……………ツ♥!?!♥」

意識は既に飛び飛びなのだろう。子宮を突くたびに、彼女の翡翠色の瞳が白目をむいていた。そのたびに君は、再び肉塔を叩き込みこちら側へとやり戻している。

「〜っつか、は……あツ♥もっつあお♥っ♥ふうまももういつでええ♥え♥〜っ♥いっばいザー汁、注いで……あツ♥」

君の胸の上から顔を覗き込むように、陶酔した瞳でリリコは見つめていた。子宮口を膣内も搾り出すように、君の肉筒をぐにぐにと締め付けていた。

彼女の願い通り、君は子宮に直接精液をぶちまけた。

「おほお♥お♥おおお!♥出てる!♥うっん♥ッお♥おお!♥ふうまのがでてっ!♥イ♥グツ、ツイイギツツイイイ!!♥」

リリコの子宮に君の精液が注ぎ込まれる。子宮口が君の肉棒を啜え込んでいる為、精液の逃げ場が無い。

「んぶうっ!♥ おおお腹がっ孕んだみたいについて♥ ふくらんじや、おっっ!?♥ んんんッ!♥ まだぐるッんおッッぎつつだっああッあッあッあッ!♥」

逃げ場の無くなった精液が、リリコの子宮を膨らませていく。それすらも快樂なのだろう。リリコの体がかくかく震えているのが、密着した君の体に伝わっていた。

「ふんぎいいいいッ!♥ あッあッうッっ♥ いぐのとまんないッいいッいいッ!♥ ついつうっおッおッッッ♥」

とうとうリリコの意識が飛んだのか。意味をなさない叫び声が彼女の口から迸る。

ちょうど君も精液の放出が終わる。

「~~~~ッ♥ つあ~~~~ッ♥ お~~~~ッ♥」

白目を向いたまま、リリコの口から途切れながらも呼吸音が聞こえた。

最後まで君の全力に耐えた事を褒めるように、君は彼女の頭へと動かし撫でた。

「~~~~エ♥ エへへッ♥」

それを感じ取ったのか、リリコの表情が媚びるような笑みへと綻んだ。

君は宣言通り、彼女を一日中寝かせることなく貪りつくすのだった。

## 結城炎美と星乃深月

五車学園の廊下を君は一人で歩いていた。普段連んでいる蛇子や鹿之助はいない。まだ学園に用事がある君は、二人を先に帰していた。

特務中隊や独立遊撃部隊の報告書が、まだ少しだが残っていた。すぐに期限が来ると言うわけでは無い。用事が発生しやすい君は暇なうちに終わらせようと思い、自身の仕事部屋に向かっていた。

目的地に向かって廊下を歩いていると、君の目に一人の少女の後姿が目映った。

遠くからでも分かるホワイトプラチナヘアを短髪に整えている少女。結城炎美が君の前を歩いている。君は足早に近づいて声をかける。

「ふうまか」

普段と変わらない勝気な口調だが、纏う雰囲気が変わった。君を見た瞬間、柔らかな空気を身に纏う。

君は、放課後に一人でどうしたのかと聞いた。

「ああ、先生に書類を運ぶの手伝わされてな。今帰るところなんだ」  
君と炎美は共に廊下を歩いていく。

君は一度周りを見渡す。遠目に少女を確認。だが、あの先輩なら大丈夫。そう判断した君は、隣にいる眼鏡姿の少女へ片腕を体回して抱き締めた。

「つく。こ、こら、ふうま」

叱るような台詞だが、声色は甘えるように媚びている。眼鏡の奥の鋭かった目も、目尻が垂れていた。

ぐっと力を込めればたちまちの内に、炎美から抑えた喘ぎ声が聞こえ始めた。

「あっ……ひうつ ♡ 駄目だ、ひんっ ♡ 誰かに見られてしまう♡」

炎美の懸念はもつともだ。実際にある少女に見られている。

「ふ・う・ま・君」

炎美を抱きしめる君に、背中から抱きついて来たものがいた。む

にゆりと背中に柔らかかなものが当たる感触が伝わる。君の腕の中にある眼鏡をかけた少女が、びくりと体を震わせた。

「また、女の子を調教してく。いけない人」

「星乃先輩、違うんです。これは」

炎美が慌てた様に話し始める。君の腕の中から離れようとするが、君は更に力を入れた。

「つぐつあ、駄目だ、ふうま ♡ ひい……っ！ ♡ あ、っ、みられている」

「わあ。それ、気持ちいいんですか？」

苦しみながら明らかに快楽を感じている炎美。それを見ていた深月が、羨ましいと言いた気な声を出した。

それに対して答える様に君は、肩に頭を乗せる深月に対して舌を出せと命令する。

「……っ。んべええ ♡」

君に言われた通り、口から舌を突き出した。後ろから抱きつく彼女の方へと視線を向ければ、黒髪の美少女が力一杯舌を出しているのが見えた。その舌には淫靡に描かれた紋がピンク色に光っていた。以前の調教時に、君がつけた物だった。

舌に描かれた紋に、フリーな方の片手を伸ばして掴む。君の背中から深月がビクビクと震え出すのが感じる。

「あ、っん ♡ ひた、ひゆかまれ、ついひやいまひた ♡ はひっ ♡ ひもひいひい ♡」

「んんッ ♡ 星乃先輩もっお ♡ ♡ ふうまの ♡」

圧迫されながら、炎美は深月の感じる声を聞き入る。君に聞こえる様に一言呟いた。

炎美に見せようと君は、器用に腕の中にいる彼女を半回転。深月と炎美が君を挟んで向かい合わせになった。

「星乃先輩すごい ♡」

「っへ、おおっ ♡ 結城ひゃんっつお ♡ ♡ みにやいでくだヒヤ  
いいい ♡ つい ♡ ♡」

舌をグリグリいじられて、深月が感じている様子を炎美は真っ正面

から見ていた。炎美は羨ましいそうに呟いた。彼女もちやんと感じさせるために、君は再度片腕で抱きしめる。君の胸板で炎美の美乳が潰れていく。

「ん、う、!?」　っは、っふうまにっひっひ　あ、あう、っ　強  
く抱きしめられて　あっ……あああっ　」

「ひあう、う、ッ!」　結城ひやんもお、お、ッ　ッお　　んんッ  
　　ひもひいいんれすね　　っえあ　　」

互いが君を挟んで向かい合わせになっている。お互いの感じる様子に、彼女たちは明らかな昂りを感じていた。

「ん、ぐう……っ　　あ、んぎ、い、ぐ　　っああ、くくっ　　」  
「っひあう、う、う、!?　わたひもひぐうッ、あ、っ　　っひう、う  
　　っ　　」

炎美と深月がほぼ同時に痙攣した。軽い震えが二人に挟ませた君に伝わる。ぶしゃつと廊下に水飛沫が降りかかった。

「う、ッう　　あッうう、くくっ　　」  
「あ、くくっ　　あ、くく　　」

甘イキを感じて息を整える二人の間から君は逃れる。二人の欲情した顔が君を捉えてはなさい。明らかまだイキ足りていない。

近くに君のヤリ部屋があるのでそこに連れ込もうとしたその時。

「ふうま小太郎君、至急校長室に来てください」

アサギ校長に君は呼ばれてしまった。

二人を見てみるととても残念そうな表情。まるで目の前のご馳走を今下げられたかの様だった。

だが、おそらく任務の呼び出し。しかも可及的速やかに、というものだろう。

君は仕方なく、後で必ず補填すると二人に約束した。

「約束ですよ」

「破ったら酷いぞ」

二人は君の説得に頷いた。ほっとため息をついた君は、すぐに校長室へ歩き始めるのだった。

井河アサギと打ち合わせた君は、山本長官が手配した高級車に乗り、目的地へと向かっている。田舎に無い都内の喧騒を君は車の中から楽しんでいた。

「ふうま君、そろそろ説明してくれませんか？」

「そうだ。この格好についても聞きたい事がある」

声をした方向へと君は向き直った。そこにはやたらと扇情的なメイド服を来て、顔を隠す仮面をつけた深月と炎美が座っていた。胸を強調する布みたいな服と超ミニスカートだけを着ていて、首元には皮で出来た頑丈そうな首輪がつけてある。首輪には鎖がつけてあり、それは君の手元まで伸びている。

勿論、彼女達の格好にも意味がある。君は彼女達に今回の任務について話していく。

今回君達はとある秘密クラブに潜入しなければならない。その秘密クラブは、違法な魔界製の媚薬を使ったパーティーをしているらしい。有名人も参加しているらしく検挙しようとする度に、全て逃げられ失敗している。今回は警察の威信をかけて、全ての参加者を捕まえたいとの事。その為対魔忍の力を使い、全員逃げられない状況にしてもらいたいと言うのが依頼内容である。

そのまま君は作戦を説明する。炎美の房術を深月の風遁でパーティー会場にばらまいて、全員を昏睡状態にさせる。これだけだ。

内容を聞いた二人の顔が赤く染まった。炎美の房術の話は深月にすでにしてある。その為彼女達は君の言外の内容を理解していた。つまるところ君たちもパーティーに参加して、炎美と深月を黒い霧で強化して参加者達を昏睡状態にさせると言う内容なのだ。パーティーに参加すると言うことは、君達も見られながら性行為を行うと言うこと。

顔を紅潮させた二人が何か言おうと口を開く。

何か言おうとする前に君は台詞を畳み掛ける。

仮面には認識を阻害する効果があり、誰にもばれない。嫌かもしれないけど、これも任務のためなんだ。仕方のないことなんだ、と……。



「う、うう」

「そうですね。わかりました」

悩む炎美に対して深月は割り切った様子で答えた。割とこう言う時の判断は早い。

まだ悩んでいる少女の方へ君は殺し文句をかける。

炎美が必要なんだ、頼むよ。

「う、む。お前がそこまで言うなら」

彼女の承認欲求を刺激した君の手腕通り。炎美はどこか嬉しそうに頷いた。

「ふうま君。私はどうなんですか？」

勿論深月の風遁も必要不可欠だと君は返す。深月も満足そうに笑みを浮かべた。

彼女達をその気にさせた君は、そのまま懐から3つほどのカプセルを取り出した。

深月と炎美に渡しつつ君は、使われているだろう魔界製の媚薬の解毒剤だと渡す。

参加者全員を昏睡状態にさせた後、君達はパーティーから逃げなくてはならない。

君達がトリップしない為にも必要なものだった。

二人は君の指示通りカプセルを飲み込んだ。ふと車の外を見れば、既に何処かの地下に入っている様だ。コンクリートの色をした壁が目に見え。そろそろ着くだろうと思いい、君も仮面を被った。これ以降君のことをご主人様と言う様にと依頼する。

「わかりました、ご主人様」

「わかった、ご主人様」

二人の美少女から言われる発言に、胸がときめくのを君は感じた。ついでにお互いの名前を言わない様に、気をつけてほしいと伝えた。

車は壁に埋め込まれたドアの前で停車。目的地にたどり着いた様だ。君はアサギ校長から手渡された鍵を使い、中へと入っていく。先は広い廊下。歩いていくと、突き当たりにまた扉。但し扉の前には護衛の様に、オークが2体立っていた。彼等は少々だらけている。こう

言う時にオークはうまく使えない。不真面目で性欲旺盛な彼等は、パーティーが進めば中に入ってくるだろう。そのまま炎美の餌食になることは明白だった。

扉の前に行けばオークが道を塞いだ。好色そうな視線が深月と炎美に流れている。

「パーティーに参加しに来た」

君は立ち塞がるオークに見えるように、任務依頼時に渡されたカードを見せる。

オークはそれをゆつくりと観察する。数分もしない内に満足そうに頷く。ドアを開けて、

「どうぞ」

君達を招き入れた。君達は目的のパーティー会場へと足を進めた。

「おらっ、これが好きなんだろう！」

「あぁ〜！すごい！チンポすごい！」

会場に入れば早速嬌声が君達の耳を打つ。秘密パーティーの名の通り、半丸型のステージを包むように幾つものボックス席が立ち並んでいた。一階をかなり広く作っている。

ステージでは、仮面をつけた女性が何人もの男性に嬲られている。

部屋に入ると同時に、君達の鼻へ甘い香りが漂った。解毒剤を飲んでいて良かったと思う。

君達を迎え入れるように、胸が丸出しのフレンチメイド服を着た金髪の美女が近づいてきた。

「こちらへどうぞ」

言葉少なく、君達を迎え入れていく。女性に案内され君達は、空いているボックス席に座った。席に座った君を挟むように、深月と炎美が座り頭を肩に乗せる。

「今回の演目は奴隷の品評会となります。スワッピングと公開調教どちらになさいますか？」

君は当たり前のように公開調教を頼むといい、女性の胸にチップ代わりのお金を入れる。

「ドリンクは何になされますか？」

君は3人分のシャンパンを頼んだ。

胸に入れたお札をそのままに、女性は一度頭を下げて去っていった。

「ご主人様。手慣れてますね」

深月の小声が君の耳にあたる。君もこつそりと呟く様に、こう言うときは臆さないのがコツなんだと答えた。

待つ間に君は周りを見渡す。ステージだけでなく、すでにボックス席でも軽い嬌声が聞こえている。ステージでは先ほどの女性は去り、今度は仮面をつけた男性を貪るように複数の女性が股がつて腰を振っていた。性に対する解放感や感度の上昇等が、このホールに漂う魔界製の媚薬の効果なのだろう。

少し待つと、シャンパングラスとシャンパンの瓶を持た先ほどの美女が戻ってきた。そのままテーブルに乗せて去っていく。

シャンパンをグラスに注ぐと、深月が動くようにした。

「いやあ、美しい奴隷達ですな」

別のボックス席から君達に話しかけてきたものがいた。頭がハゲ上がった小太りでキラキラしている仮面を着けた男性が、背後に五人もの女性を連れて君たちに近寄ってくる。

グイグイと無理矢理引つ張られているのに、彼女達から漏れるのは甘い艶声だった。

性欲旺盛なのだろう。君の両隣にいる炎美と深月を、好色な視線で舐めまわしていた。

彼女達両名がびくりと不快そうに震えた。

君は男に視線を向けて何かと質問。

「何ね。私の奴隷達」

話しながら女性達的首輪を、グイグイと無造作に引つ張っている。「に勝るとも劣らない牝を久しぶりに見たのでね。よければ同時に品評会などでも」

ニタニタと好色な笑みを浮かべた男の提案。簡単に言えば、スワツピングの誘いだらう。

深月と炎美が、こつそりと君も手の甲に触れて、すがる様に握って

いる。

君は答え代わりに、鎖を手から離し両隣にいる二人の方に手を回して抱き寄せた。

勿論君は首を横に振った。既に公開調教の予約をしたので、その時に見て楽しんでほしいと答える。

「そうですか」

いささか残念そうに呟き男は元のボックス席へ去っていく。未練があるのか、やたらと君の両隣の女性を見返していた。

君はそのまま、深月と炎美の方に手を回しておく。彼女達はそれに答える様に、君の肩にすりすり頭を擦る。

この後君達はステージで皆に見られながら、性行為を行う。それに耐える為にも、気分を高めなくてはならないだろう。

君は手を動かし、服の隙間に入れて二人の胸を掴んだ。

「っん」

「あっん」

緊張気味の炎美は耐える様に、どこか楽しんでいる深月はしっかりと喘ぎ声を上げた。

君は掌から伝わる二人の胸の感触を楽しんでいる。炎美のいくらか揉んでも形がすぐに整う反発力。深月のさらさらとしたきめ細やかな感触。彼女達のナマ乳の違いを味わっていた。

周りにも君の両隣にいる美少女達の艶声が聞こえた様である。他のボックス席から視線が突き刺さり出した。

「ん、んんっ♥ まった、ご主人様。あんっ、ふあっ！♥ こんな所で」

「あんっ、ああっ♥ もう、ご主人様♥ あううっ……♥ ステージまで待てないんですか？♥」

深月は視線を楽しむ余裕がある様で、君を挑発する様に窘めた。炎美の方はまだそこまで余裕はない様だ。胸を揉む君の手を止めようと、腕を掴む。

深月は良いが炎美はまだ硬い。この後の事を思えば、彼女の羞恥心を薄めた方が良さそうだ。君はそう判断し、ホワイトプラチナヘアの少女に顔を近づけた。

「んんっ、んうっ……おあ♥ ご主人様、ちゅう……ぬちゅっ♥ んふう……んんっ、待ってくれ♥」

「う、ツく、あっあっ♥ あ、いいなあ♥ ひうっ! ああ♥」

炎美にデイクスをし、呼吸を薄めて正常な判断をしにくくする。頭の後ろから深月の羨ましげな声が君の耳を打つ。

「ぬちゅっ、ちゅむう……っは♥ ご主人様、急に何を ツ、ああーっ♥」

一度口を離すと、息が荒く涙がマスクの向こうの瞳から流れている炎美に向かつて小声で呟く。二人の胸を触る手の動きは、休めず動かし続ける。

これも任務の為なんだ、頼むよ。

「あっ、ああっ♥ う、わかった。あ、あんっ……あ、あふあっ♥」

コクリと彼女は恥ずかしげに頷いた。君は言う事を聞いてくれたお礼に胸をギュツと掴んだ。

「ひい……っ♥ ひゃあうっ♥ んああ、んっ! ♥ん」

「あひいつ、んん♥ ご主人様っあ、ああんっあ♥ 私もキスしてください、っいつひ♥」

高い声を上げて反応する炎美。

横にいた深月が君の肩に頭を擦り付けながら、おねだりする様にささやく。

顔を彼女の方へ向けて、君は舌を伸ばす様に命令する。

「は〜い。んえええ♥」

君に言われた通りに、口を開いて舌を伸ばした。舌の上に君が付けた淫紋がいやらしく光っている。

それを君はしゃぶる様に口をつけた。

「んふあ……んうっ♥ あはアンッ♥ んうっ……おあ♥♥」

「んああ♥ すごい。ふああ、んっ♥ いやらしい♥」

ビクンと深月の体が大きく跳ねた。とろんと溶けた瞳が君を見つめている。今度は炎美から羨まし気な声が聞こえた。

「ひあゝおゝッ!?♥ まっへっえええっああ♥ ごひゅひんはま♥」

「ああっ、あゝっ ♥ おまえもっ、あ……んん ♥ きもちよくしてやる♥」

君は深月の淫紋付きの舌をしゃぶっている。その間に炎美が自身の体を斜めに倒した。そのまま手慣れた手つきでズボンとパンツから君の熱い塊を取り出す。すぐに君は黒い霧を肉杭にも纏わせた。炎美の胸は、そのまま揉んでおく。

「はあ……、はあ ♥ 相変わらずっ、大きいな ♥ あんうツ ♥ あゝむ、んちゅっ ♥」

「あうゝっひ、ひやめええ ♥ ひたでひっひやうう、うゝ ♥ はひっ ♥ ひっぐゝゝゝっ ♥」

肉棒に触れた舌粘膜の刺激に、君はつい深月の舌を甘噛み。座っていたボックス席のソファアが、彼女のはしたない潮吹きで水溜まりを作り出していた。

痙攣しながら甘イキした深月の舌から君は離れる。

「ご主人様 ♥ 私にも奉仕させてください」

快樂の涙で濡れた瞳で、君を見つめる深月の言葉に頷く。

彼女は君を促して立たせる。

ソファアに横たわる炎美の前に君が立ち、その後ろに深月が座ると言う形になっている。炎美は君の肉棒をフェラしたまま、横になっている。

立っている君に、周りのボックス席からの視線が飛んできていた。ステージ上の人達も、君達に当てられてかなり激しく交わっている。炎美の房術が効き出している様だ。

「んぷはあ……はむう、ちゅっ ♥ んっ、んっ、んっ ♥ じゅぼっ、じゅくう ♥」

「お尻舐めてあげますね。べええ」

炎美のフェラチオに当てられたのか、深月が君のお尻を開き窄まりに舌をつけた。お尻の窄まりからぞくりした刺激が、君の背筋を走る。

思わず君の腰が動き、前でフェラチオしている炎美の喉をついた。「んっ、んんっ！ ♥ けふっ ♥ ノドついていいぞ。私で気持ち良

くなつてくれ。んぐ、んぐう、んぐぐつぐ」

「ちゅぷ、れろれろ♥ 激しいフェラですね。私も頑張らないと。べええ、ペろっ♥」

君の肉剣をすっぽりと飲み込む、炎美のディープスロート。君の為にと娼婦でも断られるアナル舐めを、嬉々として行かう深月。二人の奉仕に君の限界が段々と近づいていく。

耐える為に君は、目の前で横になっている炎美のスカートへ手を伸ばす。触れてみれば、既にパンツはグチョグチョに濡れていた。

そのまま彼女の膣口へと黒い霧を纏わせた君の指を挿入し、上半身の服の中に再度手を入れて胸を揉んだ。

「んんん、んぷっ!♥ 両方同時は、だめだ♥ すぐにいつてしまおうっ♥ んぐううう♥」

君から与えられる快楽から逃れようとしているのか、再度炎美の激しいディープスロート。君の陰毛が顔や口にあたるのを躊躇わずに、頭を激しく振り腰に手を回した。

「れろ、んれろ♥ すごい。私も頑張らないといけませんね! ペろペろっべっええ♥」

君のお尻にある窄まりを、深月の舌が挿入していった。ゾクゾクする快感に君は、アナルに力を入れてキュッとしめた。

目の前も炎美もいさせる為に、胸を激しく揉み膣内の指をバラバラに動かす。

「ぐぼおっ!♥ はめだっ、んっぐぐ♥ つびぐんぶっ、んっ!♥ ひっぐ、んぐううううう♥」

「んちゅ、じゅっじゅぶ♥ ひた、ひめられてまはひっちやひます♥ んっぶっうっおおおお♥お♥」

彼女達の絶頂に合わせ君も射精した。

「んぐ、んぐ!♥ んんぶぶっう♥ せひえひのほに、ぶふっふっだひやれてひくっ、うっおぼぼおお♥お♥」

「っふっぐう、んっああ♥ ひっぐうう♥ おひりのあなで、れっぶっあ♥ ひたひめられてひっちやうひますっうおおおおっ♥」

目の前の炎美が、激しく震えている。目を白目にして、口の端から

君の白濁液を漏らしていた。

お尻からの刺激で、深月が震えているのがわかった。舌が君のお尻の穴の中でプルプル震えている。

「んぐっ、んぐううう、んんん、えぶっ ♥ お前の出した精液、ぜんぶ飲んだぞ ♥ あくくくっ ♥」

「んっべえええっ ♥ つふっあ ♥ お尻舐めていってしまいました ♥ はっあ、ん ♥」

君に見せる様に、炎美が口を大きく開く。背後から深月の呆然とした声が聞こえた。

周りを見渡せば、君たちの熱に当てられた客や定員がおっ始めている。周りから激しい艶声が響いていた。

さらに加速させる為、フェロモンの発生源である炎美に先に挿入することにした。君は炎美をうまく抱き抱えて半回転。

「っわっふっご、ご主人様、いきなり何をするんだ？」

突然抱き抱えられて、安全のため君の首に手を回して入る炎美。急な出来事に、一瞬約束を忘れていた。

所謂駅弁と言われる対位になった君は、そのまま炎美に黒い気を纏わせた肉筒を挿入。すでに濡れていた膣内に、たやすく侵入していく。

「っひっぎい ♥ こっれっえ ♥ ふかいいい ♥」

普段君達はしない体位な為、炎美の戸惑った様な声が君には聞こえた。亀頭にぐっぢゅっつと子宮の入り口が当たる。

「今度はこっちのお尻を舐めればいいんですか？ れええっえ、っちゅ ♥」

「っえっひい ♥ あ、だめです。そっちはきたな……ひいつひ ♥」

君からは見えないが、おそらく深月が炎美のお尻の穴を舐め出したのだろう。炎美が戸惑った様な声を上げた。同時にぎゅううっつと膣内が君の肉竿を締め上げてきた。

深月を手伝う様に君は炎美を動かさず、君だけが腰を動かしている。

「あひっ、あひっひ！ ♥ ふっ、ご主人様、だめ、今はだめだ！ ♥ ほ



ひッ♥ 変な感じなんだっあひい♥」

「れるれる、じゅぶ♥ んっぺええ♥ もう大丈夫かな?」

ガチャリと不穏な音が聞こえた。炎美越しに見てみれば、ボックス席のテーブルから引き出しが開いていた。深月は大人の道具が沢山入ったそこから、細めのアナルパールを取り出し出している。ペロペロとそれを唾液まみれにした彼女は炎美のお尻に向けていた。

「力抜いてくださいね〜♥」

「っひ、な、だめです。そんなところ入れないでください あっ……ぐううっ♥」

拒否の声も虚しく響いた。深月が棒を炎美のお尻の窄まりへ、挿入して行くのが君には見えた。彼女はどこか楽しそうにしている。

「おお、ッあ♥ やっだ、ツ〜〜あッあ♥ はいってきた♥ お

ッお♥ おっ!♥」

パクパクと口を開け閉めして、炎美は初めてのお尻の異物感になんとか耐えている。重い悲鳴が彼女の口元から飛び出していく。

目の前の彼女は君の肉棒が、すでに挿入中なのを忘れている様だ。思い出させてあげよう。

君は先と同じ様に彼女を動かす事なく、腰を激しく動かして行く。

「ほお、お、オッ!?!♥ まって、まってくれっえ、あ、あ♥ りようほうがあっお♥ なかどうごいてっえ、っお♥」

「わっあ、すごい綺麗な顔してますね♥」

いつの間にか立ち上がった深月が、炎美の顔を覗き込んだ。陶醉した瞳が、炎美の同色の黄色い目と合っていた。

「確かこう言うの好きなんですよね♥ っん♥」

「お、お、ッ、〜ッ♥ お、しつぶされて♥ ふっ、うああ、っ♥ っぐぐるしいい♥ きもちいいぐ、〜ッ♥」

深月が自身の体で炎美の体を君と共に挟み込んだ。そのままぎゅうぎゅう押し込んでくる。炎美の美乳が君の胸でつぶされていた。乳首がこりこりと当たっている。

「もうだめだっああっお♥ おしりもお、お♥ くるしいのもつつお、っお♥ きもちよくてっええ、え♥ わけがわからないッ、

はアっつあうっうッ！」

「あっあん♥ これちくびすれちやいます♥ ああ……んんンっ♥」

がりと君の背筋から軽い痛みを覚えた。ぎゅうぎゅうしまる膣内に君は限界を感じていた為、お返しに中に思いっきり吐精する。尿道口から白濁液が、炎美の子宮内へと飛び込んでいく。

「ぶぐうううっうっうっう♥ あっっあっいいいい！♥ なかでだされてえあっっくく♥ まったき、ンぐううああっあっあッ！」

「うう、あああんっ！♥ 乳首から絶頂が伝わってえっあっん♥ わたしもきちやいま、っすうんんん♥」

首を伸ばして炎美は、断末魔のような悲鳴を上げた。深月が炎美の絶頂が伝わり、ビクンと体を震わせる。

「んっおっひいいい！♥ つひ♥ あたまとけるっううううっうっお♥ ツくくくく♥」

「んんっふ♥ すごい顔してますね♥ きもちよさそう♥」  
首を晒して絶頂し続ける炎美の顔を、深月が覗き込んでいた。炎美はそれを気にする余裕すらない様だ。

「……おっツ♥ ふくくっ♥ つっつふ♥」

息を整える炎美をうまくボツクス席のソファーに寝かせた君は、一度周りを見渡す。既にクラブの全員が君を気にする余裕はない様だ。先の中年も連れてきた奴隷達に、捕食する様に犯されている。

「すごいですね。これがこの子の忍法なんですね。んっあ♥」

擦り寄ってきた深月が君の耳で呟く。彼女の柔らかい胸が君の胸板に当たり、ふにやりと形を変えた。

このままいけば全員気を失っている事だろう。

嬌声と重い水音や肉がぶつかり合う音がクラブ中から聞こえる。淫な熱気が漂っていた。

「ご主人様、わたしにもお願いします♥」

その熱気に当てられたのか深月は、君の肉刀にも自身の膣口を擦り付けている。

無知論君はうなずき、彼女のお尻を持ち上げた。立位の体制で黒い霧が纏ったままの肉弾頭を挿入していく。

「あはああああ〜〜〜っ ♥ すっごいいいいいい ♥ あは、はへ、え」  
♥ こつれっえ ♥ いつもよりふかいよっおお ♥

入れた瞬間深月は、君の首に手を回して倒れない様にした。柔らかいお尻を君に持ち上げられて、形をぐにやりと変えている。

彼女は君の本気に耐えられる一人だ。無論君は黒い霧を肉剣にさらに集中し強化。

君の肉棒が子宮内に挿入されていった。中まで犯していく。

「ん、おッ、おっおおっおっ ♥ ぎつま、じ、っだ ♥ ごれえ、やつば ♥ ああ、あ、あ、あ ♥」

喉から重い悲鳴を迸らせる深月。そつと見てみれば、彼女のお腹が君の亀頭の形に膨らんでいる。子宮口がきゆうきゆうと君の肉杭を挟み、膣粘膜がぞりぞりと締め上げてくる。

君が彼女の膨らんだ腹部を観察していると、深月の背中から手が回り込んでた。そのままそこを撫でさする。肉に包まれて撫でられる、と言う異様な気持ちよさが君の体を走る。

「んっぎっついあ、あ、〜〜〜ッ！ ♥ つやあっあ、！ ♥ だめっ  
でっすっううう、う、う ♥ お、おッ ♥ 今そこを触ったら！ ♥  
だめです！ つひ、い、い、あ、ああアあ、ッ ♥」

「さつきはよくもやってくれましたね」

いつの間にか起きていた炎美が、恨み満載と言った声で深月の耳元で呟いた。その瞬間、深月が艶やかな悲鳴を上げた。

どうしたのかと君が炎美を覗き込んでみる。すると双頭型のディスプレイを挿入した炎美が、深月のアナルをツンツンと突いていた。既にローションで濡れているそれは、テーブルの引き出しからだしたのだろう。

ひいひい悲鳴を上げる深月が媚びた笑顔を浮かべて、炎美の方に向き直った。

「ひ……っひい ♥ 待ってくださいっう ♥ 今の状態でお尻まで入れられたらっあっう ♥」

「ぎつき駄目と言ったのにいれましたよ、っね！」

深月の嘆願を無視して炎美はディルドを挿入した。君の肉竿にも肉壁を通して太い物が入ってくるという感触が伝わった。

「おっ！ッ!?」 おおおおおおっ！」 両方の穴に、いれられてっ  
あたま♥ へんになつてしまいますううう♥」

「んあ、ああっ♥ これ、わたしにもアナルの締め付けがあうん  
いっ、あっ♥ 伝わってくる♥」

一瞬で首を伸ばして、白目を剥く深月。がくりと君の首に体重がかかった。がくがくと震える足は、力が抜け体重を支えていない。

君はこちらに戻って来させるため腰をたたき込む。

「んギツ、いいいいいっ！っ！」 だめ、死んじゃいますっくくく、あ  
っ！♥」

「あっ、んんっ！」 ご主人様のペニスの感触が伝わってくる♥  
はああ、あ、あ、あっ♥」

いつ間にか君と炎美は、呼吸を合わせて深月の中へ腰を動かしていた。肉壁の向こうの硬い感触が君の肉刀に伝わってくる。

「あうんっ、あっ！」 こっちも気持ちいんですよね♥」

「っええっ、ひひくくっ♥ ひただめええ♥ えおおおっ おっお  
♥ みつつもせめないでくださいいいいっ♥」

深月の口から突き出ていた淫紋入りの舌を、炎美が指で挟み自身の顔へうまく向けた。そのまま炎美が唇で挟み込んだ。

「んんっ…ジュルウ♥ はむはむ、っじゅぶ♥ んんっあ♥」

「くっふ♥ んんん♥ん♥ 待ってっえっおお♥ん♥ んっぶ、  
待ってくださいいっいっいっ♥ とんでっおおん♥ んんっお♥

さつきからっ♥ んうっうっうっ♥ いしきがあおっおっお  
♥ とっ、とんでますっう♥ んっちゆう♥」

炎美が何度かキスするたびに、深月の瞳が目蓋の裏に飛んでいる。その度に君たちが与える快樂で、意識を叩き戻されている様だ。

何か言おうとする度に炎美のキスに遮られていた。

ぎゆうぎゆう絞り込むような締め付けが君の肉筒を何度も襲ってきている。

「もうむっ、りですからあ♥ あ♥ あああくツっん!♥ んん  
ンっ……んお♥ てかげんしてっ♥ え、え、え♥ あ♥ ♥ くだ  
さい♥ おねがいしますうううう♥ うう♥」  
「んちゅむう……じゅっじゅちゅ♥ はああっあん♥ すみません♥  
手加減とか苦手なんです♥」

「そんなああああんんっ♥ んっ、ふうううううううううう!♥  
ひどついいいいいい♥」

深月の激しい膣内の収縮。目の前の美少女二人による淫靡なキス。  
両方の快感が君を限界へ達する。腰を恥骨に擦り付け、子宮内部の壁  
へ向かって射精した。

「んお♥ おお♥ ツお♥ ツお♥ おっ!♥ でてえ♥ えおおおお!♥  
なかででてま、っすうううううううううう!♥」

「ふあああああん!♥ これ絶頂が伝わってきて♥ ああああああ  
!♥ わたしもいっく♥ いくうううううううううう♥」

目の前の二人が泣き叫ぶような随喜を叫んでいった。君も最後ま  
で中に出すために、子宮内粘膜をグリグリと刺激しながら射精して行  
く。

炎美も同様に絶頂しているのが、君の肉棒から伝ってくる膣壁の向  
こうの感触で分かった。

「んん♥ ツ!♥ おしりもっおお♥ おおお!♥ ひ、ぎゅ、あうう  
♥ 子宮からおお♥ おおおくくっ!♥ きてますうううううう  
う♥ ♥ なんどもきでまっあああ♥ あッ!♥ も、お、っひっい、ひ  
んで、しまいますっうううううう♥」

「だめっえっだあ♥ ああッ!♥ さっきいったばかりでっ、びんか  
んだからあ♥ お♥ ツ!?♥ わたしもっ、お♥ っお♥ っおおお♥ なん  
どもいっってしまううう、うううううううう♥」

全身ががくがく小刻みに震え続ける二人。君も二人に合わせ、最後  
も一滴まで出した。ぽこりと深月の腹部が子宮内でたまる精液で膨  
らんだ。

「ひ、い、い、あ♥ ああアあ♥ ツ♥ つ、あ♥ つ、あ♥ くくく♥ おく  
くくく♥」

「んあああああああああ！♥ んあつ、あひい……はっあ♥ これすごいな♥」

意識を飛ばした深月が、ぐったりと君に体をあずけてきた。炎美がどこか陶醉した感じで眩く。

君が肉竿を抜くと、膣からごぶりと精液が逆流。同時に炎美もディルドを抜いた。

「っっはっっあ♥ 本当に死んじゃうかと思いました」

その瞬間大きく息を吸って。意識を取り戻す深月。君にもたれかかるのをやめて、二本足でちゃんと立った。少し足が震えている。炎美も足が少し痙攣していた。

君達が周りを見渡すとひどい状況である。

「わっあ」

「こ、ここまでのなるのか。わたしの忍法は」

呆然とした二人の声。そうもなるだろう。ボックス席もステージも人がおり重なり合い、そのまま気絶していた。

「これ、死んでませんか？」

「それは大丈夫なはずです。気絶の方向性になりましたので」

あまり自信なさそうな炎美。この光景はそうなる。だが彼等彼女等も、違法な魔界製の媚薬を使っていたのだ。痛い目を見た、と思っ  
ていただこう。

君はそう言って二人を連れてパーティー会場を出る為、足を動かす。首の鎖に軽く引つ張られ、二人も君についていく。

途中で予想通りオークは炎美の忍術に巻き込まれ、精液を垂れ流して気絶していた。

「うっわあ」

「忍法は使い方なんだな」

二人はドン引きした様子でそれを見ていた。そのまま君達は会場を後にして、車に乗り込んだ。車はそのまま自動で動き出す。

地下通路を出た君達といれちがうように、パトカーが何台もそこへ突入していく。

任務完了。だが、君は少々物足りないことがあったので、目の前の

淫なメイド達に手を伸ばす。

「あ、あはあ♥ もうまだ、満足できてないんですか?♥ ご主人様♥」

「あう、っあん♥ 仕方ないな♥ 私達のご主人様は♥」

君も思考を察した深月と炎美が、先の言葉遣いそのまま君に近づいていくのだった。

## ふうま天音及び合同依頼前編

『今回の依頼を説明させてちょうだい。依頼主はノマド・コンツェルン。……ええ、今回は米連とノマドとの初の合同任務。つまるところ、例の次元侵略者。仮称ガイストの討伐任務ってことね。……話をつづけるわ。ノマド・コンツェルンが建設中の新型療養施設が占拠されたらしいの。占拠されたとはいっても、まだ一階部分のみで、それ以降は全力で阻止しているみたいよ。それでも危険らしく今回の合同任務を依頼してきたわ。正直私にとっては納得がいかないけど、内容が内容だけにね。顔の広いあなたにお願いして様子を見てみたいの。勿論危険は大きい事はわかっている。バックアップはあなたが決めていいわよ。あなたの力を私に貸して頂戴』

依頼された場所へ移動中の車。それなりに広い車内で君は今回持っていく装備の最終チェックを行っていた。車の中には君と目の前の一人だけ。席に届くほど長い黒髪のポニーテールにキチツとしたスーツ姿の女性。碧色の瞳で君を見つめるふうま天音が声をかけてきた。

「若。本当にお気をつけください。いくら協定が結ばれたからと言って、あのノマドや米連との合同任務なのですから」

天音の心配そうな台詞の内容に、君は一応訂正を加えた。ノマド・コンツェルンとの共同任務だ、と。

あくまでも犯罪結社ノマドでは無く、多国籍企業複合体ノマドとの合同任務という形なのだ。

淫神とその従者達。仮称ガイスト討伐の任務。その依頼に同行する者達も君の顔見知りだ。

君はその事を目の前で座る天音に伝えた。チェックも終わり、後ろの旅行鞆型の装置へ装備を入れた。顔を彼女の方へ向ける。手に隠れそうな胸をスーツに押し込み、君の腕の中にすっぽり入りそうな細い腰が特徴な体形の天音が君の視界に現れた。



「さすが若。顔がお広い」

満足そうに天音が頷いた。車に付いている時計を見れば、到着まで数時間ほどの時間があつた。

「まだ時間がありますね。若」

君を見ながら顔を少し紅潮させた天音が聞こえるように呟く。君を見る碧色の瞳がぼんやりと霞がかつていた。

君は彼女の期待に応える為、細い腕をつかんで引つ張つた。柔らかな唇に君の唇を重ね合わせる。

「ちゆく……ちゆむう♥ んちゆうう……はあつ、わか♥」

君のキスを受け取り、天音が甘えるように呟く。

掴まれていない片方の手を使い、君のズボンとパンツをずらしていく。その間に君は肉棒に黒い霧を集中させておいた。

「ぬちゆ……んっ、ああ♥ んちゆううっ……くちゆ、あつい♥」

唇を離すと君の肉棒をうるんだ目で彼女は見ていた。伝わってくる熱を帯びた甘い吐息とふわりと香る髪の毛のいい匂いが香る。

天音の両手を包む白い手袋が君の肉棒をすりすりとさする。さらさらとした絹の肌触りが君の肉棒にしげきを与えた。

君は車の中で始めるなんて淫乱だな、と天音の耳元で囁く。

「ですが、若。ようやく久しぶりに二人つきりなんですよ」

甘えるように天音が、君の言葉に答えた。彼女の言う通り、互いに仕事が多忙で二人つきりになるのは久方ぶりの事だった。

「ちゃんと替えの服も用意しましたから、ね♥」

天音の視線の先には、それなりに大きなカバンがあつた。そこに君の対魔忍スーツや彼女の執事服などが入っているのだろう。

準備万端に用意した天音の誘いに君は乗ることにした。久々に君の嗜虐スイッチをオンにする。優秀な女である彼女の事だから、しっかりと防音使用の車であることは明白だった。

ここまで準備するなんてそこまでしてこれがほしいのかと、君は彼女の白い手袋に肉棒を擦りつけながら言い放つ。

「はっ、いい♥ 欲しいです。若の逞しいチンポで、天音に精液をこき捨ててください♥」

息を荒くし、霞がかつた瞳で君を見つめる天音。すでに欲情しだしている。

君は完全に彼女のドマゾスイッチを入れる為、無造作に黒い髪の毛を掴む。女性の命ともいえる丁寧に手入れされたそれを掴みながら、口を大きく開くよう命じた。

彼女は君の意を掴んだのだろう。

「天音の口マンコを、若のお好きなようにお使いください♡ っふっあああ♡」

媚びるような笑みを浮かべて、口を大きく開いた。赤くちらちら舌を動かす天音の口。掴んだ頭に力を入れて動かし、君の肉棒に叩きつけた。

「んぐうおおっ！♡ っばおおっ！♡」

君は両手で彼女の頭を掴み固定。腰を激しく動かして、肉棒を口内へと叩き込んでいく。

「うぐー♡ んぶうー♡ んんんっぐっうー♡ じゅっぞぞっ♡」

男根への快樂しか考えていない鬼イラマチオ。普通なら吐き気と苦しきで、君の肉棒を吐き出すだろう激しき。だが、天音はそれすらも快樂なのだろう。君の腰に手を回して、腰の動きを補助している。

「じゅぶっじゅぽっ♡ んっぐー♡ ヒンポ、わひゃのひんぽ！♡ わひゃひのふひふあんこでれっ、ぎぼぢよぐじまずね！♡ ぢゆるぢゆるっ！♡」

彼女は陶醉した表情で、君の肉棒を飲み込んでいた。唇で君の肉棒の根本を挟み、舌で幹の部分を取くように舐め上げている。

天音の快感を確かめる為、君は靴と靴下をうまく脱ぐ。素足を彼女のスーツに覆われた股の間に動かす。そのままぐいっつ押し付けた。感触で濡れているのが解った。

「んぐう!? お♡ ひっ♡ ふあひゃのおひあひがっ♡ んぼっぐっば♡ ひやめれす♡」

天音から甘えるような艶声が響く。君はそれを無視して、足を押し付けながら動かす。腰も激しく動かし、彼女の喉マンコを刺激する。「んぶぶっ、んぶっ！♡ わひゃひまれ、おぶっ！♡ ひゃんひちやい

まひゆから♥」

激しいイラマチオと足での愛撫の最中も、天音は君の肉棒に対する奉仕を忘れてはいない。肉棒を唇とほほで扱くように伸ばし、無様なひよつとこフェラを見せている。陰毛が彼女の口元に引つかかるのも一切気にしていない。

無様な顔だ、そこまでしてザーメンがほしいのかと君は罵倒する。

「えっ、ぐうー!♥ ふあひ♥ ほひいれす♥ わひやのざーへん、わひやひのろまんこに、はひふててふらひやい♥」

天音の上目遣いでの懇願。君を見つめる瞳にはすでに理性の光は失われていた。そこには君に蹂躪されることを望むマゾヒストの姿があった。

その証拠に君の素足は、彼女の透明な愛液ですでに濡れている。君はそのまま足を押し付けるように動かし続ける。

「んぐ、んん!♥ ひやつめ♥ ひっちゃひまひゆ♥ ちゆる、つぢゆるるる♥」

天音は唾液の音を漏らしながら、君の肉棒に舌を必死に絡めだす。唇から引き釣り出す様に腰を引けば、ぞくぞくするような快感が君の背筋を襲った。

君は出さず、牝畜と宣言し腰を最奥に叩きつけた。天音の細い喉が君の肉棒でぼこりと膨らむ。亀頭を喉粘膜の痙攣で刺激された。その甘い刺激が君の射精欲求を追い込んだ。

頭を腰に抑えつけ、尿道を駆け上がったきた精液を排出。

「むぐううう!?!♥ ギーへん、ひったあ!?!♥ んぐうううう!?!♥」

胃に直接吐き出すかの如く、君は肉棒から精液を喉奥へと吐き出していく。同時に天音もビクンビクンと身体を痙攣させながら絶頂していた。

「おーおお、んうっ!?!♥ わひやのざーへんのんへひつぐ!?!♥ ひつぐうううううう!?!♥」

彼女の股間にある君の足が、びゅうつと噴き出す潮によって汚れていく。

君の勢いよく出る牡欲に、天音の鼻から白い液体がどろりと垂れ

る。それでも彼女は残りを飲み干そうと、舌を絡めてバキュームしながら白い喉で嚙下していく。

「おつぶうううううっ!?!」♥ うぶうっ、えぶっ!♥ んっぎゅ、ごくごく♥ ごくん♥」

最後まで放出された精液を、喉を鳴らして飲み込んだ天音。その瞳はどこか虚空を見るように定まっていなかった。酸素不足と君から与えられた快楽で、思考が定まっていけないのだろう。

君は一度彼女の口から肉棒を取り出す。

「つぶつはあ!♥ ~~~~~つあ♥ つはつお♥ つおお♥」

ぶるぶると絶頂の余韻に浸っているようだ。君は目を覚まさせるため、彼女の愛液に濡れた素足を上げる。

天音の顔に当てる君は一言呟く。ぷにと柔らかい頬を足指で変形させながら、汚れたから洗えと宣告。

「つあ♥ 申し訳ございません♥ 天音の愛液で若のおみ足を汚してしまいました!♥ 今すぐ口できれいにします♥」

理性の光が消えた瞳で君を見つめながらの発言。言った通り天音は、君の素足を手に持ち唇をつけた。

「んん、っちゅ♥ んれろ、れろれろ♥ あむ、んぐ……んんっ♥」  
彼女は素晴らしいものを食べるように、君の足指を丁寧に舐めしやぶっていく。くすぐったいような快感が君の背筋を這うように上がってきた。

「あむん、んん……んっむ♥ 若の足指、美味しいです♥ んちゅっくっ♥ れろっ、っちゅむ♥」

かつて子供のころ、君のお目付け役をしたことがある天音。そんな彼女をここまで君が墮としたのだ。そのことに君は精神的な悦楽を感じてぞくぞくしている。君は顔に思わず下卑た笑みを浮かべていた。

「ちゅう、むちゅ♥ ……っちゅ♥ れろ、れろおお♥」

君の浮かべた表情を見たのだろう。天音は嬉しそうに君の素足に口づけする。そのまま片手をスーツのズボンに動かして、軽く脱いだ。下のパンツも脱ぎ、自身の膣口をさらけ出した。

そのままピンク色の肉口をVの字に指で開き、腰をコスコスと動かしていた。同時に君の足を赤い舌肉で舐め上げている。

「ん、れろれるろ……あむん♥ んちゅっ、ちゅぴちゅぱっ♥ んくううちゅっぱちゅぱ♥」

足指を肉棒に奉仕するように啞えて舐めしやぶる。君の顔へと熱い視線を送り見上げている。

明らかな挑発に君は乗ることにした。そろそろ入れていい、と君はいきり立つ肉棒を彼女に向けて許可した。

「ん、ちゅ、ちゅっちゅう♥ ありがとうございます♥ 若のチンポを天音の精液排泄用牝穴に入れさせていただきます♥」

どこまでも自身を墮とすマゾヒストの発言に、君は嗜虐の笑みを浮かべて頷く。天音はスーツのズボンやパンツを放り出す。

牝汁を垂れ流す鮮やかなピンク色の柔肉からふわつと香る甘い女の匂いが君の鼻腔をくすぐる。座る君に乗り、肉棒目掛けて下ろしていった。濡れた牝口へ君の肉棒が挿入されていき、温かな圧迫感に包まれていく。

「い……ッ、はおおっ♥ 若のおお、チンポイっ！♥ 一番奥までっ、えっひいい♥ はいって来ましたっ、ああ♥」

ゆっくりと腰を下ろす天音の牝肉穴を、君の肉棒で埋められていく。奥底に当たると、君の肉棒の先にあるカリ首をきゅつと刺激してきた。

「あ、あ、ああッ♥ 久しぶりの若の生チンポ♥ はっ……、はっあ……♥ たまらない♥」

入れただけで天音はビクビクと震えていた。君に抱き着きながら、そのまま動かないでいる。フレッシュな香りの彼女の熱い吐息が、君の耳に当たってきた。

そんな彼女を君は許すことなく、お尻に手を回して引っぱたく。

「あはア、ッ♥ 申し訳ございません♥ 私の雑魚マゾマンコ♥ 若のチンポを入れただけで、軽くイッてしまいました♥」

彼女の素直な発言を無視。君は腰を下から突き上げながら、ちゃんとう気持ちよくしろ牝畜と罵倒する。

「っ は、あゝ あっ!? ♥ はっい ♥ おゝ あゝ、あゝ ツ! ♥ 天音のメ  
スザコマゾ肉でっえ ♥ んひっ ♥ 若のチンポを気持ちよくします  
ううゝ うゝゝ…:…ツ ♥ つくう♥」

歯を食いしばって、彼女はお腹に力を込めた。膣内が君の肉棒を  
ぎゅうつと締め直した。

君はお尻に力を入れ直し、腰の突き上げを強めていく。

「ふあああああ、っああゝ ♥ 熱くてっえ、つぶっといいい ♥ 若のチ  
ンポっおっおおゝ ♥ おゝ ぐうう ♥ 雑魚メス肉をかき分け  
てっえ、つきつたっああゝ あゝ ぐゝゝっ ♥」

天音を先に絶頂させる為、君は腰の動きを激しくしていく。お尻に  
手を回して引っぱたき、ちゃんと締め直せと宣告するのも忘れない。

「ひい、い、んああっ!? ♥ つは、はい、天音の中古マンコ ♥ おゝッ、  
おゝ ツ ♥ ちゃんと締めて若のチンポに奉仕させていただきます ♥  
んんんっうううう ♥」

君の罵倒に彼女は体を震わせながら答えていった。息を大きく吐  
き、キュツキュツと君の肉棒を締め付けてきた。

「ふああゝ ツ ♥ どうですか? ♥ おゝ ツおおおゝ ♥ ちゃんと若  
のチンポ、きもちよくなってますか? ♥ ツゝゝゝゝゝ、あゝ あゝ あ  
ゝ! ♥」

腹筋に力を入れ直し君の肉棒を膣肉で奉仕していた。締めてくる  
彼女の肉壁を、君の肉棒がぞりぞりと削っていく。

それは彼女にとって諸刃の剣だったのだろう。快樂の涙にぬれた  
瞳で君を見つめる天音が、懇願するように呟く。

「おゝ、うっうゝ う! ♥ 若、申し訳ございません! ♥ んぐツ!? ♥  
駄目です ♥ うううゝ つ、っおゝ っおゝ ♥ 我慢できません、ん  
んゝんゝ ぐゝゝツツ! ♥」

謝罪と共に彼女は背筋を反らせて顔を車の天井に向ける。白い喉  
が君の目に映った。

「んおおおお ♥ つも、おゝ おっ! ♥ いっぐ ♥ おおあおっ、っひぎ  
いいいいいいいいッ! ♥」

君の肩を掴んでがくがくと全身を激しく震わせている。車の天井

に向けた口元から、重い悲鳴が迸る。

肉棒へ強烈な膣内の収縮による刺激に対して、君は排出を何とか我慢し続ける。

「……………ツ♥お……………ツ♥ ふ……………♥ ふ……………♥」

震えが収まり出すと、天音は君の肩に顎を乗せて息を吐き出している。彼女は絶頂の後に息を整えようと必死だった。

意識がもうろうとしている隙をつき、フリーな方の片手を天音の腹の上に置く。握りこぶしを作り、ちょうど子宮の上あたりへ押し込んだ。

「んゝぎツ♥ おつぐつう……………つ!?」

ビクンツと体が大きく反応し、うめき声をあげた。

肩から外れた天音の顔が一度上を向いた後、君の顔へ向き直る。口を半開きにして、無言で許しを請うように震える碧色の瞳で君を見つめて来た。

その奥に期待の光がちらつくのを君は確かに確認した。

「あゝ、あ、!?♥ 若についいいっぎ!?♥ 子宮つうつおお!?♥

んゝほお!?♥ つぶされてしまっ!?♥ ああゝあゝ あああっ♥」

拳を押し込みながら、君は子宮を押し上げるように腰を激しく動かしていく。

「うぐぐぐ、うっおっ!♥ ひいゝツ、いッ!♥ は、激しいっいいあ

ゝあゝあゝっ!♥」

痛みや気持ち悪さすら彼女には快感なのだろう。顔が天井に向き舌を突きだす天音。その口から迸る獣のような悲鳴は、確かに悦楽を感じるものの声色だった。

「つ……………おお!?♥ あ、あゝつ、あゝ……………つ!?♥ つつお……………♥」

意識が飛び飛びなのだろう。意味をなさない重い艶声が、彼女の口元から流れていた。君はお尻に向けたもう片方の手で引っぱたく。

ぱちんと肉を叩く音が車内に響く。

「が、はっつい!?♥ つお、ついいい!?♥ 今、意識がつあおおゝおゝお!?♥」

顔を君の方に向けて、天音は意識を取り戻した。君の視界に映る彼女の目が、瞼の裏へ飛び飛びになっている。何度も軽く絶頂しているようだった。

実際、肉棒は何度も激しい収縮に見舞われ君は限界へと確かに近づいていた。

「んお、ッ、おつ、おお、っ、お、♥ お許してください、わかっ♥ あう、っううううっ♥ 雑魚メス膣肉のっおおくくっ……天音はっあ、意識が飛んでいましたあ♥」

彼女は君の首に手を回して、抱き着くように体を押し付けてきた。そのせいでお腹の拳が更に押し込まれていく。

君を見つめる顔は、媚びるような笑みを浮かべていた。

「んお、っおお♥ 雑魚メス天音をっおお、っお♥ わっあ、あゝゝゝっ♥ 若が躡けっえ……な、直してください、っいいい♥」

君は天音の懇願通りに、お尻を何度も叩き腹部を何度も押す。車のソファアのスプリングを利用して、彼女の膣内を埋める、君の肉棒で子宮をズンツと押し上げていく。

「ひッぎいいい、っ！♥ ツー！♥ 若の躡けっあ、っごおっくく！♥ きもちいいっ！♥ あっぐっぐううう、う！♥」

舌を突きだし白目をむいて、天音が喉から快樂の雄たけびを上げている。防音使用の自動車とはいえ、少し心配になりそうだった。

そんなことは頭の隅へ置き、君は限界へと突っ走っていた。透明な汗を垂れ流す膣口へ向かって、腰を激しくぶつけていく。

「くっおおお、っあっああ！♥ 若のっお、膨れてきましたあっ！♥ あっひい！♥ つも、もっおおお、お！♥ もう出しそうなんですっねっえ？♥」

彼女の期待のこもった質問に、君は軽くうなずくことで答えた。熱く欲情した牝の視線が君を貫く。

鍛え上げられた腹筋が、膣内の収縮を激しく君の肉棒を締める。肉棒の尿道口から牡欲が駆け上がるのを君は感じた。

「そっ、……っおおおお！♥ そ、のままっあ……だしてください



「いゝいゝ！♥ 精液乞する子宮についゝ！♥ いゝつき！♥ 射精お願いします！♥ つううゝいゝいゝいゝ！♥」

天音の期待通り君は最奥に向かって射精した。噴出したは白濁液は一度では収まらずに、幾度も子宮へ流れ込んでいく。

「おおゝ おおおおゝ おおおおつ！♥ わかのつお、あゝづいゝいゝいつつ、つううううう！♥ んっおつ、しついいゝ！♥ しきゆうにいつあ、はいつてきますうううゝ！♥」

膣口からしぶきを撒き散らしながら、天音は君の体に力いっぱい抱き着いた。首筋に当たる義腕の冷たさが火照る体に気持ちよかった。そのお礼に君は更に溜めた精液を吐き出していく。

「ほっお、おゝおゝおゝつ♥ まだっあああああ！♥ はいってきまっあおおおおお！♥ なんどもっおっぐうう！♥ いいつつぐうううゝうゝ！♥」

ちゃんと君は子宮に精液を込めていく。少しだけ彼女の腹が膨れて、君の拳を包み込んだ。

「おつ、っおおゝゝゝつ！♥ あゝあゝゝゝゝツ！♥」

言葉にならない悲鳴が彼女の口から出て行っている。最後の最後まで吐き出した君は肉棒を膣口から離す。

「……………！♥ あゝつ……………お……………つお……………♥」

天音の口から泡が漏れ、完全に白目をむいていた。とろりと膣口から白い液体が零れだしていく。

それを見た君は車を汚さないために、放り棄てられたパンツを握る。そのまま膣内へと突っ込んだ。

「イゝいつゝゝゝつあ！♥ わつか？♥ 何を？」

意識を取り戻した天音の質問に君は答える。栓をしている。

続けて君は、今日はこのまま子宮に精液をため込んだまま過ごせと命じた。

「はっいいい♥ 重要な依頼の最中で、天音は若の精液を子宮に取り込んだまま過ごします！♥」

ピースサインを顔の両側に挙げて、マゾヒストの彼女は本当にうれしそうに声を上げた。

「若。支度はどうですか？」

カーセックスの後、痕跡を消した君たちは最後の支度をしていて。予定時刻まであと少し。自動運転の車もあと少しで突くと知らせてきた。

君は後ろにある小さな旅行バックを見やる。手元にある小型端末をみれば、準備はちゃんとしているのを確認できた。

「そろそろ着きます。本当にお気を付けてください。敵は得体のしれないガイストとのことですよ」

そこまで危険なのかと君は問う。天音は戦闘だけでなく諜報も優秀だった。そんな彼女が君を何度も心配するほどだった。

彼女は少し迷うように、口を何度か開け閉めする。だが、君を見つめながら話していく。

「時子の協力を得て、米連からも引っ張ってきた情報ですが」

君に怒られるとも思ったのか、一拍間を置いて話し続けた。米連と協力関係になったとはいえ一部の事だし、そもそも片手にナイフを隠し持ったような関係である。その程度の事は君も承知の上だった。

「例の事件ですが、少数で秘密裏に片付けようとしていたらしく、2個分隊。装備も最新兵器のフリーダムオブアメリカ製の強化外骨格や殺戮ドローン。他にもサイボーグ兵士などを投入させてたようです」  
ですがと、彼女の話は続く。彼女の表情からしていい内容ではないだろう。

「建物に入ってきた者たちはすべて帰ってこなかったようです。サイボーグや魔族傭兵等を混合させた分隊でも収まらず、最終的には爆撃を含めた火力戦で何とかしたとのことですが……」

沈黙の後も話はまだ続いていた。

「建物の中も異常でした。魔界でも見ないような生物に、ビル一つが肉の触手に飲み込まれていたとのことでした」

彼女の話通りならしやれにならない敵のようだ。合同任務とはいえ、君一人で任せるのも不安になるだろう。

とはいえ、まだ規模は米連ほどではないとの事を浅黄から君は聞いていた。占拠されたのも建物の一階のみで、それ以降はノマドが全力で抑え込んでいるとの事だった。

そのことを君はちやんと天音に説明する。合同任務の時、米連とノマドの間に入れる人物が君しかいないことも伝えた。

「……………」

不満そうに沈黙する天音。君しかできないことであっても、心配事は治まらない様だ。

彼女の気を反らすため、君は言葉を続けていく。バックアップとして天音を選んだこと。彼女に任せれば何があっても大丈夫だと信頼していることを伝えていく。

実際その通りだ。諜報活動や戦闘行動の両方を高いレベルで行える人物は今の対魔忍には少ない。彼女はその両方ができる数少ない人物だった。嘘は言っていない。

「わかりました！ 若の期待以上に必ず私がバックアップとしてサポートして見せます！」

ふんふんと鼻息荒く、天音は君の言葉に返事をしていた。それを君は笑みを浮かべてみていた。楽勝。

心の声をひた隠し、君は車ののり心地に身を任せる。

ちょうどその時、車が目的地へとついた。

天音が先に外へ出て、周囲を警戒。

「どうぞ、若」

彼女の指示に乗って外に出た君の目に、五階建ての巨大複合施設が入ってきた。しかし、一階だけが異様な雰囲気を出している。肉色をした扉や壁がうずうぞと蠢いている。

その扉の前にはマントを着て褐色肌。胸と腹部を開いた服で包み込んだ、赤い髪の豊かな胸の女性。魔界騎士イングリッドが立っている。

「来たか。予定通りだな」

君に黄色の瞳を向けて、イングリッドが時計を見ながら呟いた。

周りを見渡す。柱に隠れる一つの影を除いて、ほかには誰もいな

かった。

「米連の連中はまだ来ていない」

イングリッドの言う通りだった。だが、それもすぐに覆される。君達に覆いかぶさる様に一つの影が降りた。不審に思った君達を上を見上げると無音のヘリコプターが上空でホバリングしている。そこから一つの影が飛び降りた。

「若」

後ろに待機していた天音が君を呼ぶ。君は天音に対して知り合いだから大丈夫だと言った。

君達が話している間に、飛び降りてきた女性が背中からホバーを噴出。地面に怪我一つなく降り立った。

地面に付きそうなほど長い金髪に、所々機械化した体。上の胸だけを隠す黒い布に股のを隠す突型の鉄を装備したアルカ・ステイエル。彼女が米連から派遣された人物なようだ。

「ノマドとの合同任務に派遣されました。これより任務を開始します」

無表情かつ無感情な声色で、彼女はイングリッドに軽く頭を下げた。

そのまま君の方へと視線を向ける。金色の瞳で見つてきたアルカは、君に向けて微かな笑みを浮かべた。

「主も今回の合同任務に派遣されたのですか？」

君は頷き、今回もよろしくと軽く伝える。

君の後ろにいる天音は今回のバックアップが担当だ。之で君達四人が、この変質された一階部分への突入班だろう。

「これで三人そろったな。当初の計画通りに進むとしよう」

イングリッドの発言に疑問をもった君は一つの質問をする。そこに居るのはいいのと君は指さす。

君の指先にはコンクリート柱に隠れるように一つの影があった。そこから二本の小さな角と茶色の髪の毛が出ている。

それを見たイングリッドが頭が痛そうに顔をゆがめた。明らかに意図的に無視していたのだろう。君の指摘に目を逸らさずにはいら

れなくなったのだ

彼女は額を抑えて口を開く。

「リーナ。お前はそこで何をしている？」

「イングリッド様！　こ、これはですね」

あわあわと慌てながら、リーナと呼ばれた少女は隠れていた柱から出てきた。

腰まで届く茶髪から出てる二本の同色の角。ワイシャツを押し上げる豊かな胸にのる赤いリボン。君の知り合いでもあるリーナは、イングリッドに駆け寄りながら何やら言い訳を捲し立てている。

「今回は協定にも関る重要な任務だ。だからこそ、私一人での出向となったのだ」

「ですが、得体の知れないガイスト退治ではないですが！　ぜひ私もお供に」

イングリッドは何とか説得しようとしているが、リーナも引く気はないようだ。赤い瞳が褐色肌の彼女の顔から眼を反らしていない。

とはいえ、このままではイングリッドが命令して終わりだろう。実際に、今回の合同任務は互いの組織一人を派遣させるという契約だった。

とはいえ、君も彼女達の口論をこのままにしておく気はなかった。その方が面倒なのが目に見えているのだ。

君はイングリッドに近づきながら、このまま話してもらちが明かないから連れて行った方がよくないだろうか、と話しかけた。

「……っ」

イングリッドは近づく君を不審げに睨む。余計なことを言うなど言いたいのだろう。君も言いたいことがあったため、彼女にのみ聞こえるように言葉を発する。このままリーナを置いて行って、こっさりついてこられた方が面倒なことになる、という事を説明した。

君の小言を聞いたイングリッドは痛い所を突かれたと言いたげに黙り込む。絶対にそうなるという確信が彼女にもあるのだろう。実際リーナはそういうことをする。君は良く知っている。

君は重ねるように一つ貸しでいいと伝えた。

「……良いだろう。時間も押している。リーナ、今回だけだぞ」

「了解しました！ 全力を尽くしますー！」

イングリッドの不服そうな印象とは裏腹に、リーナは嬉しそうに声を上げた。君はそこから離れて、装備を取りに行く。

装備を守るように居た天音が、君を不満げに見ていた。

「若。あの小娘がよろしいのでしたら、私も」

彼女の提案に対して、君は首を横に振った。天音には非常時のバックアップとしてここに残ってほしいと伝える。

君の命令を聞いた彼女は不満げに頷いた。納得はしてないようだが、彼女もバックアップの重要性をよく知っている。先の君の言葉もあり、何とか心の決着をつけたようだ。

彼女の隣にある車の後ろから出してもらった、小型のスーツケースを受け取る。君は懐から小型端末を取り出し、スーツケースに向けた。

ガチャリという音と共に、四本の機械足が生えた。空間ディスプレイが頂上から映し出され、横から小型の偵察ドローンが射出。三つの昆虫型飛行ドローンが浮遊している。今の君が操れる限界の総数だった。

それらを伴い君はイングリッドに、準備はできてるがどうする、と聞く。

「ああ、作戦開始時間はすでに過ぎている。速やかに行動を開始する」彼女の号令に、君とほかの二人も頷く。イングリッドが肉質に彩られた扉を開けた。君はその中にそばのドローンを潜入させた。カバンの立体映像がそのドローンの撮影した物を映し出す。だが、

「主。あの扉を境に、映像が途切れています」

いつの間にか、君の護衛のように近くに佇むアルカが君の代わりに報告。米連からの報告通りだった。

中と外とでの情報の遮断。このガイストに占領された部分に突入すれば、誰とも連絡が取れなくなる。

君は天音に二日何もなかったら一度五車に戻り報告するように伝えた。

「……若。その時は五車に戻る前に、この中へ一人でも突入しますからね」

君の命令でも聞く気はないようだ。帰還する理由ができた。

天音の言葉に、念のためだよと返しておく。

「安心しろ、対魔忍。イングリッド様と私が居ればどんな敵でも怖いものなしだ」

君達の会話を聞いていたリーナが腰に手を置いて大いに威張っていた。ドヤツとした顔と共に、赤色の瞳が君達を映し出している。

天音も彼女の根拠のない宣言に、チベットスナギツネに似ている表情をした。その顔で君を見ている。

見るなよ。担当はイングリッドだから、その子。

「……さっさと行くぞ。時間も押している」

イングリッドの急かすような声に押され、君とアルカは扉へと近づく。君の後ろを装備である自動走行のドローン制御鞆が追うようについていった。

「お気をつけて、若」

天音の心配そうな声色に、君は軽く手を振って答える。

君達合同任務部隊は、時限侵略者。仮名ガイストが占拠する建物の中へと入っていくのだった。

## 合同依頼後編及びアルカ&リーナ&イングリッド

任務目標の中に入ると、壁一面が肉の桃色に変わった壁や天井が目に見えた。光もないのに、君の目には明るい景色が映る。ドローンからの映像もしつかりと回復し、偵察に使えることを確認できた。足元の感触も、肉を踏みつけるような異様な感覚だった。

君は操作しているドローンの制御鞆から、立体映像を映し出す。それは任務受領の際に受け取った、この場所の地図だった。

一先ず君は中心部にある一番空間の大きい広間に向かって、移動することを提案。

「ああ、それ以降はスタッフルームや個室などで戦闘行動ができるような場所はない」

君の提案に頷くと早速歩き出そうとするイングリッド。それにつられてリーナも意気揚々と足を出した。

彼女達二人の行動を君は止める。アルカは君の後ろで、護衛のように黙って立っている。

まずはドローンを先行させて偵察させてほしいと伝えた。  
「つむ、わかった」

君の提案にイングリッドはいささか不満げに頷いた。  
出鼻をくじいて申し訳ないが、これも全員を守るための行動だ。

君は一体だけ浮遊する昆虫型ドローンを先行させた。鞆から映される立体映像は、ドローンが映し出す光景に変わる。早速曲がり角にぶつかり、通路のまま進ませる。

昆虫型ドローンが生命反応感知。ドローンから映し出される映像には、ぶよぶよ太った巨大なカエル。そして天井で蠢く大きくなったナメクジのようなモンスター。

「なんだ、これは」

「私にもわかりません」

「データベースにはない生物です」

イングリッドやリーナ等の魔界の住人。アルカのサイボーグの頭脳にも存在しない生物。君も聞いたことも見たこともないモンス



ターだ。

君は恐らくこれがガイストが奴隷にしている他世界の生物なのだろうと伝えた。

君のドローンを餌だとも思ったのだろう。びちゃりという音と共に、ドローンの近くにナメクジ型の生物が落ちてきた。小牛サイズのカエルも、ドローンをじっと見つめている。

ドローンでこいつらを引っ張ってくる。君は周りにいる三人の女性に合図を送る。

直ぐに彼女達は行動する。イングリッドは愛用の魔剣を構えた。リーナも桜色に彩られた長剣を身構える。

「主。おさがり下さい」

君の背後に控えていたアルカが君の前に出る。手からビームサーベルが出現。

同時にドローンがモンスター達を連れて、君達に向かってきた。戦闘が始まる。

「でやああああー！」

イングリッドが一息に大きな蛙の化物を叩き切った。

「そいやっ」

リーナの桜色の剣がナメクジ型のモンスターを切り裂く。

「……」

アルカは無言で自分の近くに来た大きなナメクジを踏みつぶし握りつぶした。

君もクナイを投げて援護しつつ、靴から映し出される地図を確認している。目的の大広間にちゃんと向かっている。

ちょうど敵も途切れた。そのまま通路を歩いていく。

「敵も数が多いな」

「ですが、そう強くはありませんね」

イングリッドやリーナの言う通り、数が多いがそれだけだった。強化外骨格等を装備した最新鋭の兵隊やサイボーグ等が負ける理由は

ないように見えた。

「……米連のデータベースでは、他の生物が確認されていたようです。油断なさらないよう」

「わ、わかっている。相手は次元侵略者達。何が来てもおかしくない」  
アルカの言葉に、リーナが少し憤慨しながら頷く。二人の間を嫌な雰囲気が漂う。

君はそれを払拭する為、次元すら違う生物だから何をしてもおかしくはないと告げた。

「世界すら違う生物か。どれほどのものかな」

高揚の笑みを浮かべて呟くイングリッド。その様子をリーナが焦がれるような目で見つめていた。

アルカは無言で前を歩く二人について行く。君もそれに同行している。

歩きながら地図と照らし合わせて進んでいく。君は途中妙な場所に気が付いた。

イングリッドに少し待つよう伝えた。

「なんだ？ もう疲れたのか？」

軽い冗談を上げながら、彼女は立ち止まる。それに続くように二人の女性も止まった。

君は壁と地図を見比べていた。そこには一つの部屋に続く扉があるはずだった。他の場所でもただ肉色に変わった扉に変わっただけで、ほぼ地図通りの配置図だった。

だが、そこだけが壁に変わっていた。不審に思った君は、そのことを含めて三人に伝えた。

「ふむ。何か隠されているという事か」

「どうしますか？ 切っけて開けてみましょうか？」

イングリッドの言葉を聞いたリーナが、手の中にある剣を構える。

「ああ。修理費は高くつくが、仕方ないだろう」

「では、はああああ」

イングリッドの掛け声一つで、リーナが気合一閃。ちょうど三回で四角状に切り裂いた。

「……………」

それを無言でアルカが押した。ぐちゃりつと肉がぶつかると大きな音を立てて、倒れる。

その中へ君達四人が入っていく。

そこには陰惨な光景が繰り広げられていた。二人の肉触手で固定された少女たちが凌辱されている。

「うああ。もういやだよ！ ボクもううみたく……あああ！」

赤い髪の薄い胸をした大きな空色の瞳の少女が、君達が倒していたナメクジ型のモンスターを膣口から何十体も生み出していた。それでもまだ腹は膨れている。それどころかひもを通してナメクジが、更に襲い掛かり続けていた。

「アルク。きつと助けが、っああああ！」

長い黒髪で胸が大きく紫色の瞳をした女性が、何十個もの卵を膣口からひり出している。その後ろを先ほどの大きな蛙が後ろで待つように待機している。股間からペニスのような筒を立たせていた。

君はすぐさまアルカに蛙を倒すよう伝える。

「了解、主。攻撃します」

命令を受けたアルカが高速で移動し、蛙の頭を叩き潰した。

同時に、

「薄気味悪い！」

「大丈夫か！ 今助けるぞ！」

ナメクジモンスターをイングリッドとリーナが蹂躪していった。

イングリッドの剣から炎が伸び、リーナの剣から桜刃が飛び交う。すぐにナメクジ型のモンスターは切り裂き焼かれて消失した。

敵がすべて倒されたのを見て、君は一先ず赤い髪の少女へと駆けよった。ひもを切り地面に下ろした。

「あ、ああ。助けてくれたっ……っ」

何かを呟き君を見つめたかと思うと、少女は頭をがくりと落とし、体力の限界で気を失ったのだろう。

裸で気を失った少女を、君と同様に駆け寄りリーナに任せる。君は事情を聴くため、もう一人の黒髪の女性へと足を向けた。

「天の助けか？ すまない。本当に助かった」

黒い髪の女性はまだ意識を消してはいなかった。アルカに助けられた彼女は一先ず君に頭を下げた。

同じように裸の女性から視線を逸らす。君は近くに來た鞄型のドローン制御装置の下方に隠しておいた長い布を取り出して渡した。そのままリーナの方にも投げた。

「おっと、もう！ ふうま、もう少し丁寧に渡さないか！」

リーナからの文句に、君は手をひらひら降って答えた。

君は一応穴をあけた壁の方へと視線を向けておく。君の代わりに、黒い髪の女性に近づくイングリッドが、詳しい話を聞いていく。

「アタシの名前はエルマ。彼女の名前はアルク。アタシ達は………」

彼女達の話を纏めると、次のようになった。

住んでいた村が見たこともないモンスターや言葉を話す者たちに襲われた事。

男たちは怪物にされて、女性達は外獣。君達が倒していたモンスター達の総称でらしい。その外獣の繁殖の手伝いをさせられたこと。自分達は急にこの場所に連れてこられて、外獣の繁殖の手伝いを無理やりさせられていた事。最初は様々な女性などが居たが一人一人と消えていき、最後の残ったのが自分たちだけだったことなどを聞いた。

君とイングリッドは思わず目を合わせる。ガイストたちが行う多くの異世界における、奴隷売買の話を思い出したのだ。そして彼女達もその被害者だろう。

「どうする？ ここに置いておくわけにもいくまい」

イングリッドの言う通りだ。

すでに壁を破壊して居た為、そこからモンスター達が彼女の事を襲う可能性がある。

君は一度戻り、二人を天音に保護してもらうことを提案。種族としては人間だし、すぐに移動できるのは、君が連れてきた天音しかいなかったことなどが理由だ。

イングリッドは君の提案に頷く。そのまま君達は二人をいったん保護し、撤退していった。

「しかし、ガイストの奴ら許せませんね!」

保護した二人を天音に渡した君達は、もう一度侵入し直して奥へと進んでいる。

前を歩くリーナが体を奮い立たせながら歩んでいた。

「思った以上に危険な存在らしいな」

イングリッドも彼女の言葉に頷きながら歩みを進めていく。

その後ろでアルカが君だけに聞こえるように囁いた。

「意外です。魔族は弱肉強食を是としているので、あのような光景も当たり前だと思っていたのですが」

君は後ろで歩いている彼女にこっそりと話していく。彼女達魔界騎士は秩序を尊び、ある程度の弱者の保護を是としている事。その中でもリーナは珍しく、ある程度の正義感を有していること等々。勿論、魔族としての正義というものだったが……。

魔族にも色々いるのさと君は締めくくった。

「なるほど……」

無表情のまま、アルカは前を歩く二人を見つめている。改造されて感情が薄い彼女には珍しい事だった。市民を守るためにサイボーグへとなったアルカにも、思うところはあるのだろうか。

君はそんなことを想像しつつ足を動かしていく。

少し進んだところで肉色に染まった大きな観音開きの扉が、君達の前立ち塞がる。

君はアルカにほんの少しだけ開けてもらおう。

「主。これぐらいでよろしいでしょうか?」

君の指示通りに小さな隙間を開けて、アルカは振り返る。それに頷いた君は、隙間から小型の偵察ドローンを侵入させた。スズメバチ程度の大きさのそれは、中の映像を鮮明に君たちへと送った。

そこには小山ほど大きく四本腕のゴリラの様なモンスター。それ

を従える、大きな蛞蝓の様な存在。その前で今丁度魔族の男性が変性させられているところだった。

虚空から浮かぶ渦の様から飛ぶ出る触手を口に入れられた男性は、全身から鱗が生えていく。

「淫神様万歳」

まるで二本足で立つ爬虫類の様な姿に変わったそれは、精神すらも変わりガイスト達の長をたたえていた。

恐らくあのゴリラが米連の強化外骨格を相手にし絶滅させた主犯だろう。君は敵を観察しホール内を把握していく。

「どうする？　ふうま。ひとまず突っ込んでみるか？」

イングリッドの言葉に君は首を横に振る。ホールにあるシャンデリアに目をつけた君は、偵察ドローンを撤退させ収納。君が考える作戦を伝えておいた。

「そんなことしなくても、私とイングリッド様がいれば簡単に倒せる！」

勿論普通に倒せれば問題ない。

念のためという事を念頭に置いてもらった。

鞆から飛行攻撃型ドローンである、切り裂く翼をもったハンターを取り出した。大きなトンボのような形で、頭の先にはナイフのような鋭い刃を持ったドローン。それが今回の切り札になるだろう。

一先ずそれを浮かせて、部屋に侵入。こっそりと入っていくそれは、シャンデリア付近に待機させておく。

ここまでやって君はイングリッドに突入して大丈夫だと伝えた。

「準備は終わったようだな。ではいくぞ！」

「はい、イングリッド様！」

イングリッドは掛け声を上げながら、リーナを連れ部屋へ突入していく。君とアルカも続いて侵入。

君達を待っていたのだろう。後ろに爬虫類型の二足歩行の怪物と巨大な四つ腕のゴリラを従えた大型ナメクジ型ガイストが、君達を台座から見下ろしている。

「淫神様の作りたもうた儀式場までよく来たな。下等生物とはいえ、

あなどれないという事か」

「ここにいた従業員たちはどうした？」

大型ナメクジのガイストの言葉を無視して、質問を投げかけるイングリッド。君はこの後の戦闘の為に、アルカの後ろに着く。そのまま彼女の真つ白な背中に黒い霧を纏わせた手のひらをくつつけて強化。

「っん♥」

「彼らはすべて淫神の洗礼を受けたのだ。最後の一人は、ほれこの通り」

大型ナメクジがぬちやりという音と共に、爬虫類のガイストへ合図を送る。するとそれは両手を大きく振り上げた。

「淫神様を称えよ。称えよ」

「貴様」

イングリッドは、一階の従業員に生き残りはいないことを理解した様子だった。そのまま片手剣に炎を集め、振り下ろした。

「我らの組織に唾を吐いた罪を教えてやる！」

彼女の一言と共に、真つ赤な炎が大型ナメクジを襲う。その前に二足歩行の爬虫類が向かってくる炎の前に飛び出した。

「っ！ 何！」

飲み込まれていった爬虫類型ガイストが、イングリッドの前に飛び出し拳を構えていた。その拳は咄嗟にガードした彼女の片手剣の峰にぶち当たる。

「つく」

「称えよ。称えよ。淫神様を称えよ」

横方向に飛んでいくイングリッドを、爬虫類が両足で地面を踏んで追った。そのまま拳と片手剣が重なり合いぶつかり合う。

そこはちようどいい位置だ。君はイングリッドのいる位置を確認して、刃装備のハンタードローン

を動かしていく。君はあとはどうするか考えていると、

「イングリッド様！ このー！」

リーナがまだこちらを余裕そうに見下ろしている大型ナメクジへ向かって桃色の片手剣を振り下ろす。それから桜の花型の刃が飛び

出して、大型ナメクジを襲う。

刃が襲う前にまだ立っていた四つ腕のゴリラが、リーナの放った攻撃を受け止める。強靱な筋肉と毛皮に守られた怪物は、ある程度の切り傷が発生しただけだ。

リーナを見つめた小山のような大きさの四つ腕ゴリラは、にたりと好色そうな顔で笑う。そのまま、四つの腕で胸を力いっぱい叩いた。ドンツドンツという大きな音が広間に響き渡る。だが、それ以上に目立つものがゴリラの股間から生えている。大きく猛り立つ逸物は、四つ腕のゴリラがリーナに対して欲情している証拠だった。

「つぐひひひ」

「っひ」

小山のような巨大なゴリラから向けられる獣欲の視線に、リーナは一瞬身を竦めた。同時に君はアルカに声をかけた。

こくりと頷いたアルカはすぐに飛び出していく。

同時に四つ腕のゴリラが力を込めて、体を縮めた。次の瞬間、正しく飛んできたゴリラがリーナに向けて両手を向けていた。

「あつー！ しまつー！」

虚をつかれたリーナは片手剣で迎撃しようとするが、もう遅い。そのまま巨大なゴリラに捕まってしまう。

そんなことは君が許さない。

君の命令ですでに動いていたアルカが、ゴリラの二つの腕を受け止めた。

「っあー！ アルカ」

「リミッター解除。オーバードライブ発動します」

アルカの宣言と同時に、バチバチと体の回りに紫電が走る。君はそれを確認しつつ、リーナの背後に到達。

リーナに強化することを告げて、黒い霧を纏わせた手で触れる。

「ま、まで、ふうまー！ お前のそれは後で、つつひん！」

びくりと体を硬直させるリーナを無視して、君はアルカに視線を向ける。紫電を身に纏った彼女は、小山のような四つ腕ゴリラをそのまま両手で持ち上げた。



アルカに君はそのまま例の方向へ投げってしまうように命令。

「了解、主。ぶん投げます」

「つが、がつあああ！」

彼女の言う通り、ぶんツという音が聞こえそうなほど、勢いよくゴリラは投げ飛ばされた。

同じときに君は、イングリッドに向けて下がるよう大きな声で伝えた。

「……………」

君の声が聞こえたのだろう。イングリッドは爬虫類の攻撃をわざと受けて、その勢いのまま後方へ飛んでいく。

「……………」

首をかしげる爬虫類型ガイスト。

「馬鹿が！ 上だ！」

大型ナメクジが何か言うが、もう遅い。アルカが投げ飛ばした巨大な四つ腕ゴリラが、爬虫類型ガイストに向かって振ってきた。

「……………」

「つぐああ」

背中から降ってきた四つ腕ゴリラに潰される爬虫類型ガイスト。だが両方ともダメージが無かったようで、そのまま立ち上がろうと暴れ出す。

だが、君はすでに彼らにチェックメイトをかけていた。

ハンタードローンでクサリを断ち切られたシャンデリアが天井から落ちていく。そのまま起き上がるとした四つ腕ゴリラの強靱な胸に突き刺さる。

「つぐつああああ！」

痛烈な悲鳴を上げるゴリラ。だが、まだ死んではない様だ。胸に刺さるシャンデリアを抜こうと四つ腕を動かし始めた。

「させるか！ わが身に宿れ邪龍グニエル！」

イングリッドの気合の声と共に、龍の形をした真黒な炎が身に纏わりついていく。

「二体とも焼き尽くしてやろう！ 邪炎ノ龍爪剣！」

彼女の魔剣ダークフレイムが、バターを切るようにゴリラと爬虫類型ガイストを叩き切る。次の瞬間、魔界の業火が叩き切った二体を焼き尽くし、灰と化した。

「ば、バカな。リザードガイストとゴルゴボがこうも簡単に」

呆然と呟く大型ナメクジ型ガイスト。その隙を君達は逃さない。リーナに思いつきり行けと君は呟く。

「つくう。くらえー！ ナメクジの化物め！ ブロッサム・トルネード」  
顔を紅潮させたリーナが自らの片手剣を振り下ろした。桃色の剣から桜刃の大嵐が吹き荒れていく。それはそのまま大型ナメクジを飲み込んでいった。

「馬鹿な！ 我らガイストがこうも簡単に！ ぎやああああ！」

吹き荒れた桜色の嵐が収まれば、その場には塵一つ残っていない。同時、周りの肉色をした壁が解けるようにコンクリートへと変わっていく。

「やりましたよ！ イングリッド様」

「オーバードライブ。利用を停止します」

敵を打倒して跳ねる様に喜ぶリーナ。

オーバードライブで、巨大なゴリラを投げ飛ばしたアルカもそれを見て力を抜いた。

「つく、なんとか倒したか」

灰となった敵を見て、邪竜を送還していくイングリッド。顔が紅潮し、息遣いが荒い。邪竜グニエルの反動で発情しているのだ。君はそれを知っている。前に解消の手伝いを行った事があった。

だが、今君はそれどころではなかった。

「っはっはっあ、主。ちゅむう、んんっ……んうっ♥ 主の唾液美味しい♥ じゆるっう、ちゅう♥もつとくください♥ ちゅ、ちゅう♥」

君の視界がアルカの黄色の瞳で覆われていた。彼女に深い口づけをされている。しかも対魔忍スーツから君の肉棒を取り出し、擦り上げている。端的に言えば、発情したアルカに襲われていた。

君は急いで黒い霧を肉竿へ纏わせておく。

オーバードライブ後の反動で彼女は、激しい性衝動に駆られてい

る。

舌同士の粘膜接触による刺激。君の口内の唾液が甘露の水であるように、舌で奪い取られていく。興奮したアルカの肉弾頭を握る指が激しく前後に擦る。肉剣の先端に指が触れてすりすり擦れ合う。その刺激に君の熱い塊はいきり勃つていく。

「ぢゅれりゅ、んっふううっ ♥ 主、申し訳ありません ♥ もう我慢できません ♥」

アルカは、ゆっくりと君を地面へと倒していく。硬く冷たい感触が、君の背中から伝わってくる。

顔の前から彼女の美麗な顔が離れ、腰元に移動していった。

「あう、私もふうまの強化で」

倒された君が声が出た方を何とか見れば、リーナも地面に腰を下ろして息が荒いようだった。紅潮した顔で荒く息を吐き、彼女は自身の体を抱きしめている。柔らかそうな巨胸がリーナの細い腕の上に乗っていた。

君の強化は魔族に対して効きすぎるぐらい効いて、発情を促すという事を思い出していく。

君が現実逃避している間も、アルカが股の間の肉刀へ顔を近づけていた。

「っふ、っふっっ ♥ 主のチンポ ♥ はっあ ♥ 牡の臭い ♥ つすっっっっん ♥」

彼女の激しい息遣いが肉筒に当たり刺激となる。ふんふんと鼻息あらく、君の肉塔がアルカの顔へ乗る。ほっぺの柔らかかな肉に、君の肉鞘の先が当たり形が変わっている。

彼女の熱い吐息と亀頭を指が擦る刺激で完全に臨戦態勢となった。

「あっはあ ♥ 大きくなった主のチンポ ♥ ガチガチっチンポ ♥ 熱くて素敵です ♥ ああっっっん ♥」

君の肉棒へアルカが大きく口を開けてしゃぶり出した。唾液で満たされた口内へと招き入れられる君の熱い肉竿。

「じゅりゅりゅ、りゅっぶ ♥ 主の美味しい ♥ つんじゅ、じゅぶじゅ

ぶ♥」

じゅぶじゅぶと激しい音を鳴らすフェラチオ。肉筒全体が飲み込まれて、股の間にアルカの長い鼻が当たる感触。喉奥に鬼頭が当たり、痙攣した内壁が擦られる快感が君を襲う。

君達の行為を見ている二人も喉が動くのが見えた。紅潮した顔が君とアルカの行為を凝視している。とろんと瞳が溶け始め、熱を持った視線が君たちに突き刺さる。

様子を見ていたイングリッドが君に幽鬼のように近づいていく。アルカの隣まで歩き、腰をペタンと降ろした。

そのまま褐色の顔を紅潮させて君の熱い塊へ近づけている。

「私にも舐めさせてくれ♥」

「じゅるるっ♡ んっぶ♡ どうぞ♡ あっむん、りゅりゅ♡」

頼まれたアルカが、少し肉剣の隙間を開けた。イングリッドは君の金玉袋の方へと顔を近づけていった。

龟头だけをアルカが口内へ入れ、舌で舐めしゃぶられる快感が君を襲う。陰囊にイングリッドの熱い吐息が当たり、鼻先が柔らかな皮に埋まった。

「んふーっ、っふ〜♡ つはあ♡ 雄の匂いい♡ すんすん♡ 濃くて、すごい♡ あっむ、もご♡」

「っん、んっぶ、りゅりゅっ♡ 主のビクついてきてます♡ つむ、つぶっじゅりゅ♡ じゅぼっぼ♡」

君の袋の根本で、イングリッドの褐色肌の顔がくっついた。紫色の唇がしわしわの茶色い袋を啜える。

龟头を舌で舐め、唇で挟むアルカの動きが段々と激しくなってきた。唾液が零れて、彼女の口元を汚す。

君の金玉を頬張るイングリッドの姿を、リーナが見つめていた。リーナの瞳がウルウル潤み、はあはあ吐息が荒い。

「イングリッド様、すごい」

「あっむ、つぶ♡ リーナ、あまり見ないでくれ！ つはっむ、くりゅっくりゅ♡」

イングリッドの懇願とは裏腹に、リーナはじっと見つめていた。君

の亀頭をアルカが音を立てて舐めしゃぶり、イングリッドが金玉をくちゆくちゆとじつくり転がしている。

「私も我慢できない」

一言言うと、君に近づいて肉塔の根とアルカの顔の隙間に顔を滑り込ませた。根元のくびれにリーナの舌が伸びていく。

そのまま根本付近の肉筒へとリーナは舌を這わせていった。アルカは亀頭を啜え込み、イングリッドは君の袋を味わうように口内で動かしている。

「んんん、りゅりゅりゅっ ♥ 主の膨れてきました ♥ じゅぶつ、じゅつぽじゅぽ ♥」

「れろっんえろ ♥ どう? ♥ ちゅっちゅ ♥ 気持ちいいか? ♥ れろろえろろ ♥」

「あむ、ぷぷっはあ ♥ ああ、リーナまで ♥ 悪い金玉め ♥ はっむ、んんんくちゆくちゅ ♥」

アルカの唇が伸び、亀頭にほほ粘膜が当たる感触。

リーナの根本へのキスと舌舐めによる快感。

イングリッドの金玉袋を口内で転がされていく快楽。

王族でも味わえないような3人からトリプルフェラに、君の精液がどんだん上がっていくのも感じた。

そろそろ出そうな事を伝えた。

「じゅっるっりゅっはあ ♥ 主のザーメン ♥ 出してください ♥ っちゅっちゅ、れりゅれりゅ ♥」

「んんちゅちゅぶ ♥ ふうま ♥ 出せ、射精しろっ ♥ ちゅっちゅっ、んちゅちゅ ♥」

「むぶ、はっむっん ♥ 貴様の精液 ♥ っだっせ、だっせっえ ♥ っふっ、っちゅっぶ ♥」

股間から聞こえる精液懇願。同時に肉棒全体を三つの唇が這い、異なる快楽が君を襲った。

腰からくる電流のような快感を受けて、君はそのまま発射する。

「っはあっああ! ♥ 主の熱いのがかかってきました ♥」

「っちゅっあああ! ♥ ふうまの精液がかかって ♥」

「んっあああっあ！♥ 熱い精液が降り注いでくる♥」

発射された白濁液が全員の顔を汚した。イングリッドの褐色の肌に白濁液が散らばる。アルカの白い肌やリーナの茶色い髪の毛にも君の牡液が汚していく。

三人の顔や髪の毛に降り注ぐ白濁液は、君の肉鞄から徐々に勢いを墮としていった。

「っああ♥ はっあ、ん♥ 主の精液、美味しい♥」

「んっあ♥ イングリッド様もお顔が汚れて♥ 奇麗にします♥ っれえ、っりゅれろ♥」

「っあああ、リーナ♥ 髪の毛まで汚れて♥ っんっれえ、えろれりゅりゅ♥」

呆然とする三人。リーナがイングリッドの肌を汚す精液を舐めて取る。イングリッドも彼女の肌に付着している液体を舐めとつていく。

二人のある種のレズ行為を見て、君の肉剣に力がすぐに戻っていく。

いち早く意識が戻ったのはアルカだった。彼女は立ち上がり、まだ起立している君の肉弾頭へ腰を下ろし啜えていく。

「っはっおああああ♥ 主のっおお♥ あっつくてえ♥ っすごい

♥ あっあお♥」

「あー、ずるいー！」

先んじたアルカを非難するような声を上げたリーナ。イングリッドも不満そうに無言でほほを膨らませていた。

それでもアルカは我慢できずに、肉竿を膣で啜っていた。

腹筋が割れている筋肉質な彼女の膣壁のキツキツな締め付けは、君の肉棒が取れてしまいそうなほどだった。

「ふぐうううっ♥ も、申し訳ありませんっう♥ うっあっお、っん♥ オーバードライブの反動でっえっあ♥ 我慢できませんんっお♥」

謝罪しながら腰を激しく動かしていくアルカ。彼女をフォローするため、二人に君はこちらにくるよう伝えた。

彼女達は素直に君の言う通りに動いていく。

イングリッドは君の片手の上あたりまで移動。リーナは君の顔の上に乗るように腰を開いていた。彼女の真っ白な肌の中にある赤い膣口と垂れ気味の柔らかそうな巨乳。絶景だった。

「っうう恥ずかしい♥ でっも、我慢できない♥」

「こ、これはあくまで、反動の解消の為だ♥ 勘違いするなよ♥」

リーナが腰を下ろして、イングリッドは君の指の上に腰を下ろした。二人とも憎まれ口を叩きながら、指や君の顔の上に赤い肉唇を下ろしていく。

目の前の愛液を垂らす肉壁に向かって君は舌を伸ばす。意外と濃いしょっぱい液体が君の口内を潤していく。

同時に指を咥えしやぶる濡れた肉唇の中で動かしていく。

「んんっ、あん♥ ふうまが♥ っあっあ、あっあんああ♥ 私の食べてる♥ うふっひ、っひっいん♥」

「はっあっい、んんっ！♥ クリトリス♥ っうっひ、っおん♥ いじるっなあ♥ っあっうんっん♥」

イングリッドとリーナの艶声が、広間に新しく響き渡る。

イングリッドのぷっくりと膨れるクリトリスを覚えている感覚で探り出し弄る。中の弱い所も君にはすぐにわかる為、指でこすり上げる。

目の前のたらたらと愛液を垂れ流す淫唇に舌を突っ込んで味わう。柔らかな肉壁が、君の舌を締め付けてきた。

肉剣を締め上げるアルカの膣内を、君は腰を上げて削り奥の子宮口を持ち上げる。

「ん、ぐ……っあ！♥ 主のっお、チツチンポっお！♥ おおっおっ！♥ がおっ っぐまでっえ！♥ っえひいっ！♥ きてっますっう！♥ っうっおっおっ！♥」

「っんっあうん！♥ 舌がっ……あっい！♥ っいつっあ！♥ な、中で動くうっ！♥ っやっああっあい！♥」

「っひっぎっい！♥ っそ、そこはっ……っあ！♥ っあっぐぐ！♥ よわいのっお、知っているだろう！♥ うっおお！♥」





「あああ！♥ 力抜けてしまったあ♥」  
「おっ、っおおお♥ つんっひっついん♥ 私も力が入らないい♥  
♥ いっひ」

絶頂し、力を失った三人をどかし君のやりやすいよう動かす。

一先ず君はイングリッドから指を引き抜く。頭の上で腰が抜けたように座り込むリーナをどかした。

君の目にアルカが息も絶え絶えになっている様子が見えた。彼女から肉棒を引き抜く。

そのまま片手にいる君に体を預けるリーナを動かして、イングリッドに重ねた。

リーナの真っ白巨乳と、イングリッドの褐色おっぱいが重なりつぶれるのが見えた。白肌と褐色肌のサンドイッチの出来上がりだ。

「んっあ♥ 貴様、何をするっあ♥」

「っひあ♥ イングリッド様、申し訳ありません。力が入りません」

君の目に重なったリーナのお尻とイングリッドの太ももが現れた。その横で白濁液を膣口からだらだら流すアルカが横たわる。

まだまだそそり立つ君の肉刀を、リーナとイングリッドの重なる膣口に向けた。

真っ白なお尻と褐色肌の股は君の欲望を燃やすコントラストになる。

このまま入れる。君は宣言の通り向けた肉竿を挿入していく。

「お、おッ、ッッッ！♥ ふうまのがっ……一気におつくまでえんっひ、いああっ！♥ やっぱり、おつきい♥ おっ、っあっああ！♥ つや、ぬかれっちゃ♥」

2、3回擦ったら抜き、下の褐色肌に囲まれた赤い肉花卉へ肉塔を入れていく。

「っほ、っおおおお！♥ ちんっぽ、ぎっだっあああ！♥ おおおっぐ！♥ あつくでえっ、オマンコやけっりゅっう！♥ うっい、ひっいいい！♥ っだめだ、抜かれるとっ♥」

折り重ねた二人に交互に入れていく。

二人とも抜かれまいと膣内の肉壁が必死に君の肉槍を啜え込むところはそつくりだった。

すでに絶頂を迎え蕩けたイングリッドとリーナの膣内は君の肉筒をたやすく迎え入れていた。

「お、っおおお、っ！♥ 入れられただけで……ああ、お、っ！♥ ゴリゴリけっ、ずられてっ♥ ひあああああっ！♥」

「お、っあ、っ、ッほお、おく！♥ またはいつてきつだあ、ッ！♥ こんなもの、っお！♥」

感觸の異なる魔族の上司と部下の膣内を、君の肉刀が征服している。真つ白な肌と褐色肌が君の股に何度もぶつかり合う。

「んっぎゅうううッ！♥ しきゅううう！♥ さっあっおお、っお！♥ 持ち上げられてっえ！♥ んっ、っかは！♥ お尻、揉むなあっ！♥ あっぎっ、お、……ッ！♥」

リーナの柔らかかそうな体に等しい膣肉は君の肉棒をやわやわと締めてくる。

彼女の真つ白なお尻の肉を君は片手で揉む。どこまでも沈み込みそうなほど柔らかかな肉だった。

「っお、っほおおお！♥ ごっえええ！♥ っえっひ、ッいい！♥ あいかわらずう、やつばっ！♥ おご、お、ッ！♥」

イングリッドの能力と同様に溶けそうなほど熱いヴァギナに君は肉槍を挿入。大量の愛液が君の肉鞘から股に伝わり垂れていった。

両方の違いを味わえる。そのことに君の暗い征服欲が燃え盛るのを感じていた。

「主、私にもお願いします♥」

横にいるアルカも息を整えると、君を誘うように膣口を指で開いている。だからだと君の白濁液が垂れ出していた。

期待通りに、彼女に指を挿入して動かす。

「っはっあ♥ 主の太い指がッ♥ あ、ああああおッ♥ 私の中で暴れてます♥ あっああ、ううッ♥」

膣内を占める君の精液を擦り付けるように指で掻き乱していく。ぶちゅぶちゅと淫らな水音が、アルカの膣内から聞こえてきた。





シなるのが聞こえた。

時機に君の射精が収まり、三人の牝を見る余裕が生まれる。

息も絶え絶えにイングリッドやリーナが呆然とし、アルカが君の体に身を合づけているのがわかった。

「んんっあゝッ ♥ チンポ汁、すごい ♥ つはあつはあああつ ♥」

「あつああゝつ ♥ おおなかつあ、あつつい ♥」

「つはっへえ ♥ あっひい……ッ、ッ！ ♥ ……っあ ♥」

力の抜けたアルカが、リーナの上に仰向けに倒れる。ちょうど、三人が重ね餅のようになっていた。淫乱な重ね餅の光景に、君の肉棒は再充電。バキバキに固まり反り返る。

上手くアルカの体を君の腕で固定して、女体鏡餅を完全に固定。

まだ絶頂の余韻に浸る三人の体を、君は蹂躪していくことにする。

我慢する必要はない。

絶頂の余韻に浸る三人の膣内へと順番に入れていく事にする。鍛え上げられたアルカの体に合う強烈な締め付けをまず味わう。

「おつぎいゝゝッ!? ♥ ま、まつてくだつ、ああさい！ ♥ あつがあ

♥ さつきイツたばかりですので、え ♥ ああつはあ ♥ 壊れしま

ますっう!?! ♥」

黄色い瞳で見つめての、金髪を振り乱す彼女の要求を無視して、君は腰を動かし続けていく。

次にアルカの下にいるリーナに肉剣を挿入。上にいる彼女に反して、リーナは柔らかな肉感をしている。奥底まで入れると、肉竿全体を柔らかくしかし確実に締め付けてきた。

「っひ、ああゝゝゝッ!? ♥ つま、まつたあつ ♥ あつ、あああ！ ♥

まつてえゝゝゝッ ♥ お願い、一旦腰を止めてえええ!?! ♥」

手をバタバタ降りまして、茶髪の少女がお願いをしてくるが、君は聞く気はなかった。何度か擦って向きを変える。

次に一番下であおむけで横たわるイングリッドへ肉弾頭を叩きつける。一番熱を持った膣肉が、君の肉筒を蕩けそうなほどの温度で啜え込んできた。

「おゝおッゝゝッ!?! ♥ 今イツたばかりだからやつ、やめッ ♥

おゝぎつぐうう！♥ だめだつあ！♥ おおおつ、おぼえてろおお！♥

脅すような声色のピンク色の髪で見つめてくる褐色美女の睨みつけから目を逸らして、君は肉剣を叩きつけていく。

三人とも違う膣内を君は楽しむ。すでに絶頂を迎え限界に近いイングリッドとリーナ、アルカの体を君は最後まで貪りつくすつもりだった。

三つの牝肉から香る性の香りが、君の鼻奥に突き刺さり理性のタガを外していた。

「んゝんゝんゝ つぎゆううう！♥ こわれえツ！♥ んゝへええツ！?? こわれますからあ、つああああゝゝゝツ！??」

「んゝあゝあゝあゝあゝ！??♥ つお、おっぱいでもくちでもするからつあ！♥ あゝおゝおゝツ！??♥ しますからつ、あああああ！??♥」

「んゝおゝひいいゝいいゝん！??♥ このつおおおお！♥ おっおっ、おゝほお！?? 本当について、解っているんだろうなつああゝ ああ！??♥」  
甲高い悲鳴と重い艶声が混ざった嬌声が、君の脳内に甘く響き渡る。

王族ですら見れないような淫靡な鏡餅を君が味わっていた。この光景は君だからこそ見られるものだ。絶景だった。

君という様々な組織との関係がある者しか見られない女体の鏡餅は、征服欲や性欲などを大いに満たしてくる。

その興奮のまま、君は力の限り腰を激しく動かす。すでに何度もイキ続けている三人を見て君は、完全に理性のリミッターが消し飛んでいる。

絶頂地獄に嵌められている、イングリッドとリーナにアルカの膣内は何度も激しい収縮をし、君の肉棒の排泄欲求をすさまじく刺激していた。

「え、エラーがあゝつ、あゝああゝあゝつ！??♥ おゝごっお、おおおツ！??♥ おおつ、起きそうですからあ！♥ ああつあゝつあゝ！♥ チンポつオ、一回止めてくださいいいゝい！??♥ ついぐうううう

ううう!!?」

「いついぎつ、ひいいいい!!?」 つお おお、腰を動かさないでつくく  
く!」 ♥ もつおおあ、むイ、イ!」 ♥ 本当がいい、いい!」 ♥ あ  
っ、おっひつ ♥ しんじやうう くくつ!」 ♥ イキシんじや  
ううううう!!?」

「ん、お、お、おっ!!?」 ♥ わ、わかつたっ!」 ♥ ああああ、ああ  
!」 ♥ なにもしないつつ、おっお!」 ♥ ほお、お、おおツ、ツオ!」 ♥  
やくそくするううう!」 ♥ い、うっあ!」 ♥ アアア、ツアアクメ  
くる、ツ!」 ♥ んお、ツ、お、おおお!!?」 ♥

三人から命令やお願ひ等が、段々と涙声での懇願に移り変わって  
いる。

イングリッドやリーナとアルカは汗を振り乱し涙を流して、気をや  
り続けていた。君から見えるアルカやイングリッドは、目をひっくり  
返ってよがり狂っている。リーナも上のアルカを持ち上げるぐらい  
反り返っていて、微かに赤い舌が君から見えているほどだ。

牝達の汗や潮吹き等の体液が君の体に当たりきらきらと輝く。

君の目の前にある女体の山が激しく痙攣し、腕や足をピンつと伸ば  
していた。

本気を出せば君を簡単に葬り去る三人の女を、君の肉弾頭で牝に落  
とし快楽で気を狂わせている。

男の征服欲を刺激する光景に君の牡欲が登っていく。

褐色と白色の三段重ねの肉体は、極上の快楽を君に与えていた。

「つううぎゆううう、うう、う!!?」 ♥ もうっ、おお、おおほお、ツ!!?  
♥ だしてくださっ!!?」 ♥ ひやひいつい、い、い!!?」 ♥

「ううう、ううううアあ、あ!!?」 ♥ せめてだしてっ!!?」 ♥ ひやつ  
ぐううう、う、つも!!?」 ♥ 終わってえ!!?」 ♥

「ん、お、お、お、くく、ツツツ!!?」 ♥ な、何もしない、い、いあ、あッンお  
っ!!?」 ♥ い、っ、ぎッ、♥ 出してくれえ!!?」 ♥

三人の懇願を叶えるため、全員の膣内を肉筒でこそぎ落とす様に最  
後まで腰を激しく振る。感触の違う二つの膣肉から来る激しい収縮  
で、君の肉竿から来る排泄感が一気に高まった。

まず一番勢いのある白濁液をアルカへ吐き出す。

「おほお、 おお、 おおお!?」  
おっへえええええ、 え!?」

アルカは大きく開いた口から舌を限界まで突きだして白目を向いた。彼女の口から獣のような悲鳴が響いていく。

今日一番の締め付けから力を込めて引き抜き、リーナの対照的に柔らかな膣内に肉棒を入れて精液を放出。

「っひっいいい、 いっくっ!?」  
子宮に精液あだつでるううう、  
うう!?」

イングリッドに覆いかぶさるように抱き着いたリーナは、喉を振り絞るような悲鳴を上げている。腰が何度も震え、柔らかい尻肉がぷるぷる痙攣していた。

柔らかさとは正反対な啞え込み離さないような勢いのある膣内から引き抜くと、一番熱いイングリッドの中へ熱い塊を叩きつけた。そのまま残りの白い濁流を放出し、体の内側を君の体液で汚していった。

「ッ!?」  
かっつはッ!?」  
お、 おおおおッ!?」  
オマンコ満たさ  
れてッ!?」  
アクメぎっだっつあああ、 あお、 お、 お!?」

抱き着いてきたリーナをイングリッドも同様に抱きしめて、足指の先までピンと伸ばしていた。びゅっびゅっとならば潮吹きも吹いてる。褐色顔にある紫色の唇から断末魔のような重い悲鳴を上げていた。

最後のイングリッドの膣壁が君の肉棒を食いちぎらんばかりに収縮していた。

排出欲求も収まり、さすがに少し萎えた君の肉槍を抜き出す。

君の目の前で痙攣したまま、嗚咽のような声を上げる牝肉達が山と  
なっている。意識はすでに飛んでいるようだった。

「へああ、 つうつう、 あっあ……ううう」

「ああっ……っあ……っ、 っ、 っ、 っ」

「おおおっ、 くくくっお、 くくくっ、 っ」

息も絶え絶えな美女三人の鏡餅は君の欲求を多いに満たす。満足



！

君は久々の満足感のまま、両手でガッツポーズをしたのだった。

## 七瀬舞

ガガガつと君ともう一人を守る周りの白い球体状の壁から銃撃音が聞こえた。

地面に着きそうなほど長い白髪を二つに纏めた美乳の少女。破れた対魔忍スーツから見える白い素肌を、引っ張ってきた大きなコートで隠している。体をすっぽりと隠すほどの大きさのコートは何とか敵から奪えた物だった。

ワインレッドの瞳を持つ七瀬舞の能力で、君は今籠城を行っていた。周りを紙でできた結界で覆っている。

他の隊員達を逃す為、君たちが囷になった。

しかし、敵の攻勢が激しく君達は逃げきれずにいる。何とか舞の結界で籠城を行っていた。

既に君は黒い霧の力で真っ白な髪にワインレッドの瞳を大きくした目の前の少女を最大限まで強化している。

「っん、このままだと」

舞の紅潮した顔の表情が険しい。先程からずっと激しい攻撃に晒されていた。鉄壁を誇る彼女の結界でも厳しいものがあるのだろう。

マイの背中に置いてある手に、限界ギリギリまで黒い霧を集中。

「っあ、うっ……ん、ふうっ」

舞の口元から漏れる甘い声を君は意図的に無視。結界内に籠る甘い匂いが君の肉棒を煽る。

勃ちそうになるのを抑えて、君は彼女を励まし続ける。

先に逃した仲間達が助けを呼びにいつている事を伝えた。

「っそ、そうですか」

君の言葉を聞いた舞はチラリと視線を動かした。

何故か、君の半勃ちになった股間に視線が刺さるのを感じていた。半分ほどでもズボンを膨らませる程君の息子は大きいのだ。

「まりちゃん先輩、ごめんなさい」

ボソリと君に届かない声で、舞が何か呟いた。どうしたのかと君が聞く前に彼女の行動の方が早かった。

「紙気・絶対隔離領域」

舞の残った服の隙間から、さらに紙が溢れ出していく。それらは周りの白い壁に張り付いていった。

まるで中の君達を隠すかのように、完全に覆い尽くす。すると先ほどまで聞こえていた銃弾の当たる音や戦闘音が一切聞こえなくなった。同時に外の景色も紙の色に覆われて見えなくなった。

「んあつ、ふっ……ふっうっくく」

一度大きく息を吐くと、舞は君の方へと振り返る。

大きなコートで全身を隠した彼女の足部分の網タイツが、所々破れているのが君の目に見えていた。

「ふうまさん、それ出してください」

君の股間の物を指差して宣言。紅潮した舞の顔が君を睨んでいる。思わず君は、えっと聞き返してしまう。

「しらばつくないでください。他の人から聞いてます。ふうまさんの黒い霧のパワーアップは、性行為をした方が爆発的に効果が違う事を」

既に君の知り合いでは公然の秘密をして広まっているようだ。もはや諦めた。

君は一応、彼女に対していいのかと聞いて見る。

「……仕方ありません。生き残る為です」

彼女の同意に、君もたしかに仕方がないことだなと後押しする。

顔が紅潮し息も荒い舞は、君の黒い霧の力で発情していることは明白だった。強力な感覚の増強に、君の言葉での後押しで簡単に堕ちてしまう。

「どうですかふうまさん。私の体で欲情してくれますか?」

はらりと体を隠すコートを舞は地面に落とした。破れた対魔忍スーツから彼女の素肌がしっかりと見える。

彼女の形が美しい乳肉にすらりとしたお腹が君の目に映る。

前部分の多くが破れた服装はどこかフェティシズムを唆る格好だった。

答えの代わりに君は黒い霧を纏わせた肉棒を取り出して見せる。

既に完全に勃起した君の肉剣が現れた。

「これがふうまさんの」

舞が君の肉槍を熱い視線で貫く。君の肉竿に吸い付くように彼女が近づいた。

そのまま彼女の小さな手が君の熱い塊に触れる。舞のワインレットの瞳に高い鼻の美麗な顔が君の目の前に届く。

「あつあ……あつい」

君の肉刀に触れた舞がボソリと呟いた。細く小さい指が君の肉鞘に回るが、指で囲みきれずに隙間がある。

彼女の小さな指や手では君の勃起したペニスを掴み切れない様だ。

「おお、おつきい」

熱を持った言葉が、彼女に口元から溢れた。

そのまま君の肉筒を見つめ続ける。

おそらくどうすればいいのかわからないのだろう。君はそのまま擦って欲しいと伝えた。

「こうですか？」

君の言う通り、舞は君の肉弾頭を擦っていく。優しくゆっくりと動く指は、明らかに経験無いぎこちない手つきだった。

読書友達であり多くの任務をこなした仲間でもある彼女との仲を、ある種汚すような行為に君の暗い欲望が燃え盛るのを感じた。

その暗い欲望に後押しされるままに、君は目の前にある顔へ接近していく。

「あ、ふうまさん、ちゅっ……んんっあ、ちゅくっつ」

目の前にある舞の顔に口づけをした。

赤い色の瞳が閉じられ、白髪の髪が君の顔にさらりと掛かる。シャプーのいい匂いが君の鼻に香る。

薄ピンク色の唇を君が初めて触れるのを、舞の態度から察することができた。

「んふうっ……ああ、ふ、うまさん。んっあ」

一度唇を離して、舞の体に優しく触れていく。

掌で隠す様に彼女の白い胸を片手で揉みしだいた。

もう片方の手も舞の股間へ伸ばして摩るように触れる。

胸を揉む手から彼女の体温が上がっていくのが解り、君の肉柱が更に昂る。

「ふあっ、あっ ♥ 胸もあそこも触られて ♥ あっ……っは、あうう ♥」

片方の乳房をマッサージのように触れていく度に、舞の柔らかな口元から甘い声が響く。十分感度はいいようで、膣口を触れる君の指がどンドン濡れていくのが解る。

濡れていく指で彼女の膣口を擦るだけでも、彼女の体が小刻みに震えていく。

「うっ、くう……んっはっあ！ ♥ ふ、ふうまさんの気持ちよくしますね ♥ あっあ ♥」

艶声も出して感じる舞は君も気持ちよくさせようと、激しく手を動かす。肉棒から出る我慢液が、彼女の指を汚す。君の熱い塊を這う指からくちゆくちゆといやらしい水音が聞こえだす。

「っあ、ああ ♥ 気持ちよくなってますか？ ♡ つあ、んっ！ ♥」  
彼女の喘ぎ声を上げながらの質問に、君は頷くことで答えた。

ぬるぬるした液体を潤滑剤に、舞の手コキがはげしくなってくる。君も負けじと彼女の体をいじる指を激しくしていく。

舞のレースが付いた片手が、君の対魔忍スーツを縫るように掴む。  
「あっ、んっ……そこ、いい ♥ あっい、んんんっ……っふ、うまつさん ♥」

名前を呼んだ舞が目を閉じて、唇を尖らせた。明らかなキス待ちの表情へ、君は顔を合わせた。

柔らかな唇が再度君の口元に触れる。

「んっちゅっうう、くっちゅ ♥ つあ、つちゅ ♥ んおっ、んんんっ！ ♥」

舌を侵入させてきた君の顔を、彼女は目を大きくして見つめた。

ワインレッドの瞳が広がって、君の片目に映る。対魔忍スーツが彼女の手のひらでしわになっっていく。

君の肉輪を摩る舞の手が戸惑いで止まった。

「んっ、つつっ ♥ つちゅ……れる、っあん♥」

戸惑うように君の舌に合わせて舌を動かしていく。優しく舐れていく彼女の舌の動きはまだ何も知らない少女のようだ。

まだうぶな少女を自身で染めていく快感に、君の暗い牡欲が刺激されていく。

どこまでも自分本位な牡的欲求が燃え上がる。舞の胸や膣口を弄る指の動きをさらに激しくさせていく。

「ひゃ、んっあや♥ つむちゅっはあ……つき、キスしながらっあ♥ つちゅ、んっぶ、っ ♥ 胸もあそこも弄らないでください♥ つあ、れっちゅ……んっれる」

彼女の懇願を無視して、まだ誰にも染まっていない少女の体を味わっていく。揉んだり摩るだけで随分と感じている舞の体を、君で染める為に指の動きをさらに強めていく。

君と舞の口内で唾液が交換され離すと、淫靡な透明な橋が架かる。「はっぶ、れりゅりゅ……ンンッ ♥ い、意地悪です♥ それでしたら」

唇が離れると蕩けそうなほどに潤んだ舞の瞳が、君を睨むようになくなった。

負けじと舞も、君の肉筒を再度擦り上げていく。それでもまだ、こすこすと肉槍を指で上下に擦らせることしかできていない。そんな彼女が頑張っつて君を気持ちよくさせようという行為、が一番の快樂となっていた。

どんどん感じさせていくため、舞の膣内へ慎重に指を挿入する。だれも侵入したことのない肉壁が、君の指を拒むように挟み込む。

「んっいっ ♥ うっあ、ふうまさん♥ うう、なにかっあ……こ、これっええ♥ ふっくっううう♥ つお、お腹から登って」

快樂の蓄積に戸惑いの声を上げている舞。まだ感じた事のない絶頂を味合わせる為、君は前方にある彼女の胸の中心にある乳首を捻った。同時に膣口の上にある肉突起を押して、膣内を一本の人差し指で擦る。

「あっあ、やっあ♥ つひっひい、なにかっあ、きます♥ くるっく

るっう♥ きちやいまっあっああああ！♥」

ぎゅうと肉弾頭を握った舞が、どつと愛液を滴らせ全身をフルフルと震わせていた。君の指に透明な汁が降り注いでいく。

肉竿を縦るように握られて、君の腰の中心へと電流のような刺激が走った。

「んっうああああ！♥ な、なんですかこれっえええええ！♥」

初めての絶頂に戸惑いの叫びを上げていく。ぎゅうぎゅうと君の指を食いちぎらんとばかりに舞の膣内が締め付けてくる。彼女の絶頂と同時に君も牡欲のタガを外して迸る。

「っおっつ、んっぐうう♥ あああ、あっつ♥ つあはあ♥ ふうまさ

んのっおお♥ 熱いのがっ、体にかかってっえ♥ またきっちや、う

うううんんっ！♥」

下の肉棒から間欠泉のように吹き上がる白濁液が、彼女の体を汚していく。真っ白な粘質の液体が胸やすらりとしたお腹にぶち当たり溜まっていく。

その度に舞の体が激しく痙攣し、膣口のしぶきが噴き出していた。

「っふっあああ！♥ んっお、っうっふっう♥ ふっうう♥」

君の白い間欠泉が収まると、舞の体の痙攣も徐々に収まっていく。体の快感を吐き出す様に、彼女の口から大きく息が吐かれた。

「っはっはあああ♥ つは、っふう♥ 今のが絶頂なんですか」

舞に君は今の現象の答えを聞かせた。どうやら絶頂すら初体験だったようだ。霞掛かった赤色の瞳が君を見つめる。濡れたワインレッドの瞳は、まだ処女の彼女だけが出す可愛らしい色気を感じた。

まだまだ元気な君の肉槍はそれに答えていきり立つ。

「っうっふう。……っあ」

息を整えた舞が君のまだ直立した肉柱へ視線を送る。彼女は一度君の精液で汚れた自身の体に目線を送った。

すべすべと輝く肌が、君の精液で汚されている。まだまだべっとり と付着した白い粘液は彼女の体中に残っていた。

舞は自身のお腹にくっついた君の白濁液を指で擦る。粘着質の白濁液はお腹から指へ移動した。指に付着した精液をそのまま口に運

んだ。

「あ、つむちゅ♥ はむ、れつちゅ♥ ちゆるちゆる、んんんっ♥」  
黒い霧を纏った肉弾頭から出た牡欲を舐めて体内へと入れていく。  
そのたびに彼女の体がふるふると小さく痙攣していく。

甘露のように君の精液を取り込んでいく同年の女の淫靡な光景が君の瞳に映りこむ。

「れつろ、はつああん♥ これ、すごいですね♥」

強化され高揚したまま、舞は忍法を発動。残った背中側の服から何十枚の紙が出現。そのまま周りの結界に付着していく。さらに強化された結界はどんな攻撃にも揺るがないだろう。

このまま結界内で過ごし応援を待てばいいだけのはずだった。

「これで……っ♥」

大丈夫という本来続くであろう言葉は出なかった。

彼女は君のまだ勃起した肉剣へと熱い視線を送り続けている。

「っはっあ、ああ♥ つふっふ♥」

息は荒く一切君の肉槍から視線をそらさない。君の黒い霧による感覚の強化で明らかに深く発情していた。

あと一押し。君は言葉で舞の背中をそっと押すことにした。

まだ敵の攻撃は続いていることやいつ救助の部隊が来るかわからないことを伝える。もう少し強化する必要があるという事を最後に伝えた。その必要性はない事は君がよく知っているが黙っておく。

強化方法は舞も知っている。つまりそういう事をしようと遠回しに伝えた。

「っうっうう」

躊躇いの声を上げる舞。それでも彼女は君の肉棒から視線を一切逸らしていなかった。熱を持った視線が君の肉筒を貫いている。

君はいつもの魔法の言葉を伝える。生き残るためにも仕方のない事なんだ、と……。

瞬間一度だけ舞は下を向いた。

「本当にごめんなさい、まりちゃん先輩」

ぼそりつつぶやいた言葉は君に届くことなく消えた。



彼女の両手が君の肩を纏るように掴んだ。

そのまま君の顔を、舞の白髪の髪が額に張り付きながら見上げてくる。

「ふうまさん。お願いします。こんな状況ですけど、私の初めてもらってください」

彼女は濡れたワインレッドの瞳で君を見つめた。君はこくりと頷く。

そのまま舞の細い腰に手を伸ばして支える。彼女の体を誘導して、膣口に君の肉竿を触れさせた。舞の細く白い足が、君の腰を挟んで纏りつく。

いやらしい甘い香りが立ちのぼっていた膣口がくちゅりと水音を奏でた。

「ふっう、ンンっあ」

入れると君は伝えた。亀頭がわずかに彼女の膣口から侵入。

まだ硬さのある陰口がつぶつと肉槍の先を啜えた。

「……………」

数瞬間の間、舞の紅潮した顔が頷いた。それを見た君は黒い霧で包まれた肉竿を、ゆつくりと彼女の中へと入れていく。

押し出すような抵抗感を無視して、愛液に濡れた膣内を君の熱い塊で征服していく。

「ん、んんっ……………あ」

少し苦しそうに舞が呻いた。処女特有の硬い膣内を進み、軽い抵抗感が君の亀頭に触れた。

一度腰を止めた君の顔を見つめて、彼女は再度こくりと頷き肩を掴む手にギュツと力が入った。

「ん……………っくう。っふふ」

ゆつくりと進み、君のペニスが純潔の証を破っていく。

完全に破るのを感じると、君の顔を見上げる舞の顔が少しうれしそうに微笑む。

赤い液体が、君の肉剣を這うように垂れていった。

「っつう……………っあ」

破瓜を終え、肉棒が最奥まで進んだ。亀頭に硬い抵抗が当たり、子宮口に触れたのが君にはわかった。力が抜けたのか、肩を掴む彼女の手のひらが君の背中へ移動していく。

「っはあ、あああ」

ぼんやりとした瞳で舞が君を見つめる。対面座位の姿勢で君達は見つめ合う。

そのままゆるゆると彼女の膣内を労わるように腰を動かす。

「んっはっあ、っああ ♡ ふっうまさんんっ……き、キスしてください ♡」

舞の可愛らしい懇願に答えて、優しく唇を重ねていく。柔らかな唇が当たり、白い髪の毛から女の発情した甘い香りがした。

「っちゅっちゅ ♡ これ、すきです ♡ あっ、ちゅちゅ ♡」

ただ触れ合うようなバードキスが、彼女のお気に入りのようだ。何度も唇を合わせて、舞の緊張を優しく解いていく。

腰に回していた両手を後ろに回して、彼女の真っ白なお尻を揉んでみる。

「っちゅっあ、っあ ♡ お尻、きもちいい ♡」

黒い霧で包まれた両手が、彼女の硬めの尻肉を刺激していく。

ぐにぐにとゴムまりの形を変えるような感触が君を楽しませた。

「はあ、あひいつ……っいい ♡ っはっあ、あ〜っあ ♡」

尻の形を変える度に、膣内が君の肉剣をぎゅむぎゅむと絞る。

軽い腰の動きと連動するように苦悶が混じっていたものが、甘く艶やかな声色へと変わっていく。

そろそろ大丈夫かと思つた君は、お尻を持ち上げるように彼女の体を上下に動かしていく。

「んっくっひい！ ♡ っふうまさんのっお……太くて、おおつきい  
いっい！ ♡ っいあ、つくうん ♡」

舞の初めての膣内を君の肉鞘で蹂躪していく。段々と彼女の表情が快楽で溶けていく。

初雪を初めて踏みしめるような快感が君の胸に広がっていく。

「ふっ、んっああー！ ♡ 中でっえ、動いてっ！ ♡」

君の体を確認するように、舞が君の体に抱き着く。君の背中に居た彼女の手が縋りついて離さない。

君の体で彼女を支えながら、お尻に回している手で持ち上げるように動かし続ける。

「つやつあ んっふっう……くううん！」

舞も君の肉棒で確かに快楽を感じているようだ。君の熱い塊で掻き乱す膣口からぐちゅぐちゅと淫猥な水音が鳴っていた。

鼻にかかるような甘い声色が、君の耳を楽しませている。

肉剣を動かしていると、奥底でぞりつとした感触を見つけた。そこを擦り上げてみる。

「つお、ひいひいん！♥ い、今のつお♥」

一瞬高い音色の嬌声が舞の口元から鳴り響いた。ぎゅむつと肉壁が君の肉竿を挟み込む。

確認するように彼女の体を動かしていく。明らかに舞の感じ方が変わる個所を君は発見した。

「ひゃああああ、つっあ！♥ あ、そこだめですっ……っうくくく！♥

あああつ、つつきいつひ！♥ きもちよすぎてっえ！♥」

そこを重点的に君は狙い撃ちしてみる。

無論そこだけはなく、周りを溶かす様に肉柱で反り上げる。

その度に舞は身を震わせて、君の体を抱きしめてくる。

「かつ、かひい……そこ、だめえっ！♥ だ、だめです、本当にだめなやつですからっあ！♥ つお、つおっひい！♥」

段々と彼女の声が重い悲鳴に変わっていく。

君の黒い霧の効果もあり、激しい快楽にさらされているようだった。

舞の開いた口元からだらだらと唾液が零れ、君の肩を濡れさせていた。

「あうう……おっツ！♥ おぼえちやいます！♥ まっ、つおうっんん！♥ ふうまさんのおぼえちや！♥ うううんんっ！♥」

君も彼女の体を動かすスピードを激しくしていく。

弱点の場所だけではなく、一番奥の箇所も亀頭で攻めていく。まだ硬い子宮口をガツガツを押し上げた。

抱き着く力が抜けて、君の肩から舞の顔が離れる。そのまま君の目の前で紅潮し濡れた瞳を見せていた。

「やつあ、つぶうくくくツあゝ！♥ ふうまさんのっ、しゅごいいい！♥ つおつくうん！♥ おつくう、きてますっ！♥ あくくツア、んああああ！♥」

子宮口も弱いらしく、舞の口端から唾液が垂れている。舌も開いた唇から漏れるように出ていた。

舌から垂れていく液が、君と舞の接続された膣口と肉筒へと降りかかる。そのまま陰口からこぼれる愛液と混ざり合った。

「うああくくア、ツああゝああ！♥ さっきのきてます！♥ んっひい、ついっぐ！♥ いっちゃいます！♥ ついい、つん……つんん、つおくくくつあ！♥」

彼女の言葉通り、膣内が激しく収縮して君の肉槍に強い快感を与えてきている。

肉壁のぞりぞりとした褻が君の肉剣に吸い付いて背筋を震わせるような快感が走った。

「あゝう、う……つふうう、つうん！♥ ふ、ふうまさんもっお！♥ おゝツ、ツア！♥ ふうまさんもっお、だしてください！♥ ついいいゝいゝ！♥ もう私いっちゃいますからっあ！♥ あ、ツひいいいいいゝいゝぐううううゝう！♥」

ぎゆうと膣肉による食い締めによる刺激で、君の尿道口から精液が噴き出していく。中へ白濁液を吐き出し、何も入ったことのない子宮内を染めていく。

舞は天井を見上げるように喉元を晒して体全体を反り上げた。結界の上に向けた口元から突き出した舌が君の目に映った。同時に舞の足が君の腰を力いっぱい挟んで離さなかった。

「うツア、つおっおゝ！♥ あついのが、おく、うくくくツツ！♥ お腹の中につい、入ってきてます！♥ つあくく、つおお！♥」

彼女の子宮に流れ込む精液による刺激が、彼女を再び絶頂へと押し

上げていく。

背中に回った舞の手がスーツを破れそうなほど握りしめていた。君の腰を挟む足もギシギシとなりそうなほど抱き着いている。

「ま、いい、ツいいい！♥ つぎついいおあ！♥ さっ、さつきからっあ、何度もっ！♥ ひつぐつう！♥ いってますつう！♥ んい、いうう、つぐツウくくッ！♥」

ねだるように繰り返し収縮する膣口に答え、君も最後までサーメンを中へと押し流す。

牡欲が子宮に注がれて、膣口から愛液が何度も迸っていく。

「っおっひいつい、うう！♥ なっがっあ、！♥ ああ、熱いいい！♥ くくッツア！♥」

全て射精した液体を舞の子宮は飲み込んでいく。

がくんと力が抜けた体が顔を戻し、君の目に舞の白目を向いた表情が映った。

「んうふうくく！♥ つふつふうう♥」

体中の痙攣が収まり、息を整える舞。ワインレッドの瞳も戻り、虚ろな視線が君を捉えた。

君は彼女に合わせて射精した為、牡欲はまだまだ残っている。その為、肉棒は大きくなったままだった。

収縮が収まった彼女の膣内で、君の肉竿は主張するように勃起したままという事だ。

「おつきいつ、はっああ♥ ふうまさん、まだできますよね♥」

それに気づいたのか、舞が君を見つめて確認するように呟く。どうやら君の与える快樂に捕らわれたようだ。

無論君は頷いた。すると、舞は淫靡な笑みを浮かべる。腰を挟んでいた足が離れて、同じように手のひらも君の肩に移動した。

「んっあ、っあ、！♥ つふう……こ、今度は私が動きますね♥ ああっ、っんっぐ！♥」

今度は地面に足をつけて、君の体を跨ぐ体制に変わった。

そのまま腰を激しく上下へ動かしていく。その度に君が出した白濁液が彼女の愛液と混ざり、地面へと零れていく。

膾壁がきゆうきゆうと締め付けて、舞の腰が動くたびにバキュームのように吸い付いてくる。

「あつひいいいん！♥ ツおおお、おつぐつう……いいツ！♥ すごつお、いいい！♥ 中がつ、いっぱいになってますうう！♥」

ガツガツと激しく貪るような腰遣いが君を襲う。

普段の冷静沈着な性格は隠れ、君が与える快樂に従順な牝がそこに居た。

「あつはあ、あううう！♥ どうですかあ？♥ あ、つ、あ！♥ ふうまさん、気持ちいいですか？♥」

舞が目を合わせて、君に縋るように問いかける。快樂に溶けた赤色の瞳が、君の片目と合わさって動かない。

君は頭を上下に動かして答えた。

「んんっあ♥ 本当ですか？♥ えっいいい！♥ えへへ、うれしいです♥ んんっう、ンンツア！♥」

淫靡かつ母性を感じるような柔らかな笑みを舞は浮かべた。思わず君は恥ずかしくなり、目の前で可愛く揺れる胸の薄いピンク色の突起物に歯を当てた。少々意地悪のつもりで噛んでみる。

「ひゃあああん！♥ い、いたっ！♥ ああつ、あああ♥」

君の予想に反して、彼女は艶めいた悲鳴を上げた。明らかに痛みだけで無く、快樂を感じている様子だった。

思わず君は噛みながら口角を押し上げる。

「ち、ちがいますっ♥ い、いまのっはあ、いたかつたんですよ」

君の邪悪な笑みを見たのだろう。焦るように舞は首を横に振りながら弁明する。

勿論君は聞く気はない。

「本当にいたかったただけですかっあ♥ つひ、やあああ！♥」  
ぺしんとお尻に回した手で叩いた。

彼女の声色は明らかに艶めいている。

膾壁も君の肉槍を食いちぎらんばかりの勢いで締め付けてきた。

「やつあ、ああ、乳首とれちやいますからっあ！♥」

そのまま乳首を噛む力を入れる。傷つかない程度に強く噛んでい

く。

「つおおくくッ、お尻もつ、叩いちやだめです!♥」

手でお尻を何度も叩いていく。真つ白な雪のようだった尻肉が赤く腫れていく。

何度も首を横に振り否定しているが、涎で濡れた口から漏れ出る言葉は甘く蕩けていた。

「ひっいいいん!♥ ふっふうまさんツア、はっあ!♥ 意地悪、意地悪です!♥ つおひん♥」

自身の懇願を無視し続けられて、舞は快樂の悲鳴を上げていた。君を睨む赤い瞳も涙で濡れて迫力はない。

「つあくつるつう!♥ ひややつああああああ!♥ つあつあ、力があぬけつてしまいましたっただああ♥」

一度大きな悲鳴を上げると、舞は君に体を預けた。掴まれた肩に体重がかかっているのを感じる。

舞の真つ白でスリムなお腹が何度も痙攣していることから、一度イっているのを君は察する。

だが、まだ君は射精していない。

お尻を叩くのを辞めて乳首から口を離し、君は尻肉を力いっぱい握りしめた。

「つやつあ、いったつあ♥ つお、お尻、とらないでくださいっいつひ!♥ ひあああ!♥」

そのまま力の限り、彼女の体を持ち上げる。ちょうど目の前に舞の顔が浮き上がった。

君の意思に気づいた舞が、涙にぬれた瞳で見つめてくる。フルフルと彼女の顔が横に震えている。

「ちよつとまつてください。い、今いったばかりですからっあ♥」  
彼女の懇願を君は無視。そのまま振り下ろし、力の限り動かしている。

がつがつと舞の子宮を持ち上げるように突き上げて、膣内を亀頭で削るように擦り付けていく。

「つおひひひッアンひい!♥ ほっお、ほんとうについ!♥ ツア、

ひっぎっいいっお♥ つお、おかしくなりますからっあ♥ あゝゝゝんぎッ!♥」

君が与える激しい快樂に、舞は重い悲鳴を上げていた。

目の前で彼女の美乳が上下に揺れている。その度に君の目の前で、ピンク色の肉突起が揺れ動く。

そこに向かって顔を差し出す。舞の乳首を君は何度も噛みつくように啜えていく。

「ついい、いたいのについて!♥ ついひあああゝああゝ!♥ きもち、きもちいい!♥ これっえ、へんになっちゃいます!♥ うううううゝうゝうゝ、あああゝあゝあゝ!♥」

既に何度も軽い絶頂を感じているようだ。

ぶるぶると痙攣し、舞の体が仰け反る。同時に君の肉剣を啜え込んでいた膣壁が急速に狭まり締め付ける。

君も射精に向けて、狭まり拒む膣壁を削りつき上げていく。

「ひゅッ、おゝゝゝッ!♥ おおっおっもっお!♥ も、おだしてくださいいいい!♥ いっぎいいいい!♥ ふうまさんのっお、だしてくださいい!♥ んおゝッおお!♥」

彼女の射精要求に君は答えた。

奥底に龟头を叩きこんで牡欲を流し込んでいく。すでに大量に入っていた子宮へ膨らませるように注ぎ込んだ。

菌形が残らない程度に君は乳首を噛む歯に力を入れた。

「つぎっいい、いったっああああゝあゝ!♥ いっだっいいいいっいい、いっぐつうううゝ!♥」

痛いのと気持ちいいのが混ざる悦樂で、舞の瞳は白目を向いてよがり狂う。

君の肩が力いっぱい掴まれ痛いぐらいだった。

「つうつうあゝふっ、ひ!♥ つおおゝゝッ!♥ ゝゝゝゝッツオ!♥」

口から出る声も言葉にならず、ただ快樂の重い悲鳴を上げている。普段の可愛らしい面もアクメ顔に歪み、君の暗い欲望を楽しませていた。



子宮に最後までご馳走し君は膣内から肉棒を抜く。逆流することなく、子宮にたまった精液が舞のお腹を少し膨らませていた。

「つか、っはっはっあ！♥　っはっあ〜♥」

その衝撃で、彼女は意識を取り戻した。白目が元に戻り、ワインレッドの瞳が君を見つめ始める。

取り出した肉竿がちょうど舞の顔の前で揺れていた。

白濁液と愛液で汚れた肉剣に、牝の熱い視線が突き刺さる。

「っむっちゅう♥　んん、んれりりゅ♥　はあっ、はふう……んんっちゅれろろ♥」

そのまま舞は目の前の愛液と精液で汚れた肉筒を口にくわえた。

肉弾頭に舌を這わせて、汚れを取るようにきれいに舐め上げていく。

「んんっちゅう♥　きれいにしますねっ♥　ちゆるちゆる、っちゅ〜っア♥」

尿道に残った精液を口で吸いだしていった。

舞の献身的な奉仕で君の熱い塊はまた勃起していく。

「っちゅっちゅ♥　っああ♥」  
濡れた瞳で君を見つめる舞。

今度は彼女は地面にごろんと横たわる。そのまま膣口を君に見せるように、両手で広げてきた。肉色の陰口から、ちゅぶりと君の出した白い牡欲が漏れていく。

まるで牡欲を煽るような行為は、君の欲望を燃やすのに十分なものだった。

「っまだ、危ないかもしれませんから、ふうまさんのでもっと強化をお願いします♥」

彼女の目的を盾にした懇願に君は無論乗っていくのだった。

ぱらぱらと紙の結界が散っていく。君の装備品の鞆から来た連絡により、周りに敵はいないのはわかっている。

舞の髪が解け、周りの視界が晴れていった。

「っあ、舞ちやくん」

金髪で眼鏡をかけた赤い対魔忍スーツを掛けた少女が舞に近づいていく。舞の友人であり、君の知り合いでもある篠原まりだ。

彼女が援軍となり、周りの敵を打倒してくれたようだった。周りの血痕がそれを証明している。

「まりちゃん先輩！」

「舞ちゃん、無事でよかった」

まりは友人の舞の無事を本当に喜んでいようだった。舞も彼女に会えてうれしそうに微笑んでいた。

鞆に隠した消臭剤で先の行為は隠し通していた。何の臭いもない。地面にも証拠になるようなものはなかった。

「あれ、舞ちゃん。それどうしたの？」

「敵の攻撃で対魔忍スーツが破けちゃって。それでふうまさんが敵から奪ってくれたこれで隠してるの」

舞の体をすっぽりと隠すコートを、まりが指さした。着ている理由をちゃんと舞は説明していく。それだけの理由ではないことを君は知っているけども……。

「そうなんだ。ふうまさん」

舞の説明を聞いたまりが君に向き直り、

「舞ちゃんを無事に守ってくれてありがとうございます」

頭を深々と下げた。君は仲間を守るのは当然のことだから気にしないしてほしいと伝えた。完全に無事とは言い難いし。

「いえ、ふうまさんのお陰もありますから」

もう一度君に頭を下げると、舞へと体を向け直した。舞の赤色の瞳とまりの空色の目が交差する。

「っさ、帰ろう舞ちゃん」

「うん、まりちゃん先輩」

舞を先導するようにまりが歩き出す。その後ろを舞が素直についていく。

「……………」

その後、一瞬だけ君に舞が振り返った。体を隠すコートの前部分を

広げる。

君の目に舞の白い素肌や尖り伸びた乳首が乗る胸。そしてぶつくりと膨れた腹部が目映った。その中には君の精液が大量に入っている。

「……………」

淫靡な笑みを浮かべた舞の懐から一枚の紙が飛び出す。その紙はそのまま君の手に飛び込んできた。それを見た舞は開いていたコートを閉じる。そのまま、まりの後をついていく。

君は手に飛び込んできた紙を広げた。

『また強化をお願いします』

紙には書かれた文字を確認した君は、にんまりと舞やまりには見せられない笑みを浮かべるのだった。

## クローンアサギ

五車町の田舎道を通って、君は今自身の家に帰っている最中だった。

用事も特に無く、久々に一人の時間を満悦しながらゆっくりと歩んでいく。

久々の平穏で静かな時間を味わう。ふーと大きく息を吐いて身体から力を抜く。

そんな事君には似合わないぜ、と世界が言ったのだろう。視線の先に突然土煙が発生。

君の猛ダツシュで向かってくる影があった。

その影は瞬く間に近づいてくる。君の知り合いの姿だった。

白髪を一部朱色にメツシュにして、大きな胸の前部分を晒す特有の服装の腰に長い刀を着けた、風来坊のふうま亜希だ。

「小太郎！ 此処にいたんだ！」

君を見つめるとすぐに体を掴まれた。そのまま肩にひよいと乗せられる。

見た目に反してパワーが強い。

「ちよつと手伝って！ お礼は後で何でもするから！」

返事を返す間もなく、彼女は君を担いで走り出す。

そのままあちこちに振り回されながら、怒涛の勢いで風景が移り変わる。その風景を楽しむ間もなく、途中人を弾き飛ばし、地下通路を抜けてようやく止まる。

そのままどきりと地面に落とされた。

後で覚えてろ。

「要はここなんだ。……ほら、早く立って、小太郎」

亜希は力なく横たわる君を急かす。ふらつく体に喝入れて、君は何とか立ち上がる。目線を上げると何らかの事務所らしき建物が目の前にあった。

足元がおぼつかない君を連れて、彼女は事務所らしき建物の中へ入っていく。

「どうだ？ 亜希？ 目的の人物は——あーっ！ お前は」  
「ふうま。久しぶり」

建物の中には君の知り合いが二人立っていた。  
背が低く黒い帽子を被ったゴシックぽい服装でトランジスタグ  
ラマーのミリアム。

顔を隠すフードをかぶりリボンで体の一部を隠すような大きく肌  
を露出させた服装のナーサラ。

幾つかの要因で知り合った二人は、何やらすり下ろしたリンゴらし  
きものや何らかの薬湯を持っている。まるで誰かの看病をしている  
かのようなだった。

「小太郎。知り合いなのか？」

色々あつてねと曖昧に誤魔化す。彼女達と知り合った経緯はあま  
り話すようなものでもなかった。

探るような亜希の視線を無視して、君は二人に久しぶりと告げた。  
彼女達も君を見つめると、納得したようにうなずいた。

「むう、まあこやつなら口は硬いしいいか」

「ふうま。物知り」

一言呟くと二人は奥の部屋に向かって歩いていく。  
どうやら其処に目的の人物がいるようだった。

君は亜希に、ここまで連れてどんな用事が尋ねる。

「うん。後、今回のことは誰にも言わないで欲しい」  
かなり勝手な言い草だが、まあいいか。君は亜希の願いを聞き入れ  
ることにする。

お礼がいろいろと楽しめそうだ。

邪悪な心理を隠し、君は解つたと伝える。

「それじゃ、こっちに来て」

亜希は君を先導して、奥の部屋に移動。その後を君はついていく。  
かなり簡易な事務所を通り抜け、奥にある部屋に入っていく。  
するとベットに横たわるフードをかぶった人影が君の目に映る。

体を全体を覆うフードでも、豊満な胸などは隠せていない。明らか  
に女性だった。

その女性を看病するように、ミリアムとナーサラが近くでいろいろ動いていた。

「くっそう。この魔法薬でも駄目か」

フードの女性に、ミリアム何やら手に持った薬を飲ませている。その横で背中のリボン状の触手で横たわる女性を支えるナーサラ。

「アサギ。食べて」

リンゴのすり下ろしたを乗せた触手を、フードの中へ褐色肌の彼女は突っ込んでいく。

まった。聞き捨てならない言葉が聞こえた。

ちようどはらりとフードの頭部分が外れていく。

其処には君の知る顔があった。

五車学園校長にして、最強の対魔忍。井河アサギと瓜二つの顔をしている。違いは本物よりも若々しい程度だろう。

君は亜希に目線を送る。彼女は微かに頷くことで答えを表していた。

君も噂程度には聞いたことがあった。ヨミハラに凄腕の探偵がいて、その姿は井河アサギに似ている。それは脱走した井河アサギのクローンらしいと言う程度の物だったが……。

「彼女を助けて欲しいんだ」

亜希が懇願するように弱々しい音色で囁いた。そのまま横たわるアサギ似の女性に近づく。額に張り付く黒髪を掌で払った。

露わになった額には、ピンク色に光るハートマークを子宮に模した紋章が刻まれていた。その中心には、デフォルメされた馬の顔が描かれている。

「アサギ。是の所為。寝込んで起きない」

「淫魔族の変異種、ナイトメアが扱う淫夢紋だ」

ナーサラとミリアムが言葉少なく、クローンアサギの状態を君に話す。

ナイトメアとは君の知識にも存在する。淫魔族が変化したとも、捕らえられた馬超が淫魔族に落ちた姿とも言われる珍しい怪物の一種だ。

直接戦闘に乏しい淫魔族の護衛をしていると聞くが。

「依頼で鷲津財閥の調査をしたんだ」

亜紀の話によると、鷲津財閥。中でもそのグループにある鷲津学園系統の調査をしていたらしい。グループの一つである聖修学園に手を伸ばそうとした時、ナイトメアと奇妙な怪物の混合集団に襲われた。そいつらは倒したが不覚をとりクローンアサギにこの淫紋が刻み込まれたとの事だった。

「本来なら淫紋を刻まれた対象とナイトメアの対決になってしまおう。だが、私とナーサラが入れば男一人をこっそり援軍に差し向けることが可能だ」

「頑張る」

「女性だと探偵と同様に調教されちゃう可能性があるんだってさ」

君が連れてこられた理由が三人から告げられた。

君も亜希からの頼み（御礼あり）を断る気は無い。

どうすればいいのか尋ねる。

「うむ。其処の探偵の額をくつつけて覆いかぶさるようにつ伏せで寝てくれ」

ミリアムの言う通りに、君は体を動かす。

クローンアサギの眠るベットに乗っかる。そのまま彼女の体に覆いかぶさるようにつ伏せになっていく。額と額を接触させた。

君とクローンアサギの目にナーサラのリボン状の触手が巻きつけられた。

「頼むよ。小太郎」

力無く眩かれた亜希の言葉を最後に君の意識は急速に眠りへと落ちていくのだった。

パチリと目を開く。どうやら、クローンアサギの淫夢に侵入できたようだ。

周りを見渡す。君は今ピンク色で染められた部屋にいるようだ。甘い香りが君の鼻に香る。嗅いだことのある匂いだった。

娼館でよく焚かれているお香の類。

つまり今君は娼館の一室に在ると言うことになる。下を見ればベッドに座っているのが解った。

「お待たせいたしました」

ガチャリと部屋の扉が開いた。扉から入ってくる一人の女性。

両手両足がクローム色の義手義足に置き換わっている豊満な体付きである全裸の女性。目的の人物であるクローンアサギだ。

乳首に付けられたピアスが、彼女の大きな胸の揺れと同じように揺れている。歩むたびにプルプル震える巨乳は、クローンアサギの若さの象徴だろう。

ビクビクとまるで怯える仔ウサギのような儂さで、彼女は君のもとへ歩んでくる。

「シミの無い真っ白な体が、君の方向へ歩んでくる。

手を伸ばせばすぐに触れそうなほど、近くまで来た。

へらっと媚びた笑みを浮かべて目の前で立つ彼女は、足を曲げて床に腰を下ろした。そのまま頭を地面につける。

裸のまま君へ土下座をして、単調な声色で君に告げる。

「この度はご指名ありがとうございます。娼婦のアサギです」

雪のような肌色の背中と烏の濡れ羽色の髪、もっちりとした柔らかなお尻が君も目の前にある。このままクローンアサギを貪り喰らいたくなるほどの色気だった。

今回、そうするわけにはいかない。依頼によって彼女の夢の中にいる以上、目的を持つてのセックスをしなくてはならない。

君は目の前で土下座する女を優しく立たせる。

「あの、お客様？」

夢の中での調教は心を折る為に激しい陵辱だけで心を溶かす様なものは無かったようだ。君を戸惑うように見つめながら、体がわずかに震えていた。

目を覚まさせる為、ついでに君に墮とす為。心を溶かす様な快楽を与える事にした。

立ち竦むクローンアサギを引っ張って、ベッドへ仰向けに優しく押し倒す。



「っあ」

覆いかぶさる君を見て、彼女は微かに言葉を漏らす。君には少量の恐怖の音色が混ざってるのが解った。

まだ濡れてもいない膣内に叩き込まれるとでも思ったのか、足を大きく広げたままの体勢で目を瞑っている。

彼女の予想を裏切り、君は目の前の唇にキスをした。震える柔らかな唇をそつと塞ぐ。

「んっむ……っふ。っあんっちゅ、ちゅ」

まずはうぶな恋人同士のように触れ合うバードキス。伝わってくる熱を帯びた甘い吐息とふわりと髪の毛からさわやかな香り。

何度も何度もぶるぶるした唇に触れあう。

段々と君を見つめる瞳が霞かかる。

「んっうう。ちゅむっちゅ、っあ♥」

クローンアサギから力が抜けていくのを感じた君は、胸に両手を伸ばす。触れると掌を押しつける張りがあり、強い弾力性を感じた。

メロンサイズの胸の中心にいるチャリチャリなる乳首ピアスにゆっくりと触れる。黒い霧を纏わせた掌は痛みを与える事無く快楽のみを感じさせていく。

「ちゅ、ちゅ……っあ、んん♥ ふっう、ちゅれろ」

唇から艶声が漏れ出すのを感じた君は、そのまま舌を突き出す。彼女の口内へ舌を侵入させる。

女の甘い唾液を味わいながら、痺れる様な快感を与えていく。

「れりゅれろ、っあん♥ つう、んっれっれ♥」

溶ける様な快楽を与えられて、クローンアサギが戸惑っているのが君には手に取るようにわかる。赤く紅潮し蕩けた薄緑色の目が君を見つめていた。

君の背中に震えながら彼女は手を触れた。肌の温かさではなく、鉄の冷たい感触が背中から伝わる。

「んちゅっば、っはあ……こんなのっお、っお♥ んっいいい、あああっ♥ しっ、しらないいいいい、つつくう♥」

プルプルを快楽の痺れを見せる彼女の股の間に、君は片方の手を伸

ばす。

膣口に指を触れると二チャリという感触を感じた。明らかに濡れた赤い肉花卉へ、黒い霧を纏わせた指をゆつくりと挿入させて優しく動かす。

今まで乱暴に犯されていた膣壁を、君の指で溶かし依存させ可愛がる様に愛撫していく。

「やつぁ……やめてえ♥ あひつう♥ こんな快樂、初めてっえ♥」  
ゆつくりと体の快感を高めていく。クローンアサギは戸惑う様に君の腕を止めようとする。だが、彼女の行動はもう遅い。

止める前に若々しく張りのある巨乳を揉み、膣内を掻き乱す。背中から腕に移動したクローム色の義手が、君の腕に力なく絡まる。

「きっひい♥ くっ、くるう♥ きちやうううう!♥」

既に娼婦の様な媚びた口調は消えていつている。

君の腕に縋りつきながら、薄緑色の瞳から快樂の涙を流していた。

余裕のない声色のまま、クローンアサギは高みに登っていく。

「んっぁぁあっ……いぎッ♥ ついいい、あゝくくッア!♥」

君の指を啜える膣腔がきゅーっと締まる。動きを止めようと窄まる膣壁に抗うように、君は中へ入れた指を動かし続ける。

鍛えられて引き締まっている腹筋がプルプル震える彼女の体を、君はさらに高めていく。彼女の体を君の思い道理に蕩けさせていく。

「ひっお、んぎいいっ!♥ つぁあ、まって、今っぁ♥ つひやつぁぁあ♥ いいい、いったからぁあ♥ あっ、うんっ!♥」

いった姿が綺麗だ、もつといかせてあげるよ。耳元からクローンアサギを褒め言葉を吹き込んでいく。

君は話した言葉通り、膣内と胸で動かす手を止めない。押しつけるように反発する巨乳を揉みしだき、締まる膣壁を擦る。

「やつ、んんっ……いつ、いいい!♥ そんなことっお、おお……言わないでえ!♥ くくっ、あゝあ……ッまたいつくつうううう!♥」

そのまま何度も甘イキさせて、体から力を抜かせる。クローンアサ

ギの体が引きつり揺れる巨乳から片手を離す。

ビツシユビツシユつと潮を吹く膣口から指を引き抜き、君の肉棒を向けた。両手でクローム色と肌色が混ざり合う肩を掴む。

綺麗だ、我慢できない、いれるよ。君は優しく宣言する。

「つううう……っ♥」

恥ずかしいのだろう顔を義手の両手で隠して、クローンアサギはこくりと頷いた。

彼女の肯定を受けた君は味わうように黒い霧を纏わせた肉塊を挿入していく。

「いいっあ……あ、はいつてくるっういっ!♥」

きゆうきゆうと締め付ける膣内を君の熱い塊が侵略していく。若々しい膣内は君の肉竿を啜えて離さない。

そのまま最奥まで入れて、子宮口を亀頭でこつんと叩く。

「っおっい……っいいい、つれられただけでえ!♥ いっく、っくうううう!♥」

ビクンと体を震わせるクローンアサギ。ぎゅうつと膣内も君の肉剣を強く締め付けてきた。

高めに高めた彼女の体はそうそう簡単に収まることはない。絶頂のパラメーターが頂点に近いまま降りてこない状態になっているのだ。

震える肩から両手を離す。絶頂を味わい力が入っていないクローンアサギのクローム色の両手を掴んで動かす。思ったより簡単に動かせた。

顔を隠すそれを開いて、君の視界に移す。

「っく、いっ……あうっ、ああっ♥」

君と彼女の霞掛かった薄緑色の瞳が交じり合う。

紅潮した顔のクローンアサギと君の顔を接触しそうなほど近づけた。

瞳が綺麗だ。どんどん彼女を褒めながら、腰を動かしていく。

「んっんんううっ、っい……いわないでっ!♥ つひいっく、いっくっッ!♥」

君の言葉攻めと何度も続く甘イキに、クローンアサギは体を翻弄されてようだ。アサギと同じ薄緑色の目から快樂の涙が流れ出していた。

きゆうきゆう締まる膣内で、君の肉鞘を何度も往復させる。

「ひっ、ひっぐうー！♥ あっひい、ひっううううッ♥」

彼女のクローム色の掌を君の指と手で覆う。指と指の間に指を重ねるそれは、恋人つなぎと言われる物だ。輝く義手は触れると冷たく感じる。

「おっ、ああああッ！♥ もっお、もうだしてっ！♥  
んっ、いいいつ…いつしよにいつてっえええッ！♥」

彼女の懇願に君は頷く。合わせる様に君は肉槍を奥底につけた。

何度もきゆうきゆう締め付ける彼女の膣内へ、精巢から吐き出される白濁液を流し込む。

「あっあっいいいいいいいいいつ！♥ つは、くくッ♥ 中、入ってくるっう！♥ おっ、ひいいい！♥」

背筋を反らして白い喉を見せながら、クローンアサギは自身の体を大きく波打たせた。

人工的な掌が君の指を掴んで離さない。

「はひいい、あああっ！♥ ザーメン流し込まれて、何度もいつぐうううううううう！♥」

精液を子宮に送り込むたびに彼女の体が何度も震えていた。クローンアサギの真っ白なメロンサイズの胸が揺れ続けている。

「ああああっ…っおっぐううう、にっいつ！♥ ま、だ…っ出てるっう♥ んんんんっ！♥」

最後まで送り込んだ精液と同時に彼女の腰が跳ね狩り身をねじった。そのまま倒れ込むようにベットに体を預けた。

「んっ、っおくくッ♥ つふくくッ♥」

掠れるような呼吸音が、クローンアサギの口元から漏れ出す。

いったん彼女の義手から手を離し、腰を両手でつかんだ。すらっと引き締まる肉体は触れると、思ったよりも鍛えられて反発を感じた。

息を整えるクローンアサギの体を持ち上げて、君の股の間に座らせ

る。

「つはあ、つふうう♥ つい!♥ ああ、まだやるの♥」

既に娼婦の言葉づかいではなくなっている。君の黒い霧の強化で、だいぶ元に戻ってきているようだ。

彼女は不安定な体を支える為、君の首元にクロームの輝きを持つ義手を絡めてきた。

君の顔を覗くように見つめ、微笑んでいる。

よく相手をするアサギと同じ感情の表し方だった。

そのまま完全に元に戻すため、君は言葉攻めと腰遣いを再開させる。

「あつ、あつ♥ あああああつ……ツア♥」

君は娼婦ではない、こんなに綺麗で強いのだから。

クローンアサギを正気に戻すため、何度も言葉を吹き込んでいく。

「ちつ、がっ!♥ あく、あつおっひっい♥ わ、私はっあくくくツ♥

んむ、んぶつ……ちゅつはああ!♥ ここの娼婦でしかなくてっ♥

おひいいいっ……ツオオ♥」

ちがう。

与える快楽を段々と上げていく。

彼女の口元から甘い嬌声だけではなく、重い悲鳴のような喘ぎ声が漏れ出す。

君が与える快楽こそが真実なのだ、クローンアサギの体に刻み込んでいく。

「つあへ、ああ!?!♥ ちがうううう!♥ うゝあゝ あああツ!♥

そつおおゝツ、おおおゝお♥」

クローム色の義手がぎしりと動く。縫るように抱き着いてくるクローンアサギは、虚空を見つめ舌を出して悶えていた。

巨乳が君の胸板に当たりふにやりと変形している。乳首につけられたピアスからは冷たさを感じた。

腰を何度も動かし、黒い霧を纏わせた肉筒で膣内を責める。それは触れるよりも彼女の体を強化していく。

「うつぐう、つおおくく!♥ つき、きすしてっえ!♥ んっちゅ、

れりゆつれる！♥ つお、んちゆうう！♥」

甘えるようにクローンアサギは唇をくつつけてくる。

こんなに凜々しくて優しい君は娼婦なんかではない。

口づけのさなかに、君は言葉と快楽を与えていく。

「んんっう、あはっ……くくっおつぎいいい！♥ わた

しっ、ついっおお！♥ わ、わたしはっ……っああ、くくっああ

あゝ！♥」

既に君は自由なんだ。こんなところに捕まっている場合じゃないだろう。

ナイトメアから君に依存対象を移すために、君は何度もクローンアサギに強い快感を体へ刻む。

君の肉弾頭の形を覚えようと、彼女の膣内が何度も収縮してるのを感じた。

「ああっそお、そうっうう！♥ んゝあゝあゝッ！♥ 私はも、お

あゝ！♥ つあうゝうゝうゝ！♥ 娼婦なんかじゃっあゝ！♥

ないゝいゝいゝ！♥」

重い悲鳴を上げだしたクローンアサギへ出し入れしていた腰の動きをどんどん激しくする。

淫猥な水音を奏でる膣内へ肉刀を叩き込む。締め上げるようなきつい膣壁を削り、肉剣の形を刻み込む。

獣のような絶叫を上げながら、クローンアサギは自身を取り戻していくようだった。

「っお、ごっおお！♥ 目の前をっお、っおおううう！♥ つ

じいいいいいっ、ろゝおゝ！♥ 白いのがちかちか光っでえゝ！♥

んゝっおおゝおおおおくくっッ！♥」

肉を激しく打ち付け合う音が部屋中に響き渡る。

激しく締め付け収縮する膣内は君の金玉でたまる精液のタガを外そうとしてくる。

途中で吐き出さないように、一気に腰を突き出し膣の最奥にある子宮口を突き上げる。

「おおおおおっ、おぐッウウウ！♥ ぐっる、っごれっえくくッ……

アクメくる、ぐるうううッ！♥　ぎっひゃっいッ、おお、お  
、おおお、おお、！♥」

君の体に力いっぱい抱き着きながら彼女は獣のような快樂の叫び  
声を上げる。反発力のある巨乳も君の胸板に押し潰されて震え続け  
る。胸板に乳首ピアスの冷たい感触。

同時に君も彼女の体内へ熱い白濁液を放出。

君の顔の横でクローンアサギは白目を向いて、淫猥なアクメ顔を晒  
してた。

「お、お、ッお、つぐう、う、う、！♥　ザーメンぎでるううッ！♥  
ザーメンアグメッで、まだいつぐううううッ！♥」

ギシギシと君の体がクローンアサギの義手で締め付けられる。君  
の腰に絡められた義足も力の限り抱き着いていた。

軽い痛みのお返しに子宮に君の精液を何度も送り込む。

「あ、あ、あ、あ、ッ！♥　まだでるのっおお!?♥　やつば  
……あ、っ、お、お、お、お、お、お、！♥」

送り込むたびに、彼女は下劣な唸り声をあげて肉悦に悶えていた。  
最後の精液の放出と同時にクローンアサギの体は大きく震える。

「っおっほお〜〜ッ♥　あ〜〜♥」

声にならない淫靡な呼吸音が彼女から漏れ出す。同時に段々と女  
体の震えが収まり出すのを君は接触する肌から感じ取る。

「っはあ、ああ♥　ふっう、っそう。そうよ。わたしは」

段々と呼吸をと整え、瞳を元に戻した彼女は虚空を睨み始めた。

正気を取り戻した声が君の鼓膜を震わせた。

「そうだ！　わたしはもう娼婦なんかじゃない！」

君の体に絡んでいたクローンアサギの義手が持ち上がる。君の後  
方に向かって掌を向けていた。

ぎゅいんと先ほどまで止まっていた義手の機能が動く音が聞こえ  
る。

「つぶれてしまええええっ！」

「ぎゃあああああ！」

後方から押しつぶされるような音と悲鳴が聞こえた。ナイトメア

の命の搔き消える雄たけびが部屋に響く。

同時にがらがらと視界の部屋が崩壊していく。

「ありがとう」

君の耳にクローンアサギの感謝の台詞が聞こえる。

同時に君の視界が真っ白になっていった。

「ん。成功」

「おお！ 戻ったか」

「探偵も助かったのか。よかった」

ミリアムやナーサラ、ふうま亜希の安心したような声が君の耳に届いた。現実に戻ったのかと目を開こうとする。瞬間、ガツンと頭に強い衝撃が走り、君は横に倒れていく。そのまま地面に落ちて、体に痛みが走った。

いってえええ。君は体に走る痛みのまま、沈痛な悲鳴を上げる。

「ご、ごめんなさい。目を開いたらあなたの顔があったものだからびっくりしちやって」

先ほどまで居たベットの方から声が聞こえる。先まで抱き合っていたクローンアサギの声だ。

地面で呻く君を見て、クローンアサギが体を起き上がらせようとしている。

だが、力が入らないのか全然動いていない。

「あ、あら？」

「たわけ。この間からずっと眠りっぱなしだったのだ。そう簡単に起き上がれるか」

「当分。安静」

ミリアムとナーサラが横たわるクローンアサギに告げる。

「だいぶ迷惑をかけたみたいね」

「いいさ。こっちも迷惑をかけてるからね。お互い様さ」

亜希とクローンアサギの言葉通り、彼女の仲間たちは一切迷惑とは思っていないようだった。

君も痛みが治まり、こっそりと起き上がる。邪魔をしないように、ベットの近くにいる三人の後ろに移動。そんな行動もベットに横た



わる彼女はすぐに気づく。

「貴方もありがとう」

クローンアサギは隠れるように移動する君に、感謝の言葉を告げた。

戻ってこれたようだ、よかった。君はうまくいったことを素直に喜んだ姿を見せる。

「ええ、本当に助かったわ」

「まあ、小太郎はこういう事の解決だけはうまいからね」

クローンアサギの感謝を上乗りするように亜希が皮肉気な言葉を発する。

あとで覚えとけよ。君はこの後しっかり仕返しをすることを心に決める。それを奥備に出さず肩をすくめて見せた。気にするなという意思表示だ

「それでもよ。あのまま行けばナイトメアに負けていたかもしれないわ。貴方のお陰よ」

微笑みながら君に感謝の言葉を告げていく。その視線は感謝の色とは別の熱を持っているようだった。

そういつてもらえると嬉しいと君も告げる。とはいえ、これ以上のお暇は無粋というものだろう。

君は亜希にそろそろ帰ることを告げる。無論君を五車迄運んでもらうためだ。お礼もしてもらわなければならない。

「解った。ナーサラちゃん、ミリアムちゃん。探偵の事よろしく頼むよ」

「解っておる。ナイトメアは去ったのだ。すぐに体も治る」

「看病。頑張る」

腰に手を当て胸を膨らませるミリアム。むんと手を大きな褐色の胸の前でガッツポーズをするナーサラ。

「もし、何かあったら言ってちょうだい。今回の借りを返させて」

最後に君達は連絡先を交換。

ナーサラとミリアムを残し、君とふうま亜希は探偵事務所から去っていくのだった。

ふうま亜希 ※はげしいSM・特殊プレイ注意※

先ほどまで居た探偵事務所から出て、色とりどりの光に満ち溢れたヨミハラの歓楽街を君とふうま亜希は歩いていく。

メツシユの白い髪を靡かせ、ヘトロクロミアの瞳は喜びを表す様にヘナっと垂れている。爆乳の前部分だけを隠す黒色の革製っぽいロングジャケットのような服装から、ノーブラであることは明白だ。

それを見て好色に歪むオークなども亜希の腰にぶら下がる長刀を見て、あきらめるようにどこかへ去っていく。

隣同士で歩む君達は無法地帯特有の危険から避けつつ足を動かす。肩を怒らせて歩くオークやスリを行おうとする者達の事だ。

「本当に助かったよ。ありがとう」

スルスルと人の波を避けながら、君の隣から感謝の声が聞こえた。

避ける度に揺れ動くメロンよりも大きい乳房は、亜希の鍛えられた胸筋に支えられているのだろう。視線がそちらに動きそうになる。後の楽しみのために我慢しつつ、彼女の左右色の違う瞳へ目線を合わせた。

ここまで急に連れてこられたのだからお礼は期待するよと君は答えた。今日は彼女に散々振り回されたのだ。本当に君は色々と期待していた。

「金はないから、体で返すよ」

余程クローンアサギが助かった事が嬉しかった様だ。だいぶ気が抜けているのが君にはわかる。

そう答えたらどうなるか亜希は知っているはずだ。なのにその言葉を言った。

これは誘っていると勘違いされてもしょうがない事だ。

勘違いする。

君は周りを見してみる。ちょうど目的の場所は近かった。

その近くまで歩みながらふうま亜希に近づいていく。

上機嫌で気が抜けている彼女は君の行動に気づいていない。

肩が触れそうなほど近くなると、君は亜希の肩に手を回した。

普段なら簡単に避ける彼女だったが、気の抜けているままに回した手で肩を掴めた。思ったよりも固い鍛えられた肩だ。

瞬間体を硬直化した亜希が、君を疑問符が付きそうな表情で見上げてきた。

「お、おい、小太郎。どうしたのさ」

戸惑う亜希に君は一言だけ告げる。今返してもらおうよ、と。そのまま歩く方向を横に向ける。

ピンク色の建物と向かい合わせになった。明らかにラブホテルの装いの建物だ。

ビクンツと彼女の体が大きく震えたのが、肩に回した腕から伝わる。

「いや、そういう意味じゃないんだって」

フルフルと顔を紅潮させながら首を横に振っている。

亜希の肩を抱く腕にぎゅっと力を入れる。彼女の肩が君の肩に触れた。それでも亜希はただ否定するばかりで実力行使には出ない。

体で返してくれるんだらうと問う。

「そういったけどさあ」

モゴモゴと口内で何か言っているが、彼女の手にかかれば君の腕など簡単に解ける。それ程の実力差があった。

それをしない時点で、亜希の意思は明確だ。

ついでに彼女の意地をもう少し解く事にする。

そろそろ強化のほども弱くなっているだらうと聞く。

「つう……うん」

下を向きながらコクリと頷いた。最近黒い霧の強化をしていない。亜希の強化具合も弱くなっているのは事実の様だ。

先のナイトメアの件でかなり昂ぶっているんだ、頼むよ。事実夢の中で射精しただけで実際には出していない。肉体的にはかなり昂るままだった。

君はそう頼み込みながら、亜希の黒色の手袋に包まれた手を掴み、ズボンとパンツに包まれた君の肉棒へ直接触れさせた。

黒い霧を纏ったそれは既に勃起している。革特有の触感が君の熱

い塊から感じた。君の肉塊は、レザー手袋を貫き亜希の白魚のような指に淫靡な熱を伝えた。

「……っん」

ゴクリと彼女の喉が鳴る。オッドアイの瞳が陶酔で濡れだした。

それを確認した君は、最初なんでもするって言ったよねと念押し。

霞掛かった赤と黄色の瞳は君を見上げる。そのまま首を上下に動かした。

「わかった」

肯定を受けて君は亜希の体を促す。肩を掴んだまま、目の前のピンク色の建物へ歩んでいく。

そのまま君に促されるままに、ラブホテルに入っていくのだった。

簡易のベッドとお風呂とトイレ付きのバスルームしかない安宿。そんな質の低さを表す様に、周りの部屋の嬌声やベッドのなる音が聞こえる。

そんな場所に亜希と君はいる。

君は体の昂りのままに、亜希の肩を掴み深いキスをしていた。オッドアイの瞳をつぶり口内を荒らす君の舌を、なすがままに受け入れていた。

「んちゅうう、ちゅつれろれろ……っじゆるじゆる。相変わらず、キス上手いな。ちゅばちゆる、っあつれつりゅれりゅ」

デープキスをしながら、黒色のロングジャケットを脱がしている。首元のチョーカーを外して白い肌を晒す。彼女の肌を包むレザーのベルトを外して前部分を完全に開ける。腕のファーに捕まり地面に堕ちずに、亜希の前方を完全開いているそれはある種のフェチズムを感じる。

晒された彼女の爆乳を手のひらで揉む。君の手よりも大きい真っ白な胸は、何処までも沈む餅の様に柔らかい。君の指を包み込むかのようだった。

中心では君の親指よりも太い乳首がむくりと起き上がっている。

ぷっくりと膨らむ乳首の頭に両手に人差し指を押し付けていく。  
押し付けた指から硬さと唾え込むような触感を感じ取る。

「んんんっう！　こら、小太郎！　そこはだつめだと、んっちゅ、こっあつれりゅっちゅぶ　♥　じゅっじゅる、れろっれっえ……んんん　くっくっあ　♥」

ヘテロクロミアの目を大きく見開いて、亜希は君を見つめる。君の腕をつかむレーザー手袋にぎゅつと力が入れられた。

乳首の頭をグリグリと押す人差し指がにゅるりと挿入されていく。乳首の中の淫靡なヒダヒダの触感を感じ取りながら出し入れしていく。

一度掴まって人体改造を受けた事がある彼女は、乳首すらも挿入できる穴になっっている事を君は知っていた。

「んっぶっむうう……ちゅうちゅっ、んっあっ　♥　ちよつとはっあ、えんりよとかっあぁ……ないのかぁ　♥　ちゅっちゅるる、っおんんん　♥」

亜希の抗議を無視して、そのままズボズボと指を出入りさせていく。

改造された乳首マンコは立派な快楽機関となっている。

黒い霧に包まれた人差し指は、感覚を増強して確実に快感を与えていく。

「むっちゅぶっう、んんんっぐ……じゅるじゅるるっう　♥　っぐっぐ、れっりゅれりゅ　♥　っぶっちゅっちゅっちゅ……っもっおっお　♥　んんんっお、くっくっ」

亜希がぐくぐくと腰を震わせた。君の口内で高らかな嬌声が響き渡る。

軽く甘イキさせた君は彼女の体から手を離す。ちゅぶんっつと乳首から淫靡な音をさせながら人差し指を引き抜く。

君の手にで支えられていた彼女は、そのままストンと腰を下ろした。赤と黄色の瞳は快楽の涙で濡れて虚空を見つめている。

君の肉棒の前にちようど亜希の白い爆乳があった。指よりも太い乳首はパクパクとまるで口のように、淫猥な様子をさらけ出してい

た。

黒い霧を纏い勃起している肉槍を乳首に押し付ける。

「つあ〜、つはあ♥ つあ、んんっあ♥ つうん♥」

蕩然としている彼女は、力無く一度だけ頭を上下させた。

肯定を受けて君は腰を前に押し出す。ちゅぷりと乳首が君の肉剣を啜えた。いささかの抵抗感を感じる。

何度か押し込むとそのまま乳首の中へ挿入されていった。餅のよ  
うな柔らかさと肉の抵抗感が君の肉竿を包み込んだ。

「つぎつい、だツア〜ツア!♥ 乳首ついいい、入れられたらつあ

!♥ つあつぐう!♥ だめなのがいい!♥ つぐつぐつる

うううううう!♥」

首を剃り上げて、亜希は君を見上げた。肉筒でニプルファックした  
爆乳が大きく震えるのを感じ取る。

快楽機関とされた乳首マンコは、黒い霧を纏った肉刀の挿入に耐え  
きれず、一度絶頂しているようだ。

君も膣内やお尻の穴などによる挿入とは全く違う挿入感を楽しん  
でいた。乳房の柔らかさにヒダヒダがうねる快感はどことも違う触  
感だった。

「つうつぐつう♥ つおつぎいのつでえ、ぢぐびごわれるつう♥

ひっついああああ♥」

さすがに全ては入らず、肉鞘の前半部分だけ挿入されている。乳首  
内のヒダヒダによる剃り上げられる刺激や普通では入らないところ  
に入れているという異様さによる快感。君の知り合いでもできるの  
は数少ない。

「つおおつほお……く〜く〜ツ!♥ つきついくつ、ひいつま!♥

まつだ、ふどつぐなつあああ♥ あ!♥ おおつごつれ、だめ

だあああ!♥」

昔立場など考えずに可愛がってくれた女。恐らく趣味とは違う君  
が今犯しているという優越感。しかもそこは改造されて彼女として  
は消したい過去だろう物で犯しているという悦楽。暗い欲望が胸の  
内で燃え盛る。

君も少しづつ精液が押しあがっていくのを感じていた。

「っおおごれいじょうっはあ、あああゝ！♥　っおつご、ごだつろっおお！♥　つもつうだっせつえゝ！♥　小太郎もっだっせつえええ！♥　んぎっいいいい！♥」

彼女も君をイカせる為、自身の爆乳を二本の白い腕で押しつぶす。レーザー手袋の手のひらで形を変えられたメロンよりも大きな乳肉は、君の肉塔を柔らかくも締め上げてくる。乳房内の壁が君の肉弾頭を反り上げてきた。

「あゝっあゝ、ごっつれつえながで暴れてつえゝ！♥　おっひっつい、いいい！♥　やつばっつい、っあああゝ♥」

締め上げた亜希も君の肉棒を強く感じ取っているようだ。体が小さく震え絶頂に上っているようだった。

ニプルファックを続ける乳内も肉槍を締め上げ痙攣しだしている。爆乳の柔らかい肉による奇妙なまでの締め上げと痙攣する乳首マスコに耐えられず、君は白濁液を吐き出した。

「おっ、おおおっ！♥　いっぐっうううう！♥　胸にだされっでえええ、いぐいぐいぐううううゝうゝうゝ！♥」

牝獣の喘ぎ声を上げオツドアイの瞳を白目にし、頭を上逸らして亜希は絶頂していく。見下ろす君の目に、快樂に歪んだ彼女の顔が見えた。

肉剣が乳首マスコで射精していく。だが、膣とは違い精液が入りきらずに逆流する。

乳首から君が出した白濁液は勢いよく噴き出ていく。まるで乳房からミルクが噴き出ていくようだった。

「っあっつっうゝゝゝっ！♥　っひっいいいいゝ！♥　っむ、むねがやけどっするううう！♥　んうううううゝうゝうゝ！♥」

歯をガチガチと鳴らしながら噛み締めて、亜希は絶頂の波に耐え続ける。

既に精液を垂れ流す乳袋へ君は最後の白濁液を出した。ぶびゅつと結合部から淫猥な水音と共にザーメンが流れ出す。同時に亜希の体が大きく震えた。

「っおっおおゝ！♥　っおっふう。　っふうう、っふう〜っ」

ガクンと力が抜けて、亜希は君の腰元へ体を預けた。そのまま何度も深呼吸。君の腰元に暖かな吐息が降りかかる。

柔らかな爆乳から挿入している肉刀を取り出す。

「っあっあ、ん〜っ〜っ♥」

ぶるんとメロンよりも大きな乳肉が震えた。

だらだらと乳首マンコから君が出した白濁液が流れ出していく。

力なくすぎる亜希の脇へ手を入れる。彼女の腕に張り付くベルトを開けて、ファーやロングジャケットを地面に下ろした。

「んっんん？♥　小太郎？♥」

問う声を見殺して脇を掴み、亜希の体ごと押し上げる。

思ったよりも軽い彼女の体を持ち上げると、君は背後のベットに腰を下ろした。ぎしりとベットの弾む音を。

鉄のように固くなった肉剣で、彼女の紐のようなパンツをずらす。

そのまま、しっかりと勃起した肉竿の上に亜希の膣口が乗っかる。

少しだけ上の方にあるオツドアイの瞳と君の目が合わさる。

「っお、っおい。ちよつと待つて欲しい。さっきいたっばかりっいいいい！♥」

彼女の懇願を見殺して、そのまま腰を下げさせた。膣内へ一気に肉筒が挿入される。

君の目の前に亜希の赤と黄色の瞳が移動。縫りつくように首と腰に手足を回されて、ぎゅつと抱きしめられた。

「んっあひ、いいいいいい!?♥　こっお、のお小太郎っ！♥　おゝっい

っっい♥　いきなりはっああ、よせっえ…ってっえ!?♥　っおお、

あゝっおゝ　っぐっうまだふどっぐぐぐ!?♥　ひっぎいいゝ　いいッッ

!?!♥」

子宮を押し上げる君の肉塔へ、チュパチュパと子宮口がキスを繰り返す。そのまま黒い霧で肉槍を強化。

さらに大きく太くなる肉弾頭は子宮口を貫く。君の亀頭が膣壁から子宮内へ押し入り、女性の大事な部分を犯す。



「おゝあゝ あゝ ああゝ あゝ ツア……っいい!?!♥ いぢばんおゝぐ  
までぎつだああゝ ああゝ!♥ んんっおおおゝ おくくくッ、ツツ!?!  
♥」

肉体改造されて頑丈になった亜希の体は君の本気に耐えられる数  
少ない人物だ。腹部が君の亀頭で押し上げられてぷつくりと膨らん  
でいる。

快楽の絶叫を上げて跳ね上がる亜希の体を、君は両手で抱きしめて  
抑え込む。

君の胸板で太乳首と爆乳が押しつぶされる。柔らかな肉の触感が  
君の胸板を擦った。

「おゝっおおゝ ツ……おゝ なかつ、やぶれてしまおううッ!?!♥

ああっはあ!♥ つまっだ、たりないのか……この体はっあ♥」

ゴツゴツとお腹を押し上げる君の肉棒で、亜希は確かに快楽に濡れ  
た甘い声を上げていた。

だが、それですら彼女にはまだ甘い様だ。

抱き着く亜希が君を涙で濡れたオツドアイの瞳で見つめる。

「んんっいい、っあ……まだっ、たりないんだっ♥ もっとお……  
んっお、っおおねがいい♥ もっど、してっえ♥」

亜希は君の腕を掴んだ。

君は力を抜いて、彼女の操作するままにさせる。

亜希は君の手を自身の真っ白な首元に置いた。君の掌をチョー  
カーが解かれた首にぐりぐりと押し付ける。

「はっあゝ ああゝ くくくッツア♥ あれやってよお♥ 小太郎♥」

彼女の懇願を聞いた君は、しつかりとその意図を把握している。  
首元にある手のひらに力を入れた。

柔らかな首が君の手で変形していく。何度か経験のある行為であ  
る君は正確に最低限の呼吸を残して、頸動脈を締め上げる。

「おっごゝおくくくッツツひゅ♥ かつひゅ♥ ご、ごれっえっ……  
ほっおゝ くくく♥ んっおお」

正常な呼吸を遮れながら、彼女の子宮と膣肉は君の熱い塊をぎゅう  
と締め上げた。

本来女性にやってはならない暴力による背徳感と征服欲求により、君の背筋をソクゾクとした電流が走る。

散々に改造しつくされ、すでに奈落の淵まで来ていると言っている亜希の体。それを君が完全に征服しているという悪徳。暗く燃え盛る欲望が君の胸の内を焦がすかのようだった。

にんまりと普段なら見せない悪の微笑みを君は晒した。

それを見た亜希も、君の同意するように笑みを浮かべる。

「つあ……ひゅあつあ♥ ごだつろ、つうつゝツオ……えっへへ♥ いっしょ、んつお……だつあつあ♥ ひゅゝゝつ」

彼女の媚びるような笑みの理由は君でも理解できなかった。

ただギュツともう一度亜希は君を優しく抱きしめる。理解できない行動に君はただひたすら腰の動きを強めていった。

首を絞められながらの、明らかに快感を感じている目の前のドM女へ肉棒を叩きつけていく。

「おおつ……ひゅっひゅつぐ♥ もっう……っだ♥ だつ……せえ♥ おんつ……ぎゅ♥ だつ……してええ、ごだろぅ♥ ひゅつぐ……ぐぅぅ♥」

窒息プレイ特有の肉槍が喰いちぎられると思うほどの膣内の激しい収縮。

恥骨をくつつけ合い、君の肉根まで膣内に埋め込む。

限界まで亜希の微かな懇願の声を聞いて、君は腰元の堰は一気に解き放たれる。

「ひゅっ♥ んつおゝゝゝツツ♥ ながにぎつ……でるぅ♥ ひゅ……つぐぅぅ♥」

子宮に精液を直接叩き込みながら、君はうまく首を絞め続ける。幾度かの彼女との首絞めセックスで、絶妙な力加減を取得していた。

オッドアイの瞳を瞼の裏に回して、亜希は白目を向き続ける。下劣なまでのアクメ面を晒して、亜希は君の体を掻き抱く。

「んいゝい……ツヒ♥ まっだつ……でてるぅつツ♥ んんゝつゝゝ♥ いっしきつが……つが♥ ひゅゝツ♥ とっ……ぶぅぅ♥」

掠れるような悲鳴を上げながら、彼女は君の体を抱きしめ続ける。胸の間でつぶれる亜希の爆乳がプルプルと痙攣。

小さな声とは裏腹に背中に爪を立てられ搔かれた。背筋を痺れるような快樂と微かな痛みが走る。

「おっおっおっ♡　くくくっあ♡　もっお……むっりいい♡　いはっ……ひっひっひっ♡　おっっ……おっおっおっ♡　っ♡」

ギュッギューツと搾り上げられる様な膣壁の強い圧力により、君は最後まで精液を子宮へぶっつけた。

最後まで精を吐き出した肉剣を締め付け痙攣する膣口からはしたなく潮が吹かれる。

「あゝふっ、つうっいゝゝゝっあゝあ♡　あゝゝっあゝゝ……ひゅっ、おゝっあああゝあ♡」

舌を突き出して白目を剥く亜希の首から手を離す。そのまま彼女は君の体を預けた。

「つかっはあゝゝゝ♡　はっはっあゝゝゝ♡　ひゅうゝゝゝ♡」  
意識ある呼吸音を確認した君は、膣内から肉刀を抜いて亜希の体から引いてベツトに預けさせる。

「あゝっ、んん♡　ぜっ、絶対今意識飛んだ♡　っあゝゝゝ♡　はっあゝゝゝ♡」

膣内から引き抜かれた快感で甘イキしている彼女の体はプルプルと小刻みに震えていた。

彼女の大きな尻肉も同様に振動している。

それに向かって力が抜けず勃起している肉竿を向ける。

お尻を掌でパシンと音を響かせて叩き、ケツ穴を差し出せと君は命令。

「おゝっ、っひん♡　っああ、っうん。これでいいかな？」

首絞めによる酸素不足と君から与えられた激しい快樂でトリップしてる亜希は、君が命ずるままにお尻に手を置いて左右に開いた。同時に湯部に引っ掛けられた紐のような白いパンツもずらされた。

尻の間にある窄まりが君の目に映る。左右に開いた尻肉に影響されて、パクパクと口を開け閉めしていた。何度かピンク色の中まで見

えるケツ穴。

君は亜希に覆いかぶさり、強化されて大きく太い肉筒をお尻の穴に一気に挿入。侵入してきた異物を排出しようと、直腸が押しつけるような蠕動運動を感じた。

バシンつと腰と尻肉のぶつかり合う音が部屋に響き渡る。

「ンギツ!?!」 尻の穴にいいゝい!?!」 小太郎の太く大きいのおお!?! はいつてぎだあゝああ!?!」

獣のような絶叫と共に、亜希は体を大きく逸らした。

君の胸板に彼女の背筋が触れる。

その隙を逃さず、君は彼女の首へ腕を回した。片膝をベットについて、うまく体重を支える。

「ああああつんつ……ぐひゅゝ!?!」 まゝだぐびじめつえ!?!」 ふつう、ぐぐううううつ ♡ お……つがひゅ ♡ おおおゝ♡」

チョークスリパーを受けた彼女は再び呼吸を遮られたか細い悲鳴を上げる。

君は自身の体を押し付けて、亜希の体をベットへ押ししていく。ベットと君の体重で押しつぶされる彼女の脇からつぶされた爆乳の白い肉があふれ出て、まるでつぶされるカエルのようなだった。

何度もぶつかる腰と尻の間から、肉の叩きつけられる音が部屋中に響く。

「こおおお……れえええ ♡ こつひゅ……おツ ♡ 目の前がっあ……真っ白にいい、光るう ♡ はげっしい、くるっしい……きもちいい、いいゝゝゝっ ♡」

巨尻を押しつぶすピストン運動と酸素不足で亜希は既に絶頂しているようだ。

子宮を腸内から押し上げるように激しく突きあげる度に、お尻の穴で肉剣が痛い程締め付けられていく。

「おおゝ おつほお……ゝゝゝッ ♡ おおおゝ つぐゝゝゝッ……腹のおっぐで ♡ 子宮に……っあつあ、当たるううゝうゝッ ♡」

横から亜希の顔を覗き込む。

白目をむいて舌を突き出す間抜けづらに君は征服欲と嗜虐欲求を

大いに満たされた。

「んっべええ、つぎゆ〜〜ツおっお♥ ついいつひゆうう♥ さつきがら…:…いつでるううう♥ いぎすぎるううう♥」

既に何度も意識が飛んでいる彼女は、か細い悲鳴を上げている。

飲み込んだ肉鞘を直腸と尻穴が強烈に締め上げてくる動きにより君は限界まで上り詰めていく。

君は腕を離して、お尻の肉へ腰を大きく叩きつけた。同時に君は肉塔からかけ上げるザーメンを大量に吐き出していく。

「がはっあああ…:…っおっ!?!♥ おっ おおっお?♥ つおおおっ おおおっ!?!♥」

大きく息を吐いた瞬間を狙った君が与える激しい快感。尻穴の奥深くで吐き出された精液は、亜希の体内を白く熱く染め上げた。

大きく開いた口元から重苦しい牝獣の咆哮が吐き出されていく。君に押しつぶされている体もガクガクと痙攣してベツトを軋ませている。

「おおおっぐ、つぐつううう!?!♥ せっえ、精液だされたあ♥ あああ♥ 尻の中つをおお、小太郎のでっ、染められるうううううう!?!♥」

ぎゆうぎゆうしめあげてくるケツ穴へ最後まで白濁液を流し込む。

奥から逆流した君の精液が巨尻の窄まりから、ぶっぼつと卑猥な音と共に排泄。

「おっつおっつおっ おおおおっ!?!♥ 熱いいいい、つのおまだでてるううう!?!♥ まっあ、まっだいいつつぐううううう!?!♥ つうう〜〜っ♥」

か細くなつていく喘ぎ声と共に亜希はベツトへ倒れ込んだ。

ベツトの下の方からアンモニア臭が香る。潮吹きだけでなく尿迄出して、意識なく彼女はベツトに体を預けている。

明らかに意識を飛ばしてか細く震える体へ君は腰を大きく打ちつけた。

まだまだ太く大きいままに、黒い霧で強化された肉棒は腸内から子宮を突き上げる。

尻肉が腰で叩かれて、ぶるんと大きく振動。ベットも大きな軋み音を奏でた。

「つおっお、くくくッ!?」♥ 小太郎っう? ♥ な、何するんだあ? ♥」

絶叫と共に亜希の体が一気に強ばる。背中から押し付けた胸板からそれを感じ取り、無理やりベットに押し付ける。

腸内でいきり立つ肉弾頭をグリグリと押し付けながら君は宣言する。

まだまだ出来るから耐えるようにと。

横から覗き込む君の顔へ、すぎるような視線を向けてきた。

「つむっりっい♥ も、もうむ、むりだっ♥ むりだから、っな? ♥」  
バタバタと足や手が暴れるが、明らかに力がない。君の手や足を添えれば簡単に抑えられた。

無論、本当に嫌なら彼女は君の体ぐらい簡単に押しつけられる。しないのは内心期待しているからだろう。

実際君を見つめるオツドアイの濡れた瞳は、どこか期待するように蕩けていた。堕ち切ったドM女の肉体を貪り喰らう為、君は体を動かすことにした。無論今日振り回されたことに対する意趣返しも少しだけあった。

亜希の懇願を無視して君は体を激しく動かし始める。

「んんんっ、んゝうゝうううう!」♥ おおお、オマンコと尻っで、こ  
うごについ! ♥ りよ、両方ううう! ♥ っごっお、こっごおおっにい  
……つ ilerるなあああ! ♥ こんなっあ、あああゝっ! ♥ じっ  
ぬっうう……イゝギじぬゝうゝうゝうう! ♥」

唯々部屋中に亜希の快感に塗れた一匹の牝となった獣の泣き声が響き渡るのだった。

「腰が痛い」

後ろからくる刺すような亜希の視線を無視しつつ、君は五車への山道を歩いていく。

久々に様々な欲求を吐き出せて君は晴れやかな気分だった。

「この鬼畜野郎めっえ。覚えとけよ」

機嫌の悪い亜希を君はフオーしていく。

君の本気や激しさに耐えてもらってありがたい、助かっていると鍛え上げられた肉体は彼女の誇りであることを君は知っている。

「ふん、そう褒めても嬉しくないからな」

秋は言葉とは裏腹に弾んだ声色を出していた。ちよっろい。

山道は途切れて、五車の隠れ里へと到着。

また何かあつたら言っただけいい。亜希の体は十分な対価に値すると告げた。

「つま、まあ金もないし仕方ないか。その時は仕方なく払ってやるさ」顔を紅潮させながら亜希は君の目の前からさっさといくのだった。

## 篠原まり

とある地下遺跡。君達は今そこで敵に囲まれていた。金属質の人間型であるゴーレムや燃える犬のような鬼火。それらに囲まれた君たち二人。普通なら絶体絶命の状況だが、君達は普通ではない。君は黒い霧を纏った手で背中に触れた、金髪で赤い対魔忍スーツを押し上げる巨乳の少女は、周りを取り囲む敵に足して拳を向けていた。

「え〜い！」

どこか抜けた声と共に振り下ろされる拳。その拳が地面に触れた瞬間、地面から土槍が生えて、周りの敵を飲み込んでいく。瞬間的に生えていく土槍は全ての敵を逃がさない。

ほんの一瞬後、周りにいた敵たちは全て鉄よりも固くなった地面から生えた槍で貫かれて全滅した。

「んっあっはあ。やりましたねふうまさん！」

君の方へ振り返り、飛び上がるように喜んでいる赤い縁なし眼鏡をかけた金髪の少女。ぴよんと飛び跳ねると同時に彼女の大きな胸も揺れていた。同行者である篠原まりが、君の黒い霧で強化されればこの程度は可能だった。

紅潮し眼鏡の奥にある空色の瞳が、君を見つめながら話しかける。「でも意外ですね。都市外の工事で、稼働済みの遺跡につながってしまふなんて」

まりの言う通り、都市郊外の工事に魔術師の工房に近い遺跡を掘ってしまい発見。そこ拠点の主はいない物の、いまだ稼働していた。ガーディアンであるゴーレムや鬼火が工事の人達を襲って死傷者を出した。

工事の責任者の会社からの依頼により君たち二人が派遣されていた。

「さあ、どんどん行きましょうー！」

まりの先導で、君達は遺跡を進もうとしたその時、

「あうっ！」

倒した敵のかけらに足を取られたまりが、手を振り回して何かに捕



まろうとしていた。君は彼女を支えようと近づく。

がちやり。その前に何かに捕まったまりが姿勢を戻して立ち直った。金色の短髪がふわりと舞う。

「もう少しでこけちゃうところでした」

壁から出た棒に捕まりながら、まりは一安心といわんばかりに呟いた。その何かが彼女のメロンよりも大きな巨乳を変形させている。

彼女の肩をゆっくりと掴んだ君は一言呟く。その棒は何、と。

「あれ？」

壊れた機械のようにゆっくりとまりは、手に触れている棒に視線を向けていく。壁から生えたそれは明らかに何らかのスイッチだった。

君達の足元に魔法陣が出現。おおっと。

君達をどこかに飛ばしていった。

一瞬で視界が石壁の廊下から、ベットが置かれた個室へと変わった。壁全体がレンガでできている様だった。

「ごめんなさい。ふうまさん」

頭を下げるマリは君は気にしないようにと伝えた。反省している彼女に対して、いちいち責めるほど君の心は狭くはなかった。

一先ず周りを見渡してみると、ベットがあるのみであとは何も無いようだ。石壁で出来た壁が視界に広がっている。

「ふ、ふうまさん。あれ……」

君の隣に佇むマリが、唾然とした様子で指を刺していた。

彼女の指先の方向を見てみる。

其処には一枚の大きな岩で閉鎖された扉が鎮座している。

岩扉の上に書かれている文字が君の目に映った。

「沢山セックスしないと出られない部屋」

……？

思わず君は書かれている文字を二度見。同じ内容が其処には書かれてあった。

「土遁・金剛拳！」

鉄よりも硬くなった拳が、岩扉に打ち当たる。君もまりの背中に黒い霧を纏った掌を触れさせている。

君の能力で最大強化されたその威力は、大岩どころか鉄塊程度でも簡単に破壊できる物の筈だった。

だが、岩扉に当たった拳は物音一つ立てる事なくただ接触しただけに見える。

「んんっう。ごめんなさいふうまさん。全然駄目そうです」

白い顔を紅潮したまりが君に向き直る。金色の髪の毛がふわりと乱れ、甘い体臭を嗅ぐわせた。

君は手を振って、気にしないよう伝える。明らかに高位の魔術師による結界か何かで守られている部屋だった。

つまるところ、君たちは条件を満たさない限り脱出不可能な牢獄に閉じ込められていた。

「んんっあ、ううん。っもうふうまさっあん！」

さてどうするかと君が頭を捻る。その隙をついてまりが君をベツドへ押し倒した。

彼女の縁無し眼鏡の奥にある空色の瞳が、君の目を覗き込む様に覆いかぶさっている。

「外に出る為ですから、ね。私のせいでもありませんからあ」

君の黒い霧の力で感覚が増強され、明らかに発情したまりが濡れた瞳で見つめ言い訳の様に言葉を重ねていた。君もそれに領きながら行動を開始。

君もまりの顔へ手を伸ばして触れる。まりが魅力的だから自分にとっては役得だと褒めつつ君は自身の顔へ誘導していく。

「ふうふうまさん」

彼女が目を瞑って顔を下ろしてくる。そのまま君は唇を重ね合わせる。羞恥からか顔が一気に紅潮していくのが見て取れた。初めての少女のような反応に君の肉棒に熱がこもっていく。

「んっちゅ、っちゅむ……ちゅ。ちゅうっちゅ、っふうまさんの唇。っちゅう」

まるで恋人同士の様な甘いバードキスを重ね合う。キスだけでも

快感を感じているのだろう。彼女の瞳が段々と濡れて蕩けていくのが目に見える。

まりの豊かな胸が君の胸板で潰れていた。対魔スーツからでも伝わる彼女の胸の柔らかさと反発力は格別の触感だった。

「んっあ。っあっんん……ちゆる、ぬちゆ。んっふう。れっろれる、ちゅぷ」

彼女の口内へ侵入するため、白い歯を突つつく。受け入れるようにまりは口を少しだけ開けた。そのまま舌先を突っ込んで引っ込むまりの分厚い肉舌を絡める。

「っあっじゆるじゆる、ぬっちゆ。ンンッ……くっふう、ちゅっうじゆる」

彼女の舌を巻き込み、唾液を交換。まりの甘い唾液が君の口内に流れこむ。流れ込む唾液と共に彼女の舌を吸う。

まりの全身が一度ビクツと痙攣する。彼女の甘い唾液と舌をいっまでも吸っていたいほどの心地よさがあった。

「くちゆくちゆ、ちゆる。れりゆれっろ、んっじゆ……んっふうちゅぶ、ンッアは、っはあ」

まりは唇を離して、大きく息を吐きながら整えていく。君の唇と金髪の女の口から出る赤い肉弁から、透明な橋がかかり即座に切れた。眼鏡に降りかかる金色の髪を片手で振り払う紅潮した彼女のしぐさは、どこことなくエロチックな雰囲気がある。

「ふうまさんのおおきくしますね」

そのままくりりと君の上で器用に半回転。

君の目の前に赤い対魔忍スーツで隠された股間が現れた。代わりに君の股間にまりの赤い縁無し眼鏡で覆われた顔が移動。足の間に彼女の大きく柔らかな胸が乗っかる。

「えっとうこうして脱いで、うんっしょ」

ごそごそと何かをした後、そのまま君のスーツを開いて肉棒を取り出した。まりの巨乳の間に君の肉棒が突き出る。挟まれた肉棒からすべすべな肌と柔らかく反発力のある胸の感触が伝わる。

どうやら彼女の対魔忍スーツは胸部をうまくさらけ出せる構造の

ようだ。肌が接触する温かみが肉棒が感じていた。

「つふうまさんのおつきい。熱くて胸がやけどしちやいます」

彼女のメロンよりも大きな胸を変形させた君の肉棒が挟まれていた。まりは目の前の君の肉棒を挟み込んだ巨乳で擦り上げてくる。君の肉棒ですら丸ごと飲み込まれそうな巨乳の刺激。あっけなく龟头部から透明な液体をたらりとこぼしてしまう。

「どうですか？ 気持ちいいですか？ んっうちゅ」

彼女の巨乳でも隠せないくらい大きく勃起した君の肉棒へ口付け。そのまま何度も肉棒へ口を這わせてくる。

ぞくぞくする様な快感が君を悶えさせる。龟头部は彼女の口づけ、肉棒の峰の部分は挟みきる乳肉による刺激はほとんど君の金玉をフル稼働させていく。

仕返しがわりに君も目の前にあるスーツを退かして、まりの膣口へ黒い霧を纏わせた舌を這わせていく。髪の毛と同じ色の陰毛に隠された膣口はそれなりに濡れて光っている。

「つひゃっあ、ふうまさっあん。そこなめちや、っあん」

君のクンニで彼女の背筋が硬直。跳ね上がり逃げ出す彼女の股を逃さぬ様、柔らかく揺れるお尻に手を這わせる。そのまま君の顔の上へ固定する様に掴む。

肉質の詰まったお尻が君の掌で形を変え、目の前で膣口がパクパクと可愛らしく開いている。

愛液で濡れ出す隠口へ舌を這わす。まりのむっちりとした太ももに顔が当たり柔らかな感触で包まれた。ほっぺに当たる太ももの感触は柔らかいが、意外と圧迫感を感じた。お返し代わりに舌先でも膣口の上にある淫靡な突起物をつんつんと触る。

「あっひ、クリトリス弄っちゃだめです！ ♡ つゃッアン、んっう……も、もうふうまさんのお、ひゃっあん

♡ いじわるっう、いん ♡ つうんっちゅっちゅぶ……んくくっつぶ ♡」

悪態を吐きながら、まりは君の肉棒へ奉仕を開始した。

龟头が彼女の口で包まれ、肉棒の部分が柔らかく包む巨乳で摩られ

る。亀頭の傘部分を舌で舐められて、すべすべで柔らかく反発する乳肉でこすり上げられて、君も段々射精に近づいていく。

君も彼女を感じさせるため、膣内に舌を挿入。舌先から当たる抵抗感は、彼女が初めてであることを示していた。

ということとはしっかりと濡らさないといけない。君はどんどん快感を与える為舌を動かし、ふよふよと形を変える尻肉を揉みしだく。

「ぷっちゅ、じゅぶじゅぶ♥　じゅっぽ、んんっうぷっふうまつさん♥

っちゅぶ、んっじゅっじゅれりゅ♥　っひっはっああ、ついん♥

っもう、もっうわたっしっいいい♥」

お互いを高め合うシックスナイン。先に根を上げたのはまりのほうだった。太ももが抵抗するように力が籠められる。だが、ほっぺを挟まれただけで抵抗は弱い。君はそのまま彼女を絶頂する為、膣口に対する攻めを激しくさせた。

膣口の上にある肉突起が唇で押しつぶされ、君の高い鼻が中へ侵入。瞬間、鼻から膣壁がギュツと収縮しながら痙攣したのを感じた。

「ああう……ひっあっあ、来ます！♥　こっれっえ、何かきちやいます

！♥　っああこれ、イクんですね♥　いくのっお、くるくっるうう

……イツイ、きまつしたああああ！♥」

盛大に潮が顔に降りかかりながら巨乳が肉棒が挟まれた。痙攣する振動が肉棒へ伝わり、君の腰元の栓を外す。

肉棒から間欠泉様に白濁液が吹き上がり、彼女の端麗な顔へ打ち当たる。

「あああああ！♥　っぶ、ぷっふふ！♥　熱いのがっあ、顔にかかつて

！♥　あっむっちゅぶ、んんんっう！♥　んぐ、まつひやくっるっう

！♥　んっぶっぐぐ、んんんくくっうううう！♥」

勿体無いと言わんばかりに、まりは吹き出す肉棒へ口付ける。そのままザーメンを口内から取り込んでいく。亀頭部が口粘膜に包まれ幹がメロンよりも大きな乳肉に挟まれながら、君は白濁液を吐き出していく。

喉が動くたびに、まだ少量の潮が吹かれて君の顔を汚していた。

「んっぎゅっぐぐ、っぐっむっちゅ！♥　んぶぶっふう、ふうまさん

のっお精液……すっごい量ですっう！♥ 熱くて、濃くつてえまた  
きつちやつう！♥ んつぶちゅ、んつぐぐむ！♥」

白濁液を取り込みながら痙攣するのがお尻を掴む掌から伝わる。  
顔に当たる太もももビクビクと震えているのが、君のほほから伝導し  
ていた。

君の精液を最後まで飲み込んで、何度も痙攣している。愛液が君の  
舌で流れ出していく。

「ん~~~~つう♥ ぷっはあ、全部飲めましたあ♥ はっあ、ッはッ  
はあ……つあん、ふうまさんのまだ硬くつて熱い♥ これなら直ぐに  
出来ますね♥」

君の黒い霧の感覚の増強で最大限まで発情したまりが体を起き上  
がらせ君の股の上に座り込む。顔を君の目に映る様に向き直った。  
ふるんと揺れる大きな真っ白い乳肉と、眼鏡の奥にある空色の瞳が君  
の目に映る。胸と膣口という女性の弱点を露出させた格好は、君の暗  
い欲望を燃え上がらせるのにふさわしいものだった。顔や金色の髪  
の毛、赤い眼鏡が君の精液で汚れているのは、ある種の征服欲求を刺  
激させる姪靡な光景だ。

トロトロに濡れた膣口が君の黒い霧を纏った肉棒の幹に乗るよう  
に触れている。

「もう大丈夫ですから、入れますね♥ つあん」

腰の上に座ったまりが君の肉棒を持つ。そのまま膣内へ入れて腰  
を下ろした。

膣肉を掻き分けるように君の肉棒が押し込まれていく。膣内から  
溢れる愛液がじゅじゅぶじゅぶという音をたてて肉棒を飲み込んでいっ  
た。

初めての女特有のきつきつな膣内を君の肉棒が占領していくこと  
に、暗い欲望が胸の内で燃え盛るのを感じていた。

「んっぐ、っあつが。ふうまさんのおちんちんが、どんどんっ入ってき  
てますっう♥ んっう、痛いけど、きもっちいい♥」

途中で抵抗感を感じたが、そのまま亀頭がピリッと破る。暖かな感  
触を入れていく肉棒を感じた。赤い粘液が幹の部分から股へと垂れ

さがっていく。

それでもまりは腰を下げていくのを辞めなかった。ザーメンで汚れた眼鏡の奥の蕩けた瞳が涙を流しながら君を見つめ続けた。

「っおっきいの、一番奥まできつましたあ♥ あっひい、いいい……あつやっつ、これだけで♥ いれただけなのっについて、つくつうんんんんくくくッ!♥」

透明な愛液が肉棒を這う様に流れ出ていく。十分以上に濡れた膣内は、初めてにも関わらず快感を感じてようすだった。

それどころか君の腰の上で赤い対魔忍スーツのまま、体を抱きしめるように強張らせて軽く痙攣している。露出された巨乳が彼女の腕で変形していく。

「んんっう、うっそお♥ はっあ、はあくっあ……っはじめてなのに、いれただけでいつちやいましたっあ♥」

どうやらかなり感じやすい体質のようだ。濡れに濡らしたとはいえ、入れた直後で絶頂しているのは快感を受け止めやすい体質の証だ。実際すでに君の肉棒を受け入れて、ぎゅうぎゅうと締め付けてきている。

だったら遠慮はいらないだろう。君はベットのスプリングを利用して下から突き上げていく。一度幹をさらけ出し、奥底に叩きいれる。亀頭部にまだ硬めの子宮口が当たった。ちゅぷちゅぷとキスをする。其処事そのまま肉棒で子宮を持ち上げた。

「っひっぐっおくくくっふ、っうまつさあん♥ あうううっくくッア♥ ちよつと待ってくだ、ひゃあい♥ あ、あうううっう……っぎっつ、んんんっ♥ っおっほ、本当に、ちよつとでいいからっあ……まつてくださいいい♥」

突き上げるたびに揺れるまりの豊かな胸肉を楽しみながら腰で持ち上げるように突き上げる。腰を押し出す度に、すでに腰が引くついている。

赤い対魔忍スーツから露出し揺れ動くメロンよりも大きな乳肉。中心の薄ピンク色の乳首が立ち、胸と同様に揺れ動いている。

肉棒に滴っていた赤い液体も、まりの膣口から流れでる粘っこい本

気汁で流されていた。君が出した先走り液と彼女の愛液が肉棒で混ぜられて、ぐちゅぐちゅといやらしい音を奏でていた。

君を見つめるフチなし眼鏡の奥にある空色の瞳は融けて快樂の涙を流している。口からよだれを垂れ流し、君の胸板やベツトに降りかかっている。

「っお、おちんちん……ふうつまさんっのお、おちんちんっよいつよっお！♥ きゃっあ、ふうっああああ！♥ つおっおおっくう、ぐりぐりっつい……きもちいいいつ、ですううううっ！♥」

感じやすい体のまりはすぐに体を反らしていく。君の視界から彼女の顔が消え、真っ白い喉がさらけ出された。顎の向こうでピンと舌が伸びているのが見えた。

抜けそうなほど跳ね上がる体を、対魔忍スーツ事巨乳を掴んで固定。柔らかさと反発力を兼ね備えた若々しい巨乳が、君の掌で握られるように掴まれ形を変えていく。

「んぐううっおおッ、おっぱいとれちやいます！♥ はあ、あっっひっぎッ！♥ え、い、っ、い、ったいのっについて……っいいいよっお！♥ もっおっぐ、っんくくッオ！♥」

顔や胸の白い肌全体が桃色に染まったまりの体は、君が掌で形が変わり続ける巨乳肉を揉みしだかれるだけでかなり快感を感じているようだ。ガチガチと歯を鳴らして絶頂を耐えている。

君も肉棒を膣内が強く締め付けてくる刺激で今にも出しそうになっていた。ぷくりと膨れるのを膣内から感じたのか、君を見下ろす様に顔が戻る。そのまま眼鏡の奥の瞳が君の瞳を合わさる。その空色の瞳はハートマークが浮かび上がるかと思うほど蕩け霞掛かっていた。

「あっはっあ♥ おちんちん、膨れてっ……ふるえていますねっ♥ あっあ、っ、もっお、お、！♥ もっう私はイツってますからっあ、出してください！♥ おまんこのなかで射精してくださいっいい！♥」

彼女の絶頂しながらの射精懇願に答えて、奥底に肉棒を叩き込みながら白濁液を吐き出す。両手の指で中心にある肉突起物を巨乳事掴



み押しつぶす。瞬間声を上ずらせた喘ぎ声を奏でた。

「ちくびつねられっちゃ、っあゝひついいい！♥ ふつうつおお！♥  
ふうまさんのっ、せーし中に出てますううう！♥ 熱いせーし出されて、いゝいいゝ つぐうううゝう！♥ なんどもイツちやいますううううう！♥」

悲鳴のような嬌声を上げながら身体全体を大きく逸らした。何度もその身体をびくびくと跳ねさせながら己を襲う絶頂の波によってすでに心の所在をなくしていた。骨が折れるかと思うほど仰け反り、舌を突きだして牝畜の咆哮を上げている。

飲み込みきれなかった君の白濁液と溢れ出していく愛液がダラダラと流れ出していく。シートと君の腰が汚れていった。

「はあゝ、あゝ つづついいゝいいッッ！♥ 熱々のせーしが流し込まれてっえ、ますつううゝう！♥ ああゝあゝあゝ、頭がっあ……っ真っ白になっちゃいますつううゝうゝうゝう！♥」

初めての子宮へ君は白濁液を流し込んでいく。彼女の初めてを奪ったというほの暗い征服感が胸の中心で広がっていく。その感覚のまま君は彼女の奥底へと、白濁液を放出する亀頭部を押し付けた。跳ね上がる腰を追いつがるように肉棒を押し付けると喰いちぎられると思うほど締め付けてくきた。

「まだ出されたらっあ、まだひつぐ……ひつぐううゝうううゝうゝ♥  
もっひツ、あうゝつうゝおゝッううゝ！♥ もっう力がはいらな  
いいいい♥」

最後まで流し込むと同時に君の体へまりが倒れ込んできた。胸を掴んでいただけの君の腕では支えきれず、彼女の体は君の体に倒れ押し付けられる。

大きな乳肉が君の胸板に当たり押しつぶされている。君自身の胸板から柔らかく反発感のあるメロンよりも大きい胸肉の感触。彼女のすべすべな肌と暖かな体温が伝わってきた。

「あっひいゝゝゝつうゝ♥ つおゝゝゝ……ッオ♥」

肩に当たる彼女の顔を覗き込むと、意識を飛ばした白目を向いていた。口からも意識のないうわ言のような声しか出ていなかった。君

は胸を掴んだまま、くると上下を入れ替える。そのまま手を離し今度は君が起き上がる。

下になったまりの体へ君は腰を叩き込む。パツンという肉を叩きつける音が空間に響いた。

「いつぎー♥ おつごッオ……ふ、ふうまさん？」

意識を叩き起こされ、混乱の最中のまりへ君は石扉を指差して見せた。

沢山セックスしないと出られない部屋。彼女の眼鏡の奥にある空色の瞳にも映ったようだ。

君に縋るような視線が突き刺さる。もしやまだ続くのかとでも思っているのだろう。勿論まだまだ続くのである。

君は神妙な顔つきで答える。まだまだ回数が足りないみたいだ。無論演技で振りをしている。内心は大いに楽しんでた。

「もっお、もう無理です！ 力が全然入りませんし、さつきまでイッてたんですよ。まだ余韻が残ってるんです！」

まりは金色の髪を振り乱しながら首を左右に動かしている。君に慈悲を請うかのように、快樂に濡れた眼鏡の奥の瞳が縋るように見つめていた。

彼女の懇願を聞かずに君は腰の動きを再開。まだ初々しい肉をかき分けていくような抵抗感の膺壁を、君の肉棒がかき分けていく。膺口も入っていく君の肉棒の形に添うように変形していく淫靡な光景は君を暗い欲望を満足させていた。

「ほんとうにもっうむっ、ついいいいい！♥ こわれひやいます、うつついゝ！♥」

君を押しとどめようともしているのか、彼女の白い手が肩に触れてきた。だが、簡単に地面や岩を砕く腕力は発揮されず、ただ君の肩に添えられていた。微かな抵抗は逆に君を燃え上がらせる一助となっている。

突き入れるたびにまりの豊かな胸肉が揺れる。中心の乳首も同じように揺れ動き君を誘うかのように淫靡だった。

「ふっくっおお、っおゝ！♥ おっぱいはっあっひ、っいんん！♥

くひつ……もつう、ひぐつう！♥ もうもまないでくださいいいいい！♥」

思わず君は揺れる胸肉を掴む。柔らかく反発する巨乳は彼女の若さの表れだろう。肌もすべすべとして触っていて気持ちがいい。

ぐにぐにと揉むたびに、彼女の膣壁がしゃぶる様にうねり絡みついてきた。

「っお、おおっぱいもっお、おまんこもお許してくださいいい！♥

ひぐつ、くっはっあ……あっあ、あゝっ！♥ まだひつつぐのツオ、お

っほおおおおお！♥」

胸と膣内の快感でまりの口元から獣のような嬌声が吐き出されていく。君の腰の隣で彼女の足をピンと伸ばして快感に喘いでいた。

快感を逃がそうとシーツを後ろ手にシーツを握りしめている。すでに皴が寄っているが、快感を逃がすのには些細な抵抗だった。

振り乱されて汗に濡れ白濁液に塗れた金色の短髪が、彼女の赤いフチなし眼鏡や頬に張り付いている。唾液や汗に塗れてきらきら光る髪の毛や紅潮した白い肌はどことなく卑猥なものだった。

「おおおっくくく……っはっぐうっ！♥ いっ、っ、いっいっ、っまつあっ、あっあっ……あゝくくく！♥ もおおお、むっりいいい！

♥ げ、限界っですうう！♥ むりなのにいい、……ふっほっお、っおお、おまんこぴりぴりつくるううう！♥」

感じやすい体は君が与える快感に耐えられないようだ。何度も意識を飛ばしているようだった。膣壁を締め付けて狂おしい痙攣を肉棒に与えてきていた。

この感じやすい体を持つ牝をちゃんと君に染めないといけない。

使命感を感じた君は何度も快感を叩き込む。君の肉棒で染め上げる。まだ硬めの膣壁に君の肉棒を覚えさせるため、何度も出し入れしていく。

「おっほおおお、お、ッ！♥ まっあたひっぐうう、くく……ひい

っ、いっ、ふっぐつううう！♥ ふうまさんのおちんちんでっえ、イク

のとまらないっいいいい！♥」

肉棒が押し込まれる度に、何度も絶頂しているようだ。跳ね上がる

まりの体を君がメロンよりも大きい乳肉事抑え込んでいた。

既に射精懇願もできずに、重い悲鳴を上げている。言葉にならない牝の獣の絶叫がただ部屋に響く。

すでに眼鏡の奥にある空色の瞳も裏返り、白目になっている。トロトロに溶けた表情筋の力はなく、口から快感の咆哮を上げて唾液を撒き散らしていた。そんな彼女の無様極まりない絶頂顔はむしろ君の興奮を強めてタガを外す。

限界を感じた君は子宮まで犯すと意志を込めて、バツンと自身とまりの腰を密着させた。

子宮口を押し上げると同時に、君の肉棒を締め上げるような激しい収縮。尿道口を押し広げたザーメンがまりの子宮内で踊り満ち溢れる。

「ひっぎいいい！♥ セーし、ふうまさんのおおせーしいい！♥ 一番深いところにつきい、きましたっあああ！♥ おっぐっ、おお〃ッお〃ッおおお〃 おく！♥」

彼女の口から頂に達する言葉があげられ、両腕で君の体にしがみつきながら豊満な体をおびただしく痙攣させていた。それは無意識の行動だっただろう。密着した肌から深く絶頂しているのが君には感じ取れた。

「お〃ッおおお〃 お！♥ ふうまさんのっお、おっぐう……んんっお、っあ！♥ ふうまさんのせーっしい、こぼれちゃっう！♥ つうっいつい、いゝああああっあつ！♥」

意識が戻ったのか、子宮内を駆け巡る白濁液を感じているようだった。ピンと張っていた足が君の腰に縋るように絡みついた。

意識が戻ろうとも蕩けている表情は戻らずに、悦楽の笑みを君に向けている。すでに君の形に変わった膣壁も肉棒を揉み絞り極上の快楽を与えてくる。

暗い支配欲を満足させながら、最後まで吐き出させるように震えそうな腰をまりの膣口へ密着させていた。

「ふ、ううゝう……っつあ♥ セーしがお腹を膨らませてますよっお♥ ぱんぱんになっちゃいました♥」

最後まで吐き出された精液を微笑みながら受け取る。半目になりながら快樂に溶けて微笑む表情はどこまでも妖艶なものだった。さらに興奮する。

だからこそ君は休まずに肉棒を動かし始める。しがみついている両足や腕はまだ力が入っていない。簡単に密着しながら腰で上下運動をすることができた。

「あゝ~~~~っ、いぎッ！♥ うっそおお！♥ もお、四回目なのにいいいいまだでてるのにいいい！♥ まだカチカチに硬いいくて激しいですうううう！♥」

射精しながらの激しい腰使いに混乱しながら悲鳴を上げる。石扉がまだ開かない事を告げながら君は肉棒を叩き込む。射精が終わっても腰の運動を止めない。

「もっうむりっです！♥ うううう~~~~オツ……ッおッううう！♥ しんじやいまっすっう！♥」

快感で死んだ人間はいない事を告げて、君は何度も性交を重ねていくのだった。

ガラガラとようやく石扉が開いていく。その先に何らかの宝石が浮いているのが見えた。

ようやく開いたかと君は呟く。ある程度時間がたって石扉が開いている。

「うっう、本当に何度もしないといけないなんて」  
真っ白な白唾液に染め上げられたまりが小鹿のように足を震わせながら君の後ろで立ち上がっていた。

部屋の条件通り、何度も君とセックスをし続けていたのだ。

君はまりのおかげで助かった。君がいないとあの時怪物に囲まれて死んでいたなどと言いながら、先の君の激しいエッチから思考を逸らす為褒めておく。

「まっあ、二元を言えば私のせいですから」

フォローを受けたまりが嬉しそうに微笑む。

えへへとほほ笑む彼女のちよろさを心配しそうになりながら、君はまりとともに部屋を出ていく。

少し歩けば部屋の中心にある宝石の真向かい迄たどり着く。そのまま君とまりが宝石を挟むように立ち会う。

「これを壊せばいいんですね。えい」

浮かび上がる宝石を、まりの拳がたやすく破壊する。ガラス細工を壊すかのようなあつけなさだった。

砕け散った宝石が、地面に散らばる事なく宙へ消えていく。

「あとは脱出するだけです……ねッ？」

君の方へ視線を動かしたまりの体が固まる。君も彼女の視線の先へ体を動かす。

「沢山セックスしないと出られない部屋」

またかっと思いつつ役得に心震わせた。

「あうう」

顔を真っ赤に染めたまりを君は逃さないように抱きしめる。そのまま横にあったベットへと移動していくのだった。

## テイル ※特殊プレイ注意※

五車学園のとある一室。君は目の前にあるパソコンのキーボードを必死に叩いていた。

久々に独立遊撃部隊や特務中隊の任務報告がぶつかり書類が溜まっている。

基本的に対魔忍達は書類仕事や任務報告が苦手であまりうまく処理できる人間があまりいない。

事務方ができる高級士官経験者とか何処かに転んでないかと頭が煮えたことを考えながらデータを処理していた。

部屋にはひたすらにキーボードを叩く音が響く。

それは突然のことだった。部屋中を満たす光が溢れだした。

眩しいと思い君は目を閉じる。恐る恐る開いていくと、小粒のような光を見に纏い、小柄な人形のサイズに収縮した成熟した体の女性が宙に浮いていた。ピンクの髪色をした透明な四つの羽を羽ばたく彼女はゆっくりと目を開いた。

「見つけた！ 英雄の魂！」

君を見つめたように紫色の目を見開く。そのまま君の額に飛び込んできた。小さい範囲だが、ムニツと女性特有の柔らかさが、額から伝わってくる。

おそらくは妖精。君の知識でもかなり珍しいとされる種族だった。

「お願いします。どうか私達妖精の国をお救いください」

これはあれだ、最近流行ってる奴だな。

それなり以上に娯楽を嗜む君の頭が混乱のままに高速回転。疲れで煮えたぎっていた脳内のおもねくままに、君は行動を開始してしまった。

君は顔に張り付く妖精の体を優しく掴んで離させる。

ちよつと一緒に来て欲しいと告げる。

「え？ あ、はい」

君の剣幕に押された妖精は、君の命ずるままに胸ポケットに入り込む。

そのまま君は目的地にむかつて素早く移動していく。

運良く誰にも合わずに君は目的の場所まで一気に駆け抜けた。

君は目の前の五車学園校長室へ入る。

「あら、ふうま君。急にどうしたの？」

五車学園校長にして、最強の対魔忍井河アサギが何らかの書類から君へ視線を上げた。彼女の周りにも書類が山となっている。

冷静になる間も無く、君へ胸ポケットにいる妖精を取り出す。

「あうう」

突然胸ポケットから取り出された彼女は目を回していた。先の君の高速移動に振り回されてしまったようだ。

そのまま君は宣言する。

彼女に頼まれたので妖精の国に転移してチート能力もらって無双してきます。

俺が妖精の国へ転移してチート能力のまま無双する件について始まりませう。

目をぐるぐる回す君に報告を聞いたアサギが一瞬固まった。

「……………そう」

長く沈黙の後、底冷えしそうなほどの声色の言葉が吐き出された。

そのままアサギは何かの机の下にある何かのボタンを押した。

ガチャリと背後の扉の鍵が閉まる音が君の耳に響く。同時、窓に分厚いカーテンが敷かれた。

そのままアサギは机から立ち上がりテキパキと服を脱いでいく。

脱いだ服も折り目正しく畳み、机の上に置いていく。黒い下着や色気のあるパンツも脱いだスーツの上に置いていく。

豊満で成熟した色気のある裸体が現れた。

成熟し柔らかくそうに膨らむ胸や真っ白な肌が君の目に映る。

「っえ？ あ、あの何を？」

君の手に掴まれた妖精も混乱の声を上げていた。それすらアサギは沈黙のまま行動していた。君もアサギの体はやっぱりいなと煮えたぎった思考のままだった

そのまま絨毯に腰を下ろしてようやく彼女は口を開いた。



「いいのかしら？ 私の裸土下座を見た時、最後に死ぬのはあなたよー」

それ死ぬ（殺す）じゃないですかやだー！  
要約冷静になり出した君は、アサギの行動を止めるのだった。

冷静になって妖精の話を知ると、結構簡単な話だった。君には妖精の国に行ってもらおう。彼女ティルと名乗った妖精と、とある儀式をしってもらうだけでよく、終わったらすぐに帰っても良いとのことだった。

小人のような背格好の妖精族の国に人サイズの君が長居しても良い事はないだろう。

その儀式も命に関わるようなものでもないとの事だった。  
話し合いの末、君が妖精の国に行く代わりに、ティルが五車に所属し様々な協力をしてくれる話となった。

そこまで決まると話は早かった。君はティルと共に妖精の国に行き、彼女の父親である王様に会うと、話もそこそこにすぐさま儀式場まで連れて行かれた。

今現在君は儀式場とされている部屋に居る。床には何やら魔法陣らしきものが描かれていた。

ちようど今日の前にいる朝から一緒にいたティルと2人っきりの状態だ。服装も会った時と同じ体にぴっちり張り付くスーツのよくな服装で、前部分が胸と陰部だけを隠しているだけなので露出が高い。

「それでは儀式を始めさせていただきます」

顔を紅潮させながら彼女は浮かび上がりながら、頭を下げた。君の目の前で彼女は空中に浮きながら佇んでいる。

そのまま透明な羽を羽ばたかせて、君の口元まで飛んできた。

「っん」

ティルの小さな口と君の唇がぶつかり合った。君も王様からある

程度の儀式の話は聞いていた。儀式はいわゆる性儀式の類であり、彼女も80cmくらいの小柄な体型に君の肉棒が受け入れられるように特殊な薬を受け入れているとのことだった。

即ち君は今から妖精の王女とセックスするのだ。その事に君の暗い欲望が燃え盛る。

「んっ…んちゅう、ちゅぶ。んっん、ちゅっちゅ。っはっあ」

口を離してテイルを君は一度掴む。掌で包むと女性特有の柔らかさと温かい体温が伝わってきた。小さい体でもしっかりとした成熟した女性であることがよく解る。

「っあ。何を」

この後何をするにせよ、ひとまずは目の前の妖精の王女を感じさせないといけない。

片方の指を黒い霧で覆い、彼女の体を優しく触れていく。胸部を隠す青いスーツのような服を跳ねて、露出させた。そのまま胸の中心にあるピンク色の突起物に触れていく。

「ひっあ、乳首ピリピリしちゃいます。んっあ、これなんですかあ？」  
初めての快感に体を震わせながら君に疑問を発するように小首を傾げた。

戸惑うテイルへ、君に体を任せるよう伝える。

片手だけで上半身の半分以上を覆えるほどの大きさの彼女を壊さないように優しく触れていく。

小人サイズの体にして大きな胸を指で触り擦り付ける。思ったよりも柔らかい。ちゃんと女の胸の感触だった。

「んんっん、っあん♥ あっあ…こんなの初めてっ♥  
んっあっ、いついん♥」

大きな快感を感じ始めたテイルの股へ口を近づける。今は股間だけを隠す青い服を退かして、膣口に舌先を告げる。舌先だけで膣の入り口を全て覆える。

「っあ、やっああん♥ そんなところ舐めないでください♥ っふっあ♥」

恥ずかしさのあまり押しつけようと、君の顔にテイルの掌が当た

る。だが、快感と君との大きさの違いが合わさり、蠟螂の斧のような抵抗でしかなかった。

そのまま舐め上げて彼女の胴体を味わう。甘い味わいと香りがした。妖精の王女の膺に口をつけて、黒い霧を纏う舌先でチロチロと舐めるように味わう。

君も唇で股間が覆われその隙間からテイルのほっそりとした足がまろび出ている。まるで君が彼女を食べるようでもある。

「ひんっうあ♥ ついっやあ、食べないでください♥」

テイルは感じながらも甘い声で懇願してきた。無論食べる気はない。

そう伝えつつ、又彼女の股間へ舌を置いた。君も舌先で膺口をかき分けるように動かすと、透明で粘り気のある液体が溢れ出してくる。

「っおっあっあ♥ つおっなっにい……なにかきつちやうう♥ あひっ、ひっい♥」

股間の舌を動かせば動かすほど、舌先に甘い体液が滴り落ちていく。

膺口全体を擦り付けられる快樂にテイルは高い悲鳴を上げていた。

「んっあ!♥ ふっうんんっ……胸もあそこもいじられたっらあ♥  
っどっう、同時にきちちゃっあ♥ うううっん♥」

胸の部分も忘れずに挿んだ指で優しくだが素早くいじる。潰さないうように力を入れずに乳首をクリクリと捏ねていた。

股間を擦り付ける舌の動きも早くしていく。

「っあっあっくっるっう♥ これっがイクってことなのですか?♥  
あっあ、いつくっうううう!♥」

初めての絶頂に戸惑いの悲鳴を上げながら、体を大きく剃らせた。君の顔に小さな掌で抱きついていている。その手もプルプルと震えているようだ。

「っおっあっあ、くっくっあ!♥ まったつくる♥」

舌に勢いよく潮吹きの意味とがくがく震える股間を感じた。粘り気のある本気汁が舌に向かってあふれ出している。

「くっく……ッツア♥ あ……はあっつあ♥」

震えるたびに擦られた股間から快感でテイルはなかなか絶頂から戻って来れないようだった。

少々時間が立ち、彼女の反らせていた体はようやく元に戻る。そのまま君の顔に体を預けて息を整えていた。熱い吐息が君の髪を吹いている。

「こ、今度は私の番です」

君の手から一息の気合いと共に飛び立つ。

細い太ももが君の舌に触れながら、上空に浮き上がる。少し離れるとそのまま下がっていく。

彼女は君のズボンの前で停止した。

「……えっと」

どうすれば良いのかわからないようで、指よりも小さな手でガチャリとズボンを触れて止まっていた。

男の服の脱がせ方すら知らない箱入り娘。しかも妖精の王女を好きに出来るという状況に君の肉剣に血液が集中していく。

既に勃起していた肉棒がさらに鎌首を上げていく。

「つつぁ」

ズボンを押上げたそれを見て、テイルの口から漏れ出すような声が聞こえた。

君は彼女に少し退くように伝える。ズボンから離れた紫色の髪をした妖精を確認し、君はズボンとパンツを脱いだ。

黒い霧を纏い完全に鎌首を上げた君の肉キノコがまろび出る。

「こ、こんなに大きい♥」

恐れ慄くような声がテイルの口元から漏れた。

既に勃起した君の肉竿は、足の長い彼女の二の腕以上の大きさだ。本当にそういうことができるのか不安になるほどだった。

念の為、君は大丈夫かと心配そうに聞く。

「……はい、大丈夫です。これも国民のためですから」

テイルは一度息を吐いて、ムンとガッツポーズをした。気合を入れて、君の黒い霧を纏う肉剣へ体を這わせていく。

王族の誇りという物を持った彼女の体を、君の肉刀でめちやくちや

に出来るのだ。暗い欲望で君の背筋がゾワゾワと震えた。

肉柱へ腕と太ももを纏わせ、足を竿の根本に置いたテイルは、亀頭の先端に顔を置いていた。

君の唾液で汚れた体で、肉弾頭へ腕や足を擦り付けて動かし始めた。

「っあっつい、火傷してしまいそう　♥　ここを舐めればいいんですね　♥　っちゅ、れろれろ　♥」

そのまま先端に小さな口をつけてペロペロと舐め出した。何よりも小さな彼女の舌による奉仕は微細ながらも君に快感をしっかりと与えてくるものだった。

敏感な亀頭部分をくすぐるような刺激に合わせて、カウパー液を吐き出していく。

「んっちゅ、れっりゅれろ　♥　熱い汁が出てますよ　♥　これが精液なんでしょうか？　♥　んっむ、っちゅっむちゅくくく　♥」

黒い霧を纏った肉塔から流れる先走り液も、微細な強化を可能にした液体だ。感覚の強化にもつながるそれは、テイルにも十分な効果を発したようだ。

ヌルヌルとしたその液を体に纏わせると、そのまま君の熱い塊に体を擦り付けて上下に動かした。

「っあっん　♥　臭いがとても濃いいい　♥　はっあ、っじゅっる、ずぞぞぞ　♥　これ、私も感じてしまいます　♥」

全身を使って君の肉棒をずり上げる行為は、しっかりと快感感じるほどに刺激だった。肉竿だけでなくカリ部分もテイルの腕が一生懸命すられている。

「熱い液体が粘々して、体に纏わりついてしまいます　♥　っちゅ、っじゅぶ……んんん　♥　これって、気持ちいい証なんですね　♥」

彼女の大きさからすればそれなりに大きい胸。細い腕や足。高貴な言葉を話す口。それら全てが君の肉剣を感じさせるために使われていた。

女性の体全体を使う奉仕は君にとっても新鮮な快感だった。

「はむ、んっん　♥　んっぐ、れろれっりゅ、っりゅる　♥」

亀頭の先端部分にあるテイルの頭が、先走り液を吐き出す部分に触れた。肉槍に穴へ口をつける。

君の肉竿の先端から小さな物が侵入してくる刺激が来た。

「ずぞつお……れつろお、そろそろおんぶちゅ♥　だひてくだひゃい、んべええ♥」

尿道口を小さく柔らかい舌が何度も往復する奇妙な快感に、君の腰元にあるタガが外れた。

テイルの顔を押しつけてザーメンを肉刀から排出していった。

「んつあつあ!♥　ふうま様の熱い精液が降りかかってくる!♥

おつおお、いっぱいかけられていっくううううう!♥」

間欠泉のように飛び出た精液が、テイルの体に降りかかる。紫色の髪の毛や透明な羽を白い粘つく液体がよごしていく。

同時に彼女の体が震えているのが肉塔を通じて分かった。

「あつはあ、うううう!♥　熱い精液がシャワーみたいに降りかかってつえ!♥　んつぐつあつあ、つひつぐつうううううううううう!♥」

ザーメンをシャワーのように浴びる彼女の全身が汚れていく。甘く蕩けた艶声を響かせながら、ザーメンを甘露のように飲み込んでいた。

ブシツツと肉弾頭の根元に股間の飛沫がかかるのを感じていた。

「つお……いぎツ、ひいひい♥　くくつおおお♥」

精液の間欠泉が収まると彼女の体の震えも収まり、顔中を汚した精液を拭い飲みこんでいく。その度に微細な快感でテイルの体が痙攣しているのが肉鞘に伝わっている。

「精液の臭い濃いいい♥　体が熱くなってきました♥」

最後まで味わうように飲み込むと、肉棒に体を預けるように倒れ込み息を整えていた。

君は彼女の意識が戻るまで待った。

「っはっはあゝ♥　お待たせしました。最後の儀式を行います」

白い肌の全身や紫色の髪の毛、透明な羽までも君のザーメンで汚れても尚王族の気品は残っていた。

這うようにテイルは肉槍を昇る。君も彼女の体を支えるように手を伸ばした。

そのまま上に持っていく。白い液体を所々に付着した紫色の髪の毛は君の熱い塊を恐る恐る跨ぐ。

君の鬼頭の先とテイルの男を知らない赤い花卉がキスする。

「これが最後の儀式です。私の事を気にせずにごうぞ挿入してください」

明らかに挿入できるような体格差ではない。壊れてしまうのでは無いかという心配が君の胸の内に広がった。

君もそのことを心配して聞いてみる。

「はい、大丈夫です。特殊な溶液を体になじませ薬も飲んでるので心配ありませんよ」

顔を紅潮させ白濁液に汚れながらも、テイルは君に対してニコリと微笑んだ。

その気品さと気高さが混ざる王女の微笑みは、君の暗い欲望を燃やすのに十分な物だった。

即ちそれだけ大切に育てられた彼女を、今君だけが汚せるのだと言う喜びであった。

テイルの体を優しく掴み、君はいくよと声をかける。

「……これも民もためですから」

自己犠牲に溢れる台詞を君は聞いた。そんな事をこの後考えさせる気はない。

黒い霧を纏った肉棒へ彼女の体をゆつくりと下ろしていく。

「んっぎい、あつかっはっあ！ つおっきいい♥ お腹膨れてきてますう♥ くうっ、んくううっ！♥」

テイルの膣口が痛々しいほど割り開きながら君の肉槍を啜え込んでいく。

彼女の腹も君の肉刀の形に膨れ上がっていく。

彼女の処女膜を裂ける感触がし、膣口から血が流れる。

「すっごっいいい！♥ お腹がふうま様の形に膨れてるのにいいい！♥ あっあっ！♥ これきもちいいのです！♥」

それでもテイルの口から漏れるのは痛覚の悲鳴ではなく、快樂の甘い喘ぎ声だった。

薬の影響だろう。大きく口を開いて舌を突き出すその表情は明らかに快感を感じていた。

「おっおおー！♥ 奥まで来てます！♥ おっぐうゝうゝ、ふかいいい！♥ んおゝ、っつあ、あっあつあゝ！♥」

テイルの可憐な顔から想像もできないほど獣のような悲鳴が漏れ出している。それも一層響く声と同時に君も肉剣の先端に壁の感触を感じた。

約半分程度が入り込み、彼女の腹全体を龟头や傘の形が分かるほど大きく膨らませていた。

「んっぐおお！♥ だ、大丈夫です♥ どうぞ、動いてください♥ 射精と共にこの儀式は成りますからあ♥」

彼女の言葉通りにギチギチに締め上げる膣内をこそぎ落とすように動かすことにする。

テイルの体を固定して、君は腰を動かしていく。彼女の体に挿入しているというよりも貫いているという見た目の性行為。それでも甘い悲鳴を上げる少女の肢体は汗に濡れ体温が上がりピンク色に染まっている。

最大限迄強化した君の肉柱を突っ込んだ女性のような淫靡な光景はなかなか見れないのだ。君の興奮を上昇させるのに十分な淫乱さだった。

「おっつぐつううゝ！♥ うっぎつあゝあゝ！♥ こんなっすつごっおおゝおゝお！♥ 私の子宮潰されてしまいそう！♥ でもっおお……おゝっぐきもちいいのおゝおゝおゝ！♥」

君の肉鞘がテイルの膣内を押しつけ奥の子宮口を叩く。

その度に重く獣が吐き出すような嬌声が、妖精の王女である彼女の口元から流れ出ていく。

場末の娼婦ですら出さないような淫らな喘ぎ声が儀式場に響いていた。

「ごんなあつあゝあゝ……ごんなの初めてっ！♥ んおゝっほお





たしていく。

「お腹膨れるのっおおお……きもちいい、いい、いい！♥ ま  
だい、グイ、グウ、くくくツツオ！♥ オツオ、お、お、お、お、お  
お、お、お、お、お！♥」

膣口から入りきらない精液が漏れ出していく。それでも最後まで  
吐き出した精液は、彼女の体を限界まで膨らませていた。

臨月の妊婦のように膨らむティルの肢体は、非常に情欲をそそるエ  
ロティックなものだ。

「ん、お、…ツツも、もう、♥ ツオくくく！♥」

か細い声を漏れ出すティルから肉槍を引き離す。抜かれていくの  
が外側でもわかるように、彼女の腹部が少しずつ凹んでいく。

「っあ、あ、くくく！♥ 精液が私の子宮から、出っていつてま  
すううう、う、ううう、ううう！♥」

意識を戻して悲鳴を上げる彼女から引き抜いた。膣口から滝のよ  
うに君のザーメンが流れ出て行く。

「ひっあああ、あまり見ないでください♥」

恥ずかしそうに顔を隠すティルはまさしく箱入り娘のようで先の  
行為をかけらも感じさせない可憐なものだった。

同時流れ出た精液が魔法陣に当たる。瞬間魔法陣が輝きだす。

君とティルの体を包むように全体が輝いていく。

「あっああああああ！♥」

それと同時にティルが甘く甲高い悲鳴を上げていた。彼女の体に  
刻まれるように光が集中していく。何かを象るように光が動いて  
いった。

「あっひっひっひっひい！♥」

最後の悲鳴を上げてティルの力が抜けた。地面に落ちていく彼女  
をとっさに君は掌で支えた。

掌で倒れ込むティルの体。全体をピンク色の模様が刻み込まれ、腹  
部に子宮を模した淫靡な紋様が浮かび上がっていた。

「こ、これで儀式は終わりました。末長くよろしくお願ひしますね」

掌から飛び立ち、テイルは君の唇へ口づけを果たすのだった。

後日、君は五社学園の自身の部屋でパソコンを動かしていた。

妖精の国での儀式も終わり、君はすぐさま溜まっている書類仕事を進めることとなっていた。

だが、先日よりは多少ましであった。

「ふうま様。先に書類は麻木様にお運びいたしました」

扉を小さく開けて、部屋に入ってくるテイルが君の書類をあちこちに運んでくれるからだ。

小人サイズの彼女でも書類などを運べるほど魔法力が強化されていた。

君の黒い霧の影響と先日の魔法陣での影響だろう。実際彼女は一段と変わったことがある。

かちやりと扉の鍵が閉まる音が聞こえた。

「それですね。ふうま様からご褒美をいただきたいと思います」

胸と股間のみを隠した青い服から漏れ出る全身に刻まれたピンク色に輝く淫靡な紋様。

股間の布もビシヤビシヤに濡れていた。

「お、お願いします。ふうま様♥」

娼婦が浮かべられるような紅潮した顔に広がる媚びた笑み。君は椅子を引いて、肉棒を曝け出すことで答える。

まだ仕事があるからお前が動くんだ。

妖精の王女であった彼女が、君の命令にも嬉々とした笑みで頷く

「はい、私の体を使ってふうま様のオチンポ様にご奉仕させていただきます♥」

そのまま君の肉剣に張り付いていくテイル。君は肉槍から来る快感を感じながら、パソコンのキーボードへ文字を打ち込んで行くのだった。

## 篠原まりと七瀬舞

とある冬の日。君達はあるイベント会場へ向かっていた。そのイベントでこっそりと違法な魔術書の売買が行われると聞いてそれを阻止する為に向かっている。とは言え、魔術書も違法とは言え危険なものではないらしく没収の上で軽い罰を与えるくらいで済みそうなので簡単なものだった。その為、君と2人の少女はかなり気楽に向かっている。

現在車を自動運転に任せて、君は後部座席に座り肉棒からくる快樂に身を任せていた。

「ふっつう♥ んっじゅぶちゅぶ♥ 私達と一緒にの任務でこんなことさせるなんて♥ ペろっちゅぶ……ちゅ♥」

「ん……ペろ♥ 本当に鬼畜で助平なふうまです」

「スウマさんです♥ っちゅぶ♥」

君の股の間で金髪ショート巨乳で眼鏡をかけた篠原まりと白髪ロング普乳の七瀬舞がいきり勃ち黒い霧を纏う肉棒に奉仕していた。

友人同士息もあつたコンビネーションで君のち○ぽを追い詰めていく。

「じゅちゅ……ちゅ、んちゅ♥ 唇が火傷しちゃいそうなほど熱いです♥ ちゅ、んぶ♥ 黒焼けした牝殺しチンチン♥ んちゅ、ちゅるるっ♥」

「ちゅばちゅつる、くちゅ♥ 私達を墮としたふうまさんの雄魔羅♥ じゅるっ、ちゅつぶ♥」

肉剣を挟むようにしてキスをする様な奉仕は彼女たちが親友同士だからだろう。

何度か彼女達の唇が当たるが、気にせず君の肉弾頭に奉仕し続けていた。

まりと舞との行為のたびに見る淫靡な光景は君を何度も楽しませる。

「んん、んれろ、れろ、ちゅぶ♥ 何度舐めても飽きませんね♥ ちゅぶ……れろれろれろ♥」

「じゅぶぶぶ、れりゅ ♡ 味もこの亀頭の形も大きさも ♡ んれろ、んく、ちゆる ♡ ぜくんぶ好きです ♡ れろ、んれろ……んれろ ♡」

肉塔に対するキスを止めて舌を這わせれば、互いに何度も重なり合う。彼女達の唾液を纏った肉厚の舌が君のペ〇スに這い重なる。

君を誘う様に二人とも見上げていた。熱のこもった視線が君の片目に突き刺さる。

思わずブルリと君が震えるのを見てまりと舞が視線を合わせる。

「この間は私が貰ったので、まりちゃん先輩どうぞ ♡」

「この後も任務があるし、そうさせてもらおうね ♡」

舞が下の方へ移り、金玉袋を小さな口でほおぼる。まりが口を開けて君の肉棒を飲み込んでいく。

舞の小さな口内で君の金玉がころころ飴玉のように転がされゾルルツと全体を吸い上げてくる。

まりの喉奥まで君の肉刀が飲み込まれ、喉嚢が亀頭を擦り上げられ棒自体は舐め上げられていた。

「んぐぐつう ♡ のっほおごりごりきひやいまひゅ ♡ ぶっじゅ……じゅぶぶぶ ♡」

「スンスンツ、くさつ ♡ 雄臭がすごいですよ ♡ あむ、っちゅっちゅ

♡ こつてりザーメン、金玉どくどく生産してください ♡ んっむ ♡」

二人とも最後まで君を追い詰めるかのように淫語交じりで、君の熱い塊を責め合う。

射精直前に行われた二人の奉仕によって、君は肉棒の中で這い上がる白い牡欲を発射させた。

肉棒の中でどんどんシゴキ上げられる白濁液がまりの口内で爆発する。

「んっぶ、んんんんっう ♡ らひて ♡ 私たちにせーえひ、たくひやん飲まひてくだひやい ♡ んぶぶぶ ♡」

「はむはむっ ♡ もっともっと ♡ ふうまさんの雄金玉 ♡ ザーメンたくさん作って ♡ 私も飲めるくらい出してください ♡」

射精している最中でもまりと舞の奉仕は止まらない。最後まで吐

き出せと言わんばかりに玉袋や肉棒へ吸いつかれていた。

まりは飲み込む事無く口内で受け止めて、リスのように頬を膨らませていく。

「ちゅるっる……んっむ、んんっう」

「っあ、まりちゃん先輩」

最後まで吐き出すと、ほっぺを膨らませたまりが肉棒から口を離す。そのまま舞と唇を合わせた。

「ちゅ、ちゅるじゅる♥　ちゅぶ……んふう♥　んんくくっう♥」

「ちゅるる……ちゅう♥　んっれりゆれりゆ♥　んっずる、ずるるるっう♥」

お互いの口内で君の白濁液が交換される。二人の口の間で赤い舌が、蠢いているのが君には見えた。

余りにも淫猥な二人の動作に君の肉棒が再度勃起。二人の体に手を伸ばす。

だが、丁度その時君たちが乗る車が目的地の近くに移動した事を告げた。

「ん、っふふ」

「ふうまさん。早く着替えてくださいね」

二人は微笑みながら君から離れる。向かい側で二人はくつつきながらクスクス笑う。あとで覚えてろ。

君は彼女達の視線に晒されながら着替える。とは言え脱ぐ必要すらない着ぐるみを着るだけだ。

鹿の着ぐるみはこれでも高性能で周りを見るだけで無く探索ドローンの情報を逐一確認できるほどだ。

そのまま彼女達を残し、止まった車両から出ていく。周りを囲む車から、様々なコスプレイヤーが出ていく。着ぐるみを着た君もいつそう目立っている。それ以上に目立つことになるが。

その理由は今から出てくる二人にあった。

「待ちました?」

「結構目立つっちゃいますね」

大きな胸の上半分だけを隠し、それ以外を黒いインナーで覆うホットパンツのサンタ衣装を着た篠原まり。

美乳の形がよくわかる体にぴっちり張り付く超ミニスカートのサンタ服を着た七瀬舞。

先程の行為の所為で色気立つ二人を侍らせる謎の鹿はどこまでも目立っていた。その代わりに車から出ていく小型のドローン群に気づいたものはいない。

「ほら行きますよ、鹿さん」

「ついて来てくださいね」

舞とまりが鹿の着ぐるみは着た君の手に抱きついて移動していく。

周りの視線も嫉妬では無く、二人の美少女に雇われた護衛代わりの色ものには見られていないことは明白だった。

そのまま二人を連れて歩んでいく。

任務を上手くこなしつつ、君たち三人はイベントを楽しんでいた。

「凄い！ 紙ごとに画風を書き分けた絵のイラスト本なんて！ これください」

紙フェチである舞の心くすぐる本があった為にそこへ行き、

「ベルカメのカップリング本とか、解釈違いです。一冊ください」

「私にも一冊ください」

読書好き同士でもあるまりと舞の狙い本へ向かったりしていく。

俺の分も買っておいて欲しい。

「こっちに視線をお願いします」

カメラに向かってポーズを取る二人を護衛する様に離れて見ておいたりしていた。多数の男から欲望の視線を向けられながらも、まるでモデルの様に写真を撮られる彼女達。その後の楽しみを思えば君も暗い欲望が燃え盛るのを感じていた。

無論、任務もそつなくこなしておいた。

魔術書の売買を行おうとしていた売り手に、舞の紙遁で買い手に軽く化けてそのまま魔術書を手。違法な書籍は君達と共に五車学園に送られる事となっている。

任務が終わると既に夜も遅くなっていた。

君達は前日に予約しておいたホテルに移動。そのまま部屋に入っていた。

「っあ、ンフフフツ♥ いくらこの服が紙で出来てるからってこんな風に破くなんて♥」

「やつあん♥ 本当にエッチなスウマさんです♥」

まりと舞のサンタ服の胸と股間の部分が破かれて服装で君の前に立っていた。紅潮した顔で睨む二人の格好はある種のフェチズムを感じるものだった。

舞の言う通り、紙遁で作られた服は術を解けば簡単に破ける。ある程度破りもう一度術を使えば、君の思い通りに破れた服装が完成する。

既に何度も行っている行為で、舞も怒ったフリをしているだけだと言うことが君にはわかつている。

事実既に君の裸になりベットのの上に座り股間からそそり立つ肉棒から、まりと舞の視線は外れる事はなくゴクリと喉を鳴らしていた。

「……っ♥」

「……っうん♥」

二人の視線が一瞬交差。そのまま君を眼鏡の奥にある空色の瞳とワインレッドの目が向けられる。

そのまままりと舞はゆっくりと君に近づく。君の股間の間にまりが座り、覆いかぶさる様に舞が押し倒していく。

「アツツ♥ 触れると火傷しちゃいそうなほど熱々勃起のチンチン♥

はっあ♥ こんな女の子を墮とすイケメン雄ちゃんちはあ♥ 胸の中に封印しちゃいます♥」

「っちゅっちゅっちゅっう♥ 色々な人が欲望の眼で見えましたよ♥ っちゅ、れるれる♥ それを独占できる強々雄のふうまさん♥」

肉棒がまりの巨乳で挟まれ、君の顔に舞の美麗な顔が近づき口付け。顔だけでなく胸や男の乳首にキスの雨を降らしていく。肉棒も巨乳で摩り上げられていった。

「んべっええ♥ えっぐいカリ首もお♥ むぐっずちゅ♥ 口の中へ入れちゃいますからね♥ じゅりゅっ、んんんん〜♥」



「ぺろぺろっ♥ 写真もたくさん撮られました♥ つちゆ、れりゆれりゆ♥ あの後、たくさんの人がそれで抜くんのですかもしれせん♥ でもこの体を実際に触れる雄はふうまさんだけっ♥」

親友同士の息のあったコンビネーションによる肉奉仕は、君の体を溶かす様な快感を与えて来た。

君の肉棒に金髪美少女が奉仕しながら、その親友の白髪美少女が煽るように淫語を囁く。舞のロングヘアが君の胸板に摩るように触れあう。

君も負ける事なく両手に黒い霧を纏わせた。舞の美乳の中心にある肉突起を掴み捻る。もう片方の手でメロンよりも大きなまりの胸を揉みしだく。

「じゅっりゆ、あつはっあ、んんん！♥ 急に女の子のおっぱい♥んひいひい！♥ 捏ねちゃダメなんですすよっう♥ つおっひっ！♥ ふうまさんだから良いですけどね♥」

「ひっあ、乳首……しびれっちゃ、うん！♥ つあはっあ、ツツウ！♥ 沢山の無駄うちザーメンの対象な私達はふうまさんの物♥ くっうっんんんくくくツウ！♥ つあつちゆぶつちゆくくくっう♥

だーれも触れられないふうまさんだけの牝なんですよ♥」

白いロングヘアが胸板に当たりこそばゆい。それだけでなくキスを続け淫語を囁く舞は君の乳首をこりこりとさすり出す。肉棒を挟むだけでなく、その間から佇立する亀頭を口内に入れ舌を這わせていくまじり。

二人の息の合った奉仕はどこまでも君を射精する為の行為だ。

そのお返しに君を彼女達を攻め立てていく。

君の掌でつかめるくらい大きく、すべすべな肌に反発感のあるまりの胸。掌で包める美乳サイズの舞。

その違いを楽しみつつ、彼女達の感じ方を楽しんでいくのを忘れていない。感じやすいまりは激しく、痛みと快楽が混じるのが好きな舞は乳首を力で挟み上げる。

二人の口から漏れる甘い嬌声が部屋中に響く。

「あ……っ！♥ もっお♥ 私のおっぱいいい♥ いじめないで

くださいよお♥　つちゅつぶ、れりゆれりゆ、はッ、あゝ、お……！  
♥　意地わるつう！♥

「んっぎっ、いい♥　いろんな男の人が熱中するまりちゃん先輩の巨乳が♥　おっお♥　ふうまさんの肉棒奉仕に使われてますよ♥」

先ほどまで幾多の男達から欲望の視線を独り占めし、モデルよりも写真を取りづつけられたまりと舞。そんな二人を今君だけが貪れる。

下衆な牡欲が胸中に広がるのを感じ、肉剣が膨れ上がり牡欲の排出欲求が肉棒を駆け上がる。

それを感じ取ったのだろう。まりが肉刀を挟み上げる巨乳の圧を上げた。柔らかくも反発感のあるまりのたわわな胸肉で力強く挟まれて快感が君を追い詰める。

それに加えて、舞が君の乳首を指でこすりながら君の耳もとで甘く囁く。

「んつぶ、つぶっはあ、膨れてきました♥　んっあゝ！♥　ふうまさんだけの胸ですよ♥　はひゅっ♥　おっばいにだしてください♥」

「まりちゃん先輩の巨乳でも包みきれない雄魔羅からザーメン、だしてください♥」

龟头から口を離し、君に向かってまりも囁く、

二人からの射精懇願に答え、君は牡欲を射出した。同時に二人の胸の手の動きを激しくする。

舞の乳首を挟み捻り上げ、まりの巨乳だけでなく乳首も掌で刺激させて快感を強く与えた。

「んああっあ、つぶ♥　あっついい♥　顔にかけられちゃいます♥

せーえきパツクになっちやう♥　んつぶ、おつぶぶ♥」

「っお、やつあああ♥　背中に熱々ザーメン掛けられて♥　火傷し

ちやいます♥　あっ♥　あっおおお♥」

二人の高らかに響く甘い悲鳴。それに同調する様に君も精液を吐き出す。

間欠泉の様に吹き上がる白濁液はまりの顔を汚し、舞の白い背中に降り注ぐ。

熱を持った白い濁流が降りかかる彼女達の体は幾度も震えていた。

大量に吐き出される精液は彼女達の体を白く染め上げていく。

「んっぶ、あつぶうう♥ 眼鏡迄真っ白になっちゃってますよ♥  
もっお♥ ふうまさんに染められちゃったみたいですよ♥ やっあま  
だ出ってる♥ お、ぶぶつう〜〜っ♥」

「っあつい♥ 私の背中まで飛んできたから髪にもかかっちゃってます♥  
後で洗うの大変なんですよ♥ もっお♥ スンスン♥ クツ  
サ♥ ふうまさんただけ私たちに引っ掛けてるんですか♥  
やっあ、もっお体の匂い迄上書きされちゃう♥ お、っ、うう、うっ  
♥」

二人の痙攣が治ると同時に君も最後の牡欲を吐き出す。そのまま  
ゆっくりとまりの巨乳から肉棒を抜き出す。

巨乳の上に溜まった白い濁流は、まるで池の様だった。舞の白い髪  
にも精液がかかっており、どこまでが君の精液かわからなくなる程  
だ。

「んお、っは、あ！♥ ……わっあ♥ ふうまさんのザーメン♥ ま  
りちゃん先輩の胸で池になってます♥ スんっあ、いただきまーす♥  
じゆるっ、ずりゆりゆりゅっ！♥」

「んうううっぶ、つぶつううう♥ あ、舞ちゃんずるい♥ もっお、私  
も欲しい♥ じゆるっ、じゆりゆりゆ〜〜ッ♥」

起き上がった舞がそれを見つけて、顔を突っ込む。そのまま音を立  
てて飲み込んでいく。まりも負けじと残ったザーメンを音をたてて  
飲んでいった。

二人の美少女が君の吐き出した白い池を吸い込んでいく。そんな  
淫靡な光景は君の肉塊がビキビキと、再び力を籠めるのに十分なもの  
だった。

「んっぎゅ、んっぐんう♥ 喉に絡んじやいます♥ っあ、まりちゃん  
先輩、精液眼鏡にもついてますよ♥ んっべ…ペろペろっ♥」  
「んんんっ、んぐんうう♥ やあん♥ 舞ちゃんにもついてますよ♥  
ほっぺの取ってあげます♥ んぺっえろペろ♥」

そのまま二人は互いの顔にある白濁液を舐め合う。子猫の様に舐  
め合うその光景は、どこまでも淫猥だ。赤い縁無し眼鏡や柔らかかそう

なほつぺに付着した白濁液を、互いに舐めとっていた。

丁度君も身を起こす。目の前にバックの格好をした舞の可愛らしいお尻がふられていた。

二人の世界に入るのはよくないな。

そのまま濡れて愛液を滴らせる舞の膣口へ、再びいきり立ち黒い霧を纏わせた肉棒を、一気に叩き込んだ。

「~~~~ツあ、お、ごお!! ♥ い、いきなり入れるのは反則です ♥

お、お、おう、ッ! ♥ ふうまさんの雄魔羅、私の子宮にキスしちゃてるんですから ♥ いつあ、っ……お、んんッ ♥

「ペろ、ペりゅッ……っあん ♥ 舞ちゃん、ふうまさんに入れてもらったの? ♥ いいなあ ♥」

舞の力が抜けて、まりの巨乳に顔が沈んだ。

君はそのまま腰を激しく動かし、目の前の真つ白なお尻を握りしめる。舞の膣口がびちゃびちゃといやらしい音をたてながら、シートに愛液を撒き散らしていた。

「んっあ ♥ 胸に震えてるのが伝わってる ♥ んあ、ツア ♥ きもちいいの? ♥」

「あ、あ、んぎっい……!! ♥ う、んッ! ♥ ふうまさんの雄魔羅! ♥ や、ああ、あ、っ! ♥ 硬くて太くて大きくて! ♥ えあ

、あ、う、う……!! ♥ 私のオマンコ征服しちゃってるんです! ♥

えっひい、ッ、おお、っ! ♥ っあ、お尻つかまないてください! ♥ んっぎゅ、ほお……お、っ! ♥ お尻力強くもまれるときゅうきゅ

う締めちやいますから! ♥ う、うッ~~~~、あ、! ♥」

尻肉が君の掌でつかまれ形を変えていた。赤くなる程思いつきり挿んでいるので、痛みを感じているようだが、舞の口から出る声は確かに快楽に染まっていた。

痛みを感じながら舞は確かな快感を感じている。まりも彼女の顔を覗き込む。まりの空色の瞳は、快楽に溶かされた舞の表情を確かに見ていることだろう。

君からは白いロングヘアと、その隙間から見える汗に濡れた白い肌の背中、そして千切られたサンタ服の残骸しか見えない。

君はまりへ舞の乳首をつねる様に命令した。まりは君の方へ紅潮した顔を見せるとこくりと頷く。感じた舞が、感じやすいまりの胸で震えることで快感を感じているようだ。

「あは、やあへ、え、あ！　♥　まつあツツ、まりちゃん先輩……だめえ♥」

「ごめんね、舞ちゃん　♥　あツ　♥　あ、ツ！　♥　私ふうまさんに逆らえないから♥」

「い、っ、ぎ……っひいつん！　♥　痛いのに気持ちいいのだから♥　♥　いつ、あ、っ！　♥」

君も命令に答えて、舞の拒否を否決。まりは君の命令通りに動き、舞の乳首を抓る。

同時に君が力強くお尻揉みしだきながら叩く。ぴしゃりという音と共に、白い尻肉に君に手のひらで作られた椀が開く。

君の肉棒を咥え込む膣内が瞬間きゅつと咥え込んだ。激しく舐めしやぶるような膣内から引きはがす様に肉棒を激しく出し入れしていく。その度に君の腰を溶かすような快感が攻め立ててきていた。

「お、っつあ！　♥　舞ちゃんが胸で震えて私も感じちやう　♥　んひっう、い、い、い！　♥」

「アアあ、ーッ！　♥　っおひっ！　♥　お尻叩かれるのだから♥　んぎいつお……おっお、！　♥　子宮押し上げるのも駄目ですからあ！　♥　はひっ！　♥　さつきから何度もいつてるんです！　♥　これ以上いじめないください！　♥　ぐ、う、く、く、くッ　♥」

君から与えられるお尻からの痛み。まりが与える胸からの痛み。同時に君の肉棒が与える強烈な快感に舞の体は痙攣しっぱなしだった。まりのメロンよりも大きい胸肉に乗っかりながら舞は快感に喘いでいる。

舞の全身の痙攣が伝わり、まりの乳首と巨乳に擦れ合い甘い喘ぎ声を上げていた。

「ひいっ、あつあ！　♥　わたしもかるくイック！　♥　ん、ッ、ぐ、あ、ああア、ッ！　♥」

「ふう……っんお、ッお！　♥　ふうまさんの雄魔羅　♥　あ、ん、っ

！♥ ぶつくり膨らんできました！♥ あゝ あ！♥ 出すんですね  
！♥ ドロドロセーえき！♥ えひつい！♥ ふうまさんの強つよ  
ザーメン！♥ んゝおゝっおお！♥ 私の子宮にはきだしてくださ  
い！♥ いおゝおおゝっおゝおつ！♥」

獣の様な絶叫をあげる舞。同時に膣内が激しく収縮。限界まで締め上げられてタガの外れた肉剣から白濁した牡欲を吐き出す。

「あひっ、ひっくー！♥ 舞ちゃんと一緒にイツちゃう♥ イううゝうう！♥」

「おっおおゝおゝっ！♥ 熱々せーし中で暴れてる！♥ ほおおっ  
おおおお！♥ これやつばいんです！♥ あゝくっ、あゝくっ、っ  
！♥ いしきとっんじやいます！♥ おほおゝおおゝおおゝ！♥」

舞も絶頂と同時にまりも甘イキしていた。

下を向きながらまりは艶やかな悲鳴を上げている。金色の髪がプルプルと震えているのが目に見えていた。

舞の膣内全体がうねりながらオマンコの中で激しく脈打つ君の肉棒から精液を搾り出していた。

「あっ、あっ……っ♥ まいちゃんすっごい顔してます♥」  
「っおおっおゝくくくッッ！♥」

最後まで吐き出すと、舞が力なくうなだれた。痙攣し続ける彼女の体をベットに預けたまりが君に近づく。君も痙攣する舞の膣内から肉刀を取り出した。

「舞ちゃんの愛液とふうまさんの精液交じりの特性ジュースいただきまーす♥ んっあむっちゅ、ペリゅ♥」

そのまま味わう様にまりがフェラしていく。淫水まみれの君のち○ぽを躊躇いなく彼女は頬張っていく。

「んぐっちゅくく♥ ちんちんに残ってるふうまさんの優秀牡液♥  
ちゆるちゆる♥ 最後まで飲んじやいますね♥ ちゆる、んぐんぐ♥」

尿道口に残った精液も飲み込むと、前に移動したまりは君のペ○スの上に膣口を乗つけた。くちゆくちゅと君の亀頭に刺激されながら

甘く囁いてきた。

「あつん♥ 今度は私に下さい♥ ふうまさんの強つよチンチン♥  
あの会場で性欲に塗れたカメラマンの人達には一切触れられない♥  
ふうまさんだけの♥ ふうまさんだけに弱い牝マンコ♥ ふうま  
さんの優秀ガチ雄ザーメンコキ捨ててください♥」

そこらの高級娼婦が奏でるものよりも淫靡な誘いに乗り、君は既に  
勃起した肉弾頭を叩き込む。

だからだと愛液を垂れ流すまりの膣内は絡みつくように君の暴れ  
ん坊にまとりついてくる。

「んお、おおお、っ！♥ ふうまさんの相性抜群の優秀チンチン♥  
ん、ん、うう、ううう、！♥ 入れられただけでイっちゃいます♥  
アツは、あ、くくくッ♥」

先ほどまで甘イキしていたまりの体は、一度折れるか心配になる程  
背中を反らせた。そのまま君に体を預ける様に倒れ込んで来る。

君は肉厚のお尻を掴んで彼女の体を支えながら、肉塔を奥底へ叩き  
込む。

「おっおひッ！♥ 子宮♥ うう、ううう、ッ！♥ ごっごっ駄目で  
す！♥ 駄目になっちゃいますからあ、ああ、くくくッあ！♥」

まりが痙攣する度に、君の胸板で潰れた巨乳が震え擦れる。尻も震  
えているのが手の感触からわかる。

そんな感じやすい彼女の体に魔の手が降りかかる。

「まりちゃん先輩。さっきのお返しです♥」

「ッあ、！♥ まいちゃん♥ やっあああ♥ お尻はだめだつて  
ばっあ♥」

どこからか取り出した双頭のデイルドをつけた舞が起き上がり、ま  
りのお尻の窄まりに狙いを定めていた。先ほど起き上がったのを確  
認していた君は、狙いやすいようにまりの尻肉を開く。そのまま一氣  
に尻穴へ舞は自身の膣に挿入した、二穴型デイルドを挿入していく。

「んんんっ♥ 聞こえませんかよ♥ おおお、♥」  
「ああああ♥ うっそつき♥ いいい、いいい！♥」

まりの制止の声は聞こえないふりをして、舞は腰を動かしていく。

壁越しにデイルドが挿入してくるのが、君の肉竿から伝わって来た。  
大きく重い悲鳴を上げてまりが喉をさらけ出す。

「あ、はッ♥ 相変わらず感じやすいですね♥」

「お、お、おお、っ……ほおお、っ！♥ これ駄目だつてばっあああ、あ！♥」

まりの感じやすい体に君と舞とでのフタ穴攻めが酷いことになるのは。君達にとって周知の事実だった。それでもまりのこの感じまくる瞬間の色気は、君達の嗜虐心を掴んで離さなかった。

「あつ。あんあつ！♥ さつあふうまさん♥ はひっ、んあ！♥  
一緒にまりちゃん先輩をいじめちゃいますよ♥ んっぐううう！♥」  
「んっお、んんん！♥ もっうやっば♥ あああああつ！♥ 頭痺  
れ♥ えええええ♥ 真っ白になってます♥ うううあ、くく  
くッ♥」

まりの懇願を無視して、君と舞は息を合わせて腰を動かす。肉厚の壁一枚隔てて、君と舞が中を攻め立てる。肉壁の向こうで合わせる様にデイルドが動いているのが肉剣からの刺激でよく解った。

自分の女と共に別の牝を攻め立てるのはある種の支配欲を満たしてくる。

「はっ、はっあ……あああん！♥ ふうまさんの雄魔羅♥ あひっ  
んくっう！♥ 私にもごっごっ来てるの伝わってますよ♥ はああ  
あん！♥」

「ほお、お、っ！♥ おひりも！♥ お、ッ……ッ♥ おまんこも！  
♥ んひいいい！♥ しゅっごっいいいでっひゅっう、う、う！  
♥」

縫る様に君を力強く抱きしめながら体を大きく剃らせるまり。感じまくる表情を舞が覗き込んでいた。

涙と唾液に塗れて顔を赤く染めたまりの表情は、どこまでもいじめたくなるような雰囲気を出している

「んっくっう、っ！♥ こういうの好きでしたよね♥ んべええ♥  
まりちゃん先輩もっといじめてあげます♥ べろっ、ペロペリゅッ  
」



「やつあつあああ！♥ 耳の中舐めないっでええ！♥ ひいッ〜  
〜！♥ もう気持ちよすぎて訳が分からなくなっちゃいます！♥  
んあああッ〜〜〜♥」

さらにまりを追い詰めようと、舞は舌を尖らせて耳に這わせた。グ  
チユグチユという水音がまりの脳内に響く。

普段はM気質な舞も、友人のまりを含んだセックスの場合で責める  
立場になるとS気質を醸し出すのを君は良く知っていた。

「あ、つああ〜〜〜ッ！♥ まりちゃん先輩のお尻きゆうきゆう締  
め付けてきて♥ あゝふつ、ひつあ！♥ 私もイツちやいます♥ ん  
んんううう♥」

「くふうううう…‥もっおっお！♥ しんじやううう！♥ いい  
いいつぐつうう！♥ またぐるッ！♥ イキシんじやうう！♥  
んッほおゝおゝッ！♥」

そんな感じやすく攻められやすいまりは、君と舞が与える快樂で気  
が狂いそうになっているようだった。

既に白目を向いて絶叫し続ける彼女へザーメンを吐き出す。後ろ  
の舞もお尻の穴の収縮の同調して体を大きく震わせた。

「んあ、あ——ッ♥ まりちゃん先輩ッ♥ お尻の締めるの強  
いです♥ あんん♥ わたしもまたイっちやうううッ♥ うう  
う〜〜…‥ッ♥」

「んッほおおゝおお！♥ ふうまさんのあつついい、ザーメンが！  
♥ あひっい！♥ 子宮に吐き出されるの！♥ 気持ちよすぎです  
ううううう！♥ おほおおゝおおおゝ！♥」

重い艶声を響かせながらまりは喉をさらして体を逸らす。君の背  
中を掻き毟る様に爪が立つ。舞もまりの体に抱きつきながら腰をガ  
クガク震わせている。

背中からの痛覚の仕返しにきみは最後まで精液を子宮に吐き出し  
た。

「あ〜〜、つああ♥ あつあ、もうまりちゃん先輩意識飛んでますよ♥  
んん〜、抜け出せません」

「あ…‥っ♥ …‥っ♥ …‥っお…‥っ♥」

かすれた息の様な声がまりの口元から漏れている。きゆうきゆう締め付ける彼女の膣内から何とか君の肉棒を取り出す。

舞も大きいため息をついた。

そのまま支えを失ったまりの体が後方に倒れ、舞の体を押し通す。君の目の前に仰向けで重なる二人の牝肉が現れた。無論君の肉棒はまだまだ元気いっぱいだ。

「んんんっ っう……っ ♡ ちよつと、ふうまさん？ ♡」

舞のデイルドが入った膣内を避けてお尻の窄まりに肉棒をくつつけた。

「あつあ、あのさつき行ったばかりだから少し休憩を、ですね？ ね？」

舞の縋る様な視線。君はそれにとっこりと微笑み、肉棒をお尻の穴へ挿入。

既に何度も味わったことのあるその窄まりは君の肉弾頭を容易く飲み込んでいった。

「おっごッお！ ♡ ふうまさんの鬼畜ううっ っうっ っう ♡ んごッおっ！ ♡」

「んんうっあ ♡ 今度は舞ちゃんの番みたいですなええ ♡ なら私もっ！ ♡ は、あ、あああ！ ♡」

舞の嬌声と腰の跳ね具合で上に乗ってたまりも起きた。君と舞を観察してすぐに状況を把握。彼女はお尻に力を入れて、デイルドで舞の膣内を蹂躪していく。

「ぐ、あ、あッ！ ♡ まりちゃん先輩勘弁してください！ ♡ いいいいいいいい！！ ♡」  
「んっ！ ♡ んっ！ ♡ 嫌です ♡ 許しません ♡ ふっ、うううん！ ♡」

今度はまりが舞の体を貪る。肉の宴はまだ始まったばかりだった。

数時間後、既に君に貪られた舞が意識を飛ばし虚空を眺めていた。その隣で体が頑丈なまりが君に最後まで貪れている。

「おゝおゝッおゝッオほおゝ おゝゝゝ！♥ もっう！♥ おまんこ、こわれちゃいますから！♥ あああ、ううゝうううゝうううゝうううゝ！♥」

「あゝゝゝッ♥ ひゅっうゝゝゝ♥」

言葉とは裏腹に君の腰と背中に腕と足を回して抱きしめていた。その隣で膣口やお尻の穴からだらだらと白濁液を吐き出す舞が、虚な言葉を吐き出して虚空を眺めている。悲惨な状況とは裏腹に顔の表情は、明らかに喜びの笑みを浮かべていた。

「んおゝ おおゝ おおゝ おゝゝゝ！♥ イキ死んじやいます！♥ んゝんあゝ あゝゝゝッ！♥ ふうまさんのちんちんに全面屈服しますから！♥ あゝひいいいゝいゝいゝいゝいゝ！♥」

まりも君が与える激しい快樂に打ち震えながら、抱きしめる力を離さない。

君もそれに口づけをすることで答えた。眼鏡の奥の空色の瞳が君の目と交わる。

「んっちゅ、じゅぶじゅぶ！♥ まっひやついつひやつうゝ！♥ んんゝんゝんゝんゝゝゝゝっうゝ！♥」

深いキスをしながら膣奥を叩きつけられる快感にまりは耐えきれず痙攣するかのようには震え続ける。ギョツギョーツと搾り上げられる様に強い圧力に合わせて君も射精していく。

「あゝおゝ ほおゝ おおおゝ おゝッ！♥ もっおイツでます！♥ なのにいゝいゝいゝいゝ！♥ まだ、イツぐううゝうゝうゝうううゝうゝ！♥」

君の唇から離れて、まりが雄叫びの様な嬌声を上げた。そのまま力一杯君を抱きしめる。まりの巨乳が君の胸板で潰れている。

「ひっい、おゝ おゝゝゝッ！♥ ゝゝゝッ ♥ ゝゝゝッオゝ♥」

最後まで吐き出すとまりの口から言葉にならない虚な声が漏れ出していた。

窓を見てみればカーテンが朝焼けで光っていた。とりあえず君はお風呂を入れることにしたのだった。

その後何とか時間ギリギリにホテルから出た君達。自動運転の車で五社学園に向かっている。

椅子を完全に倒してまりと舞は手を重ねて眠っていた。朝まで君に激しく貪られた彼女達は車内ですやすやと熟睡。君も流石にそれに手を出す気に離れない。ただ好奇心で君は二人の間に体を横たわえて見た。

「んんっう。ふうまさん。まいちゃん」

「ふうまさん。まりちゃん先輩。んんう」

すると何を感じたのかまりは君と舞の名前を読んで、舞はまりと君の名前を読んだ。そのまま二人して君の体を抱き枕の様に抱きしめてきた。

役得！幸運な状況に君は身を任せるのだった。

## ヴィクトリア後、ミレイユとミーティア

「どうかな？…♥ あゝむ…：…んちっ、じゅ、じゅる♥ 新作のドローン装置は？♥」

超小型のハエ並に小さなドローンをグローブ型の操作装置で動かして見ている。

最新型のドローンを君も股にいる女性に君は入手してもらったのだ。お礼代わりに君は黒い霧を纏う肉棒を舐めるブロンドの女性の頭を撫でた。

「んちゅ、ちゅるる…：…んく♥ 気に入ってくれたみたいだね」

癖のある金髪にスーツを盛り上げる大きな胸。バイオレットの瞳で君を見つめるヴィクトリア・ザハロフは、肉棒に口づけしながらドローンの使い心地を聞いてきた。

流星は最新型というべきだろう。君の思い通りに動いている。

「ぢゅるる、れろれる…：…はむう♥ むちゅうううう…：…その新型ドローン、操作にコツはいるけど、ちゅれろえろ♥ それさえ掴めば、鍵開けから撮影までこなす最新鋭万能機だ。君のために何とか取り寄せたんだからね。はぶっ、んぐっぐぶぶぶっう♥」

君の黒い霧の強化で感覚も増大している彼女は既に発情している様だ。ドローンの説明もしながらも君の肉棒から舌が離れない。

君の肉棒を丹念に愛撫してきた。ぷにぷにの唇を使って竿全体を吸いながらしごいたかと思えば急に喉の奥まで飲み込みグリグリと首を振りながら伸ばした舌先で刺激してくる。

ぐちゅぐちゅと粘ついた水音がヴィクトリアの口元と黒いスカートの中から聞こえてきた。

注文したドローンを渡された時からずっと君の肉棒は彼女の口の中で愛撫され続けているのだ。既に発射準備限界点は超えていた。

君の欲を感じ取ったヴィクトリアは、肉棒を一気に飲み込み、唇を肌に合わせて舌を絡めてくる。

「んぶんん、んぐじゅぶぶ♥ ふえそうふあ？♥ のろふあんこにふあすとふいい♥ んんっぐんぶっううううう！♥」

腰の奥からくる電流のような快感にあらがうことなく、肉棒から白濁流が発射された。同時に君の黒い霧の力で口マンコ粘膜の感度を底上げされた彼女は、スーツ姿のまま体を軽く震わせている。

金髪美女の喉をぽこりと膨らませる君の肉棒の先端から胃に目掛けて吐き出されていく。

「んっぎゅ、んぐぐぐっううう。う。う！ ふあされてっえっ  
っいひっへっるううう！ ♥ んんんんっぎゅ！ ♥」

喉奥に流れ込む白濁液を、喉を動かして飲み込んでいくヴィクトリア。彼女の背筋が微かに震え、座り込んだ短いスカートの下に透明な水溜まりができているのを君は見逃さなかった。

「んっんんっ……っちゅうじゅぶじゅるっ ♥ ぷはっ、相変わらず量も濃さも強烈だね ♥ 女を発情させる強烈チンポだ ♥ 取引のし甲斐がある ♥ 早速、そのドローンを割安で渡した借りを返させてもらうよ ♥」

飲み終わると立ち上がり、君の肉棒を黒いスカートの中にある膣口で咥え込みながら座った。既にびしょびしょに濡れている彼女の花弁は、君の黒い霧を纏った肉棒を抵抗感なく飲み込んでいく。

「っんんっあ……あ相変わらず、おつきいな ♥ 君の極太ペニスっうん……はーっ、はーっ ♥ 私の中をゴリゴリ広げてくる♥んっんんぐうう！ ♥」

高らかな嬌声と共に彼女の体が軽く震える。

ふにやりと柔らかなヴィクトリアのスーツに包まれている、たわたかな胸が君の胸筋に当たり軽くつぶれてしまった。

君の胸から感じる二つの突起物の感触は彼女が確かに興奮していることの証だった。

「おっおおっ ♥ はっあああっ ♥ 入れただけで ♥ んっっ ♥ 軽くイッテしまったよ ♥ はっあはあっ ♥」

抱き着く彼女の体は荒い息と共に、わずかに痙攣しているのを君は感じ取った。軽く絶頂を迎えた女の体は力なくうなだれている。

首筋に彼女のクールな吐息がかかる。鼻にメントが香った。

君はヴィクトリアの大きなお尻に手を回すと、そのまま腰を動かし

始めた。

「んっうっ、おほっおっ！♥ いい、今イツタって言っただろう！♥  
んっひっい！♥」

既に軽くイツている彼女の膣内は熱くうねりながら君の肉棒を啜え込んでいる。そしてそのトロトロの肉壁は、君の肉棒で軽くえぐるだけで感じてしまうほど、敏感なようだった。

ヴィクトリアの膣内をぎゅうぎゅう絞めながら震え続ける。

「んっお、ぎっひっいっ！♥ きみの極悪チンポのっおっ！♥ おっ！♥ おっ！！♥ と、りこになってしまいそうだっ！♥ あっ、ああっ、あっ！♥」

ブルートパーズのような瞳が、涙に濡れながらも君を見つめて来る。

すっかり君専用のマンコになったヴィクトリアの中が、肉棒をきゅうきゅうと締め付けてきている。

腰に来る快樂電流を楽しみながら、君は彼女を楽しませる様に腰を動かす。

「んっひっ！♥ おっおお、おっ！♥ そこ弱いからツア！♥  
あっひ！♥ だっめだ！♥ もうっうっ！♥ くっるっう！♥ 雑魚メスマンコ！♥ いっくっうっ！♥ いっぐううううっうっ！♥」

君の目の前でヴィクトリアは体を反らしながら、高らかな嬌声を上げる。

彼女の牝口が君の肉棒を痛いくらいに締め付ける。

牛乳絞りのように膣肉が絡みつき、子宮口が龟头部位に吸い付く。

腰の辺りが甘く痺れ龟头の先端から、黒い霧を纏う白濁液の奔流に逆らわずに逆らせた。

「ひぎっ、つぐっううん！♥ せっ、せーっしっがっ！♥ あっっあっ！♥ 中に直接ぎでっるっうっうっ！♥ おっひっいっいっいっいっ！♥ いっでるのっいっ、もっど深いのっ……ぐっる！♥ おっあああ、あ、あ、っ！♥」

全身をブルブルと震えながら、彼女は絶頂し続ける。

君が白濁流を吐き出す度に、膣肉が肉槍を離すまいと搾り取る様に蠢いていく。

「んっいいいいっ！♥ 子宮で精液浴びてっ！♥ おっおっっ♥ この感触っ♥ んっおおっ！♥ くせになってしまおうううっ！♥ あっあああ♥ あっあっ！♥」

亀頭の先を咥え込む子宮口に向かって、最後の一滴まで白濁液を吐き出して行く。

甘い快樂電流が収まり出すと共に、君の目の前で打ち震えるヴィクトリアも元に戻りだす。

「ふっあ——くううっうううっ♥ よ、ようやく終わったかな？♥ はっああくくっ♥」

大きく深呼吸をしながら、ヴィクトリアは呼吸を整えていく。

何度も深く息を吐きながら、淡く濡れた碧い瞳が君を見つめだす。

「どうかな？ 今回も装備は？」

無論満足している君は、要求されていた金額の入った記憶装置を渡す。既に何度も取引を行い互いに信頼している。

確認しなくても、君は要求された金額はしっかりと払う。

「ふふ、毎度ありがとうございます……んっちゅ、れりゅれりっ♥」

記憶装置を手渡されたヴィクトリアはそのまま離れずに、君に口づけをする。

舌は絡めない甘いキスを何度も交わらせた。

その度にピリピリするような刺激が背筋を走る。

僅かな快感にも反応した君の肉剣が段々と起立しだしていった。

「んあっ♥ また大きくなったねっ♥ あはっ♥ まだ時間があるだろう？♥」

期待した視線をヴィクトリアは君に向ける。そのまま君の体にぎゅうつと抱き着く。

君達はそのままの体勢で、続きを再開していくのだった。

新しい装備を入手した君はそのまま五車に向かって上機嫌で歩い



ていた。今現在はホテル街にいる。最新の装備である超小型ドローンは、君の髪の毛の中に隠れており、操作用のグローブもつけたままだ。

気を抜いていたつもりはないが、油断していたのだろう。君は突然後ろから頭をガツンと殴られた。そのまま意識が遠のいていく。

「ご、御免なさい、ふうまさん」

「ミーティア。仕方ないでしょ。私たちが生き延びるためにも、こいつを骨抜きにしないと」

遠のく意識の中、君は聞いたことのある声を聞いた気がした。

「やつぱりこういうのは良くないですよ。ちゃんと話せばふうまさんだったら助けてくれます」

「淫魔族が対魔忍に頭を下げろっていうの？　そういうわけにもいかないでしょ！　ああもう、ミーティアは甘すぎるわ。私が何とかするから、とつとと出て行きなさい！」

君は周りから聞こえる二人の女性の喚き声で目を覚ます。こつそり目を開いてみればハートマークの尻尾をしたの少女が、蝙蝠の乳母差を生やした女性に部屋から叩き出されるのが見えた。

「全く、淫魔王様亡き今私たちが何とかしないといけないってのに」

ピンク色の髪から角を生やした淫魔族の女性がぶつぶつと呟きながら、君に近づく。君も体の確認と起きたことを示す為、体を軽く動かす。

どうやら服の類は脱がされていない様だ。グローブも髪の毛にいるドローンも取られていなかった。

君が完全に目を開けると、ニヤニヤと獲物を見定める様な目で見ると淫魔族の女性が、君の横たわるベットの端で立っている。君が能力に目覚める前に何度もおちよくってくれたミレイユだ。

今回は君を完全に墮とすつもりの様だ。夢ではなく現実でそういうことをすると言うことは、淫魔族の本気とも言わなければならないのだと言う

事を君は知っている。

「お久しぶりと言うべきかしら？」

チャシヤ猫の様な笑みを浮かべて、君のズボンを脱がしていく。

淫魔族らしい行動だ。君を性行為でチャームして操り人形にした  
い様だ。

君はいきなり何をするんだと言いながら、わざと体を揺する様に動  
かす。グローブでこっそり操作しているのを気づかせない為だ。

「無駄よ。その腕の手錠。能力を封印する効果があつてね」

彼女の言葉に従ったフリをして、君は目線を上げる。ベットの縁に  
巻き付いた一本の手錠が君の両腕を拘束していた。

「壊すか外すかすれば話は別だけど……鍛え上げられた獣人でもそれ  
は不可能な淫魔族のとつておきよ」

フラグ乙。君は心の中でそう言いつつ、手錠で音を出しながら悔し  
そうにミレイユを睨みつけた。

「ふふふ、相変わらず良い顔をするわ♥」

ミレイユはニヤニヤの美貌を歪めて君の足の間に入り込む。淫魔  
らしい好色の笑みを浮かべながら、君のズボンとパンツを素早く下ろ  
した。

ポロンと君のまだたつてもいない肉槍が現れる。

「まだ立ってないの。私の姿を見ただけでチンポが立つのもいるの  
に」

無茶言うな。思わず漏れた言葉を聞いた彼女は君の肉棒をピンと  
指で弾き、ふくと桃色の吐息を吐いた。

ガツンと殴られたかの様な快感が君を襲う。一気に肉棒が勃起し、  
君の視線からミレイユの顔を隠す。

「んっう——はっあ♥ はっあ♥ 相変わらず精力の濃いチンポね

♥ んっく♥」

お腹を空かせた童の様に君の肉棒を、ミレイユが息を荒げて熱のこ  
もった視線で見つめている。

黒い霧を纏おうとさせるができない。ミレイユの言う通り君の黒  
い霧の力は封印されている様だ。

後少し。グローブを嵌めた掌をこつそり動かし続ける。

動くの掌に意識を向けないように君は、能力が使えない事で悔しうに顔を歪めて見せる。

「噂に聞く能力の向上は今ではさせないわよ。私の虜になれば使わせてあげるけど♥ はっあ、あっつ♥」

君の肉棒をさわさわと擦りながら、ミレイユが挑発するように笑みを浮かべて見つめてくる。

勃起した肉棒をそのまま胸に挟まれて、口に含まれていく。

絹肌のようなサラサラした感触と、舌粘膜が亀頭に絡まってくる。

「んっちゅ、ちゅりゅれろっおっ♥ さあ、淫魔の快樂の虜にしてあげるっ♥ ちゅちゅ、れりゅれりゅっ♥」

パイズリフェラをされて、激しい快感を受ける。目の前でシミ一つ無い白い巨峰が、君の肉塔で形が変わっているのが目に映る。

淫魔族の能力は君を追い詰めるような快樂が与えられる。

この気持ち良さで相手を奴隷にするのが淫魔族だ。

だが、もう君にとつては違う。彼女達こそが獲物で、君こそが狩人だ。

パチンと君は髪に隠しておいたドローンで、手錠の鍵を開ける。そのまま左目と肉棒に力を集中してミレイユの巨乳を掴む。

「くっひいひいんんっ♥ う、うそっ♥ おおっ♥ なっあ、なんで！♥ ひっああああっ♥」

左目が銀色に光り、肉棒に黒い霧が纏う。能力封印の手錠から解放されればこの通り。

左目に宿る邪眼で淫魔族の能力を封印すれば、後はただ体が魅力的で名器の獲物になりさがる。

よくもやってくれたな。体を起こした君は左目を銀色に光らせながら睨み付ける。

黒い霧を纏わせた両手で、ミレイユの巨乳を握りしめる様に揉み込んでいく。

「んっんんっ♥ あ、あははっ♥ えへっ♥」

冷や汗をかきながらミレイユは、媚びた様な笑みを浮かべている。

君が完全に怒っておることを察した様だ。実際まだ後頭部は痛い。どつちにしろ君はここで彼女を墮とす事にした。そこまで拡充主義ではなかった淫魔族のミレイユが、君を奴隷に墮とそうとまでしてきたのだ。淫魔族の中で何かあったのだろう。それを聞き出す為、次いでこれ以上悪さをさせない為。今までの借りを返す為、君は完全に墮とすつもりでミレイユを抱くことにした。

つまりかなり激しくすると言うことだ。

サラサラ触感の大きい乳肉から右手だけ離して、ピンク髪の少女の後頭部を掴む。

「か、堪忍しつ——んんびゅっ♥ごっぷ、んぶぶっ♥」

ピンク色の髪を掴み、ミレイユの口内へ肉棒を叩き込む。

さらに肉棒に黒い霧を集中。

肉棒が黒い霧の強化により膨張。

君の肉キノコを啜っていた彼女の唇が限界まで広がる。亀頭がさらに奥にまで侵入し、胃の寸前まで届く。

ぽっこりと真つ白な喉が君の肉棒の形に膨らんだ。

「んっぶぶっえっ!♥ご、ごえっ!♥あつぐっうっ!♥のど、ごわれっりゅっ!♥んっびゅ、ぐじゅぶぶびゅっ!♥」

ミレイユの目が大きく開かれる。口内から重苦しい悲鳴が溢れる。普段ならしない口内でさらに大きくなる君の肉棒。喉を制覇し胃まで届きそうなほど、巨大な肉槍を受けて、ミレイユの瞳が目蓋まで裏返る。

「んぶじゅっ!♥喉、マンコにされてるっうっ!♥おっぶ、れりゅっりゅっ!♥しっかり舐めるからあっ!♥んぎゅ、れっろれうっ!♥お、もちやにしないでっ!♥んびゅっじゅじゅりゅりゅっ!♥」

そのまま肉棒を叩き込み続ける。

本来なら苦しいだけの行為だが、君の黒い霧の感覚強化で敏感になった喉。淫魔族でもあるミレイユは苦しいだけはない様だ。

むにゅむにゅ柔らかく君の左手で形が変わる白い巨峰も、乳首事押しつぶすようなもみ方で感じているようだった。

「んやつあつ！♥ れりゅつじゅぶつ！♥ こんな乱暴にされてるのにつ！♥ んじゅつぶ、れるつりゅう！♥ 感じちやううつ！♥ おつお、ごつぶじゅつぶじゅつぽつ！♥」

実際叩き込む度に、悲鳴だけでなく甘い嬌声も漏れ出ている。君を見上げる目もだんだん蕩けるように潤んできた。

喉肉がきゆうきゆうと君の肉剣を絞り込んで来る。舌がシャフト部分を必死に舐めとる様に奉仕。

顔がリングのように真っ赤になったミレイユの必死な口奉仕が、君の金玉で精液をぐつぐつと増産しているのが感じた。

「んつきゅつぶつ！♥ まった、大きくなつたッあ！♥ じゅぶりゅつう、んおお、お、っ！♥ 出してっえっ！♥ ごぶじゅぶぶつ！♥ 苦しいのに気持ちいいのっ♥ おっひっ、いいいっ！♥ もういやなのよッお！♥ じゅぶずりゅりゅつ——んっおおおお、お、っ！♥」

君の目のもミレイユの股の下にある床に、水溜りができ出すのを確認できた。

涙に濡れた彼女の紫色の目が、君を見上げながら懇願。

腰から来る甘く痺れる快樂電流で、我慢を辞めることに舌。

部屋のドアの隙間から君達を覗き見る視線に気付きつつ、君はミレイユの頭を腰にくつつけるように押した。

「ごつつごえ、え、え、え、え、え、っ！♥ のろのおぐつ！♥ ぐつぶりゅりゅりゅつ！♥ 胃にぎでつりゅりゅううつ！♥ んっぐつおおおお、お、お、お、っ！♥」

黒い霧を纏う射精と同時にミレイユの体がのたうち回る

離れようとする頭をピンク色の髪事掴み腰元に押し付ける。

ほぼ白目となった彼女の瞳が、絶頂アクメの激しさを物語っている。

「んぶじゅつぐぐつうつ！♥ 喉アクメえええ、え、っ！♥ ぐつぶじゅうぶつ！♥ おぼえちやうううつ！♥ んおごつおお、お、お、っ！♥」

鼻から君の白濁液がこぼれた。美麗な顔を汚す快感が君の心のう

ちに広がる。

君の太腿を必死に掴んで、意識を飛ばさないようにしている。

「じゅりゅつりゅぶつ♥ 精液濃すぎっいつ♥ ごぐつごぐつおっ♥  
胃が膨らみそうなよっおっ♥ んりゅじゅぶぶつぐっ♥」

きゆうきゆう性器のように君の肉棒を締めるミレイユの喉を楽しみながら、肉棒をゆっくりと剥がす。

敏感になった喉を鬼頭部がゴリゴリ削る度にミレイユの体震えていた。

「んぶじゅ——っはっあはっあっ♥ 精液でっ♥ んっんっぐぐっ♥  
口も鼻も喉もっ♥ だろだろよっおっ♥ んんっすっつうっ  
はっあっ♥ 臭いが頭にくるっ♥ おかしくなりそうう  
すうつううはっあああっ♥」

口から肉棒が完全に出る。ミレイユは大きく深呼吸。

鼻から出ている白濁液の鼻水を手で擦りながらとっている。

口の周り迄君の排出した白い液体で覆われて、美貌を汚していた。呼吸に集中し気が抜けている彼女の体を持ち上げて、ベットに放り出す。

「ひっん♥ ちょ、ちょっと何をっ♥ あっえ……んっぐっ♥」

ベットで仰向けに放り出されたミレイユが文句を言いながら君の最大限まで強化されて勃起した肉棒を見遣る。馬並みとまで言えるほど大きく勃起した肉棒は完全に女を墮とす武器だ。

ゴクリとミレイユの喉が鳴った。そうそう見ない淫水焼けて黒く血管が浮き出て傘も貼る肉棒。視線が君の顔と肉棒に移り続ける。「はっああくっくっ♥ うっ♥ ふ、ふん♥ 能力が封印されたからと言って、私を甘く見ないことね!♥ 良いわ、淫魔族の膣内の快樂を教えてあげる!♥」

昔彼女に襲われた時君はなすすべなく搾り取られた。そのことを思い出したのだろう、ミレイユは自信を取り戻して、君を挑発するように膣口で指をVの字にして開いた。たらたらと愛液がこぼれ出している。

それはまだ能力も開花していなかった時だ。

ミレイユの熱視線と共に送られる挑発に乗ることにする。  
濡れた膣内へ君は肉棒を叩き込む。

「んっいいいいいっ！♥ ええっえええっ！♥ うっぞおおっおおっ  
！♥ おっおっおっおっおっおっ ♥ ごれ、か感じっちやでっるうっうっ  
っ ♥ おっおほおおおっおっおっ！♥」

膣内から子宮を持ち上げてそのまま中へと入っていく。ミレイユ  
が白い喉を晒して大きな嬌声を上げた。

君を信じられない物を見るような目で見つめている。

黒い霧の向上能力を甘く見ていたようだ。

征服するように肉槍を進めながら、ぱたぱたと暴れ出すミレイユの  
腕を掴んで押しとどめた。

「んおっおっいいいいいっ！♥ 駄目っ！♥ 駄目っ！♥ ん  
ぐっいいいっ！♥ 幾ら気持ちよくてもっ！♥ ふっうううううっ  
！♥ 私は墮ちるわけにはっ！♥ ふくっぐぐっ！♥ いかないの  
よおおおっ！♥」

大きく見開いた目で君の肉棒の形に膨らむ自身のお腹を見つめて  
いる。そのまま君を睨むように見上げて来た。

快楽の涙を流しながらも、必死に歯を噛み締めて挑むように見てき  
ている。

名器としか言えない膣内は、君の肉棒に急速に快感を叩き込んでき  
た。

肉槍全体を絞り込むように締め付け、亀頭に粒々触感が擦るように  
絡みつく。子宮口まで亀頭の先に吸い付きキスを何度ももしてくる。

馬チンポの如き君の肉塊も、相手を墮とすために、あちこちの膣壁  
をそぎ落とす様に動かしていく。

これはもはや勝負だった。君はミレイユに墮とされるか、墮ちるか  
しか残っていないのだ。

「んっうううっ！♥ さっさつと出さなさいよっおおっ！♥ んお  
おっ！♥ んうぐっううっ！♥ そうっすればっああっ！♥ お  
っおっ ♥ 最高の快感を教えてあげっ！♥ りゅっうっおほっ  
——うっんいいいっいいいっ！♥」

自身の性技を駆使して腰の動きを早めていく。ただ激しく振るの  
だけではなく、あちこちを突くように腰を動かしていく。

君の肉棒を絞り出すように動く膣内。以前は君を弄ぶように犯さ  
れていたが、もはやその余裕もないようだ。

気合を入れて君はミレイユに快感をたたき込んでいく。

どちらが負けるかの勝負どころだ。

「んっううっ！♥ おっちっ！♥ ンンンンンンッ！♥  
なっいいいっ♥ ふっぐっあああ♥ あっっ！♥ ぜっだいいい  
いっ！♥ んっぐぐう……んっくっ！♥」

シートを握りめて何度も体を震わせている。歯が砕けないかが心  
配になりそうなほど噛み締めていた。

だが君も必死だった。先に射精をすれば虜になるのは君だ。

そうすれば、君が集めた仲間たちが危ない。

君だけの被害ならまだしも、仲間たち全体に及ぶなら、負けるわけ  
にはいかない。

どちらが堕ちるか——である。

「はっああっあっっ！♥ まだよっ♥ あっあっっんっ！♥ 堕ち  
るわけにはっ♥ んっっうっうっっ♥ こっのっ♥ あっあ  
やあ♥ あっっ！♥」

ぎゅうつと膣内が痛いほど締めり出した。思わず呻くような声が  
君から出る。

力が抜けそうになるがミレイユの体を抑えるように乗って肉棒を  
叩き込み続ける。

黒い霧を纏う肉槍に意識を込めて、深く犯す様に腰を激しく打ちお  
ろしていった。

にゆるりと亀頭が何度もぶつかっていた子宮口に滑り込むのが分  
かった。

「おっっひいっいっいっいっいっ！♥ これまたおっくについ  
いっ♥ おっっおっおっおっ！♥ 子宮にまでぎでっ♥  
ふっぎゅっ♥ はいでっりゅううっ♥ おっおおほおっお  
おっっ！♥」





使い魔アグメエッ エッ エッ ツ！♥ おっおっ おっおっ！♥ ギ  
でっるうっ うっ うっ！♥ いっでっりゅうっ うっ うっ うっ  
！♥」

牝獣の絶叫を上げて、君にしがみつきながらミレイユは壁に向かつて舌を伸ばしながら背筋をエビのように反らしていた。君を持ち上げんばかりに、背筋を曲げながら、激しく体を痙攣させている。

真っ赤に紅潮した体からおびただしい体液を流しながら、君と共に絶頂を味わっていく。

「おおほっおおおっ！♥ 熱いザーメンっでっえ！♥ ひいっいっいっ！♥ 子宮やがれちやっううっ うっ うっ！♥ おっお、おっおっ！♥ いっでるのにいっ！♥ あっあっ あっあっ！♥ まだっあ——いっ！っぎゅうっ うっ うっ うっ！♥」

最適化したような膣内は君の肉棒を心地よく締め上げてくる。

ペニスに精液を残さないと言わんばかりに、膣肉と子宮に搾り上げられていった。

「あっあゝゝゝゝっ ♥ おちちやつたっ ♥ 淫魔のエリートがッアっ ♥ みんなごめんなさいいっ ♥ うううゝゝゝっ ♥」  
「あっあ、ミレイユさんがっ ♥」

最後まで性を吐き出すと、ミレイユの白目をむいてか細い呼吸音を上げていた。小声で聞き取りづらい言葉もぼそぼそと吐き出している。

虚空を眺めていて、もはや意識が定かではないように見える。

だがまだ油断できない。最上級と言って良い淫魔であるミレイユだ。これすらも演技の可能性がある。むしろ演技だと思っただ方がいい。

君は目の前で横たわるミレイユをうつ伏せに体をひっくり返す。柔らかい尻肉を開いて窄まりにまだまだ勃起したままの肉棒を向ける。

「あっ っうっ ♥ なにをっお？♥」

君の動作で意識を取り戻したのだろう。ミレイユが振り返るように頭だけを君に向けようとしていた。





広がっていた。

「ひゅううううううっ♡ し、しんじやうううっ♡ デスアクメえされぢやううううッ♡ あううううッ♡ ひゅううううううッ♡」

「あわわあっ♡ んっうううううッ♡」

最後まで精液を吐き出した肉棒を抜くと、枕に顔を埋めて体を震わせるミレイユが横たわる。

ブツシュッと膣と尻の穴から君の精液を零しながら、体を震わせ続けるミレイユを見つつ、君は意識を扉の方に向ける。少しだけ開いたそこから、君とミレイユのセックス勝負を見続けていた者がいた。

今日はヴィクトリアとミレイユに既に片手よりも多い数の精液を吐き出していた。だが、君はまだ気合を入れ直してやらなければならぬ。

まだ少し痛い後頭部の痛みの恨み……もとい、淫魔族に起こっていることを把握するために。

君はぶるんと強化して馬並みに勃起した肉棒を振り、扉に向かう。少し歩けばたどり着くそこを開ける。

「あつう♡」

短いピンク色の髪から二本の角を生やした少女。淫魔族関連の事件で君を色々と助けてくれるミーティアが、透明な液体でびしょびしょになった床に座り込んでいた。淫靡な匂いが漂っている。

期待と怯えで震えるミーティアを君は肩に担ぐ。軽い体の彼女は簡単にベットに運べそうだ。

「あうううううッ♡ 待ってください♡ ふうまさん♡ 釈明させてください♡」

自身の運命を悟ったのだろう君の肩の上で必死に喋り出した。

君はその声を無視するようにベットに向かって歩く。たどり着けばそのまま彼女の体をベットへ放り投げた。

「アウツ♡ 酷いです♡ あっ！♡ ひっい！♡」

ベットが大きいたわみ軋む音が響く。それでも意識が戻らず、白目で呻く意識のないミレイユを真正面から見ってしまったミーティア。君を涙目で見上げる。

流石に幾つもの淫魔族関連の事件で手を貸してもらった彼女を、このまま無言で犯し尽くすのは心苦しい。

ミーティア、いくつか聞きたいことがあると君は疑問を投げかけることにした。

つまるところ淫魔族でなにが起きているのかと言うことだ。

「うう」

君の疑問を聞いてミーティアはミレイユに一度視線を投げかける。彼女はこうなっても淫魔族の情報は吐かなかった。

ミーティアは君を涙目で見上げながら首を横に振った。

「ごめんなさい。言えません」

そのまま媚びるような笑みを浮かべていった。

ミレイユとは違い、可愛らしさあふれる少女の媚びた笑顔は、心に突き刺さりそうになる。

「このままごめんなさいですみませんか？」

すまない。君は宣告する裁判官の様に告げた。

幾つもの組織のフィクサーですらある君を。拉致すると言う暴挙に近いことまで行つたということ。

そこまでしなければならぬ、淫魔族の激変に関する情報は、値千金以上の価値がある。小動物コンビの片割れとは違い、エリートである彼女たちの情報が必要だ。

仕方がない。色々と借りがあつたミーティアである為あまりしたく無いが、これも君に関わる者たちを守る為である。

尋問させてもらうことにした。無論性的にだ。

君は先ほど自身にかけられていた手錠を今度はミーティアに掛けた。

「あああつ♥」

怯える様に震えるミーティア。自身の淫魔族の能力が封印されて、ただの女魔族に成り下がってしまったことを自覚したのだろう。

とは言えオークたちの様に激しいレイプなどをするつもりはない。ある種もつと酷いことをするつもりだ。

君は怯える様に見上げるミーティアに顔を近づける。そのまま口

付けした。

「んっちゅッ♥ ふ、ふうまさんっ♥ ちゅりゅ、ちゅちゅっ♥」

ミーティアは驚くように目を見開く。

その隙について黒い霧を纏わせた舌を校内に送り込む。

可愛らしい小さな舌と、君の肉厚のペロを絡め会う。甘く感じいい香りのする唾液を啜るように舐めとっていく。

「んっちゅっ♥ れれう、れりゅりゅっ♥ ペロキスだけなのにつ♥

やっあっ♥ 感じちやいまっ♥ れりゅ、ちゅりゅりゅっ♥」

感覚の増強が行われ、口内が膣内に感じ出すミーティア。

とろんと彼女のワインレッドの瞳が霞掛かりだす。

彼女自身の両手が君の体を摩る様に触れて来る。

まるで恋人同士のようなキスの光景。

だが、君は目の前の借りのある少女を本気で墮とすことにしている。

若干罪悪感を感じつつも、君は行動していく。

「んっあっちゅりゅッ♥ 服脱がされっ♥ ちゅっちゅりゅりゅっ♥

ふうまさんはっあっ♥ ちゅれりゅりゅっ♥ いじわるですっ♥

ちゅっちゅれっ♥」

そのまま君は程よい大きさの胸が隠れた肩出しのチエニツクを軽く下ろす。ぷるんと丸出しの胸が現れた為、掌にも黒い霧を纏わせて揉む。

大きさはさほどではないが、美乳と言える形の良さと吸い付くような肌さわりが、君を楽しめてくる。

「んっちゅっちゅっ♥ ふうまさん。ちよっどくるしっ♥ んんんっくぐくっ♥」

君の激しいキスで、息が出来ない様にされているミーティアが眩く。君の唾液を流し込まれてひたすらに飲み込んでいた。

こくこくと真っ白な喉が蠢く。

キスだけではなく、ミーティアの美乳を優しく、だが感じるように揉みしだく。

美乳の下にある、いわゆるスペンス乳腺を摩り責めていく。

黒い霧の感覚向上で感じやすくなっている、彼女のガーネットのよ  
うな深い色合いの瞳が見開く。

「んあっううっ！♥ うっそ、私これだけでいっっちゃうっ！♥  
あっう、ちゆるううっ！♥ んうううっ！♥」

感覚が増強された胸と口内の愛撫は、淫魔族といえど簡単に抗えな  
い。能力があれば君も快感がかなり激しく与えられただろうが、封印  
さえすれば何とかなる物なのだ。

「あゝっ！♥ んっちゅりゅっ！♥ だめっ！♥ あっうゝっ、れ  
りゅっ！♥ ほんとうにいっっちゃうっ♥ あっあゝっ！♥ えっ  
!?!♥」

胸や口内の責め方を柔いものに切り替える。そのままキスをやめ  
て、彼女に弱い愛撫をし続けながら聞く。話す気になった？

「あゝっうう♥ だめですう♥ ンゝッ♥」

絶頂の寸前で止める君の性的な攻撃を受けて、ミーティアは首を横  
に振った。

それを見た君は彼女の耳元に口を寄せて話す。

話したくなるまで続けるよ。

「ひっいっ♥ あっうゝゝゝっ♥」

君の宣言に彼女は悲鳴を上げる。スカート中に腰を押し込み、君の  
強化済みで逞しい肉棒を彼女の膣口へ擦り付けた。

「あゝっ♥ そ、それっ♥ あっはっ♥ ふうまさんのオチンポ♥

ああっあゝっあゝ♥」

精力の強い君の肉棒はサキュバス達にとってはご馳走の様なもの  
だと以前ミーティアが言っていたことを思い出す。

今ただ膣口に君の肉棒が擦り付けられる行為は、目の前でフレンチ  
のフルコースを見させられているだけに等しいのだ。

「はっあっ♥ オチンポッ♥ はっあ♥ ふうまさんのオチンポッ♥  
んっんゝっ♥ くださいいっ♥ はっあ、ううゝっ♥」

ミーティアは君を熱情の目線で見て、腹を空かせた犬の様に息が荒  
くなっていた。ミレイユも同じように君の肉棒を見ていた事を思い  
出す。どうやら彼女達にとっての食事である精気の供給をあまり行



なっていないようだ。

君は彼女の耳元でささやき続ける。

ちよつとだけで良いよ、簡単なことだけで良い。それだけ喋ったら入れてあげる。

君の誘惑にミーティアは争えなかつた様だ。ミレイユをちらりと見つめるとミーティアはもごもごと喋り出した。

「あつうっ ♡ ううっ ♡ ミレイユ、ごめんなさいっ ♡ お腹が我慢できませんっ ♡ はつうっ ♡ い、今私たちの勢力はつあつ ♡ んつうっ ♡ だいぶ弱体化してしまいましたっ ♡」

だろうな。流れてくる断片的な情報でもその程度のことは君にはわかつている。

君の欲しい答えではない。

しかし、約束は約束だ。君は肉棒で可愛らしいパンツを破りながら、膣内に挿入していく。

「んっあっ ♡ ふうまさんのオチンポツオツ ♡ オツ ♡ 入って来てますっ ♡ はあっあゝゝゝっ ♡」

乾いた喉を潤したかのように、ミーティアが大きく息を吐いた。ミレイユの時は気付かなかつたが、かなりの期間精気の供給をしていなかったようだ。

だが君は約束通り入れただけで腰を止める。能力が封印したとは言え、エリート淫魔の膣内はすぐに腰を動かして快楽を貪りたくなるほどだ。

既に君の肉棒に膣壁が絡みつき、三段締めで搾り上げて来る。脆弱ならこれだけで射精する穂だつた。

子宮口も亀頭に何度もキスを振らせて、腰を振るように誘う。それでも気合で腰を止める。

胸を揉む手も体の快感を絶頂しない程度に与え続ける。

それだと君は聞く。最初に喋れば頭が快感で浅慮されて、思考が纏まらない彼女はどんどん喋り出す。

「ふっあっ ♡ 今はっあっ ♡ んつくつううっ ♡ アンブローズ様の庇護を受けています ♡ んっああ、うごいてくださいいっ ♡ あ

「っうっうっ♡」

涙に濡れたワインレッドの目が君を見上げている。

懇願を受けて、止めていた腰を優しく動かす。

肉棒を膣肉三段締めで痺れるような快楽を受けながら、君は思考を続ける。

美しきアンブローズ。淫魔族の中でも温厚な対びであり、その分交流関係が豊富で、戦闘能力の高いインキュバスである。君ともある程度の交流があった。彼女にフランスの化粧品やブランド物を送る中でもある。

それなりの中でもあるアンブローズからも、淫魔族関係の情報は流れていない当たり、流石であると言わざるを得ない実力者だ。

先走った身内が居なければだったが……。

「あっあっはっあっ♡ ふうまさんの精气っ♡ はっあゝあゝあゝっ♡ 美味しすぎッてっえっ♡ んっあくうううっ!♡」

既に絶頂寸前のミーティアはそれだけでも艶やかな声をあげた。軽く甘イキした彼女は、君を濡れたガーネットの瞳で纏るように見つめている。

絶頂寸前で押し留められた彼女の体からは、その程度の快感では物足りなすぎるのだ。

胸に触れる掌の動きをさらに弱める。

「ああっ♡ もっとっ♡ あんっ♡ ほしいのについっ♡ うっうっ♡ い、いじわるですううっ♡ 淫魔族の大半とっ♡ んあっ♡ 連絡が途絶えていますっ♡ んっあうっうっ♡」

既に君が何も言わずともミーティアは情報を吐きだしている。

きみは彼女の望み通りに腰を強くしていく。

「んっおっ!♡ き、きもちいいのっおっ!♡ おっおゝっ!♡ き  
てますっうっ!♡ んおゝっあゝっ!♡ もっとっおゝっ!  
おっおゝおゝっ!♡ ほしいですっうっ!♡ あっおゝっ!♡ い、  
淫魔王様とも連絡が一切とれません!♡ おっひっ!♡ アンブ  
ローズ様でもですっ!♡ おっおゝおゝっ!♡ おそらっくっう  
っ!♡ んっくっうゝあゝあゝっ!♡」

ああ、やっぱりな。君が不知火を救出できた時からその予測はできていた。完全に推測が補強されて、満足した君は腰を激しくしている。

ぐつぐつと亀頭の先で子宮口をなぐり、傘で膣壁を抉るように激しく責め立てる。

目の前の淫魔の少女の口元から出る嬌声も、獣のような激しい音色を上げていた。

その分君の肉棒もミーティアの膣肉で搾り上げ締め詰められていく。

「おっおっ、おっ、っ♥ ああ、いっちゃったああっ！♥ あはははっ！♥ 全部いっちゃのになっ♥ おっほおっ、おっ、っ！♥ きもちいいよおっ！♥ んっ、っおっ、おっ、おっ、っ！♥」

全て喋ってしまったミーティアは、それでも君が与える快感に頭がおかしくなっていく。

快感の涙に濡れたワインレッドの瞳が、君の目と合う。懇願とかいろいろなもの混じった視線が君を貫く。

君も流石に上級淫魔の膣内で我慢するのは耐えた。

そろそろ出すことを告げる。

「あっ……あ、あ、あ、っ！♥ はいいいっ！♥ おっ、っおっ、っ！♥ いっぱいっ！♥ おっ、っ！♥ 中に出してっ！♥ ひっ、っうっ！♥ 一緒についいいっ♥ 一緒に、いってくださいっ！♥ お願いですからあああ、あ、っ！♥ あっ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、んっ！♥」

頭が白くなるのと同時に奥底に肉棒を叩き込む。ゴリユつとした感触とともに子宮内に肉棒が入り込んだ。

瞬間、肉槍が蕩けると思うような快感と痛いくらいの激しい締め付けを脳が感じとった。

背筋を寒気と思うような電流が走り、脳髓が痺れる。

「おっほおお、お、お、っ！♥ ふうまさんの極上精液っ！♥ ふっ、あああ、あ、っ♥ 子宮直接来てますう、う、う、っ！♥ 中出しアクメツェツでっえっ！♥ あ、っ、あ、あ、あ、っ！♥



た。

「んんんんんっ♥ぷっはっ♥いぐっうっ♥ 何度もイツ  
テしまいまっすううっ!♥ おっおおおっ!♥」

先までの寸止めとは違う快樂の拷問。連続した絶頂は、快感のコン  
トロールができなくなつた、淫魔族にもよく効いている。

ぐいっとな君の動きを止めようと、両手両足で抱き着いてきている  
が、その程度の力では君は止まらない。

黒い霧を纏う肉剣が、ミーティアの膣肉と子宮内を蹂躪していく。

「ほっおおおっ♥もっつうっ♥うひっいっいっ!♥ゆ  
るしていきくださいっ♥ おおおっ♥ お願いですううっ♥  
んっおおおっ!♥」

懇願を聞くが君は許す気はない。後頭部はまだ痛いし、何よりまた  
同じようなことをされては困る。

軽視されているが、君は結構な重要人物だ。現在次元侵略者が煽動  
している中で、他組織間の橋渡しは君しかできていない。

今後君を墮とそうとするような見識眼と能力を持つような人物が、  
敵に回られたら困る。

君は二人ともここで墮とすつもりだ。逃す気はない。

「おっおおっ~~~~っ!♥だめっえっ♥ひっぎいっいっ!♥  
♥降りてこれませんっんっ!♥んっおおほっおっおっ  
!♥もう勘弁してくださいっ!♥おっあいっいっ!♥許  
しっでくださいっいっいっ!♥いっっあっあっあっあっあ  
っ!♥」

嬌声を上げながら何度も君に懇願している。借りがあり、淫魔族の  
中では心優しい少女だと知っている。

そんなミーティアをここまでする罪悪感はある。

だが、此処で優しくしてしまうと、仲間たちが危ない。反撃は何処  
までも執拗かつ激しく行わなければならない。

君の肉剣が子宮と膣内を抉る様に犯し続ける。

「ふっぎゅっ、ああっあっあっ!♥わ、わたしもなりなすっ!♥  
あっあっあっ!♥ふうまさんの奴隷にっ♥いっいっいっ

！♥ 使い魔になりまっすっ！♥ うつきゅあゝあゝあゝっ！♥  
だからもうっ♥ おっおゝおゝ、ごおゝっ！♥ これ以上っ♥  
いっっいっがっはっああ♥ イカせ無いでくださいっ！♥ ひっ  
ぐっうゝううゝうゝっ♥」

彼女の宣言と同時にミレイユのように、腹部にピンク色の淫紋が光り出した。その淫紋の中心には黒い霧のようなものはある。

瞬間、君の肉棒に適合したと思うほど、彼女の膣内がきもちよく締め上げてきた。

突然の激しい快感にきみは精液を噴出。

「おほおっおおおおっ！♥ ふうまさんのっおおっ♥ おゝひっ♥  
極上精気♥ おゝっ♥ 最高の雄液♥ いっぎひっいゝっ♥ ぎ  
でますうううっ♥ まだいぎまっあ——おおおおっほおゝお  
ゝおゝおゝおゝおゝっ！♥」

ぎゅっつと君の首と腰に回された手足に力が籠る。君が上から押しつぶすように、肉棒を叩き込み黒い霧を纏う白濁流を吐き出す。

その度に子宮肉と膣壁が、肉弾頭に絡みつき絞り上げてくる。

明滅する視界の中、彼女の首筋にキスマークを残していった。

「あっ、あああああっ！♥ そんなことしなくてもっおっ！♥ お  
ゝおゝおゝっ！♥ ふうまさんのっおッ♥ もっうふうまさん  
のっおっ！♥ おほおゝっ！♥ 使い魔でっすっ♥ うっひっあゝ  
あゝっ！♥ んっああ……言うだけで気持ちいいよッおっ！♥  
おっほおゝおゝっ！♥ まだいっぎまっすっ！♥ いいいっぐうう  
ううううっ！♥」

耳元でミーティアの快感の絶叫が聞こえる。

君のキスマークに歓喜の叫び声を上げながら、ミーティアは君の体に抱き着いていた。

「はっあっあああっ！♥ もっう意識がっあっ♥ ううっ♥ とん  
じやいまあ——んっあぎゆうゝ！♥」

だんだんと声が小さくなり出していく。意識が遠のいているだろ  
うミーティアを、君は肉棒をもう一度深くつくことで叩き起こす。

「ひっぎっ！♥ あっえっええ！♥」

君をミーティアが大きく見開いた目で見つめる。きみはまだちゃんと落ちてないかもしれないから、激しくいくぞと告げる。

まるで死刑宣告を受けた囚人のように、ミーティアは怯えるように首を左右に振った。

その様子を見ながら、君は隣で気絶しているミレイユを引っ張る。隣同士になった淫魔のメスどもを同時に犯していく。

「んおおおっ！♥ おっちでっええっ！♥ ひいいうううっ！♥ ふうまさんについてっ！♥ いっあゝあゝあゝっ！♥ 堕ちてますからっあっ♥ あゝいゝいゝいゝっ！♥ 演技じゃないですか「おおほおおおっ♥ ま、またなのお〇お〇っ♥ おっお〇お〇っ！♥ 私も貴方に服従じでるのおおおっ♥ ほお〇お〇っ！♥ もつうゝ、あゝんゝなごどじないがらツアゝっ♥ アゝアゝアッ！♥ 絶対だからツアッ！♥ あゝうっ！♥ じんじでっええっえっ♥ おっおっお〇お〇お〇お〇っ！♥」

二人の淫魔の懇願混じった泣き言など、聞く気はない。

君はどんどん激しく腰を振り出す。

折り重なるミレイユとミーティアを、君は強化され馬並みの肉棒で犯している。

両方の膣内を交互に味わいつくしていた。

二人のまた違った名器を犯すという暗い喜びが君の心を燃やしていく。

「あっあああっ♥ わたしはっ！♥ おっっ！♥ ふうまさんの肉奴隷ですっ！♥ ひっうっ♥ ですからっあっ♥ あっあああっ！♥」

「ひっぐうううっ♥ わっあ、私もよっおっ！♥ おっお〇ほっ！♥ ミーティアと一緒にっ♥ 雌奴隷だからああっあっ♥ はっああああんゝんゝっ！♥」

がくがくと互いの体を横向きに抱き合いながら震え続ける、ミレイユとミーティア。

二人の微笑の懇願と奴隷宣言が君の耳を打つ。

二人の奴隷宣言を聞いた君は両方の膣内に精液を吐き出すことにした。まず上にいるミーティアの奥底に肉棒を叩き込み放出。

「んっおほおっ おっ おっ おっ っ！♥ まっだきでまっすうううっ！♥ ほっおっ おっ っ ♥ ふうまさんの精液でっえっ ♥ いぐいぐいついい……いぎまっすうううっ うっ うっ うっ っ！♥」

言葉にならない雌の絶叫が出ていく。瞬間一気に抜き出し、ミレイユの中に残りを吐き出す。

「あっああああ あっ あっ あっ っ！♥ 私にも、ぎでりゆうのおっ おっ おっ っ！♥ おひっいっ っ！♥ この精気でっえっ！♥ ひっぎゅっう ♥ 征服されだのおおっ ♥ んほおおおっ おっ おっ おっ っ！♥」

彼女も既に絶叫としか言えない声を上げている。

美女美少女達の快樂の絶叫とアクメ面が君の目の魔に広がっていた。

びりびりするような体中を走り快感と、雄のどうしようもない征服欲求が君の脳髓を痺れさせていた。

「んっおっおっくっくっ ♥ もっうだめですううっ ♥ いしきがっああくっくっ ♥ あっあっ くっくっ ♥」

「わったしもっおっ ♥ まだきぜっしっちやっううっ ♥ エリート淫魔なのにいっ ♥ あっ——くっくっくっ ♥」

君が精液を吐き出すと、二人の上級淫魔たちは互いの体を抱いたまま、虚になった瞳で虚空を眺めていた。

僅かに痙攣している当たり、今なお軽く絶頂しているようだった。その間にきみは愛液で汚れた肉棒を入れ込む。

「ちゅっちゅっりゅりゅっ ♥ ご主人様っ ♥ ちゅううっ ♥ ふうまさんっ ♥ ちゅっちゅううっ ♥」

「んっつちゅ、れろっ ♥ 私のマスターっ ♥ ちゅりゅれっろっ ♥」

ミレイユとミーティアは虚な視線のまま、君の肉棒を言葉を紡ぎながら舐め続けていく。肉槍全体に二人のキスマークが作られ続ける。

後日、ミレイユとミーティアを通して、残りの淫魔族の協力を得られた君は、ひとまず知り合いの娼婦関係に連絡を入れた。そのまま淫



魔族の情報ネットワークを構築していくのだった。

## ナドラとソファイア★

照り返る光を受けて君は暑い思いをしながらある大学近くの喫茶店で人を待っていた。

喉が乾く為、頼んでおいたアイスコーヒーを飲みながら、人の歩いていく風景を見ていた。

ある種遊び人のような格好した君に近づくと一つの影があった。

光に当たりキラキラ光る銀色の髪を首にかかる程度の短く刈りそろえている褐色肌も女性。歩きたびに揺れ動く巨乳以上に人々の目を集めているのはその左右異なる色の目だろう。金色と海色のヘテロクロミアは、彼女をどこか神秘的雰囲気を漂わせていた。

君に向かつて歩いてきた普段のドレスとは違う肩出しキャミソールと短パンタイプのジーンズを着たナドラ。銀髪から尖った長い耳を見せるダークエルフの彼女はそのまま君の真向かいに座った。

君は彼女の格好を見て、似合っていると真っ先に褒める。

「あら、ありがとうございます」

ニコリと真正面に座るナドラは微笑んだ。店員がやってきて、彼女の注文を受けてさっさと行く。

人の多い喫茶店は君達に視線を向けるのは皆無だ。時折男の嫉妬の視線が君に突き刺さるぐらいだった。

君は周りも意識がそれたのを確認して、何の用事かと問う。今回君はナドラに呼び出されてここに来ていた。

「はい、あなたも知っている通り私の眼には様々なものが写りますの」  
コクリと君は頷く。体を交わした中でもある君は、彼女の魔眼の事を聞いていた。それこそ人所か都市の運命をも見えるナドラの魔眼は、エルフ種に時折発生する希少な物だ。

「ここのある程度異なる種族間の交流が行われました」

これも君に関わることだ。シアワセやホライゾンなどのグローバル企業の尽力によって、人類に友好的な種族。所謂穏便な種族が人間

世界に多く関わり出し始めている。中でもあまり強くなく美しいエルフやドワーフ達は大人間世界に関わり始めていた。実際君が周りを見渡してみれば、人間だけでなく恐らく魔族らしき種族も垣間見える。

当たり前だが、問題も多いけれど……。

「それでこちらに来た方の一人が昔の知り合いでして」

話しながら憂鬱そうにため息を吐いた。十中八九その知り合いに関わることだろう。

「初めてあったときは大丈夫だったのですがこの前会った時に見えてしまいましたの」

彼女の悪い運命を？

君は首を傾げながら問う。それに対してナドラはコクリと頷いた。「それだけではありませんでしたわ。彼女は異界出身のダークエルフ。そちらを巻き込むほどの悪い運命すら見えました」

君も思わず顔を顰めてしまう。メタ・ヒューマンの受け入れも、エルフやドワーフ種ならようやくやく上手くいき出している。それが頓挫する可能性があるのだ。

今なら間に合うのかと君は聞いた。

「ええ。今から行動すればまだ間に合いますわね」

つまるところこのままお楽しみと言うわけにもいかないわけだ。

少し残念に思いつつ、わかったその知り合いに会いに行こうと君は言った。

「ふうま。わたくしあなたの感情も見えることも忘れてますの？」

少しだけ顔が赤くなつたナドラが君を睨んでいる。どうやら君の下心を見られたようだ。

君は誤魔化さずにニヤリと笑う。この後の報酬のことを考えたと言いながら、

「うう。わたくしもまだそう現金があるわけではないですし、解つてますわ」

君達の庇護があるとは言え、希少な魔眼もありそう目立つわけにもいかない彼女はそうそう収入があるわけではないことを知っていた。

彼女の頼み事による報酬は君も色々楽しめることであることが多い。

さあ行こうかと君はナドラも手を取って立ち上がらせる。

「ああ、もう」

人間界に来るまで箱入り娘だったナドラは、君と交わった後でもこういう時はまだ恥ずかしそうにしている。

周りから男達の嫉妬が突き刺さるのを感じ優越感を感じながら君はナドラの言う人物のところまで歩んでいくのだった。

まさか大学にいるとは思わなかった。それとなく大学の講義に用事がある振りをしながら、君とナドラは大学に潜入していた。

いる場所はわかるかとナドラに聞いてみると頷かれた。

「ええ、これくらいならすぐにわかりますわ」

彼女が校舎の中で目線をあちこちにそらしていく。数分もしないうちにナドラは君に振り返った。

「見つけました、ですがその」

顔を紅潮させながらナドラは言い難そうにしている。何か起きていたようだ。君は彼女の先導のままに目的の人物がいる場所に向かった。

思ったより近くにいた様だ。萩原研究室と書かれたそこは鍵が閉まっている。

ナドラはそこを見て顔を赤らめている。君は懐から最新の小型ドローンを飛ばす。君のグローブで動かされるそれは扉の隙間から潜入していった。すぐさま君は懐から小型情報端末を取り出す。ドローンが写し出す映像が映る。

『いやあ、こんなところでやめてください』

『そんなこと言っつて、ソフィアちゃんの体も反応してるよ?』

端末に黒のスーツがはだけた豊満なピンク髪のダークエルフが映る。そして彼女の体をあちこち触る金髪の男。

この子ときみはナドラに端末に映し出される映像を見せた。

「え、ええ、そうです」

顔を紅潮させながら映像を見てナドラは頷いた。とは言えこのまま研究室に入るわけにはいかない。こう言うプレイを彼氏としてい

る可能性がある。実際きみはよくしている。

さてどうしようかときみが悩む。その時、金髪の男がソフィアと呼ばれたダークエルフの女性の腹部に何かを貼った。ピンク色の子宮の形をした紋章が腹部に現れた。

『やつああ！　こ、これなんですか？』

『へへへ、知り合いからもらった淫紋って奴らしいよ』

『や、やだ！　やめてください。こんな体たつくんに見せられなくなっちゃう！』

ダウト。きみは潜入を決意。ドローンを動かして内部から鍵を開けた。

きみは男が使ったものを淫魔族が使う奴隷シールだと見た瞬間気づいた。無論、法律に反している。

会いたドアを開けてきみは研究室に潜入。ドアの開いた音を聞いたダークエルフのソフィアと金髪の男がきみに視線を投げた。

「なんだあー！」

初めまして、死ね。

古来から伝わる突入の作法を守り、きみは金髪の男を叫ぶ暇を与えず無音で殴り倒して昏倒させた。

「え、ええ？」

起きた状況を理解できていない半裸のソフィア。きみは視線を切ってナドラを呼ぶ。

「ソフィア！　大丈夫ですか？」

「ナドラさん。そんな」

研究室に入るナドラを見て悲しそうな表情を浮かべた。知られなくなかったのだろう。君はナドラに言われて助けにきたことを伝える。

「ソフィア。安心しなさい。これくらいのことであなただを嫌いになんてなりませんわ」

「ナドラさん　うう」

ナドラの胸でソフィアは声を立てずに泣き出した。

君はその光景を見ずに、下手人の男を見下ろす。きみは手のうちに

ある情報端末である場所にワンコール。数分の内に影から一人の男が現れた。美しいインキュバスである男はきみを見ている。

「何か用ですか？」

最低限の言葉しか喋らないこのインキュバスは、アンネブローズ付きの上級淫魔だ。きみは彼にこの男が淫魔族の奴隷シールを使っていることを伝えた。

「ほう」

冷徹な目で気絶している男を見下ろしていた。淫魔族間の連絡が途絶えている中、彼等種族しか生成出来ないものを持つ男。情報源にぴったりだ。

一つ貸でいいとアンネブローズに伝えて欲しいときみは言う。

男から君へ冷徹な目戦を動かしてきた。君はにやりと笑みで返した。

「わかりました」

君に一度頭を下げて、金髪の男を担ぐと瞬きのうちに消えていった。

「ふうま。ソフィアが」

ナドラの呼ぶ声を聞いた君が振り返ると、ソフィアと呼ばれた豊満な体月の褐色エルフが体を抱きしめて喘いでいた。

「あつううつ ♡ どうしてっ ♡ あつんっ ♡ からだがあついいっ ♡」

小声で呟く彼女に起こっている事を君は知っている。淫魔族の奴隷シールは精液を摂取しないと永遠に体を疼かせ続ける。

説明したきみは知り合いにそう言う関係の人物はいないのかと問う。

「やあつ ♡ ううつ ♡ たつくんにっ ♡ あっ ♡ 知られたくありませんっ ♡」

恐らく彼氏の名前を呼びながら首を横に振るソフィア。いまの状況になるまでの事を説明しないといけないからだろう。詰まるところあの金髪の男にされた行為を、彼氏に知られたくない様だ。

まいったなときみは頭を掻いた。子宮に精液を吸収しない限り、こ

の淫紋は消えない。

きみの言葉を聞いたナドラが、ソフィアに耳元で囁き出した。「彼に知られたくないもでしたら、このふうまでどうです？ テクもありませんし、何よりそういうことで、あなたを脅す様な下衆ではありませんわよ」

ナドラの説得の言葉に聞いて、潤んだ目できみを見上げるソフィア。実際一々これくらい知ったからと言って、幸せなカップルを引き裂く様なことを、君はしない。する暇もない。後も怖い。

一応紳士にきみは頷く。何があっても誰にも言わないと告げた。迷う様に何度もきみを見上げるソフィア。

「ごめんね。たつくん」

一言君たちにも聞こえない様な声で呟いた。そのままきみを見つめ直すと、

「お願いします」

ただ軽く頭を下げたのだった。

研究室に事件後、君たち三人は誰にも知られることなく大学からうまく出ていった。そのまま遠くの誰も来ない様なホテルに身を寄せた。ラブホテルの室内でシャワーを浴びたきみは、ソフィアとナドラの待つ場所に向かっていて。シャワー室の扉を開ければ二人が横になっっているベッドは目の前だ。

「んっあっ ♥ ナドラっ ♥ あっんっ ♥ さっあんっ ♥ どうしてっえっ ♥ んっんっ ♥」

「ふうまが来る前にい ♥ ちゃんとここ濡らしておきませんか ♥ んえっ ♥」

ナドラがソフィアの身体をいじっているのがまず目に映った。ソフィアを抱える様にナドラが下から自身と同じ褐色の体をいじり倒している。

「あつあつ♥ そんなっ♥ んっ♥ 女の人の指でっえっ♥ ううっ♥  
いっちやつっ♥ んっうううっ!♥」

「あちこち感じやすいですわね♥ ちよつと楽しくなってきましたわ♥」

楽しそうにいじるナドラの指で、ソフィアが何度も絶頂している様だった。既に彼女たちの股付近のシーツはビショビショに濡れていた。

シーツも水の模様が出てくる。準備万端のようだ。

「ふふ、きましたね♥」

「あつ♥ ああ……あまり、見ないでください♥」

ナドラが君を見て笑い、気づいたソフィアが恥ずかしそうに顔を覆い隠した。

しかし褐色の肌が汗に濡れて光っており、淫猥な光景となっている。

「ほら、ソフィア♥ ちゃんと見なさいな♥ あなたを治療するチンポっ♥」

「うっう♥」

ナドラが顔を隠すソフィアの腕を開いた。恥ずかしそうにソフィアが、君の肉棒にゆっくりと視線を向ける。

エメラルドグリーンの瞳に君の肉槍が映った瞬間、桃色ヘアアのダークエルフはビクリツと体を震わせた。

「ひっ、そんなんっ♥ 今まで一番大きいっ♥ はあっ♥ はっあっ♥」

黒い霧を纏った肉棒は強化せずとも大抵の男よりも十分に大きい。さんざん調教された体は、最上級の雄である君の肉棒を見るだけで興奮しているのが伝わる。

怯えているふりをしているが、コクリとのどが鳴り、ちろちろ舌を出していた。

「あ、あれ入るのですか?♥」

「ええ、勿論♥ わたしにもちゃんと入りましたわ♥」

クスクスと笑うナドラ。そのままソフィアの腹部で光る淫紋に手



を触れた。

ビクンつと褐色の腹肉が震えた。

「あゝっ♥ ひっいつ♥ な、ナドラさん♥ おゝっ♥ そこ……  
触っちゃダメですっ♥ あゝっ♥」

「付き合ってる人に、こんなものっ♥ 見せるわけにはいけませんよ♥  
あくまでも治療の為ですわ♥」

コツコツとナドラが指で押す様に触れるたびに、ソフィアの体が震えてダラダラと膣口から愛液が、流れ出していく。

二人の耳長ダークエルフの痴態は、君の欲望を十分すぎるほど燃やしてくる。

君もいきり勃つ肉棒を、膣口に接触させた。

「ひっいつぐっ♥ んんゝっ♥ こゝこすらないでっ♥ おっおゝっ♥」

クリクリと亀頭で膣口を擦る。彼女の罪悪感を消すため、君もあくまでも治療だと伝える。

彼氏のために淫紋を消す。大丈夫、これさえ乗り越えれば誰にも伝わらずに終わる行為だ。あの男との行為もバレることはなくなる。

彼女の一番気にしているところについていく。本当に彼氏の事が大事なのだろう。彼に知られて傷つかれるのを一番恐れている様だ。

君にはイマイチよくわからない感情でもある。染め直せばいいのだろうかに……。

「うう……んくっ♥」

「ほら、ふうまもこういつてます♥ 絶対にバラしたり、脅し足りる様なことはしませんよ♥」

ナドラも君も事を後押ししていく。実際淫紋のことを知られれば、彼女にとって最悪なことが起きるだろう。

一度気合を入れるように深呼吸を零すと、そのままコクリと頷いた。

肯定を受けて君はそのまま腰を前に動かしていく。

「んっひっ♥ ゝっれっええっ♥ おっおっ♥ おっぎっいいっ♥  
うっうっうっ♥」

「んっ♥ もう、ソフィアったらっ♥」

身体をベッドに大きく逸らしたソフィア。その結果間に挟まっていたナドラが瞬間押しつぶされる様に身体が押し付けられていた。彼女のメロンサイズの乳が、ソフィアの背中をつぶれてはみ出していた。

「くくら、ソフィア♥ 息苦しかったんですよ♥」

「んおっおっ、ひっぎっい♥ ご、ごめんなさいナドラさんっ♥ おっつうっ♥ ダメですっ♥ あっあっっ♥ 胸掴まないでくださいっ!♥ いいっいいっ!♥」

ナドラは自身と同程度の大きさの巨乳を掴んだ。彼女と肌色と同じ褐色の胸が、掌で形が変わる。彼女の掌よりも大きい胸肉は、そのまま飲み込みそうなほど柔らかそうだ。

「これ結構楽しいですわねっ♥」

「あっあっ、おっおっおっ!♥ お、おもちゃにしないでっ!♥ えひっいっ!♥ あなたも腰を動かさないで!」

ナドラの胸愛撫と君の肉棒で、急速に絶頂に追い込まれていく「ああっ!♥ こんなっ♥ おっおっ!♥ こんなについ……:おおきいなんてっえっえっ!♥ あっっあっっ♥ あっ、あれよりふといっいっ!♥ きもちいっいっのっおおっ♥ んひっう、っうっうっうっうっ!♥」

「ふふっ♥ そうでしょうっ♥ ふうまのは極上ですものっ♥」

喘ぎ声を上げ続けるソフィアをナドラが楽しそうに見ている。その後、君をチャシャ猫のような笑顔で見つめた。

相変わらず小生意気なお嬢様気質だ。君を挑発している笑みだった、君はそれに乗ることにする。

君とソフィアの結合部より下にある、褐色肌の間にある膣口を指で触れる。既に興奮で濡れているそこへ、指を挿入。

「んあっ!♥ ふうまつ♥ いっああっ!♥ ちよつとまつ♥ あっ!♥ ちなさっっ♥ ういっいっいっ!♥」

奇襲のような快感を得て、君へ止める様にいうナドラだ。だが君は聞き入れる気はない。そのまま入れた指をバラバラに動かす。既に

弱点は把握している関係だ。勿論腰も動かし続ける。

「あゝっ♡ あゝっ♡ もっうっ♡ んっうあゝっ♡ こっ  
らあっ♡ いっうっ♡ いきなりなんてっ♡ ひっいあっ、う  
うっ!♡」

「んっおっおっ♡ そっごっおゝおっ♡ ひっあゝあゝっ!♡  
よわいっ——んですっ!♡ おほっおっ♡ だめ……だ  
めっえゝえゝっ!♡ あっあゝあゝあゝっ!♡」

腰を動かしながら見つけた、ソフィアの弱点部を肉棒で擦る。その  
度にきゅうつと、膣内が締まる。

金髪の男が裏の物を使ってでも、自身の膚にしようとするのがわか  
るほどだ。名器とも言える膣襞は君も追い込まれ始めていく。

「おっ——あっあゝっ!♡ あいつくっうっ!♡ ふっ、ふうまつ  
♡ いっいっ♡ もっうゝうゝっ!♡ んっうゝっ!♡」

「おっひっ……おゝおっ!♡ こんなっ!♡ おっおっ!♡  
すっごいっ!♡ すっごいっ!♡ いっいっ!♡ あの時よりもっ  
♡ いっいっ、ひいゝいゝいゝっ!♡」

ダークエルフ二人の痴態が君の目に映る。

「あっあうっ♡ うううゝゝゝっ♡ いい!♡ いいのっおゝお  
ゝおっ!♡ たっくんっ♡ おほっ♡ たっく……んんゝんゝう  
ゝうゝうゝっ!♡ 気持ち良くなっつ♡ ほっおおゝおっ  
!♡ ごめんなさいっ♡ ごめんなさいゝいゝいゝっ♡ あっあゝ  
ゝあゝ、あゝゝゝっ!♡」

君が与える快感のあまり、彼氏に謝りだす。君も彼女の罪悪感を減  
らすため、言葉を紡ぐ。

あくまで治療行為だ。気持ち良くなるのも仕方ないんだ。気持ち  
良くなるのも、治療の一環なんだ。

彼女のせいではないと強調しながら言葉をかける。

「そうですわっ♡ ああっ♡ 気持ち良くなっつていけないことっ♡  
んっ♡ なんてないのですっ♡ 彼の元に帰るためのっお♡ あっ  
!♡ おっ!♡ 治療行為なのですから、謝ることなんてないの  
ですよっ♡ はっあゝっ♡」

ナドラも君の言葉に乗り友人であろうソフィアの心を軽くしていく。

時折漏れる嬌声は、君が愛撫をやめてない合図だ。

「んっんっんっんっ！♥ き、気持ち良くなってるっ♥ おっっおっっおっっ！♥ いっいっ、いいんですかっ？♥ んっうう——あゝんっっ！♥」

「はあっ、あっっ♥ 勿論っ♥ んおっっ！♥ あくまで気持ちの良  
いだけのっ！♥ おっおっおっっ！♥ 治療法なのでからあゝっ  
♥ あゝあゝあゝんっ！♥」

ナドラの言葉に続いて君も頷きながら、素直に気持ち良くなった方が、治療にも良いと繋げる。

そのことを聞いてようやく、ソフィアは素直に快感享受していく。

「おっおおっおっおっ！♥ きもちいいっ！♥ ひあっあゝあゝあゝっ！♥ 今までで一番っ！♥ 一番——きもちいいのっおおお！♥ おっっおっおっ……おっくっくっ！♥ 駄目！♥ もうだめえゝえゝえゝっ！♥」

「あっああっ、はあゝんっんっ！♥ ふうまつ♥ あっあゝっあゝっ！♥ わたしもそろそろっ♥ あっっはっ♥ ですからっあっ♥ アゝんっあゝんっ！♥ い、一緒についっ！♥ んっっうゝうゝ！♥」

快感を素直に受け止めだすと、膣内も激しく収縮し出した。

君の肉棒を根こそぎ吸い取ろうとする激しい蠕動運動である。

脳髓がしびれるほどの快感で、君も追い詰められていた。

ナドラの言う通り全員で一度に行くため一番奥底に向かって激しく腰を叩きつける。

激しく収縮する膣内からの快樂に耐えきれず君は白濁流を放出した。

「あゝっあゝあゝあゝあゝっ！♥ あゝづいのぎでっえゝえゝっ♥ おっっおっっ♥ アグメ 中出しアゝグメツツ！♥ ぐるっっ！♥ おっっ、おっくくくくくッ！♥」

「あっあゝっ！♥ ふうまの指っ♥ あっ、いっっ♥ 弱い所ゴリゴ

り来てっえっ♡ 私っもっおっ♡ いっ——っくううううう  
うツツ!♡」

君たち三人が同調したように絶頂していた。

吐き出した精液を媚びるように、亀頭に何度も子宮口が吸いついてくる。

ソフィアの名器が君の肉棒から絞りつくさんばかりに絡みついていた。

「おおおっほお♡ お♡ お♡ お♡ お♡ っ!♡ 射精なっがあっ♡ い  
い♡ い♡ い♡ い♡ っ!♡ 深いのぎでるのにい♡ い♡ っ!♡ ま  
だぎますっ!♡ あひゆめっえ♡ え♡ え♡ え♡ っ!♡」  
「あっああっ♡ ふうまっ♡ ダメですよっお♡ お♡ いっでます  
わ♡ ひいっ♡ いっでますからっあっ♡ あぎっ♡ 指、ごりごり  
しないでくださいましっいっ!♡ あっあゝゝゝ、あゝあゝあゝ っゝ  
ゝゝゝゝっっ♡」

激しい蠕動運動に答えて、君は最後の一滴までソフィアの子宮に中出しした。

二人のダークエルフ達は君が与える快感で、打ち上げられたエビのように痙攣している。

部屋中に響き渡る獣のような矯正が、脳髄に響くような二重奏を奏でていた。

「あっあゝっ♡ ひっううっ♡ うゝうゝゝゝっ♡」  
「んっあ んゝゝゝっ♡ ふっくっうううっ♡ はっあゝあゝあゝっ♡」

ガクンガクンと大きく震え続けたソフィアの身体が力を抜いた様に投げ出した。

意識を失ったソフィアから肉棒を取り出す。そのまま優しく彼女の体を横に動かした。

一度精を吐いた程度で収まるほど、君の欲求は浅くない。

「あら、こんどは私ですよ?♥」

ソフィアの体に隠されていたナドラの豊満な体が曝け出された。彼女は君の肉棒を一瞬見つめる。そのまま君に向かってふふふっと笑う。相変わらずの子生意気な笑顔だった。

君は見つめ合う金色と青色の瞳から目を逸らさず犯してやると言う意思を込める。君の熱情を直接読み取れる魔眼持ちの彼女はブルリと体を震わせた。

「はっあんっ♥ ああっ♥ そんなに熱い感情も向けられたらっ♥んっうっ♥」

とろんと目が蕩けたのを確認して、君は近くに隠しておいた道具を出す。

目隠し用のアイマスクで、奇麗なヘテロクロミアを遮断。

「あっ♥」

一瞬の熱のある眩き。君はナドラの一番好きなセックスをしてやるつもりだった。

目隠しされながら、君に貪られるのが、彼女は一番好きなのである。そのまま肉棒を叩き込む。

「んっあああゝあゝっ!♥ ふうまのっおっ!♥ あひっうゝっ!♥ 入ってきましたのっ!♥ んいっいいいゝっ!♥」

そのまま掌で目隠ししながら犯すという劣情を込めて腰を動かす。彼女の強力な魔眼は、アイマスク越しでも、劣情や欲望が伝わっていく代物だ。

だからこそ、悪い男である君に騙されてしまうのだ。

「おっおゝっ、おゝっほっ!♥ ふっ……ふうまの熱い感情が伝わってっ!♥ んおゝっ!♥ そんなに激しい感情をっ!♥ ひっあゝっ!♥ 向けながら犯されるますとっおゝっ!♥ ダメになってしまいますわっあゝっ!♥ あゝあゝっ、あゝあゝあゝっ!♥」

感情すら読み取れるナドラは、君の性的な感情を伝えながら犯されるのが好みだった。

そのままガツンガツンと激しく腰を動かす。その時君とナドラがくっついている箇所にはピンク色の髪をした頭が現れた。

「ひっ！っ！っ！っ！ 誰かの舌がさわってっ！っ！っ！ やっああんっ！っ！っ！」

腰を動かし続けると、突然結合部に舌が這わされた。

隣にいたソフィアが、君とナドラのものを舐めている。

きつい締め付けと、滑らかな舌の感触が肉竿から伝わり、君の脳髓が痺れます。

「んっ！っ！っ！ れうっ！っ！ ナドラさんもふうまさんも！っ！ れっ！っ！っ！

きもち良くなってくださいっ！っ！ んべりゅっ！っ！」

「んひっ！っ！っ！ ああ、ソフィアなの？っ！ ひっ！っ！っ！ つぎっ！っ！

そんなところを舐めたらっ！っ！ ひっ！っ！あぁあぁ！っ！ あぁあぁ！っ！っ！っ！

膣内の快感と出るたびに這わされる舌の快樂は、きみをどんどん押し上げていく。

そのまま責められるだけではいけない君は、ソフィアの膣に手を伸ばす。

「あぁっ！っ！ ゆびがっ！っ！っ！」

「んぎっ！っ！っ！…ひっ！っ！いっ！っ！いっ！っ！っ！ 舐められて入れられた

らっ！っ！っ！ おっ！っ！おっ！っ！おっ！っ！っ！っ！ もう無理ですのっ！っ！っ！

もっ！っ！むっ！っ！りっ！っ！っ！すわっ！っ！あぁあぁ！っ！っ！っ！」

ナドラの近くに置いた腕がギュッと捕まれる。そのまま腰にも彼女の褐色の足が絡まってきた。

ぐいぐいっ！と奥底に導くかのように足が君の腰を抱きしめてくる。

一番奥に突き出した亀頭が、ナドラの子宮口をぐりぐり削っている。

君の指をくわえる、ソフィアの膣口もきゆうきゆう締め付けてきている。

「あっ！っ！はっ！っ！あぁあぁ！っ！んっ！んっ！っ！っ！っ！ もうっ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

っ！

っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

「もっ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！

っ！っ！」

二人のダークエルフ美女たちの射精懇願二重奏が君の耳に響いた。見目麗し美女たちが君の肉剣と指で、快感に見悶えている。

雄の欲望が燃え盛る光景に、背筋にぎわつくような電流が走った。最後の一押しに、亀頭の口が開かれて、白濁流が流れ出していく。

「んっうあゝあゝっ！ 男の人のゆびっでっえっ ♡ あっ ♡ っ！ ♡ たっくんのじゃないっ ♡ おっ ♡ っ！ ♡ あの入り気持ちいい指でっえっ！ ♡ んっお……ひっぐっ！ ♡ っちやつうゝうゝうゝっ！ ♡」

「おっおっほおゝおゝおっ ♡ っ！ ♡ ふうまの孕ませ雄液でっえっ！ ♡ 子宮やがれっでっえゝえゝっ！ ♡ あゝっあゝあゝあゝおゝおゝっ！ ♡ アグメしますのっお——おっほおゝおゝおゝおゝおゝっ！ ♡」

目の前のダークエルフ美女達が同調するように絶頂していく。ソフィアは君の指を、ナドラは君の肉竿を、キュウキュウするるように締め付けてきた。

ナドラの子宮も君の亀頭に何度もキスをして、精液を吸い取ってくる。

「あっあああっ！ ♡ いっでますっ！ ♡ アクメツ ♡ いゝぎっ！ ♡ 絶頂っ！ ♡ おっ ♡ っ！ ♡ おっ！ ♡ しでますからっあゝっ！ ♡ あひっううゝうゝっ！ ♡ 指ぐちゅぐちゅしないでっえゝっ！ ♡ おっひっおゝおゝっ！ ♡ またすごいぎっでっえっ ♡ おっ ♡ っ！ ♡ あゝっ！ ♡ ひっいゝいゝいゝっ！ ♡」

ソフィアはがヒイヒイ喉を引き絞るようにヨガリ啼き、

「おゝおゝおゝおゝおゝおっ ♡ っ！ ♡ まだでますのっおゝおゝっ！ ♡ ほっおゝおゝ！ ♡ 射精長すぎですわっあゝっ ♡ 体中イッデますのっいゝいゝっ！ ♡ アゝッ！ ♡ イギながらっアゝっ ♡ アゝッアゝアゝアゝアッ！ ♡」

ナドラは獣のような声を上げていた。

二人の絶頂の違いを見ているながら、君はゆっくりと深呼吸をした。最後まで精液を吐き捨てる。



亀頭に吸い付き子宮に答えて、君は腰をしっかりナドラの股の間にくつつけていた。

「はっあゝあゝっ ♡ ふっうううっ ♡ ふ、ふうまさっあん ♡」

「あつあゝゝゝっ ♡ ひゅっうううっ ♡」

大きく息を整えるナドラ。先に息を整えたソフィアが君にお腹を見せてきた。

淫紋は確実に先よりも消えている。

「まだ消えないんですっ ♡ 治療をお願いしますっ ♡」

だが、まだ残っている。君の精液による治療はまだ続くようだった。

「本当に助かりました。ありがとうございます」

君とナドラ二人に頭をソフィアが頭を下げていた。

「もう大丈夫ですわね。全く今度はこうなる前に連絡しなさい」

「はい、本当にバカなことをしたと思ってます」

ナドラも説教に素直に頷くソフィア。君も何かあったら彼女に連絡してくればできる限りは力になると伝えた。

もう一つ伝えることはあった。しつかりと彼氏さんと幸せになりなさいと。

「はい、必ず」

もう一度深々と頭を下げるとソフィアは

「本当にありがとうございます。ふうまさんはわたしの英雄です」

綺麗な笑みを浮かべて去っていった。

「良かったんですの？」

ニヤニヤとチャシャ猫の様な笑みを浮かべてナドラが君の腕を取

り覗き込んだ。

無論だと君は頷く。ナドラもだが、君は裏稼業の人間だ。表側に存在する者の幸せを引き裂くような行為は信義に反する。

まあ、一応何かあった時のために連絡先は交換しておいた。

もし体が疼いたら秘密の友達（セックスフレンド）になるだろう。

もう一つ……あの淫紋は一度の治療で消える呪いではない。数日後に再発するタイプだ。

その時助けを求めるのはだれかなど言うまでもない。

ナドラの相手は前から慣れている君は、彼女に聞こえないように秘密を作っておいた

「ふくん」

一度鼻を鳴らすとナドラは君の腕にそのまま抱きついた。肩出しキヤミソールに隠された褐色巨乳の間に君も腕が挟み込まれた。柔らかな触感が腕から伝わる。

「そういうところ結構好きですわよ」

ナドラもまた綺麗な笑みを浮かべる。

少女の好意を受け取りつつ、悪魔のような思考は表に出すことなく、君はダークエルフ美女に腕を抱かせながら、歩いていくのだった。

## ゆきかぜとリリコ★

きらびやかに光る音と激しい音楽。

アツパー系の甘い臭いすらどこからか香ってきていた。

君がいるのは警察すら関わらないクラブの箱。その両隣を二人の少女が占拠していた。

いつものようにピンク色のリボンで髪をツインにまとめたゆきかぜ。ただし服装はクラブにふさわしく露出の多い格好だ。褐色の若々しい肌は、周りの楽しそうに踊る人々に溶け込んでいた。

リリカのブロンドの長い髪と真っ白な巨峰も多くの男が盗み見るほど魅力的だった。ジャケットの下のビキニも白い肌に映えている。

「肌が黒いつからってこういうところ会うわけじゃないのよね」  
ぼそりとゆきかぜが言った言葉に君は静かにうなずいた。

肌が浅黒く任務のために鍛えている君は、そういう服装を着るとそっち側のほうに見えていた。

確かに多数の女性との肉体関係はあるが、一切こう言うところには興味のなかった君。

だが、クラブのVIPに闇の世界に関係があり、売買まで行っているものがあるらしい。

その確認のため君は、ゆきかぜとリリコと共に秘密のナイトクラブへと赴いていた。

「こういうところは任せるっしょ」

ばっちり化粧を決めたリリコが、君たち二人を上手く先導している。

がやがやという人の声。ガンガンに鳴り響く音楽。酒と特有の甘い臭い。

頭がくらくらしそうだ。

「この匂い」

「まあ、そっすよ」

任務で処分したことがある特有の物質のにおいが、あちこちの人々が持つ飲み物からしている。

闇のクラブというだけあり、かなりの末法状態だ。

だが、君達の任務には無関係だ。

飛び出そうとするゆきかぜを抑えつつ、VIPルームからよく見える場所に移動。

「っ！……わかってるわよ」

君を一瞬きつと見つめてくるが、すぐにゆきかぜは目をそらした。

この状況で騒ぎになると任務失敗に終わる。

それどころか、君達対魔忍側がVIPの探りに来ていることすらばれかねない。

「ここでターゲットを止めたほうが、被害は減る」

「わかってる」

リリコもゆきかぜを説得するように声をかけた。

一度ふっつと息を吐いたゆきかぜは、君の腕にギョツと絡まってくる。

「演技、演技するからね」

「そう、そう演技、演技。この後のこともね」

「くくくつ、そう演技だから……勘違いしないでよ、ふうま！」

リリコの言葉に顔を紅潮させたゆきかぜが、君に噛みつくように声をかけた。

なれた君もわかっていると云わんばかりにうなずく。

その間も君は周りを確認していた。

こつそり放ったドローンは、すでに中枢をハック済み。

大抵のことはごまかせるようにした。

防音の部屋で何が起きても、わからないだろう。

二人の美少女を侍らせながら、あちこちを遊ぶように練り歩く君達。

男連れ。それなりに鍛えられている君ということもあり、わざわざ声をかけるよう無粋な人物はいない。だが、かなり目立ちだしている。

それが君の目的だった。

「やあ、そのの三人組、ちよつといいかい」

あちこちで金を使いながら、遊びまわる君達に声をかけてくる、一人の男。

「……なくに？」

リリコが君たちの代わりに返事をする。戦闘態勢になりそうなゆきかぜを、抑えるのが君の役目だ。

巧妙に隠しているが、相手は魔族の男だ。

こんな場所でわざわざ声をかけてくるのが、ターゲットの一員だという証だった。

だが、こんな小物程度をぶっ飛ばしても、問題解決にはならない。

こいつの上用があるのだ。

「もつと楽しい遊びに興味はありませんか？」

ニヤニヤ笑いながら、こつそり魔術を仕掛けてきた。

対魔忍なら抗える。普通の人間ならそれだけで、彼に催眠に近いものをかけられるだろう。

一瞬くらつとしたが、抵抗は成功。

二人も大丈夫なようだ。

「それではこつちへ」

君たちを催眠にかけたと思っている魔族の音が先導。

そのままターゲットが隠れ潜む、VIPルームへと案内されていく。

少し歩けば、男に先導されてVIPルームの場所についた。

「こちらへどうぞぞ」

ドアを開けられて、中へ入るように促される。

リリコとゆきかぜの二人を連れて、黙って入っていった。

「後でおぼえときなさい」

ぼそりと顔を紅潮しながら言ったゆきかぜの一言。

彼女はその後起きることを知っているので、思わず呟いてしまったのだろう。

リリコと君は聞こえないふりをして、部屋の中へと入る。

瞬間香ってくるのは、甘く陶醉しそうな香り。  
時折君もプレイで使う、魔界の媚香だ。

「よくきたな」

でつぶりと太った男が手に二本の鎖をもって、君たちを迎え入れた。

手に持つ鎖の先には、二人の美女たちが繋がっていた。

「つく」

「ううっ」

紫色の髪を短髪に整えた、柔和そうな顔立ちの女性。リリコにも負けない豊満な胸を全裸のまま晒していた。

そんな彼女を庇う様に、男を睨むのは日焼けした肌を露出させた女性。黒い髪をショートカットに整えた紫色の瞳が鋭い。隣の女性と同じく、巨乳の胸が動くたびにプルンと揺れる。

二人とも紅潮した顔をしながらも、どこか悔しそうに呻いていた。

「へっえ、結構美人さんたちだ」

太ったカエルのような男が、口を割いたかのようににんまりと笑った。

「くっう、下種め」

日焼けした紫色の瞳の女性が、吐き捨てるように、言葉を吐いた。

「ああっ!!」

瞬間湯沸かし器のように怒り出した太った男が、文句を言った黒髪のお尻を蹴り上げた。

「くぐっうう」

「ナ、ナオミ！　お願い、やめて頂戴。私が言い聞かせるから」

隣の紫色の柔和そうな顔立ちをした女性が、頭を下げながら暴力を振るわないように懇願。

「リ、リエリ」

黒髪日焼け女性……ナオミと呼ばれた少女が、堕ちた友人を見るような悲しい目で、リエリと読んだヒスイ色の瞳の巨乳女性を見ていた。

どうやら知り合い同士で、この男の奴隷となっているようだ。

それが次元侵略者の手を借りているらしいのがこの男の問題点。魔界や闇の組織を通じない奴隷や魔薬の斡旋。この小物のような男が、かかわっているという情報。

君たちが体を張って情報を入手、もしくは誘拐するのに十分な理由だった。

「たつく、奴隷風情がよお」

イラついた様子で高そうなソファアーに座りなおす男。

ぎしりと悲鳴のように、ソファアーがなった。

男の視線から見えないところで、リリコと君はゆきかぜを必死で止めている。

理性が薄くなる媚香の性で、発情の上に怒りっぽくなっているのだ。

ここで襲つても、次元侵略者との証拠をもつてないと、面倒なことになる。

演技を崩してぼこぼこにしようとするゆきかぜを必死に止めておく。

「けったくそわるいな。おい、お前ら」

ぼんやりした演技をしたままの君達に、視線を向けてきた。

どこまでも小物相応な加虐者の笑みだ。

「今すぐここでセックスしろ」

だからこそ面倒な相手ではあった。

一般人をVIPルームに誘い入れ、その場でセックスさせる。

その後、改造した体や次元侵略者からの薬を使って、相手をぶっ壊す。

そういう悪趣味なのが好きらしい。

裏の情報屋からもよく思われていない男だ。

油断させるために、ある程度この男の趣味に付き合わないと、いけないのが難点だった。

だが、しよせん薬や改造したペニスで、イキっている雑魚だ。

君が本物のセックスというものを教えてあげよう。  
顔を紅潮しだしたゆきかぜに手を伸ばす。

そのまま君に向かって引いた。

「あつ、んっちゅれりゅっぶっ♥」

最初の躊躇など存在しない。激しいディープキス。

即座にぐっちゅぐっちゅと重い水音をVIPルームに奏でる。

「んっあ、ふ、うまつ♥ ちよっ、ちゅっじゅれりゅりゅっ♥」

一瞬慌てるゆきかぜだったが、この男の前でセックスするのは予定通りだった。

隣のリリコもそれは知ってるため、一緒に混ざってくる。

「んっう、ねえ私もおっ♥」

君の手を自身の真っ白な巨乳に誘導して、キス待ち顔を向けてきた。

もう一方の手がかりかりと、ズボンから君の肉棒を刺激している。

君の雄欲を底上げするしぐさをするリリコへと唇を向けた。

「んあ、ちよっとおっ♥」

「んっちゅっじゅ、私だっけキスしてほしいもんねっ♥ ちゅっ

ちゅっう、じゅれりゅりゅっ♥」

不満の声を上げるゆきかぜ。反論しつつも、君の肉剣を刺激してくるリリコ。

「むう、いいわよ、私はこっちをもらうからっ♥」

媚香の効果で理性が低下し、性欲にノリノリなゆきかぜ。

普段よりも積極的に絡んでくる。

ズボンの上から君の肉槍を刺激しているリリコの指をどかして、ゆきかぜがジッパを口で開けてきた。

「んっちゅ、あゝずっるっうっ♥ んじゅっれるっ♥」

「んっっう♥ リリコが言うこと？ あっんっ♥」

ジッパが開いて、窮屈なズボンから抜け出した肉竿が、ゆきかぜのほほに当たる。

ぶにぶにの褐色のほっぺに、亀頭が当たり我慢汁で汚れていく。

「あつはあつ♥ 出た出たっ♥ すっうっっ♥ んおっ♥ 雄の臭



いつ♥ スンスンっ♥ こいっ♥ んべえっえっ♥  
彼女の真つ赤な舌が君の亀頭に伸びてくる。

そのまま亀頭に絡まるように舌で舐め上げてきた。

「んっちゅ、ちゅっちゅっ♥ もっうっ♥ なら、あたしはこっちっ♥」

何度か唇を触れ合わせた後、するりっとならぬ君の視界からリリコは消えた。

そのまま後ろもズボンを下げられる。

「んっえ、れっうっ♥ お尻の穴っ♥ れぶれっうっ♥ 舐めなめしちゃうもんねーっ♥ れりゅうっぶっ♥」

ためらいなくリリコが君のお尻の穴を舐めてくる。

穴の周りを舐めあがたかと思うと、そのまま舌が腸内まで舌で犯されていく。

「んっちゅっ♥ ふふっ♥ リリコのアナル舐めっ♥ ちゅっちゅっ♥ 気持ちいいんだっ♥ ちゅちゅうっ♥ 負けられないわねっ♥ んあゝゝゝっ♥」

黒い霧を纏う亀頭の先を何度もゆきかぜが柔らかい唇でキスしてくる。

そのまま挑発するかのよう肉弾頭の前で口を大きく開けた。

「んっえ、こっひでっえ食べちゃうからあっ♥ 雄ペニスいただきまゝっ♥ んっぐ、ぐっぶぶっりゅっ♥」

すっかり媚香と君の肉竿の臭いで出来上がっているゆきかぜ。

普段の甘えるようなセックスとは違い。クラブにいるビッチのようなしぐさをしながら、君の肉キノコを飲み込んでいった。

一気に喉まで使うディープスロート。

喉肉で黒い霧を纏う肉剣を締め付けられて、背筋が震えてきた。

「んれっうっ♥ ふふ、ゆきかぜの喉マンコ♥ しっかり締め付けてるみたいじゃんっ♥ 私のアナル舐めもっお♥ んっれう、じゅうっれりゅっ♥ 忘れないでねっ♥ れうっぶっ♥」

肉棒とお尻のほうからくる快感で脳髓が痺れてくる。

思わず君は、ゆきかぜの奇麗な黒髪事頭をつかんだ。

「うっお」

「わっあ」

「うそ」

隣のほうから驚いたような声が聞こえてくる。普通の高校生がやるようなぬるい交わりぐらいしか見たことないのだろう。

本物のセックスとこのを見せてあげよう。

二人に奉仕されて、媚香の効果もあって、理性が少し薄くなった君。Sスイッチがしつかりとオンになる音が聞こえた。

ゆきかぜの頭に置いてあった君の手に力がこもる。

「んっぐっうっ！♥ 喉マンコっ！♥ ごっぷっ！♥ 犯されりゆのっおっ！♥ んぶっぐっおっ！♥ だめっえっ！♥ 気持ちよくなつちやつうのっおっ！♥ おっおっ！おっ！♥」

感覚向上能力の黒い霧の効果で、すっかり膣内のように感じだすゆきかぜの喉肉。

ぶっしゅぶっしゅつとゆきかぜの股から潮が噴き出す。

そのままお尻の穴にも黒い霧を集めて、リリコの舌を締め付ける。

「んっえっおっ！♥ ふっうまつ！♥ んえっえっうっ！♥ これやばいんだってっ！♥ んっじゅれっうっ♥ オマンコ弄りっい！♥ れうっおっ！♥ がまんできなくなってるじゃっあ！♥ っ！♥ んっれっれっうっおっおっ！♥ っ！♥」

ぐちゅぐちゅと重い水音が君の耳に聞こえます。

君の尻穴を舐めながら、リリコが淫口を指でいじっているようだ。

前と後ろから奏でられるみだらな二重奏。

ぞくぞくした快感の電流が腰から背中にかけて走ってきた。

「んぐっ！っぽ、ふうま専用喉マンコっ！♥ んぐっぶ、おっ！♥ キュウキュウしめりゆからっあっ！♥ んじゅぶっぐ、おっあっ！♥ 子種汁出してっえっ！♥ じゅりゅりゅっぐっ、おっ！♥」  
「れっゆっぶっちゅ、んんんっ！♥ お尻の穴ぴくぴくしてき  
たっあっ！♥ でそう！?♥ ふうまつ！♥ でそうでしよっ！♥  
れろれろっ、んっ！♥ いいよっおっ♥ れりゅりゅっう、うんっ  
♥ だしてえっ！♥ れりゅぐぶっ、んっ！♥」



ただ君が与える快感に陶酔し集中していく。

「んじゅっぶっぶっ」きゅっ♥ まひや残ってるでしょっおっ♥ つ♥ じゅりゅっりゅっぶっ♥」

「んっえくれぶっ♥ はっあっ♥ ふふっ♥ 最後までここから出してあげてねっ♥ ふうまっ♥」

残った精液まで吸い取ろうとゆきかぜは激しいバキュームフェラを開始。

君のお尻の穴から舌を引き抜いたりリリコは、そのまま金玉をもんで優しく刺激してくる。

二人の愛情溢れる奉仕によって、肉棒にも一切残らずに精液を吐き終えた。

「んっちゅぶっうっ♥ げっぶっ♥ あうっ♥」

「もっうっ♥ ゆきかぜ♥」

「しよ、しょうがないでしょっ♥ こいつのザーメンの量が多かったんだからっ♥」

ゆきかぜの隣にリリコが移動。そのままゆきかぜをからかった。

陶酔した表情のまま、ゆきかぜはリリコに反論。

普段ならこのまま二人との3Pとなる所だ。

だが、今この部屋には君たち以外に人がいる。

「ふ、ふふ。あんなものみせられちゃあ。こっちだつてなあ」

二人の女性を鎖で引いた太った男が、近くの棚から何かを取り出した。

「へへっ、これがありやあ」

「い、いや！ やめて！」

リエリと呼ばれた柔和な顔立ちの女性が男の持ったカプセルを見て震える。

「や、やめろ！ やめてくれっ」

ナオミと呼ばれた勝気な女性も、先の強気の雰囲気とは一転。

怯えた表情で男に縋りついた。

「だまれよ！ あいつから売られたお前ら……異世界からの奴隷ならっ」

ダウト！

瞬時に思考を切り替えた君は、ゆきかぜに男を攻撃。二人の女性を救助することを命令。

「待ってたわよー！」

「オツケーー！」

先ほどまで君に媚びた表情を一瞬で消した二人。

汗に濡れた服でも、動きの精細さは変わらない。

「なっあ、つくえ」

瞬時に近づいたゆきかぜの電流をくらい男は失神。

「二人とも、こっちにきて」

「えっ」

「な、なにが」

救助対象と化した二人をリリコが君たちのほうに連れてくる。

リエリとナオミと互いを呼んでいた二人は、状況の流れについていけないようだ。君たちを不安そうな目で見ている。

ささつと身支度を整えて、君は二人に目を合わせてぺこりと頭を下げる。

そのまま君は自身をこの世界の治安部隊。

異界侵略者である存在を探知していた自分たちは、この男を犯罪者として追っていた。

二人は元の世界に戻るかはわからないが、一旦身柄を預からせてもらう。

二人に近くから引つ張ってきたシーツを、裸体を隠すように渡しなから、君は説明した。

「そ、そうなのね……わかりました。私はリエリ——いや、ただのリエリよ。貴官にこの身を預けます」

どこか憔悴した様子で、紫色の髪の女性……リエリと名乗った女は君の説明にうなずいた。

「……私はナオミ。私も貴官の所属に身を預ける」

勝気な様子だが、それでも疲れと……そしてリエリに対する憐憫の表情を隠しきれない少女。ナオミも了承の意思を示した。

「ふうま、こいつどうするの?」

男を縛り終えたゆきかぜが、気絶したままの小男の処遇を聞いた。君は連絡機器を取り出して振った。

すでに男を確保する舞台に連絡済み。

少し待てば、君たちの補助部隊がVIPルームに入ってきた。

魔族対魔忍混合のチームは、異界侵略者の手は入っていない。

確実にこの男から情報を抜いてくれるだろう。

君は近くの対魔忍の女性に、二人を安全な場所に連れていくよう指示。

独立遊撃隊として活躍する君の指示は滞りなく進む。

任務も終わり、ゆきかぜとリリコと共に繁華街を抜けていく。

このまま五車町に帰る。

……そんなわけないのだ。

「ふうまっ♡」

リリコが君の腕に抱き着く。

「このまま、帰る……わけないわよね♡」

意外と性欲の強いゆきかぜも、君の腕に絡みついてきた。

ちようどすぐ隣に休める場所もある。

「それじゃあっ♡」

リリコが君を見上げながら淫蕩な笑みを浮かべる。

すでに彼女の真っ白な巨乳に汗が滴っていた。

「続き……満足させてよ?♡」

ゆきかぜの淫猥な挑発的な笑顔。

彼女の褐色の肌にも、しずくが垂れていた。

むんつと香る雌の臭いに誘われて、君は二人を伴ってホテルへと足を運ぶのだった。

外伝 近未来な世界で裏の仕事しているけど、仲間や知り合いに貢がれる件

## マヤ・コーデリア★

煌びやかなシャンデリア。あちこちの机にはお腹が空く香りを放つ目にも楽しい美食の数々。静かな音楽は招かれた音楽隊が流している。

机の間を蠢く人々はブランド物のドレスやスーツを来たパーティーの参加者たち。

君も一張羅のスーツを着て、目の前にいる少女の後ろで静かに立っていた。

自然のオレンジ色の髪が腰のあたりまで伸ばさし、アメジストの瞳の上で切り揃えた少女。君を携えて歩くたびに、真っ白なマントをゆらゆら揺らめかせて歩いている。前半部分の殆どが黒のインナーでぴったりとフィットして、たふんたふんとゆれる大きな胸のあたりだけ別の布で飾っていた。

宇宙服のコスプレのようだが、目の前の少女はそれがドレスとして当たり前のように背筋をピンつとはり前を向いて歩く。

「ここですか、例の組織が主催するパーティーと言うのは」

目の前の少女であり、君と共に潜入しているマヤ・コーデリアが小さな声で囁く。今彼女の手元には君の首輪に繋がる鎖が繋がっている。

あちこちの組織に魔界の動植物から薬品に技術を売り渡す新興組織。日本のベンチャー企業としての顔を持つそこを探る為、現在君とマヤが社交界に潜入している。

マヤはヨーロッパ方面から来たビッグファミリーのお嬢様と言う形になっている。

はるか先の未来で大公家のお嬢様という肩書を持つ彼女にぴった

りな役回りだ。

君は彼女に飼われた雄奴隸となっている。

だからこそ、マヤの手には君の首輪に繋がる鎖がある。

「これはこれは、マヤ様。私、ヨミハラでしかない商売しておりますサバハと申します」

彼女は社交界場を君を伴って歩くと、あちこちから人が寄り集まってくる。

よく見れば人ではなく魔族である。

その事をぼそりと耳にささやきつつ、君は何時でもマヤを守れるように静かに立っている。

「覚えておきますわ」

「私はマニユーは、錬金術師でもあります。マヤ様の為なら、魔界の植物で錬成した化粧品なども取りそろえますよ」

「ええ、ありがとうございます」

様々な魔族の誘いを言葉巧みにかわしていく。

流石は大公家のお嬢様。パーティでの交わり方も精錬されている。

歩き方や喋り方の貴賓はマヤじゃないと出せない物だ。

だからこそ、彼女が鎖で引きながら伴う君も注目を浴びる。

「そちらの方は……」

「ええ、最近購入した雄奴隸の一人です」

セレブの女性に指さされた君を、マヤが首輪の鎖を使って引っ張る。

無言で前のめりになり顔を出す君の顎を、マヤが白いイブニング・グローブで纏う指で撫でる。

君は恥ずかしそうに呻きながら、為すがままになっていた。

今の君はマヤに購入された雄奴隸として、演技しなければならぬ。

顎から首まで摩られて、悶えるような姿を、周りからねめつけて来るセレブの女性陣に、見せつけないといけないのだ。

だからどこか楽しそうに陶醉しだした目で、君を見つめて来るマヤの紫の瞳の事は、思考の隅に追いやっておく。



後で覚えておけ。

マヤに弄られて悶えても為すがままの奴隷の演技をしたまま、君は後の復讐を誓う。

「あら、面白い事をしていらっしやいますわね」

雄奴隷を披露するマヤの回りにいるグループを裂くように、一人の少女が姿を現す。

小麦色の肌にシルバードロンドをツインテールにまとめている。ロードライトガーネットのような赤紫色の目がツンツと尖っていて、気の強さをうかがえる。歩くだけで揺れるマヤ並みの巨乳を、短いスカートにした軍服で覆い隠していた。

君よりも少々背の低く、マヤよりも幼い少女だが、明らかに周りにいるセレブの女性達より格上。その証拠に、セレブ女性達の輪を裂くように現れた彼女の回りから、一気に人が引いた。

「キラ・クシヤナ様。お出でになっておられたのですか」

「ええ、最近新しいペットが欲しくなりましたから」

リーダー格の女性も、キラ・クシヤナと呼ばれた少女を敬うように、言葉を投げかけている。

どうでもよさそうに言葉を放った女性を見ると、キラはちらりと君を見て、ペろりと真つ赤な舌で唇を舐める。

君は後ろ手にマヤに合図をする。

重要人物の一人だ。

キラ・クシヤナ。

気の強そうな瞳に、ミニスカートの軍服姿同様に異例の経歴をもっている。米連の士官学校を首席で卒業後、母親であるベアトリス・クシヤナの軍閥に参加。そのままPMCを立ち上げて、各地の戦場でパワードスーツで活躍している。

それだけなら良いが、彼女には色々悪い噂がある。

反米連を立ち上げた組織が一夜にして消えた事件である。パルツァー事件。その後闇に流出されたスナップフィルムは、彼女達が流したものだと言われている。

オーガヤトロール、将又サラマンダー等の魔界の住人に犯されなが

ら食われていく様は、気の荒い闇の組織の人物達も眉をしかめるほどの物だった。

その流出した噂のあるクシヤナ家のご令嬢でもあるキラは、君達としても調べるために近づかなければならない一人であった。

銀色の口紅に塗られた唇は、君を見てにったりと笑っている。

「へえ、可愛いペットですわね」

「ええ、自慢のペットです」

ロードライトガーネットとアメジストの目が重なり合う。

似たような色合いの瞳同士だが、その奥の志は全く異なる物があるようだ。

黒猫のように美麗だが、実態はヒョウのような肉食獣であるキラが、口角を最大限上げた。

その瞬間周りのセレブの方々が穏やかに離れていく。関わりたくないのだろう。

「パーティーには、余興がつきもの。少々そのペット化してくださいませんか？」

君とマヤに向かって、手のひらをキラは差し出してくる。その態度は断られることを想像していない。わ

がまま娘のそれだ。

周りから来る視線も、お願いだから断らないでくれるな、と言う懇願の視線だった。

マヤもぎちりと歯を噛み締めそうなほどの感情を、笑顔で隠しているようだ。男女の中である君が唯一気づいている。

君はこっそりと目の前で荒れ狂う感情を、笑みを浮かべて抑える少女に合図。

目の前の褐色わがままお嬢様という通りにしないといけない。

彼女は今回のターゲット。近づけるなら何としてでも近づいておきたい。

例えば君がおもちやにされても、だ。

「……キラ様の為なら喜んで」

一瞬の沈黙の後、マヤは君の合図通りにキラに向かって、首輪に繋

がった鎖を持ち上げた。

彼女が渡した鎖をキラが受け取り、

「こちらに來なさい」

ぐいっと引つ張ってくる。

君は首の負荷に抵抗せずに近づく。

若干君の方が背が高いため、血のような赤紫色の瞳が見上げて来る。

ニンマリと雌豹の笑みが君を見つめていた。

いつの間にか目の前の褐色美少女の手に、ナイフが出現。

「くふっ」

含むような笑い声が君に耳を打つ。次の瞬間、スーツのボタンとベルトが切り裂かれた。

上半身の前が開き、ズボンが落ちる。

「あら、結構鍛えられてますわね」

スーツが開かれて、胸や腹筋に風が当たりすーすーする。ズボンも落ちて足が肌寒い。

「はあっ♥」

熱い吐息と共に、君の胸に褐色の手が触れて来る。

キラの細い指がくすぐる様に、君の胸筋を摩った。

ロードライトガーネットの瞳に、いたずらっ子のような光。

先ほどまで摩っていた指が、君の胸板に爪を立てて来た。

肌を切り裂く痛みが走る。君はわずかに眉を顰めるが、呻き声は我慢。

「結構我慢強いんですね♥　しっかり教育されていますわ♥　んっれっ♥」

赤く流れる君の血を、唾液に濡れたキラの舌が舐めとる。

快楽に近いざわつく様な電流が、君の体に走った。

周りに見られているのに、キラは君の体から流れる血を舐めとってくる。

裏の社交パーティーでもある為、性的な事も余興の内に入る。

周りの女性陣も、君の裸に秋波を投げかけていた。

マヤやキラよりも年上の女性が、君の肉体を見てこくりとつばを飲み込む。

「あら、乳首が立つてましたわっ ♥ ふふっ ♥ こちらもっお ♥ 大きくなってますわね ♥」

パンツの中で、窮屈そうに君の肉棒が起立してしまった。パンツ越しのキラの細い小麦色の指が、軽く触れる。

その様子まで晒す様にキラに指摘される。

「あら、本当だわ」

「さすがマヤ様のペット。従順に躡けられてますね」

「……ええ」

周りから君の姿を揶揄するような声が聞こえます。

マヤも君を奴隷扱いする言葉を、笑顔で受け止めていた。

「なかなかの大きさですわ ♥ ん〜 ♥ これなら楽しめそう ♥」

一度君の目の前にいる彼女は、大きさを確かめる様に、パンツ越しに肉棒を握りしめて来た。

そのまま後ろにある机に無造作に腰を下ろした。君の首輪につながる鎖も引かれる。

キラに鎖を引つ張られて、君は地べたに座った。

君の目の前で短いスカートが、ギリギリまで腕に上がる。

君の目に紐のような薄い黒パンツが、チラリと映った。筋だけ隠すようなエロく薄い代物だ。

楽しそうな笑みを浮かべながら彼女は、片方の足の薄井デニールのハイソックスを脱いだ。カモシカのように細くも鍛えられた右足が浮かぶ。

ぐいっと君の顎の下にキラの鍛え上げられながらも細い足先が持ち上がる。

今まで君は下の方を見ていたが、彼女の足の指で顎事上に顔を向けられる。

嗜虐の光を伴ったロードライトガーネットの瞳が君を見つめてい

た。

チャシヤ猫のような笑みを浮かべて、目の前の褐色美少女は眩く。

「……舐めなさい♥」

震えるような音色でキラは君に囁く。

薄いピンク色の唇はプルプルと震えて、彼女自身の舌が這う。

はあっと熱い吐息が口の隙間から漏れ出ている。

明らかに興奮した牝の表情で、足を指しだす褐色美少女は君を見下ろしていた。

周りにいるドレスを着た牝共も、期待にあふれた視線で君を見つめている。

マヤのどこか刺々しい目線を無視して、君は舌を伸ばしていく。

甘いムスクのような美少女の汗のにおいを纏う、褐色の足に舌を這わせていった。

「んっふっ♥ 命令に忠実ないいペットですわ♥ あっん♥」

黒い霧を纏う舌で舐めていくことで、足先と言う神経が束ねる場所の感覚を、向上させていく。

指にキスをして間に舌を入れこむ。君の唾液が小麦色の足を汚しキラキラときらめいていた。

「ふっう、んっんっ♥ 丁寧につ舐めてくれますわねっ♥ ぐ、褒美あげませんとっお……はあっ♥」

甘い嬌声を漏らしながら、キラはもう一方の足を君の股間の間に向けて来た。

ぷんつと据えたような甘い体臭が、君の鼻に香る。同時に薄黒のハイソックスを履いたままの左足が、君のパンツを下ろした。

ぽろんと君の肉棒が露出された。

「っはあ♥」

「大きいですわね♥」

「マヤ様の雄奴隷……わたくしも味わってみたいものです♥」

「……しっかりと調教してますの」

熱い溜息と欲情塗れの視線が、君の体と肉槍に付く刺さる。

ゆつくりとキラの褐色の足を舐め上げる君を、オレンジ色の髪の下

にあるアメジストの瞳がじつとりと見つめているのを感じていた。  
任務だからと心の中で眩きながら君は、目の前の小麦色の右足に舌  
で奉仕していく。

「んっくっ♥ あ♥ なかなかお上手ですわあ♥ はあっあ♥ オチ  
ンポもっおっ♥ 熱くてかたいですわね♥ んうっ♥」

薄ピンクに塗られた唇から熱い吐息が漏れる。君の黒い霧を纏う  
肉剣を、デニール腰にキラの足指が擦り上げていた。

てらてらと君の先走り液が、ハイソックスを汚し淫靡に光らせてい  
る。

「ふっっ♥ んっあ、ふふ♥ 足が汚れてしまいますわっ♥ あっ  
…はっあっ♥ 暑い液体でっえ♥ ああ♥」

紅潮した小麦色の美麗な顔が君を見つめていた。ホワイトブロン  
ドの下にあるロードライトガーネットの瞳は濡れて光り輝いている。

明らかな欲情した少女に当てられて、周りも熱い吐息や秋波の視線  
を君たちに向けていた。

温度が高くなり出したと思うほどの、欲まみれの息や視線が君の周  
りに漂う。

目の前の褐色美少女も君の肉弾頭を左足の指で挟むようにしごい  
ている。勢いも段々激しくなっていて、君も金玉袋で増産された精液  
が上ってくるのを感じている。

「んっあ♥ もっお大きく膨らんできましたわっ♥ んっ♥ 出そう  
ですのねっ♥ ふっっ♥ 雄奴隷なら私の足コキは至極の快樂で  
しょうっ♥ はっ♥ はあっ♥ 我慢しなくていいのですよ♥」

軽く喘ぎながらも、キラは君の射精欲を感じ取ったようだ。

コスコスと足の指で擦られていたのが、一気に激しくなりだした。  
足指で扱かれていたのが、ぐにぐにと足全体で根から先まで刺激され  
ていく。

ぴりぴりという快感が背筋を這う。

まだ我慢できる。だが、背筋に突き刺さる様なマヤからの視線に押  
されて、君の肉棒から白濁流を爆発させた。

「んっおっ♥ あっはっあ♥ 精液出してしまいましたわね♥

んっうっ ♡ 足が汚れてっえ ♡ はっあんっんっんっ ♡」

君の肉棒から吐き出された雄液が、キラの褐色の足を白く汚している。口内にある彼女の足指を軽く甘噛みしながら、体中に走る快樂電流を耐えていく。

「んっう ♡ まだ出るのですかあっ ♡ おっあっ ♡ 雄奴隷だけあつてっ ♡ くっうっ ♡ ザーメン量も多いですわねっ ♡ おっおっ ♡」

ぶるりと目の前の褐色美少女の体が震えていた。甘く熱い溜息を吐きながらも、軽い絶頂に耐えているようだ。

裏のパーティーでは、この程度の痴態はサプライズ程度の物だ。

「ふっうっ ♡ っっ ♡ っっ ♡ まあ、楽しめましたわっ ♡」

一度大きく息を吐いたキラは、白濁液で汚れた足をハンカチで拭う。そのまま君の精気で汚れたハンカチに、胸の間から出した万札を幾枚か包んだ。

そのまま君に向かって投げだす様に放る。

「んっう ♡ っ褒美にあげますわっ ♡ んんんっ ♡」

その瞬間君にしかわからない感情に、キラは体を震わせた。口元をしつかりと噛み締めて、嬌声を抑えていた。

君にお金を投げ渡した瞬間、先ほどよりも大きく体が痙攣。……君は良くよく見た女性の反応だ。

お貢ぎ絶頂のような反応を見せたターゲットであり、君をパーティーでイジメたキラ・クシヤナ。彼女は今度は君に一度だけじっとりとした視線を投げかけると、そのままパーティーから去る様に背を向けて歩き出した。

メインヒロインが去った所為か、周りからの女性から熱い視線を感じる。

だが、それ以上に熱を持った視線が、君に突き刺さっていた。

周りの女性をけん制するように、カツンと地面に音を立てて足を出し、オレンジ色の髪を靡かせて一人の少女が君に近づく。

じとりと目の端が吊り上がっている。光線でも出しそうなほどのアメジストの瞳に押され、君は直ぐにズボンを何とかはき直す。

「フーマ、次は私に付き合いなさい」

目の前にいるマヤに付き添われて、君はパーティ会場を抜け出す。

「……」

そのまま無言でとある部屋に向かって歩き出していた。他の人も無言で歩く目の前の少女に、押されるように道を譲っていた。

怒れるライオンでも見たかのように、道を譲りそのまま足早に去っていく、闇のパーティの参加者たち。

マフィアやヤクザの親分に情婦などの一端の闇の住人が、関わりたくないと言わんばかりに君達に道を譲っていく。

目の前でマントをはためかせるお嬢様は、それだけの威圧を放っていた。

この後どうなるのだろうと震えながら、君は黙ってマヤの後を歩いて行った。

カツカツとなるマヤのブーツが奏でる音を聞きながら、君達の部屋に歩いていく。

無論パーティ会場であるホテルの個室であり、防音機能もパツチリでプライベートは保障されている。

中で何が起きても誰も来ないというのは、裏のパーティではよくあるサービスルームである。

そんな部屋の扉がちょうどいま君の目の前に現れた。

「……」

ただ無言でマヤが扉のロックを外して、中へと入っていく。

君が入ればすぐに閉じて、オートロックがかかる。

逃げられない部屋へと君は、静かに入っていた。

中へ入った瞬間ぱたと、扉が閉まる音が聞こえた。

くるりと君に向き直ったマヤ。言葉を紡ごうと君は口を開くが、それを塞ぐものが居た。

「んっちゅっりゅ、れっるっうっ ♡」

目の前でいきなり口中を這うように舌を挿入してきたマヤだ。

彼女のアメジストの瞳が君を突き刺すように見ながら、ひたすらに口内を舐めしやぶってくる。



「んっちゅ、れるうっつ♥ 舌をもっと出してくださいっ♥ じゅりゅりゅっ♥ 後でキス代幾らでも払いますからっ♥ ぢゅりゅっうるううっ♥」

ようやく発したマヤの言葉に頷いて、君は口内から舌を突き出す。「ちゅっちゅりゅっ♥ それでいいですっ♥ じゅっうりゅっ♥ 私  
が奇麗にしてあげます♥ ちゅちゅっうじゅぶっれりゅりゅっ♥」  
目の前に広がる美少女の顔が、君の出した舌に吸い付く。彼女の口内にあふれる唾液が、舌を洗うように塗されなぶられていた。

そのまま君が持っていた、精液で汚れたハンカチが奪い取られる。「じゅっぶ、れりゅっうっ♥ こ・れ・は♥ もういりませんねっ♥ えいっ♥」

可愛らしい声とは裏腹に、中に入った万札事キラからもらったハンカチが放り投げられた。

まるで汚らしいゴミのような形で部屋の床に捨てられていく。君の貧乏精神がもつたいなと思う。だが、目の前でじつと見つめてくるマヤの青紫の瞳が、何も言わせてくれなかった。

「んっちゅ、れろっおっ♥ ここもっおっ♥ れろ♥ ここもっおっ♥ ちゅっうっ♥」

そのままキラに触れられた箇所をなぞる様に、マヤの唇と舌が這う。

皮膚や傷跡を洗うように舐められ吸われる度に、背筋が痺れるような快感が走る。

その所為で先ほどまで萎んでいた、君の肉棒がまたそり勃った。「んっちゅっれっえっ♥ ふっつ、わかつてます♥ こちらもっおっ♥ ですねっ♥ はっあくっくっ♥」

マヤの熱い吐息が君の肉剣に降りかかる。僅かな刺激に反応してビクンツと跳ねた。

「んっんっ♥ 暴れん坊のフーマチンポ♥ お貢ぎ主様の牡魔羅♥ おっ♥ い、良いですよねっ♥ あとでちゃんとおっ♥ あっ♥ 支払いますからツアっ♥ あゝくっくっ♥」

口を大きく開いて舌をれろっおっとな差し出したマヤのフェラ待ち

顔。

先程の主従関係が完全に逆転していた。

君の許可を静かに待つ雌犬に、君はただ静かに頷いた。

「んっじゅっぶ、れりゅっうっぶっうっ ♡ フーマのチンポツオツ ♡  
じゅっつうりゅりゅっうっ ♡ あんな女に汚されてしまっ  
てっえっ ♡ じゅぶっぐっ、りゅりゅりゅっ ♡ 綺麗にしますうっ  
♡ れりゅっぶっぐぶっ ♡」

その瞬間マヤに君の肉槍が根元まで一気に飲み込まれた。彼女の  
高い鼻が、根っこに生える茂に埋もれても気にしていない。

舌まで亀頭からシャフト迄巻き付くように張ってくる。

流石の君も思わず彼女のオレンジ色の髪に両手の指を絡ませた。

「ふっぐっぶっ ♡ 放しませんっ ♡ りゅりゅりゅっぶっ ♡ フーマ  
は私のフェラチオについて ♡ じゅっぶぐっぶぶっ ♡ 身を任せれば  
いいんですっ ♡ じゅるっぶっふっ ♡」

喉を亀頭で引き締め、ほっぺが棒の部分を擦り合ってくる。

腰が融けるような快感が君の脳髓を痺れさせてきていた。

立っている君の足がガクガクと震えだすほどの快感。

「んっぐじゅ ♡ フーマっ ♡ れっるれりゅっ ♡ 出そうです  
かっあっ ♡ んちゅっちゅっ ♡ んっ ♡ 少しお待ちなさいっ ♡  
んじゅりゅうう…：…んっ っ ♡ 私もっおっ ♡ んじゅっ  
ぼっ ♡ んおっ っ！ ♡」

マヤの口内から発せられる唾液の混ざる音に重なる様に、ぐちゅぐ  
ちゅと重い水音が部屋に木霊していた。

何時の間にか、彼女の短いスカートに隠れて、手を股の口に擦り付  
けていた。

激しい口奉仕に加えて、目の前の美しい少女は、オナニーしている  
ようだ。

ぷるぷると床に落とした城が震えている当たり、何度か軽い絶頂を  
味わっているようだ。

「じゅぶりゅりゅっ！ ♡ おっ っ！ ♡ チンポっ！ ♡ おっぶ、  
りゅっうっ！ ♡ たまらないですっうっ！ ♡ んっごっお、りゅっ

ぶっ！♥ 私の口に入れるだけでっえっ！♥ んっん、じゅっじゅりゅうっ！♥ 痺れてしまいますっ！♥ れっりゅぶ、んゝゝゝっ！♥」

背筋を走る快樂の反応で、離れようとする君の腰を片手でマヤは抑えている。

何度も君の肉剣を根っこまで飲み込みながらも、彼女のアメジストの瞳はじつと見つめてきていた。

自身のディープスロットで起きる君の反応を楽しんでいるようだ。

何度も君の亀頭に擦り付ける様に喉を当てて来る。

それどころか喉肉で亀頭全体を締め付けていた。

普通の女性ならえづき吐く。それ程の激しきで君の亀頭を奥底まで舐めしやぶっていた。

何度も君とのセックスで彼女自身成長しているようだ。

性奉仕による調教を自身が行った自負含めて、雄の欲望が胸の奥底で燃え上がるのを感じる。

ぐっぐっ煮える金玉から精液が昇り始めていた。

「んっうっごっおゝっ♥ また大きくなりましたねっ♥ はっあゝっ♥ 私っもっおゝっ♥ んっちゅちゅりゅっう、おゝっ！♥ イキそっうですからっ！♥ れっうりゅっぶ、おおゝっ！♥ 出しているですよっおゝ！♥ おっお、じゅぶれりゅっうっ♥ フーマっ♥ フーマっ♥ んじゅっれりゅりゅ、おゝっおゝっごっおゝおゝ！♥」

甘く囁かれるように君の名前が呼ばれる。同時に肉塊を完全に口内に飲み込み、根元にちゅっど口づけされる。シャフト部分に唾液と舌粘膜が絡まり、亀頭を喉肉が締め付けて来た。

目の前が真っ白になったと思うほどの快感が脳に直撃。

完全にタガが外れた白濁流が、肉槍の先から胃に直接流れていく。

「んっぶっぐっぐっおおゝっ！♥ フーマの精液っ♥ じゅぐっうゝうゝっ！♥ 喉に直接きてっますっうっ♥ じゅりゅりゅっ♥ 飲みながらッアゝっ♥ いっくっぐっうゝうゝうゝうゝうゝっ！

♡

君の射精とほぼ同時にマヤの全身が、がくがく震えだしていた。青紫色の瞳を上の方に向けて、白目になっている。

淫靡な表情を君に晒しながら、何度も喉を鳴らしていく。

「んっぐっ ♡ フーマの精液っ ♡ んっぐっぐっ ♡ 孕ませ雄液はっあゝっ ♡ じゅりゅつりゅりゅつ、はあゝんっうゝっ ♡ 一滴たりともっ ♡ ずっずっうゝっ！ ♡ 零しませんからっあ！ ♡ んっぐぐんゝ！ ♡ 私のですっ ♡ んぶ、りゅっう……んゝんゝんゝんゝんゝんゝっ！」

肉槍の先から流れる白濁液を、飲み干していくマヤ。

絶頂に耐えながらも、ごくごくと喉を鳴らしている。

彼女の胃を埋め尽くさんばかりに出して、君の射精も止まっていた。

「んぶずずっうっ ♡ 出し終わりましたねっ ♡ はっくっ ♡ チンポに残ってませんねっ ♡ んじゅっぽっ ♡ んっあっ ♡ けっぶっ ♡ あら ♡」

肉棒に残った物まで吸い取られて、マヤの口がようやく離れる。その後軽いゲップ音を出して、彼女は恥ずかしそうに手を口元に当てていた。

「あいからず量が凄いです ♡ 胃から精液の匂いがしてますよ ♡ フーマに鼻まで犯されたみたいです ♡」

口元に手を当てながら、マヤは君をじっと見て来た。若干睨むような目だったが、声色は仕方なさそうな愚痴のような感じだ。

何せ彼女の前には、この程度では収まらないと言わんばかりに、君の肉弾頭がしっかりと起立している。

紅潮した顔を君に向けながらも、視線は何度も期待するかのよう

に、チラチラと見ていた。

マヤの視線を受けたまま、君は近くのベットに移動。

視線を送り続ける彼女の目の前で、腰を下ろした。そのままじっと視線を送りながら待つ。聡明なオレンジ色の髪を伸ばした少女は、自身の服をすべて脱いだ。

近くに折りたたんで、床に正座。マヤの前のほうに財布から出した万札を置いた。

「ふく、ふくくくっ♥ これでっえ♥ ふひ♥ フーマにお貢ぎっくひひっ♥」

欲望に濡れたアメジストの瞳を君に向け、口角をだらしなく下ろしている。紅潮した顔をゆっくりと床に下ろしていった。

柔らかな絨毯の上で全裸のまま、マヤは君に土下座している。

「これでっえ♥ フーマの絶倫チンポでっえ♥ 私を犯してっえ♥ あゝあゝっ♥」

色欲にまみれた台詞を吐いて、全裸土下座の体制。はたから見れば君が強制しているように、見えるだろう。

マヤから見えない君の顔が、ちよつと胃痛を感じているような表情でなければだが……。

お腹に手を当てて、今日の任務のご褒美を要求されている君は、頭を振ってSスイッチをちゃんと入れた。

昨日の夜一緒に風呂に入り、丁寧に洗ってあげた彼女のオレンジ色のロングヘア―事、地面にこすりつけられた頭を君の足で踏んだ。

「んっひっい♥ おっ♥」

ぶしゆりとお尻のほうから、液体が漏れたのが見えた。踏まれただけで軽い絶頂声を漏らすマヤを蔑むような声を投げかけた。

汗水たらした領民のお金で、俺に抱かれないのかと問う。

「ふっひっ♥ ひひっっ♥ そうなんですよっ♥ フーマとのセックス♥ 肉オナホハメハメっ♥ 生ハメ交尾のおためならっ♥ ンッ♥ 専用おまんこにチンポ入れてもらうためならっ♥ おっっ♥ なんでも差し出しますからっあっ♥ あっあゝくっ♥」

別世界では領主の立場にあるお姫様。そんな彼女が、ぐりぐりと踏まれながらも、口と股間から体液を垂れ流していた。

そんなマヤの前に足を頭から下ろして、前の方に差し出す。

これもプレイの為、報酬ゆえにと思いつつ、君は彼女の差し出した万札を踏んだ。もったいない！

心の叫びを押し殺す。そんな君をこっそり見ながら、マヤは自身の

前にある足に舌を這わせた。

「えりゅっ♥ フーマの足っ♥ 舐めますねっ♥」

先ほどまで靴に入っていた足を躊躇うことなく、舌で洗うように舐めている。

くすぐったいようなピリピリとした快感が腰を震わせた。

どこまでも被虐の快感に身を任せて、淫靡な笑顔を浮かべている。

ゾクリツと身を振るわえるような、オスの優越感や加虐の悦楽。

君は彼女の望み通りに、そのオスの燃え盛る欲望に身を任せることにした。

君の足を持つマヤの雪のように白い腕をつかみ、ぐいっと引っ張った。

無理やり立ち上がらせて、君の足の上に座らせる。

「きゃっあ、あんっ♥ もう、フーマア♥ 乱暴なんですからあ♥」

軽く悲鳴を上げたが、すぐに甘えるような声と視線を君に向けていた。

濡れたオレンジ色の瞳が、君に甘えるように近づく。

「んっちゅっ♥ きっ♥ ちゅぶっ♥ きしゅっ♥ んちゅっ♥ キ

シュ代も追加しますっ♥ ちゅっちゅうっ♥ だからもっとうっ♥

んっちゅうっ♥ キスしてくださいっ♥ ちゅっちゅぶっ♥」

唇が触れ合った瞬間、むさぼるような激しいディープキスが始まる。

君の舌を目の前にいるお嬢様の口の中に入れる。すぐさま彼女の舌が、絡みついてきた。

肉剣をフェラチオするかのような激しい口付け。

「んじゅっ♥ フーマの唾液っ♥ れりゅっじゅりゆるうっ♥ もっ

とくだけさいいっいっっ♥ ちゅりゅじゅりゆるるっ♥」

君たちの口の間からねばつくような、重い水音が何度も木霊していた。

ナメクジのような舌の絡み合いに、君の口の周りが濡れていく。

同時に君の肉棒や太腿も上から垂れてくる愛駅で汚れていた。

キスだけで快感を感じている、目の前の弱メスをしつけるために、

君は一段腰を下ろした。

ベットのスプリングの反発で、瞬間的に空いた隙間から、君の肉棒がマヤの股の間にある淫口に一発で侵入。

「んじゅっ！♥ おっほ！♥ くくくっ！♥ はあっあっ♥ い、いきなりすぎますよっお♥ あっあっ♥ フーマっ♥  
んおっおっおっ！♥」

抗議するような声を上げながら、彼女の顎が君の方あたりに置かれる。

でも好きだろうとからかうと、

「あつむっ♥ んっんっ♥ フーマツ♥ がぶっ♥ んっんっ♥  
っ♥ 生意気ですっっ♥ はっあゝあゝあゝっ！♥」

かぷりと甘噛みされた。

君は反撃と言わんばかりに、腰の動きを激しくしていく。

「んっぎっ！♥ まっあっ！♥ まってくださいっ！♥ おっおっ！♥  
フーマのデカチンポっ！♥ おっほっ！♥ ダメですっ！♥  
おっおっおっ！♥ は、げしいのっおっ！♥ おっふっおっ！♥  
感じすぎちゃいますからっあ！♥ あっああゝあゝあゝ！♥」  
ぎゅっとな手両足で絡まるように、マヤが抱き着いてきた。

甘くとろけるような矯正が、彼女の口元から零れていく。

密着状態のため、君の胸でマヤの白く汗に濡れて、輝く巨乳がつぶれていた。

「んっおっおっおっ！♥ これ乳首っ！♥ くっひっっ！♥ こすれています！♥ うっっうっうっ！♥ フーマの鬼畜チンポでっえっ♥  
おっっ…：…んっっおっおっ！♥ 私のマンコッ♥ うっぐ、  
いっひいゝいっっ！♥ すっかり征服されてしまいましたっあっっ♥  
おっおっおっっおっっ♥ 子宮口まで調教されていますっうっ！♥  
あっあゝあゝあゝっ！♥」

ささやかれる隠語が、君の興奮をさらに深めていく。

龟头があと少しで侵入しそうなほど、激しく何度も子宮口を突き上げる。

「おっへっ！♥ フーマツ！♥ あゝあゝくっっ！♥ そこは入りま

せんよっおっ！♥ おっおっ！♥ ダメですっうっ！♥ おっ！♥ 次の当主を作るための大事なところっ！♥ んっおっ！♥ 私の地を継ぐ子供の場所っ♥ おっくっ！♥ は、孕むための子袋っ！♥ ぐっうっ！♥ いじめたらっあっおっあっあっあっあっ！♥」

がりがりと無意識にマヤが、君の背中をかきむしる。

わずかな痛みと肉槍からくる快感が、脳内で混ざり合いしびれてきた、

「んっひっ！♥ おっおっ！♥ また大きくなりましたねっ！♥ んっおっおっ！♥ ひっひっひっ！♥ おみちゆぎっ！♥ おあっ、はっあっ！♥ 中出しお貢ぎっ！♥ ひいっいっんっ！♥ しますからっあっ♥ あっあっあっあっ！♥」

君の絶頂を感じたのか、目の前の少女が一気に両手両足に、力を込めてくる。

かぷりと君の耳を軽く噛み、マヤが囁いてきた。

「ふっうっ！♥ 中ですよっ！♥ おっおっ！♥ 中に出してくださいっ！♥ んっんっ！♥ 絶対に中出しですからねっ！♥ はっあっくっ！♥」

何度も中に精液を吐き出すことを求めてくる。

寒気のような、快感のような……どちらも混ざった何かが、君の背筋を震わせた。

振り払うように、君は射精に向けてぐりぐりと亀頭で子宮を持ち上げるように突き上げる。

「おっ！♥ んっおっおっ！♥ もっうっ♥ おっほおっおっ！♥ いっくっ！♥ ぐっうっ！♥ いきますっうっ！♥ ひっいっ！♥ 一緒に！♥ いっいっ！♥ フーマツ！♥ いっ！♥ 一緒に行ってくださいっ！♥ いっひっ！♥ もっとお貢ぎ！♥ ぎっいっ！♥ お貢ぎしますからっあっ！♥ あっあっ！♥ いっしよにっ！♥ いっうっうっうっ！♥」

離さないといわんばかりに、君へ抱き着くマヤが、射精を懇願して



いた。

彼女の意思通りに君の肉棒に絡みつくマヤの肉壁が、激しく収縮運動を開始。

肉槍に絡み継ぐ贅肉が、ぎゅるりと痛いくらい締め付けてきた。

目の前が真っ白になるような快楽が体中を駆け巡ったかと思うと、金玉から駆け上がる白い間欠泉が爆発していた。

「んっおほおっ おっおっ つっ！♥ フーマのザーメンッ♥ んっんっくっ！♥ 子宮にぎでますうっ うっうっ！♥ おほっおっ つっ！♥ ザーメン出されてっえっ♥ ひっうっうっ！♥ いっぐっ♥ いっぐっ1♥ フーマといっしょにっ！♥ いっぐうっうっうっうっうっ！♥」

君の耳の近くで、マヤの悦楽にまみれた絶叫が、吐き出されていた。力強い彼女の手足が抱き着いてきて、君の骨がぎしぎしとなる。

甘い嬌声。人の熱と痛み。肉棒から感じる快感。

とろけるような刺激が脳髓を駆け巡っていく。

「ほっおっ おっおっ つっ！♥ まだ出てっ！♥ んっおっ つっ！♥ 気持ちいいからっあっ♥ あっつっ！♥ 全身オマンコになつてりゅっうっうっ！♥ まだいっぐっ♥ んっあっあっあっあっ！♥」  
白目をむかんばかりの顔が、君の目の前で広がっていた。涙とよだれでぐちゃぐちゃになった、マヤの美貌。

無様なアへ顔を君に向けながら、彼女はただ快感の悲鳴を上げていた。

最後まで絞り出すような動きを続けるマヤの膣壁。

君の肉銃から出される白濁駅の本流も、だんだんと収まりだす。

「ふっおっ♥ おおおっ♥」

獣のうめき声のような音がただマヤの口元から漏れていた。

別世界では国すら収める立場にあるお嬢様をここまで墮とした。

普段は理性的な君も、燃え上がるようなオスの欲望に突き動かされていく。

夜はまだ続くのである。

## 1話（ふうま天音）

帰る途中、夕焼けを見ながら、君は黄昏ていた。

重い溜息をつきながら、財布の中を見る。

金がない。

ふうま宗家当主であり、独立遊撃隊隊長かつ特務中隊隊長であるふうま小太郎——つまり、君の懐は寂しい。

言い訳はある。知り合いであり、同じ読書家の瑠璃から、珍しい本を買った事。

魔族の種族や伝説の事が書かれていた寄稿本は、蓄えていた貯金全額払ってようやく買った物だ。

珍しい種族から多数派がよく使う能力の特徴が描かれているそれは、今後の魔族に対する切り札になりうる……はず……多分。

趣味だよ。悪いか。

経費として申請したが、やはり却下された。趣味的な物でしよとは、アサギ校長から言われた言葉だ。

ぐうの音も出ない。

はあつとため息を吐きながら、財布の中身を見るくらいには、寂しいものがある。

このままでは、稲毛屋のアイスすら買えない。

バイトを探そうにも、山奥の五車町では、そうそうなかった。

諦めて時子に土下座するか。

腹心であり財布の紐を握っている義姉の姿を思い出しながら、君は家へ重い足取りで向かっていく。

ゆっくりと足を進めていくと、家の前で肩をぐるぐると伸ばしたりして、首を曲げている女性がいた。

烏の濡れ羽色のように深い色合いの黒髪を、ポニーテールにして纏めている。程よく膨らんだ胸部が解るほど、体にびっちり張り付く執事服。意思の強そうな切れ長の透き通るような空色の瞳。真っ白い手袋を履かせた右手とは別に、クローム色の左手は義手であることを示している。

君の執事を自認するふうま天音が、義手の左手をどこか不快そうにぐるぐると回していた。

彼女に様子を観察しながら、君は一言声をかける。

「こ、これは若。気づかずについて申し訳ありません！」

実力者の彼女にしては珍しく、君の気配に気付かなかったようだ。ぴよんと飛び上がらんばかりに背筋を伸ばすと、すぐに君に視線を向けた。

珍しいこともある物だと思いつつ、天音の体の不調に気づく。

指摘すると、恥ずかしそうに口をモゴモゴさせながら、彼女は話していく。

「ええ、最近少々荒っぽく使いすぎました、どうにも、身体と肩に違和感があるのです」

対魔忍としての実力も高く、高度な依頼もこなす天音。不調など彼女からすれば、自身の不明に等しいのだろう。

君からすればお堅いのだが……言うまい。

喉から飛び出そうな言葉を抑え、君は別の話をする。

誰でも思いつき、簡単な労りにもなる行為。

マッサージでもしようか。

「いえ、いえ！ 若のお手を煩わせる訳には！」

首を横にぶんぶん振って、とんでもないと言わんばかりだ。

「……っう」

だが、それも彼女の体に負担になった様子。

一瞬だが、眉を潜めていたのを君は見逃さない。

どうやら身体の違和感は、相当大きいようだ。

君は彼女の手を取り、すぐにマッサージをした方がいいと説く。

「し、しかし若にそんなことをさせる訳には……」

それでもなお、否定的な天音。

こう言う時は、相手が納得する理由が必要だ。

君はピンツと来るものがあつたため、そのまま言葉にした。

じゃあマッサージの代金を貰う。

「へ？ お金ですか？」

パチクリと天音の空色の瞳が瞬く。

全く予想外のことを聞いた、と言った様子だった。

その意識の隙を突いて、君は言葉を兼ねる。

ちよつと高い物を買ったせいで、金欠だからお金が欲しいんだ。

彼女の罪悪感を解きほぐそうとした君の言葉。

「若？ 若？ 最近依頼料が多く入って貯金も出来たと、私に言っただけです。最近依頼料が多く入って貯金も出来たと、私に言っただけです。最近依頼料が多く入って貯金も出来たと、私に言っただけです。」

藪蛇だ……。

流石の天音も、突き刺すような鋭い視線を、君に向けている。

彼女の意思の強さを示す切れ長の目から逸らしながら、君は寄稿本を少々とボソリと呟いた。

「若？」

あ、天音の体調も心配だし早速マッサージをしよう。そうしよう！

君は重ねた右手をゆっくりと引つ張りつつ、離れの方へと向かう。そこなら人も来ない場所かつ、いつ客が来てもいいように綺麗な布団がある。

「……後で詳しい話をお聞かせ願います」

一旦ため息をついて、天音は君の後ろについてくる。

マッサージしたら誤魔化せないかな、と思いながら君は、足を離れまで歩めるのだった。

離れに布団を敷いて天音を横たえた。その後すぐに君は、彼女の体を解きほぐしていった。

彼女の着ている執事服は、すぐに戦闘も行えるように、伸縮自在な生地できている。体にも張り付くようになっていたため、ツボや骨格をすぐに刺激できた。黒い霧の強化も合わさり、コリとよんだ体内の澱みも消えていく。

義手のパワーの弊害か、思ったよりも天音の体は、硬く節々が凝り固まっていた。邪眼により吸収したエネルギーを、義手から放出すると言う本来ない機能をつけているためか、全体的ながらも固く酷い。そう、だから仕方なかったんだ。

ここまで行くと、天音の体調不良を取り除くには、ふうまの秘伝と黒い霧が必要だった。

君の知識から呼び犯される技は、流石はふうまの秘伝とも言うべきか、しっかりと効能を発揮していた。

「はっあ、んっう ♡ わ、わかあ ♡ ふっう、んあゝっ ♡ せ、切ないですう ♡」

血行を良くするついでに、身体の神経も昂らせちゃったぜ。ついでに黒い霧で快感も増幅させちゃったぜ！

……まっつてくれ、そこまで効果はないはずだ。これは天音が溜まってるか、感じやすい体質だからじゃないか。多分そうだ。

自身の言い訳をしっかりと証明しつつ、君はマッサージを続ける。ほとんど解きほぐしたが、もう少し行わないと、すぐに再発しかねない。

天音の背中や腕、足などに君の手が這っていく。

「んっあ ♡ わ、かッ ♡ はっあゝっ ♡ 天音はっあ ♡ んっあ、くっ ♡」

もじもじと黒いスーツに包まれた美尻が悶えていた。もう少し下の部分の布も、明らかに湿っている。

先ほどとは一転して、彼女の目はトロンと目尻が下がり蕩けていた。

紅潮した顔色に荒い息。

普段は切れ長で敵に冷たい視線を向ける天音の瞳。それが餌を欲しがる犬の様に、君に秋波を向けていた。

それなりに経験もあるし、彼女とも何度か愛し合っていた。だから天音の願いはわかる。

コクリと唾を飲み込みつつ、君はそれを意図的に無視。

いや本当に仕方ないんだってば。ちゃんと最後までしないと、さらに悪くなりかねない。

一度行った以上、君は知識通りに施術する。それが彼女のためだと心に刻み、欲望を抑えながら身体全体をさする。

本当に体調を良くするためのマッサージな為、胸や下の口などの性

的な部分は一切触らない。

だがそれが天音には、焦らされていると感じたのだろう。

「うう ♡ んっうゝゝッ ♡」

思いつきり悶える様な喘ぎ声が、天音の口から漏れている。

本邸から離れた離れであり、音も外に聞こえない造りだ。

どんな大声を出しても、本宅にいる皆には聞こえない。

マッサージに悶える声にも、心を揺るがさない様にしながら、君は念入りに行っていた。

一切性的なことを行わない施術。しつくりと行われるマッサージ。

君の意図的ではない……天音にとっては何つとりとした焦らし行為。それは彼女の頭を混乱させたのか、はたまた先ほど金欠の話でも思い出したのか。

背術が終わり君の手がゆっくりと女体から離れた。その瞬間、

「やっアッ！ ♡ わ、若！ ♡ お金っ！ ♡ お金もつと払いますから

！ ♡ 私の体もつと触ってくださいいいっ！ ♡」

絞り出す様な天音の言葉。

いや金なんて貰わなくても、しつかりと行為をするつもりだったんだが……。

ズボンを盛り上げるほど勃起した自身の息子を見つつ、君は彼女の言葉を咀嚼。

お貢ぎ宣言を君は本当に貰えるとは思わない。ただ願いどおりに、天音の体を愛撫していくことにする。

彼女のドマゾの性質を考えて、執事服のボタンを無理やり外して前面を晒す。女性物のズボンも、グイッと力を込めて足の方まで脱がす。半分ほど残して、足がうまく動かせない様にする。

どうにも天音との行為はSスイッチが入る。

だがその方が喜ぶことを君は知っている。そのためスイッチは入れっぱなしにして乱暴に事を行う。

君の手掌よりも大きい美乳を、片手で無理やり掴んだ。そのままもう片方の手を、天音の膣口に入れてかき回す。

「あっひっイッ！ ♡ 若の指入ってっ！ ♡ ひんっ ♡ 胸も気持ちい

いですつ♥ あゝつあゝつ♥」

君の愛撫とほぼ同時に、彼女の薄い桃色の口から喘ぎ声が漏れ出した。

痛みすら発生しかねないほど、乳首とクリトリスを抓る。黒い霧を纏わせた指を、かぎ状にして膣内をこそいでいく。

あまり乱暴な性技だが、それすらもマゾの天音には快感な様だ。

「おおっおゝっ♥ わ、若っ♥ いっくっ♥ いっきますっ♥  
あつあゝあゝつ♥」

プルプルと天音の体が震え出す。絶頂の前段階だ。その瞬間君は両手の指の動きを止めた。

「あつあつあゝっ♥ そ、そんなつあつ♥ うゝうゝうゝっ♥」

絶頂の直前での焦らし攻め。

彼女はこれが好みで、毎回の様に行う行為だった。

そのまま君に、快楽の涙を流しながら、懇願してくるはずである。

今回は違った。

「あつはつああつ♥ い、一万円っ！♥ 若にお支払いしますっ！♥  
一円でっ♥ イかせてください！♥」

あれ、おかしいな。

一瞬冷静な思考が走る。だが、行為の最中にSスイッチを弱めることはしない。

君は懇願？

……懇願を受けて、再度両手を使い、天音の体を責める。

膣内に黒い霧を纏わせた指を入れて、彼女の弱点である粒々触感の部分で、ぐいつと押す。手に柔らかく持てる美乳も、一気に握りつぶす様に絞る。

「あつあゝゝッ！♥ い、いっく！♥ うっんんんっ！♥ 若にお金払ってイっくっ♥ あつひいゝいゝいゝいゝっ！♥」  
外に聞かれたくない言葉と同時に、獣のような絶叫が天音の口元から漏れる。

離れの防音の使用を信じつつ、さらに深く絶頂させる為に君は指を動かし続ける。

「おゝへえゝっつ！♥ いくつ♥ おっおゝおゝ！♥ また  
いいいくつっ！♥ んっおおゝっ！♥ これでまた、わかについっ  
♥ あゝあゝっ！♥ もう一万えっんっんおゝ——おっおおゝお  
ゝおゝっ！♥」  
細めだが筋肉質の天音の身体が、何度も痙攣し続けている。  
それと同時に膣内にある君の指も、キュウキュウと吸い付かれてい  
た。

「~~~~っ、はっあっ♥ あっああ♥ ふっううっくううっ♥」  
絞り出すような声と共に、天音が何度も息を吸って吐く。

何時もより長い深呼吸。その間に君はズボンを脱いでおく。

「い、いつもよりすごいっ♥ これ、夢にまで見たっ♥ わかにお貢  
ぎいっ♥ 癖になりゆううっ♥」

その間に漏れるような言葉は、君の耳に届かなかった。

天音の絶頂下姿と部屋にこもる雌臭で、すでに君の黒い霧を纏う肉  
棒は、ガチガチに勃起済み。

ぺちりと固めの尻肉に、君は肉棒を当てた。

「ふっう……若のオチンポツ♥ はっあっ♥」

熱い吐息と共に彼女は、左のクローム色の義手と右の白い手袋に包  
んだ手で、尻肉を開く。

すくんだ尻穴と鮑のように開いては閉じる、肉色の花卉が君の目に  
映る。

だらだらと留めなく零れる愛液が、君の肉棒を待ち望んでいた。  
くちゆりと君の肉棒を当てる。

「ふっうふううっ♥ ぐ、五万円！♥ 五万円です若のオチンポツ♥

天音のマゾメス肉穴にお入れください！♥ お願いします！♥」

君が腰を突き出す前に、天音が雌色の声で叫ぶ。

……OK。プレイプレイ。

Sスイットと行為中なら、君もそれなりに慣れた女殺し。

セックスした知り合いなら結構いる。

あくまでもそういうプレイだと、自身に言い聞かせて君は、今度こ  
そ腰を突き出した。



ぐちゆりと火傷しそうなほど熱く濡れ絞った膣肉を、君の黒い霧を纏わせた肉棒がかき分けていく。

「おっおっ♥ 若のオチンポツ♥ くっひいゝゝいゝゝ♥ 天音の雌マゾマンコに入ってますううっ♥ あっあゝゝゝゝッ♥」

何時もよりも強い締め付けに、思わずくっつと喉が鳴る。

ギョルリと搾り取るかのような締め付けは、彼女の中が絶頂状態から降りてないことを示していた。

「おっほおおっ♥ い、一番奥に入ってますっ♥ んっんゝおゝっ♥ 子宮に何度もっ♥ おゝっ♥ オチンポ打ち付けられますとっおっ♥ あっおおうっ♥」

彼女の言う通り亀頭の先が、降りてきている子宮口に、何度も当たっている。

くぶくぶと緩い子宮口に、亀頭が入りそうなほどだ。

ぐりぐりと縫るように、天音のお尻が押し付けられる。

願い通りにしてやろうと一気に腰を引っ張り、一息に腰と尻肉が接触するほど打ち付けた。

その勢いのままぐちやりと肉棒が、天音の子宮に潜入。

「おゝっ——くっほおゝおゝおゝおゝ！♥ 私の大事なところっ♥ おゝへっ♥ 弱点にっ♥ おゝっおゝっっ♥ 若の入ってっ♥ んゝっひっ♥ 全部占拠、ぎれてまっずうゝうゝっ！♥ うっひいゝゝいゝっ！♥」

両手でしわになる程シーツを、握りしめながら嬌声を漏らす天音。カラスの濡れ羽色のように光るポニーテールが、汗と共に光っていた。その度に黒い執事服に降りかかっていたいく。

君と天音の体液でぐちよぐちよになり、しわがあちこちに出来ていく。

着衣プレイ特有の淫らな光景を目に映しつつ、ぐいっつと腰を引けば亀頭等共に子宮口が引っ張られる。

「んゝあゝあゝッ！♥ あっへっえええっ！♥」

その後腰を打ち付ければ

「おひっっ！♥ ほおゝおゝおゝおゝっ！♥」

濁音の喘ぎと共に亀頭が、子宮を突き上げる。

すつかりと君の肉棒を咥え込むのが、癖になった天音の子宮。

苦痛処か快感が発生して、既に君のおもちゃと化していた。

「わかあああつ！♥ んぎつ！♥ さつきからイクのがつ！♥ ん  
おゝつおつ！♥ 止まりませんんん！♥ あゝつはあああゝん  
っ！♥」

天音の告白に君は、興味本位で何回絶頂したのか訊いてみる。

「んひつつ♥ じゅつ♥ 10回つ♥ 10万円ですつううう！♥  
あゝつあゝつ♥ まったイキますつ！♥ おつつ、オゝオゝオゝオ  
ゝオゝツツツ！♥」  
ぷるぷると体を震わせると、

「こゝ、これで11回つ♥ 11万ですうつ♥ くひつつ♥」

雌の笑い声と共に君の肉棒が、締め付けられる。

ぞくりつと背筋を這う寒気のような物を無視して、君は腰を動かし続ける。

既に何度も絶頂した膣肉による激しい蠕動運動で、君の精液が駆け上っているのを感じていた。

「はっあ、ふつくうゝうゝうゝつ♥ 中で若のオチンポツ♥ あっ  
はっ♥ 膨らんでますねっえ♥ んっんゝんゝんっ♥」

君の肉棒が精液を吐き出しそうなのを感じ取った、天音が首を君の方に向けた。

陶醉と快楽で蕩けた空色の瞳と目が合う。

ぞくりつと先ほどと同様の寒気が君を襲う。

あまりに快感に塗りつぶされて、ブルーサファイアの瞳の奥に、ハートマークを幻視する。空色と合わさり、どこまでも深淵に引きずり込まれそうだった。

Sはスレイブ。Mはマスター。

どこかで聞いたような言葉が、君の脳内に一瞬走った。

「あっはっ♥ せ、精液っ♥ おゝっ♥ 若のザーメン！っ♥  
じゅつうゝっ……15万円です！♥ くひつつ♥ 天音のマゾ肉子宮  
に恵んでください！♥ いゝっひいゝんゝんっ！♥」

既に君を置き去りにした快樂に塗れた天音の言葉。

既に肉棒を駆け巡る精液は、君の意志で止まることはなかった。

彼女の言葉のすぐあと、君の出るといふ言葉と共に、黒い霧を纏う白濁液が天音の子宮内で踊る。

「んんんんっおゝゝゝっ！♥ 若のっおっ ♥ おっおゝおゝおゝ  
っ！♥ 15万円の雄液っ！♥ あッ——天音の中に入つてま  
すっ！♥ おゝっ！♥ 一緒に私も…いゝっぐっ、いゝっぐぐう  
うゝうゝうゝうゝうゝっ！♥」

貢ぎ宣言と絶頂の嬌声が、離れ中に響く。外に聞こえないか心配になる程の桃色の声が、君の脳内を痺れさせる。

同時に君の腰の隣でしわくちやになつた黒ズボンと共に、彼女の両足がおり曲がり足指がピンツと伸ばされている。そのまま体全体と同様に痙攣していった

黒い霧と共に白濁流を吐き出す度に、君の肉棒を乳牛のように天音の膣肉が搾り取ってくる。

ぎゆるぎゆると絡みついてきて、最後まで搾り取ろうとしていた。  
「あゝっくくっくっ ♥ んゝいゝいゝいゝっ！♥ まだっでっ  
てっ！♥ んっあゝっ！♥ イクの止まりませんっ！♥ ン〃オ  
ッオ〃ッ！♥ 脳みそ融けそうでっすっうっ ♥ んんっあゝんっ  
ひいゝいゝっ ♥ 目の前がまつしろについつ ♥ なッア——ン〃  
ン〃ン〃ン〃ン〃ン〃ツツツ！♥」

皴になつた手の付根まで着ている、汗としわでめちやくちやになつた執事服。その先にクローム色の義手と白い手袋を着た手。どちらもシートを思いつき握りしめていた。

激しい快感を逃すためか、天音はそのまま顔を枕に押し付けていた。くぐもつた声から彼女は枕を噛んでいるようだ。

金玉でぐつぐつ煮られた精液排出も、終わりを迎えだす。もう肉棒に残つてないと言えるくらいに吐き出した。

同時に伸びていた天音の足が、ぱたんツと力なく布団に落ちていった。

「ふっうっくくっ ♥ ふへへっ ♥ もっう駄目でっす ♥ この快

感っ♡ お貢ぎ快樂っ♡ 絶対に忘れられませんっ♡ んゝゝゝ  
くっ♡」

ふるりふるりと軽く痙攣する体、共に天音が言葉を漏らす。

勘弁してほしいと思いつつながら、ペしりつと目の前の尻肉を叩いた。

「んゝんゝっ♡んゝっひっ♡ またイッテしまいましたッアっ♡  
これでまたっあっ♡ あはっっ♡」

えへへと彼女は笑いながら、陶醉した笑みを君に向けるのだった。

「それでは、若！ お約束通り絶頂分の13万円。セックスとお射精  
代で20万。マッサージとおさわり代で一万。全部で34万円です  
ね！ どうぞ！」

天音がつやつやとした肌色と顔じゅうの笑みを浮かべ、君に万札を  
押し付けてきた。

え、まって？ いきなり万札をわっとな押し付けるのは、ちよつと  
待つてくれないか！

君は手に持った万札の量のあまり、首をぶんぶん横に振る。

「駄目です！ ふうまの棟梁たるもの、一度結んだ契約はしっかりと  
遵守しませんと！」

君に万札をぐいぐいと押し付けながら、天音は言葉を発する。

そういう問題なのかという思考と、手の中にあるあまりの大金で、  
君は混乱していた。

「体の不調もしつかりと取れました。若のお陰です。だからこれは正  
当な報酬ですよ」

どうやら返すことはできないらしい。天音の笑顔に負けて君は、  
解ったと手にある大金を懐に入れる。

「そうです。ですから」

天音が君の耳に口を近づけた。

「また、お願いしますね」

発情したような声色の言葉に、ゾクリツとしたものが君の背筋を  
走った。

……おい、まで。こつそり黒いクレジットカードも、ポケットにいれようとするんじゃない。

軽い攻防の後、天音は残念そうなため息を吐いて、離れから出て行った。

それを見送り君は大金を入れたポツケに触れる。

これを君の好きに使うのは違うんじゃないか？

とりあえず天音の助けになる形で使おうと思いつつ、君は離れから出て行く。

……この時君は重大なミスを犯していた。

この時のプレイの事を、誰にも言わないように、天音に命令しなかった事だ。

誰が思うだろう。似たような性癖が対魔忍……それどころか米連や魔族にもいたのである。……多くいたのである。……大変多く。

なにより天音との快樂に堕とした行為が、同じ趣向のグループに共有する事。

理想の御主人様の行動をしたことで、大々的に巻き込まれるなんてこと——この時の君には思いもよらなかったのである。

## 2話（井河アサギと井河さくら）

対魔忍の卵たちが通う五車学園。

君も在籍している学校であり、奥底には総司令部も隠されている。君としても、学校だけではなく任務として通う事がある縁深い場所だ。

そんな場所で君は今、校長室に居た。

ゆらゆら揺れる椅子に座りながら、口に自家製シガレットを咥えて、君は目の前にあるパソコンにデータを入力していた。

独立遊撃隊隊長かつ特務中隊隊長である君としては、様々な情報に任務内容、隊員の能力などを把握する必要がある。

全て今後の作戦及び現地での状況把握に必要な物だ。

くつくつと痛みを発する胃と眠気を訴える脳を無視して、ひたすらに業務を進めていく。

「……っ♡」

ぐつと体重をかけると、またくらくら揺れる椅子。君は不満を訴えるように、右手を下に向けて振った。

ピシツと肉を叩く音が聞こえる。

「あっん♡ っ、ごめんなさい♡ ふうま君 しつかりと支えるわ♡」  
甘い泣き声と共に今度は、ぐつと君の尻の下の背中に力が込められた。

今度は揺れない。右の方にある財布から、1000円ほど音を立てて取り出す。

「あっはあ♡」

逃避するように、口元にある短くなったシガレットを見る。左手で掴むと、灰皿に灰を落とす。そのまま上にある舌ペロに火を押し付けた。

「~~~~っあ♡ しつかり火消しに使ってねー♡ ふうまくん♡」

蕩けるような嬌声と共に、火の消えたシガレットを口で灰皿に墮とする少女。

その胸元置かれている1000円を取って、机の上に放る。

「くっひ♥」

そのままカチカチとパソコンに打つ作業に戻る。

このまま現実逃避を続けたら駄目か？ 仕事に逃げちゃ駄目か？

駄目だろうと君の冷静な部分が囁く。

胸元にあるプレイ用の薬草シガレットを取り出してまた火をつける。そのまま煙を吸い込んで吐いた。

知り合いの錬金術が売っているSMプレイ用の薬草シガレット。ストレス軽減効果があり、火も見せかけで低温となっている。

若干頭と胃の痛みが無くなったのを確認して、君は脳内を巡らせる。

どういう状況でなぜそうなったのか。

ちらりと下を見て右を見た。

君の押井を受け止める若干筋肉質な皴一つ無い真っ白な背中。後頭部に黒髪を纏めて、背中からもゆらゆら揺れる真っ白な巨峰がよく見える。ちらりと振り返るように首をまげて、君をオパールのような瞳で見つめて来る井河アサギ。隣にスーツがきちんと折りたたまれている。

その後左の方へ視線を向ける。

君と同程度の少女であり、アサギより若干小さいが十分に大きな白色の巨乳にガラスの灰皿を上手く載せている。未完のようなオレンジ色の髪をショークットにまとめていた。その下にはブルートパーズのようなくりくりした目が濡れている。どこかアサギと似ている所があるのは別次元から来た現在よりも若い井河さくらだ。隣に对魔スーツが別次元の姉であり、君の椅子になっているアサギと同様に綺麗に折りたたまれており、姉妹の血の繋がりを思わせた。

君に向ける表情が陶醉した笑みをさくらは向けていた。尻の下にあるアサギの背中もしつとりと汗をかいている。

君の鼻には部屋中に充満する雌の臭い。

甘酸っぱい香りがプンプンと刺激してくる。

起立しエレクトトした肉棒と入っているSスイッチの思考。シクシ

クと胃からくる痛みによる冷静な思索。

薬草シガレットによつて軽減される痛みと共に、分厚いカーテンの向こうでサンサンと運動場を照らす太陽の事を考えつつ、君は椅子になつてゐるアサギに体重をかける。

「ひっああ♥ くっう♥」

甘い声を上げるだけで、彼女は一切堪えている様子はなかった。

最強の対魔忍の呼び名に相応しく、君の体重や押す力如きでは、アサギの姿勢を崩すことはない。ただ時折揺れたり形が崩れたりするのは、君からの痛みという甘い刺激を欲している時だけだ。

君に向かつて灰皿を持ち舌を出して顔を向けているさくらも、低温の熱量でダメージを受けることなどない。ただ君から与えられる刺激が快感となつてゐるのがよくわかる。

時折聞こえる分厚いカーテンの向こうで、君と同じ歳の少年少女達が汗を流す声を聞きながら、ぼんやり朝のことを思い出す。

二つの部隊の隊長である君として、騙して悪いが仕事なんぞというオークを蹴散らし、よくやつてくれました——これでもう用済みです、という依頼主をケジメしてきた。

大分依頼に対する審美眼が使われた為、アサギと校長室でよく打ち合わせをする事になつてゐる。

今日も今後他の対魔忍に振り分けする依頼の相談かと思つて校長室に集まつてゐた。

そこにはアサギと君の同居人でもある若さくらが立つてゐた。あれよあれよと言う間に、二人を椅子と灰皿として使うことになつてゐた。

Sスイッチを入れられた君は、二人の貢ぎマゾメス達が悦ぶ行動をしつかり行つてしまふ。

またわざとくらりとアサギ椅子が揺れたのを確認。

100均の椅子はやっぱり駄目だなと言いながら、黒いスカートに包まれた尻肉を叩いた。

「いつあん♥ そんな事言わないでっえ♥ んう♥ しつかり背筋を伸ばすから♥ ひん♥」



甘えた声を出す君の椅子になっっているアサギ。返事代わりに君はもう一回ぷりぷりの尻を叩いておく。

パチンツという音と共に君が座っている彼女の背筋が震える。

かちりと時計が動く音がした為、君はまた目の前にあるアサギの財布から、100円硬貨を音を立てて取り出す。

「はっあ、ふぁ♥」

貢ぎマゾメス特有の甘ったるい声が、君の脳内の理性を融かしてくる。

既に君が履いているズボンの下部分は、アサギの汗でしっとり濡れている。

若干気持ち悪いが、もう少しで目の前にある仕事も終わる。

君は口にある薬草シガレットをギリギリまで吸う。もう吸えないと言ったところまで行く、とようやくした灰皿の出番だ。

美乳の上に置かれた灰皿に灰を落として、べえっとさくらが出している、淫紋が刻印された舌で火を消した。

「ひやつあん♥ あひゅつう♥ んひつ♥」

そのまま今度はさくらの財布から100円を取り出す。取り出した指で、口から出されているさくらのベロを掴む。

100円にしては使い勝手がいいな、と道具を評価する声色で言いながら、ぐりぐりと弄った。

「ひやつあ♥ 100均灰皿舌べろ♥ あっ♥ ふうまくんのっお♥

んきゅっ♥ 指の味♥ おっ♥ おぼえちやつうっ♥」

「あっあ、はっあ♥ う、ううっ♥」

尻の下から甘く羨ましそうな声が、さくらの嬌声と共に君の耳に響いた。

目の前の仕事もほとんど終わっている。

データを保存した君は、さくらの舌を弄っているとは別の手。左の方の掌をパソコンから君の尻の下にある背中に移動。

Sスイッチの入って君は、普段なら絶対にやらないようなことすら行う。なぜならそれは、彼女達雌豚が喜ぶ事だと知っているからだ。

邪眼・魔門を操作。ストックから透過能力を選ぶ。

ぐちやりとスライムに手を入れるかのように、君の手がアサギの真つ白な背中から侵入。

「お、っ、ひっあ♥ふ、ふうま君?♥んっぎっいっ♥な、何をツオ♥オオッ♥」

自身の体内に不躰に侵入する感覚すら、甘く嬌声を上げるアサギ。抗議の言葉だが、明らかに声色は甘く融けていた。

「ふっあっ♥そんなこともっ♥んっくっうっ♥できるんだあっ♥あんっ♥」

別次元だが、自身の姉のような存在の体に、男の掌を突っ込まれるという異常な光景。本来のさくらなら透かさず、アサギを助ける行動をとる。だが、今は性行為の最中。それもプレイであり。君がアサギを害する事や完全に嫌がるようなことはしない、と言う信頼の証でもある。

スライムをかき回すような特有の感触を楽しみながら、透過した手でアサギの体内で回す。

異質な快感に悶えるアサギに向かって、君は冷たい視線を送る。

さつきから変に揺れるこの100均の椅子、安いしいっそ新しいのに取り替えるか、とすっかり聞こえるように言った。

その言葉に君の椅子になっている彼女は、首と肩を精一杯曲げて君の方に薄緑色の瞳を向ける。

「あっうっ♥まってええ♥100円じゃないのっ♥おっうっ♥それ以上の価値はあるからっ♥いぎっ♥い、10,000円の価値はあるからっあっ!♥んっうっうっ!♥」

アサギの喘ぎ声まじりの懇願を受けて、君は一旦手を引き抜く。言われた通りに目の前のお財布から、10,000円を取り出す。そのお金をアサギの目の前で振りながら、無造作にポケットの中へ入れる。

「んっあっ!♥駄目!♥あ、ひっ!♥これいっくっ!♥あ、あ、っ!♥いっちやううっ♥お貢ぎ快樂でっえっ♥いっつ——ああああん♥ん♥!♥」

「ふっいっ♥ひたひっばられっへっ♥へひっ♥お姉ちゃんと

いっひよっについっ ♥ おっっ ♥ ひっいくっうううっ うっ  
っっ! ♥」

アサギが体を震わせるのと同様に、君が右手で舌を引っ張っていた  
さくらも打ち震わせた。

二人の快感にまみれた二重奏が校長室に響き渡る。

絶頂の快感が体を襲うが、アサギは君の椅子としての役割を、さく  
らは灰皿を落とさないように必死だ。

「ん〜ふっうっ ♥ これ、やっぱりすごっお ♥」

「んっひっ ♥ 舌だけで言っちゃったあっ ♥」

息荒く体を痙攣させながら、二人は眩く。

アサギとさくらが落ち着くのを待って、君は立ち上がる。

二人の前にわざと乱暴に、彼女達の財布を投げ捨てた。

ズボンを脱いで黒い霧を纏わせた肉棒を出す。

「んっくっ ♥ あっ ♥」

床に正座して胸に灰皿を載せているさくらの喉がなる。

君は四つん這いのアサギと、正座したままのさくらの間に、自身の  
体を入れる。

鍛え上げられた背筋と程よく肉が乗り、プリンツと揺れるアサギの  
お尻に、自身の肉棒を乗せた。

「あっんっ ♥ 熱いのねっ ♥ やっあん ♥」

ため息のような熱を持った眩きが、彼女の口元から漏れる。

そのままパチンツパチンツと何度も音を立てて、アサギの尻肉を肉  
棒で叩く。

焦らすような被虐の快感を、アサギは受けている。

君も汗とムンツと雌のの発情臭が鼻いっぱいになり、目の前には  
美人メス校長の膣口がすぐにあるという状況で、肉棒をたたき込むの  
を我慢している。

その方が目の前で君の肉棒を心待ちにして、尻肉を振り出している  
アサギが、喜ぶ事を知っているからだ。

まさしくSがスレイブでMがマスターな関係だな、と君の熱に浮か  
れていない裏の思考がささやいた。

今なお慣れない冷静な思考とは裏腹に、Sスイッチの入っている君はしっかりとマゾメス達が喜ぶ行動を行なっていく。

グイツと両手でアサギの柔らかい肉と、その奥にある鍛えられた筋肉の感触が伝わってくる尻肉を掴む。

そのまま君は彼女の耳に聞こえるように、10万円で犯してやると囁いた。

「うっひっ ♡ そ、それでお願いつ ♡ はっあんっ ♡ お金まだ財布にあるからっ ♡ それでおかしくてっえっ ♡ んつきゅっ ♡」

くしやりとアサギは、目の前にある自身の財布から、万札を握り締めた。そのまま背後にいる君の方に四つん這いの姿勢のまま、手の中にあるお金を渡そうと腕を伸ばす。

君にとつては大金だ。

シクシクと胃が罪悪感やら何やらで痛みが走る。

神経の訴えを無視して、君は目の前でフルフル揺れるアサギの手から、乱暴に10万円を抜き取った。

そのまま机に置くと、固定したアサギの尻肉に目掛けて、腰を突き出す。

黒い霧を纏う君の肉棒が融けそうなほど、熱くきつくしやぶつてくる肉穴を進んでいった。

「おっひっいいいっ ♡ ふうま君のオチンポっ ♡ んっおおっ ♡ はいつてきたあっ ♡ んっぐ——ふ、ふかいっ ♡ おっおっううっ ♡」

「ああ、お姉ちゃんっ ♡ いいなあっ ♡ んっくうっ ♡」

君の腰がアサギの尻肉に当たる。ぱつんと揺れて、汗が飛び散る。背後からはさくらの羨ましそうな声が聞こえた。

ガツチリ固定した尻肉を突き上げるように、何度も腰を動かしている。

その度に亀頭が彼女の子宮口を突き上げていた。

「おおっ——かっひゅっ ♡ オチンポでっ ♡ ひっうっ ♡ 内臓までっ ♡ おっ ♡ 犯されているみたいっ ♡ いっひっうっ ♡ 頭がっ ♡ あっはあっ ♡ とけてしまっそうよっおっ ♡」

「おおっほっおっ♡」

ガクガクと汗に塗れて、白く光るアサギの背中が震える。君の肉棒の先をキュウキュウせがむように、彼女の子宮口が吸い付いてくる。シヤフトの部分も膣壁が激しく蠕動運動を行い締まった。

背筋に走る快感を逃すため、君はお尻の穴に力を込める。

美女校長であり、尊敬する女リーダーを犯すような淫らな光景と状況が、君の脳内を痺れさせてくる。

「んっんっ♡ 私もおっ♡ ねっ♡」

その瞬間君のお尻に触れるものがいた。

「ねっえふうまくんっ♡ 5千円払うから♡ お尻の穴舐めさせてっえ♡」

♡ んっべええっ♡」

砂糖のように甘くねだるような声色で、さくらが君に願う。

大金を積んで娼婦にようやく行くってもらいかもしれないプレイ。

それを知り合いであり普段は快活に笑う美少女が、君のアナルを舐めるために希うように、お金まで差し出している。

背筋が泡立つほど雄の欲望や征服欲求が燃える。

だが同時にここでゲスに落ちたら見捨てられるよな、と言う冷静な裏の思考がささやく。

冷静な思考と燃え盛る欲望。

色んな意味で性癖が折れ曲がりそうになるのを耐えて、Sスイッチを入れた心が体を動かす。

君の太ももの横からフルフル震えながら、出されている5千円札を奪うように取る。そのお札を取った方の右手で君は、さくらのオレンジ色の髪の毛を握り、お尻の穴に押し付けた。

「んっぶひゅっ♡ んっえく……れっろ♡ 舐めるだけでっ♡」

れっぶっ♡ 感じひゃうっ♡ んっちゅれっ♡ 淫乱舌で奇麗にす

るねっ♡ べろれるれりゅっ♡」

彼女の高い鼻が、お尻の隙間に当たる程密着させても、嬉しそうに話す。そのまま君の黒い霧を纏わせた肛門を、丁寧に舐めて来る。

皺の一筋一筋をゆつくりと舌尖を尖らせて、舐められていく。

背筋に一瞬電流が走ったかと思うような快感が、君の本能を疼かせ

て来た。

「くっひっお♥ 今中でふうま君のオチンポっ♥ おっほおっ♥ 大きくなつたわあっ♥ んひお♥おっ♥ さくらのアナル舐めでっ♥ くっん♥っ♥ 気持ちよくなつてるみたいねっ♥ あっはっ、んおおっ!♥」

「んふっふッ♥ れっううっ♥ いっぱい舐めるからね〜♥ んっちゅっりゅっ♥ お金受け取ってくれたんだから♥ れりゅぶっ♥ ふやけるくらい舐めてあげるっ♥ れっう、うんお♥っひっっ♥」

首と肩をまげて挑発的な笑みを君に向けて、膣肉で君の肉棒をぎゅるりっつと締めて来たアサギ。後ろから笑うような声を上げて、ぐりぐりと舌先を肛門の中に潜らせてきたさくら。

別の時空とは言え、姉妹のような関係の二人のコンビネーションは、君を追い詰めて来る。

君に対して挑発的な二人。だが、君に秋波を送るアサギのオパールの瞳の奥には、期待するような被虐の色が垣間見える。グチヨグチヨとアサギの膣口から聞こえる水音とは別に、君の後ろから隠口をかき混ぜる音色が聞こえる。

さくらがアナル舐めと同時に、自身の股の口を弄っている音だ。

君からの反撃を期待する二人のマゾメスに、君はしつかりと期待に答える。

膣内を突き上げる肉棒でアサギの弱い箇所である、子宮口の上の方を傘で引っ掛ける。肛門の中に潜入しているさくらの淫紋が描かれた舌を、思いつきり締め付けた。

「くっひっう——おお♥おっ♥ 駄目っ!♥ おっっ!♥  
そこ弱いのおっ!♥ あっっあっっ!♥ 頭がっ!♥ はひっ!  
♥ 真っ白にっいっ!♥ ん♥おっっお♥おっ!♥」  
「あっひい♥い♥う♥舌締めないでえっ♥ れっう、ん♥うっ♥  
淫紋でっ♥ ン♥お♥おっ♥ 敏感になつてるからっあっ♥  
れりゅりゅぶっ——おっひい♥い♥い♥っ!♥」

君に視線を送っていたアサギの顔が、耐えきれずに床に落ちる。グリグリと腸内まで舐めていた舌が、震えていた。

君の肉棒もアサギの膣口で、一気に締め付けられる。体中に快感の電流が走ったかと思うと、肉棒から黒い霧を纏う精液が迸った。

「ひいいんんんっっ！♥ ザーメンツ！♥ きったつあゝあゝっ！♥ 中にどぴゅどぴゅっ♥ おっほひっ！♥ 熱いのでっっ♥ んっあ——いっくいっくいっ っぐううううううううっっ！♥」

「れりゆりゆ…んっぶ、ひいっ！♥ 舌潰されちゃっっ！♥ んおっ♥ オマンコ弄りながらツア！♥ ひっうっ！♥ あくめきちやつうよっおっ♥ れうりゆ、あゝっ——んっおゝほおゝおゝおゝおゝっっ！♥」

君の前後から二人の美女のアクメ声が、木霊のように聞こえる。

ガリガリと床をアサギの爪が引つ掻いて、口から唾液がこぼれていく。君の肉棒を激しい蠕動運動で、締め付ける膣肉も、ブシユツと透明な藍液が迸る。

君の後ろでは肛門に舌を突っ込みながら、マンコ弄りをしていたさくからも快感に顔を歪めていた。膣口からは何度も床に向かって、潮を吹き出している。

君も大量の白濁液を、アサギの子宮口に鬼頭を押し付けながら、吐き出していった。

「んおゝっ、おおゝっおゝおゝっ！♥ 子宮の中でっえゝっえゝゝっひっ♥ ふうま君のザーメンっ♥ んっぐぎゅっ！♥ 暴れるのっっ！♥ おゝっっ、おゝっ！♥ これまたくっるっうっ！♥ うゝっひいゝいゝいゝいゝんんんっ！♥」

「んれっるっぶ、くひゅっうゝっ！♥ 私も淫乱舌何度もっ！♥ んおゝっ！♥ 挟まれてっえっ♥ んれう、あっあ…あゝあゝあゝあゝあゝあゝっっ！♥」

深い絶頂にアサギもさくらは何度も、獣のような絶叫を上げていく。防音しているとはいえ、外ではまだ学生が授業をしているので、聞こえないか心配になる程だった。

そんな状況すら彼女達に取っては、快楽を増す事になっているようだ。





嘲るように深いため息を吐いて、さくらの1万円を奪う。手の中に残っていた5千円と共に床に落とした。

「ふっくつきゅ、んっ♡」

乱雑に扱われるお札を自身に見立ててるのか。さくらの口元から甘い嬌声が零れる。

被虐の味にさくらの白い背筋が震えた。その様子を見ながら君は無造作に足を上げて、裸土下座の状態にあるさくらの頭をふんづけた。

「んっうっくっつ♡」

普通なら激怒して殺されかねない。だがさくらはお尻の方からプシュツと、潮を経て床を湯ごしている。明らかに君の足で踏まれたことにより、快感を感じていた。

その間に君は、彼女のお尻の方に回る。

土下座をしたままの尻の形。くすんだ色合いの下に、透明な愛液を垂れ流す隠口が見えた。

パクパクと淫らに開閉する肉の花弁に、君は無造作に挿入

「んっひ、うっうっ♡ やったあっ♡ あっはっあんっ♡ ふ  
うまくんのっおっ♡ おっひっ♡ オチンチンっ♡ ンっツオっツ  
♡ 入ってきたあっ♡ んつきゅっつ、くっくっ♡」

入れただけで頭を上げようとするさくらの後頭部を、君は手を伸ばして押す。彼女の額がまた床に張り付く。

その間に君たちのセックスを、体をお起こして眺めているアサギを呼ぶ。

「わ、わかったわっ♡ ふうま君っ♡ んっふっう♡」

君の指示にコクリと頷きながら、アサギが近づいてきた。

彼女は君に土下座の体制に戻されたさくらの後頭部の上に乗る。先程吐き出した君の精液を垂れ流すアサギの膣口が、さくらのオレンジ色の髪の毛を汚していった。

「んっうっくっくっ♡ こ、これえっ♡ おおっっほっ♡ お姉ちゃ  
んのっ♡ いっついっ♡ 椅子になってるっうっ♡ くっひっい  
っいっいっ♡」

「あつはつあつんぐんぐつ♡ ごめんなさいねつ♡ えぐつひつ♡ さくらつ♡ 今ふうま君にっ♡ おっつ♡ さからえないのつおつ♡ ふっおっおっ♡」  
「うううつ♡ うつんぐつ♡ ふうまくんの鬼畜つうつ♡ あつ、やんぐつ♡ お尻叩くサービスまでえつ♡ ンツオツオッ♡ ツ♡」  
「んつんぐんぐつ♡ おっぱい鷲掴みにしてつ♡ あつひつ、あぐんぐつ♡ 乳首カリカリっ♡ おっ、おっ♡ 体痺れちやつウつ♡ あつひついいいいっ♡」

被虐の快感に体を震わせる、二人のドM姉妹を、君は攻めていく。パンパンと君の腰でさくらの尻を叩くように、肉棒で膣内を突く。鬼頭が何度も一番奥底に当たる。

目の前でプルプル震えるアサギの胸。その中心にある突起を指で挟む。彼女の口から伸ばせされたベロを君は軽く噛む。

「んっおっほっおお♡ ふうまくんの♡ あぐんぐつ♡ オチンチンでっ♡ えっあぐつ♡ 子宮いじめられてるつうつ♡ んつううううううっ♡」  
「んぐっあぐつ、おっつ♡ 乳首弄りながらっ♡ あつぐつ、ひつひた噛まないへっえっ♡ んっひつ♡ 分かってるわっ♡ あぐつ♡ ちゃんと払ううつ♡ あつあぐぐぐつ！♡」

じつとアサギの涙に濡れた目と会う。

彼女は体を震わせながら腕を伸ばして、自身の財布を拾い上げた。そのまま財布から何枚かお札を抜き出して、アサギは自身の膨らんだ胸の間に差し込んだ。

「んっ、んぐいぐつ！♡ これ受け取ってつ！♡ あはつ！♡ 絶頂代金っ！♡ ひっひっ！♡ お貢ぎっ！♡ ふつうつ！♡ 奪い取ってえっ！♡ くっひっつ！♡」  
「んっおっ！♡ おっつ！♡ か、片手間にっ！♡ ンおっつ！♡ 犯されてるつうつ！♡ やっあつ！♡ こんな惨めなのにつ！♡ ひいんぐつ！♡ き、気持ちいいいよっおっ！♡ んううううううううっ！♡」

アサギの体をあいぶしながらさくらの膣内を肉棒で責め立てる。

それが蔑ろにされているとでも感じたのか、さくらは惨めな快感を味わっていた。

ギョルリと巻き取るように君の肉棒が膣肉で締め付けられた。

被虐の快感で何度も軽い絶頂をしているにが分かる。

潰されそうなほど何度も締め付けてくる肉襞に君も直ぐに吐き出しそうだった

「おっっおっっほっおっおっっ！　これいっつくっ！　あっあっっ！　直ぐにいっちゃっうっ！　ほっおっっ！　お願いっ！　おっっんっ！　中出し代金はらうからっ！　んっひっおっっ！　出してえっ！　んっっあっあっあっっ」

「あっああんんっ！　ふっひっっ　さつきからッ　あんっ　さくらの髪で　あっあっ　オマンコ引っ掻かれてえっ　あっひっ　ふっ、うまくんっ　あっんっ　ち、くびっ　いっ　噛みながらっ　あっ　とってえっ　んんんんんんっ」

先程絶頂した所為だろう。二人の雌豚はすぐに絶頂しそうなようだ。

君も同調するように、一気に奥底までつく。そのまま白濁流をが肉棒を駆け上がる。同時にアサギの乳首を噛んで、胸の中にあるお金を勢いをつけて奪い取る。

背筋が溶けそうな快感が体中を走りながら、さくらのお尻に恥骨を張り付けて、黒い霧を纏う雄の欲望を放出していった。

「んっおっおっおっ！　ふうまくんっのっっ！　おっほっおっっ！　ザーメンっ！　んっほっお　きだあああっ！　あっっあっっ！　あちゅくてっ！　んっっひっっいっっ！　子宮壊れっちやううっ！　んっおほおっおっおっおっおっ！

「あっあ　あっっ！　ちくびとれちやううっ！　んっっんっっ！　また来るっ！　おっっおおお！　駄目な快感っ！　ほっおお　おっっ！　墜ちる快樂ッウっ！　んっっひっひっ！　ぜくんぶっ！　ふうま君に捧げるっ！　おっほお　っ！

お貢ぎ快感つでっえ——イッグっううううううっ！♥」

君が精液を出したと同時に、アサギとさくらが獣のような絶叫を上げた。部屋中にアクメ声の二重奏が奏でられる。

君の肉棒が牛乳を絞るように、思いつきり締め付けられる。目の前のアサギは、舌を伸ばしながら顔をアクメ面に歪めていた。

背中を反り返りながら、天井に向かってさくらは赤い舌を伸ばして、快感に打ち震えている。

汗に濡れた乳首を噛み巨乳を握りしめながら、君はなおも出る白濁液を流し込んでいく。

「おっっひいっいっいっんっっ！♥ イッてるのについっ！♥

あっあっあっっ！♥ まだ出てっ！♥ りゅっうっっ！♥ あ

っあっくく、イキながらっ！♥ まっあっっ！♥ また、イイツ

クウツ！♥ んおっほっお、ンおおおおお！♥」

「んっおひっうっうっっ！♥ 乳首噛まれてっえっ！♥ あっはああ

んっっ！♥ 胸も潰されてるのにツイっ！♥ っいっいっいっっ！

♥ わたしまだいっくっ！♥ おっおっおっおっ！♥ イッツ

グツ！♥ あっあっあっあっあっ！♥」

シンクろするように二人は、イキ声を吐き出しながら、身体中を痙攣させていた。

裸土下座少女のオレンジ色の髪を汚すように、アサギの膣口からは潮が噴き出ている。さくらも床と君の肉の根本に潮を撒きながら、土下座の態勢で打ち震えていた。

長い射精の終わりと共に君は、口をアサギの乳首から離れた。同時に肉棒もさくらの膣口から抜き取る。

「はっあっ♥ あっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ」

アサギはまた意識を飛ばしてさくらの背中に倒れていく。

「んっおっ♥ おっくくくっ♥ おおおっ——おっっ♥」

さくらも無言で受け止めていた。

声にならない音を口元から零して、ただ二人の美女は重なりながら、痙攣し続けている。

折り重なる二人のメス肉といういんびな光景。アサギもさくらも、言葉にならない声を口元から漏らして意識無く呻く。

絶頂の波から降りてこない二人の裸の美女を眺めながら、君は後始末に頭を悩ませる。

この後アサギとさくらのコンビネーションお貢ぎ攻勢に、頭痛が発生するほど悩むことなど、君は知らないのであった。

### 3話（神村舞華と上月佐那）

居酒屋さな。

先輩である上月佐那が営む和風建築の飲み屋で、五車町では結構人気なお店だ。

普段は大いに飲んで騒がしい店内だが、すでに閉店の時間が過ぎている。

中には君と二人の美女だけ残っていた。

椅子に座りスマホを操作している君の両隣にいる。

右には色素の薄い髪を短くまとめ、その下にある三白眼の中にラピスラズリのような瞳を持つ女性。大胆に背中から腰まで開いた黒いドレスを、君の掌にちょうどいい大きさの胸が膨らませている。小麦色の褐色の肌に胸と股の部分で、紐のような跡が元の白い肌を残している。大事な箇所以外透けている為、ブラジャーもパンツも着ていないのが見えている上月佐那。

左には赤いジャケットの下に縞々模様のTシャツ。一か所だけボタンを留めて、スイカより大きい胸を支える黒いビキニのようなブラと臍が丸見えだ。スカートも短く太腿から下の足を黒いストッキングで隠している。炎のような髪をお尻まで伸ばし、君を気の強そうな目尻に、アメジストのような瞳で見つめてくる神村舞華。

二人とも君がスマホゲームで、ガチャを引く姿を楽しそうに見ている、

普段はもっぱら箱機体のゲームをしている君だが、知り合いの女性達に勧められて始めたゲーム。

友人との協力プレイが可能で、キャラやストーリーが面白い。友人であるゆきかぜがやっている有名なゲーム配信も、お勧めして大ヒットしていた。

そのゲームの限定キャラ目当てに、君はガチャを引いている。

普段は冷静に撤退を選ぶレベルで引きが悪い。だが先ほどまで飲んで騒いでいた影響が残っているせいだろう。

さやとまいかに勧められて飲んだ飲料を飲んだ後も、どこか気持ち

よく頭がふわふわしていた。

「お、また外れだ」

「出ないときは出ないからなー」

彼女達という通り沼っている。

その所為か、何時もは辞めるタイミングでも、後追いするレベルで引く。

残っていたガチャ分の石も全て消える。それでも目的のキャラは出なかった。

君は深くため息を吐く。これ以上引くわけにもいかない。

「あー、残念だったな」

君の腕にぷよぷよ柔らかいスライムのような巨乳が当たるのも気にせず、舞華がスマホを覗き込んでいる。彼女の言葉にがつくしと肩を下げながら君は嘆く。

「今回のキャラ結構強いからな。ついてるキャラストも面白いしょ」

言わないでくれと君は首を横に振る。これ以上課金したら、絶対に時子に怒られる。

君の泣きごとを聞いた二人の美女達は、一瞬視線を交わらせた。にんまりと君の見えないところで、淫靡な笑みを浮かべる。

「じゃあよ♥ ふうま♥ 一個提案があるだがな♥」

君の両方の太腿に、細い褐色の手と真っ白な掌が当たる。さわさわと触れられ、ゾクリと背筋が震える。

「俺らから魅力的な考えがあるぜ♥ んえっ♥」

両耳にれるりと熱い舌が張って来た。寒気に近く、だが脳内が痺れる物が背中に走った。

「れゆう♥ 貸し切りパーティータイムって形だよ♥ はああっ♥」

「んれえっ♥ アタシ達が擦るのもやられるのも一律10連ガチャ分っ♥ ふう〜♥」

舞華と佐那が君の耳へ熱い吐息と共に囁かれる。

「現金って形だと溜まってくばかりだろ?♥」

「こころで一氣に使ってみないか?♥」

悪魔のような囁きが君の脳髓を駆け巡る。既に様々な女性にお貢

ギプレイをさせられていたが、色々と怖くて貰った現金はあまり使っていない。使うにしてもその女性達に返せる形やプレゼントと言うものだ。

「ただの10連ガチャ代だって♥」

「いつもの金額にしては安いだろー♥ なあ♥」

カチャカチャと君のズボンの留め具が、彼女達の手で外されていく。そのままズボンの下に、褐色とミルク色の二つの手が忍び込んで来る。パンツ越しにこしこしと気持ちいいが、悶えるような感覚で摩られていた。いつの間にかズボンは下ろされている。

先から頭がフワフワしていて、この状況にも混じって今はあまり押したくないSスイッチが入りそうになる。

「なあ、なあ♥ たった10連分だって♥ あつむつれっう♥」

「何回やっても、普段の金額にも届かないからよっ♥ あむ、れっりゅ♥」

耳たぶ迄二人の口で噛まれてる。甘く噛まれて穴には熱い舌が這う。肉棒がパンツ越しに段々早く摩られていた。

此処までされて理性が融けないなら、よほどの聖人かインポだけだろう。

しかも君は今頭があまり動かない。フワフワする。

後でまた罪悪感で死にそうになる。そんな事すら思い浮かばない。

パチリと君のSスイッチが入る。入ってしまった。

既に数えたくないほど行ってるプレイの所為か、手際よく行ってしまう。

ガチャ回したいからフェラしろ、と高圧的に君は口にする。

「~~~~っ♥ あ、ああするっ♥ んっひっ♥ 今直ぐ下ろすからあつ♥」

「あつ~~~~っ♥ ま、まった♥ ひ、ひひっ♥ 俺もやるっ♥」

二人して競うように椅子から降りる。そのまま開いた君の足の間に入る。

口で下ろせよ、と君は命令した。

「ああつ♥ あつむ、ん~~~~♥」



「分かつてるよっ♥ あむっ♥ んっうっ♥」  
手をパンツから離す。そのまま口でゴムの部分を噛んで下ろしてきた。

ポロンと君のパンツ越しの手コキで勃起した、黒い霧を纏う肉槍が表れる。

「んあっ、ふうっ♥ スンスンッ♥ 相変わらず♥ スッウッ♥  
雄臭いなあっ♥ んっうっ♥」

「あっ、んっ…スウッ♥ テカテカに黒ずみやがっつ♥ ん  
ふあ、スンスッウッ♥」

褐色の鼻と真っ白い鼻が、すりすりど幹の上部分に当たる。二人してぷっくりと鼻を大きく膨らめて、君の肉棒を嗅いでいた。

僅かに当たる鼻息が微細な快感を発生させてくる。

「んっちゅっ♥ ちゅっうっ♥  
「ちゅっちゅっ♥ ちゅっうっ♥」

そのまま佐那と舞華は、君の肉剣全体にキスを施してきた。幹の部分に紫色と赤いキスマークが作られていく。

色の違う口紅の所為か。二人に肉竿を塗られているような錯覚がした。

「んっ♥ れっうっ♥ 味は変わらず濃いなあ♥ れっるうりゅっ♥」

「れっりゅっ♥ 舌がピリピリするぜっ♥ れるれろっおっ♥」

男勝りな口調の二人の美女が、まるで君に使える奴隷のように、舌を使って肉筒に奉仕していた。

褐色で色素の薄い髪の子白目の佐那。真っ白い肌で赤い髪を伸ばしたキツイ目の舞華。

タイプは違うが気が強めのギャルっぽい美女達。棒アイス舐めるように舌で舐められるのは、ある種の征服欲が満たされていく。

一瞬舞華と佐那の視線が交じり合う。どちらが先か直ぐに二人の中で決められたようだ。

「んっあっ♥ 先アタシなっ♥ れりゅっ♥ んっぶっうっ♥」

佐那が亀頭部分からゆっくりと、肉弾頭を飲み込んで来る。ねっ

りと下まで這ってくるフェラチオ。

「んあっ♥ 俺はこっちっ♥ かつぷッ♥ れりゆくつぷっ♥」

竿から下に退いた舞華が、君の黒い霧を纏わせた金玉を、舐めしやる。口内でコロコロ飴玉を転がす様に、舌が這う。

3回ほど佐那のねつとりとしたフェラチオが、肉砲を責めて来る。

「んつつず…:ちゅっぽっ♥ 交代だっ♥」

「んっ、はっあ♥ おっしっ♥ 今度は俺がフェラしてやるからなっ♥ ちゅっ♥」

佐那が3回目の時に音を立てて肉鞘から口を離れた。その後直ぐに舞華が亀頭の前に口を当てる。

「ちゅっちゅびっ♥ いくぜっ♥ んあくっ♥ 直ぐ出すなよっ♥ んっぐっぷっぷっ♥」

挑発的な尖った目と合う。舞華はそのまま一気に肉竿を吸い込むように、根元まで頬張って来た。

「ぐっじゅぶっ♥ じゅりゅううううっ!♥」

音が聞こえるほどの激しいバキュームフェラ。根元から亀頭迄、ほっぺで擦りながら行われている。

「うっわ♥ 舞華の奴♥ はげしいなあ♥ アタシも負けられねえな♥ かつぷっ♥ レロロ、ガラガラッ!♥」

対抗意欲を燃やした佐那が、君の金玉を両方しゃぶり出す。そのまま唾液を溜めた口内で、ガラガラと音を立てた。

うがいのように君の金玉を、唾液と舌で刺激してくる。

本来口内洗浄用のうがいが、君の金玉唾液風呂の為に行われている。た。

「ガラ、っりゅっ!♥ こっちの番っ!♥ ちゅっ!♥ んっぐぶごっぷっ、じゅぶぶ!♥」

「んぐっぶぶ!♥ っぽ!♥ 交代かあ!♥ んちゅ、かぷつもごもご!♥」

佐那のネットリフェラに舞華の口内金玉飴玉転がし。

「んっちゅっ!♥ 舞華の番だっ!♥ かつぷっ、がらっ!♥」  
「んっはっあっ!♥ いくぞおっ!♥ じゅりゅりゅっ、りゅぶっ

ふっ！♥」

激しい舞華のバキュームフェラと佐那の金玉ガラガラしゃぶり。

交互に何度もタイプの違う快感が肉キノコを責め立てる。

舐めしゃぶられる金玉袋で増産された精液が、そのまま駆けあがってくる。

直ぐに君はスマホを弄る。音からガチャを回しているのが、二人にはわかるだろう。

「んっっ！♥ このままっ！♥ れりゆりゆっ！♥ だっせっえっ！♥  
んっぐぶっ！♥ 出された瞬間アタシもっ！♥ じゅぶ、りゆっ！♥  
くるっうっ！♥ んっああっ♥」

「んうっ！♥ やべっえ！♥ んっぶ、れろれろっ！♥ 金玉しゃぶりながらっ！♥ んっぐ、れりゆっ！♥ いっちまっうっ！♥ んっれっうっ！♥」

君がガチャを回している音が彼女達……貢ぎマゾメスのM資質を刺激したのだろう。

射精寸前の肉銃とぐんぐん精液を排出している金玉の前で、二人の美女が君を甘く溶けた瞳で見上げていた。

射精直前の瞬間二人とも口を離す。そのまま佐那の褐色の手と舞華の白い指が、根っこから絞るように手コキ。

龟头の前で餌を待つように、舌を口から出していた。

佐那と舞華の望み通り、ガチャの排出音と共に黒い霧を纏う白濁流を迸らせた。

「んっっあゝゝゝっ！♥ 熱いの顔にきたっあゝっ！♥ んうううゝうっ！♥」

「んっえ、っうゝうゝう！♥ ふうまの精液っ♥ あっはあゝっ♥  
ぶっかけられてっえっ♥ おゝあゝあゝあゝっ！♥」

佐那の褐色の顔と舞華の赤い髪が、君の吐き出したザーメンで汚していく。

吐き出す度に二人の顔や髪に降りかかる光景は、君の独占欲や征服欲求を満たしていった。

「んはっあゝッ♥ まだ出てるなっあっ♥ んっふっ♥」

「んっおっ ♡ 相変わらずっ ♡ あっ ♡ 出すぎだろっおっ ♡  
あっうっ ♡」

噴出する温泉のように君の白濁液が降りかかるのを、彼女達は体を震わせながら受け止める。

微細に痙攣しているのは、掛けられて興奮しているのか。はたまた君にお金を消費されたからか。

恐らく両方合わせた快感で、彼女達は絶頂している。

長引いたガチャ音と共に、君の性液の排出も収まり出す。

「ふっうっ ♡ んっれっ ♡ もったいないなっ ♡ れりゆりゆっ ♡」

「あゝんっ ♡ やったなっ ♡ アタシも舐めるからなっ ♡ れっろろろっ ♡」

息を整えると二人して、ミルクを舐める猫のように、互いにかかった精液を舌で飲み込んでいく。

その瞬間明らかに君を、挑発的な目で見ていた。君を興奮させるためにに行っている行為だ。

その挑発を受けて君の肉棒は、既に勃起済み。

ガチャも外れた怒りも増している。

「んっれうっ ♡ また外れたみたいだなっ ♡ ふっふふ ♡」  
「じゃあ、まだ回さないよだ ♡ くひっ ♡」

ドロドロに溶けた鉄のような欲望が、二人の美女の顔に浮かび上がる。

特有のマゾヒストが浮かべる欲情の笑みが、君に向けられていた。

之で引くようなら沢山の女を抱いていない。

バキバキに立った肉槍を向けて、最初は舞華を手で倒す。

「おっと ♡」

どかしておいた机が、頭に当たることはない。そのまま床へと倒れた舞華の足を、膝立ちになりながら持つ。黒いストッキングのサラサラした感触が、掌に伝わってくる。短いスカートをめくり、黒い紐のようなパンティをずらす。

腕で上半身を支えて、君が下半身を持ちあげた。変則的なブリッジ

のような姿勢。

つり橋と呼ばれる体位で、黒い霧を纏う肉剣を膣口に向けた。

「ふっう♡♡♡ は、払うから♡♡♡ はっあはあっ♡♡♡ ガチャ代払うからっあっ♡♡♡ んっくっ♡♡♡ 早く入れてくれっえ！♡♡♡ あゝゝゝっ！♡♡♡」

彼女の懇願を受けて、君は一息に肉竿を膣内の奥深くまで挿入。

若干体重が掛かったことで、亀頭が子宮口を持ち上げるまで入った。

「はっあっ！♡♡♡ これっ！♡♡♡ おゝ！♡♡♡ 子宮持ち上げられたっあっ！♡♡♡ ンツオツオオ！♡♡♡」

プルプルと快感の涙を尖った目尻を下げた目から零している。舞華のアメジストのような瞳が霞がかりながら君を見ていた。

「んっんっ♡♡♡ 先に舞華かよツオ♡♡♡ うゝうゝっ♡♡♡」

既に我慢できない佐那も、自身の膣内に指を入れながら、君達のセックスを見ていた。

その様子を横目で見ていた君は、顔の前に膣口を向けるように命令。

「んっはっあっ♡♡♡ わ、わかった♡♡♡ よっとっ♡♡♡」

ぷるりと一瞬背筋を震わせると、佐那は君の言う通りに立ち上がりながらお尻の方を向ける。

何も言わない佐那に、君は言う事はないかと訊いた。

「んっひ…‥はっあゝ♡♡♡ ガチャ代出すから♡♡♡ ああゝっ♡♡♡ オマンコ舐めてほしいっ♡♡♡ んっいいいゝっ！♡♡♡」

いうたびにお尻が揺れるのを見ながら、君は彼女の懇願を聞いた。直ぐに黒いドレスのような服を引っ張る。背中から腰まで空いている為、ちよつと引いただけでお尻がプルンと現れた。

願い通りに黒い霧を纏わせた舌を伸ばして、佐那の肉鮑に触れる。

「んゝっあゝっあゝ！♡♡♡ あ、まずっい！♡♡♡ くっひいんゝっ♡♡♡ 力が入らないっ♡♡♡ あっああゝあゝっ！♡♡♡」

若干前のめりの体勢で膣壁を舌で蹂躪した途端、佐那の上半身が倒れていく。足を震わせながらもなんとか立たせたことで、下の口部分

は君の前にちやんとある。

「あゝ！♥ こらっ！♥ んいいゝ！♥ 俺に胸に倒れて来るなよっおゝっ♥ んっうゝうゝっ！♥」

それでも顔は地面の方に倒れていったため、舞華の白い巨乳に落ちた。

佐那の褐色の顔が、彼女の白い巨峰に埋もれる。その所為でパチンと舞華の胸を包んでいた服のボタンが取れる。

黒いビキニのような下着と共に、スイカサイズの胸肉が表れた。ぷるんと揺れてはじけ飛びそうだった。

舞華が佐那をどかす前に君は、腰の前後運動を激しくしていった。ぐちやぐちやと粘膜の重い音が店内に響き出す。

「おゝひっ——おゝおゝっ！♥ エロい音！♥ んゝぐっうゝっ！♥ 鳴らされてるっウっ♥ おっおおゝおゝ！♥」

「んっおゝおゝっ！♥ あゝっ！♥ アタシも舐められてる音っ！♥ ふっああゝっ！♥ 聞こえちまってっ！♥ おっああゝんゝっ！♥」

舐め音とセックス音が、彼女達の耳に聞こえているようだ。その上激しく動かしている為、二人の体が揺れる。

佐那の顔が擦れて下着が外れ、舞華の大きめの乳首も現れた。

「んっはっあ！♥ カップ——んゝんゝ！♥」

「あっひ！♥ ばっかつあゝっ！♥ 俺の乳首嘸むなっあゝ！♥ あゝああゝんゝ！♥」

「んゝ！♥ わ、わりっい！♥ いうゝ！♥ つっいゝっ！♥ んゝおゝっ！♥」

「んゝ！♥ ついっ♥ いゝっ♥ じやなっ♥ ひやあゝっ！♥ また嘸みやがったっつあっ♥ あゝあゝあゝっ！♥」

二人の乳繰り合いを聞き取りながら、君は器用に指でスマホを操作。

またガチャを回す音がスマホから聞こえ出す。

「あっあゝっ！♥」

「んっうゝ！♥」

その音が鳴るたびに、何処か陶醉した声を上げる二人の美女。  
度し難い貢ぎマゾメスの性質を理解しつつ、君は二人がより気持ち  
良くなる様に囁く。

ガツガツと舞華の弱い所を鬼頭で擦り上げながら、ガチャ回したい  
から中出しさせると命令した。

「ふっひ…：あ、ああ！♥ 中出しっ！♥ おっ！♥ たっぷりし  
てくれっえっ！♥ くっひっいっいんっ！♥ それでまたふう  
まにみつっぐっつうっ♥ うっいっいっいっ！♥」

「あっあゝあゝっ！♥ ずりいっいっいっ！♥ んっいっひいっい  
っいっ！♥」

ギョルルウツと君の肉弾頭が舞華の膣壁で激しく絞られる。その  
瞬間体を軽く震わせながら、彼女は蕩けきった声を上げていた。

目の前で貢ぎマゾの快楽に打ち据える舞華の様子と君の言葉を聞  
いて、羨ましそうな声を佐那は吐き出した。

もちろん目の前で褐色の尻を、プリプリ震わせる彼女のこと、君  
は忘れていない。

君は舞華の足を掴んでいる右手を離す。黒い霧を纏わせた左手は、  
彼女の腰が落ちないように、お尻の下に回して掴む。

「おっひー！♥」  
ぐうつと肉感的な尻肉を掴む。君の手の跡がすっかり尽きそうな  
ほど、肉が詰まっている。

痛みすら快感なのか、ぎゅうつと尻肉を握りしめた瞬間、引き絞る  
よう嬌声が舞華の口から漏れた。

彼女の快楽に濡れた声を聞きながら、もう片方の黒い霧を纏う手を  
佐那の小麦色の尻肉へ向ける。

何回叩いたら回せるか問う。

「いっ！っひっ！♥ お尻♥ んおっ！っ！♥ じゅ、十回っ！♥ お  
っ！っおっ！♥ 十回叩いたらっ！♥ あっ！♥ ガチャ回してい  
いからっ！♥ ぐっおっ！♥ た、叩いてくれよっおっ！♥ ひぎイ  
い！♥」

彼女の答えを聞いた瞬間君は、パチンという音を立てて佐那の尻肉

を叩く。

褐色のお尻に真つ赤な紅葉が咲く。言われた通りにパチンパチンと叩く。

「くっひ♡ あっつあっつ♡ じゅっ♡ うっおっつ♡ 十回される前についっ♡ うくうっうっうっ♡」

五回ほど叩いただけでプルプルと佐那の体が震えだす。

「おっ！♡ 俺もっ！♡ おおっつおっつ！♡ もっうっつ！♡ ふっうっ！♡ ふうまのオチンポでっえ！♡ おっおっつ♡ きちまうっうっ！♡ いひいっつ♡ な、中だからなっあっ！♡ おっほおっおっおっつ！♡」

「いっぎっ♡ ケツ叩かれてっえっ！♡ あっつはあっつ！♡ ふうまの舌で舐められて♡ いっいっつ！♡ イッチまっうっ！♡ んっぎっいっつ♡ もっうっ♡ あっつひいっいっんっ！♡」

彼女達の絶頂前の喘ぎ声が君の耳を打つ。

舞華の膣内が君の肉竿に絡みつき、激しい蠕動運動を開始。

佐那の膣壁も、君の舌をぎゅうつと痛いほど締め付けて来た。

腰が融けたかと思うほどの快樂が、脳髓まで一気に駆け巡る。

君の頭が白く弾けたかと思うと、黒い霧を纏う白濁流のタガが外された。

「んっおおおっおっおっおっ！♡ 中にザーメンっ♡ ぎっだっああ♡ あっあっあっっ！♡ 熱くてっ♡ ほっおおおっっ！♡ 子宮焼かれてっえっ♡ イッッぐうっうっうっうっ！♡」

「おっひっ！♡ 尻まだ叩かれっでっえっえっ！♡ ひっぐっ♡ 駄目♡ あっあっあっ♡ 尻叩き駄目だツアっ♡ オッオッオッ！♡ おぼえちまっあっ！♡ ほっおおおおんっんっ！♡」

パチンパチンと褐色尻肉を叩きながら、肉砲からザーメンを子宮に発射。

エビのように背中が反り返ってブリッジのような体勢の舞華。彼女の膣内が君の肉槍をぎゆるぎゆると乳牛を搾る様な動きで締め付けて来る。真つ赤な髪が地面にばらまかれて、顎と真つ白な喉がさらけ出されている。



君の目の前にある褐色尻肉がガクガクと激しく痙攣している。顔中に透明な愛液が、ぶしゅぶしゅと振りまかれていく。君の顔に潮吹きをしている佐那は、快感を逃がそうと目の前の舞華の体を抱きしめていた。そのまま顔に舌が落ちる程、口が大きく開きながらイキ声を上げている。

「おっお、お、お、っ！♥ 射精長すぎだっあ、っ！♥ おっお、っ！♥ まだ来るっ♥ い、っぐ——おっお、ほおお、お、お、っ！♥」  
「あっお、♥ イッてるってっ！♥ ひっぎい、い、い、っ！♥ 言ってるだっろっお、！♥ んぎ！♥ 舌かき混ぜっ♥ ん、う、う、う、う、う、う、っ！♥」

獣ような絶叫が二重奏となつて、佐那の店に響き渡る。既に夜半も過ぎて前に誰も通らないとはいえ、聞かれたら文句でも言われそうな声量だ。

きつちり君の腰に回された舞華の肉質たっぷり足の足が、絡みついてぐつと恥骨を押し付けていた。その願い通り最後まで君は、子宮口に亀頭を押し付けて射精した。

「おっほっおっ♥ もっう意識とっぶっう♥ くくくくくっ♥」  
「あ♥ あはっあ♥ 舞華♥ ん♥ 気絶しちまったぞっおっ♥ ふっう、う、っ♥」

ガクリと舞華の体から一気に力が抜ける。足も上半身も、店のタイルに横たわる。君も支えていた下半身を、ゆっくりと下ろした。

同時に佐那の体も力が抜けてぱたりと舞華の体に重なる。顔が胸の下のお腹に当たって下半身はタイルにある。膣口から零れる愛液が床を汚している。

きみはごしごしと乱暴に顔の愛液を腕で払う。そのまま、またスマホをもって、ガチャ画面を操作。

10連ガチャ4回分が回される。  
「くっひ♥」

まだ意識が保つ佐那の、漏れ出る欲情に塗れた声が、君の耳を打つ。ガチャを回す音がするたびに、佐那の膣口からぶしゅりと愛液が噴き

出る。

度し難いと冷静に施行する君の部分。

Sスイツチが入った君の脳内は、しっかりとどう動くかを考えてながら、体を操作。

40連回しても狙いのキャラが当たらない。既にかかなりの数回しているというのに……。

「あはあ♥ また当たらなかったみたいだなっあ♥ んつきゅ♥」  
うるさいと君は、赤く染まり出した佐那の小麦色をした尻を叩く。それすら嬉しそうな喘ぎ声が、彼女の口から漏れる。

そのままふりふりと震えて君を挑発する小尻に向けて、既に勃っている肉鞘を向ける。

「はっあ♥」

首と肩を捻って君に、ラピスラズリの瞳が向けられる。期待と欲情に濡れた目の願いを、しっかりと君は把握。

ふつうと一回ため息を吐く。気合を入れ直した。

じつとはるか下の人間を見るような目で、君はまだ回したいから入れさせろと命令。

「はっい♥ ガチャ代貢ぎ肉便器に♥ チンポ入れてくれえ♥ お願いだからよお♥」

顔と肩を元に戻して、前を見据える佐那の顔は、君には見えない。ただ陶醉した声だけが、君に届いた。

ぐいつと彼女の腰を掴み、若干膝立ちにさせる。そのまま叩きつけるように、肉棒を膣口に挿入。

「くっひっい♥ い♥ い♥ い♥ つ!♥ 一気に奥まで入りやがるツウ♥ おっお……ん♥ お♥ お♥ お♥ つ!♥」

先ほど迄舞華のお腹に埋まっていた顔を、がくんと上げて嬌声が上がる。ふわりと短めの佐那の色素の薄い髪の毛が浮く。その度に褐色の肌全体から、透明な汗が飛び散っていく。

「おっお♥ 相変わらず♥ んっう♥ でっけっえなっあ♥  
あっはあん♥ん♥ 内臓まで犯されるようだっ♥ ンウウウウツ♥」

背中が空いたドレスの性で、小麦色の肌が汗で光っている。星空のようなドレスも、すでに皺皺になっていた。

ドレス姿の雌を犯すという特有な光景に、君の肉弾頭に力が入る。

「おっ！　♥　中でまた大きくツウツ　♥　うっ　いいい　ん　ん　ん　ッ！　♥」

気絶している舞華の白い腹の上で佐那が呻く。

「すっう　♥」

かすれたような呼吸だけが、舞華の反応だった。

その音すらパチンパチンと、君の太腿と佐那のお尻に当たる音に、かき消されていた。

「おっ——　オ　オ　オ　オ　ッ！　♥　さっきイツタばかりだからっ！　♥　ん　っ　い　い　い　！　♥　や　っ　べ　ッ　♥　え　っ　ひ　い　ん　！　♥　直　ぐ　イ　き　そ　う　だ　っ　あ　ッ　！　♥　く　ふ　っ　あ　あ　あ　ッ　！　♥」

彼女の言う通りすでに膣内は、君の肉竿を何度もぎゆるりつと搾るように蠢く。

このままだと君は吐き出す前に、佐那の意識が持たないかもしれない。

まだ頭がフワフワして、Sスイッチが入り理性が薄い君。普段ならやらないようなことを思考する。

ただ犯すだけでは、彼女達のような度し難いマゾメスは、満足しないだろう。

邪悪な思考の方が強くなった君は、行動を開始。

ぐいぐいと佐那の体事、引つ張り後ろに下がった。

「い　っ　う　ッ　！　♥　ふ　う　ま　っ　あ　ッ　！　♥　づ　っ　あ　！　♥　な　に　を　っ　お　！　♥　ん　っ　ぶ　ふ　う　う　っ　！　♥」

ぐいっと引き下げられた佐那の体。舞華のお腹から股口まで彼女の顔が引かれる。

「ん　っ　ぶ　ッ　！　♥　は　あ　っ　！　♥　ふ　う　ま、　な　に　す　る　ん　だ　よ　っ　お　ッ　！　♥　ん　う　ッ　！　♥」

若干文句を言いたげに、顔と肩を捻って、君の方に向ける佐那。彼女の三白眼には、君がスマホを向けてるのが見えた。

冷酷な目をした君が、酷薄な言葉を吐く。ガチャ代増やしたいから、レズプレイしろ。

ちよつと攻めたことを命令。脳内の奥にある冷静な部分が、駄目だったら後で謝ろうとすら思っていた。

だがそんなこと考える必要はなかった。

佐那の三白眼が大きく開く。そのすぐ後ににへらと、欲情に塗れた笑みを浮かべた。きみの背筋にぞくりと、寒気すら走る表情だった。

「くひっ♡ はい♡ んっくっ♡ いま、直ぐするよっ♡ ひひっ♡ んっべえっえ♡」

彼女は自身の目の前にある、舞華の膣口に舌を伸ばす。そのまま膣内にある君の吐き出した白濁液事、舐めとるような音を奏でた。

「んっひっ♡ な、なんだあッ！♡ んっ！♡ おいつ！♡ なにしてやがっ！♡ あんっ！♡」

舞華が一気に走った快楽で、目を覚ます。一瞬混乱するが、自身の陰口が佐那に舐められているのを見て、喘ぎながらも抗議した。

それを見ていた君は、佐那をフォローするかのようになり、舞華に声をかけた。

まだガチャ代に回したいから、舞華も佐那のレズプレイに協力しろ。

君の命令を聞いた舞華の体が、一瞬固まる。

その隙を付いて、佐那のクンニが激しさを増す。

「やあっ♡♡ ふうまの精液！♡ んっ♡ ツ！♡ とられるツウ♡！♡ うっひい♡っ！♡ だめだっ！♡ あっああ♡！♡ こんな惨めなのに！♡ あひっ！♡ ふうまに撮影されてっ！♡ うっう♡！♡ ガチャ代に回されるのに♡ っいっいっいっ！♡」

言葉とは裏腹に佐那の頭頂部に、舞華の手が置かれる。そのまま色素の薄い短い髪の毛の中で、白い指が搔くように立つ。

押し付けてまではいかないが、佐那のクンニを助けるような舞華の手の動き。

褐色と白肌ヤンキー系ギャルが、君の命令でレズプレイをしている。

欲望の黒い火が燃え盛る光景だ。

君も負けてはいられないと、スマホで二人を撮影しながら、腰の動きを激しくする。

「んっぶっ♡ ンッオオ♡ オッ♡ 奥底弱いつてっ♡ おっ、ほおっ♡ しってるだっろっお♡！♡ んっぶふッ♡ 舐めてられないっ♡ んっちゅっれりゅ、あ♡ っはあ♡ ん♡！♡」

「んっあ♡！♡ そこでしゃべるなよっお♡！♡ んっ♡ 息がクリトリスに当たってっ♡ くっひっい♡！♡ 駄目、噛むなあっ♡ あ♡あ♡あ♡っ！♡」

二人の体がシンク口するように震えだす。君の肉槍を啜え込む佐那の膣内も、蠕動運動の激しさを増す。

ぎりぎり引き絞られる君の肉棒。すでに我慢の限界は超えている。

「んっほお♡！♡ 中でまた大きくっう♡！♡ ちゅりゅりゅっ！♡ だしてっえっ♡ あ♡っあ♡っ！♡ ガチャ代貢ぎにっ！♡ れりゅ、んっう♡！♡ ふうまの精液っ♡ ちゅ、おっ♡！♡ 中出しっ！♡ してくれっえっ♡ ちゅりゅりゅ、んっ♡！♡」

「んっひっ！♡ こら、吸うなあっ！♡ はっあっあ♡あ♡っ！♡ ガチャ代わりにつ！♡ おっひっい♡い♡！♡ 出してもらった精液っ♡ あっっ、あ♡あ♡っ！♡ ふうまのザーメンがッアっ♡ くひい♡い♡い♡！♡ とられちまっうっ♡ ふっあ♡あ♡あ♡っっ！♡」

君の精液を乞う佐那。彼女に膣口を吸われて、言葉では文句を言いながらも、表情は快樂に蕩けている舞華。

二人に聞こえるように、撮影した振りをしながら、ガチャを回す。ガチャの排出音と同時に、君は黒い霧を纏う白濁液が、亀頭から放出される快感を受け止めた。

「んっあ♡あ♡あ♡っ！♡ アタシの金っ！♡ うっう♡う♡！♡ 中出し代わりにっ！♡ んっぐうっう♡う♡う♡っ

！♥ ふうまに溶かされてっえっ！♥ あっあ——いつぐうう  
ううううううっ！♥」  
「ふっあっ！♥ ガチャ代稼ぐ為にっ！♥ いっつあゝあゝあゝあ  
っ！♥ ふうまに撮影されながらっ！♥ んうううううっ！♥  
精液吸われてっえ！♥ あゝっあゝあゝあゝあゝんゝん  
んゝっ！♥」

佐那と舞華の雄たけびのようなイキ声が、店内に響き渡る。二人とも体中を痙攣させながら、背筋が折れそうなほど反り返っている。

頭に置かれて手を弾き飛ばし、佐那の短く色の薄い髪の毛が、ふわりと汗と共にまった。目が白目になりながら、舞華の舌が天井に伸びている。

若干痛みすら感じる程佐那の膣壁に、君の肉剣が絡みつき絞られる。

カリから竿の中まで一遍ものこさないと言わんばかりに、精液が搾り取られる。

「んっほおゝおゝおゝっ！♥ 子宮に熱いの来てるっウっ！♥  
ほっおおおっ！♥ お腹にふうまのまだ出されてっえっ！♥ ぐっ  
るっうううっ！♥ またっあゝっ♥ おおっほおゝおゝおゝお  
ゝっ！♥」

「いうゝっ！♥ だからっ！♥ あっあゝあゝあゝっ！♥ そこで  
しゃべるなって言ってるのにツイっ♥ いいいゝっ！♥ クリに行  
きあたってっ！♥ あゝっ！♥ んひいいイイイッ！♥」

何度も絶頂する佐那に呼応する様子で、舞華の体が打ち震える。  
快楽に塗れたデュエットを奏でながら、二人は快感に溺れていた。

「はっあっ♥ もうだめだツア♥ あゝっ♥ あたままっしろっでっ  
♥ あっああああっ♥ くくくくくくっ♥」  
「あ、ふっうっ♥ 俺もっ♥ 耐えられねっえっ♥ またいしきとっ  
ぶっ♥ くふっう——っ♥」

君の白濁流も終わる。同時に二人の体から一気に力が抜けていく。  
ぱたりと二人が飲み屋の床に、体を伸ばした。そのまま口元から掠

れるような呼吸音だけが零れていく。

絶頂から戻った君の視界にスマホの画面が映る。そこには目的のキャラが表れていた。

ようやくかよ。嬉しさ……そしてどこか心にやるせなさが響きながら君は、二人の回りを掃除するように動き出した。

「ふふ♥ これ例の奴な♥ ふうま、楽しかったぜ♥ なあ、舞華♥」  
「ああ♥ ふうま♥ またやろうな♥ 今度のピックアップ、忘れんなよ♥」

スマホ用の課金カードを渡されながら、君は居酒屋佐那から離れていく。

最後の声は聞こえないふりをするわけにもいかなかった。

更に多く出そうとする佐那と舞華を抑えて、きつちりガチャ代のみ受け取った君。

まだ慣れそうにないなと思いつつ、暗い田舎道を歩いていくのだった。

## 柳六穂と星乃深月★

首が痛くなる程上を見上げても、最高階まで見えない高層マンション。

前を見れば、彩られたガラスなどで出来たデザイン性ある扉。

いわゆる都心の億ションと言われる場所の前に君はいた。ふうまの若様でありお貢ぎ主でもあるが、今なお一円で右往左往する身としては全く合わない。

ブルリツと一旦体を震わせて君は、恐る恐る入っていく。

自動ドアに招かれたエントランスは、重厚感あふれる天然石で作られている。君の右上の方にセキュリティ付きの扉があった。

教えられた部屋番号を鳴らして少し待つ。

「はい、誰でしょうか？」

涼やかな声が、君の耳を打つ。

君を呼んだ本人である声の主に、名前を告げた。

「ふうま君！ 今開けますね。六穂、ふうま君来たよ」

「やっとか。遅いよ、まったく」

二人の少女の話し声に耳を傾けつつ、鍵が開いたエントランス内へと、君は入っていく。

高級ホテルと見紛うほどのエントランスルームを抜けて、エレベーターへと歩みを進める。

特有の負荷を身に受けながら、上層の方へ向かって行く。

廊下すらも石で出来たタイル。セブレティ溢れている。

一瞬足を出すのを躊躇うが、友人たちの誘いをドタキャンするわけにはいかない。

こういう空気には一生慣れないかもしれないと思いながら君は、タイルの上を歩いていく。

ほんの少し歩けば目的の場所に到着。呼び鈴を鳴らして少し待つ。

「まったくだよ、ふうま」



がちやりと扉を開けて、ワインのような髪をザンバラに、地面に付きそうなほど伸ばした少女が、出迎える。エナメル質の服を肩から腕にかけて伸ばしながらも、上半身は形の良い胸の乳首だけを隠すような服装。スカートもパンツをぎりぎり隠している格好で、風が吹けば確実に見える短さ。ストッキング代わりの黒く光る布は、彼女の雪よりも真っ白な肌によく似合っていた。髪が時折隠すガーネットよりも深い色合いの瞳は、億劫そうに君を見ている。SMの女王様と言った服装だが、立派な尋問用の任務服を着ているのは、毒使いと名高い柳六穂。

「入っていいよ。深月がすき焼きを作って待つてるから」

自身の服装に無頓着なのはらしいなと思いつつも、君に背を向けて歩む六穂の後を追う。

オートロック式のドアが閉まる音を聞きながら、本物の木張りの玄関を歩いていく。

直ぐにリビングの部屋にたどり着き、目の前のエナメル質のスカートを揺らす少女がドアを開ける。

続けて入ると君の鼻に、醤油と出しのいい匂いがくすぐる。ぐうつとお腹が鳴るのがよく解った。

「まってましたよ、ふうま君」

リビング中心にある机の上では、ぐつぐつと電気鍋が煮え立っている。

その前では椅子に座りながらも、鍋に肉を入れている茶色の髪を、ポニーテールにまとめている少女が君を迎える。

背中や豊かな胸の谷間から臍までを晒す紫色のドレスに、手と腕を隠すグローブのまま鍋の前に居る。ドレスやグローブ、肉の乗った太腿から足の先まで隠す薄めのストッキングなどに、鍋の汁が一滴たりとも落ちない。風遁を使いながら鍋の身支度をして、星乃深月が君にブラウンの瞳を向けている。

鉄のすき焼き鍋の前には、生卵が入ったお椀が置かれている。

「ほら、ふうま。そっち座りなよ」

深月の隣に六穂が自然に座る。ルームシェア中の二人は、隣同士に

座り、向かいの席に君が着くのを待っていた。

生真面目な深月と若干暗めの六穂。タイプの違う二人の美少女たちに促されて、君は用意された席に座る。

目の前にはぐつぐつと煮立つすき焼き鍋。鍋からは醤油と出汁が甘く香る。腹がグウツとなる程いい匂い。鍋に入った肉はサシがかなり入って、高級な肉であることを伝えてくる。

すき焼き鍋に呼ばれながらも君は、何も持ってきていない。二人に手ぶらで来るように言われていた。

若干申し訳なく思い、君は本当に頂いていいのか聞いてしまった。

「全然気にしないでいいよ」

「そうです。いいお肉が手に入ったんですけど、二人だけだと食べきれなくて」

億劫そうに言う六穂と、君としつかり琥珀のような目を合わせる深月。二人の答えに君はこくりと唾を飲み込む。

深月の言う通り、サシの入った赤み肉が、すき焼き鍋の中で煮立つ。「さあ、どうぞ。早く食べないとお肉が硬くなってしまうです」

ささつと深月が野菜と肉を持ったお椀を君に向ける。ぐいぐいと押し付けられるお椀を受け取り、中に

あるすき焼きの肉を食べる。

上手い。ほろりとほぐれる肉の柔らかさと溢れて来る肉の油の甘み。醤油と出汁の濃い目の味が卵と合わさり、丸くしている。

「ほら、これも飲みなよ」

君の手に六穂が、しゅわしゅわ泡立つ飲み物が入ったカップを、手渡してきた。お礼を言つて飲むと、キリツとした味わいの辛めのジンジャーエールが、後味をさらりと流してくれた。

舌に起きる炭酸の刺激が、さらに食欲を増してきた。

「まだたくさんありますからどうぞ」

「いっぱい食べていいからよ」

深月も六穂も君の持っているお椀に、どんどんお肉を持ってくる。パクパク食べてしまうほど美味だが、彼女達はまだ一口も食べていない。

「ふうま君が食べているのを見るだけで、楽しいですから」

「そうだよ。大丈夫。後でちゃんと頂くからさ」

若干疑問を抱いたが、二人に促されるままに君は、どんどんお椀に盛られるすき焼きを食していった。

楽しんで味わっている所為で君は、あることに気づかなかつた。

「……っ ♡」

「……はあくッ ♡」

すき焼きを味わいながら食べている君を、ねっとりとした熱い秋波を向ける深月と六穂。

ぺろりとルージュが塗られた唇が、舌で軽く舐められた。

普段なら気づいたゾクリとするほどの女の欲情の視線に、ひたすら美味を味わう君は気づかないのであつた。

ある意味でフォアグラを作る職人のような二人は、君にただ鍋の肉を与えている。

それ自体が罠だ。

ガツガツ食欲のまま食べていくと、腹の底から燃えるような欲望を感じ出した。

鍋だから精が付いたせいだろうと、ぼんやりしだす君の頭は思う。

「ふふっ ♡」

「くひっ ♡」

盛り上がる君のズボンに視線を送り、笑い声を漏らす深月と六穂。お椀の中を食べ終わると、すでにすき焼き鍋の中身は何もなかった。

小さめの鍋で元々一人分しか入ってなかった。だが、その後に足して二人も食べると思っていた。

「あら、無くなつてしまいました……ね ♡」

困った様子だが、深月の赤いルージュを塗った唇が弧を描いている。

「大丈夫でしょ ♡ ボクたちの食事はっあく ♡」

彼女の言葉に六穂が笑みを浮かべながら答える。ぺろりと紫色の唇の端を舌が舐める。

嵌められた。

君は既に勃起した肉棒を制御できない。

胸の内を焦がすような欲望の炎。二人を襲わないように精いっぱいだ。

燃え盛る様な欲情を抑えて震える君を横目に、二人は手早く机の鍋や皿などを片付けた。

あつという間に終わって二人とも、机の前に立っていた。

「そうですねっ ♥ 私達が食べるのはほかにありますからっ ♥」

「でしょっ ♥」

二人して体を前かがみにして睨む君の視線から逃れるように、机の下に潜り込んだ。

「こつちから出るたんぱく質がっ ♥」

「今日の僕たちの夕食ってわけ ♥」

瞬時に机の下で君のズボンを、二人が手にかけていた。

ふうふうと荒い息を吐く君は、既に彼女達の行為を受け入れる心の準備をしていた。

「ふっうっ ♥ お肉代の代わりにツイ ♥ 白いたんぱく質 ♥ くださいね ♥」

「あく、深月興奮しすぎ まあボクも我慢できそうにないんだけど一緒に下げるよ」

「いいですね せくのっ ♥」

「よいっしょっ ♥」

パンツ事剥ぎ取るようにズボンが、二人の掌によって前だけずらされる。

深月と六穂の顔の間に、勃起した黒い霧を纏う肉棒が、ボロンと直立する。その勢いのまま肉剣が降られて、パチンと深月の頬を叩いた。

「やんっ ♥ ふうま君のチンポ ♥ 暴れん坊なんですからっ ♥ すっう……ふっ ♥」

「うつわあ♥ バツキバツキだね♥ 鍋に入れといた媚薬でつえ♥  
すつごい事になつてる♥ ふう〜つ♥」

二人して直立状態の君の肉竿に、向かって息を吹きかけて来た。ビクンツと君の体が震える。

さらりと六穂が生成した媚薬の所為で、こうなっていることを言われた。二人して君に犯されるために、鍋に誘ったのだと理解した。

セックスは良いが、嵌められたことにいら立ち、君は睨んだ。

「あつ♥ お、お肉の代金の代わりにっ♥ ちゆれるっ♥ このチンポっ♥ ちゆうっ♥ 味合わせてもらうだけですからっ♥ れりゆれろっ♥」

「んっつ♥ ぐ、ごめんっつ♥ ちゆうっちゆ♥ いっぱい体にキスするからさあつ♥ んっちゆっ♥」

一瞬深月と六穂の体が震えた。直ぐに彼女達の間にある、君の肉塔と袋にキスの雨が降ってくる。

肉棒全体に赤いルージユが、金玉袋には紫色の口紅がキスマークを彩る。

「んっちゆちゆうっ♥ キスだけじゃ物足りないですよね♥ あっ♥」

肉弾頭全体に深月がキスし終えると、そのまま口を大きく開いた。舌ペロを外に出して、レロレロと蠢かせる。

「ちゆっ♥ 結構高いお肉だったんだっ♥ お貢ぎ代わりにっ♥ んぐっ、ちゆうっ♥ 金玉だけじゃなくてっ♥ れりゆつれる♥ ふうまの体っ♥ ちゆうれりっ♥ 味合わせてもらうよっ♥ はっあつ、んちゆれうっ♥」

金玉袋の方をくっぷり啜えられて、皴一つ一つを舐められた。そのまま上半身の服を捲り上げながら、腹部や胸。乳首まで六穂が紫色のキスマークを施してくる。

その様子をじっと琥珀色の瞳で深月が見つめていた。彼女の視線と交わると、明らかに被虐の快感を欲しているのが解る。

パチンツと頭の中でSスイツチが入ったのが分かった。

乱暴にするから一言だけ言うと、君は深月のポニーテールが生

えた後頭部を左手で掴んだ。

そのまま口内に向かって、黒い霧を纏わせた肉棒を叩き込む。

「んっぐっぶっ♡ のろのおくまへっ♡ ごっうっ♡ きへましゅう  
うっ♡ んっぐぶっ♡ は、はげしいよっおっ♡ んぎゅっ♡ 足の  
指でオマンコ、イジメないでくださっあ♡ おっっ…んっぐおっ  
おっっ!♡」

ぐぼぐぼと唾液と喉が肉槍でかき混ぜられる音が聞こえる。同時に君は椅子の上に座りながらも、足を紫色のドレスの中へ潜入させた。君の足指は器用にパンツをずらして、膣口を弄り出した。

肉棒の根元に真っ赤なルージュが、模様のように彩られている。君の巨根がすべて入り、喉奥まで犯している証だった。

「んっちゅっ♡ 深月♡ ちゅっちゅうっ♡ それが気持ちいいみた  
いだねっ♡ んっうっ…あっっ♡ ふ、ふうまつ♡ んいっっ!♡  
いきなりオマンコ弄ったらっ♡ くっひいっっ!♡ あっあ、ボ  
ク、そこ弱いからあっっ♡ あっあゝんっっ!♡」

君の乳首に何度もキスしてくる六穂の事も忘れていない。フリーの右手をエナメル質のスカートの中へ潜入。

紐のようなパンツをどかして、すでに濡れぼつたい膣口をかき混ぜていく。

普段は暗めの陰キャ気味の少女だが、君が膣内を黒い霧を纏う指で掻きまわす度に、甘い嬌声を奏でる。

君の肉棒を喉を使って迄啜え込む深月も、普段は清楚で真面目な委員長。

そんな二人が君の性技と肉剣で喘ぎ快感に溺れる。

ゾクリツと雄の征服欲が燃え盛った。

「んっじゅっぐぼっ、おっおっっ!♡ 高級お肉うっ!♡ んじゅぐ  
ぷっ、んううっっ!♡ 一杯お貢ぎしましたかつらっあっ!♡ んっ  
ぐっおっっ!♡ ここからたくさん!っ♡ んんっぐ…んん  
っっうっっ!♡ 白いたんぱく質っ!♡ んじゅぶっぐっおっっ!  
♡ 出してくださいねっ♡ んぶじゅりゅ、ごっおっっ♡ 足指で  
中っあっ!♡ あっっあっっひゅっぐぶっ!♡ だめですよっっ

♥ んじゆるつぐぶ、んゝおゝおゝっ！♥」

喉奥まで君の肉竿で犯されながら、深月は金玉をグローブに包まれた手でぐにぐにと刺激してくる。お返しに君は足指で、膣口から中へ入りカリカリ指でこそぐ。

「んっちゅっうっうゝっ！♥ 二人で稼いだお金でっ！♥ ちゅれうっ、おゝっ！♥ 買ったんだっ！♥ あっあゝんゝっ、ちゅっれうっ！♥ 深月と一緒にいつ♥ いゝうゝっ、れりゅちゅうゝっ！♥ お貢ぎしたからあゝっあゝっ！♥ れうっりゅっおっおゝっ！♥ そこ駄目っ♥ ちゅっちゅうっいゝいゝっ！♥ クリ弄りサービスはっあっ！♥ あっあっんゝんゝれっりゅっ！♥ やばっいゝっ♥ いっうゝうゝっ……んれりゅちゅうゝうゝっ！♥」

君の片方の乳首を長い舌で舐めながらキスをして、もう片方の金玉をエナメル質の手袋で弄りながら、六穂が囁く。

返答代わりに彼女の膣口の上にある肉豆を、親指で押しつぶす。

君の乳首を弄りながらも、六穂の口元から喘ぎ声が漏れていった。汗に濡れて若干落ちながらも、紫色の口紅がお腹や胸のあたりに、跡のように残されている。

肉棒の根も深月の真っ赤なルージュによって、此処迄啞え込んでいるという証のようになっていた。

既に媚薬効果によって君も追い詰められている。ぐっぐっ煮だった白濁液が昇ってきた。

「んっじゅっんっうゝっ！♥ 出そうですか？♥ ふふっ♥ でしたらっあっ♥」

喉奥で君の肉槍が膨らむのを感じた深月が、するりと紫色のドレスの隙間から、二つ財布を取り出した。

「えっへへっ♥ 一度やってみたかったんだあっ♥ くひっっ♥」

六穂が片方の財布から一枚お札を取り出した。

「んぐっ♥ 私も♥ こうひってっ♥ えいっ♥ ンぐっ♥ んっひっ♥」

同様に深月も器用に財布からお金を取り出す。

そのまま二人は椅子に座っている、君の後方のズボンの隙間に突っ

込んできた。

「はっあゝあゝあゝっ！♡ こ、これでイカせてっ！♡ ちゅれるっうんゝっ！♡ 絶頂代金っ♡ れろっちゅっううゝんゝっ！♡ ふうまに渡すからっあっ♡ あはっあっ、おゝっおゝっ！♡」

「んっぐっぶっふえっおゝおゝっ！♡ お腹にいっぱい出してくださいつ♡！ おっぐっえ、んおおゝっ！♡ 射精代金上乘せしますからあっ♡ あっいつぐえっうっんっうゝうゝうゝ！♡」

君の右手で膣内を弄られながらも、乳首を責めて来る六穂が囁く。左手でイラマチオをされて、足指で膣口を掻きまわされながら深月も眩いた。

前をずらされて肉棒を露出されたが、腰の所にはズボンのすそが残っている。その隙間に止めるように、お札がひらひらと入れられていた。

女にお金を貢がれるというS心が刺激される光景。

射精を懇願される囁き声。

二つの快樂が君の白濁流のタガを外させて迸らせた。

「んっぐっおおっひゅっうゝっ！♡ 足でオマンコ弄られながらっ！♡ おっびゅひゅっぐっあゝっあゝゝっ！♡ 喉に直接出てますっ！♡ うっぎゅっおゝおゝっ！♡ このままあっ！♡ ぐっぶっえっえゝうゝっ！♡ イラマっでいつちやいまっすっ♡ ひっぐっお……おっおゝおゝおゝっ！♡」

「んりゅっあゝはっあゝっ！♡ 駄目！♡ あゝっ！♡ クリトリスッ♡ いうっつれおゝっ！♡ 潰しながらっ！♡ あっああゝっ！♡ ボクの中の弱いところまでっえっ♡ れう、あゝっあゝっ！♡ そんなことされるとっおっ♡ ちゅっちゅれろお……っぐっうゝうゝうゝうゝっ！♡」

左手で茶色のポニーテール事、ぐりぐりと深月の唇を肉根に押し付ける。膨らんだ肉棒が喉肉を開かせて、胃に直接黒い霧を纏う精液を放出。

君の体にキスの雨を降らせて乳首を弄る六穂も、股間の口を黒い霧を纏う右手の指でぐちよぐちよと掻き混ぜた。



君の肉棒全体を飲み込む深月の口と喉が、全て吸い取ろうと舌ごと絡まり蠢く。腰が痺れるような快感が、君の脳髓迄走ってきていた。君がぐいっと握る深月の後頭部事、全身が痙攣しているのが伝わってきている。ドレスの中に潜入している足指に何度も愛液が降りかかって来た。

六穂の膻肉が君の指をしゃぶる様に、激しく蠕動運動を開始。君の胸に彼女の頭が寄り掛かり、ぷるぷると痙攣のさざ波を立てていた。右掌に雨のように彼女の潮が迸ってくる。

金玉から飛び出た白濁流も肉剣から吐き終えた、と思ってもまだ終わらない。

「んじゅっりゅっうゝ♡ 全部出してくださいねっ♡ んじゅりゅっうゝうゝっ!♡」

君の肉棒に残る精液すらも、吸い取ろうと深月の口が激しくバキュームしてくる。若干力の抜けて君の左腕では、彼女の行為を止めることはかなわなかった。

「はっあ、ふっうゝっ♡ 深月っ♡ ボクにもっおっ♡」

絶頂を味わえ終えた六穂が、君の腰元に居る深月に顔を近づけた。ぐぐつと君の肉竿の根から先にかけて、深月がゆっくり抜き取る。唇が後追いのように伸びて、ひよつとこ口のようになっていた。その唇から淫らかなバキューム音が奏でられている。

「んっじゅぶりゅっうっ♡ んっぶっ♡ んっあゝゝっ♡ 六穂♡  
分けますねっ♡ んれりゅちゅっうっ♡」  
「んちゅっ♡ ふうまのザーメンっ♡ 濃厚で匂いも凄いいっ♡  
れりゅれうっ♡」

君の精液を含んだ唇で深月が六穂とキスを交わしている。ぴつちり密着した二人の口からぴちやぴちやと猫がミルクを舐めるような音が聞こえた。

君の吐き出した雄液交じりに二人の美少女がディープキスを交わしている。

「んっあ♥ 深月いつ♥ んっえっ♥ 舌熱いい♥」  
「んっれっ♥ 六穂♥ 相変わらずかわいい♥ んええうっ♥」

二人が両手を合わせて舌を交わる深いキスの時間。

媚薬に犯されている君の本能が、目の前の美少女達を犯せと命令してくる。

君の欲情の視線を察したのか、

「んれっ♥ ふふっ♥」

「んっえ♥ こっちだよ♥、ふうま」

デーブキスを終えた六穂が、君の腕を取りながら誘う。深月がくすくす笑いながら、君の後ろに回った。

二人とも君に見えるように、自身の財布を胸の間に挟んでいる。

一度吐き出さしたくらいでは収まらない、ぐつぐつと燃えるような射精欲求。

普段なら抑えている凶暴なほどまでの性的欲求と、サディスティックな欲望が君の身を動かす。

君の腕を掴んでいる六穂の腕を引っ張る。

「あっわっ♥」

彼女の背後に回り、前方にある机に向かって押し倒す。倒れながら六穂の手が机に乗り、自身の体を支えている。

エナメル質のスカートを、プリッと盛り上げるお尻。黒色に光るレーザーの服装とは裏腹に、真っ白な背中があけっぴろげに晒されている。

汗に濡れた雪のように白い背中が光り、欲情に燃える君を誘う。

「んっふっ♥ ふうまっ♥ 結構乱暴♥ んんっんっ♥ わっっ♥」

机で潰れる六穂の胸から財布を奪うように抜き出す。そのまま彼女の顔の横に叩きつける。

「ふ、ふうまっ♥」

「ふ、ふうま君?♥」

少々おびえたような——期待に濡れたような二人の声が、君の耳を打った。

Sスイッチが入っても、いつもならもう少し紳士的だが、今は違う。

君に薬を盛ったことを後悔してもらおう。

六穂の美乳の間に挟まっている財布を、乱暴にむしり取る。

そのまま彼女の目の前で、分厚い財布から幾枚かのお札を抜き出した。

「あはっあ♥」

震えるような甘い声が、君の耳に聞こえる。

エナメル質のスカートを上にとかし、ひものような黒いパンツをずらす。

声と同様にプルプル震える六穂の尻肉に向かって君は腰を叩きつけた。

ぐじゅりという水音と共に君の肉槍を膣肉が飲み込んでいく。

「んっほおおおっ！♥ ふうまのがっ！♥ おっっおっおっ！♥  
一気に入って来たっあっ！♥ おっお——おっぐにあったっ  
て！♥ ひっうっうっうっ！♥」

机にかじりつくように、六穂の手が震える。紅色の髪を振り乱しながら、快感を伸ばそうと背筋が伸びていた。

君の肉剣を歓迎した膣内は、ぎゅるぎゅると蠕動運動を開始してくる。

腰から来る快感が金玉でぐっぐつと、精液を増産しているのが解る。

腰を打ち付けるたびにプルンツと震える尻肉に対して、君は手を振りかざして打ち付ける。

「ひっんっ！♥ お尻叩かないっでっ！♥ あっっあっ！♥ 駄  
目だっでっ！♥ んっっおっおっ！♥ ふうまに騷けられてっ  
あっあああっ！♥」

真っ白な六穂のお尻に、紅葉が咲く。痛みしかないはずだが、明らかに融けた声が、快感を感じているのを示していた。

パチンパチンツと何度も、彼女の尻肉に手を打ち付ける。

六穂の体を乱暴に犯す。財布からお札を抜き出していく。

「あっあっ！♥ これ駄目っえっ！♥ いっひっいっ！♥ こ  
んな快感味わったらツアッ！♥ んっおっほっ！♥ 深月いっっ

♥　いうゝうゝっ！♥　たしゆけっ♥　んっおほっおゝおゝおゝ  
っ！♥」  
「あゝっっ♥」

破滅的な快感に六穂の体が打ち震えていく。彼女の助けを呼び声が固まっていた、深月の意識を取り戻した。

彼女は君の背後に回ると、そのままぺたんと腰を下ろす。

顔を君のお尻に間にくっ付けて、舌を伸ばしてきた。

「んっえゝうっ♥　お尻っ♥　れうりゆっ♥　ふうま君のアナル♥  
ちゆちゆれっうっ♥　舐めますからツアアゝ♥　れろおつりゆう  
ゝっ♥　あまり六穂をイジメないでっ♥　んっちゆりゆりゆっ♥  
あげてくださいっ♥　ちゆりゆっうっ♥」

皴に沿って舌を這わせたかと思うと、そのままぐりぐりと腸内まで伸ばしてきた。

腸液まで舐めとろうとするような、激しいアナル舐め奉仕。君は後ろの窄まりに直ぐに黒い霧を纏わせて、彼女の舌を締め付けていく。  
「んっやつ！♥　ふうま君のアナルっ！♥　んうゝちゆりゆっうっう  
っ！♥　舐めてるだけなのにツイゝいゝっ！♥　れりゆ  
りゆっうんゝんゝっ！♥　感じてしまいますっ！♥　ちゆれう  
りゆっおゝおゝっ！♥　がっまんできませっっ♥　んれっえ……ん  
ゝんゝっうゝうゝうゝ！♥」

ぐちゆぐちゆと君の背後からも、重い水音が聞こえます。深月が君のお尻の穴を舐めながら、股の口を弄っている音だった。

「んっおゝひっぎいゝっ！♥　わ、わかった！♥　おっおゝっ！♥  
わかったからっあゝっ！♥　あっうゝうゝっ！♥　ふうまに全部お  
貢ぎするからツアゝっ♥　いっううっひいゝっ！♥　お尻これ以  
上っうっ♥　んっうひっおゝおゝっ！♥　アナルまでっ♥　ん  
ひいひいゝいゝいゝっ！♥」

六穂の懇願の声を受けて、君はお尻を叩くの辞める。そのまま尻肉の間にある窄まりに、指を入れて掻き混ぜる。

「んっべええっりゆっえあゝっ！♥　こっれだめでっすっ！♥　れう  
ちゆれえっ、んいゝっ！♥　ふうま君のアナル舐めてっ♥　ん



ッ！♥ 子宮に直接きてるうっ！♥ おっおっおっおっ！♥  
あ、あなる弄りだめっえ！♥ んおっおおっ！♥ 深いのくるうっ！♥  
うっ！♥ うっ！♥ 中出しアクメでえっ！♥ いっ  
ぎゅっうっ！♥」  
「んつきゅ、れりゅうっ！♥ わ、わたしもイキますっ！♥ れっう  
りゆる、おおっ！♥ ふうまくんのアナル舐め舐めしてっえっ！♥  
♥ ちゅれっう、うっ！♥ ひっ！♥ 舌絞められてえっ！♥ ん  
ちゅっえうれる、うっ！♥ 奉仕自慰でっえっ！♥ れお  
りゅっ、おっ！♥ いっきます！♥ いっぐっうっ  
うっ！♥」

机を両手の爪で引っ掻きながら、六穂の背筋が伸ばされていた。  
ぎゅるるうっ！と君の肉槍が彼女の膣襞で、痛いほど締め付けられる。

お尻の穴もピンツと伸ばされた深月の舌が、刺激してくる。

精液を吐き出しながらも来る快感。君の金玉で増産された白濁液  
が、更に吐き出されていった。

「んっおっおっ！♥ ほおっ！♥ まだきでっるっうっ！♥ くひっ！♥ い  
っ！♥ 子宮とけちやつうっ！♥ おっおっおっ！♥ イッ  
てるのについっ！♥ いっ！♥ まだいっぐいっぐ  
いっ！♥」  
「んっれりゅっ！♥ いっ！♥ 出してあげてください！♥ れるれろお  
っ！♥ いっ！♥ 舐めますからッアっ！♥ あっ！♥ はっ！♥  
れりゅっおっ！♥ 私もまたきます！♥ んっえっひいっ  
いっ！♥」

肉棒から雄液を吐き出しながらも行われる、深月のアナル舐め奉  
仕。

脳髓が融けそうなほどの快感に、君は彼女の黒髪を掻き乱してい  
た。六穂のお尻もぎゅっ！と掴んで、絶頂の快樂に耐える。

その快感もゆっ！と収まり出す。

歯を食いしばりなら耐えていた快感が終わり、君はふうっ！と息を大  
きく吐いた。

そのまま君はゆっ！と腰を引いて、肉棒を抜き出す。指もアナル

から抜く。

「んおっ ♥ おっお——っっ ♥」

「んべえっ、りゅううっ ♥ わぁ 凄い事になってますね ♥」

君の後ろで立ち上がった深月が、感嘆の声を上げていた。彼女の言うとおり、膣肉から肉槍が出された六穂の格好は、ひどい事になっていた。

先ほどまで弄られていたお尻の穴は、ぱっくりと開いている。君の肉キノコを啜え込んでいた陰口も、滝のように精液を垂れ流している。尻肉も二つとも紅葉が、しっかりと咲いていた。

エナメル質のスカートがわずかにまくれ、ひものような黒色のパンツが白濁液で汚れる。

奴隷の犯された女王様のような恰好。

オークにレイプされても、こんなことにはならない光景。

だが、君はこの程度で許す気はない。

二度吐き出しても、彼女達が君に盛った媚薬は、まだ効いている。ぐっぐつと再生産された雄の欲望汁が、雌を犯せと命じている。

責任は取ってもらおう。

冷静な思考の君も頷く。

Sスイッチは解けずに、君は二人を更に追い詰めることに決めた。長い夜が今始まろうとしていた。

新作

清水神流と七瀬舞★

授業も終わった放課後。誰もいない教室で君は、学生服に身を包んだ七瀬舞と共に淫蕩に耽っていた。

「んもうっ♥ 学校でこんなに勃起してるなんてっ♥ ちゅうっ♥  
ちやんと沈めないとスウマになってしまいますっ♥ んっちゅうっ♥  
だからちやくんと抜き抜きしておきますねっ♥」

舞が君の唇に何度もキスを落としながら、ズボンの中の肉棒に触れてくる。

別のクラスではあるが、彼女は君とセックスするチャンス逃さない。今回も周りに誰も居なく、君が暇な時を狙って教室に押しかけてきていた。

「ちゅれるっ♥……っ！」

キス手コキによる快感を君も楽しんでいると、突然舞が扉のほうに振り返った。

「誰かきます……ふうまさん。こっち」

舞がそのまま、君の腕を引っ張る。君はそれに抗わずに足を動かしながら、ズボンを上げてさらけ出していた肉槍を隠す。

片隅まで移動して、白い髪の少女は君に体を押し付けた。そのまま彼女のブレザーから、何枚もの紙が飛び出て行った。

「紙気・紙隠し」

ボソリと言う舞の言葉と共に大量の紙に包まれる。様々な色の紙を操る事により、背景色と同化し姿を消す術だ。それによりちよつとやそつとでは見つかる事はないだろう。

「だれ！ もう学校も閉まる時間よー！」

ブルーのおかっぱに小さな背丈。その割に大きな胸が特徴の清水神流が、教室のドアを大きく開けて入ってきた。



キヨロキヨロと教室全体を見渡すが、舞の術によって姿を消している君達は、見つかることはなかった。

そのまま去るかと思っていると、神流がある一点を見つめて佇んでいる。

「どうしたんでしよう」

聞こえないようにボソリと君の腕に小さな胸事くつついた舞が呟く。

君達二人が隠れながら注目していると、神流がそそくさと足を動かし始めた。そのままある机の前まで移動して行った。

「あそこはふうまさんの机です」

ポソポソとつぶやく舞の言う通り、そこは君が先までいた机だった。

「……」

じつとその場で立ち尽くす神流。彼女はそのまま周りを、キヨロキヨロ見渡す。後ろからでも白い可愛いパンツが見えるくらい上げた。

「わあ……かんちゃん先輩……っ♥」

君の体に張り付く舞が、思わずボソリと言葉を漏らした。それだけのことを彼女はしている。

神流はそのまま君の机に、股の淫器を擦り合わせているようだった。

実際カタカタと小さく机が震え、彼女の腰がカクカクと前後に動いている。

スカートを押し上げていない片方の腕は、胸のあたりで前に向けられているようだ。恐らくは神流の身長に合わない巨乳を愛撫していることだろう。

普段はしっかり者で君の指示にも答えてくれる、頼れる先輩でもあった清水神流が、君の机で角オナニーをしている事。密着して来る舞のムスクのようなメスの濃い匂いや、当たる体の柔らかい感触などにより、思わず君の肉蛇の鎌首が上がっていく。

「……ふうまさんっ♥ もう、いけませんよお♥」

君の股部分のズボンが大きく膨らむのを、君に抱き着く雌が見逃すはずもなかった。

舞が君を責めるような目線を向けながら、淫靡な笑みを浮かべた。「かんちゃん先輩の恥ずかしい所を見て、興奮したんですか?♥」

ボソボソと甘い声で囁かれながら、君のズボン越しからコシヨコシヨ愛撫し続けられる肉棒は、すぐさま力を取り戻し完全に起き上がった。

「んんっ……あっ♥ふう、ま♥」

君の机に股間の膾花卉を擦り続ける神流が、濡れた声で君の名前を呟いた。

彼女にも聞こえたのだろう。舞が君と神流を何度も見直すと、納得したようにコクリとうなずいた。

舞が指を振ると君達を隠していた紙の結界が、無音で開いていく。その箇所からこっそりと舞が神流に近づく。腕を引っ張られる君も、静かに歩いていった。

音も立てず気配も断ち、君たちは机で角オナをし続ける神流へ近づく。

気づきもしない彼女の近くまで君を招いた舞。前に立つ舞の背中が君の制服越しに胸に当たった。

「んっああっ♥あ、ふうまっ♥わ、たしもっういっ♥」

「はあい、ダメですよっ♥」

カクカクと腰を君の机に向かって振る神流の体を、舞から吹雪くように出ていく紙が拘束。

「っえー」

「ふふふ、いけません。誰もいない教室でふうまさんの机でオナニーするなんてっ♥そんなしていると悪い狼さんに食べられちゃいます♥」

舞がくるくると指を振ると、紙に拘束されたロリ体系巨乳の少女が、君達に向き直る。神流の視界に、君と舞が映ることになる。彼女

の水色の瞳としつかりと目が合う。

「舞にふうま……つや 見ないで」

手で秘部を隠そうとするが、紙の拘束はがちりと彼女の体をからめとっていた。

紙での拘束は最低限だ。現にロリ巨乳もパンツがずれた淫口も、君の視界に入っている。

顔を紅潮させながらも、神流は君の視線に恥ずかしそうにしていた。

「ダメですよ♥ 誰もいないふうまさんの机で♥ オナニーなんてしちゃうエツチなかんちゃん先輩にはあつ♥ お仕置きです♥」

舞のひらひらした腕の服から、大量の紙が飛んでいく。そのまま

「紙気・人離」

と人避けの結界を貼った。これで君達のいる教室には誰も来ない。何があっても、だ。

簡単に結界を貼った舞が、ニンマリと淫靡かつ意地の悪い笑みを浮かべた。

「私とふうまさんのラブラブセックスを見てもらいま〜す」

「そんなんっ」

裂けた口から出る言葉と共に、君の肉棒をズボンから取り出す舞。片手が君の首に絡まりガツチリと拘束されたため、君はそれをされても逃げられない。

「見てください。この黒光して傘の貼った極太チンチンっ♥ はっあ

♥ これが、私のマンコに入っちゃやうんですよっ♥ んうっ♥

「はっあ、嘘っ♥ あんなに大きいのが舞の中につ♥ んっうっ♥

この紙っ♥ やっあんっ♥」

ぐにゆりと拘束していた紙がうごめく。触手のように先のほうで、神流のピンクのブラに包まれた巨峰の形を変える。ピンピンツとピンク色の乳首をはねていた。

「私たちのラブラブセックス見ながらあつ♥ ふっうっ♥ かんちや

ん先輩は神のつたない愛撫で行っちゃってくださいっ♥」

「あつあつ♥ そんなあつ♥ 舞の意地悪!♥ いじわる〜っ♥

んっ♡」

舞のいたずら心が全開だった。君との性行為で、快樂を楽しむようになった舞らしい行動だ。

若干楽しくなってきた君も、舞とのセックスを見せつけるように動く。

「あっ♡ ふうまさんっ♡ んっんっ♡ オチンポすりすりやつです♡ くっうっ♡ そのまま入れてくださいっ♡ んっおっほおっおっ♡！」

舞の希望通りに背後からぐちゆりと君の肉棒を股の口に叩き込む。すっかり君専用の膣口となった彼女の中は入った瞬間に歓迎するようにうごめく。

「おっおおっ♡ ふうまさんの雌墮としのヤリチンポっ♡ おおっおっ♡ 子宮をちゅっちゅってついてきますっ♡ ふっぐっ♡ かんちゃん先輩わかりますっ♡ あっ♡ ここまで入ってるんですよおっ♡ おっおほっおっ♡！」

「あっあっ♡ すっごいいっ♡ んっうっ♡」  
舞の体を抱き留めながら、君は腰を突き動かす。

抜いて入れるたびに舞の淫口から、ぐちゅぐちゅと重い水音が奏でられる。

白く長い髪から甘酸っぱい香りが、君の鼻に充満してきた。

激しい性行為を開始した君達を、神流が羨ましそうに見ている。

「おっおっ♡ ふうまさんキスもしてくださいっ♡ ちゅっん、おっおっ♡ 気持ち良すぎてっえっ♡ んっちゅれりゅっ♡ おっ、あっ♡ 頭溶けそうですっ♡ うっぐっ♡」  
「はっあっ♡ 舞の顔っ♡ 綺麗っ♡ うっんっ♡」

君の肉槍からの快樂におぼれる舞の顔を、神流がじつと見つめていた。

紙の拘束が若干解けている。だが、彼女は自由になった手を自身の巨乳と股の口に動かしていた。

「おっおっ！♡ ふふっ！♡ かんちゃん先輩っ！♡ んっおっ！♡ ふうまさんのオチンポ様っ！♡ おっ！♡ カリも大きくっ

てえっ！♥ んっうゝっ！♥ 私の中がっあっ！♥ あゝっ！♥  
削られてますっ！♥ んっうっ！♥ 子供のための肉袋までっえっ  
！♥ えゝひっ！♥ 亀頭でどどんノックしてくるんですっ！♥  
ほっおおっ！♥」

「あっあっ♥ 舞っ♥ そんなに気持ちいいのっ♥ ふうまの雄ペニ  
スっ♥」

「んっんっ！♥ そうですよっ！♥ んっうゝっ！♥ そこら辺  
の雑魚チンポの事なんてっ！♥ んっおっ！♥ すぐに忘れちゃい  
ますっ！♥ おっおっ！♥ ただのパコパコハメハメじやありませ  
んっ！♥ おっんっ！♥ 本物のセックスっ♥ あっは…あっ  
！♥ したくありませんかっ♥ ふっうっあゝっ！♥」  
「んっうっ♥ はっあっ♥ し、したいっ♥ いっ♥ したい  
のっおっ♥ んっうっ♥」

君の肉棒につかれながら、神流に挑発的な言動を繰り返す舞。

神流自身も今の異様な状況で、頭がゆでっっているようだ。

ちろちろつと舌を突き出して、君のほうへ媚びるような視線を送っ  
てくる。

「んっふ、かんちゃん先輩っ♥ んっちゅっっ♥」

「んちゅ、れりゅっ♥ はっあ、舞っ♥」

「ちゅつれりゅっ♥ かんちゃん先輩の唾液っ♥ れりゅりゅっ♥

甘いですっ♥」

「んっちゅっ♥ 舞の唾液もっ♥ 美味しいっ♥ やんっ♥ 舌噛ま  
ないでえっ♥」

君の肉剣の先で、まいと神流がキスを交えていた。

君の肉竿を加える雌がキスを交えている。

ぞくりつと背筋に寒気のような快感が走った。

「んっおっ♥ ふうまさんのデカオチンポっ♥ おっ♥ 中で跳ね  
ましたっ♥ んっうっ♥ ふふっ♥ キス見るの好きなんですっ？  
♥ おっっ、ひっいっ♥」

君に向かって、小生意気な笑みを浮かべる舞。彼女を黙らせるために君はガツンつと腰を大きく振った。

「おっおっ、っ！♥ ふうまさんの鬼畜ペニスっ！♥ うっうっ、っ！♥ スウマっさんっ！♥ 黙らせアクメなんてっ！♥ おっおっ！♥ ひきよっうっ！♥ おおっほおおっ！♥」

「あっあっ♥ 舞の体が震えてるっ♥ んっんっ♥ イクのっ？♥ あっっ♥ わたしもっおっ♥ んっうっうっ！♥」

君に抗議の声を上げる舞だが、肉竿の突き動かしで喘声に紛れてしまっていた。

そんな舞を見ながら、神流も自身の体をいじる掌の動きが、激しくなっている。

君の肉棒にフィットした舞の膣肉が、ぎゆるぎゆると締め付けてきていた。

ぴりぴりつと腰のほうから、脳髓に突き刺さる快感がくる。

一気に腰を引き、一番奥に肉鞘を叩き込み、白濁流を流し込んだ。

「あっあっはあっあっ！♥ ふうまさんの子種汁っ！♥ おっっ

！♥ 子宮焼けるくらいっ！♥ いっいっうっ！♥ あっいのお

おっ！♥ おっおっおっ！♥ きてまっしゅううっ！♥

うひっいっ！♥ 中出しアクメっでえっ！♥ いっぐっうううう

うっ！♥」

「あっあっ♥ わたしもっおっ♥ あっっ！♥ んっんっんっん

っんっ！♥」

雪崩のように君の精液が、舞の子宮内に流れ込んでいく。舞の背中がぐんつと、折れそうなほど反りかえる。

君の顔に真っ白な長い髪が、ぱらぱらと当たった。汗も舞い散り、きらきら輝く。

同時に神流も、くつと喉を晒しながら、絶頂を味わっていた。

人払いの結解を張っている教室内で、雌声の二重奏が奏でられている。

「あっあっ〜っ！♥ ふうまさんの射精長いんですよっ！♥ おっっおっ！♥ またくるっ♥ あくめつくっうっ♥ うひっい

「いっいっいっいっ！っ！っ！」

「あっ♥ あっ♥ 舞まだイツてるの♥ すごっいっ♥」

がくがくと全身を痙攣しながら、雌声を喉から振り絞っている舞。その様子をじつと神流が、物欲しそうに見ていた。

ぐつと舞の小尻に君の肉根を、くつつけて最後まで精液を吐き出し終える。

「おっおっ♥ やつと終わりましたっあっ♥ ふふっ♥」

がくがく震える腰で、舞は何とか立っていた。

そのまま前にいる神流を見て、含み笑いを漏らす。

机の上でだらだら愛液を漏らしながら、君と舞を見つめる神流。

彼女の熱視線は、肌が焼けそうなほどだった。

「あっっ♥ お、終わったのっ♥ 終わったんでしょっ♥」

「ええっ♥ 終わりましたよ♥ かんちゃん先輩♥」

「だ、だったらっあっ♥ ねえっ♥ お願いっ♥ つぎはっ♥ ね♥

ねっ♥」

両足を開いて、股の口を手の指で開いて、神流が君を誘う。

「んっうっっ♥ しょうがないですね♥ ふうまさん♥ かんちゃん

先輩を犯してあげてくださいっ♥ んっうっ♥」

ぐぐつと腰を上げて、君の肉棒を舞が秘口から抜いた。

どぷりつと君が吐き出した白濁液が零れていく。

「んっうっ♥ さあふうまさんっ♥ ザーメン出したばかりなのにつ

♥ なおそそり立ってるその強チンポっ♥ かんちゃん先輩につ♥

見せてあげてくださいっ♥」

そのままさわさわと君の肉棒を触れながら、前から横へと退いていった。ふわりつと舞う彼女の白い髪から、汗が飛んで行った。きらきらと近くの机に降り注いでいる。

「はっあっ♥ さつき舞に射精してるのにつ♥ まだ大きいままなのっ♥ んっうっ♥」

君の肉槍を見た神流の喉が上下に動く。

たらたらと淫口から零れる愛液が、机に降り注ぐ。

「わ、わたしにもっお♥ ふうまのっ♥ カリ高極太チンポっ♥ わ

たしのおマンコにいつ♥頂戴♥」

君の腕を手で引いて、自身の下の口に入れるように囁いてくる。

普段は厳しめの先輩として、君の生活態度やさぼり癖を説教してくる。

そんな彼女が、まるで君のペニスをもらうためなら、何でもしそうな淫乱女になっていた。

君の胸で雄の本能が燃え盛る。

君は自身の欲望に背を押されて、黒い霧を纏う肉槍を、濡れた肉鮑に一気に叩きつけた。

「おっおおお！♥ふうまのおつきいつ♥おっ♥太魔羅っ♥  
はいっでぎっだっあっ♥おおっおっくっくっ♥」

ぐちゆりと重い水音と共に、君の肉竿を神流の淫口が受け入れる。

きつい締め付けと共に、肉褰が奥へ奥へと導いてきた。

「おっおっ！♥だめっ！♥子宮っ！♥うっうっ！♥亀頭で  
ちゅっちゅするのっおっ！♥ほおっ！♥だめなのおっ♥  
おっひっ…いっ♥この雄に媚びろっつ！♥いっうっ！♥  
子宮がキュンキュンしながらっ！♥はっあっ！♥言っつてく  
るっおっ！♥おっおっおっ！♥」

ぐいっつと両手両足を君の体に絡めてきた。足がぐいぐいっつと奥へと誘っている。

彼女の奥底に亀頭が当たった瞬間、子宮口が媚びるようにくちくちと噛みしめていた。

「おっおっ♥ふうまのおちんぽでえっ♥ひっうっ♥中が変  
えられてるっ♥うっうっ♥太くて高いカリがっあっ！♥  
あっあっあっ！♥えぐってりゅっうっ♥うっひいっいっい  
いっ！♥」

「わっあっ♥かんちゃん先輩があっ♥ふうまさんのおっ♥え  
ぐっい極太オチンポでえっ♥獣みたいに喘いじやってますっ♥」

「あっあっ♥あまり見ないでえっ♥恥ずかしい顔してるか  
らっあっ♥あっああ♥」

顔を隠そうと神流が両手を上げだす。



諸税の感じる顔が好きなのは、すかさず彼女の両腕を拘束。

そのままじつとブルーハワイ色の瞳と視線を交える。

「やあつああ、っ♡ ふうまの意地悪うっ♡ おっお、♡ 変な声も聞かれちゃうっ♡ うっうっうっうっ！♡」

涙とよだれを垂れ流しながら、神流は歯を噛みしめて喘声を我慢しようとする。

「あゝっ♡ ふうまさんのドSっ♡ そんな鬼畜ふうまさんには♡」  
意地悪心を発揮している君を見て、舞が君の後ろで地面に腰を下ろす。

そのまま真つ白な両手で君のお尻に触れた。

「私もスウマさんにいっ♡ んべええっ♡ 悪戯しちゃいます♡ んべっりゅっちゅっ♡」

君の尻肉が開かれ、窄まりに暖かい肉舌が這ってくる。

ぞくりと寒気のような快感が背筋に走った。

がくりと腰の力が一瞬抜けて、肉竿が子宮に密着。そのまま体重をかけてしまう。

「おっおおっ！♡ 子宮持ち上げられてっ！♡ ぐっひっうっうっ！♡ 内臓までおかされてりゅっ♡ んおお、っ！♡」

「れりゅっ♡ んふっ♡ ふうまさん専用舐め奴隷のっ♡ れえりゅっ♡ アナル舐め奉仕でえっ♡ んれろおっ♡ ちゃん先輩につ、出してあげてくださいっ♡ れろれうっ♡」

ぎゅるりと神流の膣内が君の肉槍に巻き付き、牛乳絞りのように蠢いた。

お尻の穴も、舞の小さな舌が隅々まで舐めてくる。

背筋が泡立ち腰の震えが激しくなってきた。

力が抜けそうな快楽を受け止めて、君は最終スパートを駆け抜ける。

「いっついお、おっっ♡ 中で膨らんでっ！♡ んっううっ！♡ ふっうまああ！♡ キスっ！♡ キスしてっ！♡ んっあん、ん、んっ！♡」

「れうっ♡ お尻の穴震えていますっ♡ んれりゅううっ♡ かんちや

ん先輩にっ♡ ちゅれりゆうっ♡ 中出しアクメの味っ♡ 覚えさせ  
てあげてくださいっ♡ んれるおおっ♡」

君の肉槍を神流の膣肉が必死に食い込み引き絞る。腸内の液すら舐めとる舞の激しいアナル舐め。

金玉で増産されていた白濁液が一気に肉剣を上ってくる。

パチパチと脳内で火花が散り、君の白濁流を止めていたタガが外れていった。

「おほおっお♡ おっ♡ ふうまの熱いザーメンでえっ！♡ あ♡ あっ♡ 子宮とけっ！♡ おっ♡ とけりゆううっ♡ 一緒♡ 一緒にい——いっぐううう♡ うううっ！♡」  
「んっうっ♡ ふうまさんのお尻の穴っ！♡ ちゅりゅれおっ♡ 私の舌っをお！♡ んりゅっう！♡ 締め付けてくるっ！♡ んれろっおア——っああ♡ あんっ！♡」

がくがくと腰が震え、腰から下が溶ける快感が君を襲う。

人払いの結解を張った教室で、神流が雌越えの絶叫を上げて君に縋りつくように抱き着いていた。

腸内で舞の舌が痙攣しながらも、奥まで舐め回してくる。

「んんっうっ！♡ お腹にまだ出てりゅっうっ♡ おっほおっおっ！♡ イッデるのについっ！♡ いっうっうっ！♡ まっだっ♡ おっほおお♡ おっおっ！♡」

「んれりゅっ、んっんっ♡ ふうまさんの長射精っ♡ れううっ♡ かんちゃん先輩溺れちゃいますっ♡ んべえ、っりゅっおっ♡」

射精しながら行われる舞のアナル舐め奉仕で、ぐんぐん金玉が精子を増産している感じがした。

ぐりぐりっつと子宮口に祈祷を押し付けながら、君は肉鞘に残すことなく射精していく。

直接子宮に注がれるザーメンの熱に溶かされながら、神流は喉を晒して反り返りながら君に必死に抱き着いている。

密着した膣口が肉根をかみちぎらんばかりに食いついていた。

腰が抜けそうな快感の波を超えて、君はようやく目を開ける。

「ふっう、やっとおわったのおっ♡」

「んっべっはあっ♥ かんちゃん先輩っ♥ 大丈夫ですか？」  
「んっんっ♥ まだイってる感じがするわ♥」

君の射精快樂を乗り越えた神流が息を整えるように深呼吸。舞も君の後ろから話しかけていた。

二発出したらとところで収まりきららない君の肉棒。先ほどの舞のアル舐めの所為でなお勃起中だ。

「んっっあっ♥ まだ中で大きいままっ♥」

「ふうまさんのヤリチンポっ♥ まだまだできますね♥」

「ふっうふうっ♥ そ、そうね♥ まだ射精できるなら付き合っ  
てあげないといけないわね」

神流の青い瞳と舞の赤い瞳が君に秋波を送る。

とろんつと快樂に溶けた目が媚びた目つきで君を見ていた。

がぜんやる気になった君が、このまま二人を貪る事になるのだっ  
た。

## 高坂静流★

夕焼けに染まった学園の廊下を君は物音を立てずに駆け抜けていた。

今いるのは五車学園ではなく、また別の学校だ。

普通の学校のはずだが、その生徒からある魔薬がばらまかれているという情報が入る。

嘘か本当か確かめるために、高坂静流と共に君は侵入していた。

一時的な留学生という形で入った君は、静流と共に学園中を探っていた。

お互いに警戒心が強いいため、連絡を緻密に行っている。

だからこそ、定期的な連絡が静流から途絶えたとき、君は学校内を即座に搜索していた。

あちこちを探し回り、ようやく違和感のある場所を見つけられる。入ろうとすると、ほかの場所へ行こうと体の向きが変わった。

よくある人除けの結界だろう。君は手に黒い霧を集めて、ドアを思いつきり殴る。

ガツンと教室のドアが中へ飛んでいく。

「だれだ！」

君の前に触手の塊の怪物が現れる。その先には静流が触手に絡まり口の中を凌辱されていた。

「んっふ、っはあつ。ふうまくん！」

口内に侵入していた触手を吐き出して、静流は君の名前を呼ぶ。

即座に君は懐からクナイを取り出して、敵の怪物に向かって投げつける。

「無駄だ！」

幾つか突き刺さるが、あまり効果はないようだ。

むろん君はここで倒す気などない。目的は敵が君のほうに意識を向けることだ。

「この程度か！ 雑魚が！」

触手が君に向かつてくる。先が尖っていて、そのまま立っていれば串刺しになるだろう。

横に向かつてジャンプしながら、君は何とか避けた。後方の壁に触手が突き刺さっていく。

「ふん。避けたが、だが次は」

得意げな声色で怪物は触手のかまを上げた。

だが、それで終わりだ。

「あなたに次はないわよ」

触手に捕まっていた静流が、いつの間にか敵の背後に立っていた。手にはとげとげしい鞭が握られている。

そのまま縦に向かつて振られていく。

「——っ！」

悲鳴を上げる暇もなく、触手の塊の姿をした怪物は縦に引き裂かれる。そのままばたりと倒れてピクリとも動かなくなる。

君は近づいて一旦蹴ってみる。死体は何の反応もない。

「ふっう~~~~っ ♥ 何とかなつたみたいねっ ♥」

気丈な笑みを静流は君に向かつて浮かべる。だが、体も足も振るえている。

おそらくあの怪物の体液には、濃い媚薬の効果があったのだろう。

君は心配そうに肩に手を伸ばしただけで、

「ふっう~~~~っ ♥」

がくりと震えながら腰を落とした。かなり効力が強い媚薬だ。このタイプは精液を大量に含まないと、解毒できない。

媚薬の解毒剤は残念ながら持っていない。

ひとまず君は支援部隊に連絡して、この場の証拠隠滅を頼んだ。

「ふ、ふうまくん ♥ んっう ♥」

そのまま静流を抱き上げて、教室の場から去っていく。

「はっあはあっ ♥」

息荒く顔が紅潮した静流を即座にセーフハウスに運んだ。

「んっうっ ♥ ぐ、ぐめんなさいっ ♥ 油断したわ ♥」

いつもの静流らしくない。気弱な台詞だった。

君は気にしないように言いながら、目の前にあるセーフハウスのドアを開ける。

そのまま中に入り、ドアを閉めた。

「うっうっ♡」

甘くだが、呻くような声が静流の口から漏れる。

彼女自身体を抱きしめて耐えているが、かなりきついようだ。

静流の苦しみを治療するには君の精液しかない。

近くのベットに彼女の体を横たえた。その時、

「もう無理っ♡ ごめんなさいねっ♡ ふうまくんっ♡」

ぐいっと腕が引つ張られる。

そのまま君の腰の上に静流の真っ白な巨乳が乗っていた。

火傷しそうな程彼女の肌は熱を持っている。彼女の白い巨峰が乗っている君の腰が埋まりそうなほど柔らかく大きかった。

「はっあっ♡ これっ♡ もう無理なのよっ♡ ふうまくんのオチン

ポっ♡ 貰うわねっ♡ んっうっ♡」

彼女の赤い唇が君のジツパーを咥えて、下ろしてくる。

君は慌てながらも、黒い霧を肉棒にまとわせた。

すぐに開いたジツパーから、ぷるんっど勃起した肉塊が現れる。

「あっんっ♡ すっっ♡ スンスンっ♡ おっ♡ 雄の臭い濃い

わあっ♡ んれっえっ♡」

君の肉根付近を舐めて、そのまま金玉の部分に舌を伸ばしてくる。

赤い縁眼鏡に肉棒が当たり、若干靨かかっていた。

静流の知的な証である眼鏡を、君の肉槍が汚していることに、若干の興奮を覚えた。

「んっちゅっ♡ こっからっ♡ かぶっっ♡ 媚毒を消す雄汁っ♡

いっぱい頂戴ねっ♡ あむ、れろおっ♡」

金玉が静流の口の中で、唾液シャワーに塗れていく。生暖かい唾液の中で舌が飴玉のように転がしてくる。

流石は対魔忍随一の秘密工作員。性的な技も一流だった。

だが、やられっぱなしは君の趣味ではない。

君は黒い霧を纏う手を伸ばして、静流の長乳をもみ込む。

「んっうっ♥ ふうま君の手っ♥ きもっちいいっ♥ あっあっ♥  
今の状態だっとおっ♥ 直ぐにイツちやうのっおっ♥ うんっん  
んっ！♥」

媚毒はだいぶ彼女の体を、犯しているようだ。

ちよつともんだだけで、ビクンっとな体が震えている。

ぞくりと雄の本能が泡立つ。

普段ならこの程度鼻で笑う静流が、君の性技で初夜の処女のように喘いでいる。

ぐいぐいつと指をばらばらに動かし、彼女が感じるように揉んでしまふ。

「はっひいいっ♥ だ、だめなのよおっ♥ い、今ふうまくんに胸をもまれるとおっ♥ んおっ♥」

静流が君に胸をもまれて、口から嬌声を漏らす。黒い霧と媚毒の相乗効果は、彼女に激しい快感をもたらしていた。

かちりと君のS心の鎌首が持ち上がる。

胸を包んでいる布をはがして、ピンク色の乳首を晒した。

「んっうっ！♥ 乳首も駄目っ！♥ もっう、生意気よっおっ！♥  
ふっうっ！♥ パイズリするからっ！♥ はあっ！♥ 早く出しなさいっ！♥ っうっ！♥」

プルプル震えていただけの静流が、君の肉キノコを爆乳でパイズリしてきた。

たっぷんたっぷんと君の肉棒が、お餅のようにしっとり柔らかかな爆乳が擦り続ける。

丁寧に手入れされた絹肌の振れ心地が、肉槍全体を包み込んでいた。

百戦錬磨の君でも気合を入れないと、すぐさま射精しそうな快感である。

「んっんっ！♥ おっ！♥ ちよつとっ！♥ あっ！♥ 何我慢し

てるのよっ！♥ ふっうっ！♥ 早く出してくれないと私っいつ！  
♥ んっ……んっ っうっ くっくっ！♥」

乳首を指で挟んで遊んだ瞬間、ぐっつと歯を噛みしめながら、ぷるりつと体全体を静流は痙攣させた。

媚毒の効果はかなり強いようだ。普段は君を気ままに弄ぶ女教師を、思い通りにイジメれる。

燃え盛る雄の欲望の本能に素直になり、君は静流の爆乳をもみ込んでいく。

「んっおっ っ！♥ ほ、本当につ！♥ うっうっ っ！♥ ドSなんだからっ！♥ ふっぐっうっ っ！♥」

君に大きな乳肉を揉みしだかれ、軽い絶頂に打ち震えながらも、パイズリの動きは止めていない。

サラサラでもちっり柔らかな乳肉が君の肉棒を隙間なく包み込み、擦り上げていく。

だからだと彼女の口元から出る唾液が、暖かなローションの代わりになっている。

「んっうっ、もっおっ！♥ んっちゅ、じゅりゅりゅっ♥ んっんっ っ！♥」

瞬間ヒスイ色の目で君を睨んだ後、胸の間から出る君の亀頭を口の中へと飲み込んだ。

そのままぺっこりと頬をへこませるほどの、激しいバキュームフェラを開始した。

「んじゅっりゅりゅっ！♥ パイズリフェラしてあげるからっ！♥ んっぶじゅぶぶっ♥ 早く出しなさいっ！♥ んんっっじゅりゅりゅっ！♥」

そのまま吸い取られて肉棒が、引っこ抜かれるかと思うほどの激しいバキューム。

金玉から生産したばかりの精液を、そのまま引っこ抜かれるかと思うほどの快感だった。

「んじゅりゅっ、おっ っ！♥ ふうまくんのチンポっ！♥ 味が強くて舌が痺れちゃうわっ！♥ じゅぼぼっ！♥ カウパー舐めてるだ



けなのにつ！♥ んっおっおゝおゝ！♥」

だが、君の黒い霧を纏う先走り液はしつかりと、彼女の口内の感覚を向上させている。

パイズリフエラは諸刃の剣でしかない。

亀頭部分を吸われ、頬肉で擦られるたびに腰が溶けそうな快感が走る。静流もそのたびにビクンツと髪の毛を震わせて、汗を飛び散らしていた。

「んっうゝっうゝっ！♥ もっう、本当についつ！♥ おっおゝっ！♥ 壊れちやうゝうゝっ！♥ 早く出しなさいよっおゝっ！♥ うっうゝうゝっ！♥」

涙目になった静流の緑色の目を、じつと見つめる。

狩人は君で、かられる獲物は静流だ。

赤い縁眼鏡の奥にある緑色の目は、意識が快楽に塗りつぶされそうなのを、必死につなぎとめている様子でだった。

「んっうじゅっりゅっ！♥ お、お願いだからっ！♥ じゅっぶぐっう、んんっ♥ もうザーメン飲ませてっ！♥ 後で何してもいいからっあっ！♥ んじゅりゅぶぶっ、んおっ！♥」

懇願が聞こえ、言質も取った。肉根まで吸い取ろうとする、激しいバキューム。

君は我慢していたタガを外して、素直に黒い霧を纏う白濁流を吐き出した。

「んっぐっぶっうっ♥ ザーメンきたあゝあゝっ！♥ んぐっぶっふ、おっおゝおゝっ！♥ 全部飲むのっおゝっ！♥ んぐっじゅぶっぐっおゝおゝ！♥ 飲みながらっあゝっ——っぐっうううゝうゝうゝっ！♥」

吐き出した精液を静流が、喉を鳴らして飲み込んでいった。

口から零すことなく、バキューム音を鳴らしながら、肉槍を爆乳で絞るように押しつぶしていた。

シャフト部分にも残さない、と言わんばかりに口で搾り取られる。

「んっぎゅっぶぐっうゝうゝっ！♥ まだでっりゅっうゝっ！♥ んっぐ、ぶっふっ♥ ザーメンで、お腹いっぱいになっちやうゝう

っ！♥ うぐうぐんぐんぐんっ！♥」

口からくぐもった喘ぎ声を漏らし、肩と背筋ががくがく痙攣している。すでに汗で服装が透けていた。

それでも最後まで、君が吐き出した精液を、すべて飲み込んだ。肉棒から一滴たりとも静流の口内に吸い取られて、じゅぼツという音と共に口が離れた。

「んっぐぶっはあっ♥ んっぐんんっ！♥ 粘っこいし、臭いも濃いつ♥ 味もっお♥ んっぐおっ♥ 癖になりそうっ♥ んぐっぐ、はっあっ♥ けぷっ♥」

多くのザーメンを飲んだせいで、軽くゲップ音を静流は漏らす。ある種の下品な光景に雄欲が燃え盛った。

そして、  
「ふっっ♥ ふっっっ♥ まだ媚毒は消えないわね……むしろっおっ♥」

目の前がトロントと溶けて、赤い縁眼鏡の奥にある翡翠色の瞳が、君の勃起したままの肉剣を見つめている。

唇を赤い舌がじつとりと舐めていた。

発情したままの静流。彼女は先ほど君に言った。

何してもいいと……君のような雄には言っではいけない言葉だ。ただひたすらに彼女の極上の肉体をむさぼるために、静流の手を引いた。

「あっ♥」

甘い声を漏らす静流をうつ伏せにベットに乗せて、君は背後に膝立ちになる。

勃起したままの肉剣を、愛液でシミになった黒いパンツのところに向けた。

君の黒い霧を纏う指で軽く触れるだけで、  
「んっうっ♥ は、早くいれてっえっ♥ はっっ♥ はっっ♥ 体が疼いてっ♥ んっうっ♥ 堪らないのっ！♥」

ふりふりとたぶたぶの尻肉事、膣口が誘惑するように降られる。

流星は、対魔忍の秘密工作員。男の心をくすぐるすべを知っている。

る。

そんな彼女は今から君の肉棒で、快感に泣き叫ぶことになる。なんでもしていいといったのは彼女だ。

免罪符をかざして、君は静流を押し掛かる様に犯していく。

「ほっおおんっ！っ！♥ ふうまくんのペニスツウっ！♥ うっうっ！♥ 大きいっ！いっ！っ！♥ おひっ！♥ ごれっえっ！♥ おっおっ！っ！♥ 内臓までっ！♥ ふっぎゅっ！♥ 犯されてっりゅっ！♥ んっ！うっ！うっ！うっ！っ！♥」

両手でベツトのシーツを握り締めながら、静流の腰がガクンツと跳ねた。

ぐるりゆりゆっつと君の肉棒に絡みついてくる。思わずくっつと喉を鳴らす気持ちよさだ。

シャフト部分を三段階の形で締め付けてくる。名器の一つである三段締めだ。

数多く女を墮としてきた君も、本気にならざるを得ない。

君は一気に腰を引き、肉棒で子宮を叩くようにすぐさま突き入れた。

「おっおおっ！っ！♥ ふ、ふうまくんっ！♥ んっんっ！っ！♥ い、今はそれ駄目っ♥ おっ！おっ！おっ！おっ！♥ おっぢっりゅうっ！うっ！♥ ンぐッ——ンンンンンッ！♥」

枕を噛みしめて、自身の獣そのものの喘ぎ声を静流は抑えようとしていた。

それで耐えさせる気はない。

君は黙っているならと思いい、手を振り上げてパチンツと尻肉を叩いた。

「んっやっあゝあゝっ！♥ スパンキングしないでっえっ！♥ 今それされるっつおっ！おっ！♥ うっうっ！うっ！っ！♥」

瞬間枕から口を離して、静流の体が跳ねた。ぎちりっつと君の口角が上がる。

そのままパチンパチンツと手が、静流の尻肉を叩いていく。

「おっぎっついっ！っ！♥ やっあゝあゝっ！♥ 叩かれてるのについてっ！♥ おほっおゝおっ！♥ き、ぎもふいゝいゝのっおっ！♥ ふっぎっ♥ し、子宮口突くのもっ♥ やっめっ……あゝあゝっ！♥」

必死にシーツを破りそうなほど握り締めて、君が与える快感に耐えている。

獣の咆哮のような嬌声を上げて、静流は体中をビクンツビクンツと震わせていた。

まな板の上の鯛そのものだ。

君に食われるだけの獲物と化した彼女の肉体を、隅々まで味わう。

「ひっうっうゝうゝうゝっ！♥ ほ、本気なのっおゝおゝっ！♥ おっおゝっ！♥ ごれ、本気でええっ♥ 私をおおっ！♥ おゝっ！♥ 墮とすぎっいゝいゝっ！♥ いっひっうゝうゝうゝっ！♥」

乱れたブロンドの髪から汗の粒が飛び散る。

すでに淫口からぶしゅつと、何度も潮を吹いて君の腰を汚していた。

それでもきつと赤い縁眼鏡の奥にある翡翠色の目が、後方の君を肩と背中を曲げて睨みつけてきた。

「んっんんうゝっ！♥ わ、私を舐めないでくれりゅっうゝっ！♥ ふっううゝっ！♥ こ、こんな事っ！♥ おんゝっ！♥ いくらしてもっおゝっ！♥ むだなのっ……よっおっほおゝおゝおゝっ！♥」

うるさく言う口を黙らせるために、尻肉の間でパクパク蠢くアナルに指を挿入。

瞬間、君を跳ね飛ばしそうな勢いで、静流の腰がピンクツと震えた。力が抜けたように振り向きながら、睨んでいた静流の顔が枕に沈む。

ピクピクツと彼女の細い手と足が伸びて震えていた。

三段締めの際肉が、君の肉棒を痛いくらいに締め付ける。

瞬間ちよろりと君の肉棒から、白濁液が少しだけ漏れた。

「んっぎっうっうっ！♥ し、子宮がっ！♥ あっっあっっ！♥  
飢えてりゅっ！♥ うっうっ！♥ ふうまくんのっおっ！♥ お  
っほっ！♥ 精液欲しくってっえっっ！♥ うひっっ！♥ うず  
きゅうっうっ！♥ おっおっおっおっ！♥」

がくがく震える腰を抑えながら、君の肉棒が子宮口をノックし続け  
る。

ちゅぽちゅぽキスしてくる子宮口は、もう少しで君の肉棒を啜えこ  
みそうだ。

枕に顔を沈めながら静流は、ブンブン長いブロンドの髪の毛を  
横に振る。

「おおっおっ！♥ まっでっえっえっ！♥ おっおっ！♥  
そっごおっおっ！♥ よわいのっおっおっ！♥ は、入った  
らっああっ——あっあっくくくくっ！♥」

静流が入れないように懇願している間に、子宮口は君の肉竿に屈服  
していた。

彼女が話している間に、ごっちゅんっつと肉弾頭が子宮口をかき分け  
て中へと入っていく。

君には見えないが、静流の腹部は、肉槍の先の形に膨らんでいた。

「おっほおおっ！♥ じっいっっ♥ 子宮にはっりゅっうっ  
うっっ！♥ おっおっおっ！♥ やだって言っただのにいっい  
っ♥ いひっうっ♥ ふうまくんのっおっおっ♥ おっっ  
きちっぐうっうっ……うっうっうっうっ！♥」

お尻の肉がフルフル増えながら、静流の顔が枕に沈んでいた。

シーツがすでに皺に成る程、彼女の細く小さな手が握りしめてい  
る。

膣肉が君の肉棒をぎゅるりっつと隙間なく締め付けてくる。肉縄に  
三段階で締めてくる名器が君の脳髓まで痺れるような快感を伝えて  
きた。

子宮口も亀頭を喰いちぎらんばかりに、啜え込んでいる。

ぐりぐりと子宮の壁を亀頭で押し込むだけで、ピクンピクンツと静  
流の腰が震えていた。



いでっ！♥ あっあゝっ！♥ 馬鹿になっちゃっうっ♥ うひっおっ  
っ！♥ まだっひっぐうゝうゝうゝうゝっ！♥」

部屋中に雌声で絶叫を奏でていた。  
君の射精している間、静流は体がかくかく震えて、汗と涙と唾液を  
ベッドに振りまいていく。

密着した君の腰にも彼女の膣口から、愛液のシャワーが降りかかっ  
ていた。

君の長い射精もようやく終わりを告げる。

ふっつと息を吐いて、目の前の光景を目に移した。

「おっっ♥ おっくくっ♥ つっっ♥」

パタンツとベッドに体を落として、静流は呻くような声を漏らして  
いた。

顔が完全に枕に埋まっている。投げ出された手足もわずかに痙攣  
しているだけだった。

完全に意識が飛んだようだ。

一旦君はこぷりつと膣口から肉剣を引き抜く。

亀頭を名残惜しそうにちゅぷんつと話した淫口から、滝のように  
ザーメンが流れ落ちる。

むろんそんな光景で萎えるほど、君の欲望はやわではない。

さらに貪るために君は行動を開始するのだった。

## 篠原まり★

沢山の本棚の上には、かわいらしい人形。

ピンク色のベットシート。壁紙も女性らしくアレンジされている。まさしく少女のお部屋といわんばかりの場所に君はいた。

目の前にいる まりに招待されたのである。

お互いに本好きなこともあつたのだろう。

簡単に本を貸すだけが、議論交じりの感想の言い合いになつてしまった。

「やっぱり田上勘次郎の話の展開の仕方は神がかってますよ！」

だけどあの人は完結作品があんまりない。

「そうですねけど……どれも面白いですし……」

本好きの感想交じりの議論など、どう考えても長くなる。

お互いに時間を忘れて話し合っていると、いつの間にか外は暗くなつていた。

まいったなと君は頭をかく。

念のため帰らないかもしれないとは伝えてあつた。

しかし、彼女の親はまだ帰ってきてはいないとはいえ、通知もなしに泊まるわけのは、失礼だろう。

あたりが暗くても帰ろうと、君は立ち上がろうとする。

その時、

「あのおっ♥」

君の袖を握つて篠原まりが君を見上げている。

うるんだ薄緑色の目と、はあつと熱い気を吐く唇。

君を誘う雌の眼差し。

「今日は、親が帰ってこない日なんですよっ♥」

君の目の前で眼鏡の奥にある薄緑色の瞳がとろんと溶けた。

君の首の後ろにまりの両手がかかる。

彼女の願い通りに君は唇を押し付けた。



「んっちゅっ♥ あはっあっ♥ ちゅっ♥」

幾度か行われる軽く甘い口付け。

つたない恋人同士がするようなキスはすぐに終わる。

「んちゅっりゅっ♥ ふうまっさっあっ♥ んれっりゅっ♥」

艶がかかる声で君の名前が呼ばれた。

サツシのいい君は、すぐにまりの口内に舌を入れ込む。

侵入した君の舌粘膜を、彼女の地震の舌が歓迎するように絡みついてきた。

「れりゅっ♥ ふうまさんのっおっ♥ れりゅりゅっ♥ 唾液っ♥  
ちゅりゅっ♥ いっぱいくださいっ♥」

まりの甘い唾液と交換で、君の黒い霧を纏う唾液を入れていく。

感覚向上と好意の増加による効果は、まりを発情したかのような状態にさせた。

「んちゅっりゅるっ♥ ふうまさんのっおっ♥ んっちゅりゅっ♥  
舌っ♥ ずりゅれりゅっ♥ もっとおっ♥ れりゅっちゅりゅっ♥」

ナメクジのように互いの舌が絡まり、唾液を好感している。  
興奮したまりが、君のズボンの上から肉剣をさすってきた。

目の前で眼鏡の奥にある薄緑色の瞳が君を誘う。

このまま押し倒そうと思い、手を上に伸ばそうとした。

「んちゅっれっ♥ はあっ♥ 今日は私の番ですっ♥」

すうっと自然にまいは君の唇から口を離れた。

「えいっ♥」

そのまま君の肩を押してくる。

まりに押し倒された君は、痛みもなく地面に横たわった。

「んふふっ♥ あくむっ♥」

君に挑発的な笑みを浮かべながら、まりがジッパーを口で開けてくる。

ジジッと空いたズボンの隙間から、ポロンツと君の黒い霧を纏う肉槍が現れる。

いきおいのまま彼女のほっぺを叩いた。

「あんっ♥ ふうまさんのっ♥ んちゅっ♥ オチンポっ♥ ちゅ

れっ♥ 相変わらずっ♥ ちゅっちゅっ♥ 暴れん坊なんですからあっ♥ んっちゅっ♥」

顔を叩いた君の肉剣を、まりは愛おしそうに何度も口付けしてくる。

ピリピリツとした快感が背筋に走ってくる。

「んっちゅっ♥ こんなおおきくてえっ♥ はあっ♥ ぶっといオチ○ポはっ♥ 私のおっぱいで隠しちゃいまっすっ♥」

普段はまじめで気の弱いまりだったが、セックスの時はノリノリで淫靡な雰囲気を纏う。

そんなギャップが君のお気に入りだった。

「んあっ♥ おっぱいがあっ♥ んえええっ♥ やけどしちゃいそうな程っ♥ おっっ♥ 熱いですうっ♥ んっんっ♥」

彼女の巨乳で挟まれた肉棒が擦られていく。

潤滑剤代わりに、まりの舌から出された唾液が、ぐちゃぐちゃという水音を奏でていた。

ぽよんぽよんと跳ねるまりの巨峰。

目の前の魅力でな光景に耐え切れずに君は両手を伸ばす。

「んっっ♥ ふ、うまさんっ♥ んあっ♥ 今は私があっ♥ あんっ♥ ご奉仕するばんなのにいっ♥ いうっ♥ もっうっ♥ んあぁっっ!」

黒い霧を纏う君の腕が、まりの豊かな胸肉を揉みしだく。もにゆもにゆと柔らかくも、君の指に反発してくる肉質。

彼女特有の巨乳の触り心地は、いつまでも揉みたくなるほどだ。

「んっっ♥ もっうっ♥ ふうまさんはっあっ♥ いっあっ♥ わたしのおっぱいっ♥ あっっ♥ 本当にいっ♥ あっ♥ 好きなんですからあっ♥ はっあぁっ♥」

君に巨乳を揉みしだかれ、喘ぎ声を漏らしながらも、肉棒に対する奉仕の手は止めていない。

みっちりつと柔らかく反発力のある胸肉が、君の肉弾頭を何度も擦ってくる。

彼女の巨乳でも包み切れない、君の大きな肉竿。

まりは目の前にある君の亀頭に舌を這わせてきた。

「んっちゅれっあっ♡ あんっ♡ オチ○ポっ♡ おっ♡ 味が濃くてっえっ♡ んひっ♡ 舌が痺れちゃいますっ♡ んっれりゅっ、あっっ！♡」

パイズリで得た快感で、亀頭から先走り液が漏れ出していた。

まりの唾液と君のカウパーが混ざり合い、ぐちゅぐちゅと重い水音を奏でている。

周りにはかわいらしい人形や本棚。

本好きのまりらしい部屋だ。少女の部屋の中でセックスするとう状況が君の雄欲を刺激してくる。

その上で彼女を鳴かせるのは途方もなく楽しいことだ。

君はまりの巨乳を揉むだけでなく、ツンツと可愛らしくたっ乳首も刺激する。

「んひっいつ♡ 乳首っ♡ 弱い知ってるのについて♡ いっうっ♡ す、スウマさんのっおっ♡ おっ♡ サディストっオっ♡ オヒツイッ♡」

相変わらずかんじやすいなっ君はつぶやきながら、まりという女性楽器を鳴らす。

甘く甲高い悲鳴が彼女の口元から零れ落ちていった。

「んっうっ♡ パイズリツイっ！♡ いっうっ♡ するだけでっ！♡ あはっあっっ！♡ か、感じるっうっ！♡ んっうっうっ！♡」

歯を噛みしめながら、まりがぶるりっ震えながら嬌声の悲鳴を上げた。

たたりっ口元から唾液が零れ落ちていく。

軽い絶頂を味わう彼女の体を君は攻め立てていく。

「んっっおっ♡ ふうまつさん♡ んっっ！♡ いまつはっあっっ！♡ イッたばかりですからっあっっ！♡ おっ♡ ぱ、パイズリちゃんっ♡ おっおっおっ！♡ しますからっあっっ！♡ あっひいっ！♡」

体を微細に痙攣させながらも、まりは君の肉槍に対する胸奉仕を再

開。

まりの体温で暖かい真つ白な胸肉が、君の肉棒に密着しながら、何度も擦り上げてくる。

「んれりゅっうっ！♥ ふっうっ！♥ パイフェラしてるのについて！♥ れりゅりゅ、おっおっ！♥ 私のほうがっ♥ ちゅりゅっおっ♥ またっあっ♥ あむちゅっう、うっうっ♥ イっちやいそうですっ♥ んちゅじゅぶっんっ！♥」

飛び出している君の亀頭をまりが必死に吸い付く。

唇を伸ばし、頬の内側の肉で擦るように絡みついていく。

舌も傘の部分に這い舐め上げていた。

流石の君もそろそろ限界だ。

金玉で増産された白濁液が上がっているのがわかる。

「んれりゅっうっ！♥ んうっ！♥ オチ○ポっ！♥ おっおっ！♥ 震えてきましたっ！♥ あっは♥ 出そうですかっ？♥ んりゅっじゅぶっ、おっ！♥ このまま口の中についっ♥ じゅっじゅぶりゅっうっうっ！♥ 出してくださいっ！♥ じゅりゅりゅっぶ、おっ！♥」

漏れ出る嬌声と共に、まりの口が亀頭部分を完全に飲み込む。

そのまま勢いよくバキュームフェラ。

吸い込む音を奏でながら君の肉棒が口の中で吸い取られていた。

お返しに君はぎゅっつまりの乳首をつまみ、胸を揉みしだく。

脳髓が痺れるような快感が君を襲う。

腰からくる感覚に耐えることなく、君はタガを外す。

淫靡なバキューム音を聞きながら、君は肉槍の先から白濁液を放出した。

「んううぶうっぎゅっうっ！♥ あひゅいザーメンっ♥ おっおっおっ！♥ ふうまさんの雄液っいっ♥ いっうっ！♥ 飲みながらっ！♥ っいっくっくうっうっうっうっ！♥」

君の白濁液の本流を口で受け止めながら、まりの体がかくかくと痙

攣っていた。

眼鏡の奥にある薄緑色の目から涙が流れて、君の腰に落ちる。くぐもった嬌声による悲鳴が部屋に響いていた。

君達の以外にはこの家にはいないが、彼女の親でもいたら飛んでくような音量だった。

ガクガクまりの体が震えて、君の肉棒を真つ白な巨峰で擦り上げてくる。ぎゅつと絞められたパイ圧も激しく、搾り取られそうだ。

「んっぎゅぶっ ♥ まだでへっ ♥ んおっおっ ♥ お腹いっぱいについて ♥ いうっ ♥ なっちやいますっ！ ♥ んぎゅっじゅぶっぐぐくっ！ ♥」

それでもまわりは一滴も零さないと、肉棒に吸い付いていた。

こくりこくりと喉を鳴らして、君の肉棒から胃へと白濁液を飲み干していった。

何度も吸い込むように絞られていた肉キノコも、精液を吐き出し終えていく。

激しいバキユームフェラも終わり、涙で霞がるまりの瞳も君を見つめなおした。

「んじゅっぶ、っはっあっ ♥ はああっ ♥ んぶっ ♥ もっう出しすぎですっ ♥ ゲップ出ちやいますよおっ ♥」

軽く鳴ったケップをまわりは恥ずかしそうにしている。あまり大量に精液を吐き出した君を若干攻めるような目線を送っている。

はあっはあっ息の荒く顔の紅潮したまり。

ぷんっ雌の発情臭が君の鼻に突く。

雄を誘う雌の姿そのままの彼女に、君は雄欲を刺激されていた。

君は目の前で雌の色香を醸し出すまりをひっぱり、後ろのベッドに押し倒す。

「あっんっ ♥ ふふっ ♥ ふうまさんっ ♥ 乱暴ですよっ ♥」  
笑いながら軽口をたたいたまりが、すっと目をつぶる。  
艶のあるキス待ち顔。

君は素直に彼女に口付けを交わす。

「んっちゅれうっ ♥ ふうまさんっ ♥ んれりゅっりゅっ ♥ こ

んなキスされたらっ♥　ちゅっちゅりゅっ♥　我慢できなくなっ  
ちやいますっ♥　んっちゅじゅりゅっ♥」

ベッドの上で深いキスを交わしていくと、まりの腰が君の肉竿に擦り付けられていた。

くちゅくちゅと濡れたパンツの感触が君の肉剣に伝わってくる。

色香が漂うまりの眼鏡の奥にある薄緑色の目が君を誘っていた。

彼女の要望通りに君は、まりの膣口に龟头部分を向けた。

「んれるっうっっ♥　んっはあっ♥　このまま中に入れてくださいっ♥　はっあああっ♥」

まりの言われた通りに、生のままの肉弾頭が膣内に侵入していく。

「うんっうっっ♥　大きくて太いオチ○ポでっ♥　おっっおっっ♥　中が拡張されてますっ♥　くひっうっうっ♥」

君の肉槍を入れれば、ぐりゅぐりゅと歓迎するように締め付けてくるまりの肉壁。

すっかり君専用の肉壺になった彼女の中を楽しむ様に突き上げていく。

「んっう、おっっ♥　子宮まで押されてえっっ♥　おほっおっっ♥　内臓まで犯されてるみたいですよっ♥　んっうっっ♥　相変わらずのっ♥　おっおっ♥　メス殺しのヤリチンポっ♥　おひっ♥　ですうっうっ♥　うんっんっっ！♥」

挑発的に囁くまりの子宮を何度も突き上げてイジメていく。

そのたびにまりの体が痙攣し、太い喘ぎ声が漏れ出す。

さらけ出されている彼女の巨乳が、ぽよんぽよんっつと揺れていた。柔らかく触り心地のいい胸に誘われて、君は両手を伸ばした。

「んおおっおっっ！♥　セックスしながらっ！♥　おっひいっっ！♥　おっぱい触るのダメですよっ！♥　んぎゅっ♥　か、感じすぎッてっ！♥　んおっっほ♥　おかしくなっちやいますっうっ！♥　んうううっ！♥」

顔中が汗と涙にぐちゃぐちゃに汚れて、まりの嬌声が部屋に響きだ







もう入りませんっ♥」

甘く囁くように息を吐きながら、まりは自身のお腹をなでる。力が抜けて、ベッドの上に落ちた彼女の両足が、ピクピクツと震えていた。

両足が外されて、君は腰をゆっくりと引いていく。

「んっうっ♥」

かりかり亀頭の傘が膣壁を削り、まりが甘く呻いた。わざと周りを刺激するように、肉剣を引き抜いていく。

ちゅっぽんつと膣口が名残惜しそうに君の肉槍を離れた。

そのまま吐き出された白濁液が、滝のようにこぼれていく。

「んっうっ♥ こんなに出したのについっ♥ まだ大きいままです  
ねっ♥」

自身の淫口から流れる白濁流を見て、なお雄々しくそそり立つ君の肉塊をまりは見つめる。

はあっはあつと熱く息を吐き、ちろちろと唇を彼女の舌が舐める。お互いまだ満足していない。

さらに彼女の体をむさぼるため、君はまりに覆いかぶさるのだった。

## 水城不知火★

次元侵略者に対する同盟が決まり、米連などからも独立遊撃隊に依頼が来るようになった昨今。

海外にも派遣されることが多くなり、少数での遊撃が多くなっていた。

今回の依頼もその一つであり、面倒な依頼でもあった。

国家にも威信というのがあり、次元侵略者に対して別の国に助けを求めるというの事態が問題である。

交渉の結果、対魔忍ではなくその国の特殊部隊として、次元侵略者を倒さないといけなくなった。

「それでこの格好というわけね」

改造されたシスター服としか言いようのない服を着て、水城不知火は溜息をつきながら自身の装備を確認していた。

唯一いつもどおりなのは、その手に持っている薙刀くらいだろう。

彼女の恵まれた肢体の性で、清楚なシスター服にもかかわらず、エロチシズム溢れる格好になっていた。

「まあ、動きやすくはあるから……問題ないわね」

くるりつとまわるつとスカートが、ふわりと舞い上がる。むっちりとした肉のついた太腿があらわになった。

爆乳を超えた魔乳としか言いようのない乳肉も、ぷるりつと揺れる。

ぞくりつとするような色香が漂う。

だが、今は任務の最中だ。

二人でこつそりと移動して、敵のアジトの前まで行った。

その間に、不知火に対して君の黒い霧の強化を提案する。

「え、ええ、次元侵略者に対して、油断するわけにはいかないものね」

どこか恥ずかしそうにしながらも、不知火は君に向かって手を差し伸べた。

柔らかく掌に重ねて、黒い霧を注ぐ。

「んうっ♥」

微かにだが漏れ出る吐息に艶がかった。

ほんのわずかに紅潮し、歯を噛みしめて耐えていても、君にはしっかりと聞こえる。

感覚向上と好意の増加は、しっかりと効果を発揮している。

君の毒牙にかかる時も、近いだろう。

「さあっ、行くわよ！」

君から手を放して、小声で気合を発露。

すうっと影を残さず、君の目の前から不知火が消えた。

水遁使いの彼女は、サイレントキルの達人だ。

目の前にあるアジトでは、何も起きてないように見える。

だが、不知火が静かにアジトの中の次元侵略者を、皆殺しにしている。

念のため君が待機しているが、不知火ほどの対魔忍なら、特に問題なく進むことだろう。

待機中でも、いつでも飛び出せるように、君はじっと待っていた。

だが、数分ほど待つだけで、

「終わったわよ。最後だけ厄介だったわ」

アジトの扉から不知火が、堂々と現れた。

ただ先ほどと違い、白濁した液体が体に付着している。

「もう、あの魔物！ 倒す前に自爆して！ 汚れちゃったわ」

不快そうに不知火が、自分の体を眺めている。

清楚なシスター服が、白いどろっとした液体で薄汚れ、ある種の工

口スを醸し出していた。

雄欲を刺激されるが、今は我慢だ。

君はとりあえず。一旦借りているホテルに帰ろう、と提案。

「そうね。依頼の報告はお願いしてもいいかしらっ？」

ホテルでシャワーを、一刻も早く浴びたいのだろう。

不知火の提案に、君は頷いて肯定した。

彼女と共に人目を外れて、依頼した政府から用意された、ホテルに

戻っていく。

嫌がらせか、ケチったのか……君と不知火は同じ部屋を、用意されていた。

「先に入らせてもらうわね。報告書お願いするわ」

不知火の言葉にうなずいて、君は報告書作成のために、机へと向かう。

君の背中越しに、不知火がシャワー室に入っていた。

パソコンを開いて、報告書を速やかに作成。

すっかりなれた作業であり、長時間シャワーを浴びている不知火を待っていれば、終わる作業だった。

「髪にもかかっていたから、取るのに時間がかかったわ……次入っていわよ」

シャワー室から出てきた不知火が、君に呼びかける。

長い髪をタオルでふき取りながら出てきた彼女は、しっとりとした色気を身にまとっていた。

暖かいシャワーに入っていたからか、肌がわずかに紅潮し、いつもは長い髪に隠れていた首筋が、よく見える。

ぞくりつと雄欲が。燃え上がるのを感じる。

ここで襲い掛かるほど、君は獣ではない。

お互いにチームを組めるくらいには、信頼関係を築いてある。

欲望のまま行動して崩すほど、君は獣ではなかった。

パソコンを閉じて、君は彼女の代わりにシャワー室に入った。

わずかに残った甘い香りが、君の鼻に突く。

ピンピンに勃起しだす腰の息子をなだめながら、君はシャワーを浴びた。

若干冷たくしたシャワーが、頭の思考を覚まさせる。

何とか体を肉槍をなだめ終えた君は、シャワーから出ていった。

「ふっふうふうっ♥ ごめんなさいっ♥ 先に横になってっ♥ ちよつと体の調子が悪いみたいでっ♥」

先にベッドで横になっていた不知火が、紅潮した顔をすまなさそう表情を作って見つめてくる。

息も荒く風邪かと思ったが、先ほどまで兆候はない。流石に心配になり、声をかけてみる。

「だ、大丈夫よっ ♥ 少し横になれば疼……な、治ると思うからっ ♥」  
じつと濡れた瞳が君を見つめた。

ぞくりつと背鈴が震えるほどの色気が、君を貫く。

一旦息を大きく吐いて、君は彼女のそばから離れる。

そのまま君は何かあったら起こすように言っ、ベッドに横になっ  
た。

「ええ、おやすみなさい……っ ♥」

吐息のような声を聴いて、君は目をつぶり眠るように努める。

当たり前だが、全然眠れない。

ギンギンに勃起した肉棒が、君の眠気を吹き飛ばしていた。

何とか眠りに突こうにも、不知火の熱い気づかいの声がして、思考  
が覚醒しっぱなしだ。

「……ねえ、起きてる？」

突然不知火から小声で、君の方に問いかけてくる。

君はあえて眠ったふりをして、無視した。

「……寝てるみたいねっ ♥」

君が眠っていると、確信した不知火。

その方向からごそごそと、音が鳴りだした。

「んっっ ♥ さっきのやつ体液っ ♥ はあっ ♥ 媚毒効果があつた  
なんてっ ♥ んっ ♥ 何とか今はっ ♥ あっ ♥」

甘い声とわずかな布が擦りあう音、そしてぐちゅぐちゅという水音  
が君に鼓膜を打つ。

「はっあ、駄目ッ ♥ オチンポ欲しくてっ ♥ んっんっ ♥ 疼い  
ちやうっ ♥ おっ ♥」

薄目を開いてみれば、布団の中でもぞもぞと、不知火がうごめいて  
いた。

囁くような矯正とわずかに聞こえる水音から、オナニーしている。

おそらく先ほどの任務でかかった白い液体が、肌から浸透するタイプの媚毒だったのだろう。

「んうっ ♥ ごめんなさいねっ ♥ ふうま君っ ♥ ふうっ ♥」

むくりと不知火が起き上がったのを感じて、君は再度目をつむる。しゅるりと布が落ちる音が聞こえたかと思うと、君の上にある掛布団がはがされる。

「ね、眠っているわねっ ♥ み、見るだけだからっ ♥」

「ごそそと君のズボンが、下ろされるのを感じた。

どうやら我慢できなかったようだ。

君にとつては好都合な展開である。

後はタイミングだろう。

「はっあっ ♥ 寝てるのよねっ ♥ んうっ ♥ こんなにおつきいなんてっ ♥ ああっ ♥」

熱い吐息がかかるくらい、不知火の顔が近い。

薄目を開けてみれば、君の肉棒にくっつきそうな程近くに、彼女の美貌があった。

「すっうっ ♥ この臭いっ ♥ だめっ ♥ んっうっ ♥ 子宮が疼いちやううっ ♥ はあっ ♥」

肉棒の近くで不知火の長い鼻がぴくぴくと動いていた。腰をわずかに動かして、黒い霧を纏わせた肉棒を不知火の方向へ落とす。

ぺちんつとやらかなほっぺが、シャフト部分に当たった。

「んうっ ♥ いたずらっこなオチンポねっえっ ♥ はあっ ♥」

すりすりと不知火が、淫靡な笑みを浮かべながら、擦りついてくる。吸い付いてくるような肌の感触が、肉剣から伝わってきていた。

「んっうっ ♥ ちよつと味わうくらいならっ ♥ ぺろぺろするだけだからっ ♥ んあっ ♥」

口から真っ赤な舌が伸ばされて、ちろちろと蠢いている。

熱い吐息が何度も当たって、微細な快感が発生していた。

君はそのまま静かに、素早く動き出す。

すつとスマホを取り出して、ビデオ撮影モードにした。

そのまま起き上がり、肉棒を不知火の口に入れ込む。

「んっおっ ♥ お、おひへはのっおっ ♥ んじゅぶっ ♥」

突然肉槍を入れられたのにもかかわらず、不知火は受けれるように、口の中で舌が蠢いてくる。

恥ずかしそうにしているが、君は言葉で彼女の逃げ場をなくす。

「んじゅぶっ ♥ ち、ちがうのよおっ ♥ んじゅつずっ ♥ これは媚毒の性でっえっ ♥ じゅじゅりゅっ ♥」

言い訳のようなことを言っているが、口が肉弾頭から離れない。

口の中で舌が蠢き、ちゅちゅつと唇が、肉剣に吸い付いてくる。

君はあえて優しく言い聞かせるように、話していく。

媚毒の効果なら仕方ないのだと、解消するために手伝うことを優しく話した。

「そ、うっ ♥ じゅりゅっ ♥ そうなのっ ♥ 媚毒の性だからっ ♥ じゅつりゅりゅ ♥ 仕方ないのっおっ ♥ じゅぶりゅ、おっ ♥」

君の言葉を聞いた瞬間、不知火のフェラチオの勢いが、激しくなってくる。

根元まで唇が飲み込み、亀頭が喉肉で絞られてきた。

セフレでもあるゆきかぜの親が君の肉棒を、アイスクャンディーのように舐めしゃぶっている。

ゾクリツと背筋に、雄の達成感が走った。

「じゅりゅっ ♥ このオチンポっ ♥ れりゅじゅっ ♥ フェラするだけでっ ♥ じゅりゅりゅっ ♥ 感じちゃうっ ♥ れりゅじゅじゅっ ♥」

ぐちゅぐちゅと不知火の股の間から、重い水音が聞こえている。

君の肉弾頭をディープスロートしながら、オナニーしているようだ。

手伝ってあげようと言って、君は足の指で膣口付近を弄りだす。

「んっおっ! ♥ じゅるっ! ♥ だめっえっ! ♥ じゅぶじゅぶりゅっ! ♥ 足でオマンコっ! ♥ おっ! ♥ 弄らないでっえっ! ♥ じゅぶっじゅつりゅっうっ、んおっ! ♥」

言葉では嫌がっているが、口奉仕の勢いはさらに激しくなっている。

びりびりとした快感が背筋を這って、脳髓を痺れさせてくる。

「れりゆずりゆうっ！♥ 喉で膨らんできたわっあっ！♥ ずっじゅりゅっ！♥ このまま出してっ！♥ れりゆじゅっ、おっおっ！♥ 喉マンコにつっ！♥ ずりゆれるっ、おっっ！♥ だしてっえっ！♥ んっっ、ずっずりゅっ！♥」

根元から一気に吸い込まれるような、バキュームフェラ。

無様だが淫靡な不知火の表情が、君の視界に映った。

どくんっど腰元から爆発するような快感が走り、亀頭から白濁液が放出されていった。

「んっっっおおおっ♥ ざーめんきつたっああっ♥ んずっりゅりゅっ♥ 胃にどくどくきつてっ♥ んっおっっ♥ 飲みながらっ♥ んっ、んっ、んっ！♥」

こくこくっど喉を鳴らして不知火は必死に君の白濁液を飲み込んでいった。

そのたびに喉肉が痙攣して、目が白目のように裏返っている。

体中を打ち震わせながらも、君の精液は零さずに飲み込んでいった。

「んっぎゅ、ずりゅりゅっ♥ まだ出るのおっ♥ んっぐぶりゅっ♥ 飲みきれっっ♥ んぐっううううっ！♥」

わずかに飲み切れなかった白濁液が、不知火の高い鼻から零れていく。

粘っこい鼻水のような液体が、顔から零れていった。

根っこの部分から吸い尽くされるようなバキュームフェラを続けられていた。

シャフト部分にも残らずに、不知火の胃に吐き出した君は、ゆっくりと息を吐く。

「んっっっ♥ けっぷっ♥ こんなに出すなんっっ♥ 顔が汚れちゃったわっ♥」

軽いケツ音を気にせず、不知火は顔に零れた白い鼻水を、ふき取っていた。

「まだおっきつっっ♥」



媚毒の対処薬でもある精液を飲み込んだが、君の黒い霧の効果で逆に高ぶっているようだ。

狙い通りだった。

そんな思考を一切気にせずに君は、じっと不知火を見つめていた。

「はっあはっあっ ♥ んんっ ♥」

びくんっ と君の視線で感じたように、不知火は体を痙攣させる。

君はただ視線を向けて、彼女の言葉を待つ。

「~~~~っ ♥ お、お願いよおっ！ ♥ 媚毒がまだ残ってるのっ ♥

体疼いて仕方ないのっおっ ♥ だ、だからっ ♥」

君は最後の一言を待っていた。

「私とセックスしてっ ♥ こんなおばさんだけどっ ♥ 何でも言うこと聞くからっ ♥ オチンポっ ♥ オマンコにぶち込んでっ ♥」

君の目の前でベッドの上に座って足を開いて、赤く濡れた鮑のような下口を見せつけていた。

不知火のおねだりに君は答える。

こっそりスマホを移動させて、立ち上がり勃起したままの肉棒を、膣口に擦り付けた。

「それ、それよっおっ ♥ その極太チンポっ ♥ 私のおマンコにっ ♥ 入れてっ ♥ お、お願いだからっあっ ♥」

くいくいっ と腰を振って、不知火は必死に君の肉棒を膣内に入れ込もうとしていた。

胸の内で燃え盛る欲望のままに君は、腰を突き出していく。

「おおっおおっ ♥ 年下チンポっ ♥ なかにはいつてっあ、~~~~っ ♥」

君の肉棒を奥まで入れて、子宮口に亀頭を押し付けた瞬間、ぎゅるるっうっ とふわトロマンコが締め付けてきた。

君の肉剣を包み込み溶かすような、感触の膣口が奥底まで引き込むように、締め付けてくる。

「おおっ ♥ ~、ごめんさいっ ♥ セックスっ ♥ 久しぶりだったからっ ♥ い、入れただけでイッたみたいっ ♥」

がつんと脳髓に、衝撃が走る。

欲望の黒い炎が君の体を、焼き尽くしそうな程燃え上がった。  
セックスフレンドの親かつ未亡人。

もはや君は止まる気はない。

「んっちゅっ ♡ おっ ♡ ま、まって、まちなさいっ！ ♡ ん  
ひっいっ ♡ き、キスしながらっ！ ♡ ちゅりゅっ！ ♡ 腰振る  
の、やめて頂戴っ！ ♡ ちゅりゅっ、おっ ♡ つおっ ♡ っ！ ♡ 」

奪う様に不知火の唇に、口付けを交わす。

言葉では拒否しても、彼女の口内は君の舌を受け止めている。

お互いの舌がナメクジのように絡みつき、吸い付いていく。

絹肌のように柔らかくも、すべすべした感触の白い肌が、君の体に  
吸い付いてきていた。

「んっれりゅっちゅっ ♡ 駄目よっおっ ♡ れりゅっちゅっ ♡ こん  
なセックスっ ♡ んっおっ ♡ つ、れりゅっちゅうっ ♡ ほ、んきに  
なっあ——あっああ ♡ あ ♡ っ！ ♡ 」

不知火の爆乳が、君の胸に当たり、押しつぶされる。

ぎゅっと抱きしめながら、彼女の体を犯しつくしていく。

柔らかく君の体を包み込むような、不知火の体がたまらなかった。

ゆきかぜを生んだとは思えないほどの、彼女の膣口は激しく締め付  
けてきた。

縫りつくように君の体に抱き着きながら、不知火は喘ぎ声を部屋中  
に響かせている。

「おっくっうっ ♡ おっ ♡ つほっおっ！ ♡ 子宮突くのダメっ ♡ あ  
っ ♡ つあっ ♡ っ！ ♡ そこっ ♡ おっ ♡ ひっいっ！ ♡ 私のGスポットっ  
！ ♡ おっ ♡ おっ ♡ っ！ ♡ だからっ！ ♡ あっいっ ♡ つひっ！ ♡ ぎ、雑  
魚マンコだつてばれちやつうっ！ ♡ おっ ♡ つおっ ♡ おっ ♡ っ！ ♡ 」  
不知火の膣内を肉棒で攻め立てながら、君はぐつと歯を噛みしめて  
いた。

相性が良すぎる。

ふわとろマンコが肉剣全体を締め付けながら、子宮口がキュウキユ



ら、君は子宮に白濁流を流し込んでいった。

「おっおおおっ ♥ 射精長すぎっいつ ♥ おっあゝあゝっ！ ♥ イッ  
てるのになっ ♥ おごっおゝっ！ ♥ まだっぐりゅっ！ ♥ ひっあ  
ゝあゝっ！ ♥ 子宮溺れるくらいだされてっ！ ♥ ほっおっ ♥  
まだいっくっ！ ♥ おっほおゝおゝおゝおゝおゝっ！ ♥」

君に抱き着きながらも、背筋がエビのように折れ曲がった。

快感で点滅する視界の中、白い喉仏を晒しながら、獣のような快樂の雄たけびを上げていく、不知火の姿が映る。

トロトロに蕩けた臍肉が、君の肉鞘を牛乳のように、搾りつくそうとしてくる。

全て絞りつくされたかのような快感と共に、君は一気に息を吐き出していった。

「はっああっ ♥ こんなにイクなんてっ ♥ ひ、久しぶりっ ♥」

君の体を離して、不知火はベッドに倒れていく。

そのまま虚空を眺めんながら、ぽつりとつぶやいた。

どうやら、勘違いしているようだ。

ここで終わるわけないだろうに……。

「え、あっ？！ ♥」

もう決めたのだ。不知火を君の雌畜に墮とす。

そのために君は素早く行動を、始めていくのだった。

## アスタロト

対魔忍の使命は人間界で暴れる魔族の捕縛もしくは誅殺することだ。

だからこそ海外で大暴れしている魔族を捕まえることもある。

「ほらほら！ 対魔忍はその程度なのかしら!？」

アサギやゆきかぜを前に大暴れしているアスタロトは、対魔忍としても、海外に派遣された特務部隊としても捕縛しなければならぬ人物だった。

「熱すぎっ！ ふうま、何とかしなさい！」

アスタロトの手から放たれる火球をよけながら、ゆきかぜが叫ぶ。無理をおっしやる。

仮にもエドウィン・ブラックと同等の魔族だ。

そんな簡単に捕まえられないわけがない。

……今までなら、だ。

こっそりと持ってきた、君一人を隠せるほどのシールドを手に持って、周りの対魔忍達に作戦を伝える。

「それで何とかなるの？」

「ふうま君を信じるしかないわね」

皆は君から離れて、アスタロトを挟むように動き始めた。

君は手に持っていた煙玉を投げる。

「視界を無くして奇襲する気？ 意味ないと思うけど？」

煙の中から聞こえる声の方から、火球が君に向かって放たれた。

衝撃と共に君に熱風が当たる。

皮膚が焼けて一部爛れるなるが、そこまでだ。じかに当たらなければ、黒い霧の治癒効果で癒える程度。

痛みが我慢しつつ、君は声のした方向へと突進！

「あらっ？」

君が突撃してきたのを、アスタロトは若干驚いた口調を発した。

僅かだが隙ができた。

その意識の空白を、ゆきかぜとアサギは逃さない。

「はっあー!」

「痺れさせれば!」

アサギの刀とゆきかぜの雷撃が、アスタロトを襲う。

「しまった!」

一瞬硬直した体を、アスタロトは無理やり動かす。

高位魔族であり、魔界の領主であるアスタロトは、それでも二人の攻撃を完全によけた。

それでもバランスを崩している。

君は大きなシールドを投げ捨てて、アスタロトの首に向かってあるものを投げた。

力いっぱい投げたそれは、吸い込まれるように、彼女の首元に絡みついた。

「くっああっ!・♥」

甘く嘆くような声が一瞬漏れたかと思うと、

「わ、私になにつをつお……ああっ♥」

一瞬君を睨んで、そのまま倒れていった。

「これで何とかなるの?」

「何とかするんでしょ……ふうまのスケベっ♥」

若干攻めるような……それでいてわずかに濡れた目を、アサギとゆきかぜは向けてきた。

君は肩をすくめて、誤魔化すことにするのだった。

五車学園の地下深く。

犯罪を犯した強力な魔族を捕えておく、監獄代わりに使われる場所があった。

人目につかず、来る人も監視員のみ。

時折聞こえる悲鳴や嬌声が、この場所で起きていることを物語っている。

情報を抜くか協力関係にする為に、様々なことが行われている、対魔忍にとつても忌むべき場所。

そんなところに君はバケツを持って、横たわるアスタロトの前にいた。

君は桃色の冷たい水を、遠慮なく彼女にかける。

「くっう！ なに、が……そう、そういうことね」

不快そうに起き上がるアスタロトは、周りを見渡すと、すぐに納得がいったように頷いた。

既に服は脱がされて、手足を完全に拘束されている。

君も黒い霧を肉棒にまとわせて、彼女の前に立っていた。

君を見上げながら威嚇するような表情をして、アスタロトは口を開く。

「私にこんなことするなんて、覚悟はできているのよね」

一瞬彼女の周囲に熱気が漂う。

だがその熱気を彼女にかけて首輪が、吸い取るように輝くと、

「んっううっ ♥ こ、これ——まさかつあ ♥」

ビクンツとアスタロトの体が、陸上に打ち上げられた魚のようにはねる。

口からは鳴くような矯正が漏れていた。

涙に濡れたイエローストーンの目で、君を睨みつけてきた。

今までさんざんやられてきたことを思い、君も心に冷水を流す。

前世のころより入れたことのない、加虐スイッチをオンにした。

「何を黙っているの！ なにかいいなっあっ ♥」

君は黒い霧を調節しながら、纏わせた肉棒を、アスタロトの鼻に押し付ける。

前世のころに封印したブラックの力が、元になっている黒い霧。

強化と発情に好感度上昇は、ブラックが高位魔族であり吸血鬼であることが原因だった。

高位魔族の肉体そのものが、強くなるための薬にもなり、吸血鬼の魅了の力が含まれている。

この力を強化ではなく魅了や発情の方へ集中しながら、アスタロト

に流し込む。

「く、臭くて汚い物を私の顔につけてくるんじゃないのっ ♥  
んっうっ ♥」

海外からこの場所に来るまで体を洗わず、チンカスすらたまっている肉棒を、アスタロトの鼻や口元に擦り付けていく。

「くっう、こんおっ ♥ うつぶちゅっ ♥ じゅりゅっ ♥ んあ、そんな ♥ んじゅりゅっ ♥」

目の前にある君のチンカス塗れの肉槍を、大きく口を開いて迎え撃つアスタロト。

噛み千切るつもりだったのだろう。だが、口内に君の肉剣を入れた瞬間、熱心に奉仕するかのようにはフェラチオし始めた。

「んっじゅりゅっ ♥ この首輪っ ♥ やっぱりっいつ ♥ じゅりゅりゅっうっ ♥」

古きから生きる彼女は、君の肉棒を咥えながらも、自身の不調の原因に気づいた。

「淫魔族の秘宝のっ ♥ んれりゅりゅっ ♥ こんなどこでっ ♥  
じゅりゅれりゅっ ♥」

肉弾頭に付着したチンカスを、丁寧になめとりながら、アスタロトは君を睨みつける。

普段なら普通の人間の心臓を止める圧すらあるイエローの瞳も、目を濡らし顔を紅潮させていけば、飼猫が睨んでくるようなものだ。

可愛らしさすらあるその顔に君は手をのせた。

「んっぐぶっりゅっ ♥」

アスタロトの美貌を君の腰に叩きつけて、喉まで肉竿で犯しながら、君は解説していく。

かつてとある淫魔族が、多数の高位魔族を性奴隷にした秘宝。

神と呼ばれる存在に近い上位の魔族の魔力でも吸収して、快楽と服従心に変える魔具。

それがアスタロトの首輪になるものだった。



高位魔族たる所以は膨大な魔力。これにより鉄を切り裂き、砲弾すら跳ね返す体に強化している。

アスタロトの火炎も、元は魔力の行使によって発生している。それを封印してしまえばか弱い女と変わりない。

「んじゅっぶっぐっ ♡ んっおえっ ♡」

がつがつとアスタロトの高い鼻が、君の腹部に当たるほど激しくイラマチオ。

何度かえずくも、喉がギュツと締まるように蠢き、君の肉棒に快感をもたらしていた。

パンパンツと足を何度もたたかれ、掴みかかれても、か弱い反撃にしかない。

「~~~~~っ ♡ ぐっえっ……じゅりゅっ ♡」

何度か歯を立てようとしているが、首輪の能力には逆らえず、舌と共に肉弾頭に奉仕している行動にしかならなかった。

涙がこぼれ、意識が飛びそうなのか、裏返りそうないエローダイヤの瞳。

それでも気丈に君を睨みつけているのは、彼女の高いプライドゆえだろう。

それすら打ち崩すために、君は調教を激しくしていく。

「ぐえっおっ! ♡ はっあっ! ♡ すう~~~~っ! ♡ こ、殺すきっいっ! ♡ んじゅぼっ! ♡ じゅりゅっぐっえっ! ♡」

一瞬口から君の肉棒を引き抜いて、大きく息を着かせる。

減らず口を叩く前に、君はまた肉槍を無理やり挿入。

一瞬間が当たるが、甘噛みにもならず、くすぐったいような快感だけが発生する。

「んっじゅりゅっぐっ! ♡ おっえっ! ♡ んっううっ! ♡」

黒い霧の効果で快楽が増幅されて、喉まで届く激しいイラマチオでも、アスタロトは嬌声を漏らし出す。

だからだと股の間から、愛液が零れて床を濡らしていた。

その様子を鼻で笑ってやる。

「~~~~っ! ……んっおっ! ♡ んんっうっぐっぷりゅっ! ♡」

一瞬殺意が突き刺さるほどの鋭い目。アスタロトが君を睨みつけてきた。

だが、それも快樂と首輪から刻まれる服従心に流されて、潤み蕩けていく。

ぶしゅぶしゅつとアスタロトの股の口から、しぶきが降り落ちる。

喉がキュウキュウ締め付けて、シャフト部分を吸い取るようにアスタロトの口が奉仕する。

頬の口すらフェラチオ奉仕の道具にする無様さに、背筋に快感の電流が走った。

脳まで行き届いた瞬間、腰元にあったタガが外れるのを自覚。

彼女の頭に置いておいた手を、ぐつと君自身の腰に押しつけた。

飲み込めつと命令しながら、君は白濁流を発射していく。

「んっぐりゅっ！♥　じゅっぶじゅつるっ！♥　んっんっんっんっんっ！♥」

こくりこくりと喉を必死に動かしながらアスタロトは、君のザーメンを飲み込んでいった。

首輪がチカチカ光って、君の命令を順守させていた。

それでも薬も使って精液の量を増やしている現状、飲み込めるわけもなかった。

「んっぐっえっ♥　ぶっああっ♥　量があ、多すぎつりゅっおっええっ♥」

口から爆発するかのように君のザーメンが逆流。口から君の肉棒と共にザーメンと胃液が混じったものが、アスタロトの口から吐き出されていった。

「んっええっ♥　こ、こんなに私に無理やり飲ませるなんて……覚悟はできてるのよねっ」

さんざん吐きつくして、白濁した唾液を腕拭いながら、アスタロトは君を睨みつける。

突き刺さりそうな視線を、前に君は余裕そうに笑う。

「貴方の余裕もここまでよ……これを作った淫魔族が性奴隷の反逆で、命をついたのは知っているかしら？」

ピクリツと君は眉をはね上げて笑みを消す。

その後の事を思えば、簡単な演技喰らいやすいものだ。

「知らないみたいね！ この首輪は極端な温度変化に弱いのだよ！ 例え急に高熱を付与すれば！」

君がアスタロトから若干離れたことで、わずかだが炎を生み出せたようだ。

熱コントロールで君は熱さすら感じないが、膨大な熱量を含んだ火球を首輪に叩きつけた。

「私には効かないけど、マグマすら生み出す熱量を首輪に——えっ？」

手に持った火球を首輪に叩きつけた。薄ら笑いをしながら、君を睨んでいた。

だが、首輪は外観が若干膨れ上がったことだけで、壊れることはなかった。

「どうして？ あっ、まっあ~~~~~っ」

首輪の宝石が光り輝き、アスタロトの体に、お仕置きの快樂電流が流される。

ビクンビクンツと声にならない悲鳴と共に、うち跳ねる彼女の前で君は嘲笑ってやる。

「あ、あなた この首輪にどんな仕掛けをつお——っ」

快感に耐えて君を睨んで問いただが、全身が痙攣するのは抑えられないようだ。

さんざん人間を見下し、勝手気ままに行動していた女王の、滑稽でありながら淫靡な恰好。

君はこのまま腹を抱えて笑いたいのを我慢して、種明かしをしてやることにした。

耐熱樹脂という最新の科学の結晶。

炎を操る魔族様に改良され研究されたものは、4000度程度は朝飯前。

耐熱セラミックに加工したものを、首輪を覆う様に塗り固めた。

マグマの中に放り込んでも、中の卵は生のままという実験結果すら

あり、非公式だが1万度の熱すら耐えたものだ。

戦いするときアスタロトの炎に耐えたシールドと同じ素材である。

マグマを操ると言われるアスタロトでも、これは燃やせない。

「はっあ？♥ そ、そんなものがあるなんてっえっ♥」

体をビクンビクンツと打ち震わせながら、アスタロトは茫然と咳く。

絶対の自信の根源である、炎すら無意味だと気付いたのだろう。

今が攻め時だ。

君は彼女の後ろに回って肉棒をアナルへと突き付けた。

「ちよ、つとまちなさあ——おっほお、お、お、お、っ！♥」

静止の声を無視して、君はアスタロトの尻穴に、肉槍を無理やり挿入。

若干の抵抗感の後、奥底まで引くずり込むような、腸内の脈動が肉竿を包み込んだ。

「ひっあ、っ♥ くっうっ♥ い、今はやめなさっいいっ♥ んっお

っお、っ♥」

先ほどの首輪からの仕置の所為で、全身が敏感になっているようだ。

君は床で押し潰れた胸も揉みしだきながら、アナルを激しく攻め立てていった。

根元を握り締めるような激しい締め付けに耐えて、腸内全てを犯すように腰を振り動かす。

「おっひっいつ♥ いつもよりも敏感でっえっ♥ んっん、んっん、っ！♥」

漏れ出る嬌声を君に聞かせまいと、アスタロトは唇をかみしめた。ささやかな犯行に過ぎない。

あの高位魔族なアスタロトを凌辱し、か弱い女性の反抗しかできなくさせている。

雄欲が刺激されて、加虐心が疼いていった。

君が腰を激しく打ち付けるたびに、ふるんぷるんつと波打つ尻肉。君は心のままに手を振り上げて、尻に紅葉を咲かせた。

「きゃっんっ！♥ や、やめなさっいいっ！♥ ひっぐっおっ！♥ あ、後で生きたまま焼かれないのっおっ！♥ おひっいいっ！♥」  
犯行の言葉を吐いているが、君が尻肉を掌でたたきたたびに、甘く囁くような声が漏れている。

何度も魔力を練ろうとしているのが、首輪が何度もちかちか輝いている事から分かった。

おそらく魔力を注ぎ込んで、決壊させようともしているんだろう。

そんなこと君が想定してないはずがないわけで……。

薄ら笑いを浮かべながら、君はアスタロトの体を味わっていく。

「おっひっいいっ！♥ 子宮が後ろから殴られてっ！♥ んっおっほっおっ♥ こえ、我慢できなっあっ♥ あっひっいいっ！♥」

赤く紅葉が咲く尻肉が、君の腰の動きと連動するように波打つ。床に押しつぶされた乳房を、君の右手が揉みしだく。

左手は尻を何度も打ち据える。

両手も視界も肉槍も、アスタロトの体を味わいつくしていった。

「んっおっぎっ！♥ ケツ穴こわれっえっ！♥ んんんっ！♥ あとすこっしっいいっ！♥ いっ！いっ！くっくっ！♥ 今やめればっあ、優しく殺してあげるわよっおっ！♥ おっおっおっおっ！♥」  
君にアナルを蹂躪されながらも、打開しよう動き、プライドの高さを発露させる発言を繰り返している。

君からすれば滑稽で淫靡な光景を、わざわざ生み出している事に過ぎない。

彼女の姿を嘲笑う言葉を聞かせながら、腰を激しく突き動かしていった。

「おっおっ！♥ た、魂の存在になってもっおっ！♥ ほっおっ！♥ 何千年と燃やしてあげっりゅっ！♥ んっうっひい

「いゝいゝっ!♥」

嬌声交じりの発言は、君の雄欲を燃やす燃料に過ぎない。

根元まで君の肉槍を飲み込むアナルが、強烈に収縮して君の肉棒を喰いちぎろうとしていた。

にちやにちやと腸液と先走り液が混ざった液体が、アスタロトの尻の窄まりから零れだす。

同時に膣口から何度も透明な液体が、ぶしゅぶしゅつと潮のように噴出していく。

淫靡な光景と音、そして肉棒から来る快樂に君も限界に近づいていく。

「ふっぎゅっうっ!♥ あと少しっでっえっ!♥ おっごっおっ!♥

♥ ぜ、絶望を味合わせてあげるっ!♥ んっいゝいゝいゝっ!  
♥」

希望に縋りついてわずかなプライドを守る、アスタロトに止めを刺すことにした、

君は耳元でささやく。

先から大量の魔力を注いでもう壊れてもいいほどだが、どこに行ったのだろうねと呟いてやった。

「~~~~っ♥ ま、みやさかつあっ!♥」

君は口内に隠しておいた舌ピアスを、見せびらかした。

そこには首輪と同じように、光る宝石がぶら下がっている。

「あっあああっ!♥ まあ、まっつっええ!♥」

急にバタバタと暴れ出すアスタロトの体を、上から押し掛かるように押さえつける。

膨らんだ肉棒から、必死に逃げようとしていた。

君はアスタロトの抵抗を無為にしながら、肉弾頭から黒い霧とアスタロトの熱を持った魔力を含めて、白濁液を流し込んだ。

「おっっひいゝいゝいゝいゝいゝいゝっ♥ あっづっいゝいゝいゝ

っ!♥ いっひいゝいゝんっ♥ ケツ穴もえでっりゅうっ

うっうっ!♥ うっおっおっ!♥ 焼かれながらっあ——

いっぐっうっうっ!♥」

黒い霧と淫魔族の加工した宝石によって、媚毒のようにアスタロト自身の魔力が、白濁流と共に体中を犯していった。

背筋が反って君を弾き飛ばそうと、しかねない絶頂の動き。

太腿の肉を振るえさながら、足先までピンツと伸ばしていった。

「おっほおっ おっ おっ おっ おっ つー！♥ しやつせえゝえゝ つー！♥ いっぎっ！♥ ながすぎよっおっ おっ おっ つー！♥ イッてるのに、まだいっぐっうゝうゝうゝ つー！♥ アナル焼け爛らせてっえ……んっ おっ つほおっ おっ おっ おっ おっ つー！♥」

快感に染まった獣そのものの絶叫を、喉から振り絞っていた。

エビのように体を打ち震わせながら、牢屋中に嬌声を響かせている。

豊満な肉体を痙攣と共に波打つのを見ながら、きみはゆっくりと射精を終えていく。

脈動するように収縮する腸襞が、君の肉棒から最後まで精液を絞り出していった。

「んぐっう——おっ！♥ だ、耐えたわよっおっ♥」

絶頂の痙攣を何度も深呼吸をしながら、ゆっくりと抑え込んだアスタロト。

さんざん希望を打ちこわし快樂に染めながらも、彼女は君を睨みつけていた。

だが、明らかに先ほどまでとは変わっている。

飼い犬が手を噛んだような表情から、どこか媚びるような色が見えている。

どうやらまだじっくりと躡なければならぬようだ。

アスタロトをかしづかせるために、君は脅すようにゆっくりと手を伸ばすのだった。

4話（秋山凜子シリーズ） 彼女は貢ぎマゾ雌まで落ちたのか？）

夕焼けに染まる学校で君は、一人で廊下を歩いていた。

知り合いを先に帰らせて、今君は一人の時間をじっくりと味わっている。

性と退廃に塗れた生活を送っているが、同時にトラブルも多いため、ゆとりの時間はすくない。

じっくりと静かに味わいながら、帰宅のために君は足を動かす。

そんな暇はないと言わんばかりに、君の耳に少女の悲鳴が聞こえた。

「貴様！ 何のつもりだ！」

「へへ、これを使えば俺だって！」

「ここ、五車学園なんだけど？」

思わず内心で大きいため息を吐いて、君は聞こえた声の方向へ駆けていく。

「くそっ！ 体が疼いて、言うことを聞かない！ …… 卑劣漢め！」

「ははっ！ 負け犬の遠吠えだ！」

声のあたりから誰が被害にあっているのか、君には見当がついた。

秋山凜子。

ボンキュッボンつと出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる魅惑的な体系。その代わりに剣の腕は、あの井河アサギを上回っている、と言われている腕の立つ対魔忍だ。学校でもファンクラブができる程人気があり、成績もトップクラスにいる。暴力装置なら最高点。

……勉強ができることと、世渡りが上手いことは全くの別物である。

だまされにはめっぽう弱く、罠には当たり前のように引つか



かる。

色々とフォローして、そのまま毒牙にかけた君。

また貞操のピンチなんだろうなと思いつながら、足を速める。

足早に、しかし気配を消して、声の方へと近づいていった。

「くそっ、やめろ。ふうっ」

「あ？ 誰かの名前でも呼ぶ気か？ 誰も来ねえよ！」

学校内でやるべきじゃなかったな。

君は廊下から飛ぶように教室に入り込んで、凜子に覆いかぶさろうとしている男の頭に、蹴りを叩き込んだ。

「ぶべっ！」

黒板と君の足に顔を挟まれ、無様な悲鳴を上げて、そのまま男は倒れていった。

対魔忍と言えども千差万別だ。

能力に目覚めて、自身の欲望ままに動くのも、少くない。

「ふ、ふうまー」

黒板に手をついたまま、君の方へ顔を向ける凜子。

その表情は紅潮に染まって、笑みを浮かべていた。

君は彼女に手を振りながら、男を縄で拘束、風紀担当の対魔忍に連絡を入れておいた。

「ぐっつう、ち、畜生！ てめえ、なにしやる！」

その間に起きた凜子を襲った男子学生が、特殊な縄を解こうと暴れ出す。

君が相手を拘束した縄は、所々に忍法を阻害する符がついていて、オーガでも破れないほど頑丈なものだ。

これを常に持つていないといけないのが、対魔忍の学校の危険度を表している。

君は大きなため息を吐きつつ、風紀の対魔忍がこっちに向かっていることを伝えておく。

「はっあ！ 何しやがんだ！ やっと秋山の処女をぶち抜けると思っただのに！」

「貴様あ！」

体が薬で震えながらも、男の発言に凜子は怒りの声を上げた。どうやらあまり力が出ないようだ。

君は男のターゲットを自身にするために、動くことに決めた。君の女だ。しつかりと守らないといけない。

壁に手を突いたままの、凜子の手を引っ張る。

「えっ——んっちゅっ♥」

凜子の柔らかく、ぷるんつと震える唇を奪う。

「あ?」

思わず呆然とした声を上げる男子の前で、君は彼女と深いキスを交わしていった。

「んっあっ♥ ふうまつ♥ んっちゅっ♥ い、まはあっ♥ んれりゅっ♥」

「なあ——っ!」

君と凜子の舌を絡めあう深いディープキスを、男子は怒りの目で睨みつけてくる。

「んちゅ、れりゅっ♥ ふうまの唾液っ♥ れりゅりゅっ♥ 美味しいっ♥ んっちゅっじゅっ♥」

段々スイッチが入り、ズボンの上から凜子が、君の肉棒をさすってきた。

見せつけるのは此処までいいだろう。

君は凜子の唇から顔を離す。

「れりゅっう——はっあっ♥ ふ、ふうまつ♥ もつとっ♥ もつとキスっ♥」

君に縋りつくよう抱き着いてくる彼女の豊満な体を抱きしめて、君は倒れている男に向かって言い放つ。

人の女に手を出すもんじやない、と一言。

男は怒りのあまり顔をリングゴの様に真っ赤に染めて、君を視線で殺そうと只管にらみつけていた。

既に問題を起こした彼がどういう運命をたどるか、君はよく知って

いたため、そのまま捨ておく。

「はっあっ♥」

荒い息を繰り返す凜子を、君は人目のない秘密のヤリ部屋に、引つ張っていく。

何度か使用したことがあるため、凜子も君の意思を察しているようだ。

「はっあ、はやくっうっ♥」

色気に塗れた声と、ズボン越しに触れてくる凜子の掌。

剣術をやっているにしては、すべすべしていて女の子の手をしている。

ゾクゾクツツと男の欲望が燃え盛るのを感じながら、君は目的の部屋に足早に向かった。

数分もたつていないはずが、何時間も過ぎたような距離を踏破し終えて、防音が完ぺきな部屋に入る。

人気もなく鍵もすっかり締まるその場所は、ヤリ部屋にぴったりだった。

そのドアを開けて鍵を閉めた瞬間、君に支えられていた凜子が、襲い掛かるような勢いで、君の首に手をまわした。

「んっちゅっりゅ♥ ふうまつ♥ んっうっ♥ ふっうまあっ♥」

甘えるような媚びた声で凜子は君の名前を呼ぶ。そのまま舌を伸ばして君の舌をからめとってきた。

「んっうちゅっ♥ もっと唾液♥ れりゅりゅっ♥ ふうまの唾液っ

♥ んっじゅりゅっ♥ もっと飲ませてくれっ♥ れりゅじゅっ♥」

君の口内を暴れまわり吸い取るように、凜子の舌が蠢く。

使われた薬ですっかり発情しているようだ。元々性欲が強く、淫乱の気質がある彼女は、すっかり君とのセックスに夢中だった。

彼女の巨乳が君の胸に擦りつきながら、ねっとりとしたディープリキスを交わしていく。

君の肉棒を凜子の手が、ズボンから抜き出してくる。

「んはっあっ♥ 私を雌にする強雄チンポっ♥ はあ——手がやけ

どしそうだっ♡」

唇を離して黒い霧を纏わせた君の肉槍を、軽く凜子の手が手コキ。剣道の師範とは思えない程よく滑る、柔らかな手が包み込んでくる。

「んっあっ♡ 我慢汁出てきたっ♡ こっちにつ♡ 勝手に雄を誘ってしまふ雌畜の体につ♡ 君専用の肉オナホだどっ♡ 君専用の雑魚マンコっにいっ♡ わからせてくれっ♡」

くるんと体の向きを変えて、凜子は近くの机の上に手を着いた。ストッキングに包まれた尻肉が、フリフリと振られて君を誘う。

雌そのものの男の欲望を駆り立てる体。

今は君の肉弾頭が欲しいあまり、尻肉が震えるくらいに踊り誘う。

普段は怜悯な表情で道場で叱咤する先輩が、君の肉棒を欲するあまりに雌の体で誘惑してくる。

雄欲が燃えさかり、君はストッキングを破くようにずらして、肉竿を膣口に突き立てた。

「はっあゝゝゝっ♡」

クールな雰囲気や常に纏う凜子からは、想像がつかないほど色っぽい悲鳴が漏れ出した。

ガタガタと机を鳴らしながら、彼女は君の肉槍の抽送に耐える。

ぱちゅんぱちゅんつとヤリ部屋と化している教室に、肉がたたきつけられる音が響きだす。

「おゝっっ♡ これっ♡ んあゝっ♡ これなんだっ♡ はっあゝあゝっ♡ このオチンポっ♡ おゝっ♡ ふうまの極太長チンポじゃないっどっ♡ んおゝっ♡ 嫌なんだっ♡ あゝっんゝっ！♡」

君が膣内をかき回すたびに、肉剣に贅肉が絡みついてくる。

肉鞘全体が贅々に絡みつかれ、絞り上げられる。

何十人もの舌で舐められるような、快感を味わえる凜子の名器。

戦闘能力はぴか一なくせに、騙し合いに弱い極上の体を持つ牝。しっかりと君がしつけておかないといけない雌畜だった。

君が肉竿だけでなく、手で彼女の体に触れるたびに、口から甘い声が漏れ出していった。

「あんゝんゝっ♡ 全部触ってくれっ♡ んあゝっ♡ あの雑魚雄っ♡ んひっ♡ チンポ立ってもふうまの十分の一にも満たないっ♡ はっあゝっ♡ 葉使わないと雌を襲うことすらできない弱男子にっ♡ んゝっうゝっ♡ 触れられたところっ♡ あゝっ♡ 上書きするくらい触ってほしいんだっ♡ あっあゝあゝあゝっ!♡」

他の男と比較されて、君自身が持ち上げられる媚びた声。

普段のセックスでも、あまり見れない凜子の弱い雌の姿。

先ほどの事を流しつくすように、君は彼女の体中を愛撫していく。真っ白な背中やほっそりとした腰。鍛え上げられた筋肉の上には、女性特有の柔らかな肉が乗っていて、しつとりと君の掌に張り付いてくる。

「んひっ!♡ そうっ!♡ あんゝっ!♡ この手っ!♡ はひっ!♡ ふうまのごっごっした手っ!♡ あっあゝっ!♡ 熱くて太い指でっ!♡ んっおゝっ!♡ 雄にチンポ突っ込まれるだけの雌だってっ♡ おゝっおゝっ!♡ わかってしまうゝうゝうゝっ♡」

凜子の手がついた机が、ガタガタと音を鳴らしながら揺れる。

ふらつく彼女の体を、君の掌が愛撫しながら抑え込む。

そのたびに君の肉棒に凜子の体重が肉棒にかかって、子宮口を突きあげていった。

「おゝっひっ!♡ おっぐっうゝっ!♡ 子宮に強雄チンポっ♡ ふっうゝうゝっ♡ ふうまのオチンポっ!♡ ひっぎっ♡ ぎでっりゅうゝっうゝっ♡ んっうううあゝあゝっ!♡」

戦闘能力と反比例するように、凜子の感じやすい体。

君は膣内をイジめるように突き上げ、亀頭で擦るだけで獣のような嬌声を上げていく。

「おっおゝっ!♡ 私の中をつおゝっ♡ んおゝっ♡ いじめないでくれえゝっ♡ ひっうっ♡ ふうまに媚びてるからっ♡ あゝっあゝっ!♡ すぐにイッてしまうっ!♡ うゝひっ!♡ 弱雌マンコだからっあ!♡ あっひいゝいゝんゝっ!♡」

刀一本でオークの群れや、ギャング組織を壊滅できる女侍。

戦闘能力で言えば、片手で君の首を跳ねることさえできる凜子が、君の肉棒で喘ぎ狂う。

ベッドヤクザや鬼畜チンポなどと言われようが、この光景を見ることのできるなら受け止められた。

君はさらなる高みに上るために、目の前で波打つ凜子の尻肉を叩いた。

同時に言葉で彼女を攻め立てる。

「は、ひっんっ♡ はっいっ♡ ふうま専用の肉オナホなのにつ♡ん♡っん♡ ほかの男を誘ってごめんなさいっ♡ あっあっ♡♡ ふうま専用雌オナホだからっ♡ はっひっ♡♡ 今後は気を付けるからっ♡ 許してくれっえ♡っ♡ あっっひっ♡♡ くださいいいっ♡♡ん♡っん♡ん♡ん♡っ♡♡」

きみに尻を赤くなるほど叩かれて、鬼畜な言葉で攻め立てられて、凜子は明らかに感じていた。

耳元でマゾ雌やドマゾ女などと罵るだけで、彼女の膣肉がキュウキュウ締まってきた。

「はっい♡い♡っ♡ 秋山凜子はっ♡ あっあっ♡♡ ふうまにイジメられるのが好きなのっ♡♡ あん♡っ♡♡ ドマゾ肉便器ですっ♡♡ん♡ん♡っ♡♡ いつでもどこでもっ♡♡ん♡あっっ♡♡ムラついたらっ♡♡ あっっ♡♡ ザーメンコキ捨ててくださいっ♡♡ あっい♡い♡い♡い♡っ♡♡」

人間性を捨てるようなマゾ雌犬の言葉を吐き捨てて、凜子の膣肉が痛いくらい締まった。

脳髓まで一瞬で走る快樂電流に身を任せて、子宮口に押し付けた龟头から白濁液を放出していった。

「んっおひい♡い♡い♡い♡ん♡っ♡♡ 子宮がやけりゆううっ♡♡ ドロドロザーメンは入ってっ♡♡んっおほお♡お♡お♡お♡おっ♡♡」

ガタンツと机を跳ね飛ばして、床に手を突きながら凜子は、雄たけびのような絶頂声を吐き出した。



気持ちよくなってしまうっ♥ んっうっ♥」

くりくりと固い乳首が、君の肉槍のシャフト部分に擦られる。

執拗に乳首を擦り付けてくるのを指摘して、君はしっかりと奇麗にしると、荒い口調で言い放った。

「ひんっ♥ わ、解ってるっ♥ んっあっ♥ ロマンコも使って、奇麗にするからっ♥ んっちゅじゅっ♥」

巨乳から出ている君の肉棒の先を、凜子の口が含んだ。

亀頭部分に舌が絡みつき、まだ残っている精液と愛液の混合液を舐めとってくる。

「んっじゅっ♥ ふうまと私の混ぜった味っ♥ んっうっ♥ 舌が痺れるくらいおいしいっ♥ んじゅれりゅっ♥」

肉棒の傘に舌が絡み、汚れすら掃除してくる。

君がご褒美代わりに頭の青く汗で、光る髪をくしゃくしゃにするだけで、凜子は嬉しそうに微笑んでくる。

「んれりゅっずっ♥ オチンポに残った精液もっ♥ ずずっ♥ 吸い取るからっ♥ じゅりゅっ♥」

ぐりぐりと形が変わる胸肉を凜子が擦り付けながら、亀頭部位に吸い付いてくる。

凜子の巨峰が君の肉棒を絞り出さんと形を変えて、激しく扱いてくる。

見ているだけでぞくぞくするほど淫猥に形がゆがみ、君に快感を与えようと必死に奉仕していた。

「んじゅっぶっ♥ ブリ跡ついでしまっうっ♥ あっつっ♥ おっぱい火傷しそうだあっ♥ はあゝあゝんっ！っ！♥」

君に巨乳で奉仕しているにもかかわらず、君の肉棒が纏う黒い霧の感度上昇の効果で、凜子も甘く喘いでいる。

ぷつくりと立つ乳首が君の竿部位に擦られて、凜子は喘ぎ声を漏らしていく。

「あっあゝっ！♥ 乳首で擦るのっおっ！♥ んっうっ！っ！♥ 癖になるっうゝっ！♥ んっじゅっ！♥」

段々と濁音交じりの嬌声を上げて、君の肉槍に凜子は必死に胸で扱



いていた。

プルプルッと何度か体を震わせているから、軽くイッているようだ。

とろんつと蕩けた彼女の瞳に、嗜虐の光があるのを察した君は、肉棒に張り付く舌を指で挟んで言葉を発した。

何を勝手にイッているんだと、荒い口調で言い放つ。

「んっえっ♥ ひよめんなさいっ♥ おっ♥ ま、マゾ雌だからひゃっ♥ かっへにひってひまうんだひゃっあ♥ あっひっ♥ まひゃきひゃっ♥ うっうっうっ！♥」

君に舌をぐいぐい引つ張られながら、凜子は体を震わせて甘く鳴いた。

君がイジメればイジメる程、彼女の体は快感を得ているのがよく解る。

ペチンつと揺れる巨乳を張り上げるだけで、凜子は痛みと快樂の混ざった被虐に喜ぶ声を上げだす。

「ひゃっあ♥ あ♥ん♥っ！♥ もつと気持ちよくするからっ！♥ んっ♥っ！♥ 何度もイッてるからっ♥ あっん♥ん♥っ！♥ だからこのまま出してくれっ！♥ あ、いっ♥ 頭がおかしくなりそうなんだっ！♥ ん♥ん♥ん♥っ！♥」

もはや口での奉仕もかなわずに、凜子は君の肉槍に白い巨峰を只管に擦り上げていた。

ぐにぐにっつと肉竿と彼女の手で形を変えて、搾り取ろうとしてくる。

ぞくぞくする快感に答えて、君は素直に白い間欠泉を放出していった。

「ひゃあ♥ あ♥あ♥あ♥っ！♥ ザーメン胸にかかってっ♥ おっ♥！♥ ふうまに顔も胸も汚されてっ♥ いっぐうっうっうっうっ！♥」

白い汚濁を顔中と胸で受け止めて、凜子は喉から快樂の絶叫を振り絞っていった。

防音の教室に、獣のような矯正が響いていく。



## 神村舞華★

ラフな私服を着た格好で君は魔都・東京で人を待っていた。

ある程度は整った顔のお蔭で、エルフや淫魔族からの逆ナンもあったが、君は丁寧な断つていく。

普段なら答えるが今日は任務だ。

待ち合わせの相手をほったらかしにしたら、火傷程度では済まない。

君はえりを正しつつ、待ち合わせの時間を見つめる。

後10分ほどで時間といったところで、君に声をかけてくる少女がいた。

「わりい！ まったか？」

気の強そうな男のような口調で、声質は綺麗な少女の声。

君が目を向けると、赤く染まった髪とツンつと目じりの尖った紫の瞳。

君の顔程もありそうな胸肉を包むだけの服。肩にかかるジャケット。

足を大きく晒すパンツスタイルのジーパン。

ギヤル服と呼ばれる露出の激しい服を着ている神村舞華が、君の待ち合わせの相手だった。

「うっ、何だよ……へんかあ？」

思わずじつと彼女の姿を見ていたら、不安そうに自身の体を見直していた。

君は彼女の手を取って、似合っているとだけ伝え、足を前に動かす。

「え、おい！ い、いきなりそんなこと」

普段は気が強くヤンキーを語る彼女だが、意外と少女趣味なことを君は知っていた。

大体君が主導権を握ると、そのまま流される質なのだ。

だからこの後は君のお楽しみタイムとなるんだが……今はまだ早

い。

今日はお互いがパートナーだろう、つとだけ伝えた。

「うっ……わ。わかつてるや」

パートナーの言葉を強めに話せば、舞華は息が詰まったように黙り込む。

顔を紅潮させ何か言いたそうに口を何度か開くが、それは言葉になることはなかった。

そのまま彼女の肩を掴んで、君の方へと引き込む。

君の肩に爆乳が当たり、柔らかな感触を伝えてきた。

「くっうっ——わ、わかったよ！ やるよ、やりやあいんだろ」

一旦大きく息を吸うと、小声で気合を入れて、彼女は君の手をぎゅうつと掴んだ。

それだけだと目的地には足りないの、腕を絡めるように伝える。

「わ、わかったよ。ここまで来たら、最後までやるよ」

彼女のスイカサイズの胸が、君の腕を挟む。ムニユムニユつという柔らかさと、その奥にある若さゆえの反発力が、君の腕から伝わってくる。

周りにいる男たちが送る、嫉妬の視線も心地いい。

若干裏側道を進めば、淫欲の視線と嫉妬の視線が交わったものが、君に突き刺さる。

それすらも楽しみつつ、君は任務の目的地まで進んだ。

奥まったところにある普通の家のような扉が、目的の入り口だ。

かかんかかんと独特の感覚で、ノックする。

がちりつと軽く音が鳴ると、目の部分の所だけ空いて、相手が睨んでくる。

先に入手していた合言葉を話す。

「……入りな」

重苦しい一言と共に、扉が開いてくる。

開けた先には誰もおらず、扉の奥で隠れているようだ。

相手の事に干渉せずにおくのが、こういうところのマナーだ。

「あ、ああ」

のぞき込もうとする舞華を、ぐいっと引いて歩いていく。

あちこちに潜入もする君と比べて、まだまだ彼女は甘い所がある。それでも大丈夫なところを選んだから、安心ではある。

君達は暗い廊下かを歩んでいく。先の高そうな黒い扉を君自身が開いた。

「う、ううっ ♡ どうしても行かないとダメか? ♡」

君の腕に絡みつぎぎゅっと力を込めながら、舞華は君を見上げてくる。

紅潮した顔と涙に濡れた瞳が、期待と羞恥の交わった視線が、君に向けられていた。

君は心のSをくすぐられながらも、任務のためだからと言って、舞華を引つ張って中へと入り込んだ。

「ううっ ♡」

恥ずかしそうな声を漏らしながらも、君の行動を止めることはしない。

形ばかりの抵抗をする舞華を引つ張りながら、目的の場所へと進む。

すると、紫色の煙がわずかに漂う、部屋の中に入っていった。

「これ、魔香の類か?」

スンッと嗅いでみると、関係のある淫魔族から教えられた、お香の臭いだ。

嗅ぐと範囲内の人が、認識しずらくなるという物だ。

魔界の秘密パーティなどで扱われるものだが、作り方自体は簡単で、淫魔族の収入減になる程度には出回っているものだった。

違法性も薄く、普通に見逃されるものだ。

「こ、これは……」

ぐくくりと舞華の喉が鳴る。

「おっあつ。ご主人さまのセックスうつ。最高です」

周りが座りじつと見ている真ん前で、男女が見せびらかすように

セックスしていた。

秘密クラブ程度の露出やオージー程度にしか使えないため、わざわざ取り締まるほどでもない。

「こ、ここが本当に違法魔薬が使われてんのか？」

顔を紅潮させて恥ずかしそうに、舞華は君に聞いてくる。

君は重々しくうなずいて答えた。

羞恥などなく欲望を表に出すことなく、ただ任務だからということ  
を前面に出す。

「~~~~~っ♥わ、わかつたっ♥」

ぎゅうつと舞華は、君の腕を力いっぱい抱きしめてきた。

彼女の爆乳が君の腕に当たり、柔らかくも熱のある体温を伝えてくる。

ちょうどその時、クラブ内の雰囲気が変わる。

周りの人たちも、近くの女性の服を脱がせ、交わり始めた。

君も違和感がないように、舞華の体を壁に押し付けた。

「うつつ♥せ、せめてキスからにしろっ♥んっ♥」

ぎゅつと目をつぶり唇を突き出す舞華。

彼女の希望にこたえて、君は唇を押し当てる。そのままパンツスタイルのジーパンを横にずらす。

「んっあつちゅっ♥き、キスしながらっ♥んっれりゅっ♥オマ

ンコ、弄るなっあっ♥」

壁に押し付けられて逃げ場のない舞華は、君の膣内を攻める湯部に  
翻弄されていく。

すでに彼女の中を、君はしっかりと把握している。

「んっおっ♥まっあつちゅつぢゅっ♥そこっ♥んちゅりゅっ

♥弱いことっつ♥ちゅれりゅっ♥」

離れようと君の肩を押ししてくるが、弱弱い抵抗に過ぎない。

一旦キスを離して、任務中ということを呟けば、その手は君の首の  
後ろに回る。

「うっ♥わかつてるさ——んっちゅっ♥おっ♥だからっつ

♥んれりゅつぢゅっ♥弱い所ばかりっ♥ちゅつちゅっ♥触

るなっ、てばっ♥ んぢゆれりゆっ♥」

キスと手マンでどんだん膣口の愛液が、溢れてほぐれてくる。  
手が愛液にびしょぬれになり、ふやけそうだ。

「んっおっ♥ キスもっおっ♥ ゴリゴリしてくりゆっ♥ んれっ  
るっ♥ 男らしい太い指もっおっ♥ ちゆれつる、くひっ♥ 覚えさ  
せられてるからっ♥ んっおっ——ちゅうううっ♥」

がくがくと震えだし君に縋りつくように、舞華が抱き着いてくる。  
すでに軽く絶頂し出している、舞華の体。

ぶしゆぶしゆつと愛液を噴出して、君の手や腕まで濡らす。

「お！ 俺のも感じやすいが、そっちのパートナーもすげえな」  
「はっあっ♥」

君の横から相手の胸を揉みしだきながら、舞華との性交を眺めてく  
る男がいた。

「ひっうっ♥ お、おっいっ♥」

男の視線に気づいた舞華が君に小声で問いかける。

見られて恥ずかしいと思っっているようだが、膣肉はキュンキュンと  
君の指を締めていた。

今回は露出クラブ……男に見せつけるように、舞華の爆乳の形を変  
えて、膣内を弄り倒す。唇も舌をからませて、唾液を交換していった。

「んっぢゆっ♥ おっいっ♥ みられっ♥ れりゆっ♥」

「お、はげしいねえ……こっちも負けられねえや」

君の肩を掴んで抗議する舞華を無視して、体を弄り倒す。

喘ぎ声を漏らす彼女の姿を見て、近くにいた男も自分のパートナー  
を攻め立てていた。

それでも極上の美女である、舞華の乱れる姿をちらちらと見てい  
く。

「んれりゆっ♥ ま、やつへっえっ♥ おっつっ、じゆりゆ♥ 見られ  
てんのにっいっ♥ ひっぐっう♥ んれりゆ——んんんん  
んんんんっ♥」

足をがくがく振るわせて膣口から潮を吹きだしながら、絶頂の嬌声  
を君の口の中で叫んでいた。

舞華の愛液で君の指がふやけて、手全体が濡れてしまう。

びしょびしょになった指で膣肉をさらに解すために、君は指の動きを止めなかった。

「ば、っかつ♥ まだイッてるからっ♥ おっつおっつ♥ イッてるから弄んなっつ♥ あっあゝあゝっ♥ またくつるっ♥ んっあゝあゝあゝっ！♥」

さらに深い絶頂へと押し上げられた舞華は、君の肩を拳でたたいてくる。それでも快感は抑えられずに、ビクンビクンと身体を痙攣させながら、くたつと俺に体重を預けてきた。

「はっあゝゝゝっ♥ くそ野郎めっえっ♥」

君の肩に頭をのせながら、悪態をつく舞華。

このままだと後が怖いため、君はズボンを下ろして黒い霧を纏わせた肉棒を露出。

手を膣口から話して彼女の腰を抑えた。

「んっあっ♥ おいっ♥ まさか——っ♥」

紫色の瞳が君の目と合う。期待と躊躇……半々の心の内が見えた。乱れ狂う彼女の姿が見たいため、君はそのまま肉棒を膣口に突き込んでいく。

「おっ！♥ おっおっおっ♥ い、いきなり突っ込んだじゃねえよっおっっ♥ 足に力がっ♥ ひっうっ♥ 入らなくなんだろうがっあゝっ♥ あっひっ♥」

舞華の抗議の声を無視して、君は腰の動きを速めていく。

ヤンキーを自称して服装もイケイケだが、内心は乙女に近い舞華。君一人しか経験のない膣肉は、すっかり専用の雌穴とかしていた。

「このデカチンっ♥ ひっおっっ♥ 俺のマンコにっ♥ いっあゝっ♥ ぴったりすぎっるっうっうっ♥ おっおおっおっ♥」

前技で解きほぐされた膣肉は、君の肉槍をキュウキュウ締め付けてくる。

ぴっちり膣壁が絡みつき、扱きあげる膣穴を、肉弾頭が掘削している。

君が調教したとおりに喘ぐ、舞華をどんどん追い詰めていった。



「おっひっいっっ♥ この極上チンポっでっえ♥ んっぐっ♥ すぐに気持ちよくなる雑魚雌マンコになっちまっうううっ♥ おっおっ♥おっ♥おっ♥」

ごちゆりと亀頭が子宮口を持ち上げれば、獣のような声を舞華の赤い唇から漏れだした。

喘ぎ狂う舞華の姿が周りの露出セックスをしているグループにも見られて、熱気が増していく。

「お、俺たちも負けられねえぞ！」

「あっんっ♥」

「おっっおっっ！♥ 周りもセックスしてっ！♥ んっおっっ！♥ 俺も見られてんのにいっいっっ！♥ あっひっうっっ！♥ 感じちまううっうっっ！♥ んおっおっ！♥ おかしいのについっ！♥ いっいっひいっいっいっっ！♥」

周りから聞こえる喘ぎ声や体が交わる音。自分たちだけじゃないセックス音が耳を犯す。

グループセックス独特の雰囲気や熱気が、興奮を高めていった。

目の前の舞華の体もピンク色に染まり、汗や涎で汚れていく。

「くっおおおっ！♥ さっきイッたばっかっでっえっっ！♥ おっあっ、ひうっ！♥ ヨワヨワマンコすぐにイっちまううう！♥ んっおっおっおっおっおっっ！♥」

がくがく震えて地面に腰を下ろしそうな舞華の体を両手で支えながら、君は膣口に向けて腰を突き込んでいく。

蠕動運動を続ける膣壁に逆らう様に、肉竿を抜き差ししていく。そのたびに、膣口から愛液のしぶきがしたり落ちたり落ちていった。

床に水たまりができる程愛液と汗がたまります。ごちやぐちやぱんぱんと周りに負けずに膣肉と肉竿が当たりかき混ぜられる音を奏でていった。

「おっおっっおっっ♥ 相性が良すぎてっ！♥ ひっいっうっうっっ！♥ 頭が真っ白になっちまうっうっっ！♥ んっおっおっっ！♥」

口の端から涎が垂れて紫色の目が涙で濡れる。

腰を突き上げるたびに、ふるんふるんつと先ほどまで触っていた爆乳が揺れて君を誘う。

「おっひっ！♥ 胸までっえっ！♥ ひっうっ！♥ 噛むんじやねえっ！♥ おっっおっ！♥ マゾおっぱいっ！♥ くっひっ！♥ 感じちまうだろっおっ！♥ おっおっおっおっ！♥」

大きく口を開けて乳首事、胸肉を甘噛みしていった。

乳首の周りに歯形をつけるほど、何度も優しく噛んでいく。

「おっっおっ！♥ おれの胸っ！♥ んっんっ！♥ 食べるなあっ！♥ っ！♥ っ！♥ っ！♥」

抗議の声は、何度も快樂に塗れた嬌声に濡れる。

突き動かしスイカサイズの胸肉を歯で愛撫するたびに、肉槍が膣壁で激しく扱き上げられた。

そろそろ君も限界に近づいていた。

「おっぐっうっ！♥ お、奥でっえっ！♥ えっひっ！♥ デカ雄魔羅膨らんだっあっ！♥ あっあっ！♥ 出すならこのまま中につ！♥ っ！♥ あっ！♥ ふうま専用肉便器につい！♥ おっっおっ！♥ 孕ませ雄汁っ！♥ んっ！♥ っ！♥ っ！♥ コキ捨ててっえっ！♥ あっはあっ！♥ あっ！♥」

地面から離れた舞華の両足が、君の腰に絡みつく。

両手両足がぎゅうつと蟹挟みのように、君の体に抱きついた。

反動で子宮口を鬼頭で持ち上げるほど、奥まで突き上げる。

瞬間激しく膣壁が蠕動運動を開始。シャフト部分から鬼頭の先まで扱き上げられる。

腰から脳内まで走る快樂電流に、君の目の前が真っ白に明滅していった。

「おっひいっ！♥ いっ！♥ っ！♥ 熱いのでっ！♥ んううっ！♥ うっ！♥ 子宮にびちやびちやっ！♥ んっ！♥ っ！♥ 濃いのが当たってるっ！♥ いっ！♥ っ！♥ っ！♥ 子宮溶かされてっ！♥ っ！♥ っ！♥ っ！♥」

君の体を力一杯抱きしめながら、舞華は獣の様に快樂に塗れた絶叫

を上げた。

骨がギシギシなるのを聞きながら、彼女の子宮にぐんぐん増産される白濁流を流し込む。

「おっほおっおっおっ！ まだ出てやがるっうっ！ おっおっおっ！ おっおっ！ またいぐっ ぐっひっいっいっいっ！ いっでるのについっ いっうっうっうっ！ すごいくっつりゅっんっうっうっうっ！ 中出しアクメぐりゅっうっうっ！ おっひっいっいっいっいっいっんっ！」

「うっわ すっげー！」

「あ、あんなにいくもんなんだっ」

パチパチ点滅する君の視界で、舞華の喉が曝け出されていった。周りからの羨ましそうな視線や、引き気味の声すら聞こえていない様子である。

目の前で絶頂声を上げる彼女は、ひたすらに君が与える快楽に耐えるのが精一杯の様だった。

ぎりぎり膣壁が牛乳絞りのように、肉棒から精液が吸い尽くされて収まっていく。

「ふっくっうっうっ ♡ た、耐えたぜっ ♡ はあゝゝゝっ ♡ あむっ ♡」

意識を失うことなく、君の肩を舞華はいじらしく噛んでくる。彼女なりの抗議なのか、甘えなのかはさすがの君にも、わからない。

ゆっくりと舞華の体を地面に下ろして、肉棒を抜き出していった。

「ふっうっうっうっ ♡」

同時に彼女はゆっくりと息を吐き出す。深呼吸をして体の震えを、抑えているようだった。

そんな舞華の前に、膣内から抜いた君の肉竿を押し付ける。

「うっ ♡ わあってるっ ♡ んっあゝっ ♡ 俺の口マンコできれいに  
するよっ ♡ んっじゅぐっ ♡」

精液と愛液に塗れた肉槍を、舞華はためらいなく口に入れていった。

二人の体液の混合物が、彼女の舌でからめとられていく。

「おお、そこまで調教済みか―」

「わあっ♥ お掃除フェラまでしてるっ♥」

「すっかり調教してますなあ」

「私も頑張りますね〜っ♥」

いつの間にか集まっていた観衆も、舞華の掃除フェラを見ているようだった。

先ほどまでは恥ずかしがっていた視線も、快樂と君の肉槍に酔った彼女には、興奮のスパイスに他ならない。

「んじゅりゅっ♥ ラブラブセックスっ♥ じゅりゅりゅっ♥ 露出フェラっ♥ れりゅじゅぶっぐっ♥ 不細工イラマ顔っ♥ じゅぶっぐりゅっぶっ♥ 見てっいいからっ♥ ぐぶっりゅじゅっ♥」

快感にすっかり素直になった舞華が肉塔に吸い付いて、喉まで飲み込んでいた、

唇まで性具に使う。ひよっここフェラまで披露している。

「んじゅりゅっぐっっお〜っ♥ 見られてんのにっ♥ じゅぶっぐりゅっ♥ フェラすんの止められねっえっ♥ ぐぶりゅっぐっ♥ 女殺しの雄ペニスっ♥ んっぐっぐっ♥ もっと出せるよなあ♥ じゅっぶじゅりゅりゅっ♥」

淫らなフェラ音と、周りから揶揄するような声。

普段の凛々しいしく荒っぽい印象から一転して、淫猥な雰囲気纏う舞華。

「じゅぶっりゅぐっ！♥ 美味しく感じんのっ！♥ ぐっぶりゅぶっ！♥ おかしいのにっ！♥ じゅぶりゅぐっ！♥ すっかり慣れちゃったっ！♥ ンじゅぐ―じゅりゅぶっ♥」

根元まで引っこ抜かれそうなバキウムフェラ。

口での掃除が、すっかり肉奉仕に変わっている。

肉棒の根まで顔が当たり、彼女の高い鼻が陰毛の中で息荒く吸ってくる。

「おっおっっ♥ 雄臭濃いっいっっ♥ んじゅっぐっ♥ フェラチオオナニーとまんねえっ♥ んっぐっじゅぶっ♥ イッチまう〜っうっっ♥ んんじゅっぐっごっお〜♥」

君の腰に片手を絡め、もう片方の手は舞華自身の淫口を、かき回しているようだった。

亀頭部分が喉粘膜をこそぐたびに、イラマで感じるようになった彼女は、体を痙攣させている。

君も舌がシャフト部位に絡みつき、亀頭を喉粘膜で締め付けられて、また出そうだった。

彼女の真つ赤な髪に、指を絡めて後頭部を押す。

「んっぐっおおっ♡ 全部飲むからっ♡ んっれっりゅっず、んっうっ♡♡ ロマンコに中出しっ♡ ずりゅっじゅっお♡お♡お♡っ♡」

がっがっつと後頭部を押さえて、腰を動かしても舞華は口を離さない。それどころか喉の締め付けも舌の動きも激しくなった。

ぷくりつと亀頭が膨らみ、金玉から駆け上った白濁流が爆発する。

「んっぐっぶっ！♡ どぼどぼ胃に来てるっ！♡ んっぐっじゅぶっお♡おっ！♡ 喉が焼けっりゅっ！♡ ん♡ん♡ん♡ん♡ん♡っっっ！♡」

腰をがくがく振るわせて、ぶしゅぶしゅ床に愛液をまき散らす。同時に君の肉棒から精液を吸い尽くさんばかりにバキューム。

頬がぺこりと凹みシャフト部分に、頬肉と舌が絡みつき吸いつくしてくる。

「ん♡ん♡っじゅぞっお♡おっ！♡ 量が多すぎッてっ！♡ ん♡ん♡っぐじゅぶっぞっ！♡ 飲み尽くせっねっ！♡ ん♡ん♡ん♡お♡お♡お♡お♡っ！♡」

たらりと鼻から白濁液の残滓をこぼしながら、射精を舞華は必死に受け止めていた。

亀頭部位をぐりゅぐりゅ喉が締め付けられて、残さず吸い尽くされていく。

「んっじゅっ♡ はっあっ♡ 全部飲んだぞっ♡ んっえっ♡」

肉棒を吐き出して、舞華は口を大きく開いて見せた。

中に何も無いことを蠢く、舌が見せつけてくる。わずかに口の端に残った陰毛が、先ほどまでフェラをしていた証になっている。

「おお、あんなに激しいフェラしながら、飲み込むとは」

「よほど淫乱なのねっ♥」

周りからの揶揄する声は、もはや舞華の快感を増す作用にしかなくてなかった。

「まだ、できるよな?」

こしゅこしゅ肉棒を起立させるほどの手コキをして、緑色の瞳から挑発的な視線を送ってくるのだった。

## ゆきかぜ貢ぎマゾシリーズ4話

きらきら光るスロットに、やたらと音の大きいパチンコ台。くそもつたいねえと思いつつ、君は目の前のパチンコ台をまわしている。

「に、にいちちゃん？ もうやめたほうがいいじゃ？」

隣で同じようにパチンコを打っている男の人が、君を心配するように声をかけた。

異様な光景に見えたのだろう。

たとえ当たってもそのまま消費するように、パチンコをまわしているからだった。

君は心配してくれたことにお礼を言いつつ、気にしないように伝える。

「そ、そうかい？」

死んだ目の君を居たたまれなさそうに見つつ、男性は離れていく。持っている金をただギャンブルで消費し尽くすという、無駄に等しい行為。

他に何ができるかを考えないようにしつつ、君は過去の事を思い出していた。

率直に言えば君のミスだった。

やたらと君にちよっかいをかけてくるあの少女……フェリシアが任務の最中に乱入。

逃走の為、ゆきかぜにかなりの無茶を、してもらったのだ。

「はあく、もう何だったのよー！」

あちこち泥まみれになりながら、彼女は愚痴を吐く。

本来関係のない君の事情に、巻き込まれたのだ、

文句を言いたくなるのは、仕方のないことだった。

「ふうまー あいつ明らかに狙いはふうまだったわよねー！」

明らかに怒っている表情で、君にゆきかぜは問い詰めてきた。

君としても負い目があり、何度も頭を下げる。

その結果君はつい言ってしまう。今回の貸しの代わりに、何でも言うことを聞くと……。

「もう……なんでもよね？」

怒りの表情から一転。

ゆきかぜの顔が淫猥にゆがむ。

「なんでも……ふひっ♥」

ゾクリッと、君の背筋に寒気が走る。

これはやってしまったようだ。

「じゃあ、こういうのはどうかしらっ。」

彼女の提案に君は、重々しくうなずくことしか、できなかった。

ゆきかぜの提案通りに渡されたお金を、パチンコで消費した君。

体のざわつきを抑えつつ、ゆきかぜが待っている場所へ向かう。

風呂好きな君が、昨日から風呂に入っておらずに、若干のイラつきすらあった。

ストレスでひどいことをしそうだが、それが目的なのだろう。

君のマゾ雌であるゆきかぜの思い通りに動いていることに、重いため息を吐きながら足を動かす。

「ほら、言つてよっ♥ ふうまあ♥」

ゾクリッと背筋が震えるほどの色気ある表情で、ゆきかぜが近づいてくる。

学生服でも対魔スーツでもない。夏服のゆきかぜ。

あちこち露出が多く体に張り付きそうな程、ぴっちりとしている。

美少女のモデルのような格好に、今からこの女を犯すという雄欲が燃え盛りだす。

ただ、この後に言う言葉はただ君の心を振るえ立たせないと喉から出てきそうになかった。

一度だけ大きく深呼吸。

喉が重いためもう一回。いや、マジで言いたくない。

あともう一回だけする。

自分がくず男であることを、催眠術のように自身に言い聞かせる。



閉じていた目を開いて、キスが出来そうな程近くのゆきかぜ。

「はっっ♥ はっあぁっ♥」

顔が紅潮し荒い気を吐いて、発情している彼女に君は重たい口を開いていく。

ズボンから自身の肉槍を取り出して、彼女の顔に押し付ける。

パチンコで使いたいからフェラで五万くれと言葉にした。今回は心の罪悪感をゆきかぜに借りを返すためと、思い込み蓋をする。

「~~~~っ♥ うんっ♥ し、仕方ないわねっ♥」

体を打ち震わせてゆきかぜは君にサイフからお札を明け渡す。

「これ、五万あるからっ♥ あっ♥ フェラするからねっ♥」

君がわざと奪い取るように乱雑に受け取る。それすらも快感なのか甘い言葉をゆきかぜのピンク色の唇から漏らした。

「すっう~~~~っ♥ おっ♥ くっさっ♥ ふっう~~~~っ♥ 洗っていないふうまのチンポっ♥ ふひっ♥ 鼻が痺れそうなくらいっ♥ おすくっさぁっ♥」

彼女の願い通りに昨日から風呂に入らずに洗っていない肉竿を顔に擦り付けていく。

そのたびにゆきかぜの鼻がピクピクツと震えて鼻息が荒くなっていく。

「それじゃあ、フェラするからねっ♥ んべっええっ♥」

舌を君に見せつけるように伸ばして黒い霧を纏う肉棒に触れてくる。

桃色の舌が君の肉竿の先から根元までゆっくりと這い出す。

「んあ~~~~っ♥ ここもちゃんと洗わないいけないんだからねっ♥ あはっあ♥」

傘部分の汚れなどわざとゆっくりと動かしている様子だった。

僅かにできたチンカスを極上の御馳走のように舌でこそぎ味わう様に噛みしめていた。

「これいくらっ?♥」

それすらも貢ぎ欲の穴埋めにつかおうとしているゆきかぜ。  
大きいため息を吐くのを抑えて君は一万とだけ答える。

「一万ねっ♥ はいこれっ♥」

すぐさま彼女は君に一万円札を渡してくる。

自身をくず男であると言い聞かせて、また乱雑に奪い取る。

「ふひっ♥ それじゃあっ♥ んあっ♥」

その様子を見て、嬉しそうな声を漏らすゆきかぜ。

彼女はそのまま君に見せつけるように口を大きく開けた。

「んじゅぶっ♥ れりゅっ♥ いつもより味が濃いつ♥ んおっ♥

洗ってない汚チンポっ♥ じゅぶっぐっ♥ 私の口マンコできれいにするからねっ♥」

君の亀頭部分が小さな口で飲み込まれる。

口内で大量の唾液と彼女の舌で洗浄されるているかのようだった。  
ゆきかぜの肉厚な舌が亀頭や傘の凸部分を丁寧に這い動く。

「んじゅれりゅっ♥ このまま全部飲み込んであげりゅっ♥ んっ  
じゅりゅっ〜っ♥」

口の中へと、黒い霧を纏った肉棒が根っこまで飲み込まれていく。

亀頭がすぐに喉を突くが、一切ゆきかぜは気にせず飲み込む。

ぎゅうぎゅう喉肉によつて亀頭部分が締め付けられてくる。

腰からぞくぞくするような快感が背筋にまとわりつく。

腰が引けそうになるが、がっつりとゆきかぜの褐色の手に捕まれて  
いる。

「んっじゅぐっ♥ 喉マンコで奉仕してるのはっ♥ んっぐっぼっ  
♥ こつちなのにっいつ♥ んじゅぐぐっぶっ♥ 気持ちよくなっ  
ちやうっうっ♥」

根元で映えている毛の林にゆきかぜの顔が突っ込むが、一切気にせ  
ず口奉仕をしてきていた。

霞がかったピンク色の瞳が君に何かを訴えるように見つめてくる。

結構な数体を重ねており、貢ぎセックスも行っている君。彼女が何  
を求めているのかすぐにわかった。

君は足を動かして彼女の膣口に向ける。

足の甲でざりつと淫口を擦り付けた。そのまま囁くように千円つと呟く。

「んおっつひゅっ♥ 一擦り千円っ♥ んっじゅぶっ♥ 口マンコで長太チンポ奉仕っ♥ んじゅりゅっ、おっおっっ♥ 激しくするからっ♥ れりゅじゅぶ、はあっ♥ もっと払うからっ♥ れりゅりゅ、ひひっっ♥ もっとしてっ!♥」

がぼぐぼつと重い水音を発しながらゆきかぜのデイープスロートが激しくなってくる。

君としては足で弄る行為が千円であって一回擦るごとに千円などというつもりはなかった。

彼女の貢ぎマゾっぷりに引きそうになりながらも、心の内に封じ込めて足を動かしていく。

「んっおっ、っ、じゅりゅりゅ!っ♥ これで2千円っ!♥ れりゅっじゅっ、あひっ!♥ もっとっ!♥ あっっは!♥ もっとお貢ぎっ!♥ じゅりゅりゅっうっ!♥ ふうまにお貢ぎっ!♥ んひっ!♥」

君の足の甲が粘っこい愛液でどんどん汚れていく。

その間にもゆきかぜの口奉仕は止まらない。

唾液がかき混ぜられる音を大きく君に聞かせながら、頭を上下に動かす。

肉棒に吸い付くように、唇が伸びていた。

淫猥かつ君に見せるための無様な表情。

ゾクゾクツと背筋が快感に震えていた。

「んっおっ、っじゅりゅりゅっ!♥ 喉でふりゅえてっ!♥ ずりゅりゅ、おっっ!♥ 雌喉肉についっ!♥ 10万円でっ!♥ じゅずっあっっ!♥ お射精してっ!♥ んん、じゅっじゅっずっずっ!♥」

君の射精の前兆を察したゆきかぜ。

ひよつとこのように唇を伸ばして君の肉棒を根っこから吸い尽く



彼女の手が君の肩の上に載ってくる。

少し移動して後ろにはベッドがあった。

君はそのまま腰を下におろしてゆきかぜの足の間に股をいれた。

すでに勃起済みの肉竿がゆきかぜの淫口の下で待ち構えた。

「はっあっ♡このままっ♡ふうまとお貢ぎセックス♡い、いくらほしいのっ♡」

押し付けるように君に貢いでくる凜子とは違い。君に金額を言わせるのがゆきかぜは好きなようだった。

今回はゆきかぜに苦勞を掛けたお詫びな為、願い通りに君は動く。

ゆきかぜの腰が下に落ちないように手で支えておく。

小さな褐色色の耳音に口を近づけて君は20万とだけ囁く。

「ふひっ、えへへっ♡出すっ♡出すからっ♡はっあっ♡このまま思いつきりっ♡叩きつけてっ♡ふくくっ♡ふうま専用膣オナホにっ♡孕ませ棒っ♡いれてっえっ！♡」

荒く熱っぽい息を吐きながらへこへこ君の肉棒の上で褐色の細い腰を動かしていた。

ゆきかぜの腰へこ踊りが君のチンイラさせてくる。

快感の涙に濡れたピンク色の瞳が君を覗き込んでくる。奥底にあるぐつぐつと煮だったマゾ雌欲求が君を追い詰めてくる。

捕食される気分なのを心の奥底に封印して、君はゆきかぜの細っ濃い腰を思いつきり下へ下ろした。

「ほっお♡くくっ♡長太オチンポっ♡あはっあっ♡雑魚雌マン○にっ♡ん♡ひっ♡入ってきたっあ♡！♡ふひっ♡20万お貢ぎセックス♡いっいっ♡入れただけでっ♡ん♡お♡お♡っ♡いっきゅっ♡ん♡くくくくっ♡」

重い水音と共に肉棒がゆきかぜの膣内に侵入。

濡れ滴る愛液まみれの膣壁が君の肉竿を締め付けながら迎え入れてくる。

奥へ奥へと蠢く膣肉を掘削して、亀頭を子宮口を持ち上げる。

「んおっお♡おっ！♡ふうまの強々長チンポでっっえ♡んっひっいっ！♡お貢ぎアクメツ♡おっっお♡おっっ♡ぐっ

りゅつ♥ ほっおゝおゝおゝおゝおゝ♥」

ごちゅつと亀頭の先がゆきかぜの子宮口にめり込む。

その瞬間ゆきかぜの狭い膣壁が肉弾頭を絞るように蠢く。

ガリツと歯を噛みしめて搾り取られそうな快感を我慢。

君の肉竿を奥へと吸い尽くそうとする膣壁の動きに逆らいつつ、腰を上下に動かしていった。

「おっおゝおゝっ♥ カリ高太オチンポにっいつっ♥ ひっうゝっ♥

内臓まで犯されてるみたいでっえっ♥ んっおゝおゝっ!♥」

ぺっどの反発力を利用してゆきかぜの細っ濃い体を上下に振る。

きみが簡単に持ち上げられるほど軽い彼女の体を道具のように犯しつくしていった。

「ふっいいっ!♥ 子宮ごちゅごちゅっ!♥ おっあゝあゝっ!♥

ついたらっあゝあゝっ!♥ またっひっちちやっあっ♥ んんっうゝ

うゝうゝっ!♥」

ぶしゅぶしゅつと君の腰に何度も愛液が降りかかる。

子宮口が君の亀頭に何度も吸い付いて、壁肉が搾り取ろうと激しい蠕動運動をしてくる。

ビクンビクンツと何度も痙攣する彼女の体を道具のように肉槍で突き上げていく。

涎と涙で汚れていくゆきかぜの顔をさらに絶頂へ押し上げようと君は行動。

貢ぎマゾ雌の求める言葉を君は耳元でささやく。

絶頂一回ごとに5千円だと命令する。

「ひっうゝうゝっ!♥ そ、んなっあっ!♥ おゝっおゝっ!♥ 事、

言われたらっあゝっ!♥ いゝっいゝっ!♥ 今すぐっ!♥

いつっくっうゝっ!♥ おゝっおゝおゝおゝっ!♥」

君が耳元が重く太い声でささやいた瞬間、ゆきかぜの中が激しく脈動。

噛みしめられたかと思うほどきつく締め上げてきた。

雌のアクメ声を漏らす目の前の肉オナホをさらに激しく侵していく。

「ひっいっ！っいっ！っ！♥ そんなに激しく突かれたらっ！♥ またひっぐっうっ！♥ あっはっあっ♥ これでふうまにまたっ♥ お貢ぎしちゃっうっ！♥ んっううっ♥」

君の体に抱き着きながら、ゆきかぜは何度も獣のような嬌声を漏らしていく。

汗に濡れた褐色の肌が震えて、ベッドに汗の水滴をこぼしていった。

「んっおっおっおっ！♥ まだひっいっ！♥ ぐうっうっ！♥ お貢ぎアクメっ！♥ あっおっおっ！♥ 止まらなくってっえっ！♥ ふうまに全部っ！♥ 貢いじゃっうっ！♥ んっひっいっ！っ！♥」

何度も絶頂を味わうゆきかぜの膣内が君の肉竿を締め上げてる。

きつく何度も脈動し膣壁が擦りついてきて、君の射精欲求をたかめてくる。

流石の君もそろそろ限界だった。

「おっおっ！♥ ふうまのオチンポっ！♥ でっそっうっ！♥ んっうっおっ！♥ なんでしょっ！♥ ふひひっ！♥ お射精代っ！♥ 払うからっあっ！♥ あっあっあっ！♥ 依頼代全部のっおっ！♥ おっおっおっ！♥ 50万円払うからっあっあっ！♥ だからっあっあっあっ！♥」

君の体に力いっぱい抱き着いて、足を腰に絡めてくる。

君に対して、絶対にはなさいという意思表示。

中に出すしかない大好きホールドを決められて、君は素直に子宮内に白濁液を御馳走した。

「おっ！っほっおっおっおっ！♥ ふうまの孕ませザーメンッ！♥ んっんおっおっ！♥ 子宮に直接ぎっでっえっ！♥ えっひっ♥ 任務の報酬っ♥ んっうっおっ！♥ 全部貢いじゃっあっ♥ んっあっあっあっあっ！♥」

目の前がちかちかするほどの快感に脳髓が痺れてくる。

目の前でゆきかぜの喉がさらけ出されて、天井に向かってアクメ声を喉から絞り出されていった。

「おっおお、オ、お、っ！♥ まだでっへっえ、っ♥ おひっい、い、♥！♥ ふうまの長射精でまだっ♥ ああん、ん、っ！♥ いっぐっ♥ いっっひい、っ！♥ お貢ぎアグメっ！♥ あっっい、っ！♥ ぐっりゅっ——んっお、オ、くくくくっ！♥」

天井に向かった舌先から唾液のつぶてを飛ばしながら、ゆきかぜは絶頂に体を打ち震わせていた。

ガクガクツと激しく痙攣して、膣肉が君の肉棒を牛乳絞りのように蠢く。

肉棒に残りそうにないほど締め上げられて、君は最後まで白濁流を子宮に御馳走した。

「おっおお、くくくっ♥」

かくりつと顔を戻して、君に眼球を上瞼で半分隠したアへ顔を晒す。

涙と唾液でぐちやぐちやで絶頂で放心した無様な顔は君の雄欲を刺激してくる。

愛液と白濁液が混ざり合った物で汚れた肉棒を、彼女の顔へ晒す。そのままぷにぷにの柔らかかな頬を突つつく。

「んくくくっ♥ わかつてるわよっ♥ んっああくくっ♥ ちゃんと奇麗にするからっ♥」

若干放心状態だったがすぐに君の肉剣を啜えこむ。

そのまま君の肉棒を舌と口内の唾液で洗浄。

「んっじゅっおっ♥ ちゃんと奇麗にしたからっ♥ これで5千円だからねっ♥」

白濁した体液の代わりに、透明な唾液で濡れた肉棒。

仰向けになって若干快感で震えながらも、淫靡な笑みを浮かべるゆきかぜ。

すっかりドSスイッチが入った君は彼女にまた手を伸ばすのだった。



## 鬼崎きらら

カタカタとパソコンを打つ音がする。

君専用と化している特務中隊のオフィスで君は任務の事務処理をしていた。

対魔忍の習性というべきか、大抵の隊員が事務仕事は不得意なため、隊長である君が処理しなくてはいけないのだ。

空き教室を改造したそこは、君専用のやり部屋でもある。

そんなことを意識してしまうほど、現在君は溜まっていた。

普段なら肉竿が乾く暇がないほど、女性を抱いているが、今ちょうど知り合い全員が忙しい。

その所為でかなり性欲が湧き出している。

「ふうま？ この書類こっちでいいの？」

だからそのデカパイを揺らしながら歩くんじゃない！

思わずうなりそうな程性欲が刺激される、豊満な肉体の鬼崎きららが、君の仕事の手伝いをしてきている。

普段なら感謝してにこやかに指示できるが、今は引き攣りそうな顔を制御して何とか声を出す。

「そうじゃあこれもこっちに運ぶから……っ♥」

君のどろどろした欲望の視線を浴びているきららは、熱い吐息を吐いて書類を別の机に運ぶ。

ドローンが置いてあるそれは、自動で別の部署に運んでくれるものだった。

そこまで移動する最中すら、大きなお尻がふりふりと誘う様に揺れていた。

甘い香りすら漂ってきて、ゾクゾクしてくる。

「これはどうするの？」

横からきららの体がかつつくように、机の上の種類を覗き込んでくる。

また甘い香りが、君の理性をガリガリ削る。

「……………」

はあっと甘く熱を持った吐息が、君のほほに当たってきた。ゾクゾクツツと背筋に寒気に似た快感が走る。

このまま雄欲のまま襲っても無罪なのでは???

そう思ってしまうが、君の趣味に反する。

前世で散々味わった分、現世では襲うことはしないことにしていた。

喘がせ鳴かせるよなハードセックスと、襲い掛かり蹂躪するセックスは違う。

ある種の意地できららに襲い掛かりそうな体を、押さえつけていた。

「ふふつつ ♡ これ貫うからねっ ♡」

君を誘惑して襲わせたいのだろう。

時折漏れる色気ある笑みが、明らかに挑発的だった。

「コーヒー……に置いとくからっ ♡」

発情してゆらゆら揺れる頭をすつきりさせるために、置いてかれたコーヒーを飲む。

若干の甘味……あっ!?

「ふふつつ ♡ ……ここまで誘惑してるのに答えないふうまが悪いのよっ ♡」

罠に引つかかった獲物を見るような顔を、きららがしていた。

しまったと思うと同時に、心臓の鼓動がバクンツと跳ねた。

おのれっえ。

思わず恨み言と共に君は、きららの体を押し倒す。

「あんっ ♡ ……ふうまっ ♡ いきなり押し倒さないでよっ ♡」

息荒く押し倒した君を、どこか楽しそうにきららが受け入れた。頭が燃えそうな程、性欲がぐらぐらゆだっている。

このまま服をやぶり、彼女の体を貪りそうだった。

何とか押さえつけて、君は一応目の前の金髪爆乳少女に問う。なぜこんなことをしたのか、聞いた。

「……いろんな子とセックスするのは、百歩譲って許してあげる。でも、私だけ優しく抱いてない？」

じつとりとした視線。きららの青い宝石のような目が、君を貫いてくる。

どうにも彼女相手には、君はためらいが混じる。

それは彼女の過去かそれとも……。

今は考えることではないだろう。

君は熱い吐息をゆつくりと吐く。

そのまま君は目の前で押し倒した、キララの唇を奪った。

「んっうっ♡」

理性を飛ばした獣のような、セックスがいいならしてやろう。

君はきららとの時には、抑えていたものを開放する。

「んんんっ♡」

舌を口内に伸ばして、唾液をからめとっていく。

甘く雌のような香りが、きららの体から臭い立つ。

「んじゅれっ♡舌はげっしっいっ♡んじゅっ♡舌長すっ

ぎっいっ♡んんっうっ♡」

お互いの唾液が、口の端から透明な唾液が零れ落ちる。

ガチガチに勃起した肉棒を太腿にこすり付けながら、制服のボタンを外す。

「んっんんっ♡喉までふうまの舌っ♡んっおっっ♡届くっうっ

♡あっんっ♡いきなり脱がすなんてっ♡

んはっあっっ♡獣っおっ♡んんっくっうっ♡」

お互いの舌と口が離れていく。舌尖につながった唾液の橋がぶつりつと途切れていく。

熱くなった体温で蒸気が上がる肉棒を、ぷるんっつと揺れるきららの爆乳に当てた。

「はっあっ♡おっぱいにふうまのオチンポっ♡んっ♡当たっ  
てくるっ♡んっっすうううっ♡雄くさっあっ♡スンスンっ♡

精液溜まつてるみたいねっ♥ すううっ♥」

亀頭の先にきららの長い鼻が当たり、犬のように吸い付かれる。ふんふんつと鼻息が、当たりくすぐつたい。

同時にビリビリツとするような快感が背筋に走ってきた。だらりつと亀頭から、先走り液が零れていく。

「んれるっ♥ これくらいで先走り液出しちゃうのっ?♥ んっ♥ 思ったより早いのかしらっ♥ んれりゅっ♥」

気の強いきららしい挑発だ。

前から君を搾り取ろうと、ほかの対魔忍たちから教えを、乞うているのは知っていた。

その程度で君に性技で勝てる、と思うのがちよろい所だ。

君の肉棒が当たるきららの爆乳を、ぎゅつと黒い霧を纏わせた手で掴む。

ぎゅつと掴むだけで柔らかくも、奥底から強い反発感を感じた。

みずみずしい肌が絹のように吸い付いてきて、揉むだけで気持ちがいい。

極上の肉体を君が思う存分、蹂躪している事にゾクゾクとした愉悅が心から湧き上がる。

「んっあっ♥ オチンポ私のおっぱいでえっ♥ んっうっ♥  
ふうまのオチンポっ♥ はっあっ♥ ブリズリしてりゅっ♥  
んっおっあっ♥」

君が攻めていけば、感じやすい体のきららは、すぐに喘ぎ出す。

ピンク色の唇から、鳴くような声が漏れ出していた。

ぐちゅぐちゅつと先走り液と汗が交じり合った音が、彼女の爆乳の間からなっていた。

顔が紅潮した彼女の美貌が、快樂でゆがみだす。

「んっうっあっ!♥ おっぱいがっあっつ!♥ あっあっつ!♥ ふ  
うま専用胸オナホにされてっるっうっ!♥ んっうっうっ!♥」

君の肉棒が完全に埋まりそうな程大きな乳肉が、ぎゅうつと包み込まれながらも絞られそうだった。

ぶちゅんつと重い水音が奏でられながらも、爆乳がどたぶんつと波



最後まで放出していくと、君は腰を引いていく。

口から亀頭が出て爆乳に挟まれた肉竿が抜けていった。

「んっはっあぁっ♡♡ 相変わらずっ♡♡ んぁっ♡♡ 量が多すぎよっおっ♡♡ ケプツ♡♡ やだっ♡♡ もっうっ♡♡」

何とか飲み切ったが、きららの口からわずかにケップ音が零れていった。

恥ずかしそうに口元に手を当てて、顔を逸らす。

一度出した程度で収まらない性欲は、きららに飲まされた薬で燃え盛っている。

先ほど君はきららに獣のようなセックスをすることを告げていた。

今日をそらして君を見てない、彼女の隙を付いて肉棒を狙い定める。

既にぐちゅぐちゅに濡れて愛液を、床に零す膣口に肉竿を突き入れていった。

「ひっうっうっうっ♡♡ い、いきなり入れるなってっえっ♡♡ おっおっおっ♡♡ 本心に獣になってるっうっ♡♡ おっっおっ♡♡」

ずりゆりつと奥底まで、一気に肉竿が挿入されていた。

熱く火傷しそうな膣肉が、君の肉槍に絡みついてくる。

何度挿入しても君の肉弾頭に、絡みつきに締め付けてくる。

「はっあぁぁっ♡♡ この長太オチンポっ♡♡ んっいっいっ♡♡ 私の弱い所っおっ♡♡ はっあぁぁっ♡♡ ついてくるんだからっあぁっ♡♡」

パンパンぐちゅぐちゅつと、君のヤリ教室に性交の音が響きだす。

たゆんたゆんつときららの爆乳が、何度も魅惑的に揺れていく。

「はっあぁっ♡♡ 本当にふうまはっあぁっ♡♡ はっあぁんっ♡♡ 私のおっぱいのとりこっ♡♡ んんっうっ♡♡ なんだからっあぁっ♡♡ おっおオオっ♡♡」

君の肉槍に突き立てられながらも、きららは挑発的な笑みを浮かべ

てくる。

普段ならこのまま愛し合う様に、キスを交えながら行う性交だが、今は違う。

獣そのもののようなハードなセックスを行うため、君はさらに腰を激しく動かし出す。

「おっおっ♥ やだっあっ♥ んんっおっ♥ これっ♥ あっおっ♥  
弱い所ばかりつかれるとっおっ♥ おっおほっ♥ 変な  
声っ♥ んっうおっ♥ でちやうっうっうっ！♥」

何度も性向を行ったなかだ。

彼女の弱い膺場所は、すっかりわかっている。

ぐりぐりと子宮を亀頭で押してあげれば、獣のような嬌声を上げだす。

「んっんっ！♥ こんなっ！♥ おっオッオッ！♥ 激しする  
のっおっ！♥ あっあっあっ♥ 教えるなんてっっえっ！♥  
おっおっおっ！♥ ふうまのきちっくっうっうっ！♥ んっあ  
アッアッアッ！♥

ツンツンしながらも、金髪ツインテールの美貌と爆乳や、豊満な体系で人気な鬼崎きらら。

そんな彼女が君の腰の動きで、翻弄され鳴く楽器のようにされている。

ゾクゾクつと雄の欲望が、胸の内から燃え盛っていた。

「あっあっ！♥ もっうっ！♥ ふうまもっおっ！♥ おっおっ！  
♥ そんな顔するのねっえっ！♥ んっひっ！♥ ねっえっ  
♥ んっんっ♥ き、キスしてっえっ♥ はっあっあっ！♥  
ふうまっあっ！♥ んっちゅっうっ、んっんっ♥」

ちろちろと挑発的に、舌が伸ばされて誘ってくる。

精力剤で脳みそが茹る君は、即座に唇を合わせる。

そのまま舌をからませて、甘い唾液を交換していく。

「んっちゅっりゅっ！♥ もっう、キスしながらっ！♥ んじゅ  
りゅ、んっっうっ！♥ 腰動かすなっんてっえっ！♥ 頭がお  
かしなりっそっおっ♥ んゅっれりゅ、んっんっくっくっ！♥」

口では反抗しているが、君の舌にきららが絡まってくる。舌粘膜が絡まり唾液が、交換されてきららの口の橋から零れていく。

君の胸に反発するように、彼女の爆乳がぶにゆりつと形を変えた。「んじゆりゆつ！♥ これっ！♥ んんっうっ！♥ 乳首がすれてえっ！♥ んっうっうっおっ！♥ かんじちやうっうっ！♥ 脳みそふうまでっ！♥ いっぱいになりっそっおっ！♥」汗と性行為の臭いが、ヤリ教室に充満してくる。

人氣がなく、防音を完備しているため、誰にも気づかれない絶好のやり部屋。

二人とも通う五車学園で、性行為をしているという事こそが、君達の欲望を駆り立ててきた。

背筋に走る快感の電流は、すでに限界だった。

「おっおっおっ！♥ またなかでおおつきくっうっ！♥ 子宮にちゅっちゅしないのっおっ！♥ おっおっひっいっ！♥ 入りそうじゃないのっおっ！♥ んっうっうっ！♥ 駄目だからねっえっ♥ そんなことしたらふうまのオチンポ奴隷にっ！♥ ひっうっうっうっ！♥ なっちやうからっ！♥ おっおっおっ！♥ だ、だめだからねっ！♥ あっあっあっ！♥」

そんなことを言われていうことを聞く男などいない。

顔も睨むのではなく、蕩け落ちた雌の表情だった。

どくんと心臓が跳ね上がるのを感じた、

何処で聞いたかはわからないが、君は彼女の願い通りにすることにした。

黒い霧を更に肉棒に集中、そのまま彼女の奥底まで一気につき込んだ。

「おっほっおっ！♥ さっ！♥ いっ！♥」  
がくんと体が跳ねて、眼球が瞼の裏にまで上がる。

痙攣し続けるキララの体を、蹂躪するように腰を突き動かす。

「ひっうっうっうっ！♥ これっ！♥ おおっおっ！♥ やばっあっ！♥ あっあっ！♥ ひ、ひんじやっうっ





真つ白な喉が君の目の前に広がって、彼女の顔が向こうの壁に向かつて舌を伸ばす。

飛び出た唾液が、君の体に当たった。

ぎゅうううつと膣肉が、君の肉竿に絡みつき絞り上げてきた。

先ほどまで増産された白濁液が、搾り取れていく。

「んっおっ ♡ ほっおくくっ ♡」

最後まで搾り取られて、きららのからだだがゆっくりと戻る。

重いため息がゆっくりと、ピンク色の唇から零れていった。

そのまま君もちゅうちゅう吸い付いてくる子宮口から、ゆっくりと肉竿を抜き出した。

「んっあっ ♡ うっそおっ ♡ まだ大きいままじゃないっ ♡」

抜けた衝撃で目を覚ましたのか、きららは抜けた君の肉弾頭を見つめて感嘆の声を上げた。

「あの葉ほんとうにき——あっ ♡」

思わずと言わんばかりにきららは口に手を当てた。

やはり盛ったようだ。効果に覚えがあるため気づいていた。

まあ、君に襲われたくて持った程度なら、許してやってもよかった。

だが、それを口にするなら話は別だ——いいようにできる理由になる。

このまま終わりにしてやってもよかったのだが——そういうわけにもいかなかった。

君はきららの体に手を当てる。

「い、このままするのっおっ ♡」

ちらりと青い瞳が君を見つめてくる。

期待と淫欲の混ざった目が君を見つめている。

君はにっこりと笑顔を浮かべて頷くのだった。

盛った精力剤分の責任はとってもらおう。

そういった君は、きららの体をひっくり返した。

「えっあっ ♡ ちよつとふうまつあ ♡っ！ ♡ あっあ ♡ん ♡っ」



その瞬間尻穴の入り口が、君の根っこを締め付けてくる。

「ほっおっおっ ♥ これ駄目なのっおっ ♥ おっおっ ♥ おっ ♥ 子宮がお尻の方からっ ♥ んんうううっ ♥ ふうまの太長チンポで突かれるとっおっ ♥ おっオっオっ ♥ 頭が駄目になっちやうううっ ♥ んうっうおっおっ ♥」

君になすがままにされながら、がりがり床をキララはかきむしる。

柔らかい素材で作られて、爪を尖らせても形を変えるだけの特殊な素材だ。

セックスに最適な素材でもある、やり部屋兼オフィス代わりの教室は、君の性行為の音を壁で吸収していた。

ずちゅんずちゅんっ腸液と先走り液が、混ざった重い水音が木霊する。

甘くスンとした臭いが、部屋中に満ちていた。

「んっおっおっ！ ♥ すっかりふうまの孕ませ棒でっえっ！ ♥ んっひっいっ！ ♥ け、ケツ穴があっ！ ♥ ほっおっ ♥ おっ！ ♥ オナホに調教されてるからっあっ！ ♥ くっおっおっ ♥ おっ！ ♥ だ、だからっ！ ♥ あっあっ ♥ あっ！ ♥ 早くザーメンっ ♥ ンンンッ ♥ 孕ませ汁っ ♥ んっういっ ♥ 専用ケツ穴オナホについて ♥ コキ捨ててっえっ ♥」

普段なら絶対に言わない淫らな言葉を、積極的にさらさらは吐き出していた。

何時もは凛々しく女子人気も高い彼女が、君とのセックスで淫らで下品な言葉を発している。

雄欲が燃え盛り自尊心がくすぐられる。

「あはっあっ ♥ 言っちやったっあっ ♥ おっおっ ♥ おっ ♥ ふうま専用雌豚についっ ♥ なれたっあっ ♥ あひっいっ ♥ んっ ♥」

真っ白な肌から汗が飛び散り、豊満な肉尻がぶるんっ揺れた。

金髪ツインがふわっ広がり、甘いムスクのような雌臭が鼻に突く。

ぎゆううつと肉尻の窄まりが、君の肉竿を何度も噛み千切らんばかりに締め付けてくる。

「んおっお、お、お、っ！♥ い、いったっ！♥ あ、っ！♥ 言っただからっあっ！♥ あ、あ、あ、あ、っ！♥ ふうま専用雌奴隷宣言したからっあっ！♥ ほっお、お、お、っ！♥」

尻穴で飲み込まれた君の肉竿が、ぎゆううつと渦を巻くように搾り上げてくる。

背中から見えるどぶるんぶるんつと、何度も揺れる爆乳が君の目を楽ませていた。

その体を床に押し付ければ、むにっいつと乳肉がつぶれるのが見える。

「ひっう、う、っ！♥ は、早くご褒美ザーメンっ！♥ ン、ッオ、オ、オ、っ！♥ ケツ穴オナホにっいつ♥ ひゅっぐう、う、う、っ！♥ 注ぎ込んでっえっ！♥ ん、っえ、ひい、い、い、っ！♥」

胴からぐるりつとまげて、君の方に涙に濡れた青い瞳で見つめてくる。

瞳の中心にハートマークが、見えそうな程熱い欲情が君を貫く。

どくんつと心臓が跳ね上がりそうな程、色気のある表情。同時に肉槍がぎゆううつと、尻穴が締めつけた。

激しい蠕動運動が、腸内で肉弾頭を絞り上げた。

バチンツと目の前で火花が散ったかと思うと、肉竿から白濁液を流し込んだ。

「ん、ほっお、お、お、お、っ！♥ ぎっだっあ、あ、あ、あ、っ！♥ おっごっお、お、っ！♥ ケツ穴火傷しちゃうくらいっ！♥ いっひい、い、い、っ！♥ 熱いのっお、お、っ！♥ お、お、お、お、っ！♥ 出されてるのおおっ！♥ ほっお、お、お、お、お、っ！♥」

チカチカと明滅しながら、肉槍から白濁流が迸る。

極上の女を抱きしめながら白濁液を流し込んでいることに、背筋がぞくぞくするほどの快感が体中を走っていた。



## マヤ・コーデリアと共にキラ・クリシユナ調教

とあるホテルの一室で君は静かに息をひそめていた。

以前接触したキラ・クシヤナ。彼女こそが今回のターゲットだ。

以前彼女達が鎮圧したパルツァー事件。そこから流れたスナッフフィルム。

彼女とその親マリカ・クシヤナが、魔界の住人たちとかかわりを  
持っていることが分かったのだ。

米連の一派であり、そのリーダー格でもあるクシヤナ親子。

彼女達を捕縛するわけは、色々と足りないものがある。

だが、これ以上の被害を増やすわけにはいかない。

その上で対魔忍として、米連に楔を一つ打っておきたい、という上  
層部の思惑があった。

つまるところ——雌として墮とせよという指令だ。

君にとっては、簡単な任務だと言える。

淫魔族のコネを使って、欲求を非常に高める香を、部屋中にまき散  
らしておいた。

その上、マヤが協力してくれることになっている。

キラの行いを聞いて怒髪天と化したマヤが、君の任務に付き添うこ  
とになったのだ。

あの時のマヤの目は思い出さくない事だった。

思い出すだけで寒気のする目を、大きく息を吐いて思考から追い出  
す。

その間にかちやりつと、鍵を開ける音がした。

君は目かくしをされ、手足を拘束されたおもちや、という格好で  
ベッドの上に横たわっている。

むろん演技と恰好だけであり、動きは一切妨げられることなどな  
い。

「ふふっ ♡ 話は本当だったのね」

以前あったキラ・クシヤナの、高飛車なお嬢様といった声が耳に入る。

カツカツと大きな足音を鳴らして、君に近づいてきた。

「ええ、せつかくですから……キラ様。先ほどの……」

「わかってますわ。お母さまには1週間ほど、休暇を楽しむと言ってあります」

マヤは任務を果たしたようだ。これでキラが一週間連絡がなくても、怪しまれない。

彼女が休暇中に、よくない趣味を果たしていることくらいは、君達も把握している。

だからこそ、マヤも君の任務に協力するし、遠慮なく体を辱めるのだった。

「その後、貴方をしつかりお母さまに紹介しますわ。米連のクシヤナ閣の司令官であるお母さまに……意味は解りますね」

「勿論です。私達ビッグファミリーも、そちらの技術に関心を持っていますの」

「ふふっ♥ 魔界の……とはつきり言ってもいいですよ。この男を切り刻んでも、簡単に再生できる技術。色々面白いものも見れますし」

「……そうですね」

マヤの無感情の声が、最後に聞こえた。思わずサブいぼが立ちそうだ。

何度も心を重ね体を交わらせた関係である君は、マヤの秘めた激情が感じ取れる。

恐らくキラに対して一切の情が消えうせた。大分気合を入れて調教しても許されるだろう。しないと許されないともしいう。

「さて、まずはこの体の切れ味でもっ……」

シャンつと刃物が抜かれる音が、耳元で聞こえた。

そのままツイット、体で引かれる感触が伝わる。

熱い吐息が、君の顔に降りかかった。

爽やかなミントと香りと熱を持った発情した雌が吐いた息。



君は体の拘束を解くと、そのまま隠し持った注射器を振りかざす。  
「なあ——っ！」

流石というべきか、襲い掛かった瞬間、キラはナイフを君の肩に突き刺す。

その程度では、君の行動を制することにはならない。そのまま注射を突きさして、中身を注入する。

「くうっ。ハメましたわね——あっ」

そのまま殺されそうな程、ぎろりと睨まれる。だが、くらりつとキラの体が倒れていった。

「すう〜」

スナッフフィルムを楽しむ令嬢にしては、可愛らしい寝顔を晒しながら床に倒れている。

「——っ」

その顔を今にも蹴りだしそうな顔で、マヤは見下していた。彼女が行った行動や話していた言葉で、罪のない人々をどう扱っていたかを、垣間見たのだろう。

ひとまずマヤを落ち着かせようと、君は声をかけた。

「わかってますわ——彼女の上官。ベアトリス・クシヤナ。魔界だけでなく、ブレインフレイヤーの技術すら使いだしている、軍閥の調査こそが目的……わかってます」

ベアトリスも墮とす対象に入っている事すら理解して、マヤは落ち着こうと一度大きな溜息を吐いた。

手早くキラの体を拘束すると、君はマヤの緊張を解こうと唇を交わらせた。

「んっう——もうフーマ、気が早いですわよっ ♥ んっちゅっう——  
—れっうっ ♥」

何度か唇を合わせると、マヤの方から舌を伸ばしてきた。

そのまま彼女の舌を吸う様にキスして、舌を交わらせていく。

「んちゅ、れるっうっ ♥ フーマの唾液っ ♥ んうっれうっ ♥ もっ  
とくださいっ ♥ んれるっ、じゅれっ ♥」

舌を交わらせて唾液を何度も交換していく。

お互いの欲望が燃え上がっていくのを感じ取りながら、お互いの服を脱がしていった。

「んっちゅ、れろっおっ♡ はっあくくっ♡ フーマのチンポっ♡  
相変わらず太くてっ♡ はっあっ♡ やけどしそうな程熱いっ♡」

ズボンから解放された肉棒が、マヤの手が触れてくる。そのまま唇を離して、マヤは君の肉棒に顔を近づけていく。

「すっうくっ♡ ちゃんと洗ってますか？♡ んっうっ♡ くさあっ♡ フーマのチンポ臭があ♡ んっおっ♡ 頭に響いてしましますっ♡ すっうくく、おっ♡」

君の肉槍にマヤの熱い鼻息が何度も当たってくる。君に肉弾頭の香りを思いつきり楽しんでるようだった。

そのまま彼女は君の肉棒に舌を伸ばしてくる。

肉棒に這うようにマヤの舌が君の肉竿の上で蠢いた。

「んっれうっうっ♡ この味っ♡ んれろっおっ♡ 我慢できませんっ♡ んじゅっりゅっ♡」

何度か君の肉剣の上で舌が這うが、マヤはすぐに口を大きく開けた。

「んっじゅりゅっ♡ フーマのチンポっ♡ んじゅるっれっうっ♡  
フェラするだけでっえっ♡ 頭が痺れてしまうのっ♡ んっうっ♡」

「んっ」

君の肉棒をじゅぼじゅぼ音を鳴らしてフェラチオしてくるマヤ。

その音で目覚めたのか、体をもぞもぞ動かし始めるキラ。

そろそろ即効性の睡眠薬が切れるころだ。その分混ぜた媚薬と部屋中に充満する媚香が、効きだす頃である。

「んっじゅ、そろそろ起きる頃合いですね——ふっっ♡」

淫靡ながらも寒気がするような笑みを、マヤは浮かべた。

殺意すら感じる笑みだ。肉棒を縮めるような真似は、しなかったことを褒めてほしい。

それほど凄惨な表情だった。キラに対する行いは苛烈なことをし

なければ、マヤが納得しなさそうである。

君は心の奥底にあるドSスイッチをキラに向けてることを決めつつ、彼女が起きるまでマヤのフェラチオを楽しむことにした。

「んじゅれっりゅ、分かってますっ♥ 今の私はフーマの雌奴隷っ♥  
んれりゅっ♥ この強雄チンポ欲しさにっ♥ じゅりゅれっら  
っ♥ キラ・クシヤナを売ったっ♥ じゅぼっんっらっ♥ 浅ましい雌畜生ですっ♥ んんっらっらっ——っ♥」

ぐちゅぐちゅとマヤの股部から、水音が聞こえだす。君の肉棒を啜えこみながら、オナニーを楽しんでるようだ。

「——はっ！ 体が拘束されて——っ！」

目覚めた瞬間体を動かそうとするキラ。彼女は自身の体が自由に動かせないことを悟った瞬間、君達を鋭い紫色の目で睨んできた。

「んじゅれっらっ♥ ご主人様、起きましたっ♥」

すっかりと雌奴隷とご主人様、という演技を行いだすマヤ。どこか楽しそうなことを悟りつつ、君は悪役さながらなの、悪い顔をする。

ちなみにかなり似合うと、ユキカゼやさくらからも好評だった。

痛い。マヤ、軽かかないでほしい。

「あむっらっ♥ ほら、ご主人様っ♥ れろれろっおっ♥ ターゲツトが目覚めましたよっ♥ んれるうっ♥」

「あ、貴方達っ！ このキラ・クシヤナに、いったい何のつもりで——っあっ♥」

もぞもぞと体を動かすのをやめて、君達を思いつきり睨んでくるキラ。だが、君の肉棒をフェラ奉仕するマヤの姿を見て、とろんと目が蕩けた。

媚薬と媚香二つの効き目が、すっかり脳髓から足の先まで侵食しているようだ。

雌の体の疼きを抑えきれないのか、君の肉竿に熱い視線を注ぎながらも、ぐっと口の端を噛みしめて君を睨んでくる。

「そう——貴方が黒幕という事ですね」

紫色の気の強そうな尖った目が、君を睨みつけてくる。頭の回転は

良いようだ、嘲笑う様に君は笑う。

「はっあ、はっあゝゝゝっ♥ んっっ、体が熱く、うずいてっ——私を調教するおつもりですか？ ちゃんちゃら可笑しいですわね！」

一度唾を飲み込むように喉を動かして、君達に対して挑発的にキラは声を上げた。

「ふふっ♥」

「何がおかしいのですか！ マヤ！ ビッグファミリーの令嬢であるあなたが、こんな男についてっ！♥」

「んっじゅりゅれりゅっ♥ ですが、このチンポっ♥ んっごっおっ♥ 雄様の太長チンポについてっ♥ んっぐっぶっ♥ 逆らえませんからっあゝっ♥」

ちらりつと君に合図を送るマヤ。君の意を決して、彼女の頭に手を置く。そのままオナホルのように彼女の頭を、前後に動かしていった。

「ごひゅじんひやまつ♥ んぐっぶっ♥ 私の口オナホっ♥ 思いつきり使ってくださいませっ♥ んっおゝおゝっごっおゝ♥」  
「ふっふっ♥ んうゝうゝっっ♥ 高貴な令嬢をそんな風に扱うなんてっ♥ は、恥を知りなさいっ♥」

もぞもぞと体を動かしながら、キラは君達の高位に吐き捨てるように、言葉を放つ。だが、その紫色の瞳はトロンツと涙に蕩けて汗をかいている。はっはっと何度も厚い吐息を吐いて、君達の淫らな光景に夢中なようだった。

君ほどの男になれば、ある程度の情報をビデオ撮影があれば、性癖に何を求めているかわかっている。

スナッフファイルの一部に、顔が映らないように出演しているのがあった。

その時の視線や行動から、彼女自身が重ねているのは、凌辱しているほうではなくされてるほうで興奮している様子がうかがえた。

つまり彼女自身が行う拷問や凌辱は、自身との代替行為だろう察せられる。

その興奮を高めるために、マヤを激しく侵さないといけなかった

た。

痛い、噛まないでくれ。集中するから……。

「んっむっおっ ♥ 喉マンコっ ♥ んっぐっおっ、おっ ♥ ご主人様の長太チンポでっえっ ♥ んおっおおっ ♥ 感じてしまますっ ♥ んっうっうっうっ ♥」

「ふっう——っ ♥ ふうっくくっ ♥」

チン毛に顔が何度も当たるほど、激しいイラマチオ。マヤの唇が伸びて、淫猥なバキューム顔を晒す。

喉が蠢いて君の肉棒を、吸い尽くそうとしてくる。

その様子をじっと荒い息を吐きながら、キラは見つめていた。

もそもぞと体を動かしながら、舌をだらんっとな伸ばして、発情した雌丸出しである。

このまま口に出すぞっとな君は、押し殺した声を上げながら、マヤの頭を腰に腰付けた。

「んっおっおっ ♥ 喉に熱いドロドロザーメンっ ♥ んっぐじゅりゅりゅっ ♥ ぎでっえっえっ ♥ いっちゃいますっう——んっぐうっうっうっ！ ♥」

ビクンビクンツと体を跳ねさせながら、マヤは吐き出された精液を飲み干していく。

「んっおっ ♥ 飲み尽くせなっつあっ ♥ んぶっぐっうっ ♥ んっぐりゅっ ♥ 全部胃にほしいのですっ ♥ んっぐりゅっううう ♥」

だらりっとな鼻からザーメンが出てくるが、それでもマヤはごくごくつと必死にならして飲み干していく。

その蠢く喉肉で肉棒から、さらにザーメンが放出されていく。

だが、最後の段階になって、マヤはちらりっとな悶えるキラに目をやると、亀頭部分に口を動かしてちゅうっとな吸い取ってきた。

「んっくくっ ♥ ふっふっ ♥」

「ふっふっ ♥ え、ちよっとな！ マヤ・コーデリア！ 貴方精液で膨らませた顔を近づけて、何する気ですのっ——やあ！ やめなっ——」

頬をリスのように膨らませたまま、マヤはキラに顔を近づけた。  
ニタリと淫靡な笑みを浮かべた彼女は、そのまま口を開ける。

「んっえくくっ♡」

「や、やめなさッ——んっう、くっさいザーメンがっ♡ 私の顔  
についっ♡」

君の吐き出した精液が、キラの褐色の美貌に降りかかっている。体を拘束された彼女は、顔を振ることでしか抵抗できない。はかない抵抗は、降りかかる精液の量を、わずかに少なくすることしかできない。

口から吐き出された精液は、床にも落ちてキラの銀色のツインテールに絡みつく。

「んっあくっ♡ けぷっ♡ あら、失礼っ♡」

「うっうっ♡ くさっ♡ こんなどろどろの精液を♡ ふっ、

ふううっ♡ 私によくもっおっ♡ くさあ♡」

ブルブル屈辱に震えているように見えるが、顔が紅潮して荒く息は吐いていく。明らかに発情しているが、君達はまだそのままにしておくつもりだ。

「ふふっ♡ ご主人様っ♡ 口マンコだけじゃなくっ♡ こっちのオ

マンコにもっ♡ んっうっ♡ 下さいなっ♡

」

「ちよ、ちよっと！ 顔の上にあなたのマンコを置かないでくださいなっ！♡ こ、これじゃあ私の顔にっ♡ きやつあ！♡」

君に向かってふりふりと腰をマヤは振り出す。

すでに濡れていた淫口から、愛液が降りかかるのを、キラは目をつぶりながら避けていた。

意味ない抵抗だ。その顔に愛液と精液の混じった液体を振らせてやるつもりで、君は勃起したままの肉棒をマヤの膣口に入れ込んだ。

「んあああっ♡ フ……っ、ご主人様っの孕ませチンポっ♡ 奥

まで一気に来ますっ♡ はっ、あんっ♡ 専用マンコオナホっ♡

おっおっ♡ もっとハメハメしてくださいねっ♡ んんんっうっ

♡

「やつあ、愛液と先走りが混ざったのが♡ んっう、ふっうくくっ♡  
♡ 振りかけないで♡ やっあんっ♡」

ばちゅんばちゅんっど、マヤの膣内を荒々しく侵していく。

キラの顔に膣口から出ていった体液が、雨のように降りかかって  
いった。

「んっあ、あらっ♡ キラ様のここっ♡ んっうっ♡ 濡れてますっ♡」

「あっあ！♡ そ、そんなこと♡ ありえませんわっ♡」

「そうですかっ♡ んっちゅっ♡」

「あっあ！♡ マヤ、なにおっ♡」

バックハメをしているせいでよく見えないが、マヤの顔がキラの股  
間部に近づいたようだ。そのままクンニでもしているのだろう。

キラは拘束されながらも、体をパタパタ暴れさせながらも、淫靡な  
声を上げていた。

「おっおっ♡ ご主人様っ♡ あっあ、あっ♡ 一番弱い所突いて  
ますっ♡ んっう、あっ♡ こんなものすぐについて♡ おっお  
っっ♡ イツちやいますっうっ♡ はひっいっいっ！♡」

「あっあ、んんっ♡ だ、だったらっ♡ 私のマンコっ♡ あっ♡  
舐めないで下さいっ♡ おっおっ♡ チンポ太いの目の前でっ♡  
はっあくくっ♡ んっえ♡」

ぞくりっど君の背筋に、快感に近い電流が走った。

マヤの膣口に肉棒を挿入している最中に、キラの舌が這ってくる。

「あっあ、んんんっ♡ あら、我慢できなくなっちゃったのです  
か？♡ はっああ、んっ♡ ふふっ♡ ンッンッ♡ 負けませ  
んっ♡ んれっう、あっお、お、おっ！♡」

「はあっあっ♡ ち、違いますわっ♡ 顔にかかるとっ♡  
あっあ、っ♡ 早くやめてほしいだけですわっ♡ んっうっ  
れっうっ♡ ひどい味なのについて♡ んれるっう、んんっ♡  
辞められなくてっえっ♡ んっうれるっう、あっあ、あっ！♡」

二人の喘ぎ声が共鳴して、君の耳を楽しませてくる。

ガツガツ腰を振って、マヤの体を限界まで高めていく。ぎゅるぎゅると絡みついてくる彼女の膣肉が、金玉で増産された精液が、どんどん吸われそうになってくる。

「おゝおゝっ！♥ ご主人様の強々オチンポっ！♥ んっおゝっおゝっ！♥ 私の中でっ♥ はっあゝあゝっ！♥ 膨らんできますっ！♥ ほっおゝおゝっ！♥ このまま中出しっ♥ ひっいおゝっ♥ してくださいますよねっ！♥ んゝっあゝあゝあゝっ！♥」

「あっあっ♥ わ、わたくしもっおっ♥ んっあっ——えっ♥」

キラの絶頂寸前の様子を感じり、ぐいっとなマヤの腕を掴んで引っ張る。呆けるようなキラの声と共に、君は腰をぐいっとなに向けて突き込んだ。

ぎゅるりっとな激しい蠕動運動と共に、脳髓をびりびりと快樂電流が走ってくる。腰のタガが外れて、白濁流が流れ出していった。

「んゝっおゝおゝおゝおゝっ！♥ 孕ませ汁来てますっうっ！♥ おっおゝおゝおゝっ！♥ 子宮に直接っ♥ 溶けちゃあ——いっひいいゝいゝいゝんゝっ！♥」  
「やっあっ♥ イきそうだったのっいっ♥ ザーメンと愛液が掛かってきてっ♥ こんなのおおお♥」

淫靡かつ獣のようなマヤの嬌声と、キラの悔しそうなうめき声の二重奏が君の耳を楽しませる。

部屋中に女性の淫猥な悲鳴が響いていった。

「おっおおっ！♥ 子宮にまだ来てっえっ！♥ ひっうゝうゝっ！♥ もうイツてますのっいっ！♥ おっほおゝっ！♥ くっりゅっっ♥ うっうゝうゝっ！♥ まだっ……いゝっぐうゝうゝうゝうゝうゝっ！♥」  
「うっうううっ♥ わ、わたしもっお♥ いきたいのっいっうっうゝうゝっ♥」

部屋中に響く喉から、引き絞るような嬌声が迸る。

顔中にマヤの愛液と君の精液が降りかかりながら、キラは悔しそうに呻き声を上げていた。



最後まで精液を吐き出して、肉棒を抜き出すと、マヤの体がキラの上を避けて床に倒れていく。

「はっあゝゝゝっ♥ ふっうゝうゝっ♥」

「はっあ、はっはあっ♥」

大きく息を吐くマヤの横で、キラは欲情した犬のように息を吐く。媚薬と媚香で犯された体で、ここまでよく頑張った方だ。

彼女の顔の上に君の肉竿を置いた。

「んっうっ♥ れっうっ♥」

その瞬間ピンク色の舌が必死に伸ばされてくる。

もはや色欲で脳を犯されて自身の危機が脳内に無いようだ。

「……………」

ある程度加減して犯したおかげで、マヤが君をちらりと見つめてくる。先ほどまで欲情に塗れた顔とは一転して、どこまでも冷たい。解ってるさ。

キラを完全に雌奴隷に墮として、クシヤナ閥にひびを楔を入れる。そうしないと彼女達の欲望で、多くの人が不幸になりうる。

君と体の関係であり奴隷プレイなどの激しいセックスをする仲だが、だからこそマヤの気高さは失われていない。

ここでただセックスに溺れれば、冷たい表情で見捨てられうる。

情を抱かないなど言えないが、君はキラを完全に雌犬に墮とすつもりで、心のDSスイッチを入れなおした。

「んっえっ♥ あっ♥」

顔から離れた瞬間、どこか悲しそうな声をキラは上げた。むろんそれで終わらせる気などない。

きみはそのまま彼女の肩を掴んで固定する。

「はっあはっあ、一体何をするつも——んっぶううっ♥！」

仰向けの体勢のまま彼女の開いた口元めがけて、肉弾頭を君は突き込んだ。

歯が当たり若干の抵抗感を感じるが、無理やり喉奥まで突っ込む。

「んっごっおゝおっ♥ おっおゝおっ♥っ！♥」

ビクンビクンと体が暴れ出す。媚薬と媚香に痺れた頭では、君の

肉棒に歯を当てることだけで、噛むことなどできやしなない。

「んっぐっつっ♥ ひ、ひどい味っ♥ れるっりゅっ、んごっおっ♥ な  
のにいっいっ♥ じゅぶっぐりゅ♥ 舐めるの止まりませんのっお  
っ!♥ んぶじゅっぐっ♥ んっぶっぐっううっ♥」

性器に突き立てるようにキラの口内へ、君の肉棒を何度も突き込  
む。胃まで犯すつもりで、激しく腰を振っていく。

「んっぐっりゅっ♥ い、息がっあっ♥ んごっおっおっ♥」

喉が君の肉棒を押し返すように蠢き、舌が絡みついてくる。

必死に君の肉棒に口奉仕して、精液を吐き出させようとしていた。

その隙にマヤが、キラの股間へと移動していた。

「ご主人様っ♥ 雌奴隷をほっておくのはひどいですっ♥ そのかわ  
りに彼女をっ♥ またさつき見たいにイジメてあげますっ♥」

「んっぐっつお♥ ま、マヤっ♥ んっぐっふ♥ やめっへっえっ♥  
んっぐっぼっごっ♥」

「だ〜めですっ♥ ん、れろっおっ♥」

いたずらっ子のような口調だ。君しか見えないマヤの青い瞳の奥  
は、どこまでも冷たい光を携えている。

女性の拷問官が少ない理由が、同性に対してどこまでもひどいこと  
をしてしまうからだ、という説があるが……。

頭に上ってきた怖い考えは、腰を激しく振ることがかき消していっ  
た。

「んっごっつおっ♥ 喉で震えてっ♥ ごっぐっえっ♥ 駄目です  
のっお♥ ごっつおっえっ♥ このまま出されたらっ♥ んぐ  
ぐっぶっう♥ 私っいっいっ♥」

「んれうっ♥ 早くイッてくださいっ♥」

キラの絶頂寸前なことを感じ取り、マヤのクンニが激しくなる。

笑みを浮かべながら青い瞳の奥にある殺意で、性欲が減退しないよ  
うに、君は必死でキラを攻めていく。

「んっぐっつおっ!♥ 苦しいのとっ!♥ ごっえっうっ!♥ きも  
ちいのでっえっ!♥ んっぶっぐっ!♥ 頭が壊れそうですのっお  
っ!♥」

「んっれっうっ ♥ 被害者たちのように、こわれてしまえ——っ」  
マヤがぼそりつと発した小さな言葉が聞こえないように、ぐぼぐぼと大きな音を部屋に響かせる。

「つごっえっ ♥ このままだとイってっ ♥ んっぐっぶっ ♥」  
「駄目ですっ ♥」

「んっぐっぶっ ♥ またっあ——んんんっう！」

絶頂寸前でマヤがまた、膣口のクンニを止めた。泣くような声と同じに、君は精液を放出していった。

「んっぐぶううっ うっ うっ！ ♥ 喉に熱いの来てますのっおっ！ ♥  
おっおおっごっおっ！ ♥ やけどしちやっあ——んぐっぶっえっえっえっえっ！ ♥」

「あくあ、零しましたわねっ ♥ これは罰ゲームですっ ♥」

あ、そこまでするのね。

マヤが取り出したピアスを見て、君は背筋を震わせた。

魔界の技術を盛り込んだ、特別なピアスだ。

呪いが込められていて、主人の命令がないと絶対にイけず、感度を高めていく効果のある拷問具である。

取り扱いを間違えると、対象を壊しかねないものだ。

「んんんんっ！ ♥ いひやっあ！ ♥ んっごっおっ！ ♥ 乳首に何かっ！ ♥ んっぐっぶうううう！ ♥」

君が吐き出した精液を必死に飲みながら、キラは乳首にピアスを付けられたのに気付いた。

ガタガタと手が君の足を押し退けようとしているが、力が入らないようにでぺちぺちとして抵抗になってない。

そんなに抵抗しなくても窒息しかねないため、そろそろ抜くつもりだった。

最後の数滴をキラの褐色の顔にかけながら、君は肉棒を抜いていく。

「んっぐっえっ ♥ げっくっぶっ ♥ やだっあっ ♥ はしたないっい ♥」

「あらあら、ザーメンゲップ出ってしまったようですっ ♥」

足をかくがくさせて、恥ずかしそうに顔を隠すキラ。彼女の視界がなくなっている間に、君は彼女の膾口に肉棒を差し向けた。

「ま、まっってください！♥ わ、私♥♥ 初めてでっえっ♥」

「大丈夫ですっ♥ ご主人様のオチンポっ♥ 初めてでも気持ちいいですからっ♥」

ガタガタと体を揺らして逃げようとするキラの体を、マヤの両腕が押え込む。

君の両手がキラの腰を抑え、そのまま肉槍を前に出していった。

「おっおっ♥ おっくぐにいつぎにっ♥♥ きでますっうううっ♥」

歯を食いしばりガタガタ体を震わせながら、キラが嬌声を上げていく。

拘束された足が、ブルブル痙攣している。

「おや、痛くないのですか？♥」

「うっうううっ♥」

「ちゃんと教えてください」

「んっおっ♥ 乳首ピアス引っ張らないでっ！♥ おっあっっ♥  
き、気持ちいいのっおっ♥ んっうっおっ♥♥ 初めてなのについっ♥  
いっひっう♥♥ 痛くないのっおっ♥♥ おっひっいっいっ♥」

媚薬と媚香で犯されたキラの体は、痛みすら快感に変える。

処女の血に濡れた黒肉竿を激しくつき込んでも、キラの口から放たれるのは艶やかな声だった。

目の前で揺れるピアスをぐいっつと引っ張っても、彼女は喘いで体を揺らす。

「おっおっ♥ 乳首ピアス弄らないでくださいっ♥ ひっぐっうううっ♥——んっうっ！♥」

歯を噛みしめながら体をビクビク振るわせて絶頂へと昇り詰める。キラの乳首にあるピアスがピンク色に光ると、ビクンっつと痙攣して目

を大きく開いた。

「あつあああ！♥ イケツ♥ んっぎゅっ♥ いけないい♥ い♥ い♥  
っ！♥ うっうっ♥ なんでっえええ♥」

「この乳首ピアス……絶頂をさせない呪いがかけられてますっ♥」  
絶頂寸前で寸止めさせられている理由を、マヤがキラの耳元でささやく。

「んっぐっおっ♥ そ、そんなこと普通の組織にはっあっ♥  
んっおっ♥ で、できませんっ！♥ あ、貴方達もしや——っ♥  
おっおおおっ♥」

僅かな情報ですぐさま頭をまわしてくるキラ。ただで終わらない雌の頭脳の回転を止めるために、君は肉棒で子宮を突き上げた。

「おっほっおっおっ！♥ 奥突かないでっえっ！♥ んううう  
っ！♥ 頭が回らなっあっ！♥」

「ふふふっ♥ ほら、ご主人様っ♥ こっち舐めますからっ♥ どん  
どん攻めちやっってくださいっ♥」

あくまで君が主人という面目を保つために、マヤは君の背後に回ってくる。

「わ、私にっいっ！♥ おっぎゅっ！♥ 何をしてほしいのですかっ  
！♥ ううううっ！♥」

「んっれりゅっ♥ ベアトリス・クシヤナを墮とす手伝いをしなさい」  
君のお尻に舌を伸ばしながらも、マヤが冷たい声を出した。

「おっおっ！♥ そ、そんなことっ！♥ んっんっ！♥ できる  
わけありませんっ！♥」

「すでにクシヤナ閥にDSOが行う強制捜査の予定が立っています」  
「んっおっ♥ そ、そんなっ♥ あっっあっっ♥ 予定よりもっおっ  
♥」

快楽に脳が犯されながらも、必死にキラは脳髓を動かす。

君が腰を振る事でそこまで知ることが出来る組織自体が少ないことや、魔界の技術を要入れる組織が数あまりないことを考えれば、大体どこか理解できるだろうが……君の肉弾頭の快楽でそこまで考えさせない。

「ひっついっおっ♥　だ、だからどうしたとっおっ♥　おおっ♥」

「その前に私達が貴方達クシヤナ閥を取り込むことにより、D S O からの調査を引けることができる。貴方達にとっても悪い話じゃないと思いますよっ♥」

にたりつと君の後ろから、悪い笑みを浮かべてマヤは話す。

歯を食いしばってキラは、君とマヤを睨みつける。だが、絶頂寸前の体をずっと刺激されて、涙に濡れて快樂に蕩けた顔では全く恐ろしくなどない。

「いっとうっ♥　お、お母様と私の命はあっ♥　おっおっ♥　おっっ♥

保証しなさいっいっ♥　んんんんんんっ！♥」

「……………ご主人様?♥」

ちらりつとマヤが君を見てくる。おそろく頷いて、良いだろう。

死ぬよりも生きる方が屈辱なことがあることを、まだ知らないようだ。

君はこくりつとうなずく。その代わり君の雌奴隷になってもらうと、耳元でささやく。

「ふっとうっ♥　わ、わかりましたっ♥　おっっ♥　貴方の雌

奴隷になりますからっ♥　あっあっ！♥　で、ですからっあっ

♥　もっとうっ♥　うううううっ！♥」

「んっとうっ♥　アナル舐め舐めっ♥　れるっちゅっ♥　再開します

ねっ♥　んれりゅっっ♥　ご主人様っ♥　れるっお♥　気持ちい

い中出し射精っ♥　ちゅりゅれっおっ♥　してくださいねっ♥　ん

ろおおっ♥」

アナル舐めしながら、マヤが君の両腕をぺしぺし叩いてくる。

二人で色んなセックスをした仲だ。彼女の合図もわかる。

そこまでしなくちやだめかあ。

一瞬脳内のため息について、君は意を決する。

目のまで晒されている細い褐色の首に、両腕を重ねた。

「んっぐっいっ♥　だめっ♥　これで気持ちよくなっちやダメな奴で

すわっ♥　おおっおっ♥　窒息雌奴隷になっりゅっとうっ♥　ん

っうっうっうっうっうっ♥」

「んっれるっうっ♥ このまま首絞め肉オナホールでっ♥ んれるっおお♥ 中出ししなさいっ♥」

キラの首を絞めた瞬間、膣肉が君の肉棒を押しつぶすかのように、激しく収縮してきた。その瞬間、マヤの長い舌が、君の前立腺付近を突っついてきた。

背筋にビリビリツと一瞬で快樂電流が駆け抜けて、君は肉棒から白濁流を発射した。

「——っ!!!」

「んれりゅっ!♥ 私の舌っ!♥ フーマのお尻の穴でっ!♥ れっりゅっうっ!♥ 締め付けられてっ!♥ いちやうっうっうっ!♥」

言葉にならない悲鳴を上げて、キラは体を弓なりに反り上げた。君の後ろでマヤが黒い霧を纏う尻穴で舌を締め付けられて、絶頂の声を上げていく。

キラの首を絞めながらも若干声が出せるように隙間を開けて、ぎゅうぎゅうに締め付けてくる膣内に精液を最後まで流し込んでいった。

「んんおっ、おっおっおっ、ドロドロザーメンっ♥ ほっおっおっ♥ 子宮で暴れますっうっうっ♥

「いっでるのについっ♥ ひっぐうっうっうっ♥ まだすごいのきまつあ……んっっほおっおっおっおっおっっ!♥」

「あははっ♥ すっごい顔してますね♥」

後ろからのぞき込んできたマヤが嘲笑うように声を上げた。

キラは喉から引き絞るような声を上げながら、目をぐるりと瞼の裏に向けて舌を伸ばしていた。

無様なアへ顔を晒して、キラは体をブルブルつと痙攣させていった。

「~~~~っうっ♥ はっあ~~~~っ♥」

子宮に一滴残らず射精を終えて、キラの膣内から肉棒を抜いた。キラが虚空に視線を向けながら、微かな呼吸音を出していた。

「フー……ご主人様っ♥ まだできますよねっ♥」

その横でマヤが両足を開いて、膣内を君に向けてさらけ出してい

る。

この程度で力を失うことなどない君の肉棒は、まだ点に向かってそり立っている。

まだまだ君の任務は、終わらないようだった。